

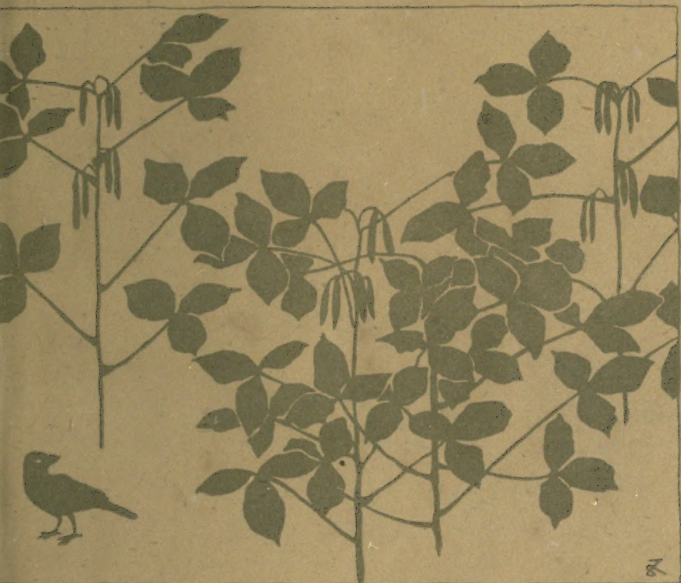
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 6327









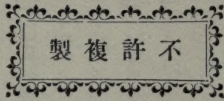


(岡山製本)

大正三年十月二十日印刷  
大正三年十月二十三日發行

有朋堂文庫  
源氏物語四

(非賣品)



不許複製

東京市神田區錦町一丁目十九番地

編輯者兼  
發行者

三浦理

東京市本所區番場町四番地

印刷者  
平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所  
凸版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所  
有朋堂書店

ながめする ② 四五ノ二

ながめやる ④ 二六ノ六

流れての ③ 四二ノ二〇

ながらふる ① 四九ノ三

なきかげや ① 四六ノ一〇

なきたまぞ ① 三三ノ九

なき人を(戀ふる) ① 六三ノ八

なき人を(したふ) ② 八ノ二

なき人を(しのぶ) ③ 三二ノ二

なき人の ① 四五ノ二

なき人も ③ 一五八ノ六

なき人は ② 四七ノ二

なきものに ④ 四三ノ一

なく聲も ② 二五ノ七

源氏物語總索引終

月かげは(同じ)

③ 一九ノ三

月かげは(見し)

① 四七ノ二

月のすむ(河)

② 二三ノ二

月のすむ(雲井)

① 四三ノ四

盡きもせぬ

① 三〇ノ八

つくむめる

① 三〇ノ一〇

つてに見し

③ 五六ノ六

つれなしと

④ 三七ノ五

つゆけさの

① 五八ノ五

露けさは

③ 三〇八ノ二

露しげき

③ 一七ノ四

つらとち

③ 五二ノ一

つれなくと(身を)

④ 二六ノ六

つれなくと(わが)

③ 三三ノ一〇

つれなきを

② 七八ノ九

つれなくて

③ 三九ノ二

つれなきを

① 八二ノ二

つれなきは

② 四四ノ一

手を折りて

① 五二ノ六

手にかくる

③ 四〇ノ六

手につみて

① 二〇七ノ二

咎むなよ

② 四五ノ一

時しあらば

③ 一五ノ二

時ならで

① 四三ノ二

とけて寝ぬ

② 八七ノ四

常世出でて

① 四八ノ二

年を経て(いのる)

② 一六ノ二

年を経て(まつ)

① 六九ノ三

年暮れて

① 三九ノ六

年月を(なかに)

② 五三ノ六

年月を(まつに)

② 二〇三ノ九

年経とも

④ 二五六ノ二

年ふれど

② 七七ノ六

年経つる

① 五四ノ二

とまる身も

① 三五ノ四

ともかくも

② 四〇ノ八

友千鳥

① 四九ノ二

鳥の音も

③ 五三ノ二

鳥部山

① 四五ノ二

問はぬをも

① 一六ノ五

なほざりに

① 五四ノ一

長き世を

④ 二七ノ三

ながき世の

① 四〇ノ三

中たえば

① 三〇ノ一

中絶えむ

③ 五七ノ七

なか／＼に

② 四五ノ一〇

なかみちを

② 五三ノ三

ながむらむ

① 五七ノ一〇

ながむるは

③ 五九ノ二

ながむれば

④ 二〇ノ四

ながめかる

① 四二ノ一



こそ

① 五七〇ノ二

住吉の(松に)

③ 二〇ノ三

せくからに

③ 二三ノ四

蟬の羽も

① 一六六ノ二〇

袖の香を

② 三三九ノ九

袖ぬるゝ(こひぢ)

① 三三六ノ二

袖ぬるゝ(露の)

① 二八八ノ五

袖ふれし(梅)

④ 二二ノ三

袖ふれし(人)

④ 四三三ノ二〇

そのかみを

① 三八八ノ五

そのかみを

② 四七〇ノ二

そのかみや

① 四二〇ノ九

その駒も

② 二五八ノ八

そむきにし

② 五二九ノ二

背く世の

② 五三〇ノ四

それもがと

① 四三〇ノ九

たえせじの

③ 五七四ノ九

絶えぬべき

③ 二九五ノ五

絶えはてぬ

④ 一九七ノ九

絶間のみ

④ 二五一ノ一

たをやめの

② 四五四ノ四

誰が世にか

③ 一四九ノ七

薪こる

③ 二九二ノ二

竹河に

③ 三九〇ノ六

竹河の(そのよ)

③ 四二二ノ七

竹河の(はし)

③ 三八九ノ三

立ちそひて

③ 一三四ノ五

立ちとまり

① 二二五ノ六

立ちぬるゝ

① 二九七ノ一

橘の(香を)

① 四四三ノ五

橘の(かをりし)

② 二三九ノ四

橘の(かをる)

④ 三八ノ二

橘の(小島)

④ 二五六ノ四

立ちよらむ

③ 五二四ノ二

たづかなき

① 四九八ノ一

たづぬるに

② 三三三ノ九

尋れても

① 六六ノ二

尋れゆく

① 一八ノ二

たなばたの

③ 三三ノ五

旅衣

① 五二六ノ五

旅寢して

④ 三五六ノ二

玉かづら

① 六一ノ三

たましひを

③ 三三三ノ六

たゆまじき

① 六二〇ノ九

たれかまた

③ 一九ノ一

誰により

① 五六六ノ一

契あれや

③ 二八四ノ八

契りおがむ

③ 八二ノ四

契りしに

② 一七ノ六

千尋とも

① 三三九ノ二

月影の

① 四八八ノ六

咲きて疾く ① 四六ノ二  
 さきに立つ ④ 一四ノ二  
 さきの世の ① 一三ノ四  
 咲きまじる ① 六一ノ九  
 咲くと見て ③ 三九ノ七  
 咲く花に ① 一三ノ四  
 櫻こそ ③ 五八ノ六  
 さくらばな ③ 三九ノ三  
 さくらゆゑ ③ 三九ノ五  
 さふがにの ① 六六ノ二  
 笹わけば ① 二九ノ三  
 さしかへる ③ 四五ノ四  
 さしぐみに ① 一八ノ六  
 さしつぎに ② 五〇ノ二  
 さしとむる ④ 二〇ノ九  
 さしながら ② 五〇ノ六  
 里とほみ ③ 二五ノ三

里の名を ④ 二六ノ一〇  
 里の名も ④ 二二ノ二  
 里わかぬ ① 二六ノ五  
 さもこそば ③ 三八ノ六  
 さよ衣 ③ 五八ノ八  
 さ夜中に ② 一六ノ一〇  
 しほくと ① 五八ノ六  
 しほたる(あまの) ④ 一五ノ二  
 しほたる(あまを) ② 五八ノ四  
 しほたる(ことを) ① 四七ノ二  
 下露に ② 三三ノ三  
 しづみしも ② 五三ノ九  
 死出の山 ③ 三七ノ五  
 しなてるや ④ 二ノ六  
 忍びれや ④ 三六ノ二  
 しめのうちは ① 六四ノ二  
 しめゆひし ④ 一九ノ一

霜氷 ② 二四ノ五  
 霜さゆる ③ 六〇ノ五  
 霜にあへず ④ 三〇ノ一〇  
 知らざりし ① 四九ノ八  
 知らずとも ② 一八ノ一  
 しるべせし ③ 五六ノ二  
 末とほき ② 三四ノ四  
 巢がくれて ③ 四八ノ二〇  
 過ぎにしが ④ 一七ノ九  
 過ぎにしも ① 一六ノ二  
 鈴鹿川 ① 三八ノ三  
 鈴蟲の ① 一五ノ七  
 すべらぎの ④ 二四ノ一〇  
 須磨の浦に ① 五五ノ三  
 住みなれし ② 一六ノ八  
 住のえを ③ 一九ノ六  
 すみよしの(まう)

雲の上の ① 二四ノ二

雲のうへも ① 一九ノ二〇

くもりなき ② 二〇三ノ二

くやしくぞ ③ 七〇ノ七

くやしくも ① 三三〇ノ三

くれなるに ③ 六二五ノ二

くれなるの(涙に) ② 二二三ノ六

くれなるの(花ぞ) ① 二六七ノ三

くれなるの(ひと) ① 二六一ノ三

けさの間の ④ 四一ノ九

戀しさの ③ 二六六ノ六

戀ひわたる ② 一九四ノ一

戀ひわびて(死ぬる) ③ 六八ノ五

戀ひわびて(なく音) ① 四八〇ノ二

戀ひわぶる ③ 七ノ九

こゑはせで ② 二五〇ノ一〇

こほりち ② 八六ノ四

木がらしに ① 五七ノ二

木枯の(吹き) ④ 四三七ノ二

木枯の(吹くに) ① 四七〇ノ二

九重を ② 一三六ノ二

九重に(霞) ② 四二ノ九

九重に(霧) ① 四六ノ二

心あてに ① 二四ノ八

心ありて(池の) ③ 三九六ノ二

心ありて(風の) ③ 三六八ノ四

ほぼす) ③ 三九八ノ六

心ありて(風のよぐ) ② 四三二ノ六

心ありて(ひくて) ① 四八七ノ二

心いる ① 三八ノ六

心をば ④ 二三八ノ四

心から ① 三九八ノ二

心から ① 四八四ノ二

心から ② 一四八ノ五

心こそ ④ 四二二ノ二

心さへ ② 三九二ノ二

心には ④ 四〇六ノ二

こころもて(草の) ③ 一九五ノ二

こころもて(日影) ② 三七六ノ七

こてふにも ② 三三九ノ五

ことならば ③ 一六〇ノ一

ことに出でて ③ 一七四ノ八

琴の音に ① 四八七ノ九

琴の音も ① 五七ノ九

このしたの ③ 一五八ノ四

このたびは ① 五四二ノ九

この春は(たれ) ④ 四ノ二

この春は(柳の) ③ 一五六ノ四

小松原 ② 五二三ノ六

こりすまの ① 四七二ノ一〇

さえわたる ① 三九四ノ四

風に散る(紅葉は)

② 一四八ノ八

風吹けば(浪の)

② 三三ノ三

風吹けば(まづ)

① 四〇九ノ七

かたぐくに

③ 五六一ノ一

かたみぞと

④ 二〇六ノ二〇

かたみにぞ

① 五四ノ二〇

かれてより

① 五二ノ七

鐘つきて

① 二四五ノ二

鐘の音の

④ 二九六ノ一

かのきしに

② 一〇ノ二

かばかりは

② 四三ノ一

神垣は

① 三八ノ七

神人の

③ 二〇ノ六

龜の上の

② 三三ノ五

からなだに

④ 二九四ノ七

唐國に

① 四六八ノ九

からころも(君が)

① 二六〇ノ七

からころも(また)

② 三五ノ七

からひとの

① 二七ノ八

かりがぬし

③ 三六ノ二

枯ればつる

③ 三〇九ノ二

かはらじと

② 一七ノ八

消えがてに

① 五六ノ二

消えとまる

③ 八ノ二

消えぬまに

④ 四ノ八

來しかたを

③ 六二ノ六

來し方も

② 一五四ノ三

岸遠く

④ 四〇ノ二

きて見れば

② 一九ノ四

君がなる

③ 五五ノ二〇

君がため

④ 二五ノ二

君こふる

③ 三三ノ二〇

君しこば

① 二九五ノ一

君なくて(岩)

③ 五〇八ノ六

君なくて(塵)

① 三六ノ二

君にかく

① 三〇ノ三

君にしも

② 一六ノ六

君にとて

④ 二ノ八

君もさば

② 五九ノ八

今日さへや

② 二五ノ二

今日ぞ知る

③ 四〇ノ四

霧ふかき

③ 五五ノ二

水鷄だに

① 五七ノ一

草がれの

① 三五ノ二〇

草わかみ

② 二九ノ四

國つ神

① 三八ノ五

汲みそめて

① 一九ノ五

雲うへに

① 六四ノ二

雲ちかく

① 四九ノ九

雲のゐる

③ 四五ノ二

雲の上を

③ 一九ノ二

女郎花(しをるゝ) ③ 二三ノ二

女郎花(しをれぞ) ④ 五九ノ四

女郎花(亂るゝ) ④ 三五ノ四

思ひあまり ② 二六ノ九

思ふどち ① 五六ノ二

思ふとも ② 二三ノ四

思ふらむ ① 五八ノ九

面かげは ① 一九ノ九

おもはずに ② 四七ノ六

をりからや ③ 三八ノ八

おりたちて ② 三八ノ一〇

折りて見ば ③ 三八ノ一〇

折る人の ④ 五ノ七

かへさむと ② 二〇ノ六

かへりては ① 五五ノ五

香をとめて ③ 三三ノ八

かほ鳥の ④ 一三五ノ三

篝火に ② 三〇ノ五

かきくもり ③ 六〇ノ一〇

かきくらし ④ 二六ノ一

かきくらす ④ 四三ノ一〇

かきつめて(海士の) ① 五四ノ二

かきつめて(見るも) ③ 三七ノ二

かきつめて(むかし) ② 八六ノ九

かきつられ ① 四八ノ一〇

かきたれて ② 四一ノ一

隈あれば ① 三四ノ六

かぎりぞと ④ 四二ノ三

かぎりとて(別るゝ) ① 七ノ六

かぎりとて(忘れ) ② 四四ノ三

かくれなき ① 三〇ノ二

かげのみ ① 三六ノ五

かげきやは ② 九〇ノ五

かけていへば ② 二九ノ五

蔭ひろみ ① 三九ノ一

かけまくは ① 四一ノ二

かこつべき ① 二六ノ七

かざしをる ③ 四八ノ七

かざしける ① 三三ノ一〇

かざしても ② 四六ノ九

かしば木に ③ 一六ノ五

數ならで ① 五八ノ一

數ならぬ(ふせ屋) ① 九〇ノ一〇

數ならぬ(みくり) ② 一八ノ二

數ならぬ(み鳥) ① 五六ノ六

かすならば(いと

ひも) ② 三七ノ六

かすならば(身に) ③ 二八ノ五

かすみだに ② 四二ノ八

風さわぎ ② 三三ノ三

風に散る(ことば) ③ 三九ノ六

浦にたく	①	四七五ノ二
浦人の	①	四七五ノ七
恨みわび	③	二六九ノ五
うらめしや(おきつ)	②	三五ノ二
うらめしや(霞の)	③	一五八ノ八
おひそめし	②	三四ノ六
おひ立たむ	①	一七九ノ七
老の波	②	五五八ノ一
逢ふことの(夜を)	①	六八ノ二
逢ふことの(かたき)	①	四〇四ノ二〇
逢ふまでの(かた		
みに)	①	五四ノ三
逢ふまでの(かた		
みばかり)	①	一六六ノ七
大かたに(聞かまし)	④	六〇ノ二
大かたに(花の)	①	三〇七ノ六
大かたの(秋の)	①	三八四ノ四

大かたの(秋を)	③	一九五ノ九
大かたの(憂き)	①	四三ノ八
大かたの(世を)	④	四九ノ九
大かたの(萩の)	②	三七ノ四
大かたば(思ひ)	③	三八ノ八
大かたば(わが)	③	二七ノ二
あふさかの	①	六二七ノ二
逢瀬なき	①	四六〇ノ四
大空を	③	三三四ノ七
大ぞらの(風)	③	三九七ノ一
大ぞらの(月)	④	五〇ノ八
おきつ船	②	四二ノ九
おきて行く	③	六七ノ二〇
萩の葉の	④	三四九ノ二
萩原や	③	三三〇ノ二
おくと見る	③	二九九ノ二
奥山の(松の)	①	一九〇ノ二

奥山の(松葉)	③	五〇八ノ八
おくれじと	③	六二六ノ二
をしほ山	②	三三ノ二
をじかなく	③	四九六ノ八
をしからぬ(命に)	①	四六八ノ二
をしからぬ(この身)	③	二九三ノ八
おしなべて	①	五七ノ四
をちかへり	①	四四〇ノ二〇
をちこちの	③	四七八ノ九
をちこちも	①	五三七ノ一
少女子が	①	三八ノ九
をとめ子も	②	一一九ノ二
おなじ枝を	③	五五三ノ六
おなじ葉に	②	四一八ノ三
おなじ野の	②	三六三ノ七
おぼつかな	③	三四八ノ二
女郎女(さける)	③	五五四ノ二〇

今はとて(あらし) ③ 三三ノ三

今はとて(もえむ) ③ 二九ノ七

今はとて(やど) ② 三九八ノ二

いもせ山 ② 三七ノ二

入日さす ② 四八ノ一

いろくくに ② 二二ノ八

色かほる(あさぢ) ③ 五〇二ノ二

色かほる(袖をば) ③ 五〇二ノ四

色まさる ② 四七四ノ二

色も香も ② 四三二ノ二

いはげなき ① 二〇七ノ二

言はぬをも ① 二四六ノ三

植ゑて見し ③ 三二九ノ七

うき雲に ② 二二ノ二

うきことを ② 三九五ノ五

憂きことに ② 一六四ノ四

浮島を ② 一六三ノ八

うきふしを ① 五二ノ八

うきふしも ③ 一七〇ノ一

うき身世に ① 三〇九ノ五

うきめかる ① 四七六ノ二〇

うきめ見し ① 六三九ノ二

うきものと ④ 四〇七ノ二

うき世をば ① 四六四ノ一

うき世には(あらぬ) ③ 一六七ノ二

うき世には(ゆき) ③ 三六ノ二

うぐひすの(聲にや) ② 四三〇ノ二

うぐひすの(さへ) ② 一三六ノ二〇

づる) ② 一三六ノ二〇

うぐひすの(れぐら) ② 四三二ノ四

うぐひすの(昔を) ② 一三七ノ四

憂しとのみ ① 四八六ノ三

うす水 ② 二〇二ノ二

うちきらし ① 三三二ノ二〇

うつしうゑて ④ 三九五ノ六

うちすてて(立つも) ① 五四四ノ八

うちすてて(つがひ) ③ 四三三ノ二

うちばらふ ① 六一ノ二

うつせみの(羽に) ① 一〇七ノ二

うつせみの(身を) ① 一〇五ノ二

うつせみの(世は) ① 一六二ノ九

うちつけの ① 五六二ノ九

うちとけて ② 三四三ノ二

宇治橋の ④ 二五〇ノ二

うちわたし ④ 六六ノ二

優曇華の ① 一九〇ノ八

優婆塞が ① 一三三ノ一

海にます ① 五〇九ノ七

海松や ① 五六七ノ三

うら風や ① 五〇六ノ一

うらなくも ① 五三八ノ九

荒ればつる (四) 一〇四ノ四

荒れまさる (一) 四七八ノ六

あはと見る (一) 五三〇ノ八

逢はぬ夜を (一) 二六四ノ二

哀をも (三) 二四八ノ三

あはれしる (四) 三三七ノ一

あはれてふ (三) 四〇四ノ六

あはれとて (三) 四〇〇ノ三

いかさまに (一) 二八四ノ八

いかでかく (三) 四三三ノ八

いかならむ(色) (二) 四二〇ノ二

いかならむ(世) (三) 四八七ノ三

いかなれば (二) 五九二ノ七

いきて又 (二) 七ノ八

いくかへり(露) (二) 四五四ノ二

いくかへり(行き) (二) 一一ノ一

いくそたび (一) 二四五ノ八

生ける世の(死には) (三) 四〇四ノ二

いける世の(わかれ) (一) 四六七ノ三

いさらぬば (二) 一六〇ノ〇

いさりせし (二) 六三ノ五

伊勢島や (一) 四七七ノ一

伊勢人の (一) 四七七ノ三

いたづらに (四) 七七ノ六

いづかたの (一) 四九一ノ九

いつかまた (一) 四六五ノ三

いづくとか (三) 五五九ノ九

いづくにか (四) 二九二ノ〇

いづこより (三) 五八六ノ八

いつしかも (一) 五六三ノ五

いつぞやも (三) 五八六ノ四

いつとかは (三) 二五六ノ三

いつとなく (一) 四九四ノ二

いつのまに (二) 七四ノ九

いづれをも (二) 四七二ノ一

いづれぞと (一) 三〇九ノ七

いづれとか (三) 二四九ノ四

いでやなぞ (三) 四〇〇ノ八

いとよしく (一) 三〇ノ四

いとどしく (一) 一五ノ九

いにしへを (二) 一三七ノ二

いにしへの(秋さへ) (三) 三〇八ノ八

いにしへの(秋の) (三) 三〇六ノ二

いにしへも (一) 一三三ノ三

命あらば (三) 四七二ノ九

命こそ (二) 五二〇ノ七

いぶせくも (一) 五二八ノ三

いまさらに(いか) (二) 二六六ノ三

ならむ) (二) 二六六ノ三

いまさらに(いろに) (二) 五九五ノ六

今も見て (一) 三五七ノ二



あかれさす

二三ノ七

秋をへて

四七五ノ一

秋風に

三〇〇ノ四

秋霧に

三五七ノ二

秋霧の

五〇五ノ二

秋の野の(草)

二三八ノ三

秋の野の(露)

三九八ノ六

秋の夜の

五三五ノ二

秋はつる

一〇六ノ八

秋はてて(霧)

六九ノ四

秋はてて(淋しさ)

五八七ノ一

あけぐれの

六七ノ二

明けぬ夜に

五三六ノ六

あげまきに

五三三ノ二

浅からぬ

六三ノ七

あさか山

一九九ノ三

あさき名を

四七五ノ一

朝霧に

四九ノ六

朝霧の

一三三ノ六

浅けれど

四〇〇ノ六

あさちふの

四〇九ノ五

朝日さす(軒)

二六ノ三

朝日さす(光)

三七四ノ九

あさぼらけ(家路も)

四五五ノ八

あさぼらけ(霧立つ)

二五ノ四

あさみどり

四六七ノ二

あさみにや

三三六ノ八

朝夕に

二五七ノ九

あしわかの

二〇ノ九

あだしのの

三九四ノ二

新しき

三七六ノ一

あづさ弓

三八ノ四

あとたえて

四三九ノ四

あまがつむ

四七八ノ一

あま衣

四六ノ五

あまたとし

三七五ノ二〇

あまの世を

九六ノ四

あま船に

九七ノ二

雨となり

三五五ノ二

あめにます

二二六ノ二

あやなくも

三六八ノ三

あらかりし

五七ノ一

荒き風

一八ノ一

あらしふく

一九八ノ五

あらだちし

三〇一ノ七

あらためて

七八ノ二

あられふる

六〇〇ノ六

あらはれて

二五四ノ三

ありし世の

四六六ノ二

ありと見て

三六三ノ七

ありふれば

一七ノ六

元服、即位

繪を好まる

夜居の僧より源氏

の子なるを聞く

位を源氏に譲らん

とす

朱雀院行幸

大原野行幸

玉鬘に對する情

六條院行幸

讓位

阿闍梨より宇治宮

の事を聞く

ロ

○六條院行幸

○六條御息所

① 五五ノ二

① 六三ノ二

② 四八ノ二

② 五四ノ一

② 一三ノ四

② 三三ノ六

② 四〇ノ二

② 四七ノ四

③ 二二ノ五

③ 四三ノ一

② 四七ノ四

源氏との情交

本性

秋好齋宮と伊勢に

下らんとす

葵上との車争ひ

源氏の觀たる六條

御息所

煩悶

嫉妬

病氣

嫉妬

同

葵上の死を弔す

源氏の觀たる六條

御息所

伊勢下りを決す

母子伊勢下向

① 一二ノ三

① 二二ノ七

① 三〇ノ六

① 三三ノ五

① 三八ノ五

① 三三ノ六

① 三四ノ九

① 三四ノ二

① 三六ノ二

① 三四ノ二〇

① 五二ノ一

① 三七ノ五

① 三七ノ一

① 三八ノ九

病氣

秋好を源氏に託す

源氏の觀たる六條

御息所

同

死靈紫上を惱ます

嫉妬

死靈女三宮を惱ます

す

ワ

○和歌

あひ見ずて

あかつきの(霜)

あかつきの(別)

あかなくに

① 五八ノ六

① 五八ノ九

① 六三ノ九

③ 五〇ノ二〇

③ 七一ノ四

③ 七四ノ九

③ 一三五ノ五

① 四八ノ六

③ 六〇ノ八

① 三八ノ二

① 四九ノ一

落葉宮を六條院に

移す ③ 三四五ノ五

六の君を落葉宮の

養子とす ③ 三五ノ七

玉鬘を訪ふ

③ 三八ノ九

左大臣に任ぜらる

③ 四〇ノ一〇

薫を六の君の婢に

せんとす ④ 二ノ八

六君を匂宮に配せ

んとす ④ 三ノ五

六君の三つ目の祝

④ 六ノ六

匂宮を自邸に伴ふ

④ 一〇八ノ八

○叔真命婦

桐壺更衣の母に使

す ① 一〇ノ二

復命

① 一六ノ五

○指喰の女

① 四九ノ一〇

ヨ

○横川の僧都

浮舟を發見す ④ 三六ノ四

浮舟を介抱す ④ 三七ノ五

浮舟を小野の家に

伴ふ ④ 三五ノ二

浮舟を加持す ④ 三七ノ六

小野に寄る ④ 四二ノ七

明石中宮に浮舟の

事を語る ④ 四三ノ四

薫に浮舟の事を語

る ④ 四三ノ一

○横川の僧都妹尼

浮舟を中將に逢は

しめんとす ④ 三九ノ一

長谷詣 ④ 四四ノ三

浮舟の出家を悲む ④ 四三ノ六

○横川の僧都母尼

長谷詣 ④ 三五ノ一

宇治院に宿す ④ 三六ノ九

吾妻琴を弾く ④ 四〇ノ三

○良清

源氏に明石の噂を

語る ① 一七ノ二

明石入道を取次ぐ ③ 五二ノ四

リ

○臨時客 ② 二〇ノ五

レ

○冷泉院

誕生 ① 二八ノ一〇

聰明 ① 五一ノ七

落葉宮の母上と語

る ③ 一五ノ八

威重 ③ 一五ノ二〇

頭中將を訪ふ ③ 一五ノ七

落葉宮に戀情をほのめかす ③ 一五ノ二

侍女の評 ③ 一六ノ九

落葉宮を訪ふ ③ 一七ノ二

柏木の遺物の笛を贈らる ③ 一七ノ七

夢に柏木の歌よむを見る ③ 一七ノ一

柏木の爲に法會を營む ③ 一八ノ八

薫を見て柏木女三宮の間を疑ふ ③ 一八ノ二〇

夢、笛の事を源氏

に語る ③ 一八ノ一

落葉宮に對する戀 ③ 二〇ノ一

小野の山莊を見舞ふ ③ 二〇ノ九

落葉宮に戀を打明く ③ 二〇ノ二

異性に對する性質 ③ 二〇ノ七

落葉宮に文を贈る ③ 二二ノ九

雲井雁に落葉宮方の返事を奪はる ③ 二二ノ七

落葉宮母君葬式の世話 ③ 二四ノ二

落葉宮に對する慰問 ③ 二四ノ二

山莊に落葉宮を訪ふ ③ 二四ノ八

雲井雁の觀たる夕

霧 ③ 二五ノ二

源氏の觀たる夕霧 ③ 二五ノ二

落葉宮を本邸に歸らしめんとす ③ 二六ノ六

落葉宮への執心 ③ 二六ノ六

花散里と女の批評 ③ 二六ノ七

雲井雁の嫉妬をつくるふ ③ 二七ノ六

落葉宮に迫る ③ 二七ノ九

雲井雁を迎へに行く ③ 二八ノ六

紫上の死に對する感想 ③ 三〇ノ七

紫上を追慕す ③ 三〇ノ五

五月雨の頃源氏と物語る ③ 三八ノ一〇

娘達 ③ 三四ノ九

雲井雁との相思

② 一〇三ノ二

幼き悲

② 一五ノ一

惟光の娘に懸想す

② 一五ノ三

花散里に對する批

② 一三ノ一

評

② 一三ノ一

進士及第

② 一三九ノ四

性質

② 一六四ノ三

同

② 一六五ノ四

紫上を隙見す

② 三〇四ノ九

三條宮に風見舞に

② 三〇八ノ二

行く

② 三〇九ノ四

紫上を思ふ

② 三〇九ノ四

眞面目

② 三〇九ノ二〇

花散里及び紫上を

② 三〇九ノ二〇

見舞ふ

② 三〇ノ二

秋好中宮を見舞ふ

② 三二ノ九

源氏玉鬘の仲の親

② 三二ノ九

しきに驚く

② 三二八ノ六

明石姫君方にて文

② 三二ノ三

を書く

② 三三ノ九

大宮を訪ふ

② 三三ノ九

玉鬘に意中をほの

② 三六〇ノ三

めがす

② 三六六ノ三

源氏と玉鬘の噂す

② 四一ノ八

雲井雁との關係

② 四一ノ七

大宮の法事に參會

② 四二ノ二

頭中將の觀たる夕

② 四二ノ二

霧

② 四二ノ二

久し振にて雲井雁

② 四二ノ七

に逢ふ

② 四二ノ二

藤典侍との關係

② 四六ノ七

中納言に任ぜらる

② 四六ノ六

三條院に移る

② 四六ノ四

朱雀院に伺候す

② 四八ノ三

人物、風采

② 四八ノ三

朱雀帝の觀たる夕

② 四八ノ六

霧

② 四七ノ八

女房の評

② 四九ノ二

篤實

② 四九ノ二

源氏の觀たる夕霧

② 四九ノ二

右大將に任ぜらる

② 五〇ノ九

源氏の四十の賀を

② 五〇ノ九

行ふ

② 五〇ノ九

女三宮に對する感

② 五七ノ九

情

② 一三ノ五

大納言に任ぜらる

② 一三ノ三

女三宮方にて音樂

② 三八ノ五

謹慎

② 一三七ノ八

柏木の最後を訪ふ

② 一四九ノ二

柏木女三宮の仲を

② 一四九ノ二

推測す

② 一四九ノ二

女一宮を預る ③ 二三ノ四  
 深慮 ③ 二三ノ九  
 女三宮方にて音楽 ③ 二八ノ二〇  
 容姿 ③ 三七ノ一  
 源氏の觀たる紫上 ③ 四七ノ六  
 病氣 ③ 五三ノ一  
 二條院に移る ③ 五四ノ二  
 危篤 ③ 七二ノ四  
 逝去の噂 ③ 七六ノ二  
 受戒 ③ 七八ノ四  
 病やく輕快 ③ 八一ノ一  
 重病、出家の望み ③ 二八九ノ一  
 法華八講を行ふ ③ 二九一ノ二  
 死期の近づくを知 ③  
 る ③ 二九四ノ八  
 逝去 ③ 二九八ノ八  
 送葬 ③ 三〇四ノ四

源氏の觀たる紫上 ③ 三五ノ一  
 同 ③ 三三ノ五  
 一周忌 ③ 三三ノ六  
 〇物怪 ① 一三七ノ六  
 同 ① 三三八ノ七  
 同 ③ 七二ノ四  
 同 ③ 一三五ノ五  
 同 ④ 三七九ノ八  
 ヤ  
 〇遣水の面目 ① 八七ノ二〇  
 ュ  
 〇夕顔 ①  
 頭中將との關係 ① 六〇ノ三

本性 ① 六二ノ三  
 源氏に歌を贈る ① 一〇九ノ一  
 素姓を包みて源氏に逢ふ ① 一二六ノ三  
 源氏の觀たる夕顔 ① 一二七ノ三  
 柔和 ① 一二七ノ四  
 同 ① 一二八ノ二  
 無邪 ① 一二九ノ二  
 源氏の觀たる夕顔 ① 一三〇ノ三  
 變死 ① 一三七ノ六  
 素姓分明す ① 一五九ノ二  
 柔和 ② 一八〇ノ八  
 〇夕霧大將 ①  
 誕生 ① 三三八ノ七  
 元服 ② 九三ノ八  
 字つくる式 ② 九五ノ六  
 入學、寮試 ② 九九ノ三

○松と竹との差別 ① 八三ノ二

ニ

○三つ目の祝 ④ 六三ノ二

ム

○紫上 ① 一六ノ二

北山の侘住居 ① 一八三ノ七

素姓 ① 二二ノ一

初めて源氏に逢ふ ① 二二九ノ一〇

二條院に伴はる ① 二二七ノ九

漸く源氏に懐く ① 二七四ノ一〇

幼心に源氏を慕ふ ① 二八〇ノ六

無邪 ① 二八八ノ九

源氏の寵愛を受く ① 二八九ノ八

伶俐 ① 三三ノ二

同

源氏と祭を見る ① 三三八ノ二〇

源氏と婚す ① 三三六ノ二

伶俐 ① 三三七ノ七

源氏と別を惜む ① 四四ノ一

懇篤の同情 ① 四九ノ三

須磨に使をやる ① 五〇四ノ七

明石上の事を聞く ① 五四ノ五

源氏の觀たる紫上 ① 五六ノ五

明石上に對する感 ① 二四ノ二

情 ① 二四ノ二

權に對する取越苦 ① 七ノ八

勞 ① 八ノ五

權に對する嫉妬 ① 八四ノ二〇

源氏の評 ① 四六ノ二

賀茂祭見物 ① 四六ノ七

明石上との初對面 ① 四六ノ七

女三宮に對する覺

悟 ① 五〇八ノ三

汲量 ① 五〇九ノ二〇

女三宮に對する感 ① 五一九ノ五

情 ① 五一九ノ五

汲量 ① 五二九ノ二

寛恕 ① 五三二ノ八

源氏の觀たる紫上 ① 五二五ノ一

自尊 ① 五四一ノ三

源氏の觀たる紫上 ① 五四一ノ六

自制 ① 五四三ノ七

女三宮との仲合 ① 五四三ノ二

薬師佛供養 ① 五四四ノ九

明石上との仲合 ① 五六〇ノ九

明石上の觀たる紫 ① 五七九ノ一

上 ① 五八〇ノ三

夕霧の觀たる紫上 ① 五八〇ノ三

住吉詣 ① 六一六ノ三

慎密

煩悶

法華八講、出家

御前の繪合

重忠、逝去

本性

源氏の評

○藤の御宴

○船樂

○豊後介

玉鬘を奉じて宮に

上る

玉鬘への奉公

玉鬘の家司となる

○辨の君

① 三九九ノ六

① 四〇五ノ八

① 四一九ノ七

① 六四一ノ一

② 四二〇ノ二

② 四四〇ノ二

② 八四ノ二

④ 二二九ノ八

② 二二九ノ一

② 一六三ノ八

② 一六六ノ六

② 一九四ノ二

薰に昔語りをなす

薰に柏木の祕密を

語る

素姓

大君に薰に嫁せん

事を勧む

薰と語る

薰に浮舟の事を語る

る

浮舟を訪ふ

ホ

○法華八講

同

○螢兵部卿宮

多趣味

玉鬘を訪ふ

③ 四五一ノ九

③ 四六六ノ二

③ 五〇三ノ七

③ 五四二ノ五

④ 二二ノ九

④ 九八ノ二〇

④ 二〇〇ノ三

① 四一九ノ七

③ 二九一ノ二

① 四四七ノ四

② 二四六ノ七

源氏の觀たる宮

花散里の觀たる宮

合せ香を批評す

書風の批評

朱雀帝の觀たる宮

眞木柱の姫君を娶

る

眞木柱との仲合

髯黒の觀たる宮

源氏を訪ふ

マ

○眞木柱

父の邸に別れの歌

を残す

螢兵部卿宮に嫁す

紅梅に再嫁す

② 二五六ノ五

② 二五六ノ七

② 四二五ノ三

② 四三六ノ二

② 四九三ノ二

③ 九ノ八

③ 一〇ノ八

③ 一一ノ一

③ 三三ノ一

② 三九八ノ五

③ 九ノ八

③ 三五九ノ五



源氏の観たる髯黒 ② 二五八ノ一  
熱心に玉鬘に懸想  
す ② 三七三ノ二

著實 ② 三七三ノ九

玉鬘と婚す ② 三七七ノ一

玉鬘への熱情 ② 三七九ノ二〇

玉鬘を迎ふる準備 ② 三八四ノ一

一徹者 ② 三八四ノ六

本妻を諭す ② 三八六ノ一

本妻に火取を投げ  
つけらる ② 三八九ノ五

式部卿宮を訪ふ ② 四〇三ノ四

玉鬘を自邸に伴ふ ② 四三三ノ三

本性 ③ 三七七ノ二〇

○髯黒北の方

狂氣 ② 三八四ノ二〇

本性 ② 三八五ノ九

髯黒に火取を投げ  
つく ③ 三八九ノ五

嫉妬 ② 三九一ノ五

父宮方に引取らる ② 三九六ノ三

○常陸守

娘どもを傳く ④ 一三六ノ四

人物 ④ 一三九ノ一

媒人の言を聞く ④ 一四五ノ六

蕭の文を見る ④ 三三三ノ一〇

○常陸守聾少將

粗野 ④ 一三九ノ一

浮舟に言ひ寄る ④ 一三九ノ三

浮舟を嫌ふ ④ 一四三ノ七

常陸守の實子に婚  
を申込む ④ 一四五ノ六

野卑 ④ 一四九ノ五

常陸守の女に婚を

定む ④ 一五〇ノ三

常陸守の聾になる ④ 一五五ノ一

頑愚 ④ 一五五ノ一

浮舟母と歌をよむ ④ 一九一ノ八

○兵部卿宮(式部卿宮を見よ)

フ

○普賢菩薩の乗物 ① 二五四ノ七

○藤壺女御 ① 二五〇ノ一

素姓 ① 二五〇ノ一

入内 ① 二五〇ノ三

宿下り、源氏との  
情交 ① 一九九ノ八

源氏の観たる藤壺 ① 二〇〇ノ二

懷胎 ① 二〇二ノ四

冷泉帝を生む ① 二八二ノ一〇

中宮になる ① 三〇三ノ八

度 ③ 九四ノ三

玉鬘に對する感想 ③ 九五ノ三

朧月夜の出家を見 ③ 九五ノ三

舞ふ ③ 九五ノ三

女三宮を教訓す ③ 一〇〇ノ二

柏木との疎隔 ③ 一〇四ノ八

柏木へ懇談 ③ 一〇五ノ四

柏木への諷刺 ③ 一二一ノ一

薰誕生についての ③ 一二五ノ二

感 ③ 一二五ノ二

朱雀院と對面 ③ 一三〇ノ七

感慨 ③ 一四四ノ七

同情 ③ 一四八ノ四

侍女の評 ③ 一六二ノ八

柏木の法會を營む ③ 一六五ノ一

夕霧より柏木の事 ③ 一八四ノ一

を聞く ③ 一八四ノ一

女三宮の持佛供養 ③ 一八七ノ一

經卷書寫 ③ 一八八ノ四

女三宮の爲に三條 ③ 一九二ノ九

宮を經營す ③ 一九二ノ九

六條院の庭に鈴蟲 ③ 一九三ノ八

を放つ ③ 一九三ノ八

冷泉院を訪ふ ③ 一九九ノ六

秋好の出家を諫止 ③ 二〇〇ノ六

す ③ 二〇〇ノ六

夕霧を諫めんとし ③ 二〇〇ノ六

て果さず ③ 二五九ノ七

紫上の死を悲む ③ 三〇四ノ四

哀傷 ③ 三〇七ノ二

往事を悔恨す ③ 三二四ノ四

仁慈 ③ 三六六ノ六

籠居 ③ 三七〇ノ八

匂宮を寵愛す ③ 三九二ノ二

女三宮を訪ふ ③ 三三三ノ五

明石上を訪ふ ③ 三三三ノ一〇

更衣の節 ③ 三三七ノ六

賀茂祭の日 ③ 三三七ノ一〇

五月雨の頃夕霧と ③ 三三八ノ一〇

語る ③ 三三八ノ一〇

六月頃蓮を見る ③ 三三三ノ六

七月七日 ③ 三三三ノ二

紫上の一週忌 ③ 三三三ノ六

哀傷いよ／＼切なり ③ 三三四ノ二

出家の用意 ③ 三三六ノ三

逝去 ③ 三四一ノ一

源氏逝去後の人々 ③ 三四三ノ一

の有様 ③ 三四三ノ一

○髯黒大將 ③ 三四三ノ一

玉鬘に文を贈る ③ 三三三ノ一

玉鬘を慕ふ ① 四二四ノ三

薫物を調製す ② 四三三ノ一

文字の評論 ② 四三三ノ二

人々に冊子を書か  
しむ ② 四三五ノ八

夕霧を訓戒す ② 四四二ノ四

同 ② 四五八ノ八

賀茂祭に紫上を誠  
む ② 四六〇ノ二

太上天皇に準ぜら  
る ② 四六六ノ一

子女妻妾の上の満  
足 ② 四六六ノ四

朱雀帝の觀たる源  
氏 ② 四八五ノ二

女房の評 ② 四八七ノ二〇

女三宮の世話を拒  
む ② 四九六ノ九

朱雀院を訪ふ ② 五〇三ノ二

女三宮の世話を約  
す ② 五〇四ノ八

紫上に女三宮の事  
を語る ② 五〇七ノ五

實情 ② 五〇七ノ八

四十の賀 ② 五二〇ノ八

女三宮を娶る ② 五二七ノ九

女三宮と紫上とに  
對する感 ② 五二五ノ五

窃に朧月夜に逢ふ ② 五三〇ノ八

精進落の饗宴 ② 五四三ノ四

明石入道の文を  
る ② 五七二ノ六

明石姫君を教訓す ② 五七六ノ七

寛恕 ② 五八〇ノ八

住吉詣 ③ 一五ノ四

朱雀院五十の賀の  
準備 ③ 二五ノ五

女三宮に琴を教ふ ③ 二六ノ八

女三宮にて女樂 ③ 二八ノ一〇

音樂、音樂者論 ③ 三六ノ九

紫上と往事を語る ③ 四六ノ六

關係婦人の批評 ③ 五〇ノ二

憂悶 ③ 五四ノ二

六條御息所の死靈  
と語る ③ 七一ノ四

女三宮の懐胎を見  
舞ふ ③ 八二ノ五

柏木の艶書を發見  
す ③ 八六ノ五

煩悶 ③ 八八ノ九

女三宮に對する態

弘徽殿太后を訪ふ 二二七ノ二

六條院を經營す 二二九ノ九

妻妾共に六條院に

移る 二四ノ二

異性に對する性質 二一五ノ三

玉鬘の消息を聞く 二八一ノ七

玉鬘を引取る 二八九ノ二

周到 二九五ノ五

衣配り 二五九ノ六

新年に邸内の婦人

をめぐる 二二一ノ一

明石姫君を訪ふ 二二三ノ五

花散里を訪ふ 二四四ノ五

異性に對する性質 二四四ノ二

玉鬘を訪ふ 二六六ノ四

明石上を訪ふ 二七〇ノ六

末摘花を訪ふ 二二〇ノ三

空蟬の尼を訪ふ 二二四ノ三

厚情 二二五ノ九

玉鬘に男に對する

心得を教ふ 二三〇ノ二

好色 二三八ノ三

玉鬘に戀を訴ふ 二三八ノ五

好色 二五一ノ九

自制 二五三ノ一

花散里の方に宿す 二五三ノ三

玉鬘に物語の趣意

を聞かす 二五九ノ四

釣殿の納涼 二六九ノ一

夕霧の戀を憫む 二七三ノ一〇

玉鬘に和琴を教ふ 二七五ノ九

玉鬘に對する煩悶 二七九ノ七

自省 二七九ノ七

頭中將を評す 二九七ノ一

玉鬘方にて篝火の

歌を詠む 二九八ノ四

頭中將を評す 三二一ノ三

野分に明石上を訪

ふ 三六六ノ八

野分に玉鬘を訪ふ 三七七ノ六

夕霧の觀たる源氏 三九ノ二

野分に花散里を訪

ふ 三二〇ノ五

玉鬘に對する煩悶 三五ノ一

玉鬘に入内を勸む 三三一ノ四

三條大宮の病を訪

ふ 三三三ノ一

頭中將に玉鬘の事

を明す 三三九ノ三

夕霧と玉鬘の噂す 三六六ノ三

玉鬘に入内を勸む 三八一ノ一

明石上に別を惜む

① 五四ノ三

上京の首途

① 五四ノ六

著京、參内

① 五四ノ一

權大納言に任ぜら

る

一門の榮華

① 五五ノ二

内大臣に任ぜらる

① 五五ノ七

厚情

① 五七ノ三

明石に乳母を下す

① 五八ノ八

紫上に明石の事を

明す

花散里を訪ふ

① 五六ノ五

寛厚

① 五七ノ五

住居參詣

① 五七ノ三

六條御息所を訪ひ

て秋好を托せら

る

① 五八ノ六

秋好の世話を焼く

① 五八ノ五

自制

① 五八ノ三

秋好を冷泉に奉ら

んとす

細心

① 五九ノ六

末摘花を訪ふ

① 五九ノ二〇

末摘花を扶助す

① 六二ノ二

異性に對する性質

① 六二ノ二

石山參詣、空蟬に

逢ふ

須磨の繪日記を發

表す

後圖

① 六三ノ一

大堰邸に明石上を

訪ふ

桂殿に宴す

① 六六ノ八

大堰の邸に行く

① 六五ノ六

桂殿に宴す

① 二二ノ三

大堰の邸に行く

① 一八ノ五

大堰の邸に行く

① 一七ノ二

藤壺を見舞ふ

② 四ノ四

秋好に春秋の優劣

を問ふ

異性に對する性質

② 五九ノ八

女五宮を訪ふ

② 六〇ノ八

權の前齋院を訪ふ

② 六三ノ一

權に文を贈る

② 六六ノ四

復權齋院を訪ふ

② 六八ノ七

源内侍に邂逅す

② 七三ノ九

藤壺以下の人柄を

評す

夢に藤壺を見る

② 七六ノ二

權に文を贈る

② 八四ノ三

異性に對する性質

② 八六ノ九

夕霧に學問せさす

② 八九ノ一

べき志

② 九二ノ五

太政大臣となる

② 九三ノ八

太政大臣となる

② 一〇二ノ九

紫上と祭を見る 〇 三三八ノ〇

六條御息所の病氣  
を訪ふ 〇 三三四ノ二

悲歎 〇 三五〇ノ四

朝顔と文の贈答 〇 三五七ノ三

參内 〇 三六〇ノ四

紫上と婚す 〇 三六五ノ二

細心 〇 三七二ノ二

左大臣邸を訪ふ 〇 三七四ノ四

野宮に六條御息所  
を訪ふ 〇 三七九ノ二

異性に對する性質 〇 三八六ノ九

桐壺帝の觀たる源  
氏 〇 三九〇ノ一

異性に對する性質 〇 三九五ノ九

厚情 〇 三九六ノ五

竊に朧月夜に逢ふ 〇 三九七ノ九

竊に藤壺に逢ふ 〇 三九九ノ六

煩悶 〇 四〇五ノ三

雲林院に詣づ 〇 四〇七ノ二

藤壺に紅葉を贈る 〇 四二二ノ二

朱雀帝と語る 〇 四四四ノ七

新年に藤壺を訪ふ 〇 四四四ノ八

侍女の觀たる源氏  
完全圓滿 〇 四三九ノ八

朧月夜と密通露顯 〇 四三二ノ八

好色 〇 四三三ノ一

花散里を訪ふ 〇 四三九ノ一

厚情 〇 四三九ノ六

昔馴染の女を訪ふ 〇 四四〇ノ三

須磨に退居せんと  
す 〇 四四五ノ一

左大臣邸へ暇乞 〇 四四八ノ一

紫上と別を惜む 〇 四五四ノ一

花散里へ暇乞 〇 四五七ノ三

後事を整理す 〇 四五八ノ二

藤壺へ暇乞 〇 四六〇ノ二

桐壺帝の陵に詣づ 〇 四六三ノ三

仁慈 〇 四六六ノ七

順磨に著す 〇 四六八ノ五

京への音信 〇 四七三ノ二

須磨の閑居 〇 四八〇ノ五

寂しき生活 〇 四九〇ノ六

三月上巳海に祓す 〇 四九八ノ四

雷雨に遭ふ 〇 五〇六ノ二

夢に父帝の諭を蒙  
る 〇 五〇八ノ八

明石に移る 〇 五一二ノ四

明石上と文の贈答 〇 五二六ノ九

明石上を訪ふ 〇 五三三ノ一

召還の宣旨下る 〇 五三九ノ二

夕顔に通ふ 一三六ノ三

夕顔を誘ひて河原

院に宿す 一三九ノ五

二條院に歸る 一四一ノ四

夕顔の屍を見に行

く 一四八ノ五

病氣 一四九ノ五

夕顔の素姓を聞く 一五二ノ二

空蟬との音信 一六一ノ三

軒端萩との音信 一六三ノ二

夕顔の法事を營む 一六四ノ三

病の爲に北山に赴

く 一六九ノ一

名僧の加持 一七〇ノ九

明石上の噂を聞く 一七二ノ二

紫上を隙見す 一七六ノ二

紫上の素姓を聞く 一八〇ノ二

紫上を貰はんとす 一八四ノ二

病氣快癒、歸京 一八九ノ三

葵上との仲疎し 一九四ノ二

北山への音信 一九六ノ二

藤壺との情交 一九九ノ八

夢 二〇三ノ一

尼君の病を訪ふ 二〇四ノ三

紫上を訪ふ 二〇七ノ三

窃に紫上を迎ふ 二一九ノ二

夕顔歿後の無聊 二二九ノ一

異性に對する性質 二三〇ノ八

末摘花の琴を聞く 二三〇ノ二〇

頭中將と競ひて末

摘花を挑む 二三九ノ一

末摘花に逢ふ 二四〇ノ二

末摘花に熱心なら

す 二四七ノ三

末摘花の容姿に驚

く 二五〇ノ八

憐愍 二五七ノ三

末摘花より衣服を

贈らる、答禮 二五八ノ九

繪をかきて紫上と

戯る 二六六ノ六

試樂に青海波を舞

ふ 二六九ノ一

朱雀院行幸の舞樂 二七二ノ一

藤壺を訪ふ 二七六ノ八

紫上を鍾愛す 二八八ノ九

桐壺帝の觀たる源

氏 二九一ノ二〇

源内侍を弄ぶ 二九二ノ二

朧月夜と邂逅す 三〇七ノ八

再び朧月夜に會ふ 三〇四ノ六

○花散里

閑居

温順

質朴

六條東院に移る

静なる生活

温順

源氏の評

源氏の訪問

温和

夕霧の三の君を預

る

夕霧と懇談

○春秋の優劣

ヒ

○光源氏

① 四三ノ八

① 五七ノ八

① 六九ノ三

① 一ノ一

① 三七ノ二

① 三七ノ五

① 八五ノ二

① 二〇四ノ五

① 二五八ノ三

① 二四ノ六

① 二六九ノ七

① 五八ノ七

誕生

袴著

幼立

高麗人の觀相

藤壺に親む

元服

葵上を娶る

本性

同

中川の家に宿る

強ひて空蟬に通ず

同情

小君を介して空蟬

に文通す

再び中川の家に宿

る

失望して中川より

① 二ノ二

① 四ノ二

① 二〇ノ二〇

① 二三ノ三

① 二六ノ五

① 二七ノ七

① 三〇ノ二

① 三三ノ一

① 三四ノ三

① 七〇ノ六

① 七六ノ七

① 八〇ノ六

① 八三ノ四

① 八七ノ九

歸る

三度中川の家に宿

る

空蟬と軒端萩とを

隙見す

軒端萩と契る

物に紛れて歸邸す

空蟬へ文を遣る

夕顔の花を見る

大貳の乳母の病牀

を訪ふ

夕顔に返歌を贈る

惟光に夕顔の様子

を探らす

空蟬に對する煩悶

六條御息所との情

交

① 九三ノ一

① 九四ノ六

① 九五ノ六

① 九八ノ二

① 一〇四ノ一

① 一〇五ノ三

① 一〇九ノ一

① 一一三ノ九

① 一二四ノ九

① 一二七ノ二

① 一二九ノ四

① 一三三ノ三



中君方にて浮舟の

文を見る

四 二七ノ二

大内記に浮舟の隠

家を聞く

四 三二ノ四

宇治に赴く

四 三三ノ八

浮舟を隙見す

四 三五ノ八

薰に假装して浮舟

に逢ふ

四 三〇ノ五

煩悶

四 二四ノ五

宮中の詩會

四 二五ノ六

雪中宇治に行く

四 二五ノ一

浮舟を連れ出す

四 二四ノ一

浮舟引取の準備

四 二六ノ五

好色

四 二八ノ二

宇治を訪ひて空し

く歸る

四 二八ノ八

時方を宇治に遣す

四 二九ノ四

浮舟の死を悲む

四 三一ノ四

薰と浮舟の事を語

る

四 三二ノ一

右近を招く

四 三八ノ二

好色

四 三六ノ二

浮舟の侍女侍従を

呼ぶ

四 三五ノ四

宮の君への懸想

好色

四 三五ノ四

同

四 三五ノ二

○二條太政大臣

藤の宴に源氏を招

く

一 三四ノ六

性急

一 三九ノ九

源氏朧月夜の密通

を露す

一 四三ノ八

輕忽

一 四三ノ二

性急

一 四四ノ八

我意

一 四三ノ四

薨去

一 五三ノ五

木

○子の日

二 二〇ノ三

○軒端萩

容姿

一 九五ノ二

陽氣

一 九八ノ四

源氏に逢ふ

輕浮

一 一〇二ノ一

源氏との音信

○賭弓の會

一 一六三ノ二

○賭弓の還饗

三 三五ノ五

聞く ③ 四六ノ六

初瀬に詣づ ③ 四七五ノ一

宇治に宿す ③ 四七八ノ一

宇治宮の觀たる句 ③ 四八二ノ五

宮 ③ 四九六ノ二

宇治の姫君へ慰問 ③ 五〇九ノ七

異性に對する性質 ③ 五二六ノ三

中君を挑む ③ 五二六ノ二

好色 ③ 五三三ノ一

薫と宇治行を約す ③ 五五八ノ二

薫と宇治に行く ③ 五六一ノ一

中君に逢ふ ③ 五六一ノ一

又宇治に行く ③ 五七〇ノ三

内裏を抜け出でて ③ 五七〇ノ三

宇治に行く ③ 五七〇ノ三

中君と睦じ ③ 五七〇ノ三

薫を誘ひて宇治に ③ 五七〇ノ三

行く ③ 五七〇ノ二〇

苦心 ③ 五七八ノ二

宇治に船遊す ③ 五八〇ノ八

中君に逢はんとし ③ 五八四ノ一〇

て得ず ③ 五九〇ノ六

嚴しく監督せらる ③ 五九〇ノ六

女一宮と語る ③ 五九二ノ二

好色 ③ 五九三ノ二〇

宇治に疎し ③ 五九三ノ二〇

宇治へ弔に行く ③ 六二八ノ八

中君を京に引取ら ③ 六二八ノ八

んとす ③ 六三二ノ二三

薫に中君引取の事 ④ 五ノ二

を語る ④ 五ノ二

同情 ④ 六ノ一

六君との婚期定る ④ 三五ノ一

中君に對する態度 ④ 三六ノ七

異性に對する性質 ④ 三七ノ二

六君と婚す ④ 五〇ノ一

好色 ④ 五四ノ一〇

中君を慰む ④ 五ノ六

六君の三つ目の祝 ④ 六一ノ六

六君に對する愛情 ④ 六八ノ二

中君に宿して薫の ④ 七八ノ二

移香を怪む ④ 七八ノ二

薫より中君への文 ④ 一四ノ六

を見る ④ 一四ノ六

中君方に宿る ④ 一五ノ三

浮舟の母北方の車 ④ 一七ノ四

を怪む ④ 一七ノ四

浮舟を手籠にせん ④ 一七五ノ二

とす ④ 一七五ノ二

好色 ④ 一七九ノ三

切に浮舟を想ふ ④ 二二ノ一

匂宮の伴して宇治

に行く ④ 二七ノ八

宇治に使う ④ 二九ノ四

同 ④ 三八ノ三

ナ

○中君(宇治宮女)

心細き宇治の住居 ③ 五〇五ノ八

匂宮に逢ふ ③ 五八ノ二

匂宮と睦じ ③ 五七ノ七

憂愁 ③ 五七ノ七

匂宮に心解けず ③ 六八ノ八

寂しき生活 ④ 一ノ一

引移の用意 ④ 七ノ二

引移前薫と語る ④ 九ノ六

京に移る ④ 一五ノ七

二條院に入る ④ 二〇ノ七

煩悶 ④ 三五ノ一

薫と語る ④ 四二ノ二

憂愁 ④ 五ノ一

感懐 ④ 五九ノ六

憂悶薫に文を贈る ④ 六九ノ三

薫に宇治に赴かん ④ 七ノ三

事を謀る ④ 七四ノ四

薫に迫らる ④ 九二ノ三

薫に浮舟の事を語る ④ 一〇九ノ一

産前の惱み ④ 一一ノ三

男子を産む ④ 二二ノ三

薫に浮舟の事を語る ④ 一六七ノ二

薫に許さん事を浮舟の母に勸む ④ 一七三ノ四

浮舟を慰む ④ 一八三ノ八

ニ

○匂兵部卿宮

誕生 ③ 一〇五ノ六

幼立 ③ 一八ノ四

同 ③ 二九六ノ二〇

源氏の寵愛 ③ 三九ノ二

幼立 ③ 三〇ノ三

人品 ③ 三四ノ二

異性に對する性質 ③ 三四ノ二

匂兵部卿の名 ③ 三五ノ二

異性に對する性質 ③ 三五ノ二〇

女一宮を戀ふ ③ 三五ノ一

中の君に意あり ③ 三六ノ七

却て宮の君に心あり ③ 三六ノ七

宇治の姫君の噂を ③ 三六ノ七

末摘花の家に源氏

の後を跟く ① 二三五ノ四

源氏と競ひて末摘

花を挑む ① 二三九ノ一

源内侍を弄ぶ

① 二九五ノ二

源氏の籠居を訪ふ

① 三五四ノ七

負振舞

① 四三九ノ二

源氏の謫居を訪ふ

① 四九四ノ七

權中納言に任ぜら

る ① 五五七ノ五

本性

① 六三八ノ五

源氏の觀たる頭中

將 ① 六三八ノ二

内大臣となる

① 一〇二ノ九

本性

① 一〇二ノ一〇

雲井雁と夕霧との

仲を悟る ① 一〇四ノ七

母大宮を恨む

① 二二〇ノ三

雲井雁と夕霧との

仲を隔てんとす ① 二二七ノ八

玉鬘を戀ふ

① 二六六ノ七

夢見の占

① 二六七ノ八

嚴酷

① 二七三ノ二

源氏の玉鬘を冊く

を誇る ① 二八一ノ五

雲井雁を教訓す

① 二八三ノ四

近江君を持扱ふ

① 二八六ノ五

近江君を教訓す

① 二八八ノ四

源氏の評

① 三二一ノ三

嚴格

① 三三五ノ三

源氏に玉鬘の事を

明さる ① 三三九ノ三

玉鬘の裳著に腰結

の役を勤む ① 三五〇ノ一〇

近江君を賺す

① 三五五ノ二

夕霧と雲井雁との

關係について煩 ① 四一ノ八

關す

① 四一ノ八

大宮の法會に夕霧

を誘ふ ① 四七ノ一

藤の宴に託して夕

霧を招く ① 四五ノ一

太政大臣に任ぜら

る ① 四六七ノ六

致仕

① 一一二ノ二

柏木の病を憂ふ

① 一一〇ノ七

夕霧の觀たる頭中

將 ① 二八一ノ二

落葉宮に文を贈る

① 二八四ノ三

源氏を慰問す

① 三〇八ノ二

○時方

關山	①	六二四ノ三
橋の小島	④	二五四ノ二
筑紫	②	一五三ノ二〇
中川	①	七ノ六
同	①	四四〇ノ三
奈良坂	④	三六五ノ四
奈良	②	五四九ノ五
西の京	①	一五八ノ一
同	①	一六〇ノ一
同	②	一五三ノ六
二條	①	一四五ノ二
箱崎	②	一六七ノ五
長谷(初瀬)	②	一六七ノ九
同	③	四七五ノ一
同	④	二二八ノ六
同	④	三六五ノ二
同	④	四〇四ノ三

初瀬川	②	一八〇ノ二
東山	①	一四五ノ五
肥後國	②	一五八ノ二
肥前國	②	一五七ノ二〇
松が崎	③	二〇八ノ一
松浦	②	一六三ノ六
同	②	一六七ノ五
横川	④	三六五ノ一
同	④	三八八ノ二
六條	①	一〇九ノ一
同	①	一三二ノ四
六條京極	①	二〇四ノ七
同	②	一三九ノ二〇
○中將		
小野を訪ひて浮舟		
を見る	④	三八八ノ二
浮舟の事を聞く	④	三九三ノ二

再び小野を訪ふ	④	三九五ノ八
浮舟を挑む	④	四〇五ノ九
浮舟に文を贈る	④	四二〇ノ四
浮舟の出家を悲む	④	四二五ノ四
ト		
○藤式部丞—賢女顔す		
る女の話	①	六四ノ六
○藤内侍		
賀茂祭の使	②	四六二ノ二
雲井雁を慰む	③	二八六ノ一
○頭中將		
素姓	①	三二ノ六
源氏との間柄	①	三四ノ九
女子論	①	三七ノ五
女子三等説	①	三八ノ五
内氣なる女の話	①	六〇ノ三

○千枝常則

○持佛供養

同

○地名

明石

同

同

愛宕

同

栗田山

石山

同

同

一條

泉河

浮島

宇治

① 四八ノ八

③ 一八七ノ一

③ 一九〇ノ九

① 一七三ノ六

① 四九二ノ三

② 五六一ノ五

① 八ノ八

③ 一八〇ノ二

① 六三四ノ二

① 六三三ノ六

④ 二三五ノ二

④ 三〇九ノ二

① 三三三ノ二

④ 一三〇ノ五

④ 一六七ノ一

③ 四三五ノ七

同

同

同

同

同

宇治山

打出の濱

大堰河

大原野

小倉山

小野

同

同

桂川

金の御崎

唐泊

③ 五七ノ七

④ 二六ノ二

④ 二〇五ノ八

④ 三二ノ一〇

④ 三六ノ一

③ 四六ノ五

① 六四ノ二

② 二ノ二

② 三五ノ六

③ 二五ノ七

③ 二〇六ノ七

④ 三七ノ三

④ 四五ノ一

② 二ノ五

② 三六ノ二

② 一五ノ四

② 一六ノ五

川尻

北山

同

木幡山

同

京極

九條

栗栖野

黒谷

五條

同

嵯峨野

同

三條

須磨

同

住吉

② 一六四ノ五

① 一六九ノ二

① 四六〇ノ二

③ 四九八ノ一〇

④ 二三四ノ九

① 五九八ノ七

② 一六六ノ六

③ 二二二ノ一〇

④ 四二六ノ七

① 一〇九ノ二

② 一九〇ノ四

② 二六ノ一〇

② 五四ノ九

④ 一九〇ノ三

① 四四五ノ二

① 四八〇ノ五

③ 一五ノ四

窃に京に上る

① 一六二ノ八

初瀬詣

② 一六六ノ六

右近と邂逅す

③ 一六九ノ一

容姿

④ 一七〇ノ四

優雅

⑤ 一八〇ノ九

六條院に移る

⑥ 一八九ノ二

源氏の訪問

⑦ 二〇六ノ四

夕顔との比較

⑧ 二三〇ノ八

方々よりの附文

⑨ 二三〇ノ二

夕顔との比較

⑩ 二二七ノ七

煩悶

⑪ 二四五ノ一

快活

⑫ 二四六ノ七

源氏に物語の趣意

⑬ 二五九ノ四

を聞く

⑭ 二七五ノ九

源氏の和琴を聞く

⑮ 二九七ノ一

漸く源氏に接近す

⑯ 三三六ノ二

行幸見物

⑰ 三三六ノ二

源氏に入内を勧め

① 三三二ノ四

らる

② 三三八ノ五

源氏の戀を聞く

③ 三六六ノ一〇

裳著祝

④ 三五九ノ一

煩悶

⑤ 三六七ノ六

源氏の評

⑥ 三六九ノ四

柏木の訪問を受く

⑦ 三七四ノ二

懸想文集る

⑧ 三七七ノ一

髯黒と婚す

⑨ 三七九ノ二〇

悔恨

⑩ 四〇五ノ二

參内

⑪ 四〇六ノ一〇

男踏歌を見る

⑫ 四一三ノ三

鬘黒の邸に入る

⑬ 四一九ノ二

男子を生む

⑭ 五一ノ二

四十の賀に源氏を

⑮ 八ノ二

訪ふ

⑯ 八ノ二

夕霧と親む

⑰ 八ノ二

本性

① 八ノ三

螢兵部卿宮に對す

② 一一ノ二

る心遣ひ

③ 九五ノ三

源氏の觀たる玉鬘

④ 三七六ノ三

髯黒死後の生活

⑤ 三七七ノ三

大君を宮仕に出さ

⑥ 三七九ノ五

んとす

⑦ 三八〇ノ九

薫を愛す

⑧ 四四五ノ七

大君宮仕の事を夕

⑨ 四一七ノ四

霧に語る

⑩ 四二〇ノ一〇

中君に尙侍を讓る

⑪ 四二〇ノ一〇

出家せんとして果

⑫ 四二〇ノ一〇

さす

⑬ 四二〇ノ一〇

薫に大君の事を訴

⑭ 四二〇ノ一〇

ふ

⑮ 四二〇ノ一〇

子

素姓 ① 二三ノ一

源氏に逢ふ ① 二四〇ノ二〇

羞恥 ① 二四一ノ二

源氏の觀たる末摘 ① 二四六ノ九

花 ① 二五三ノ九

容姿 ① 二五八ノ九

源氏に衣服を贈る ① 五九五ノ一

侘住居 ① 五九七ノ二

著實 ① 六〇〇ノ九

古風 ① 六〇二ノ二

羞恥 ① 六〇五ノ一〇

叔母に筑紫下りを ① 六二七ノ三

勸めらる ① 六二九ノ九

羞恥 ① 六二九ノ九

源氏の觀たる末摘 ① 六二〇ノ二

花 ① 六二〇ノ二

源氏の扶助を受く ① 六二〇ノ二

から衣の歌 ② 一九ノ四

源氏の訪問 ② 二二〇ノ三

玉鬘裳著祝の歌と ② 二四八ノ二

贈物 ② 二四八ノ二

古風 ② 二四八ノ二

○攝政太政大臣

加冠の役を勤む ② 二七ノ七

源氏を厚遇す ② 三〇ノ二

同 ② 二八〇ノ二

葵上歿後の悲痛 ② 三六〇ノ四

悲歎、失意 ② 四四八ノ一

攝政に任ぜらる ② 五五九ノ九

薨去 ③ 四一ノ二

夕

○大内記 ④ 二二一ノ四

匂宮に浮舟の事を ④ 二二一ノ四

語る ④ 二二一ノ四

匂宮を宇治に導く ④ 二二一ノ四

同 ④ 二二一ノ四

○大夫監 ④ 二二一ノ四

玉鬘を得んとす ④ 二二一ノ四

好色 ④ 二二一ノ四

粗野 ④ 二二一ノ四

○太宰大貳一舟中より ④ 二二一ノ四

源氏に消息す ④ 二二一ノ四

○玉鬘 ④ 二二一ノ四

素姓 ④ 二二一ノ四

乳母と筑紫に下る ④ 二二一ノ四

田舎人の懸想 ④ 二二一ノ四

穩雅 ④ 二二一ノ四

大夫の監に迫らる ④ 二二一ノ四



同(宇治の大君)

③ 五七〇、三

感慨(源氏)

③ 一四八、四

感懷(薰大將)

④ 六四〇、三

苦悶(女三宮)

③ 六八〇、三

後悔(薰大將)

④ 三七〇、二

自重(明石上)

① 五三〇、一

嫉妬(雲井雁)

③ 二五六、二

思慕(桐壺帝)

① 一八〇、二

同(源氏)

① 二八〇、五

同(同)

① 四九〇、六

同(同)

① 五三七、二

同(同)

③ 六二六、九

愁傷(薰大將)

④ 三〇九、二

同(匂宮)

④ 三二〇、四

追慕(源氏)

② 四四〇、三

取越苦勞(紫上)

② 七二〇、八

煩悶(空蟬)

① 八八〇、三

同(六條御息所)

① 三三三、六

同(源氏)

① 四〇五、三

同(同)

② 二七九、七

同(同)

③ 八八〇、九

同(藤壺)

① 四〇五、九

同(玉鬘)

② 二四五、三

同(同)

② 三五九、一

同(頭中將)

② 四一〇、八

同(雲井雁)

② 四四七、四

同(夕霧)

② 四四七、一

同(紫上)

② 五三三、六

同(柏木)

② 二〇、一

同(同)

③ 六八〇、三

同(同)

③ 九三〇、二

同(同)

③ 一七〇、一

同(落葉宮)

③ 二三八〇、二

同(宇治の中宮)

③ 五三〇、一

同(浮舟)

④ 二四七、二

同(同)

④ 二六一、七

同(同)

④ 二九三、一

悲歎(源氏)

① 三五八、八

同(葵上父大臣)

① 三六一、二

同(落葉宮母御息所)

③ 二三八〇、三

憂愁(宇治の姫君)

③ 五七〇、七

同(同)

③ 五九六、六

憂悶(源氏)

③ 五四〇、二

離愁(源氏)

① 四四五、一

同(明石上)

① 五四六、二

同(同)

② 六〇、一

戀慕(夕霧)

② 三〇九、四

ス

○末摘花

同	①	五五ノ六
同	③	四ノ一
春の庭	②	一四三ノ七
同	②	三三〇ノ七
同	②	三三〇ノ八
同	②	五八四ノ二
同	③	一五二ノ一
同	③	三九ノ二
春の初	①	四三ノ八
同	②	二〇九ノ二
同	③	三〇ノ二
春の山	①	一八九ノ七
春の山里	③	四七八ノ一
春の山路	①	一七〇ノ五
春の夜	③	四三ノ三
春の宵	②	二〇九ノ二
藤の花	②	四五四ノ六

冬の朝	①	二四ノ二
同	③	二〇ノ二
同	④	二四ノ八
冬の庭	①	二四ノ五
冬の初	③	一七ノ二〇
冬山里	③	六六ノ九
冬の夜	③	一九ノ二〇
暴風雨	①	四九ノ二
同	①	五〇ノ二
蟲の音	③	一九四ノ一〇
夜行	①	一五ノ六
山里	③	四四ノ九
山里の曉	③	五七ノ二
山里の夕	③	二〇ノ一〇
山里の夜	③	二六ノ七
山の夜	①	一五ノ六
雪	①	二五ノ二

同	④	二五ノ二
夕顔	①	一〇ノ九
同	①	一〇ノ三
雪の庭	①	二五ノ一〇
同	②	八二ノ二
同	①	二五ノ三
同	①	二五ノ二
夜の怪	①	一三七ノ六
○敘情文		
哀傷(源氏)	③	三〇ノ二
同(同)	③	三三ノ六
同(同)	③	三三ノ二
同(同)	③	三三ノ六
悔恨(源氏)	①	三六ノ一
同(同)	③	三二ノ四
同(六條御息所)	①	三五ノ六
覺悟(紫上)	②	五〇ノ一〇

有明月	③	二八ノ三
荒庭	①	一〇ノ九
同	①	一五ノ一
同	①	六二ノ八
宇治の山莊	③	四三ノ九
宇治の冬	④	二五〇ノ三
海	①	四八ノ四
海の荒れ	①	四九ノ三
大路	①	二〇ノ二
岡邊の家	①	五五ノ五
尾花	④	一〇五ノ三
音楽	①	二七ノ八
女の容姿と花	③	三六ノ二
篝火	②	二九ノ九
櫻	①	三四ノ二〇
五月雨	③	三八ノ一〇
四季の庭園	②	一四ノ七

時雨	①	三五ノ二
新年	②	二〇ノ一
深夜	①	一四三ノ七
同	①	一四三ノ一
霜月	①	六一ノ九
須磨の浦	①	四七〇ノ三
同	①	四八四ノ三
同	①	四九〇ノ九
巷の朝	②	二九ノ五
同	①	一三〇ノ二
同	④	二〇四ノ五
巷の家	①	二七ノ三
月	①	五六ノ八
中川の宿	①	七二ノ五
夏の庭	②	一四ノ一
夏の初	①	四四〇ノ六
同	①	四四二ノ一〇

同	①	六二ノ八
同	②	二三八ノ五
夏の山里	③	二二〇ノ二〇
夏の夕	②	二四〇ノ六
野宮	①	三七九ノ三
野分	②	三〇四ノ三
同	②	三〇四ノ九
同	②	三二〇ノ二
敗邸	①	五九七ノ四
同	①	五九八ノ三
同	①	六一三ノ二〇
同	③	二五五ノ八
蓮の花	③	三三三ノ六
同	③	八一ノ八
花の夕	③	三三ノ二
濱の館	①	五一四ノ二
春の暮	①	四五〇ノ二

(中將) ① 四二〇ノ六

まことや我ながら

(源氏) ① 五三八ノ一

まだなりあはぬ佛

(薰) ④ 二〇八ノ七

自らも(夕霧)

自らも聞えまほし

きを(葵上母) ① 四三三ノ二

もてはなれたりし

(源氏) ① 四三三ノ六

山里の(中君)

行きはなれぬ(源氏)

④ 一九七ノ五

ゆくての御事は

(北山の尼) ① 四九ノ二

よべ大將殿の(横

川僧都) ④ 一八九ノ二

よべ俄に(髯黒) ② 三九二ノ七

昨夜参らむと(薰) ③ 五六五ノ二三

昨夜より(右近) ④ 二二六ノ八

萬に思ひ給へ(明

石上) ① 五八ノ七

六條の大臣の(大

宮) ② 三三九ノ九

○紋景文

明石の浦 ① 五二ノ二

曉 ① 八三ノ八

同 ③ 五三四ノ三

秋の曉 ① 三五〇ノ二

同 ③ 四九二ノ一

秋の須磨 ① 四八〇ノ五

秋の庭 ① 一三〇ノ七

同 ② 一四二ノ一〇

同 ② 三〇三ノ一

同 ④ 一〇五ノ二

秋の野 ① 三七九ノ六

秋の廢院 ① 一三三ノ九

秋の寺院 ① 四〇八ノ四

秋の山里 ① 六四二ノ八

同 ③ 二五〇ノ一

同 ③ 四四三ノ六

同 ③ 四八四ノ六

同 ③ 四九五ノ八

同 ④ 一〇二ノ一〇

同 ④ 三八四ノ五

秋の夕 ① 一六〇ノ三

秋の夜 ① 一五ノ四

同 ① 五七ノ二

同 ① 二四二ノ二

朝顔 ② 六八ノ七

東遊 ③ 一七ノ二

御息所

① 三五ノ四

今日なむ都離れ侍

る(源氏)

① 四六ノ一

今日はいみじく

(葵上母)

① 三五ノ一

今朝こゝに(横川

僧都)

④ 四六ノ三

今朝の雪に(源氏)

② 五五ノ七

げさやかなりし

(源氏)

② 六八ノ〇

心のあくがるま

でなむ(源氏)

① 五七ノ四

この月の十四

(明石入道)

② 四四ノ三

この年頃は(明石

入道)

② 五三ノ二

こよなう(源氏)

① 三五ノ二

さらに聞えさせや

り侍らず(王命婦)

① 四六ノ二

更に聞えむ方なく

(薰)

④ 四六ノ二

知らせ給ふべき

(末摘花)

② 三四ノ五

その事となくて

(朱雀院)

③ 二〇ノ一

その事と侍らでは

(浮舟母)

④ 一五ノ七

只今の空の氣色を

(匂宮)

③ 四六ノ九

年改りて(右近)

訪はせ給へるは

④ 二八ノ七

(北山の尼)

訪はせ給はぬも

① 二七ノ五

(源氏)

① 四六ノ二

なほ現とは(六條

御息所

① 四七ノ七

猶おり給ひて(横

川僧都妹)

④ 三七ノ八

春の野山(朱雀)

春や來ぬるとも

③ 一六ノ二

(源氏)

一日の御事は(中

君)

④ 六九ノ二

一日の風に(柏木)

日頃おもく惱み

② 五九ノ一〇

(朱雀)

日頃少し(源氏)

日頃何事か(薰)

④ 一〇四ノ一〇

程経ばすこし(桐

壺帝)

① 二二ノ一〇

紛るることなく

○精進落の饗宴

二 五五ノ四

○消息文

あさましき事は

(薰)

四 三二ノ二

葦垣の(近江君)

二 二九三ノ九

あやしう(雲井雁)

三 四〇二ノ二〇

如何なる事と(玉

鬘)

三 三九八ノ四

生けるかひなきや

(源氏)

一 一六二ノ八

いと覺束なさに

(浮舟母)

四 二九八ノ四

いとかたばらいた

き(雲井雁)

三 三九八ノ一

いと遙なる(太宰

大貳)

一 四八六ノ二〇

いともかしこきは

(桐壺更衣母)

一 一六ノ二

いともかしこきは

(明石入道)

一 三二七ノ八

寝ぬる夜に(浮舟

母)

四 二九四ノ二

今はかぎりと(藏

人少將)

三 四〇三ノ九

今は限に(柏木)

いみじき事に(浮

舟母)

四 三三三ノ一

院に覺束なり

(源氏)

一 三六〇ノ二

入らせ給ひにける

(源氏)

一 四二二ノ八

承り惱むを(空蟬)

承りぬ(薰)

四 七〇ノ二

うちつけなる様

(薰)

三 四六〇ノ二

幼き人の(朱雀)

覺束なき月日(源

氏)

二 四二七ノ二

かへすく(源氏)

かく旅の空に(源

氏)

一 四〇九ノ一

かく世を(源氏)

數ならぬ身を(源

氏)

一 三三三ノ二

桂に見るべき事

(源氏)

二 一三ノ五

聞えさせても(源

氏)

一 四二八ノ四

聞えさせまほしき

事も(源氏)

一 四三三ノ三

聞えぬ程は(六條

敏慧

① 三六九ノ八

同

① 五八ノ七

娘を五節の舞姫に

出す

② 二四ノ六

サ

○櫻の宴

① 三〇五ノ一

○櫻の賭物

③ 三九三ノ三

○左大臣(攝政太政大臣を見よ)

シ

○試樂

③ 一〇ノ八

○式部卿宮(又兵部卿宮)

紫上を訪ふ

① 二五ノ二

失望、疑惑

① 二六ノ二

髯黒の本妻を引取

る

② 三六ノ三

名望

③ 八ノ九

○四十の賀

② 五二ノ六

同

② 五五ノ九

○朱雀院

行幸の準備

① 二四七ノ三

優柔

① 三九七ノ九

溫和

① 四二四ノ二〇

臘月夜を寵す

① 四七八ノ二〇

夢に父帝の告を受

く

① 五三九ノ一〇

讓位の志

① 五五四ノ八

六條院御幸

② 四七二ノ四

御惱

② 四七八ノ一

女三宮の處置に苦

心す

② 四七八ノ五

女三宮を東宮に託

す

② 四七九ノ九

夕霧との銀談

② 四八一ノ二

女三宮を源氏に嫁

せしめんとす

② 四八六ノ二

出家

② 五〇〇ノ二

本性

② 五二八ノ四

西山に移る

② 五二九ノ四

慈愛

② 五二九ノ四

五十の賀の準備

③ 二五ノ五

女三宮を見舞ふ

③ 九九ノ六

慈愛

③ 一〇〇ノ三

五十の賀

③ 二五ノ九

女三宮を見舞ふ

③ 一三〇ノ一

慈愛

③ 一三〇ノ八

女三宮に筒野老を

贈る

③ 一六六ノ六

落葉宮の出家を止

む

③ 二六ノ五

○弘徽殿女御(桐壺)―

重病

○ 五五ノ一

○弘徽殿女御(冷泉)

邪見

○ 三七ノ二〇

入内

○ 五七三ノ二二

復讐心

○ 三五五ノ二二

猜怨

○ 四一六ノ五

猜疑

○ 四六六ノ五

説誣

○ 四八八ノ九

復讐心

○ 五五四ノ一

老後の性癖

○ 一三八ノ三

近江君への返事

○ 二九四ノ二〇

○小君(空王蟬弟)

素姓

○ 七五ノ三

源氏の文を空蟬に

通ず

○ 八四ノ五

源氏を中川に手引

す

源氏を空蟬の室に

○ 九四ノ六

手引す

○ 九八ノ二

右衛門佐

○ 六四ノ二

○小君(浮舟弟)―浮舟

を訪ふ

○ 四五二ノ三

○小宰相

薫との關係

○ 三五ノ三

薫に浮舟の事を語

○ 四三七ノ六

○小侍従

柏木に女三宮への

媒介を迫らる

○ 五七ノ五

柏木を導きて女三

宮に逢はす

○ 六二ノ九

柏木の文を女三宮

に取次ぐ

○ 八四ノ六

祕密の露顯を柏木

に告ぐ

○ 九三ノ六

柏木を訪ふ

○ 二二〇ノ七

○五十の賀

を贈る

○ 二二五ノ九

○五節の君―源氏に歌

を贈る

○ 四八六ノ四

○惟光

源氏に夕顔の様子

を語る

○ 一二七ノ二

夕顔の様子を精探

す

○ 一二四ノ四

忠實

夕顔の屍を東山の

寺に移す

○ 一四三ノ一〇

夕顔の屍を始末す

○ 一四八ノ五

北山に使す

○ 一九八ノ七

紫上に使す

○ 二二七ノ八



逢ふ ① 四五六ノ七

夕霧の観たる雲井

雁 ② 五八ノ三

本性 ③ 四六ノ二

悖氣 ④ 一七ノ八

落葉宮の文を奪ふ ⑤ 二三ノ七

嫉妬 ⑥ 二三ノ七

同 ⑦ 二五ノ七

同 ⑧ 二七ノ六

夕霧の観たる雲井

雁 ⑨ 二八ノ二

怒りて父の邸に歸

る ⑩ 二八ノ六

○藏人少將

大君を戀ふ ⑪ 三七ノ四

大君を垣間見す ⑫ 三九ノ三

大君の宮仕を歎く ⑬ 三七ノ五

同 ⑭ 四〇ノ八

中君に心なし ⑮ 四〇ノ三

男踏歌に出づ ⑯ 四〇ノ七

三位中將に任ぜら

る ⑰ 四〇ノ一

宰相に任ぜらる ⑱ 四二ノ二

玉鬘を訪ふ ⑲ 四四ノ九

ケ

○懸想文 ⑳ 三七ノ二

○源氏君(光源氏を見よ)

○蹴鞠の會 ㉑ 五八ノ九

○源内侍

源氏頭中將等との

關係 ㉒ 二九ノ二

好色 ㉓ 二九ノ七

輕浮 ㉔ 三三ノ二

祭に源氏と歌の贈 ㉕ 三三ノ三

答

尼になりて源氏に

邂逅す ㉖ 六ノ二

コ

○紅梅右大臣

源氏に近江君の事

を語る ㉗ 二七ノ九

妻子 ㉘ 三五ノ一

大君を東宮に參ら

す ㉙ 三六ノ八

宮の君に琵琶を彈

かしむ ㉚ 三六ノ八

右大臣に任ぜらる ㉛ 四二ノ一〇

大饗 ㉜ 四三ノ九

○木枯の女 ㉝ 五六ノ一

空蟬の事を源氏に

語る ① 七五ノ四

○衣配り ② 一九五ノ六

○今上

元服 ② 四三ノ五

即位 ③ 二二ノ二〇

大君の冷泉に仕へ

たるを啣む ③ 四〇八ノ六

薫を女二宮の簪に

せんとす ④ 二八ノ四

園碁に託して其意

をほのめかす ④ 二九ノ七

快決

○桐壺帝 ④ 二四ノ三

桐壺更衣の寵愛

源氏の寵愛 ① 一ノ一

更衣の死を悲む ① 二ノ三

① 八ノ七

靱負命婦をして更

衣の母を訪はし

む ① 一〇ノ二

更衣思慕の情愈切

なり ① 二〇ノ二

相人の説を聞く ① 三ノ三

藤壺入内 ① 二四ノ二

朱雀院行幸 ① 二七ノ一

讓位 ① 三九ノ一

重病 ① 三八九ノ二〇

崩御 ① 三九二ノ五

○桐壺更衣

桐壺帝の殊寵を受

く ① 一ノ一

源氏を生む ① 二ノ三

寵遇愈加はる ① 三ノ四

后妃の嫉妬を受く ① 四ノ一

病の爲に里に下る

逝去 ① 六ノ

葬式 ① 七ノ三

三位を贈らる ① 八ノ七

○桐壺更衣母

更衣の葬式 ① 九ノ一

靱負命婦との對面 ① 八ノ七

逝去 ① 一〇ノ二〇

① 二二ノ二

ク

○雲井雁

素姓 ① 一〇三ノ二

幼き悲み ① 一五ノ一

頭中將の教訓を受

く ① 二八三ノ四

夕霧との關係 ① 四四ノ八

久し振にて夕霧に

小野に浮舟を訪は

んとす ④ 四四二ノ一

横川僧都に浮舟の

事を聞く ④ 四四三ノ一

小君をして浮舟を

訪はしむ ④ 四四三ノ二

○柏木大納言

玉鬘に文を贈る ② 二二三ノ一

父の使として玉鬘

を訪ふ ② 二九九ノ四

朱雀帝の觀たる柏

木 ② 四九四ノ八

女三宮に對する戀

女三宮を垣間見る ② 五八一ノ九

女三宮に文を贈る

自尊 ② 五九三ノ一

煩悶 ③ 一ノ一

東宮に猫の話な

す ③ 五ノ三

女三宮の猫を得て

寵愛す ③ 六ノ四

落葉宮を娶る

女三宮を慕ひて小 ③ 五七ノ五

侍従に謀る ③ 五八ノ三

密に女三宮に逢ふ

煩悶 ③ 六二ノ九

悔恨 ③ 六八ノ三

女三宮に文を贈る ③ 七〇ノ二

源氏の觀たる柏木 ③ 七〇ノ二

露顯後の煩悶 ③ 八四ノ七

源氏との疎隔 ③ 八九ノ二

試樂の事務を執行 ③ 九二ノ六

す ③ 一〇四ノ八

病重る ③ 一〇五ノ一〇

重態、煩悶 ③ 一二七ノ一

女三宮に文を贈る ③ 一二九ノ四

小侍従と語る ③ 一三〇ノ七

危篤 ③ 一三五ノ二

權大納言に任ぜら

る ③ 一三七ノ五

後事を夕霧に託す ③ 一三七ノ八

逝去 ③ 一四三ノ七

夕霧の觀たる柏木 ③ 一五〇ノ六

本性 ③ 一六三ノ一

○管絃の遊 ② 二三四ノ二

○賀茂祭 ① 三三三ノ五

キ

○紀伊守

源氏の宿を命ぜら

る ① 七二ノ五

辨の尼に浮舟の事

を聞く

(四) 九八ノ二〇

葛紅葉を中君に贈

る

(四) 一〇四ノ六

女二宮との婚期近

づく

(四) 一一〇ノ五

權大納言に進む

(四) 一一〇ノ三

女二宮と婚す

(四) 一二四ノ八

中君を訪ひて赤兒

を見る

(四) 一二七ノ一

天盃を賜はる

(四) 一二二ノ一

宇治に行く

(四) 一二六ノ二

浮舟を隙見す

(四) 一二八ノ一

異性に對する性質

(四) 一三三ノ七

中君の觀たる薫

(四) 一六五ノ五

中君を訪ひて浮舟

の事を聞く

(四) 一六七ノ二

辨の尼に浮舟を媒

せん事を頼む

(四) 一九九ノ二〇

浮舟母の觀たる薫

(四) 一九四ノ七

宇治に行く

(四) 一九六ノ二二

浮舟を訪ふ

(四) 二〇一ノ三

浮舟を宇治に伴ふ

(四) 二〇五ノ八

なほ中君に情あり

(四) 二二五ノ一

匂宮を見舞ふ

(四) 二四五ノ五

浮舟への愛情

(四) 二四六ノ二一

異性に對する性質

(四) 二四七ノ七

宮中の詩會

(四) 二五二ノ六

侍女の觀たる薫

(四) 二六二ノ二〇

浮舟引取の準備

(四) 二六四ノ八

匂宮と浮舟との關

係を悟る

(四) 二七二ノ五

宇治山莊を誓固せ

しむ

(四) 二八三ノ三

浮舟の死を悲む

(四) 三〇九ノ二

匂宮を訪ひて浮舟

(四) 三二二ノ一

の事を語る

(四) 三三二ノ一

宇治に行きて浮舟

(四) 三三三ノ三

の祕密を聞く

(四) 三三〇ノ二〇

浮舟の母を慰む

(四) 三三五ノ三

小宰相との關係

(四) 三三八ノ一

女一宮を隙見す

(四) 三三八ノ一

女二宮を女一宮に

親ましめんとす

(四) 三四二ノ五

明石中宮に參る

(四) 三四四ノ一

異性に對する性質

(四) 三四九ノ三

和琴を弾く

(四) 三五三ノ五

宮の君を訪ふ

(四) 三五八ノ二

浮舟の噂を聞く

(四) 三六〇ノ五

憐愍

憐愍

(四) 四三七ノ六

大君姉妹を隙見す ③ 五七〇二

大君の靡かぬを恨む ③ 五二〇一

異性に對する性質 ③ 五二八〇三

大君に情を訴ふ ③ 五二九〇二

大君に迫る ③ 五四六〇五

匂宮と宇治行を約す ③ 五五三〇一

匂宮と宇治に行く ③ 五五六〇一

匂宮を中君に逢はす ③ 五五八〇一

匂宮と宇治に行く ③ 五七五〇二〇

なほ大君に對する戀を遂げず ③ 五七七〇三

苦心 ③ 五七八〇三

後悔 ③ 五九〇〇六

大君の病を訪ふ ③ 五九四〇一

同 ③ 六〇一〇三

大君を看護す ③ 六〇九〇三

宇治に籠居す ③ 六二四〇九

京に歸らんとす ③ 六三三〇二

匂宮と中君の事を語る ④ 五〇二

厚情 ④ 九〇一

中君と語る ④ 九〇六

辨の尼と語る ④ 一二〇九

二條院に中君を訪ふ ④ 二二〇八

今上の觀たる薫 ④ 二九〇二

女二宮に意なし ④ 二九〇七

なほ大君を慕ふ ④ 三三〇三

異性に對する性質 ④ 三三〇三

煩悶 ④ 三七〇二

中君を想ふ ④ 三九〇六

異性に對する性質 ④ 四〇〇一

中君を訪ふ ④ 四二〇一

孝情 ④ 四九〇二

夕霧方の三つ目祝に參會 ④ 六二〇六

按察の君の局に宿す ④ 六五〇一〇

異性に對する性質 ④ 六六〇九

中君に戀情を訴ふ ④ 七二〇三

自制 ④ 七五〇二

中君に衣類を贈る ④ 八三〇七

中君に情を訴ふ ④ 八七〇二

中君に浮舟の事を聞く ④ 九二〇三

宇治の山莊に行く ④ 九五〇二

寢殿を寺に改造せんとす ④ 九七〇三

冷泉院の厚遇 ③ 三六七ノ二

女三と柏木との間 ③ 三六八ノ六

を疑ふ ③ 三六九ノ二

源氏との比較 ③ 三五〇ノ二〇

自頁 ③ 三五〇ノ二〇

人品 ③ 三五〇ノ二〇

深慮 ③ 三五〇ノ二〇

薫中將の名 ③ 三五〇ノ二〇

異性に對する性質 ③ 三五〇ノ二〇

沈著 ③ 三五〇ノ二〇

女一宮を思ふ ③ 三五〇ノ二〇

異性に對する性質 ③ 三五〇ノ二〇

玉鬘に愛せらる ③ 三七九ノ五

老成 ③ 三七九ノ六

玉鬘を訪ふ ③ 三八二ノ二

玉鬘方の人々に睦 ③ 三八五ノ二

じ ③ 三八五ノ二

大君に對する淡 ③ 四〇五ノ二

き戀 ③ 四〇五ノ二

冷泉院に召さる ③ 四二一ノ九

宰相中將に任ぜら ③ 四二九ノ九

る ③ 四二九ノ九

中納言に任ぜらる ③ 四三〇ノ二

玉鬘の愚痴を聞く ③ 四三二ノ一

宇治宮の噂を聞く ③ 四三七ノ一

宇治宮に交を求む ③ 四三九ノ五

宇治宮を愛慕す ③ 四四〇ノ九

宇治の山莊を訪ふ ③ 四四三ノ一

姫君達を陳見す ③ 四四四ノ四

辨の君に逢ふ ③ 四五一ノ九

宇治宮父子に文を ③ 四五八ノ二〇

贈る ③ 四五八ノ二〇

匂宮に宇治の姫君 ③ 四六一ノ六

の事を語る ③ 四六一ノ六

宇治宮を訪ふ ③ 四六四ノ一

身の上の祕密を聞 ③ 四六六ノ二

く ③ 四六六ノ二

柏木の形見の文を ③ 四六九ノ二

受取る ③ 四六九ノ二

柏木の形見の文を ③ 四七〇ノ二

見る ③ 四八四ノ一

中納言に任ぜらる ③ 四八四ノ一

宇治宮の姫君を託 ③ 四八四ノ一

せらる ③ 四八四ノ一

異性に對する性質 ③ 四八四ノ一

宇治宮逝去後の世 ③ 四九四ノ八

話 ③ 四九四ノ八

宇治の山莊を訪ふ ③ 五〇〇ノ四

中君を匂宮に媒せ ③ 五〇八ノ二〇

んとす ③ 五二二ノ一

大君に戀を打明く ③ 五二二ノ一

容姿

④ 三四〇ノ一

女二宮との交際

④ 三四八ノ八

○女五宮

源氏の訪問を受く

③ 三三ノ一

槿の前齋院を説く

③ 九二ノ五

○女三宮

素姓

③ 四七八ノ五

聳の候補者の様々

③ 四九五ノ三

裳著の祝

③ 四九九ノ二

源氏に嫁す

③ 五二七ノ九

源氏の觀たる女三

宮

③ 五二九ノ一

嬌稚

③ 五二七ノ三

容姿

③ 五八五ノ三

源氏に琴を習ふ

③ 二六ノ八

嬌稚

③ 二九ノ九

容姿

③ 三六ノ二

夕霧の觀たる女三

宮

③ 三六ノ四

柏木に逢ふ

③ 六二ノ九

苦悶

③ 六八ノ三

病氣

③ 六九ノ五

懷胎

③ 八〇ノ四

源氏の觀たる女三

宮

③ 八七ノ三

同

③ 九四ノ九

源氏の教訓を受く

③ 一〇〇ノ二

薰を生む

③ 一二五ノ二

出家を望む

③ 一二八ノ九

朱雀院に對面

③ 一三〇ノ一

出家

③ 一三二ノ九

持佛供養

③ 一八七ノ一

尼生活

③ 一九三ノ八

源氏の訪問

③ 三三ノ五

源氏死後の生活

③ 三四八ノ一

○女二宮

藤壺女御にかしづ

かる

④ 二五ノ一

母女御に死別す

④ 二六ノ三

沈著

④ 二七ノ九

薰に定まらんとす

④ 三三ノ三

薰と婚す

④ 二四ノ八

三條邸に移る

④ 二五ノ三

女一宮との交際

④ 三四八ノ八

カ、クワ

○薰大將

誕生

③ 二五ノ二

五十日の祝

③ 一四ノ七

箭を嚙る

③ 一六八ノ六

人品

③ 三四三ノ三

夕霧に笛を贈る ③ 一七四ノ二

小野の山莊に移る ③ 二〇六ノ一

加持の僧に夕霧の  
事を聞く ③ 二三四ノ二

夕霧と落葉宮との  
仲を推測す ③ 二六六ノ三

愁歎 ③ 二二九ノ三

逝去、送葬 ③ 二四二ノ四

○男踏歌 ③ 二二六ノ一

同 ③ 四一〇ノ七

○朧月夜内侍 ③ 三〇七ノ八

源氏と邂逅す ③ 三〇七ノ八

源氏の觀たる朧月  
夜 ③ 三八七

尚侍になる ③ 三九四ノ一〇

本性 ③ 三九八ノ五

源氏との密通露顯

す ① 四三三ノ八

再び朱雀帝に寵せ  
らる ① 四七八ノ二〇

紫上の評 ② 八五ノ二

二條院に移る ② 五〇ノ八

源氏に逢ふ ② 五三ノ三

尼となる ③ 九五ノ二二

○音樂、音樂者論 ③ 三八ノ九

○女 ③ 六〇ノ三

内氣なる女 ① 六〇ノ三

浮氣女 ① 五九ノ一

女の子 ③ 八五ノ九

面白き女よりは眞  
面目なる女 ① 四七ノ二二

下品の女子 ① 四〇ノ九

賢女顔する女 ① 六四ノ六

嫉妬 ① 四六ノ二

嫉妬深き女 ① 四九ノ一〇

中品の女子 ① 三九ノ五

主婦の資格 ① 四二ノ九

上品の女子 ① 四〇ノ五

女子の才色 ① 三七ノ五

女子の三等 ① 三八ノ五

女子論 ① 六八ノ八

思慮過ぐる女 ① 四九ノ二

身の處置 ② 四九ノ九

同 ③ 二五八ノ一〇

聳えらみ ② 四九三ノ七

容姿と花 ② 三〇六ノ三

同 ② 三二九ノ七

同 ② 三三三ノ五

同 ② 三六ノ二

○女樂 ③ 二八ノ一〇

○女一宮



○大君(玉鬘女)

中君と圍碁 ③ 三九〇ノ七

冷泉院に宮仕の事

定まる ③ 三九七ノ五

冷泉院に參る ③ 四〇二ノ七

懐胎 ③ 四〇〇ノ一

女一宮を産む ③ 四一五ノ一

冷泉院の殊寵 ③ 四一八ノ四

○大君(宇治宮女)

薰と應答す ③ 四三〇ノ一〇

匂宮への返事 ③ 四九六ノ一

心細き宇治の住居 ③ 五〇五ノ八

薰の戀を斥く ③ 五二九ノ二一

中君に薰に嫁せん

事を勸む ③ 五三九ノ二一

逃れて薰に逢はず ③ 五四六ノ五

憂愁 ③ 五八七ノ七

病氣 ③ 五九四ノ一

憂愁 ③ 五九六ノ六

病篤し ③ 六〇一ノ三

出家の望 ③ 六〇八ノ三

逝去 ③ 六〇九ノ二

○大原野行幸 ③ 三五ノ六

○近江君

源氏其他の人々の

噂に上る ③ 二六九ノ一

容姿、舉動 ③ 二八六ノ五

浮躁 ③ 二八七ノ九

粗野 ③ 二九二ノ八

弘徽殿女御に文を

贈る ③ 二九三ノ五

尙侍を望みて嘲弄

せらる ③ 三五三ノ三

夕霧を戀ひて歌を

啄みかく ③ 四三〇ノ九

浮躁 ③ 四二一ノ四

○落葉宮

柏木に嫁す ③ 五七ノ五

柏木との別を悲む ③ 一一三ノ二

柏木との死別の悲

歎 ③ 一四三ノ八

小野の山莊に移る ③ 二〇五ノ一

夕霧の戀を聞く ③ 二〇九ノ二

夕霧の仕打を怨む ③ 二二三ノ五

痛からぬ腹を探ら

るゝ煩悶 ③ 二二八ノ一

悲歎 ③ 二四七ノ二

一條邸に歸る ③ 二六三ノ三

夕霧を拒む ③ 二六八ノ八

六條院に移る ③ 二四五ノ五

○落葉宮母御息所

○宇治宮

寂しき生活

③ 四七ノ一

二女を育む

③ 四八ノ三

志想高尙

③ 四八ノ九

やもめ暮し

③ 四三ノ四

二女に琵琶琴を教

③ 四二ノ六

ふ

沈著

③ 四二ノ八

經歷

③ 四三ノ五

本性

③ 四三ノ五

宇治の山莊に移る

③ 四三ノ六

宇治の阿闍梨に親

③ 四三ノ三

む

謹慎

③ 四二ノ七

姫君達の處置を憂

③ 四二ノ九

ふ

姫君達を薫に託す

③ 四四ノ一

山籠せんとて姫君

を訓誡す

③ 四八ノ七

逝去

③ 四九ノ三

薫の觀たる大君

③ 五二ノ二

一周忌の用意

③ 五二ノ一

深慮

③ 五七ノ三

○空蟬

素姓

① 七五ノ七

源氏を避く

① 八七ノ九

容儀

① 九六ノ一

再び源氏を避く

① 一〇〇ノ五

源氏の觀たる空蟬

① 一九ノ四

源氏との音信

① 二六ノ二

夫と共に伊豫に下

① 一六ノ三

る

源氏の觀たる空蟬

① 二五ノ六

夫に隨ひて上京す

① 六三ノ一

夫を喪ひて出家す

① 六八ノ二

源氏の訪問

② 二四ノ三

○産養(ウブヤシナヒ)

④ 一二ノ三

○馬頭(ウマノカミ)

女子論

① 三九ノ五

主婦論

① 四一ノ九

思慮過ぐる女の話

① 四九ノ二

嫉妬深き女の話

① 四九ノ一〇

浮氣女の話

① 五六ノ一

女子論

① 六八ノ八

エ、エ

○繪合

① 六四ノ一

同

○繪物語

② 六四ノ八

オ、ヲ

② 二五ノ四

煩悶 四 二六ノ四

自殺を企つ 四 二六九ノ七

蕭の觀たる浮舟 四 二七ノ二

侍女等の憂慮 四 二七八ノ三

死を決して文を燒 四 二八五ノ五

自殺の念愈切なり 四 二九三ノ一

死後の宇治邸の周 四 二九七ノ一

章 四 二九七ノ一

横川僧部に救はる 四 三六七ノ四

蘇生 四 三七七ノ六

素姓を隠す 四 三八二ノ八

中將に挑まる 四 四〇五ノ九

感懐 四 四二〇ノ七

出家 四 四二二ノ七

蕭の噂を聞く 四 四三三ノ二

蕭の使弟小君に逢 四 四三三ノ二

はす 四 四四四ノ二

○浮舟母 四 四四四ノ二

浮舟をかしづく 四 一三八ノ四

少將を浮舟の髻に 四 一三九ノ三

せんとす 四 一五二ノ三

憂悶 四 一六〇ノ五

匂宮を陳見す 四 一六〇ノ五

中君に浮舟の處置 四 一六四ノ六

を謀る 四 一六七ノ二

蕭を陳見す 四 一九一ノ八

少將に歌を贈る 四 一九二ノ三

浮舟をもてあます 四 一九四ノ五

浮舟を慰む 四 一九五ノ八

浮舟を訪ふ 四 二六六ノ五

浮舟に文を贈る 四 二九四ノ三

悲歎 四 三〇四ノ二

○右近(夕顔侍女)

夕顔に供して河原 四 一三三ノ八

院に到る 四 一四四ノ九

二條院に到る 四 一五九ノ一

源氏に夕顔の素姓 四 一六六ノ二

を語る 四 一六九ノ一

玉鬘と邂逅す 四 一八二ノ七

源氏に玉鬘の事を 四 一八二ノ七

告ぐ 四 一八二ノ七

○右近(浮舟侍女)

浮舟の祕密を心配 四 二七八ノ三

す 四 二九八ノ八

浮舟の死を悲む 四 三八二ノ二

匂宮に招かる 四 三八二ノ二

蕭に浮舟の祕密を 四 三三三ノ三

○右大臣(二條太政大臣を見よ)

源氏四十の賀に祈

禱を行はしむ

② 五四九ノ五

源氏に出家の望を

語る

③ 二〇〇ノ六

源氏を慰問す

③ 三〇九ノ一〇

○權齋院

源氏と文の贈答

① 三五七ノ三

齋院になる

① 三九七ノ三

源氏の戀を拒む

② 六六ノ四

源氏の評

② 八四ノ三

源氏の觀たる權齋

院

③ 七〇ノ一〇

○字つくる式

○雨夜の品定

品定

① 三三ノ六

頭中將の女子論

① 三七ノ五

頭中將の女子三等

説

左馬頭の女子論

① 三八ノ五

思慮過ぐる女の話

① 三九ノ五

嫉妬深き女の話

① 四四ノ二

浮氣女の話

① 四九ノ二〇

内氣なる女の話

① 五五ノ一

藤式部丞の實驗談

① 六〇ノ三

馬頭の結論

① 六四ノ六

○合せ香

イ、キ

○韻塞の遊び

① 六八ノ八

○伊豫介―上京

② 四二五ノ三

ウ

○浮舟

素姓

① 四二九ノ二

宇治に宿す

① 二一九ノ二〇

二條院に預けらる

④ 一五六ノ五

匂宮に迫らる

④ 一七五ノ二

乳母に慰めらる

④ 一八二ノ七

中君に慰めらる

④ 一八三ノ八

柔和

④ 一八五ノ九

三條の別宅に隠さ

る

三條の侘住居

④ 一八八ノ六

宇治にて薫の世話

を受く

羞恥

④ 一九五ノ八

謀られて匂宮に逢

ふ

異性に對する性質

④ 二〇五ノ八

同

④ 二二〇ノ七

薄志

④ 二二〇ノ五

匂宮に連れ出さる

④ 二三〇ノ七

同

④ 二三七ノ六

同

④ 二四七ノ二

同

④ 二五三ノ一

紫上との仲合

① 五〇ノ九

謙遜

② 五〇ノ九

父入道の消息

② 五三ノ二

姫君に入道の文を

示す

② 五七ノ三

住吉詣

③ 一七ノ一

女三宮方にて音楽

③ 二八ノ二〇

容姿

③ 三七ノ五

源氏の觀たる明石

上

③ 五ノ九

紫上の觀たる明石

上

③ 五ノ二二

源氏の訪問

③ 三三ノ一〇

○明石入道

素姓、人物

① 一七ノ二二

本性

① 一七ノ九

娘を源氏に奉らん

とす

氣位

① 四九ノ三

源氏を明石に迎ふ

① 四九ノ六

娘を奉らんと焦慮

① 五二ノ四

す

① 五七ノ五

氣位

① 五〇ノ二

大堰の邸を修理す

② 二ノ三

隱遁、京への文

② 五六ノ五

○明石姫君

五十日の祝

① 五六ノ八

紫上の養女となる

② 三ノ五

明石上と歌の贈答

② 二〇三ノ五

装著の式

② 四三ノ四

入内

② 四六三ノ一

懐胎、六條院へ退出

② 五三九ノ七

産期近づく

② 五五二ノ二

祖母より昔話を聞

く

自省

② 五五四ノ九

女三宮方にて音楽

③ 五五ノ八

容姿

③ 二八ノ二〇

紫上の病にて二條

③ 三六ノ六

院に下る

③ 二九五ノ二

宮の君を引取る

④ 三五ノ九

○秋好中宮

入内

① 六三ノ一

冷泉帝の觀たる秋

好

好

① 六六ノ六

沈著

① 六七ノ六

春秋の優劣を語る

② 五八ノ七

中宮となる

② 一〇三ノ一

季の御讀經をほじ

む

む

② 三六ノ四

源氏の評

③ 三五ノ二

# 源氏物語 總索引

ア

○葵上

- 源氏に嫁す ○ 三〇ノ三
- 源氏との仲疎し ○ 一四ノ二
- 氣位 ○ 一五ノ九
- 源氏の觀たる葵上 ○ 二五ノ一
- 氣位 ○ 二八ノ二
- 同 ○ 二八ノ七
- 本性 ○ 三三ノ六
- 六條御息所との車 ○ 三三ノ五
- 争ひ ○ 三三ノ五
- 貫目 ○ 三八ノ二
- 六條御息所の靈に ○ 三三ノ四
- 懺さる ○ 三三ノ四

○明石尼君

- 夕霧を生む ○ 三八ノ七
- 逝去 ○ 三四ノ七
- 源氏の觀たる葵上 ○ 三〇ノ四
- 明石姫君に舊事を語る ○ 五三ノ三
- 住吉詣 ○ 一七ノ一
- 明石上
- 素姓 ○ 一七ノ二
- 本性 ○ 四九ノ三
- 源氏と文の贈答 ○ 五六ノ九
- 自重 ○ 五三ノ一
- 深慮 ○ 五八ノ五
- 自重 ○ 五九ノ四
- 同 ○ 五三ノ三
- 源氏に逢ふ ○ 五五ノ三
- 自重 ○ 五五ノ一〇

源氏の觀たる明石上  
源氏との別れを悲む

- 明石姫君を生む ○ 五四ノ六
- 住吉參詣 ○ 五八ノ八
- 深慮 ○ 五七ノ三
- 大堰の邸に移る ○ 五ノ七
- 明石姫を紫上の養女とす ○ 二七ノ一
- 自重 ○ 四一ノ五
- 源氏の評 ○ 八五ノ八
- 明石姫と歌の贈答 ○ 二〇三ノ五
- 源氏の訪問 ○ 二〇七ノ六
- 姫君入内につきて ○ 四六三ノ一
- 宮中に入る ○ 四六三ノ一
- 紫上との初對面 ○ 四六四ノ七



# 總 索 引

一・二・三・四の四卷に涉り、主要の事物、人名、地名、名文、佳句、消息、和歌等を採り、發音に従ひて五十音順に排列す。但人物中の細目は主としてその人の一生の徑路に關するを以て、特に頁順の排列に依れり。



○常陸宮

末摘花  
源氏

○三位中將某

夕顔  
頭中將 源氏

玉鬘

○太宰大貳某

五節君  
源氏

○大臣某

麗景殿女御  
桐壺院  
花散里  
源氏

○左大臣某

髻黑

眞木柱  
(式部卿宮女)

盤兵部卿宮  
紅梅

冷泉院女御  
(玉璽)

承香殿女御  
今上

朱雀院

○大臣某

明石入道

明石上  
(中務卿宮孫女)

源氏

按察大納言

桐壺更衣

源氏

桐壺院

紫上母

式部卿宮

○大臣某

六條御息所

前東宮  
源氏

○右衛門督某

空蟬

軒端萩

伊豫介  
源氏

藏人少將  
源氏

小君

○桐壺ノ前ノ帝 式部卿宮 髻黒ノ先妻

藤壺 (某后) 桐壺院 源氏 紫上 (按察大納言女) 源氏

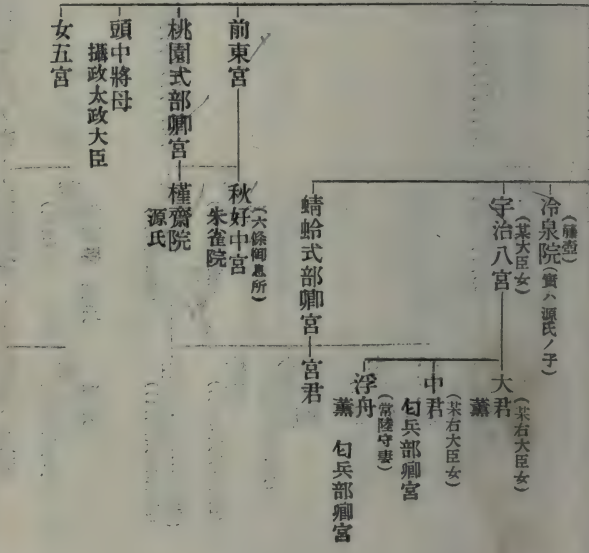
○攝政太政大臣 頭中將 (太上天皇妹) 柏木 (二條太政大臣四君) (薰)

葵上 (太上天皇妹) 源氏 紅梅 (二條太政大臣四君)

雲井雁 (按察大納言妻) 夕霧 玉鬘 (夕顔) 髻黒 近江君

○二條太政大臣 弘徽殿太后 朱雀院

朧月夜 朱雀院 源氏



○桐壺院

朱雀院 (弘徽殿太后)

今上 (攝黑妹)

東宮 (明石中宮)

落葉宮 (某更衣)

勾兵部卿宮 (明石中宮)

夕霧

女三宮 (先帝源氏宮)

女一宮 (明石中宮)

源氏 柏木

女二宮 (藤壺女御)

源氏 (桐壺更衣)

夕霧 (葵上)

東宮女御 (雲井冊)

冷泉院 (女三宮)

六君 (惟光女)

薰 (實ハ柏木ノ子)

明石中宮 (明石上)

今上

螢兵部卿宮

勾兵部卿宮

## 略系圖

この系圖は、編中の重なる人々の親族關係を明らかにして讀者に便せんことを目的としたるもの故、重要ならざる人物は省きて載せず。又重要なる人物にても、その關係の極めて簡單なるものは、亦省きて載せず。

舊き注釋書には藤壺女御を後に薄雲女院と呼び、頭中將を後に致仕大臣と名け、系圖にも後の呼名を擧げたれど、今は何れもはじめより呼びなれたる名稱を用ひたり。人名の右傍括弧中に記したるは母の名にして、婦人の名の左傍に記したるは關係ある男の重なるもの名なり。

予が本書の注譯に筆を執りそめしは昨大正二年の一月十六日にして、稿を終へしは今年の六月廿五日なり。この間凡一年有半の歲月をば經たれど、素より公務の餘暇の夜なべ仕事、出來ばえのはか／＼しからぬは我ながらもどかし。他日折もあらば修訂を加へて少しにても完全に近づかしめんことを力むべし。本文の異同校讐につきては羽倉信一氏の手を借れること多く、校正につきては椿強祐氏を頼はしたり。稿を了ふるに臨み、こゝに記して二氏の勞を謝す。

大正三年七月

武笠

三

- (一) 浮舟にいふ詞
- (二) 浮舟に取次げども
- (三) 此處は横川などの様に非常な山奥でもなければ「雲」は「雲」の誤なるべし
- (四) 又御出なさる事も出来るのであらう
- (五) 小君の心
- (六) 浮舟の
- (七) 不満足ながら
- (八) 鬮が
- (九) 婿があかずにして小君が歸り來たる故
- (一〇) 誰か浮舟を隠して小野へ置いてあるのでは無いかと
- (一一) 自分が前に宇治に捨て置きし事もある故其様な推量もされる

せ給へるしるしに、何事なにごとをかきこは聞えさせむとすらむ。唯ただひと一言ひとことを宣のたまはせよかし」な  
 ど言いへば、妹尾いづ「けに」など言いひ、斯かくなむと移うつし語かたれども、物ものも宣のたまはねば、かひな  
 くて、妹尾いづ「唯ただ、かく覺束おぼつかなき御有様みありさまを聞えさせ給ふべきなめり。雲くもの遙はるかに隔へだたらぬ  
 程ほどにも侍はべるめるを、山深やまふかくとも、またも必かならず立たち寄よらせ給ひなむかし」と言いへば、  
 漫まに居暮みくらさむも怪あやしかるべければ、歸かへりなむとす。人知ひとしれすゆかしき御有様みありさまをも  
 得見えみずなりぬるを、覺束おぼつかなく口惜くちをしくて、心こころゆかずながら參まゐりぬ。  
 いつしかと待まちおはするに、斯かくたどくしくてかへり來きたれば、すさまじくな  
 かなかなりと、思おぼすこと様々さまざまにて、人ひとの隠かくしするたるにやあらむと、わが御心みこころの  
 思おもひ寄よらぬ限くまなく、落おし置おき給たまへりしならひに、とぞ。  
 (二二)

源氏物語終



(一) 譯がわからぬ

(二) 分つて来る事もあるべし

(三) 此御文は持ち歸りて下され、小君にいふ詞

(四) 其様な餘りひどの御挨拶では側のお我々迄が驚へ申譯がな

(五) 浮舟が

(六) 妹尼が小君に

(七) 浮舟は

(八) 常のからだに見える時はなく

(九) 尼になられたるを

(一〇) 驚のわざ／＼尋ねたるをらふ

(一一) 恐縮に  
(一二) 何となく落附かぬ心持にて  
(一三) 此様な事で歸つてはわざ／＼御使に來た驗として驚に申上げる詞がなし

のこと思ひ出づれど、更に覺ゆる事なく、怪しう如何なりける夢にかとのみ、心

も得ずなむ。少し靜まりてや、この御文なども見知らるゝ事もあらむ。今日は猶

持て參り給ひね。所違にもあらむに、いとかたはらいたかるべし」とて、廣げな

がら、尼君にさしやり給へれば、妹尼「いと見苦しき御事かな。餘り怪しからぬは、

見奉る人も罪さり所なかるべし」など言ひ騒ぐも、いとうたて聞きにくゝ覺ゆれ

ば、顔も引き入れて臥し給へり。主人ぞ、この君に物語少し聞えて、妹尼「物怪に

やおはすらむ、例の様に見え給ふ折なく、悩みわたり給ひて、御容貌も異になり

給へるを、尋ね聞え給ふ人あらばいと煩はしかるべき御事と、見奉り歎き侍りし

も著く、斯くいと哀に心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいと辱く思ひ侍

る。日頃も心地うちはへ惱ませ給ふめるを、いとど斯かる事どもに思し亂るゝに

や、常より物覺えさせ給はぬ様にてなむ」と聞ゆ。所につけてをかしき響應など

したれど、幼き心地は、そこはかたなくあわてたる心地して、小君「わざと奉れさ

(一一)

(一二)

(一三)



(一)僧都の顔に免じて其方の行爲を咎めず

(二)我ながら自分の餘りおとなし過ぎるに愛想をつかす

(三)佛道の師としてこそ頼むべき僧都を飛んでもない方の案内に頼んでつまらぬ物思をする事哉

(四)小君

(五)我方にては亡くした其方の形見と思ひて不観をかけて居るものぢや

(六)つぶさに

(七)人達などとごまかして逃れる事も出来ねど

(八)變り果てたる我姿を

(九)藥に

(一〇)妹尼等が

いと有り難くをかしと思ふべし。

鶯さくら更さらに聞きえむ方かたなく、様さま々に罪つみ重おもき御心みこころをば、僧都そうづにおもひ許ゆるしきこえて、今いま

はいかで、あさましかりし世よの夢語ゆめがたりをだにと、急いそがるよ心こころの、我われながらもど

かしきになむ。まして人目ひとめは如何いかに。

と、書かきもやり給たまはず。

鶯法のりの師しと尋たづぬる道みちをしるべにておもはぬ山やまにふみまどふかな

此人このひとは、見みや忘れ給わすひぬらむ。こよには行方ゆくへなき御形見おんかたみに見るものにてなむ。

など、いと細こまやかなり。斯かくつぶくと書かき給たまへる様さまの、紛まぎらはさむ方かたなきに、さ

りとて、その人ひとにもあらぬ様さまを、思おもひの外ほかに見みつけられ聞きえたらむ程ほどの、はしたな

さなどを思おもひ亂みだれて、いとど晴はれ々々しからぬ心こころは、言いひ遣やるべき方かたもなし。流石さすがに

打泣うちなきてひれ臥ふし給たまへば、いと世よづかぬ御有みあり様さまかなと見煩みわづひぬ。妹尼いかにいかど聞きえ

む」など責せめられて、浮舟うきふね「心地こころちのかき亂みだる様やうにし侍はべる程ほどためらひて、今いま聞きえむ。昔むかし

(一) 浮舟の居らるゝ事は

(二) それよ

(三) 浮舟

(四) そばの人即ち妹尼等

(五) 事情を話して下され

(六) 斯る使にさくられたる

は其丈の仔細がありてな

るべし

(七) わざと覺束ない風を

見せる様な人には

(八) 浮舟にいふ詞

(九) いやな仕向をなさる

な

(一〇) 浮舟と著しく分り

たれば

(一一) 文を

(一二) 浮舟の隔てがまし

き仕打をつらく思ひてわ

ざと歸を急ぐ

(一三) 普通りの藪の手で

(一四) 餘り過ぎたる程

(一五) 直に物に感心する

出過者、少將尼左衛門尼

などをいふなるべし

で奉らむ。僧都の御しるべには確なるを、かく覺束なく侍るこそ」と、伏目にて

いへば、妹尼「そよや。あなうつくし」など言ひて、妹尼「御文御覽すべき人は、こよ

に物せさせ給ふめり。見證の人なむ、如何なる事にかと、心得がたく侍るを、な

ほ宣はせよ。幼き御程なれど、斯かる御しるべに頼み聞え給ふ様もあらむ」など

言へど、小君「思し隔て、おほくしくもてなさせ給ふには、何事をか聞え侍らむ。

疎く思しなりにければ、聞ゆべき事も侍らず。唯この御文を、人傳ならで奉れ

とて侍りつる、いかで奉らむ」と言へば、妹尼いと理なり。猶いと斯くうたて

なおはせそ。流石にむくつけき御心にこそ」と聞え動かして、几帳のもとに押し

寄せ奉りたれば、我にもあらで居給へるけはひ、他人には似ぬ心地すれば、其

處もとに寄りて奉りつ。小君「御返疾く賜はりて参りなむ」と、斯く疎々しきを心

憂しと思ひて急ぐ。尼君御文ひき解きて見せ奉る。ありしなからの御手にて、

紙の香など、例の世づかぬまでしみたり。仄に見て、例のものめでのさし過人、

- (一) 浮舟の母
- (二) どうかして浮舟を出世させたと深く心配せしが
- (三) まだ母は生きて居られるかしらと
- (四) 子供の時分に見し
- (五) 小君にも私が生きて居るとは知らせずして
- (六) 母
- (七) 黨
- (八) 是非うまく人違なりし様に取りつくさひて事情を隠して下され
- (九) 僧は一體真正直なものなれど此僧都は特別に物を隔す事のない人故
- (一〇) ありたけ話して仕舞ひしに相違なし
- (一一) 相手の黨も身分の輕き人でもなし、隔す事はらよ、出來に合し
- (一二) 浮舟が此場合になりても隠れんとするは
- (一三) 小君を鑑内へ
- (一四) 浮舟の居る事は聞らて居れど
- (一五) もう一通の御手紙を浮舟へ御渡し申したし

でらるゝ事ある心地せし。その後、とさまかうざまに思ひ續くれど、さらにはかばかしくも覺えぬに、唯一人物し給ひし人の、いがでと疎ならず思ひたしめりしを、まだや世におはすらむと、そればかりなむ心に離れず悲しき折々侍るに、今日見れば、この童の顔は、小くて見し心地するにも、いと忍び難けれど、今更に斯かる人にもありとは知られで止みなむとなむ思ひ侍る。かの人若し世に物し給はば、それ一人になむ對面せまほしく思ひ侍る。この僧都の宣へる人などには、更にありと知られ奉らじとこそ思ひ侍れ。構へて僻事なりけりと聞えなして、もてかくし給へ」と宣へば、妹尾いと難い事かな。僧都の御心は、聖といふ中に、あまり限なく物し給へば、まさに残いては聞え給ひてむや。後に隱あらじ。斜に輕々しき御程にもおはしまさず」など、言ひ騒ぎて、人々世に知らず心強くおはします事ぞ」と、皆言ひ合せて、母屋の際に几帳たてて入れたり。この子も、さは聞きつれど、幼ければ、ふと言ひ寄らむもつよましけれど、小君「まだ侍る御文いか

(一)相愛せし

(二)浮舟の心、他の人々の身の上は

(三)小君の様

(四)浮舟に似て居る様にも思はれる故

(五)浮舟の心

(六)小君に

(七)僧都に見つけられし以來夢中で居し時の事

(八)其様な事のありし以來正氣がなくなり  
(九)元と違ひたる様に  
(一〇)我が關係ある處の噂をして居るのかと

夢 浮橋

憎かりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、少しおよ  
 ずけし儘に、互に思へりし童心を、思ひ出づるにも夢の様なり。まづ母の有様  
 はと問はまほしく、こと人々の上は、自らやうく聞けど、親のおはすらむ様  
 は、灰にもえ聞かずかすと、なか／＼これを見るに、いと悲しくて、ほろ／＼と  
 泣かれぬ。いとをかしけにて、少しうち覺え給へる心地もすれば、妹尾御兄弟に  
 (三)こそおはすめれ。聞えまほしく思す事もあらむ。内に入れ奉らむと言ふを、何  
 (四)か、今は世にあるものとも思はざらむに、怪しき様に面變してふと見えむも恥か  
 (五)し、と思へば、とばかりためらひて、浮舟實に隔ありとも思しなすらむが苦し  
 (六)に、物も言はれでなむ。あさましかりけむ有様は、珍らかなる事と見給ひてけむ  
 (七)を、さて現心もうせ、魂など言ふらむものも、あらぬ様になりけるにやあら  
 (八)む、如何にもく、過ぎにし方の事を、我ながら更にえ思ひ出でぬに、紀伊守と  
 (九)かありし人の、世の物語すめりし中になむ、見しあたりの事にやと、灰に思ひ出  
 (一〇)

(一) 浮舟は

(二) 此場合に無暗に尻込  
みばかりして居るのは

(三) 繁

(四) 其様な譯では出家し  
て却つて佛の罰を重ねる  
様な事情を聞き驚きた  
り

(五) 薫と元々通りの中に  
なりて

(六) たとへ還俗しても其  
功德は失せぬものなれば  
其を力にし給へ

(七) はつきりと浮舟の祕  
密を此文に書きあらはし  
てある譯なれど

(八) 小君は  
(九) 斯く驟顯すべき時に  
なりても

(一〇) 浮舟が  
(一一) 自殺を覺悟せし夕  
暮にも

(一二) 一所に暮した時分  
は此子は性悪で憎い程腕  
白で、浮舟の心

いよく奥の方に引き入られて、人に顔も見合せ給はず、妹尾「常も誇りかならず

ものし給ふ人がらなれど、いとうたて心憂し」など言ひて、僧都の御文見れば、

僧都今朝こゝに大將殿の物し給ひて、御有様尋ね問ひ給ふに、初よりありし様委

しく聞え侍りぬ。御志深かりける御中を背き給ひて、あやしき山賤の中に、

出家し給へる事。かへりては、佛の責添ふべき事なるをなむ、承り驚き

侍る。如何はせむ。もとの御契あやまち給はで、愛執の罪を晴るかし聞え給

ひて、一日の出家の功德は、量なきものなれば、猶頼ませ給へとなむ。事毎

には自ら侍ひて申し侍らむ。かつくこの小君聞え給ひてむ。

と書いたり。紛ふべくもあらず書き明らめ給へれど、他人は心も得ず。妹尾「この君

は誰にかおはすらむ。猶いと心憂し。今さへ斯く強ちに隔てさせ給ふ」と責めら

れて、少し外様に向きて見給へば、この子は、今はと世を思ひなりし夕暮にも、

いと戀しく思ひし人なりけり。同じ所にて見し程は、いとさがなく生憎に驕りて

(一) 其方へ参るべし

(二) 浮舟方へ持ち來りて

(三) 我身の上が評判に上りたるにやと

(四) 今迄身分を隠し居たりと妹尼等に恨まれるのを

(五) 身の上を明し給へ

(六) 僧都の御手紙を持ちて

(七) 斯く露外に置かるゝ様は他人がましく私を御あしらひなさる事はない筈と

(八) 妹尼

(九) 僧都の

(一〇) 人違ならんなどと  
(一一) 浮舟が

ぢきなく、却りて臆し侍りてなむと、姫君に聞え給へ。自ら聞えさすべき事も多かれど、今日明日過して侍ふべし。

と書き給へり。これは何事ぞと尼君驚きて、此方へもて渡りて見せ奉り給へば、

面うち赤みて、物の聞あるにやと苦しう、物隠しけると恨みられむを思ひ續くる

に、答へむ方なくて居給へるに、妹尼猶宣はせよ。心憂く思し隔つる事」と、いみ

じく恨みて、事の心を知らねば、あわたどしきまで思ひ居たる程に、小君山より、

僧都の御消息にて、参りたる人なむある」と言ひ入れたり。怪しけれど、妹尼「これ

こそは、然は確なる御消息ならめ」とて、「此方に」と言はせられたれば、いと清けにし

めやかなる童の、えならず装束きたるぞ、歩み來たる。圓座さし出でたれば、簾

のもとについ居て、小君かやうにては侍ふまじくこそは、僧都は宣ひしか」と言

へば、尼君ぞ答へなどし給ふ。文取り入れて見れば、「入道の姫君の御方に、山よ

り」とて名書き給へり。あらじなどあらがふべき様もなし。いとはしたなく覺えて、



(一)小君の送りとしてつりて遣はし

(二)浮舟の處へ

(三)小君を

(四)浮舟

(五)生きて居るのぢや

(六)前から話すな

(七)其方の母の歎が氣の毒なればこそ

(八)浮舟の

(九)はい

(一〇)小野

(一一)薫から事情を聞いて見ると浮舟を尼にしたのが甚だ極り悪く、なまじよい事をした積りなのが却つて悪い事をした様に思はれて氣がひけると

り給ひて、またの日殊更にぞ出し立て給ふ。睦しく思す人の事々しからぬ二三人

ばかり送りにて、昔も常に遣はしよ隨身添へ給へり。人聞かぬ間に呼び寄せ給ひ

て、萬あこが亡せにし妹の顔は覺ゆや。今は世になき人と思ひ果てにしを、いと

確にこそものし給ふなれ。疎き人には聞かせじと思ふを、往きて尋ねよ。母には

まだしきに言ふな。なか／＼驚き騒がむ程に、知るまじき人も知りなむ。その親

の御思のいとほしさにこそ、斯くも尋ぬれ」と、まだきにいと口がため給ふを、幼

き心地にも、兄弟はおほかれど、この君の容貌をば、似るものなしと思ひしみた

りに、亡せ給ひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに、斯く宣へば、いと

嬉しきにも涙の落つるを、恥かしと思ひて、紛らはしに、小君をよ」と荒らかに聞

え居たり。

彼處にはまだつとめて、僧都の御許より、

僧都よべ大將殿の御使にて、小君やまうで給へりし。事のこよろ承りしに、あ



(一)螢は宇治の名物なれば也

(二)浮舟が

(三)僧都へ海草の干したるを贈りたる時の文の返事に  
 (四)丁度よい處へ貰つたといふ返事であつた  
 (五)浮舟の心

(六)宇治へ薫の來し時耳立ちて聞えし隨身の聲も  
 (七)浮舟の心

●浮舟の異父弟小君、薫の使として浮舟を訪ふ、浮舟避けて逢はず  
 (八)薫は小君を直に小野へやらんと

小野にはいと深く繁りたる青葉の山に向ひて、紛るゝことなく、遣水の螢ばかりを、昔覺ゆる慰にて、ながめ居給へるに、例の遙に見やらるゝ谷の軒端より、前心ことに追ひて、いと多う燈したる火の、のどかならぬ光を見るとて、尼君達も端に出で居たり。妹尾誰がおはしますにかあらむ。御前などいと多くこそ見ゆれ。畫彼方にひきほし奉れたりつる返事に、大將殿おはしまして、御饗應の事俄にするを、いとよき折とこそありつれ」尼達大將殿とは、この女二の宮の御夫にや  
 (四) おはしつらむ」など言ふも、いとこの世遠く、田舎びにたりや。誠に然にやあらむ、時々かよる山路分けおはせし時、いとしかるかりし隨身の聲も、うちつけに交りて聞ゆ。月日の過ぎ行くまゝに、昔の事かく思ひ忘れぬも、今は何にすべき事ぞ、と心憂ければ、阿彌陀佛に思ひ紛らはして、いとど物も言はで居たり。横川に通ふ人のみなむ、このわたりには近き便なりける  
 (五) かの殿は、この子をやがて遣らむと思しけれど、人目多くて便なければ、殿に歸  
 (八)

(一)佛の戒律は知る限り保たんと思ひて  
(二)浮舟を尋ねる位の事で戒律を破らん事は

(三)浮舟の母の嘆が氣の毒故浮舟の實際の事情をよく聞取りて安心したしと思ふのみ  
(四)佛道に志深かりし心持を

(五)小野へ一晩泊るのも、蕉の心  
(六)確と案内もして置かず突然に尋ねて行くも不都合ならん  
(七)此小君に文を託して豫め蕉の尋ね行くべき事を白はせて置いてくれ  
(八)僧都が  
(九)小君にいふ詞  
(一〇)浮舟の關係につきて云ふなるべし  
(一一)僧都の詞の意味が分ちねど

事につけてこそ然も侍らめ、さらでは佛の制し給ふ方の事を、僅にも聞き及ばむ事は、いかで過たじと慎みて、心のうちは聖に劣り侍らぬものを、ましていとはかなき事につけてしも、重き罪得べき事は、などてか思ひ給へむ。更にあるまじき事に侍る。疑ひ思すまじ。たゞいとほしき親の思などを、聞きあきらめ侍らむばかりなむ、嬉しう心やすかるべきなど、昔より深かりし方の心おきて語り給ふ。僧都も、けにと領きて、僧都「いと尊き事」など聞え給ふ程に、日も暮れぬれば、中宿もいと善かりぬべけれど、うはの空にて物したらむこそ、猶便なかるべけれと思ひ煩ひて歸り給ふに、この兄の童を、僧都目とどめて褒め給ふ。蕉これに附けて先づほのめかし給へ」と聞え給へば、文書きて取らせ給ふ。僧都「時々は山におはして遊び給へよ。漫なる様には思すまじき故もありけり」と、打語らひ給ふ。この子は心も得ねど、文取りて御供に出づ。坂本になれば、御前の人々少し立ち散れて、蕉「忍びやかにを」など宣ふ。

- (一)小君
- (二)浮舟の近親なり
- (三)此兒をまづ使に浮舟の處へやるべし
- (四)信都が一筆書いて渡してくれ
- (五)其文には誰といふ事は書かず
- (六)浮舟に通知してくれ
- (七)此御案内をしたらば
- (八)申上げたり
- (九)私が案内せずとも薫が自分で出かけて勝手になされて仔細なかるべし
- (一〇)自分が尋ねて行つたら浮舟を墜落せしむるならんとの御推量け痛み入る
- (一一)自分は今迄僧にならざに居るが不思議な位の男なり
- (一二)出家の願
- (一三)母女三
- (一四)薫一人を便にして居られるのが
- (一五)浮世に離れがたくして居る中に
- (一六)身の持方も
- (一七)のつびきならぬ事も、女二宮の筈になりたる事杯をいふ
- (一八)據なき場合には妻をも持つが

つけに焦られむも、様あしければ、さらばとて歸り給ふ。かの兄の童(二)、御供に率

ておはしたりけり、こと兄弟どもよりは、容貌も清けなるを、呼び出で給ひて、

驚(三)これなむその人の近きゆかりなるを、これをつづくものせむ。御文一行賜へ。

その人とはなくて、唯尋ね聞ゆる人なむあるとばかりの心を、知らせ給へ」と

宣へば、僧(七)某このしるべにて、必ず罪得侍りなむ。事の有様は、委しくとり申

しつ。今は唯御自ら立寄せ給ひて、あるべからむ事は、物せさせ給はむに、何

の咎か侍らむ」と申し給へば、打笑ひて、驚(一〇)罪得ぬべきしるべと、思ひなし給ふら

むこそ恥かしけれ。ことには、俗の形にて今まで過すなむいと怪しき。いはけな

かりしより、思ふ志深く侍るを、三條の宮の心細けにて、頼もしけなき身ひと

つをよすがに思したるが、さががたき絆に覺え侍りて、かよづらひ侍りつる程に、

自ら位などいふ事も高くなり、身のおきても心に叶ひ難くなどして、思ひなが

ら過ぎ侍るには、又えさらぬ事も、數のみ添ひつよ過せど、公私に、遁れ難き

夢  
浮  
橋



- (一) 罪ほろぼしに尼になつて居る事故
- (二) 薫自身は思ひ居れど
- (三) 母に知らせたらば
- (四) 母がたづねて行くかも知れぬ
- (五) 迷惑な案内をするとは思ふならんが山を下りて私を其小野まで連れ行き給へ
- (六) 是程に在處を突留めながらうい加減にしては置かれぬ管の女なれば
- (七) 浮舟と
- (八) 薫が哀と思ひ居る様子故
- (九) 男の身てさへ世捨人になつた積でも矢張
- (一〇) 戀愛の情のなくならぬもある
- (一一) 薫を案内した爲に浮舟と薫との情交が元に戻る様では自分は飛だ罪を作る事になると
- (一二) 來月に入りて
- (一三) 薫の心
- (一四) 其でも是非と附麗もなくあせるのも

せにしかば、身を投げたるにやなど、様々に疑多くて、確なる事はえ聞き侍らざりつるになむ。罪輕めて物すなれば、いと善しと心安くなむ、自らは思ひ給へなりぬるを、母なる人なむいみじく戀ひ悲しぶなるを、斯くなむ聞き出でたりと告げ知らせまほしく侍れど、月頃隠させ給ひける本意違ふ様に、物騒がしくや侍らむ。親子の中の思斷えず、悲しびに堪へで、とぶらひ物しなどし侍りなむかしなど宣ひて、さて、薫いと便なきしるべとは思すとも、かの坂本に下り給へ。斯ばかり聞きて斜に思ひ過すべくは侍らざりし人なるを、夢の様なる事どもを、今だに語り合せむとなむ思ひ給ふる」と宣ふ氣色、いと哀と思ひ給へれば、容貌をかへ世を背きにきと覺えたれど、髮鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあるなり、まして女の御身は如何あらむ、いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかなと、味氣なく心亂れぬ。僧都罷り下りむ事、今日明日は障り侍る。月たちての程に、御消息を申させ侍らむ」と申し給ふ。いと心もとなけれど、なほくとうち

(一三)

(一四)

(一)世間話に人にも噂す  
べき筈なりしかど  
(二)評判になつたら浮舟  
が迷惑する事がありさう  
なりとて  
(三)小野に尼になりて居  
るとは既に前から薄々聞  
き居て

(四)頼の心

(五)此様を取亂した様を  
見せてはならぬと  
(六)頼の此様に思ひ居ら  
るゝものを死人も同然な  
尼にして仕舞ひしは失錯  
なりしと思ひて

(七)よい加減な王孫の身  
分であらう

(八)我も此女を格別大切  
に思ひ居し譯にも非ず  
(九)最初からつまらぬ身  
分ではありしかど

事ことの様ようにもあるを、世語よげごにもし侍りぬべかりしかど、聞きこありて煩わづらはしかるべき事

にもこそと、この老人おいびとどものとかく申まうして、この月頃つきころ音無おとなくくて侍りつるになむ」と

申まうし給へば、然さてこそあなれとほの聞ききて、斯かくまでも問とひ出いで給へることなれ

ど、むげに亡なき人ひとと思おもひ果はてにし人を、さは誠まことにあるにこそはと思おもはず程ほど、夢ゆめの心

地ちしてあさましければ、つよみもあへず涙なみだぐまれ給ひぬるを、猶なま僧都そうづの恥はづかしけ

なるに、斯かくまで見みゆべき事ことかは、と思おもひ返かへして、つれなくもてなし給へど、斯か

く思おもひける事ことを、この世よにはなき人ひとと同じ様やうになしたる事ことと、過あやまちしたる心地こころして、

罪深つみふかければ、僧都そうづ「悪わるしき物ものに領りやうぜられ給ひけむも、然さるべき前まへの世よの契ちぎりなり。思おも

ふに高たかき家いへの子こにこそものし給ひけむ。如何いかなる過あやまちにて、斯かくまではふれ給ひ

けむにか」と問とひ申まうし給へば、眞まことなま王家流わかにんまりなどいふべき筋すぢにやありけむ。ことよに

も本もとよりわざと思おもひし事ことにも侍はべらず、物ものはかなくて見みつけそめては侍りしかど、又また

いと斯かくまで落おちあふるべき際きはとは思おもひ給へざりしを、珍めづらかに跡あともなく消きえ失



(一) 事情を推量するに

(二) 亡き娘と同年輩と見ゆる浮舟が

(三) 浮舟を死なせたくなしと深く心配して

(四) 浮舟に取憑き居る魔物が、以下浮舟の詞をまねていふ

(五) 尼になりて後世の勳がしたしなど

(六) 竊の御關係あるべき事とは

へすなむ侍りし。ことの心推し量り思ひ給ふるに、天狗木靈など様のものの、欺

き率て奉りたりけるにやとなむ承りし。助けて京に率て奉りて後も、三月

ばかりは亡き人にてなむ物し給ひけるを、某が妹、故衛門督の北の方にて侍り

しが、尼になりて侍るなむ、一人もちて侍りし女子を失ひて後、月日は多く隔て

侍りしかど、悲しびに堪へず歎き思ひ給へ侍るに、おなじ年のほどと見ゆる人の、

かく容貌いと麗しく清らなるを見出で奉りて、観音の賜へると喜び思ひて、こ

の人徒になし奉らじと惑ひ入られて、泣くくいみじき事どもを申されしか

ば、後になむ、かの坂下にみづから下り侍りて、護身など仕うまつりしに、やう

やう息出でて人となり給へりけれど、猶この領じたりける物の、身に離れぬ心地

なむする、この悪しき物の妨を逃れて、後の世を思はむ、など悲しげに宣ふ事

どもの侍りしかば、法師にては勸も申しつべき事にこそはとて、誠に出家せしめ

奉りてしに侍る。更に知召すべき事とは、いかでか空に覺り侍らむ。珍らしき

(一) 分別して

(二) 病氣

(三) 小聲で浮舟を見附けし事を語りて

(四) 浮舟の方を

(五) 浮舟も

(六) 魂殿は殘宮也、此物語の事不詳

(七) 母尼の老年なるをいふ

(八) 浮舟の

り心得給ひて、伺ひ尋ね給はむに、隠あるべき事にもあらず、なか／＼あらがひ

隠さむにあいなかるべしなど、とばかり思ひ得て、僧都「如何なりける事にか侍り

けむと、この月頃うち／＼に怪しみ思ひ給ふる人の御事にや」とて、僧都「彼處に侍

る尼どもの、初瀬に願侍りて、詣でて歸り侍りける路に、宇治の院といふ所に留

まりて侍りけるに、母の尼の勞氣俄におこりて痛くなむ煩らふと、告げに人のま

うで來たりしかば、まかり向ひたりしに、まづ怪しきことなむ」とさよめきて、

僧都「親の死かへるをばさしおきて、持て扱ひ歎きてなむ侍りし。この人も、亡く

なり給へる様ながら、流石に息は通ひておはしければ、昔物語に、魂殿に置き

たりけむ人の喩を思ひ出でて、さやうなる事にやと珍らしがり侍りて、弟子ば

らの中に驗ある者どもを呼び寄せつゝ、代々に加持せさせなどなむし侍りける。

某は、惜しむべき齡ならねど、母の旅の空にて病おもきを助けて、念佛をも心

亂れさせさせむと、佛を念じ奉り思う給へし程に、その人の有様、委しくも見給

(一)此様な事を言ひ出すは確ならず浮いた事でもあり

(二)其小野の家に我が世話せねばならぬ人が隠れ居るとか聞きしが

(三)質否を突きとめてからどうして居るぞと僧都に打明けて看ねんと思ひ居るうちに

(四)浮舟は

(五)鸞が浮舟を亡くした様に咎をかぶせる人もあつて迷惑する

(六)僧都の心

(七)自分がいくら僧であつても直に尼にして仕舞ひは疎忽なりして

(八)鸞は確に浮舟の居る事聞き居るのであらう、僧都の心  
(九)是程御存知て

にはかぐしき住所も侍らぬうちに、斯くて籠り侍る間は、夜中曉にも、あひと  
 ぶらはむと思ひ給へおきて侍る」など申し給ふ。鸞「そのわたりには、たゞ近き頃ほ  
 ひまで、人多う住み侍りけるを、今はいと幽にこそなり行くめれ」など宣ひて、今  
 少し近う居寄りて、忍びやかに、鸞「いと浮きたる心地もし侍り、又尋ね聞えむに  
 つけては、如何なりける事にかと、心得ず思されぬべきに、かたぐし憚られ侍れ  
 ど、かの山里に、知るべき人の隠るへて侍る様に聞きしを、(二)確にてこそは、如何  
 なる様にてなども、漏し聞えめなど思ひ給ふる程に、御弟子になりて、忌む事な  
 ど授け給ひてけりと聞き侍るは實か。(四)まだ年も若く、親などもありし人なれば、こ  
 こに失ひたる様に、かごとかくる人なむ侍るを」など宣ふ。僧都、然ればよ、た  
 だ人と見えざりし人の様ぞかし、斯くまで宣ふは、軽々しく思されざりける人に  
 こそあめれ、と思ふに、法師と言ひながら、心もなく、忽に容貌をやつしける事  
 と胸つぶれて、答へ聞えむ様思ひ廻さる。(七)確に聞き給へるにこそあめれ、かばか  
(八)  
(九)

夢ゆめの浮うき橋はし

梗

● 黨横川の僧都を訪ひて浮舟の身の上を聞く。 君黨の使として浮舟を訪ふ。 浮舟避けて逢はず。

● 浮舟の異父弟小

- 黨横川の僧都を訪ひて浮舟の身の上を聞く
- (一) 黨が比叡山に
- (二) 僧都を驚が

- (三) 僧都が頼まれて行きしに
- (四) 綱が
- (五) 前よりは懸にして祈禱などを頼みたれば
- (六) 京には母尼の住むべき適官の家もなきのみならず、私が此處に居る間は何時でも見舞ふ事の出來る便宜もあればと思ひて其處に置いてあります

山やまにおはしまして、例れいせさせ給たまふ様に、經佛きやうほつなど供養くやうせさせ給たまふ。またの日は横川かへにおはしたれば、僧都そうづ驚おどろき畏かしこまり聞きえ給たまふ。年頃としころも御祈おんいのりなどにつけ、語かたらひ給たまひけれど、ことにいと親したしき事は無なかりけるを、この度たび一品宮いっほんのみやの御心地おんこちの程ほどに、侍さむらひらひ給たまへるに、勝すぐれ給たまへる驗けんものし給たまひけりと見み給たまひてより、こよなう尊たふさび給たまひて、今少いまそこし深ふかき契ちぎ加くはへ給たまひてければ、重おもしうおはする殿どのの、斯かくわざとおはしたる事ことと、もて騒さわぎ聞きえ給たまふ。御物語おんものがたりなど細こまやかにしておはすれば、御湯漬おんゆづひなど参まゐり給たまふ。少すこし人々ひとびと静しづまりぬるに、黨を小野ののわたりに、知しり給たまへる宿やどりや侍はべる」と問とひ給たまへば、僧都そうづ然しかは侍はべり。いと異こと様さまなる所ところになむ。某なにがしが母ははなる朽尼くちあまの侍はべるを、

京きやう

(一) 浮舟の居處は、薫の

(二) 體裁よく

(三) 薬師の縁日

(四) 薫が常に佛事を營む

故

(五) 薬師に寄進すべきものあるに托して

(六) 比叡山の根本中堂

(七) 浮舟の兄弟なる小君

(八) 浮舟の母等には、以下薫の心

(九) 都合によりての事にすべし

(一〇) 夢の様な再會の場

合にひとしほの哀を添へんとして小君を連れて行くのであらう

(一一) 浮舟である事を突きとめながら、以下薫の心

(一二) 尼等の中に居て

(一三) 通ひ來る男がある

杯といふ事が若し分りたらば

住むらむ山里は何處にかあらむ、如何にして様悪しからず尋ね寄らむ、僧都に逢

ひてこそは、<sup>(二)</sup> 確なる有様も聞き合せなどして、<sup>(三)</sup> ともかくも問ふべかめれ、など、

唯この事を起き臥し思す。月ごとの八日には、必ず尊きわざさせ給へば、<sup>(四)</sup> 薬師

佛に寄せ奉るにもてなし給へる便に、<sup>(五)</sup> 中堂に時々參り給ひけり。それよりやが

て横川におはせむと思して、<sup>(六)</sup> かの兄の童なる率ておはす。その人々には、<sup>(七)</sup> 頓に知

らせじ、<sup>(八)</sup> 有様にぞ隨はむ、と思せど、<sup>(九)</sup> 打見む夢の心地にも、<sup>(一〇)</sup> 哀をも加へむとにや

ありけむ。<sup>(一一)</sup> 流石にその人とは見つけながら、<sup>(一二)</sup> 怪しき様に、<sup>(一三)</sup> 容貌ことなる人の中に

て憂き事を聞きつけたらむこそいみじかるべけれ、と萬に道すがら思し亂れける

とや。<sup>(一四)</sup>

- (一) 浮舟
- (二) 噂をしたる故
- (三) 自分から身校など恐るしき事を思ひ立つ様な事はなきさうな浮舟の性質故
- (四) 噂によれば其様にもありしならんと、魔物に誘はれし事
- (五) 浮舟の噂をする
- (六) 匂に浮舟をとられたる事を
- (七) 浮舟を蕪が探し出したる事を匂が掛きつけたらば
- (八) 蕪を
- (九) 浮舟が生きて居たりといふ事を
- (一〇) 我はよくも覺えて居らぬ
- (一一) 匂が此事を知り居る筈はなし
- (一二) 聞いて見ると何と評し様もなき匂の放埒な了簡故
- (一三) 匂には此事の知れぬ方がよい
- (一四) 匂は女の方にかけて
- (一五) 中宮は頼み深き人故、蕪の心
- (一六) 世間話にても

手

習

し人、世に落ちあふれてある様に、人のまねび侍りしかば、いかでか然る事は侍らむと思ひ給へれど、心とおどろくしう、もて離るゝ事は侍らずやと、思ひわたり侍る人の有様に侍れば、人の語り侍りし様にては、然る様もや侍らむと、似つかはしく思う給へらるゝ」とて、今少し聞え出で給ふ。宮の御事を、いと恥かしけに、流石に恨みたる様には言ひなし給はで、蕪かの事又然なむと聞きつけ給へらば、頑に好きくしくも思されぬべし。更に然てありけりとも、知らず顔にて過し侍りなむ」と啓し給へば、明石「僧都の語りしに、いと物恐しかりし夜の事にて、耳も留めざりし事にこそ。宮はいかでか聞き給はむ。聞えむ方なかりける御心の程かなと聞けば、まして聞きつけ給はむこそいと苦しかるべけれ。かよる筋につけて、いと軽く憂きものにのみ世に知られ給ひぬめれば、心憂くなむ」と宣はす。いと重き御心なれば、必ずしも、打解け世語にても、人の忍びて啓しけむ事を漏させ給はじ、など思す。

四四一

(一) 浮舟が  
 (二) 尼にならせざりしを  
 (三) 本人が是非と懇望し

(四) 僧那が見出したる場  
 所も矢張宇治なり  
 (五) 尋ねて見て實際其人  
 が浮舟ならばあさましか  
 るべし、以下薫の心

(六) わざ、身を餘り拘  
 泥し過ぎる様に人に噂さ  
 れるかも知れぬ  
 (七) 匂宮が浮舟存生の事  
 を知りたれば

(八) 浮舟の折角の道心を  
 も妨ぐるならん  
 (九) 匂宮が既に知つて居な  
 がら、中宮に薫には此事  
 を隠して下されと口止し  
 たる故、中宮が知つては  
 居ながら我には言はざり  
 しならんか

(一〇) 匂宮が猶浮舟に關係  
 するなりば、我は密に同  
 情はしなからず、浮舟はも  
 う死んだものと認めて逢  
 はずに仕舞はん

(一一) 浮舟が生きかへり  
 たる上は將來又冥途で  
 もめぐり合ふ様に自ら再  
 會する機會もあるべし

(一二) 矢張中宮は言はぬ  
 かしちとは思はるれど

じう煩わづらひし程ほどにも、皆人惜みなひとをしみみてせさせざりしを、正身まうじみの本意ほんい深ふかき由よしを言いひてな

りぬる、とこそ侍はべるなりしか」と言いふ。(二)所ところもかはらず、その頃ころの有様ありさまなど思おもひ合あす

るに、違たがふ節ふしなければ、誠まことにそれと尋たづね出いでたらむ、いとあさましき心地こころもすべ

きかな、いかでかは確たしかに聞きくべき、おりたちて尋たづねありかむも、頑かたくなしなどや人言ひとごい

ひなさむ、又またかの宮みやも聞ききつけ給たまへらむには、必かならず思おもし出いでて、思おもひ入いりにけむ

道ちのちも妨さまたげ給たまひてむかし、さて然さな宣のたまひそなど聞きこえ置おき給たまひければにや、我われには、さ

る事ことなむ聞ききしと、さる珍めづらしき事ことを聞きこしなから、宣のたまはせぬにやありけむ、宮みや

もかよづらひ給たまふにては、いみじく哀あはれと思おもひながらも、更さらにやがて失うせにしもの

と、思おもひなしてをやみなむ、現人うつしびとになりて末すまの世よには、黄きなる泉いづみのほとりばかり

を、自おのづから語かたらひ寄よる風かぜのまぎれも有ありなむ、我わが物ものに取返とりかへし見みむの心こころは又またつかは

じ、など思おもひ亂みだれて、猶なほ宣のたまはずやあらむと覺おぼゆれど、御氣色みけしきのゆかしければ、大おほ

宮みやに、さるべき序ついで作り出いでてぞ啓けいし給たまふ。薫かあさましくて失うしな侍はべりぬと思おもう給たまへ

る事ことなむ聞ききしと、さる珍めづらしき事ことを聞きこしなから、宣のたまはせぬにやありけむ、宮みや

- (一) 其方は一々よく聞いて居る事故
- (二) 不都合な點はかくしてあいて
- (三) 中宮さへ
- (四) 人にも物にもよる
- (五) 自分が話しては氣の毒を仔細もある
- (六) 小宰相が其意味をさとりて
- (七) 黨が小宰相の部屋へ
- (八) 僧都の噂を小宰相が
- (九) 以下黨の心
- (一〇) 残らず話して下さればよいと思へば中宮が恨めしけれど
- (一一) 浮舟との最初からの關係を隠し居し事なれば中宮の話すことを遠慮せられしも道理也
- (一二) 小宰相に聞きて後
- (一三) 却て他人は知りて噂もして居るならん
- (一四) 小宰相にも
- (一五) 斯様々々と浮舟との關係を有體には話しにくくて
- (一六) 浮舟の身の上に

手

習

君ぞ、ことごとく聞き合せける。かたはならむ事はとり隠して、然る事なむ有りけ  
(一)ると、大方の物語のついでに、僧都の言ひし事語れ」と宣はす。小宰相「御前にだに  
(二)つよませ給はむ事を、まして他人はいかでか」と聞えさすれど、明五「様々なる事に  
(三)こそ。又まろはいとほしき事ぞあるや」と宣はするも、心得てをかしと見奉る。立  
(四)ち寄りて物語などし給ふ序に、言ひ出でたり。珍らかに怪しと、いかでかは驚か  
(五)れ給はざらむ、宮の間はせ給ひしも、かゝる事をほの思し寄りてなりけり。など  
(六)か宣はせ果つまじきとつらけれど、我も又、はじめより有りし様の事聞え初めざ  
(七)りしかば、聞きて後も猶をこがましき心地して、人にすべて洩らさぬを、なか／＼  
(八)外には聞ゆる事もあらむかし、現の人々の中に忍ぶる事だに、隠ある世の中かは、  
(九)など思ひ入りて、この人にも、然なむ有りしなども明し給はむ事は、口おもき心  
(一〇)地して、猶怪しと思ひし人の事に似てもありける人の有様かな。さてその人は  
(一一)猶あらむや」と宣へば、小宰相「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる、いみ



(一)宇治へ行きて、一週忌の法會の時の事

(二)横川の僧都の噂せし浮舟と思はるゝ女の事

(三)宇治には

(四)浮舟

(五)大君浮舟との引續き死にたる點を氣にして問はるゝならんと思ひて

(六)僧都の物語を藏して傳へたらば自分の隠して居る事を聞いて仕舞つたと

思ふべければ其が氣の毒にもあり

(七)匂宮が浮舟の亡くなりし當時はふさぎ勝ちて病氣づきを

(八)色々の點から見て浮舟の事には滅多に口が出せぬと思ひて話す事を見合せたり

(九)紫が浮舟の事を

(一〇)僧都の噂を話さんとせしが

(一一)若し人違であつてはならぬと憚りてやめた

憂く思ふ給へなりにし後は、道も遙けき心地し侍りて、久しくものし侍らぬを、先

つ頃物の便にまかりて、はかなき世の有様とり重ねて思ふ給へしに、殊更道心を

起すべく作りおきてたりける、聖の住處となむ覺え侍りし」と啓し給ふに、かの事

思し出でて、いといとほしければ、明石其處には恐ろしきものや住むらむ。如何

様にてか、かの人は亡くなりにし」と問はせ給ふを、猶打續きたるを思し寄るか

思ひて、然も侍らむ。さやうの人離れたる所は、善からぬものなむ必ず住みつ

き侍るを、失せ侍りにし様なむいと怪しく侍る」とて、委しくは聞え給はず。猶か

く忍ぶる筋を、聞き顯しけりと思ひ給はむが、いとほしく思され、宮の物をの

み思して、その頃は病にもなり給ひしを思し合するにも、流石に心苦しくて、か

たがたに口入れにくき人の上と思しとどめつ。

小宰相に、忍びて、明石大將、かの人の事を、いと哀と思ひて宣ひしに、いとほ

しくて打出でつべかりしかど、それにもあらざらむ物ゆゑと、つとましくてなむ。

(二〇)

(二二)

(一) 浮舟の身寄にも行衛を尋ね居らるゝ人あるべし  
(二) 身投前迄は母親一人は生きて居りき

② 小宰相讀に浮舟の事を語る、蕪小野を訪はんとす

- (三) 蕪
- (四) 一週忌の法事
- (五) 浮舟の身の上を
- (六) 浮舟の異父兄弟
- (七) 右近衛府の
- (八) 小君といふ
- (九) 兄弟の中で
- (一〇) 蕪が明石へ
- (一一) 字治
- (一二) 蕪自身の人の跡に對する覺悟を語る也
- (一三) 誰でも好きな事に つけては片偏るものぢや
- (一四) 通ひしに
- (一五) 大君浮舟引續きて死にたるは場所が悪いのかしちと

手

處にかあらむ、其處とだに尋ね聞かまほしく覺え侍るを、行方知らで思ひ聞え給ふ人々侍らむかし」と宣へば、浮舟見し程までは一人はものし給ひき。この月頃に亡せやし給ひぬらむ」とて、涙の落つるを紛らはして、浮舟「なかく思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそ、え聞え出でね。隔は何事にか残し侍らむ」と、言少に宣ひなしつ。

大將は、このはてのわざなどせさせ給ひて、はかなくとも止みぬるかなと哀におほす。かの常陸の子どもは、叙爵したりしは藏人になし、我が御つかさの將監になしなど、勞り給ひけり。童なるが、中に清けなるをば、近く使ひ馴らさむとぞ思したりける。雨など降りてしめやかなる夜、後の宮に參り給へり。御前のどやかなる日にて、御物語など聞え給ふ序に、蕪「あやしき山里に、年頃まかり通ひ見給へしを、人の誇り侍りしも、然るべきにこそはあらめ、誰も心の寄るかたの事は、さなむある、と思ひ給へなしつよ、猶時々見給へしを、所のさがにやと、心

習

(一)きれ地の耳をひねる  
 (二)頼まれし衣袋の事も打捨てて  
 (三)浮舟の機子を心配する  
 (四)頼まれし衣裳也  
 (五)浮舟には此様なのが相嘗  
 (六)俗體なりし時のはなやかな衣裳を身につけて  
 (七)以下浮舟の心  
 (八)何事ぞ知れずには居ぬ世の中故我が死後此處の妹尼などが我身の素姓を人に聞きて  
 (九)いつまでも隠し居らるること  
 (一〇)我は  
 (一一)俗人の女の衣裳の事などは  
 (一二)今不意にかくる衣袋を扱ひても品上きは出来ぬにつけても娘が居たらばと思ひ出す  
 (一三)我が娘を育みし如く浮舟を世話せし親が今も猶存生なりや  
 (一四)死んだのを見て居ても矢張生きて居る様にも思はれて何處に居る事ぞと在處が知りたい様に思はれる故

物をいと美しくひねらせ給へば」とて、小袷の單衣奉るを、うたて覺ゆれば、心地悪しとて手も觸れず臥し給へり。尼君、急ぐ事をうち捨てて、妹尼「いかど思さるる」など思ひ亂れ給ふ。紅に櫻の織物の袷かさねて、「御前にはかよるをこそ奉らすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

浮舟「あま衣かはれる身にやありし世のかたみの袖をかけてしのばむと書きて、いとほしく、亡くもなりなむ後に、物の隠なき世なりければ、聞き合せなどして、疎ましままで隠しけるとや思はむ、など様々思ひつゝ、浮舟「過ぎにし方の事は、絶えて忘れ侍りにしを、かやうなる事を思し急ぐにつけてこそ、ほのかに哀なれ」とおほどかに宣ふ。妹尼「さりとも、思し出づる事は多からむを、盡せず隔て給ふこそ心憂けれ。こよには、斯かる世の常の色あひなど、久しく忘れなければ、直々しく侍るにつけても、昔の人あらましかばなど思ひ出で侍り。然あつかひ聞え給ひけむ人、世におはすらむや。かく亡くなして見侍るだに、猶何

あつかひ聞え給ひけむ人、世におはすらむや。かく亡くなして見侍るだに、猶何

- (一) 黨の人物に惚れ込み居る故
- (二) 攝政關白をも
- (三) 浮舟の
- (四) 黨の囂れたる處をば
- (五) 黨がぐまじと
- (六) 黨の一門
- (七) 夕霧は如何
- (八) 故老にて
- (九) 匂宮
- (一〇) 浮舟に斯う言つて聞かせよと誰か教へたかと思はるゝ位に
- (一一) 浮舟の心
- (一二) 紀伊守が
- (一三) 黨が我を、浮舟が紀伊守の話を聞きて思ふ也
- (一四) 見せて却つて悲をまきする様な尼姿を母に見せるのけ
- (一五) 紀伊守が頼みし布施の衣裳の事など
- (一六) これは自分の法事の駕に用ふる物ぞなどと一寸でも言ふ事も出来ず
- (一七) 人々が
- (一八) 之を仕立てて下さ

手

おはしますと見奉りしみにしかば、世の中の一の所も、何とも思ひ侍らず、唯この殿を頼み聞えさせてなむ、過し侍りぬる」と語るに、殊に深き心も無けなるかやうの人だに、御有様は見知りにつけり、と思ふ。尼君、「光る君と聞えける故院の御有様には、え並び給はじと覺ゆるを、たゞ今の世に、この御族ぞめでられ給ふなる。左の大殿」と宣へば、紀伊守「それは、容貌もいとうるはしう清らに、宿徳にて、ことなる様ぞし給へる。兵部卿宮ぞいといみじくおはするや。女にて狎れ仕うまつらばやとなむ覺え侍る」など、教へたらむ様に言ひつゞく。哀にもをかしくも聞くに、身の上もこの世の事とも覺えず。滞ることなく語り置きて出でぬ。

忘れ給はぬにこそはと哀に思ふにも、いとど母君の御心のうち推し量らるれど、なかなかいふかひなき様を見え聞え奉らむは、猶いとつよましくぞありける。彼の人の言ひつけし事などを、染め急ぐを見るにつけても、怪しく珍らかなる心地すれど、かけても言ひ出でられず。裁ち縫ひなどするを、妹尼「これ御覽じ入れよ。

習

(一) 浮舟が

(二) 我が様子を

(三) 浮舟が

(四) 八宮

(五) 中君はどの人ぞ、八宮の姫君は二人なる由を

かたて聞き居しに其が二人とも死にたりと紀伊守

が言ふ故合點ゆかぬ也

(六) 後の妾、即ち浮舟

(七) 母方卑しき人なるべし

(八) 存生中は薫が格別大切にもせざりしに

(九) 死後には

(一〇) 大君も非常に悲しまれたり

(一一) 此紀伊守は薫の親しき人であつたわいと

(一二) 浮舟の心

(一三) 揃ひも揃つて

(一四) しにくい事であり

(一五) 薫が

(一六) 殿に

(一七) 薫の御様子は

(一八) 私が

させ給ひてむや。織らすべきものは、急ぎせさせ侍りなむ」と言ふを聞くに、いか

でかは哀ならざらむ。人やあやしと見むとつよましようて、奥に向ひて居給へり。尼

君、「かの聖の親王の御女は、二人と聞きしを、兵部卿の宮の北の方は、いづれぞ」

と宣へば、紀伊守「この大將殿の御後ののは、劣り腹なるべし。事々しくもてなし給

はざりけるを、いみじく悲び給ふなり。はじめのはた、いみじかりき。ほと／＼

出家もし給ひつべかりきかし」など語る。かのわたりの親しき人なりけりと見るに

も、流石おそろし。紀伊守「怪しく、様の物と、彼所にてしも亡せ給ひける事。昨日

もいと不便に侍りしかな。川近き所にて、水をのぞき給ひて、いみじく泣き給ひ

き。上にのほり給ひて、柱に書きつけ給ひし、

薫見し人はかけもとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせきあへず

となむ侍りし。言にあらはして宣ふ事は少けれど、唯氣色にはいと哀なる御様に

なむ見え給ひし。女はいみじくめで奉りぬべくなむ。若く侍りし時より、優に

- (一) 妹尼の方
- (二) 母尼が非常に乗けて来た
- (三) 餘命のなき
- (四) 遠國に
- (五) 此母尼をこそ父母の代に
- (六) 常陸守の妻、此紀伊守の妹、浮丹の母とは別人
- (七) 常陸守の妻の來る迄母尼は生きて居り難かるべし
- (八) 浮丹が常陸といふを聞き答めたる也
- (九) かまけて暇がなし
- (一〇) 此處へ來んと思ひしに
- (一一) 黨の宇治へ行きしむ供をして
- (一二) 黨は八宮の娘の許に通ひしに
- (一三) 大君
- (一四) 浮丹
- (一五) 宇治に置きたりしに
- (一六) 一週忌の法事
- (一七) 法事の時布施にやるべき女の衣裳を一襲こしちへねばならぬが拵へて下さらぬか

手

此方こなたに來て、紀伊守「いとこよなくこそ僻ひがみ給ひにけれ。哀あはれにも侍はべるかな。殘のこりなき御おんさまを、見奉みたてまつること難かたくて、遠とほき程ほどに年月としつきを過すくし侍はべるよ。親おやたち物ものし給たまはで後のちは、(三)一所ひつかろをこそ御代おんかはりに思おもひ聞きえ侍はべりつれ。常陸ひたちの北きたの方は、音おとづれ聞きえ給たまふや」と言いふ(五)は、妹いもうとなるべし。妹尼いもうと「年月としつきに添そへては、徒然つれづれに哀あはれなる事ことのみ増まさりてなむ。常陸ひたちはいと久ひさしく音おとづれ聞きえ給たまはざめり。え侍まちつけ給たまふまじき様さまになむ見みえ給たまふ」と宣のたまふに、我わが親おやの名なと、あいなく耳みみとまれるに、また言いふ様やう、紀伊守紀伊守「まかり上のほりて日ひ頃ごろになり侍はべりぬるを、公事おんやけごとのいと繁しげくてむづかしくのみ侍はべるに、拘かづらひてなむ。昨日きのふも侍まはむと思おもう給たまへしを、右大將殿うだいしやうどのの宇治うぢにおはせし御供おんどもに仕つかうまつりて、故八宮こはちのみやの住すみ給たまひし所ところにおはして、日暮ひぐらし給たまひし。故宮こみやの御女おんじよめに通かよひ給たまひしを、まづ一所ひつかろは一年いちねん亡なせ給たまひにき。その御弟おんおとうと、また忍しのびてする奉たてまつり給たまへりけ(二五)るを、去年こゝろの春はる又また亡なせ給たまひにければ、その御おんはてのわざせさせ給たまはむ事こと、かの寺てらの律師りしになむ、さるべき事こと宣のたまはせて、某なにがしもかの女をんなの装束きやうくむせ一領ひとりてう調てうじ侍はべるべきを、せ(二七)

習

(一) 浮舟の將來を祝ひたる也

(二) 浮舟に

(三) 我が若葉をつみて其の人の齡を祝すべき人は今は妹尼の外になし

(四) さう思ふ管と、妹尼の心

(五) 其につけても浮舟が尼でなかつたらばと

(六) 一月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にしたり

(七) 他の花よりも梅花がなつかしきは匂宮などの戀しさが矢張心の底にし

(八) 佛に奉る水

(九) 仰山らしく

(十) 母の孫紀伊守小野に來りて黨の噂をなす、浮舟の感傷

(十一) 去年一昨年は何事がありしぞ杯と母尼に問ひて見ても

入れて、人の持て來たりけるを、尼君見て、

妹尼 山里の雪間のわかな摘みはやしなほおひさきの頼まるよかな

とて此方に奉れ給へりければ、

浮舟 雪ふかき野邊のわかなも今よりは君がためにぞ年もつむべき

とあるを、然ぞ思すらむと哀なるにも、妹尼「見るかひあるべき御様と思はまし

ば」と、まめやかに打泣い給ふ。閨のつま近き紅梅の、色も香も變らぬを、「春やむ

かしの」と、こと花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりしにほひのしみにける

にや。後夜に閨伽奉らせ給ふ。下藴の尼の少し若きがある、召し出でて花折らす

れば、かごとがましく散るに、いと匂ひ來れば、

浮舟 袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけほの

大尼君の孫の紀伊守なりけるが、この頃上りて來たり。三十ばかりにて、容貌清

けに誇りかなる様したり。何事か去年一昨年など問ふに、ほけくしき様なれば、

手

習



四三十一



(一) 浮舟が自分の戀の經歷を回顧する也

(二) いつとなく常に煩悶し

(三) 願通り出家して後

(四) 氣のはらし様なし

(五) 「君にぞまどふ路はまどはず」とよみし句をば

(六) 浮舟が  
(七) 疎末なる

思おもひ寄よらすあさましき事こともありし身みなれば、いと疎うそまし、すべて朽木くちきなどの様やうに

て、人ひとに捨すてられて歇やみなむ、ともてなし給たまふ。されば月つき頃ころたゆみなく結むすほほれ、物もの

をのみ思おもしたりしも、この本意ほんいのことし給たまひて後のちより、少すこし晴はれ々々しくなりて、尼あま

君きみとはかなく戯たはれもしかはし、碁ご打うちなどしてぞ明あかし暮くろし給たまふ。行おこなひとよくし

て、法華ほけ經きやうは更さらなり、こと法文ほふもんなどもいと多く讀よみ給たまふ。雪ゆき深ふかく降ふり積つみ、人目ひとめ

絶たえたる頃ころぞ、實じつに思おもひやる方かたなかりける。

年としもかへりぬ。春はるのしるしも見みえず、氷こほりわたれる水みづの音おとせぬさへ心こころ細ほそくて、君きみ

にぞまどふと宣のたまひし人は、心こころ憂うれしと思おもひ果はてにたれど、猶なほその折せりなどの事ことは忘わすれ

ず。

浮舟うきふねかきくらす野山のやまの雪ゆきを眺ながめてもふりにしことぞ今日けふも悲かなしき

など、例れいのなぐさめの手習てならひを、行おこなひの隙ひまにはし給たまふ。われ世よに亡なくて年とし隔へだたりぬる

を思おもひ出いづる人ひともあらむかしなど、思おもひ出いづる時ときも多おほかり。若菜わかなを疎おろそかなる籠こに

(六) 思おもひ出いづる時ときも多おほかり。若菜わかなを疎おろそかなる籠こに  
(七)

(一)私の死後が氣がかり也

(二)妹尼も浮舟の縁者なるべし、中將の心

(三)浮舟の將來の世話をする事は

(四)斯う言ひ出すからには

(五)浮舟を當然世話すべき人は眞に無いのか

(六)其にこだはる譯ではなけれど

(七)浮舟が身を忍ばずに居たらば世話する人が尋ねて来るかも知れぬ

(八)隠れて暮す方に

(九)當人の意向も

(一〇)浮舟へも中將が

(一一)君の出家は只浮世を厭ひての事なるべけれど自分が厭はれた様でつらく思ふ

(一二)中將の志の懸なる由を歌を取次ぎたる少將尼などが浮舟に語る

(一三)歌の返事はせず

手

習

おぼわす 思し忘れず訪はせ給はむ、いと嬉しくこそ思う給へ置かめ。侍らざらむ後なむ、哀

おも 思ひ給へらるべき」とて、泣き給ふに、この尼君も離れぬ人なるべし、誰ならむ、

こころえ と心得がたし。中將「行末の御うしろみは、命も知りがたく頼もしけなき身なれど、

さきこ 然聞えそめ侍りなば、更にかはり侍らじ。尋ね聞え給ふべき人は、まことにもの

し給はぬか。さやうの事の覺束なきになむ、憚るべき事には侍らねど、猶隔ある

こころち 心地し侍るべき」と宣へば、妹尼「人に知らるべき様にて世に經給はば、然もや尋ね

いひま 出づる人も侍らむ。今は斯かる方に思ひ限りつる有様になむ。心の趣も然のみ

み 見え侍るを」など語らひ給ふ。此方にも消息し給へり。

中將「大かたの世をそむきける君なれどいとふによせて身こそつらけれ

ねんころ 懇に深く聞え給ふことなど多く言ひ傳ふ。中將「兄弟と思しなせ。はかなき世の

ものかたり 物語なども聞えて慰めむ」など言ひ續く。浮舟「心深からむ御物語など、聞き分く

べくもあらぬこそ口惜しけれ」と答へて、この厭ふにつけたる答はし給はず。

四二九

(一)此時丁度よき機會なりしと見えて  
(二)中將に隙見させたる也

(三)邪魔になるべき

(四)隙見せる中將の心、是程の美人とは思ひ寄りざりき

(五)浮舟の出家が自分の不行届から起りしものてもある様に

(六)自分の機子が浮舟に聞えさうなれば

(七)中將の心

(八)浮舟が斯く隠れ居るにつきては世間に噂があらさうなものなるに

(九)中將の心

(一〇)是程の美人ならぬやな心持もすまい

(一一)尼でも辯はぬ窃に手に入ると仕舞はんと

(一二)通常の男女の情交は浮舟がいやがりなされし様なるが、尼になりたる上は一通りの交りは差支なかるべし

(一三)じき妻

(一四)浮舟に對する志が加はりては彌親しくすべし

(一五)浮舟の行末が心がかりなるに

はむと思ひて、さるべき折にやありけむ、障子のかけがねのもとにあきたる穴を

教へて、紛るべき几帳など引き遣りたり。いとかくは思はずこそありしか、いみ

じく思ふ様なりける人をと、わがしたらむ過の様に、惜しく悔しく悲しければ、

つよみもあへず、物狂ほしきけはひも聞えぬべければ、退きぬ。斯ばかりの様し

たる人を失ひて、尋ねぬ人ありけむや。又、その人かの人の女なむ、行方も知ら

ず隠れにたる、もしは物怨じして、世の背きにけるなど、自ら隠なかるべきを、

など怪しく返す、思ふ。尼なりとも、斯かる様したらむ人はうたても覺えじな

ど、なか／＼見所まさりて心苦しかるべきを、忍びたる様に、猶語ひ取りてむ、

と思へば、まめやかに語らふ。中將「世の常の様には思し憚る事もありけむを、か

かる様になり給ひにたるなむ、心安く聞えつべく侍る。さやうに教へ聞え給へ。來

し方の忘れ難くて、かやうに參り來るに、又今ひとつ志を添へてこそ」など宣

ふ。妹尾「いと行末心ほそく、うしろめたき有様に侍るめるに、まめやかなる様に

(二五)

(二二)

(二四)

(二三)

(一)今は浮舟も出家したれば君を泊めん様もなし

(二)今は誰も待つ人はあらずと思へど矢張昔懸しさに通りも出来ぬ

(三)浮舟

(四)せめてさうなりともして前に浮舟を見せんと我に言ひし約束のしるしにせよ

(五)少將の尼が

(六)浮舟が

(七)短く切り揃へたる髪  
の形容、冬は櫛扇を薄襟  
にてつゝみて持つ五重、或  
は三重などいふある也

(八)少將尼の心

(九)中將の心を察する也

見出し給へり。尼君例の涙もろにて、

妹尼木がらしの吹きにし山の麓にはたち隠るべきかけだにぞなき

と宣へば、

中將まつ人もあらじと思ふ山里のこずゑを見つよなほぞ過ぎうき

いふかひなき人の御ことを、猶盡せず宣ひて、中將「様かはり給へらむ様を、いさ

さか見せ給へよ」と、少將の尼に宣ふ。中將「それをだに、契りし験にせよ」と責め

給へば、入りて見るに、殊更にも人に見せまほしき様してぞおはする。薄鈍色の

綾、中には萱草など、澄みたる色を著て、いとさよやかに、様體をかしく、今め

きたる容貌に、髪は五重の扇を廣けたる様に、こちたき末つきなり。細に美しき

面様の、假粧をいみじくしたらむ様に、紅く匂ひたり。行などをし給ふも、猶珠

数は近き几帳にうち懸けて、經に心を入れて讀み給へる様、繪にも畫かまほし。う

ち見る毎に涙の留め難き心地するを、まいて心かけ給はむ男は、如何に見奉り給

(一)「松門到曉月徘徊、柏城盡日風蕭瑟」上のつゞきの句

(二)浮舟の心

(三)野山を修行して歩けば也

(四)浮舟の心

(五)道理で今日は涙がとまらぬと

(六)僧都の手下に見えず此處にて僧都は歸れるなるべし

(七)俗人の姿

(八)來たる人は浮舟の廳かぬを恨みし中將なり

(九)浮舟が尼になりて己の戀の無になりし事をも話さんとして

(一〇)他山の

(一一)此様な處には得意の人の居るは不似合、中將の心

(一二)今は來るかひもなければ、紅葉の面白さに矢張昔に立返つて泊りてもゆきたし

せて、<sup>(一)</sup>「松門しようもんに曉あかつきいたりて月徘徊つきはいくわいす」と、法師ほふしなれど、いと由々よしよくしう恥はづかし

けなる様さまにて宣のたまふ事どもを、思おもふ様にも言いひ聞きかせ給たまふかなと聞き居ゐたり。今日けふ

は終日ひねますに吹ふく風かぜの音おともいと心細こころほそきに、おはしたる人も、僧都そうどう「あはれ山伏やまおしは、<sup>(三)</sup>所しか

る日ひにぞ音ねは泣なかるなるかし」と言いふを聞ききて、我われも今は山伏やまおしぞかし、理ことわりにとまら

ぬ涙なみだなりけりと思おもひつよ、端はしの方に立たち出いでて見みれば、遙はるかなる谷たにの軒端のきはより、狩かり

衣姿ぎぬすがたいろく(六)に立たち雜まじりて見みゆ。山やまへ上のぼる人ひとなりとて、此方こなたの道みちには、通かよふ人

もいとたまさかなり。黒谷くろたにとかいふ方かたより歩ありく法師ほふしの跡あとのみ、稀まれ々くは見みゆるを、例れい

の姿見すがたみつけたるは、あいなく珍めづらしきに、<sup>(八)</sup>この恨うらみ侘わびし中將ちゆうじやうなりけり。<sup>(九)</sup>かひな

き事も言いはむとて物ものしたりけるを、紅葉もみぢのいと面白おもしろく、<sup>(一〇)</sup>外ほかの紅くれなるに染そめ勝ましたる

色々いろくなれば、入いり來くるよりぞ物哀ものあはれなりける。此處こゝにいと心地こゝろちよけなる人ひとを見みつけ

たらむは怪あやしくぞ覺おぼゆべきなど思おもひて、中將ちゆうじやう「暇いとまありて徒然つれづれなる心地こゝろちし侍はたるに、紅もみ

葉ぢもいかにと思おもう給たまへてなむ。猶立なほたち返かへり旅寝たびねもしつべき木きのもとにこそ」とて、<sup>(一二)</sup>

(一) 浮舟に違なし

(二) 蕪に

(三) 小宰相に

(四) 蕪も浮舟も

(五) はつきり其とも突き留めず

(六) 蕪に

(七) 中將又小野を訪ひて浮舟の出家を悲しむ

(八) 横川に

(九) 小野に

(一〇) 浮舟が若い身て尼になどなりては末邊げずして却て罪を造る様なものなるに、私に相談もなく尼にして仕舞ひしは不都合なり

(一一) 浮舟にいふ也

(一二) 浮舟が

(一三) お世話申すべし、浮舟にいふ詞

(一四) 世間の榮華を見聞して其に惹かれて居ては世間を離るる事むつかしく

(一五) 陵園妾、顔色如花命如葉、白氏文集「陵園妾」の句

らず。宮は、「それにもこそあれ。大將に聞かせばや」と、この人にぞ宣はすれど、何

方にも隠すべき事を、定めて然ならむとも知らずながら、恥かしけなる人に、う

ち出で宣はせむもつよましく思して、歌みにけり。

姫宮癒り果てさせ給ひて、僧都も上り給ひぬ。彼處に寄り給へれば、いみじく恨

みて、妹尼「なか／＼斯かる御有様にて、罪も得ぬべきことを、宣ひも合せずなり

にける事をなむ。いと怪しき」など宣へどかひなし。僧都「今はたゞ御行をし給

へ。老いたる若き、定なき世なり。はかなきものに思し取りたるも、理なる御身

をや」と宣ふにも、いと恥かしくなむ覺えける。僧都「御法服新しくし給へ」とて、綾

羅絹などいふ物奉りおき給ふ。僧都「某が侍らむ限は、仕うまつりなむ。なに

か思し煩ふべき。常なき世に生ひ出でて、世間の榮花に願ひ纏ると限なむ、所狭

く捨てがたく、我も人も思すべかめる。かゝる林の中に行ひ勤め給はむ身は、何

か怨めしくも恥かしくも思すべき。このあらむ命は、葉の薄きが如し」と言ひ知ら

手

習

- (一) 浮舟出家せし故也
- (二) 佛の動にかくりて容貌を衰へさせるも
- (三) 宇治の院に廢物が
- (四) 誰といふ事が分りしならん
- (五) 浮舟の事を心に思ひ居る故根問するなるべし
- (六) もう素姓を話したかも知れぬ
- (七) 麗女が成佛せし例もなしてはなし
- (八) 性質の素直なると容貌の美しきこと等をいふなるべし
- (九) 宇治で居なくなりし浮舟の事を中宮が思ひ出す
- (一〇) 小宰相も
- (一一) 中君からの話で浮舟の死様の變なる事は承知し居たれば
- (一二) 其も其ともきまらぬ事ではあり
- (一三) 自分が生きて居るを人に知られたくなしと
- (一四) 敵の様な人もある様な口振で
- (一五) 小宰相も

思おもひ喜よろこび侍はべりて、隨ず分ぶんに勞いたりかしづき侍はべりけるを、斯かくなりたれば、怨うらみ侍はべりなり。實ひにぞ、容かたち貌まはいとうるはしく清けうらにて、行おこなひやつれむいとほしけになむ侍はべりし。何なに人びとにか侍はべりけむ」と、物ものよく言いふ僧そうづ都とにて、語かたりつゞけ申し給たまへば、小宰相(一三)「いかでか、さる所ところによき人ひとをしも取りもて行きけむ。さりとも今いまは知しられぬらむ」など、この宰相(一五)の君きみぞ問とふ。僧そうづ都と知らず。さもや語かたらひ侍はべらむ。誠まことにやむごとなき人ひとならば、何なにか隠かくれ侍はべらじをや。田舍人(一六)の女むすめも、さる様さましたるこそは侍はべらめ。龍りうの中なかより、佛ほとけ生けうれ給たまはずばこそ侍はべらめ。たゞ人ひとにては、いと罪つみ輕かろき様さまの人ひとになむ侍はべりける」など聞きえ給たまふ。その頃ころかのわたり(一七)に消きえ失うせにけむ人ひとを思おもし出いづ。この御前おまへなる人ひとも、姊あね君きみの傳つたへに、怪あやしくて亡うせたる人ひととは聞き置おきたれば、其それにやあらむとは思おもひけれど、定さだなきことなり、僧そうづ都とも、僧そうづ都とかの人ひと、世よにあるものとも知しられじと、よくもあらぬ敵かたきだちたる人ひともある様ようにおもむけて、隱かくし忍しのび侍はべるを、事さまの様ようの怪あやしければ、啓けいし侍はべるなり」と、生なま隱かくす氣色けしきなれば、人ひとにも語かた

(一五) 小宰相も  
(一六) 田舍人の女も  
(一七) 消え失せにけむ人

(一) 母尼をいふ

(二) 浮舟を

(三) おこしたり

(四) 蕪の情人小宰相

(五) 寢ながら聞き居し也

(六) 中宮の様子を見て

(七) 委しく當時の事情を述べて半にてやめたり

御物怪の執念しゆねき事、様々さまざまに名なのるが恐おそろしき事など宣のたまふ序ついでに、僧都そうづいと怪あやしく稀け

有うの事をなむ見給みへし。この三月やよひに、年老としおいて侍はべる母ははの、願ねがひありて初瀬はつせに詣まうでて

侍はべりし、歸かへさの中宿なかやどりに、宇治うぢの院いんといひ侍はべる所に罷まかり宿やどりしを、斯かくの如ごとく、人住ひます

まで年としへ経へぬる大おほなる所ところは、善よからぬ物もの必かならず通かよひ棲すみて、重おもき病はうぜ者の爲ため悪あしき事ことど

もやと、思おもう給たまへしも著しるく」とて、かの見みつけたりし事ことどもを語かたり聞きこえたまふ。

中宮ちゆうぐう「實じつにいと珍めづらかなる事ことかな」とて、近ちかく侍さむら人びと々みな皆みな寢い入りたるを、恐おそろしく思おも

されて、驚おどろかさせ給たまふ。大將たいしやうの語かたらひ給たまふ宰相さいしやうの君きみしも、この事を聞きけり。驚おどろ

かせ給たまひける人びと々みなは、何なにとも聞きかず。僧都そうづ、怖おそぢさせ給たまへる御氣色みけしきを、心こころもなき

事こと啓けいしてけりと思おもひて、委くはしくもその程ほどの事を言いひさしつ。僧都そうづ「その女人にょにん、こ

の度たひま罷まり出いで侍はべりつる便たよりに、小野そののに侍はべりつる尼あまどもあひ訪まもらひ侍はべらむとて、まかり

寄よりたりしに、泣なくく、出家しゅけの志こころ深ふかき由よし懇ねんごろに語かたらひ侍はべりしかば、頭かしらおろし

侍はべりにき。某なにがしが妹いもうと、故衛門こゑもんのかみの妻めに侍はべりし尼あまなむ、亡うせにし女子をんなごの代かはりにと、



(一)鼠色のころもは妹尼の仕立てなれて居る事故  
 (二)浮舟が来て以來思ひもよらぬ光を菴に添へたりと思ひ居しに

④ 僧都、明石中宮に浮舟の事を語る  
 (三)僧都の祈の效が著はれて

(四)女一宮の御寢所の次の間に夜詰をさせる  
 (五)お伽をつとめて草臥れたる人は  
 (六)女一宮と  
 (七)僧都を  
 (八)僧都のたのもしさが  
 (九)私の壽命ももう長かちぬ様に

給ふ。鈍色は手馴れにし事なれば、小袿袈裟などしたり。ある人々も、かよる色を縫ひ著せ奉るにつけても、「いと覺えず、嬉しき山里の光と、且暮見奉りつるものを、口惜しきわざかな」と、あたらしがりつよ、僧都を恨み謗りけり。

一品宮の御惱、實にかの弟子の言ひしも著く、著き事どもありて、癒らせ給ひにければ、いよくいと尊きものに言ひのよしる。名残も恐ろしとて、御修法延べさせ給へば、頓にもえ歸り入らで侍ひ給ふに、雨など降りてしめやかなる夜、召して、夜居に侍はせ給ふ。日頃いたく侍ひ困じたる人は、皆休みなどして、御前に人少にて、近く起きたる人少き折に、同じ御帳におはしまして、中宮昔より頼ませ給ふ中にも、この度なむいよく後の世も斯くこそはと、頼もしき事増りぬる」など宣はず。僧都「世の中に久しく侍るまじき様に、佛なども教へ給へる事ども侍るうちに、今年來年過し難き様になむ侍りければ、佛を紛なく念じつとめ侍らむとて、深く籠り侍るを、かよる仰言にて、まかり出で侍りにし」など啓し給ふ。

(一)心ばかりは此世を厭ひて出家はしたれど我身の行末はどうなる事やら  
(二)少將尼などが中將へ  
(三)直筆をやつては困ると  
(四)私共が寫したならば  
(五)浮舟の返事したるが珍らしきにつけても、中將の心

(六)妹尼  
(七)尼の身では浮舟にも出家を勧めるのが嘗前とは思へど  
(八)若い身で尼になつて此先をどうする御積ぞ  
(九)後々迄安心のなる様にして置いてあげたしと

(一〇)泣くくの上  
(一一)法衣の事

思さるらむ、はかなき物のはしに、

浮舟「心」(一)「そうき世のきしをはなるれど行方も知らぬあまのうき木を

と例の手習にし給へるを、包みて奉る。浮舟「書き寫してだにこそ」と宣へど、

少將「なか／＼書き損ひ侍りなむ」とて遣りつ。珍らしきにも、言ふ方なく悲しくな

む覺えける。

物詣の人歸り給ひて、思ひ騒ぎ給ふ事限なし。妹尼「斯かる身にては、進め聞えむ

こそはと思ひなし侍れど、殘多かる御身を、いかで經給はむとすらむ。己は、世

に侍らむこと今日明日とも知り難きに、いかで後安く見置き奉らむと、萬に思

ひ給へてこそ、佛にも祈り聞えつれ」と、伏し轉びつゝ、いといみじけに思ひ給へ

るにも、實の親の、やがて骸もなきものと思ひ惑ひ給ひけむ程推し量るぞ、先づ

いと悲しかりける。例の答もせで背き居給へる様、いと若く美しけなれば、

妹尼「いと物はかなくぞおはしける。つらき御心なれど」泣くく御衣の事など急ぎ

(一)我事終りたり

(二)一旦既に背きし世を又尼になりて再び背きし事上

(三)浮舟の不慮の出家の爲に人々が

(四)中將へ浮舟出家の事を知らせやりたり

(五)中將が

(六)中將の心

(七)少將尼などに

(八)少將尼がよき序を以て見せんと言ひしに

(九)申上様もなき飛んでもなき事につきては

(一〇)浮舟が出家されたりと聞きては我も追續ぎて出家したき心地す

(一一)浮舟が此文を

(一二)中將が浮舟の出家を聞きて是ではもう仕方かなしと思ふも氣の毒ではあるが、浮舟の心

浮舟「なきものに身をも人をも思ひつゝ捨ててし世をぞ更に捨てつる

今はかくて限りつるぞかし」と書きても、猶自らいとあはれと見給ふ。

浮舟かぎりぞと思ひなりにし世の中をかへすくもそむきぬるかな

同じ筋の事を、とかく書きすさび居給へるに、中將の御文あり。物騒しくあきれ

たる心地しあへる程にて、かよる事なむと言ひてけり。いとあへなしと思ひて、斯

かる心深くありける人なりければ、はかなき答をもしそめじと思ひ離るよなりけ

り。さてもあへなきわざかな、いとをかく見えし髪程を、確に見せよと一夜

も語らひしかば、然るべからむ折にと言ひしものをと、いと口惜しくて、立ちか

へり、

中將聞えむ方なきは、

岸遠く漕ぎはなるらむあまぶねに乗り後れじといそがるよかな

例ならず取りて見給ふ。物の哀なる折に、今はと思ふも哀なるものから、いかゞ

(一)生甲斐ある様に感じたり

(二)僧都が京へ出て行きし也

(三)少將尼等は

(四)浮舟の此處に寂しく暮さるるも一寸の間の事

(五)尼になつて仕舞はれ

(六)尼になれば是が一生の終の様に思はれて

(七)浮舟の感じ

(八)もう人並の生活をすべき身でなしと極まつて仕舞つたのが結構なのぞやと、浮舟の心

(九)聖朝は

(一〇)無理に尼になつた事故

(一一)人に見らるるも

(一二)亂れひさがりたる様に

(一三)小言をいはずに梳つてくれる人がほしいと

(一四)親身に相談相手になりてくれる人も無ければ

みぞ生ける驗ありて覺え給ひける。

皆人々出で静まりぬ。夜の風の音に、この人々は、「心細き御住居も、しばしの事ぞ、

今いとめでたくなり給ひなむと、頼み聞えつる御身を、斯くしなさせ給ひて、殘

多かる御世の末を、如何にせさせ給はむとするぞ。老い衰へたる人だに、今は限

と思ひ果てられて、いと悲しきわざに侍る」と言ひ知らすれど、猶たゞ今は心安く

嬉し。世に經べきものとは思ひかけずなりぬるこそは、いとめでたき事なれと、胸

の明きたる心地ぞし給ひける。つとめては、流石に人の許さぬことなれば、變り

たらむ様見えむもいと恥かしく、髮のすその俄におほどれたる様に、しどけなく

さへ削がれたるを、むづかしき事ども言はで、繕はむ人もがなと、何事につけて

もつよましくて、暗うしなしておはす。思ふ事を人に言ひつゞけむ言の葉は、も

とよりだにはかぐしからぬ身を、まいて懐しくことわるべき人さへなければ、

唯硯に向ひて、思ひ餘る折には、手習をのみぞ、たけき事とは書きつけ給ふ。

(一)己のなまじなる僧都の伴人をもてなすとて  
 (二)銘々己の知人の稀に來たるを珍らしかりて一寸したる應などせんとして其方にかくり居る處へ  
 (三)浮舟の尼になる事を  
 (四)僧都が上に著たる自分の衣や袈裟を  
 (五)眞似事だけにとて浮舟に著せて  
 (六)何方へ向いて拜して上いか分らぬ時に  
 (七)なぞ其様を無分別な事をなさる  
 (八)妹尼  
 (九)是程にしかけたものを和魔するも良からぬ事と僧都が思ひて  
 (一〇)少將尼が  
 (一一)授戒の時に誦する文句中「流轉三界中、恩愛不能斷、養恩人無爲、眞實報恩者」  
 (一二)經文には恩愛不能斷といへど我は疾くに恩愛を斷ちてはしものを、浮舟の心  
 (一三)流石に悲しからぬにもあらざ  
 (一四)額髪は  
 (一五)かく美しき形を  
 (一六)容易にさせさうにもなく尼君等が一同にて止めたりし出家の事を

このわたくしの知りたる人にあへしらふとて、斯かる所につけては、皆とりぐ  
 (一)に心よせの人々珍らしくて出で來たるに、はかなき事しける見入れなどしける程  
 に、こもき一人して、斯かる事なむと少將の尼に告げたりければ、惑ひて來て見  
 るに、我が御上の衣袈裟などを、ことさらばかりとて著せ奉りて、僧都「親の御  
 方を拜み奉り給へ」と言ふに、何方とも知らぬ程なむ、え忍びあへ給はで泣き給  
 ひにける。少將「あなあさましや。など斯くあうなき事はせさせ給ふ。上歸りおは  
 しましてば、如何なる事を宣はせむ」と言へど、斯ばかりにし初めつるを言ひ亂  
 るもものしと思ひて、僧都諫め給へば、寄りてもえ妨げず。僧都「流轉三界中」な  
 どいふにも、斷ちてしものをと思ひ出づるも、流石なりけり。御髪もそぎ煩ひ  
 て、弟子僧のどやかに、尼君たちして直させ給へ」と言ふ。額は僧都ぞ削ぎたまふ。  
 僧都「かゝる御容貌やつし給ひて悔い給ふな」など、尊き事ども説き聞かせ給ふ。頓  
 にせさすべくもなく、皆言ひ知らせ給へる事を、嬉しくもしつるかなと、これの

(二五)

(一〇)

(二四)

(一六)

(一)病氣の加減の悪い様  
な風を示して

(二)戒を受けても無駄に  
なるかも知れぬ

(三)若き時は一向平氣な  
りしに

(四)浮舟が其様に出家を  
御急ぎならば

(五)切りたる髪を入るべ  
き爲なるべし

(六)僧

(七)弟子の僧の心、成程  
あの様な境遇にありし人  
なれば俗體で居るも異な  
ものならん

(八)浮舟の出家を

(九)切るに忍びず躊躇し  
たり

(一〇)自分の兄の僧  
(一一)自分の部屋に

手

むと、いと口惜しくて、みだり心地の悪しかりし程にしたる様にて、浮舟「いと苦し  
く侍れば、重くならば忌む事かひなくや侍らむ。猶今日は嬉しき折とこそ思う給  
へつれ」とて、いみじく泣き給へば、聖心「いといとほしく思ひて、僧都「夜や更

け侍りぬらむ。山より下り侍る事、昔は事とも思う給へられざりしを、年の老ゆ  
る儘には、堪へ難く侍りければ、打休みて内裏には參らむと思ひ侍るを、然思し  
急ぐ事なれば、今日仕う奉りてむ」と宣ふに、いと嬉しくなりぬ。鉢とりて、櫛

の箱の蓋さし出でたれば、僧都「いづら、大徳達こよに」と呼ぶ。初見つけ奉りし、  
二人ながら伴にありければ、呼び入れて、僧都「御髪おろし奉れ」といふ。實にい  
みじかりし人の御有様なれば、うつし人にて世におはせむもうたてこそあらめと、

この阿闍梨も理に思ふに、几帳の帷子の綻より、御髪をかき出し給へるが、い  
とあたらしくをかしけなるになむ。しばし鉢を持って休らひける。

かよる程に、少將の尼は、兄の阿闍梨の來たるに逢ひて、下に居たり。左衛門は、

習

四一七

(一)都合のわるきもの

(二)出家でもしてせめて後世をても助かりたしと

(三)僧都の心

(四)これ程の器量を持ちながら

(五)厭生を祈りし時の物怪も、此人は世を恨みて身を投げんとせし人なる由を言ひし事前に見えたり

(六)出家を望む相當の譯があるならん

(七)一體ならばあの時にとうに死んで居る筈の人ぢや

(八)一度物怪に取り附かれたる人なれば

(九)出家は佛の稱讚し給ふ事也、其を法師の身てよせとは言はれず

(一〇)女一宮に

(一一)出家させてあげん

(一二)妹尼が居たらば、淨丹の心

年月経れば、女の御身といふもの、いとたいぐしきものになむ」と宣へば、

淨丹「幼く侍りし程より、物をのみ思ふべき有様にて、親なども、尼になしてや見

ましなどなむ、思ひ宣ひし。まして少し物思知り侍りて後は、例の人様ならで、

後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、亡くなるべき程のやうく、近くなり侍るに

や、心地のいと弱くのみなり侍るを、猶いかで」とて打泣きつゝ宣ふ。怪しく、か

かる容貌有様を、などて身を厭はしく思ひはじめ給ひけむ。物怪もさこそ言ふな

りしか、と思ひ合するに、然る様こそはあらめ、今までも生きたるべき人かは、悪

しき物の見つけ初めたるに、いと恐ろしく危き事なり、と思して、僧都」とまれか

くまれ、思し立ちて宣ふを、三寶のいとかしこくほめ給ふ事なり。法師にて聞え

返すべき事にあらず。御忌む事はいと易く授け奉るべきを、急なる事にて罷出

たれば、今宵はかの宮に參るべく侍り。明日よりや御修法始まるべく侍らむ。七

日果てて罷出むに、仕う奉らむ」と宣へば、かの尼君おはしなば必ず言ひ妨けて

手

習



四一五



(一) 尼になりて僧都に戒を受けたりと

(二) 浮舟の方に

(三) 浮舟が

(四) 用もないに手紙をおりさも工合悪き故

(五) 人竝にかはりて

(六) 色々親切にして下さる僧都の御志を不束ながら有難く思へど

(七) 世間竝の生活は出来にくく此世に居たくまれぬ心地する故

(八) 人竝の女としては

(九) 無暗に出家などはしたがるぬものぢや

(一〇) 出家せんと思ひ立つ當座け

し給ひて、<sup>(一)</sup>忌む事受け奉らむと宣ひつる」と語る。立ちて此方にいまして、僧都<sup>(二)</sup>此

處にやおはします」とて、几帳のもとについ居給へば、つよましけれど、るざりよ<sup>(三)</sup>

りて、答し給ふ。僧都「不意にて見奉り初めてしも、然るべき昔の契ありけるにこ

そと思ふ給へて、御祈など懇に仕う奉りしを、法師は、その事となくて、御文<sup>(四)</sup>

聞え承らむも便なれば、自然になむ疎なる様になり侍りぬる。いと怪しき様<sup>(五)</sup>

に、世を背き給へる人の御あたりに、いかでおはしますらむ」と宣ふ。浮舟「世の<sup>(六)</sup>

中に侍らじと思ひ立ち侍りし身の、いと怪しくて今まで侍るを、心憂しと思ひ侍<sup>(七)</sup>

るものから、萬に物せさせ給ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心地にも、思<sup>(八)</sup>

う給へ知らるよを、猶世づかすのみ、遂にえ留るまじく思ふ給へらるよを、尼に<sup>(九)</sup>

なさせ給ひてよ。世の中に侍るとも、例の人にて、ながらふべくも侍らぬ身にな<sup>(一〇)</sup>

む」と聞え給ふ。僧都「まだいと行く先遠けなる御程に、いかでか、ひたみちに然は<sup>(一)</sup>

思し立たむ。却りて罪ある事なり。思ひ立ちて、心を起し給ふ程は強く思せど、<sup>(二)</sup>

(一)母尼に

(二)浮舟が自分の居間に  
かへりて

(三)いつも妹尼に梳りて  
貰ふに

(四)浮舟の心

(五)尼にならぬ前の顔か  
たちを

(六)髪の毛が細きたちに  
て

(七)愛性法師「たちちね  
は斯かれとてしもぬば玉  
のわが黒髪は濡らずやあ  
りけん」

(八)母尼

(九)妹尼は

(一〇)浮舟は

(一一)浮舟が

手

習

て、浮舟「心地のいと悪しうのみ侍るを、僧都の下りさせ給へらむに、忌む事受け

侍らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞え給へ」と語かたひ給へば、ほけくしう打肯うちうなづ

く。例れいの方かたにおはして、髪かみは尼君あまぎみのみけづり給ふを、他人たにびとに手觸てふれさせむもうた

て覺おぼゆるに、手てづから將はたえせぬ事なれば、唯ただ少し解とき下くだして、親おやに今一度いまひたひか斯しかうな

がらの様さまを見みえずなりなむこそ、人ひとやりならずいと悲かなしけれ、いたく煩わづらひしけに

や、髪かみも少すこし落おち細ほそりにたる心地すれど、何なにばかりも衰おとろへず、いと多くて、六尺しやく

ばかりなる末すえなどぞ、いと美うつくしかりける。筋すぢなども、いと細こまかに美うつくしけなり。

浮舟「斯かかれとてしも」と、獨ひとり言ごち居ゐ給たまへり。

暮方くれがたに僧都そうづものし給へり。南面みなるおもてはら拂はらひしつらひて、圓まるなる頭かしらつきども、行ゆきちが

ひ騒さわぎたるも、例れいに變かはりていと恐おそろしき心地す。母ははの御方おんかたに參まゐり給ひて、僧都そうづ「如い

何かにぞ月頃つきころは」など宣のたまふ。僧都ひんがし「東ひんがしの御方おんかたは物詣ものまうでし給ひにきとか。此このおはせし人ひと

は、猶物なまものし給ふや」など問とひ給ふ。母尼はは「然しか、此處こゝに留とどりてなむ。心地悪こゝろあしとこそ物もの

(一)自ら制す

(二)行基の「ほろく」と鳴く山鳥の聲きけば父か

とぞ思ふ母かとぞ思ふの歌を思へるなるべし

(三)供をして我が部屋に歸るべきもきも來ねば

(四)さも結構な物の様に取扱ひて

(五)浮舟に勸むる也

(六)給仕の人も氣にくはず

(七)何氣なく斷るを

(八)僧都上京の序に小野に立寄る、浮舟僧都に乞ひて尼になる

(九)女一宮

(一〇)比叡山の座主

(一一)夕霧の子息の四位少將

(一二)浮舟の心

(一三)僧都に

(一四)干渉する尼君などが留守にて

ほ惡の心や、斯くだに思はじ、など心一をかへさふ。辛うじて鶏の鳴くを聞き

て、いと嬉し。母の御聲を聞きたらむは、まして如何ならむ、と思ひ明して、心

地もいと惡し。供にて渡るべき人も頓に來ねば、猶臥し給へるに、駢の人はいと

疾く起きて、粥などむづかしき事どもをもてはやして、母尼御前に疾く聞し召せ

など寄り來て言へど、まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬ心地して、

浮舟「惱ましくなむ」とことなし給ふを、強ひて言ふもいと骨無し。

下衆々々しき法師ばらなど數多來て、下僧僧都今日下りさせ給ふべし」「など俄

には」と問ふなれば、下僧一品宮の御物怪に惱ませ給ひける、山の座主御修法仕

う奉らせ給へど、なほ僧都參らせ給はでは驗なしとて、昨日二度なむ召し侍りし。

左大臣殿の四位少將、昨夜夜更けてなむ上りおはしまして、後の宮の御文など侍

りければ、下りさせ給ふなり」など、いと花やかに言ひなす。恥かしくとも、逢ひ

て尼になし給ひてよと言はむ、さかしら人少くてよき折にこそ、と思へば、起き

(一三)

(一四)

(一五)

(一六)

(一七)

- (一)此老尼等よりも恐ろしき地獄の鬼どもの中に居るのであらう
- (二)八宮、以下浮舟の心
- (三)牛復しつゝ
- (四)中君の
- (五)不慮の出来事の爲に交りが絶え
- (六)自分を世話せんとしてくれし蕪を力にして
- (七)間際に
- (八)やり損ひたる
- (九)句宮を假令少しでも暮はしく思つた我が心がけしからん
- (一〇)句の爲に今の身の上にもなりしなりと
- (一一)共に舟に乗りし時の句の歌「年経ともかはらんものか」感の小島の崎に契る心け
- (一二)非常に句がいやになる
- (一三)情は薄いながら
- (一四)蕪は
- (一五)戀しさが
- (一六)此様にして生きて居るも蕪に聞かれた時の恥かしさは他人に聞かれるより一層なるべし、
- 浮舟の心
- (一七)現世では
- (一八)昔の蕪の姿を
- (一九)浮舟の心

手

を思ひ亂れ、むづかしくとも恐ろしとも物を思ふよ、死なましかば、これよりも恐ろしけなる者の中にこそは、あらましか、と思ひ遣らる。昔よりの事を、まどろまれぬ儘に、常よりも思ひ續くるに、いと心憂く、親と聞えけむ人の御容貌も見奉らず、遙なる東をかへるく年月をゆきて、たまさかに尋ね寄りて嬉し頼もしと思ひ聞えし兄弟の御あたりも、思はずにて絶え過ぎ、さる方に思ひ定め給へりし人につけて、やうく身の憂さを慰めつべききはめに、あさましくもて損ひたる身を、思ひもて行けば、宮を少しも哀と思ひ聞えけむ心ぞいと怪しからぬ、唯この人の御ゆかりにさすらへぬるぞ、と思へば、小島の色を例に契り給ひしを、  
 (二〇) などでてをかしと思ひ聞えけむと、こよなくあきにたる心地す。初より薄きながら  
 (二一) も長閑やかに物し給ひし人は、この折かの折など、思ひ出づるぞこよなかりける。  
 (二二) 斯くてこそありけれど、聞きつけられ奉らむ恥かしさは、人より勝りぬべし、流  
 (二三) 石に此世には、ありし御様を、餘所ながらだに何時かは見むする、と打思ふ。  
 (二四) な  
 (二五) 習  
 (二六) 習  
 (二七) 習  
 (二八) 習  
 (二九) 習

(一)身を投げんとて行きたる者の路に丸木橋のあゝるを渡りかけて危がりて歸りたりといふ様なる物語のありしなるべし

(二)浮舟が母尼の方へ伴ひ入りたれど

(三)中将

(四)浮舟がこもきを待つ也

(五)引込思案で

(六)浮舟を

(七)せきの出るに紛れて

(八)かぶりて

(九)浮舟の

(一〇)歸のする様な手つきで

(一一)浮舟の方を

(一二)身を投げんとせし時鬼に取られたる時は、

浮舟の心

(一三)浮舟の心

(一四)音の

の人々にや食はれなむと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一橋危

がりて歸り來たりけむ者の様に、侘しく覺ゆ。こもき供に率ておはしつれど、色

めきてこの珍らしき男の艶だち居給へる方に歸り去にけり。今や來る今や來ると

待ち居給へれど、いとほかなき頼もし人なりや。中将言ひ煩ひて歸りにければ、

少將等「いと情なく埋れてもおはしますかな。あたら御容貌を」など、譏りて皆一所に

寝ぬ。

夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に、尼君咳嗽におほほれて起きにたり。火影

に頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥し給へるを怪しがりて、

舐とかいふなる物が然る業する、額に手をあてて、母尼怪し。これは誰ぞ」と、執

念けなる聲にて見おこせたる、更にと今食ひてむとするとぞ覺ゆる。鬼の取り

もて來けむほどは、物覺えざりければ、なか／＼心安し。如何様にせむと覺ゆる

むづかしさにも、いみじき様にて生き返り、人になりて、又ありし色々の憂き事



(一)少將尼が中將に  
 (二)もう少し出て來る様  
 に浮舟に勤めてくれ  
 (三)少將尼等を

(四)ついで行つた事もな  
 き母尼の方に浮舟が隠れ  
 たり

(五)浮舟の心中が氣の毒

(六)浮舟が  
 (七)物の分ちぬ人よりも  
 一層つれなくせられるは  
 何か譯のある事ならん

(八)浮舟は妹尼が世話す  
 べき關係の人なりしが

(九)母尼

(一〇)母尼の權  
 (一一)同年輩の尼ども

わざと言ふとも無きを、聞きて傳へ聞ゆれば、いと哀と思ひて、中將(二)猶唯いさよ  
 か出で給へと聞え動かせ」と、この人々をわりなきまで恨み給ふ。少將(三)怪しきまで、  
 つれなくぞ見え給ふや」とて、入りて見れば、例はかりそめにもさし覗き給はぬ、老  
 人の御方に入り給ひにけり、あさましく思ひて、斯くなむと聞ゆれば、中將(四)「かよ  
 る所にながめ給ふらむ心の中の哀に、大方の有様なども、情なかるまじき人の、い  
 と餘り、思ひ知らぬ人よりも勝にもてなし給ふめるこそ。それも物懲し給へるか。  
 猶如何なる様に世を恨みて、何時までおはすべき人ぞ」など、有様問ひて、いとゆ  
 かしけにのみ思いたれど、細なる事は、いかでかは言ひ聞かせむ。唯、少將(五)「知り聞  
 え給ふべき人の、年頃は疎々しき様にて過し給ひしを、初瀬に詣であひ給ひて、尋  
 ね聞え給へる」とぞ言ふ。姫君はいとむづかしののみ聞く老人のあたりにうつぶし  
 臥して、寝も寝られず。宵惑はえも言はず、おどろくしき躰しつよ、前にもう  
 ちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじと躰あはせたり。いと怖ろしく、今宵こ

(二二)

(二二)

(八)

(六)

(二)

(九)

(二〇)

(一) どうしたもので  
 (二) それでたは餘り愛想が  
 なき過ぎる  
 (三) 中將のわざ／＼来た  
 御志にも此様な折けひと  
 しは感ずべき筈  
 (四) 中將の言ふ事も仄に  
 げなされ  
 (五) 中將のいふ事を聞いて  
 居ればそれが身體にし  
 む附いて離れぬ物でも  
 あるかの様に恐るしがら  
 れるのはけしからん  
 (六) 浮舟も切深へ行きた  
 る積にして斷り居る由  
 (七) 浮舟一人残り居る由  
 を聞いて行つたものと見  
 えて  
 (八) 聞いて見た上でのい  
 とも應とも極めて下され  
 (九) 斯う頭から相手にな  
 づて下さらぬのはひど過  
 ぎる  
 (一〇) 批難しつゝ  
 (一一) 段も物思のある身  
 故君と我とはよく氣が合  
 ふ譯なるに  
 (一二) うまく取りなすべ  
 き人も居ず  
 (一三) 返歌をせねば餘り  
 愛想がなさずざる  
 (一四) 自分は我身を別に  
 憂しとも感ぜず居るの  
 に、物思ふ身ぞと人から  
 言ひなされるのは心外也

手

習

月さし出でてをかしき程に、晝文ありつる中將おはしたり。あなうたて、こは何  
 ぞと覺え給へば、奥深く入り給ふを、少將さも餘りにもおはしますものかな。(一)  
 志のほども、哀まざる折にこそ侍るめれ。ほのかにも聞え給はむことも聞かせ  
 給へ。(二) しみつかむ事の様に思したるこそ「など言ふに、いとうしろめたく覺ゆ。お  
 はせぬ由を言へど、晝の使の、一所など問ひ聞きたるなるべし、いと言多く恨み  
 て、中將御聲も聞き侍らじ。唯氣近くて聞えむことを、聞きにくしとも思しこと  
 われ」と、萬に言ひ侘びて、中將「いと心憂く。所につけてこそ物の哀もまされ、餘  
 り斯かるは」などあばめつよ、(三)  
 中將「山里のあきの夜ふかきあはれをも物おもふ人はおもひこそ知れ  
 おのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、少將「尼君おはせて、紛らはし聞ゆべ  
 き人も侍らず。いと世づかぬ様ならむ」と責むれば、(四)  
 浮舟うきものと思ひも知らですぐす身を物思ふ人とひととは知りけり



(一) 碁も甚だ覺束なかつた

(二) 少將尼が自分の方が強からんと思ひて浮舟に先をさせたるに浮舟の方が除程強かりしかば

(三) 妹尼の

(四) 碁を

(五) 兼々自慢して居られしが(いよ)鼻を高くして、僧質運碁の名手なるに上りて基聖大徳と稱せらる、宇多醍醐の頃の人

(六) 僧都の詞をまねる也、我が碁は天下に有名ては無いが

(七) 妹尼の碁は

(八) 少將尼が顔つきの見にくま尼の身で酔狂な遊藝の好みだてをするを見る

(九) 面倒な事をしはじめたもの哉と碁を打ちたるを後悔して

(一〇) 浮舟が

(一一) 秋の夕の悲しきを思ひ知りて悲しむ譯ではなけれど、つくろと眺め居れば涙がこぼれてせん方なし

碁をうたせ給へ」といふ。浮舟「いと怪しうこそはありしか」とは宣へど、打たむと

思したれば、盤取りに遣りて、我はと思ひて先せさせ奉りたるに、いとこよな

ければ、また手直して打つ。少將「尼上疾う歸らせ給はなむ。この御碁見せ奉ら

む。かの御碁ぞいと強かりし。僧都の君早うよりいみじう好ませ給ひて、けしう

はあらじと思したりしを、いと基聖大徳になりて、さし出でてこそ打たざらめ、

御碁には負けじかし、と聞え給ひしに、遂に僧都なむ二つ負けさせ給ひし。基聖

が碁には勝らせ給ふべきなめり、あないみじ」と興ずれば、さだすぎたる尼額の

見つかぬに、物好するに、むづかしき事もしそめてけるかなと思ひて、心地悪し

とて臥し給ひぬ。少將「時々は晴々しうもてなしておはしませ。あたら御身を、いみ

じく沈みてもてなさせ給ふこそ口惜しく、玉に瑕あらむ心地し侍れ」と言ふ。夕

暮の風の音も哀なるに、思ひ出づる事多くて、

浮舟「こよろには秋の夕をわかねどもながむる袖につゆぞみだるよ

(一)かく憂き身なれば初瀬詣もする氣にならぬ、二本の杉は初瀬の名木也「初瀬川古川のべに二本ある杉、年を経て又も逢ひ見ん二本ある杉」  
 (二)書きまかせてあるを  
 (三)二本の杉を歌によめるを以て見れば再會を望む人のあるならん 前の引歌によりていふ也  
 (四)浮舟の素姓は知らねども我は只亡き娘と思ふ  
 (五)つまらぬ返歌を  
 (六)妹尼は獨り竊に行き積なれど同行を望む者多くて  
 (七)浮舟が  
 (八)妹尼が  
 (九)我身の成行をあさましく思ひながらも、以下浮舟の心  
 (一〇)斯うなつては據所なしと諦めて力にして居た妹尼が留守では  
 (一一)少將の尼などが

浮舟はかなくてよにふる川の憂きせには尋ねもゆかじふたもとの杉(一)と手習(二)に交りたるを、尼君見つけて、妹尼(三)二本は、またもあひ聞えむと、思ひ給ふ人あるべし」と、戯言を言ひ當てたるに、胸(四)つぶれて、面赤め給へるも、いと愛敬(五)づき美しけなり。

妹尼ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る(四)

異なることなき答を口疾く言ふ。忍びてと言へど、皆人慕ひつよ、此處には人少(五)にておはせむを、心苦しがりて、心(六)ばせある少將の尼、左衛門とてある大人しき人、童(七)ばかりぞ留めたりける。

皆出で立ちぬるをながめ出でて、あさましき事を思ひながらも、今は如何はせむと、頼もし人に思ふ人一人ものし給はぬは、心細くもあるかなと、いと徒然なるに、中將の御文あり。「御覽ぜよ」と言へど、聴きも入れ給はず。いとど人も見え

ず、徒然と來し方行く先を思ひ屈し給ふ。少將「苦しきまでも眺めさせ給ふかな。御

(一) 浮舟の

● 妹尼初瀬詣、留守に  
中將來りて浮舟を挑む、  
浮舟老母の室に逃入る

(二) 妹尼

(三) 亡き娘

(四) 亡き娘と別人とは思  
はれぬ浮舟を得たれば

(五) 御禮参りといふ格で

(六) 我と初瀬一同行した  
りとして人に知れる譯もな  
し

(七) 初瀬の様な尊き處に  
て

(八) 浮舟の心

(九) 尼君のいふ様な事を  
いひ聞かせて

(一〇) 今此様な運命にな  
れるを見れば寺詣も效な  
きものと見えら

(一一) 死ぬ事すら出来ず

(一二) 妹尼をいふ、母乳  
母に比較して元よりの知  
人ならぬをいふ

(一三) 強情を張る様には  
言はずして

(一四) 成程臆病らしい人  
ぢやから其答の事と妹尼  
が思ひて

あり美しきに、萬の咎見ゆるして、旦暮の見物にしたり。少し打笑ひ給ふ折は、珍  
らしくめでたきものに思へり。

九月になりて、この尼君初瀬に詣づ。年頃いと心ほそき身に、戀しき人の上も思  
ひ歇まれざりしを、斯くあらぬ人とも覺え給はぬ慰めを得たれば、觀音の御しる

し嬉しとて、かへり申だちて、詣で給ふなりけり。妹尼いざ給へ。人や知らむ  
とする。同じ佛なれど、さやうの所に行ひたるなむ、驗ありてよき例多かる」と

唆かし立つれど、昔母君乳母などの、かやうに言ひ知らせつよ、度々詣でさせし  
を、かひ無きにこそあめめ、命さへ心に叶はず、類なきいみじきめを見るはと、

いと心憂き中にも、知らぬ人に具して、さる道のありきをしたらむよと、そら恐  
ろしく覺ゆ。心強き様には言ひもなさで、浮舟心地のいと悪しうのみ侍れば、さ

やうならむ道の程にも、如何などつよましようなむ」と宣ふ。物怖は然もし給ふべ  
き人ぞかしと思ひて、強ひても誘はず。

(一) 浮舟が少しは我が切なる思を察してくれる様に意見して下され

(二) 我慢が出来る事なら私も此様な色めかしき事は申上げぬ筈

(三) 侘びたる様なる中將の文面を見ては

(四) 君の御歸りの後も慰しかりし

(五) 譯が分らぬのかしらと疑はるゝ程なる浮舟の様子は

(六) 母尼の

(七) 珍らしくもなき尼の返事なれば

(八) 萩の葉が少しの風に音を立つる如く屢々中將の手紙を上すのが面倒なり、以下浮舟の心

(九) 匂宮に關係して其心を見知りし時分の事も

(一〇) 色戀の沙汰は他人も思ひ切る様な尼の姿に  
(一一) 佛を  
(一二) 浮舟は若い女なれど快活な所もなく  
(一三) 妹尼等が

猶少し思し知るばかり教へなさせ給へ。忍ばれぬべくば、すきくしきまで  
も何かは。(一三)

とあるを、いとど侘びたるは涙とどめがたけなる氣色にて、書き給ふ。

妹尼の音にむかしのことも忍ばれてかへりしほども袖ぞ濡れにし

怪しく、物思ひ知らぬにやとまで見え侍る有様は、老人の間はず語にも聞召しけむかし。(五)

とあり。珍らしからぬも見所なき心地して、うち置かれけむかし。

萩の葉に劣らぬ程々に音づれわたる、いとむづかしうもあるかな、人の心は強ちなるものなりけりと、見知りにし折々もやうく思ひ出づるまよに、浮舟猶かよ

る筋の事人にも思ひ離れたすべき様に、疾くなし給ひてよ」とて、經習ひて讀み給ふ。

心の中にも念じ給へり。斯く萬につけて世の中を思ひ捨つれば、若き人とてをか

しやかなる事も殊になく、結ほほれたる本性なめり、と思ふ。容貌の見るかひ

しやかなる事も殊になく、結ほほれたる本性なめり、と思ふ。容貌の見るかひ

しやかなる事も殊になく、結ほほれたる本性なめり、と思ふ。容貌の見るかひ

(一)調子が合はぬ故他の樂器は皆やめたるを、母尼は自分の琴に人々が感心しての事と思ひて

(二)笛の譜をうたふ也  
(三)よく聞えぬ故  
(四)音樂などは嫌ひぢや、浮舟の彈かぬを見て今の人は皆然りと思ひていふなり

(五)浮舟

(六)妹尼

(七)興さめて  
(八)中將の歸りつゝ吹く笛の音

(九)小野の庵の人々は

(一〇)亡き妻の事や浮舟の事

(一一)亡き妻の事に付けても目前につらき浮舟の事に付けても涙のこぼれる事ばかりぢや

調しらべを爪つまこわ爽さらやかに調しらぶ。皆みな異物ことものは聲こゑやめつるを、これをのみめでたりと思おもひて、

母尼「たけふちちりくたりたな」など搔かき返かへし、はやりかに彈ひきたる詞ことばども、わり

なく古ふるめきたり。中將ちゆうしやういとをかしう、今の世いまよに聞きこえぬ言葉ことばこそは彈ひき給たまひけれ」と

譽ほむれば、耳みみほのぐくしく、傍かたはらなる人に問とひ聞ききて、母尼「今いま様の若わかき人は、かや

うなる事ことぞ好このまれざりける。此所こゝに月頃物つきころものし給たまふなる姫君ひめぎみ、容貌かたちはいと清きよらに物

し給たまふめれど、専もら、斯かかるあだわざなどし給たまはず、埋うもれてなむ物ものし給たまふめる」

と、我われがしこにうちあざ笑わらひて語かたるを、尼君あまぎみなどは、かたはらいたしと思おもはす。こ

れに事こと皆みなさめて、歸かへり給たまふほども、山やまおろし吹ふきて聞きこえ來くる笛ふえの音ね、いとをかし

う聞きこえて、起おきあかしたり。  
(九)

つとめて、  
中將ちゆうしやう昨夜よべは、かたぐ心亂こころみだれ侍はべりしかば、急いそぎまかして侍はべりし。

忘わすられぬむかしのことも笛ふえ竹たけのつらきふしにも音ねぞなかれける  
(一一)

(一) 中將の耳に

(二) 琴の音を引立たせる

(三) 母尼が感に堪へて

(四) 上手に

(五) 我が彈法が今のとは變れる故か悴の僧都が云云といひてとめる故

(六) きめつけける故

(七) 變な事をとめだてする僧都哉

(八) 音樂をして

(九) 琴彈きたりとして勤の妨となり罪をつくる事にはあらず

(一〇) 侍女の名

(一一) 倭琴をよこせ

(一二) 僧都がとめるのをさへ恨めしく思ひて中將

に愚痴を溢す程故

(一三) 母尼の心に

(一四) 笛の調子にも構はず

の、今は好まずなり行く物なれば、なか／＼珍らしく哀に聞ゆ。松風もいとよく

もてはやす。吹き合せたる笛の音に、月もかよひて澄める心地すれば、いよく

めであられて、宵惑もせず起き居たり。母尼「嬭は、昔吾妻琴をこそは、こともなく

彈き侍りしかど、今の世には、變りにたるにやあらむ、この僧都の、聞き憎し、念

佛より外のあだわざなせそと、はしたなめられしかば、何かはとて彈き侍らぬな

り。然るは、いとよく鳴る琴も侍り」と言ひつゞけて、いと彈かまほしと思ひたれ

ば、いと忍びやかに打笑ひて、中將「いと怪しき事をも制し聞え給ひける僧都かな。

極樂といふなる所には、菩薩なども皆かゝる事をして、天人なども舞ひ遊ぶこそ

尊かなれ。行ひまぎれ罪得べきことかは。今宵聞き侍らばや」と賺せば、いとよし

と思ひて、母尼「いで主殿のくそ、吾妻とりて」と言ふにも、咳きは絶えず。人々は

見苦しと思へど、僧都をさへ、恨めしげに憂へて言ひ聞かすれば、いとほしくて

任せたり。取り寄せて、たゞ今の笛の音をも尋ねず、唯己が心をやりて、吾妻の

- (一) 此處へ御泊りなきは今夜の月をあはれと思召さぬのか
- (二) つまらぬ歌を
- (三) 浮舟が斯く仰せらるると
- (四) さらば何時迄も月を此處にて眺めん若し浮舟の我が戀を容れてくれる事もあらんかと其をたのみにして
- (五) 母の尼
- (六) 話の途中幾度もせきををして
- (七) 中將を
- (八) お前たち
- (九) 母尼ならんと
- (一〇) 此様を老人が
- (一一) 「居たらむ」の下に「とあるべし
- (一二) 己の若き妻は死し此老尼は生存し居れば也
- (一三) さらば琴彈き給へ
- (一四) 妹尼
- (一五) 中將の笛の音が非常に面白く思はるゝは
- (一六) 私の琴は調子はづれになつて居りませう
- (一七) 當時は琴の琴は一一般に廢たりゆくもの故

妹尼ふかき夜の月をあはれと見ぬひとや山の端ちかきやどにとまらぬ

と、生かたはなる事を、「斯くなむ聞え給ふ」と言ふに、心ときめきして、

中將山のはに入るまで月をながめみむねやのいたまもしるしありやと

など言ふに、この大尼君、笛の音を仄に聞きつけたりければ、流石にめでて出で

來たり。此所彼所うち咳き、あさましき戦き聲にて、なか／＼昔のことなどもか

けて言はず。誰とも思ひわかぬなるべし。母尼いで、その琴の琴彈き給へ。横笛

は、月にはいとをかしき物ぞかし。いづら。くそたち、琴とりて參れ」と言ふに、

それなめりと推量に聞けど、如何なる所にかゝる人、いかで籠り居たらむ、定な

き世ぞこれにつけて哀なる。盤涉調をいとをかしく吹きて、中將いづら。さらば」

と宣ふ。女の尼君、これもよき程のすきものにて、妹尼昔聞き侍りしよりも、こ

よなく覺え侍るは、山風をのみ聞きなれ侍りにける耳がらにや」とて、妹尼いで

や、これは僻事になりて侍らむ」と言ひながら弾く。今様は、をさ／＼なべての人

(一) 尼たちの  
(二) 浮舟が  
(三) 浮舟の心

(四) 「山里は秋こそ殊に  
わびしけれ鹿の鳴く音に  
目をさましつゝ」

(五) 亡き妻を思ひ出すと  
なまじ此處へ来たのが却  
つて愁を求むる様なもの  
で

(六) 新に浮舟に同情を求  
むるもむづかしさうなれ  
ば

(七) 前には此處に遁世せ  
んと思ひしかど此處も世  
の憂目見えぬ山路とは思  
はれず、「世の憂目見えぬ  
山路へ入らんには思ふ人  
こそほだしなりけれ」

(八) 引歌未詳  
(九) 甚しく懸想の氣色を  
示すも此場合面白から  
ず、以下中將の心

(一〇) 妻を失ひし慰めに  
此女を見んと思ひかけし  
譯なるに

(一一) 浮舟が餘り引込み  
過ぎ  
(一二) 妹尼が

手

習

やく氣色どもは、いとうしろめたう覺ゆ。限なく憂き身なりけりと見はててし命(一)

さへ、あさましく長くて、如何なる様に流離ふべきならむ、ひたぶるになき物と(二)

人に見聞き捨てられても歌みなばや、と思ひ臥し給へるに、中將は、大方物思は(三)

しき事のあるにや、いと痛く打歎きつゝ、忍びやかに笛吹き鳴して、中將「鹿の鳴(四)

く音に」など獨言つけはひ、まことに心地なくはあるまじ。中將「過ぎにし方の思ひ(五)

出でらるゝにも、なか／＼心盡しに、今はじめて哀と思すべき人はた難けなれば、(六)

見えぬ山路にもえ思ひなすまじくなむ」と、怨めしけにて出でなむとするに、尼君、(七)

妹尼「など、あたら夜を御覽じさしつる」とて、ゐざり出で給へり。中將「何か、をち(八)

なる里も、試み侍りぬれば」など言ひすさみて、いたく好きがましからむも、流石(九)

に便なし、いと仄に見えし様の、目留りしばかりに、徒然なる心慰めに思ひ出(一〇)

でつるを、餘りもて離れ、奥深けなるけはひも、所の様にあはずすまじ、と思(一一)

へば、歸りなむとするを、笛の音さへ飽かすいと覺えて、(一二)

手習



- (一) 尼君の待ち居らるゝといふによりて尋ね來しに我が目ざす浮舟には嫌はれて途方にくれたり
- (二) 此返事だけでもし給へ
- (三) 其様な色めかしき返事、以下浮舟の心
- (四) 妹尼は若き時は派手を氣風の人なりし其の名残なるべし、代りて次の如く返歌したり
- (五) 君のつちく思はるゝ露は途中の露なるべし、此宿の露にはあるべからず
- (六) 浮舟が
- (七) 露内の人々も
- (八) 浮舟が
- (九) 中將
- (一〇) 中將は浮舟が相手になりても決して案外な結果を生じ心配になる様な事はなき人故
- (一一) 假令色戀の沙汰は無いにしても
- (一二) 尼たちの昔形氣に似合はず

中將まつむしの聲をたづねて來つれどもまたをぎはらの露にまどひぬ  
(二)

妹尼「あないとほし。これをだに」など責むれば、さやうに世づいたらむ事言ひ出で  
(三)

むもいと心憂く、又言ひ初めてば、かやうの折々に責められむも、むづかしう覺  
(四)

ゆれば、答をだにし給はねば、餘りいふかひなく思ひあへり。尼君早うは今めき  
(五)

たる人にぞありける、名残なるべし。

妹尼 秋の野の露わけきたるかりごろもむぐらしける宿にかこつな  
(六)

となむ、煩はしがり聞え給ふめる」と言ふを、内にも、猶かく心より外に世にあり  
(七)

と知らればじむるをいと苦しと思す心の内をば知らで、男君をもあかず思ひ出で  
(八)

つよ、戀ひわたる人々なれば、人々「斯くはかなき序にも、打語らひ聞え給はむに、  
(九)

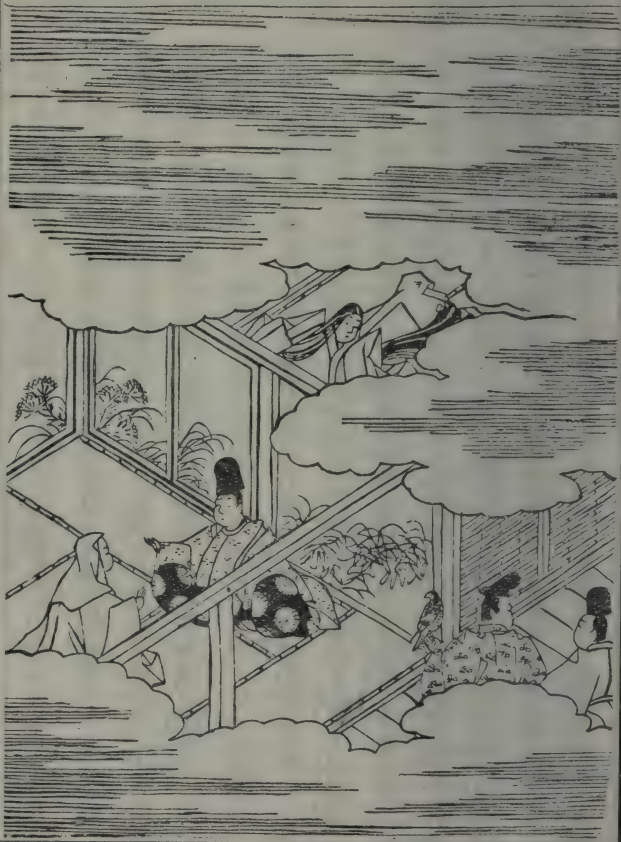
心より外に、世にうしろめたくは見え給はぬものを、世の常なる筋に思しかけず  
(一〇)

とも、情なからぬ程に、御答ばかりは聞え給へかし」など、引き動かさしつべく言ふ。

流石にかよる古代の心どもにはありつかず、今めきつよ、腰折歌好ましけに、若  
(一一)

手

習



(一) 我は

(二) 親達の許さぬに憚りて通世もせざに居る

(三) 自分が屈托勝なせいかして得意げなる女は我身に不似合に思はる

(四) 浮舟

(五) 浮舟に氣のある様を示して

(六) 浮舟は失意の女を欲しとの御願に丁度よく叶ひて共に憂きを語る相手によささうなれど

(七) 人竝に男は持つまじと浮舟がけしからぬ位に世を恨み居る故

(八) 私如き老人でも遁世する時は

(九) 生先長き若い身では今は通世の心深くても行末はどうかかと心配する

(一〇) 浮舟にいふ詞

(一一) 中將に返事をし給へ

(一二) 一寸した事にも

(一三) 返事の仕様も知ら

(一四) 返事は如何

(一五) 前に「秋と契れる」人ある由故其人を私ぞと思ひて返事を待ち居しに

しく侍る。何事も心に叶はぬ心地のみし侍れば、山住もし侍らまほしき心ありな

がら、許い給ふまじき人々に、思ひ障りてなむ過し侍る。世に心地よけなる人の

上は、かく屈したる人の心がらにや、ふさはしからずなむ。物思ひ給ふらむ人に、

思ふ事を聞えばや」など、いと心留めたる様に語らひ給ふ。妹尼「心地よけならぬ御

願は、聞えかはし給はむにつきなからぬ様になむ見え侍れど、例の人にてはあら

じと、いとうたよあるまで世を恨み給ふめれば、残少き齡の人だに、今はと

背き侍る時は、いと物心ほそく覺え侍りしものを、世をこめたる盛にては、遂に

如何となむ見給へ侍る」と、親がりて言ふ。入りても、妹尼「情なし。猶聊にても

聞え給へ。かよる御住居は、漫なる事も哀知ること世の常のことなれ」など、こし

らへて言へど、浮舟「人に物聞ゆらむ方も知らず、何事も言ふかひなくのみこそ」

と、いとつれなくて臥し給へり。客人は、中將「いづら、あな心憂。秋を契れるは、

すかし給ふにこそありけれ」など、怨みつよ、

- (一) 浮舟方へ
- (二) 中將をいふ
- (三) 返事なされても仔細あるまじ
- (四) 返事せぬは無情なり
- (五) 浮舟は偏窟な人で返事せず
- (六) 此庵へ引取りはしたれど我思ふ通りにならぬ故持扱ひて居る
- (七) 浮舟が返事せぬも尤と、中將の心
- (八) 中將再小野を訪ふ、笛を吹く、老翁せる母の得意の倭琴
- (九) 中將の心
- (一〇) 少將の尼
- (一一) 浮舟を
- (一二) 少將尼に取次がせて浮舟へ傳へさせし也
- (一三) 浮舟が返事もせぬけ外に契れる男があるらしく思はる、誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし
- (一四) 妹尼が
- (一五) 浮舟の

手

習

と書きて、少將の尼して入れたり。尼君も見給ひて、妹尼「この御かへり書かせ給へ。いと心憎き氣つき給へる人なれば、うしろめたくもあらじ」と唆かせば、浮舟「いと怪しき手をば、いかでか」とて更に聽き給はねば、妹尼「はしたなき事なり」とて、尼君、

妹尼聞えさせつる様に、世づかず人に似ぬ人にてなむ。

うつしうゑて思ひみだれぬをみなへしうき世をそむく草の庵に  
とあり。此度は然もありぬべしと、思ひゆるして歸りぬ。

文などわざとやらむは流石にうひくしく、仄に見し様は忘れず、物思ふらむ筋  
何事と知らねど、哀なれば、八月十日あまりのほどに、小鷹狩の序におはした

り。例の尼呼び出でて、中將「一目見しより、靜心なくて」など宣へり。答へ給ふ

べくもあらねば、尼君、妹尼「まつちの山のとなく見給ふる」と言ひ出し給ふ。對面  
し給へるにも、中將「心苦しき様にて物し給ふと聞き侍りし人の御上なむ、殘ゆか

(一)中將が又小野へ  
 (二)中將が立寄るかも知れぬと思ひて用意したれば

(三)娘の存生中が思ひ出さるゝ様な變態

(四)厄ではあれど  
 (五)隠れて居る女は

(六)亡き娘の事を忘れかねて

(七)世話する

(八)頭から浮舟に懸想の心で尋ね来たににしても斯く山深き路を遙に來る勞は察して貰ふべきなるに  
 (九)わが亡き妻に擬へて世話せらるゝ女ならば私にも引合せて下されてもよい筈

(一〇)浮舟を人の物にしたくなし、遠方なれど我がものにして見たし

またの日歸り給ふにも、中將「過ぎ難くなむ」とておはしたり。然るべき心遣した

りければ、昔思ひ出でたる御まかなひの、少將の尼なども、袖口さま異なれども

をかし。いとど涙目に尼君はものし給ふ。物語の序に、中將「忍びたる様に物し給

ふらむは、誰にか」と問ひ給ふ。煩はしけれど、灰にも見つけ給ひてけるを隠し顔

ならむも怪しとて、妹尾「忘れ侘び侍りて、いとど罪深くのみ覺え侍りつる慰めに、

この月頃見給ふる人になむ。如何なるにか、いと物思しけき様に、世にありと

人に知られむ事を苦しげに思ひて物せらるれば、かよる谷の底には誰かは尋ね聞

えむと思ひつゝ侍るを、いかでかは聞き顯させ給ひつらむ」と答ふ。中將「うちつ

け心ありて參り來むにだに、山深き道のかごとは聞えつべし。まして思しよそふ

らむ方につけては、ことごとくに隔て給ふまじき事にこそは。如何なる筋に世を恨

み給ふ人にか。慰め聞えばや」など、ゆかしげに宣ふ。出で給ふとて、疊紙に、

中將あだしのの風になびくな女郎花われしめゆはむ道とほくとも

(一一〇)

(一) 妹尼が

(二) 中將の弟

(三) 妹尼位の

(四) 僧の寂しき様子に目なれて自然優美な處を失ふ様になるべし

聞ゆれ」と宣ふ様も、實に何心なく美しく、打笑みてぞまもり居給へる。

中將は山におはし著きて、僧都も珍らしがりて、世の中の物語し給ふ。その夜は

とまりて、聲尊き人々に經など讀ませて、夜一夜あそび給ふ。禪師の君、細なる

物語などする序に、中將、小野に立寄りて、物哀にもありしかな。世を捨てたれど、

猶さばかりの心ばせある人は、難くこそ」など宣ふ序に、中將「風の吹き揚げたり

つる隙より、髪いと長くをかしけなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつら

む、立ちて彼方に入りつるうしろで、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、

よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。旦暮見るものは法師なり。自ら目な

れて覺ゆらむ。不便なることなりかし」と宣ふ。禪師の君、「この春初瀬に詣で

て、怪しくて見出でたる人となむ聞き侍りし」とて、見ぬ事なれば細には言はず、

中將「哀なりける事かな。如何なる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞ、然る所に

は隠れ居けむかし。昔物語の心地もするかな」と宣ふ。

(一)昔の通り我が契にし  
ておきたし

(二)中將の今の妻の邸

(三)父の邸にのみ中將が  
居るといふ噂なり

(四)浮舟にいふ也

(五)斯うなるも運命ぢや  
と謂めて

(六)なき娘の事も

(七)浮舟を戀ひ慕ふべき  
人々

(八)年月のたつ間には段  
段愁も薄らぐものぞ

(九)別世界に

(一〇)我を

(一一)只一筋に尼君を力  
にして居る

流石きすがに思おぼし咎とがむるこそこなど、古代こたの人ひとどもは物ものめでをしあへり。妹尼いいと清きよけに

あらまほしくも、ねびまさり給たまひにけるかな。同じおなくば昔むかしの様やうにても見奉みたまらば

や」とて、妹尼い藤中納言ふじうちゅうごんの御おんあたりには、絶たえず通かよひ給たまふ様やうなれど、心こころも留とどめ給たまは

ず、親おやの殿どのがちになむ、物ものし給たまふとこそ言いふなれ」と、尼君あまぎみも宣のたまひて、妹尼い心憂こころうく

物ものをのみ思おぼし隔へだてたるなむいとつらき。今いまは猶なほ、然さるべきなめりと思おぼしなして、

晴々はれはしくもてなし給たまへ。この五年六年いつとせむとせ、時ときの間まも忘れわすれず、戀こひしく悲かなしと思おもひつる

人ひとの上うへも、斯かく見奉みたまりて後のちよりは、こよなく思おもひ忘わすれられて侍はべる。思おもひ聞きえ給たまふ

べき人々ひととよ世よにおはすとも、今いまは世よに亡なきものにこそは、やうく思おもしなりぬらめ。

萬よろづの事ことさしあたりたる様やうには、えしも有あらぬわざになむ」と言いふにつけても、いと

ど涙なみだぐみて、浮舟うきふね隔へだて聞きゆる心こころは侍はべらねど、怪あやしくて生いきかへりける程ほどに、萬よろづの

事夢ゆめの様やうにたどられて、あらぬ世よに生うまれたらむ人は斯かかる心こころ地ちやすらむと覺おぼえ侍はべ

れば、今いまは知しるべき人世ひじよにあらむとも思おもひ出いでず、ひたみちにこそ睦むつまじく思おもひ

(一) 浮舟が見えたる也  
(二) 斯かる尼共の中ほどの様な女が居るのかと

(三) 少將尼が  
(四) 少將尼の心

(五) 中將が浮舟に思ひつくに違ひなし  
(六) 妹尼の娘は浮舟とは比べものにならぬに其さへ

(七) 妹尼が娘の事を忘れかねて  
(八) 思もよらぬ浮舟を得て

(九) 浮舟の  
(一〇) 中將の心

(一一) 従者等の  
(一二) 「此處にしも何句ふらん女郎花人の物いひさがにき世に」  
(一三) 世間の噂を中將が氣にする處が面白い

手

習

序に、中將かの廊のつま入りつる程、風の騒がしかりつる紛に、簾の際より、な

べての様にはあるまじかりつる人の、打垂れ髪の見えつるは、世を背き給へるあ

たりに誰ぞとなむ見驚かれつる」と宣ふ。姫君の立出で給へりつるうしろでを、見

給へりけるなめりと思ひて、まして細に見せたらば、心とまり給ひなむかし、昔

人はいとこよなく劣り給へりしをだに、まだ忘れ難くし給ふめるをと、心ひとつ

に思ひて、少將過ぎにし御事を忘れ難く、慰めかね給ふめりし程に、覚えぬ人を

得奉り給ひて、且暮の見物に思ひ聞え給ふめるを、打解け給へる御有様を、いか

で御覽じつらむ」と言ふ。斯かる事こそはありけれとをかしくて、何人ならむ、實

にいとをかしかりつと、仄なりつるをなかく思ひ出づ。細に問へど、その儘に

も言はず。少將自ら聞し召してむ」とのみ言へば、うちつけに問ひ尋ねむも様悪し

き心地して、「雨も止みぬ。日も暮れぬべし」と言ふに、唆されて出で給ふ。前近

き女郎花を折りて、少將「何句ふらむ」と口ずさびて、獨言ち立てり。「人の物いひを、



- (一) 浮舟の服装
- (二) さつぱりしたる
- (三) 蘇芳に黒みを帯びたる色
- (四) 服装なども尼の中の生活は昔とかはりて
- (五) しなやかならず手ざはり荒き着物を著て居る様却て美し
- (六) 妹尼の娘の様にのみ思はるゝに
- (七) 浮舟を中將の妻にしたし
- (八) 浮舟の心
- (九) どの様な様でも男を待ちたらは
- (一〇) 薰匂などの事が思ひ出されていやなるべし
- (一一) 男の關係は
- (一二) 少將の尼
- (一三) 妹尼の娘の生きて居し時分仕へ居し女等は
- (一四) 私が薄情で來ぬと思はれるならん
- (一五) 少將の尼は中將夫婦に馴染の人故

ながめ出し給へる様、いと美し。白き單衣のいと情なくあざやぎたるに、袴も檜皮色(一)にならひたるにや、光も見えず黒きを著せ奉りたれば、斯かる事どもも見し(二)には變りて怪しくもあるかな、など思ひつよ、こはぐしういらよぎたる物ども著給へるしも、いとをかしき姿なり。御前なる人々、「故姫君のおはしまいたる心地のみし侍るに、中將殿をさへ見奉れば、いと哀にこそ。同じくば昔の様にておはしまさせばや。いとよき御間ならむかし」と言ひあへるを、あないみじや、世にありて、如何にもく人に見えむこそ、それにつけてぞ昔の事思ひ出でらるべき、さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなむ、と思ふ。(三)

尼君入り給へる間に、客人、雨の氣色を見煩ひて、少將といひし人の聲を聞き知りて、呼びよせ給へり。中將昔見し人々は、皆此處に物せらるらむやと思ひながら、斯う參り來ることも難くなりたるを、心淺きにや、誰もく見なし給ふらむなど宣ふ。仕うまつり馴れにし人にて、哀なりし昔の事ども思ひ出でたる(四)

(二五)

- (一) 斯く御引込になつて仕舞ひし故御無沙汰勝になる
- (二) 出かけんとすれば行くなら已も同行せんなどと附纏はるゝ人々に邪魔をされる
- (三) 同行者を斷りて
- (四) 當世風の人眞似なり
- (五) 世間の輕薄な風に染まらぬ御志と有難く思はるゝ機會が多し
- (六) 供の人々に
- (七) 來なれたる妻の里なれば食事するも氣が置けず
- (八) 死せし娘よりも、以下妹尼の心
- (九) 中將の
- (一〇) 他人になりて仕舞ひたるが口惜し
- (一一) せめて子供でもあればよいにと
- (一二) 浮舟の事を
- (一三) 浮舟
- (一四) 自分は又自分で

手

習

の中あはれに、過ぎにし方の事ども、思ひ給へられぬ折なきを、あながちにすみ離れ顔なる御有様に、怠りつよなむ。山籠も羨ましく、常に立ち侍るを、(一)くばなど、慕ひ纏さるゝ人々に、妨げらるゝ様に侍りてなむ。今日は皆省き棄て物し侍りつる」と宣ふ。妹尼「山籠の御羨は、なか／＼今様だちたる御物まねびになむ。昔を思し忘れぬ御心ばへも、世に靡かせ給はざりけると、疎ならず思う給へらるゝ折多く」など言ふ。人々に水飯などやうの物食はせ、君にも蓮實など様の物出したれば、馴れにしあたりにて、さやうの事もつよみなき心地して、村雨の降り出づるに留められて、物語しめやかにし給ふ。いふかひなくなりし人よりも、この君の御心ばへなどの、いと思ふ様なりしを、餘所のものに思ひなしたるなむ、いと悲しき、など忘れがたみをだに留め給はずなりにけむと、戀ひ忍ぶる心なりければ、たまさかに斯く物し給へるにつけても、珍らしく哀に覺ゆべかめるまよに、問はず語もし出でつべし。姫君は、われは我と思ひ出づる方多くて、(二)(三)(四)

(一) 妹尼が家内の人々に  
も知らせず

(四) 僧都の妹の娘の夫た  
りし中將小野を訪ひて浮  
舟を見る、僧都に浮舟の  
身の上を聞く、浮舟を挑  
む

(二) 妹尼

(三) 中將の弟

(四) 横川へ

(五) 小野へ

(六) 浮舟が

(七) 禪の

(八) 此處も宇治と齊しく

(九) 住みなれたる女等は

(一〇) 中將も狩衣姿にて

(一一) 中將を請じたれば

(一二) 中將が

(一三) 物の分つた風をし  
て居る

(一四) 月日が立つにつれ

(一五) 此山里の光榮を添  
ふる君の御出が未だ續き  
居るを不思議に思ふ、よ  
くも尋ね下さつたの意

とて、委しき事ある人々にも知らせず。

尼君の昔の婿の君、今は中將にて物し給ひける、弟の禪師の君、僧都の御許にも

のし給ひける、山籠したるを訪らひに、兄弟の君たち常に上りけり。横川に通ふ

道の便によせて、中將此處におはしたり。前うち逐ひて、あてやかなる男の入り

來るを見出して、忍びやかにておはせし人の御有様けはひぞ、さやかに思ひ出で

らるよ。これもいと心細き住居のつれなれど、住みつきたる人々は、物清け

にをかしうしなして、垣ほに植ゑたる瞿麥も面白く、女郎花桔梗など咲きはじめ

たるに、いろくの狩衣姿の男どもの若き數多して、君も同じ装束にて、南面に

呼びするたれば、うち眺めて居たり。年廿七八の程にて、ねび調ひ、心地なから

ぬ様もてつけたり。尼君障子口に几帳立てて、對面し給ふ。まづ打泣きて、妹尼年

頃のつもりには、過ぎにし方いとど氣遠くのみなむ侍るを、山里の光に猶待ち聞

えさする事の、打忘れずやみ侍らぬを、且はあやしく思ひ給ふる」と宣へば、中將心

- (一) 乳母が
- (二) 乳母か
- (三) 右近以外には
- (四) 此處に不斷居る人
- (五) 官仕せず別の生活をして居る者も
- (六) 以下浮舟の心
- (七) 浮舟の關係ある處へ此人々が
- (八) 浮舟が生きて居る由を
- (九) 薰句などから我が投身以來の事情を推量されると碌な推量はされざるべきを思へば
- (一〇) 京から來る人々に
- (一一) 妹尼が手許の召使にしたる
- (一二) 二都の人々の意、「名にし負はゞいざ事とはん都鳥わが思ふ人はありやなしや」との詞をとる
- (一三) 前に浮舟の上める歌の詞をとる、「ひたぶるに嬉しからまし世の中にあらぬ所と思はましかば」
- (一四) 面倒な譯のある人ならんと察して

手

しを、如何にあへなき心地しけむ、何處にあらむ、我世に在るものとはいかでか  
 知らむ。同じ心なる人もなかりし儘に、萬隔つる事なく語らひ見馴れたりし右近  
 (三) なども、をりくは思ひ出でらる。若き人の、かよる山里に今はと思ひたえ籠る  
 は、難きわざなりければ、唯いたく年經にける尼七八人ぞ、常の人にてはありけ  
 る。それらが女孫やうの者ども、京に宮仕するも、こと様にてあるも、時々ぞ  
 來通ひける。かやうの人につけて、見しわたりに往き通ひ、自ら世にありけりと  
 (六) 誰にもく聞かれ奉らむこと、いみじく恥かしかるべし。如何なる様にてさす  
 らへけむなど、思ひやりよろづ怪しかるべきを思へば、斯かる人々にかけても見  
 (九) えず。たゞ侍従、こもきとて、尼君のわが人にしたりける二人をのみぞ、この御  
 方に言ひ分きたりける。みめも心様も、昔見し都鳥に似たることなし。何事につ  
 (二二) けても、「世の中にあらぬ所」はこれにやあらむとぞ、且は思ひなされける。斯く  
 (二三) のみ人に知られじと忍び給へば、誠(二四)に煩はしかるべき故ある人にも物し給ふらむ

習

(一) 我は幼時より運翫き身て、以下浮舟の心

(二) 音楽などを習ふべき機会もなかりしかば

(三) 少しも面白き處もなく育ちし事哉と

(四) 老いたる尼等が慰みに琴など弾くを見るにつけては

(五) 我身の上が

(六) 愁に堪へずして身を投げし我を斯く救ひ留めしは誰の所爲ぞ恨めし

(七) 斯く助けられて生きて居るのが心外にてつらく思はるれば

(八) 生きて居るとも

(九) 自殺と決心せし時は、以下浮舟の心

(一〇) 他の人々は

(一一) 我を人並の物にたしと熱心に思ひ居しに我死せりと聞かば

ふ人は、琵琶弾きなどしつと遊ぶ。妹尾斯かるわざはし給ふや。徒然なるに」など

言ふ。昔も怪しかりける身にて、心のどかに、さやうの事すべき程も無かりしか

ば、聊かをかき様ならずも生ひ出でにけるかなと、かくさだ過ぎにける人の心

をやるめるをりくにつけては思ひ出づ。猶あさましく物はかなかりけると、我

ながら口惜しければ、手習に、

浮舟身をなけし涙の河のはやき瀬をしがらみかけてたれかとどめし

思の外に心憂ければ、行末もうしろめたく、疎ましままで思ひやらる。月のあか

き夜なく、老人どもは艶に歌よみ、古思ひ出でつよ、様々の物語などするに、

答ふべき方も無ければ、つくぐと打眺めて、

浮舟われかくてうき世の中にもめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに

今は限と思ひはてし程は、戀しき人多かりしかど、こと人々はさしも思ひ出でら

れず、唯親いかに惑ひ給ひけむ、乳母萬に、いかで人並々になさむと思ひ入られ

いまかぎりおも (九) (一〇) (一一)



(一) なき眞の形見と見るべき女を得たしと

(二) 思ひもよらぬ浮舟が

(三) 妹尼の様

(四) 宇治よりは、以下小野の住居の有様をいふ

(五) 人眞似しつゝ

(六) 鳴子

(七) 浮舟が昔の常陸に居し頃の事も思ひ出されて

(八) 落葉宮

(九) 一部分は山に造りかけたる家なれば

(一〇) 妹尼  
(一一) 仕ふる尼の名

と思ひ入りて、形をも變へ、かよる山里には住み始めたるなりけり。世と共に戀

ひわたる人のかたみにも、思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしがなと、徒

然と心細きまよに、思ひ歎きけるを、かく覺えぬ人の、容貌けはひも勝り様なる

を得たれば、現の事とも覺えず、怪しき心地しながら、嬉しと思ふ。ねびにたれ

ど、いと清けに由ありて、有様もあてはかなり。昔の山里よりは、水の音も和や

かなり。造り様ゆるある所の木立おもしろく、前栽などもをかくしく故を盡したり。

秋にもなりゆけば、空の氣色も哀なるを、門田の稻刈るとて、所につけたる物ま

ねびしつゝ、若き女どもは歌謠ひ興じあへり。引板ひき鳴らす音もをかくしく、見

し東路などの事なども思ひ出でられて。

かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今少し入りて、山にかたかけたる家な

れば、松蔭しゆく風の音もいと心細きに、徒然と行をのみしつゝ、何時となく

しめやかなり。尼君ぞ、月などあかき夜は、琴など弾き給ふ。少將の尼君などい

(一〇) 尼君ぞ、月などあかき夜は、琴など弾き給ふ。少將の尼君などい

(一) 夢中で居る間に  
(二) 従來の身の上

(三) 我を連れ行きし様に思ふ

(四) 今も此世に生きて居るとは知られたくなし

(五) 浮舟が  
(六) 竹取物語の姫君の名、竹取の翁が竹の節の中より見附けたる也  
(七) かぐや姫君は後天上に上り去りたれば也  
(八) 妹尼が  
(九) 母の尼  
(一〇) 妹尼

手習

ふ。何處どこに誰たれと聞きえし人ひとの、然さる所ところにはいかでおはせしぞ」とせめて問とふを、いと恥はづかしと思おもひて、浮舟うきふね怪あやしかりし程ほどに、皆みな忘わすれたるにやあらむ、ありけむ様さまなども更さらに覺おぼえ侍はべらず。たゞ仄ほのかに思おもひ出いづる事こととては、唯ただいかで此この世よにあらじと思おもひつよ、夕暮ゆふぐれごとに端はし近くて眺ながめし程ほどに、前まへ近く大おほなる木きのありし下したより、人ひとの出いで來きて、率あて行く心地こころなむせし。それより外ほかの事ことは、我われながら誰たれともえ思おもひ出いでられ侍はべらず」と、いとらうたけに言いひなして、浮舟うきふね世よの中に猶なほありけりと、いかで人ひとに知しられじ。聞ききつくる人ひともあらば、いとみじうこそ」とて泣ない給たまふ。あまり問とふをば苦くるしと思おもはしたれば、え問とはず。かぐや姫ひめを見みつけたりけむ竹取たけとりの翁おきなよりも、珍めづらしき心地こころするに、如何いかなる物ものの隙ひまに消きえ失うせむとすらむと、靜心しづこころなくぞ思おもひける。この主人あるじもあてなる人ひとなりけり。女むすめの尼君あまぎみは、上達部かんだちのの北きたの方かたにてありけるが、その人ひと亡ひなくなり給たまひて後のち、女むすめたゞ一人ひとりをいみじくかしづきて、よき君達きみたちを婿むこにして思おもひ扱あつかひけるを、その女むすめの君きみの亡なくなりければ、心憂こころうしいみじ



(一)あれ程の容態が直りたる位の事故中々命強く

(二)食事し

(三)妹尼が早く全快せよかしと思ひ居るに

(四)尼にならねば生きて居やうがない

(五)かたばかり髪を切り取りて尼になりたる積にする也

(六)形式ばかりの出家は氣がすまねど浮舟は從來鈍き性質の人故

(七)養生をさせ上

(八)妹尼

(九)浮舟を

(一〇)妹尼が

(一一)髪を

(一二)老女のみ多き此輩故浮舟が目立ちて、百年に一年たちぬつくも髪我を戀ふらし俤に見ゆ

伊勢物語の歌

(一三)浮舟を見る尼等の感じ

(一四)今にも飛んで行つて仕舞ひさうに思ふ也

(一五)私の方では是程に親切を盡すになせ分隔てをなさるぞ

たり給へど、さばかりにて生き留まりたる人の命なれば、いと執念くて、やう

やう頭もたけ給へば、物まるりなどし給ふにぞ、なかく面瘡せもて行き、いつ

しかと嬉しく思ひ聞ゆるに、浮舟「尼になし給ひてよ。然てのみなむ生く様もある

べき」と宣へば、妹尼「いとほしけなる御様を、いかでか然はなし奉らむ」とて、唯

頂ばかりをそぎ、五戒ばかりを受けさせ奉る。心もとなけれど、もとよりお

れおれしき人の心にて、えさかしく強ひても宣はず。僧都は、「今は斯ばかりにて、

勞やめ奉り給へ」と言ひ置きて、のほり給ひぬ。

夢の様なる人を見奉るかなと、尼君は喜びて、せめて起しすゑつよ、御髪手づか

ら梳り給ふ。然ばかりあさましう引き結ひて、打遣りたりつれど、いたくも亂れ

ず。解き果てたれば、つやくと清らなり。一年たらぬつくも髪多かる所にて、

目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむ様に思ふも、危き心地すれど、

妹尼「などかいと心憂く、斯ばかりいみじく思ひ聞ゆるに、御心を隔てては見え給

は

は

は

は

(一)句官  
 (二)其時から氣が變になりたりと思はる  
 (三)自殺の本意をも遂げざりし事上と

(四)人心地つかざりし時分は夢中で少しは物を食ふ事もありしに  
 (五)正氣になりては却て  
 (六)今迄引續き熱氣のありしはさめて

(七)浮舟の惜しき器量を見れば

(八)浮舟が

つ、つくぐと居たりしを、いと清けなる男の寄り来て、いざ給へ、己が許へ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞えし人のし給ふと覺えし程より、心地惑ひにけるなめり、知らぬ所にする置きて、この男は消え失せぬと見しを、遂にかく本意の如もせずなりぬる、と思ひつよ、いみじう泣くと思ひし程に、その後の事は、絶えて、如何にもく覺えず、人の言ふを聞けば、多くの日頃も經にけり、如何に憂き様を、知らぬ人に扱はれ見えつらむと、恥かしく、遂に斯くて生きかへりぬるかと思ふも口惜しければ、いみじく覺えて、なかくしづみ給へりつる日頃は、現心もなき様にて、物いさよか參るをりもありつるを、露ばかりの湯をだにまゐらず。妹尾如何なれば、かく頼もしけ無くのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどし給へる事は醒め給ひて、爽やかに見え給へば、嬉しく思ひ聞ゆるを」と、泣くく、搥む折なく添ひ居て扱ひ聞え給ふ。ある人々も、あたらしき御様容貌を見れば、心を盡してぞ惜みまもりける。心には、猶いかで死なむとぞ思ひわ

(一) 浮舟が一人て居る處を

(二) 浮舟を保護せし故、長谷の觀音の守りし也

(三) 物怪を移されたる人の氣力の弱き故にや

(四) 浮舟の

(五) 見知りたる顔はなく、浮舟の心

(六) 自分の住所も自分の何人なるかをもよく覺え居らず

(七) 浮舟の心

(八) しひて

(九) 以下浮舟の回想

(一〇) 何方へ行つてよいか分らず

(一一) 中途はんばで

(一二) 死にそこなひて恥かしく人に見附けられるよりは

(一三) 我身を

て、いと暗き夜、一人ものし給ひしを取りてしなり。されど觀音、とさまかうざまに育み給ひければ、この僧都に負け奉りぬ。今はまかりなむ」とのよしる。

僧都「斯くいふは何ぞ」と問へば、憑きたる人、物はかなきけにや、はかなくしくも

言はず。正身の心地は爽かに、いさよか物覺えて見廻したれば、一人見し人の顔

はなくて、皆老法師のゆがみ衰へたる者どものみ多かれば、知らぬ國に來にける

心地していと悲し。ありし世の事思ひ出づれど、住みけむ所、誰と言ひし人とだ

に、確にはかなくしうも覺えず。唯、我は限とて身を投げし人ぞかし、何處に來

にけるにか、とせめて思ひ出づれば、いといみじと物を思ひ歎きて、皆人の寢た

りしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風烈しく川波も荒う聞えしを、一人物恐ろ

しかりしかば、來し方ゆく末も覺えて、簀子の端に足をさし下しながら、行くべ

き方も惑はれて、歸り入らむも中空にて、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちし

を、嗚呼がましくて人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつ

(二二)

(二二)

(二二)

(二二)

(二二)

(二二)

(一)我はつまらぬ僧故  
(二)戒律の中に

(三)批難を蒙むるは  
(四)運命なるべし

五)僧部の事につきてつ  
まらぬ噂を立つる事あら  
ば

(六)浮舟に憑き居る物怪  
を他の人にうつして

(七)死後に執心を残して  
中有に迷ふ間に  
(八)宇治の宮をいふ  
(九)一部分は取り殺せし  
に、大君をいふ  
(一〇)浮舟は

手

習

し、弟子どもも言ひて、人に聞かせじと隠す。僧都、「いであなかま。大徳たち、わ

れ無慚の法師にて、忌むことの中に、破る戒は多からめど、女の筋につけて、ま

だ謗取らず、過つことなし。齡六十に餘りて、今更に人のもどき負はむは、然る

べきにこそはあらめ」と宣へば、弟子「善からぬ人の、物を使な、言ひなし侍る時

には、佛法の瑕となり侍ることなり」と、快からず思ひて言ふ。僧都「この修法の

程にしるし見えすば」と、いみじき事どもを誓ひ給ひて、夜一夜加持し給へる曉

に、人にかり移して、何様のものの、斯く人を惑はしたるぞと、有様ばかり言は

せまほしうて、弟子の阿闍梨、とりぐに加持し給ふ。月頃はいさよかも顯れざ

りつる物怪、調せられて、物怪「己は、此處までまうで来て、かく調せられ奉る

べき身にもあらず。昔は行せし法師の、いさよかなる世に恨を留めて、漂ひあ

りきし程に、よき女のあまた住み給ひし所に住み著きて、かたへは失ひてしに、こ

の人は心と世を恨み給ひて、我いかで死なむといふ事を、晝夜宣ひしに、便を得

(一)命が

(二)小野へ

(三)妹尼が

(四)むさき事

(五)抑も見附けし以來引  
續きて珍しき

(六)すばらしき御器量か  
な

(七)容貌美しく生れたる  
は前生に善事を行ひたる  
報なりしといふ佛説

(八)不仕合にて

(九)それでは無いかしち  
と

(一〇)賜はるにしても賜  
はるにつきての次第道行  
があるべし

(一一)僧都の心

(一二)噂があらは

しも見附けけめ。試に助け果てむかし。それに止まらずば、業盡きにけりと思は

む」とて、下り給ひけり。悦び拜みて、月頃の有様をかたる。妹尼かく久しう煩ふ

人は、むづかしき事自らあるべきを、聊衰へず、いと清けにぬぢけたる所な

くのみ物し給ひて、限と見えながらも、斯くても生きたるわざなりけり」など、おほ

なおほな泣くく宣へば、僧都「見附けしより、珍らかなる人の御有様かな。いで」

とて、さし覗きて見給ひて、「實にいと警策なりける人の御容面かな。功德の報に

こそ、かよる容貌にも生ひ出で給ひけめ。如何なる違ひ目にて、斯く傷はれ給ひ

けむ。若し然にやと聞き合せらるゝ事も無しや」と問ひ給ふ。妹尼「更に聞ゆる事

もなし。何かは、初谷の觀音の賜へる人なり」と宣へば、僧都「何か、それ縁にし

たがひてこそ導き給ふらめ。種なき事はいかでか」など宣ふ、怪しがり給うて、修

法はじめたり。公の召にだに隨はず、深く籠りたる山を出で給ひて、漫に斯かる

人の爲になむ行ひさわぎ給ふと、物の聞えあらむ、いと聞きにくかるべし、と思

(一)早く人並の身體にしてやりたしと思ふに  
(二)起上る時もなく、浮舟の様

(三)妹尼が

(四)長谷へ同行せし僧

(五)護摩をたかする也  
僧部浮舟を加持す、

浮舟の蘇生、素姓をつゝみて語らず

(六)引續き

(七)山を下りて来て

(八)深くとり廻きてはなれぬ廢物が

(九)強く人に乞ふ時に相手をやびかくる詞

(一〇)京へ出ては大儀なちんが此處まで來る方には差支なからん

(一一)あの儘に捨てたらば殘念なりしなるべし

せたるにや、などぞ思ひよりける。「河に流してよ」といひし一言より外に、物も更に宣はねば、いと覺束なく思ひて、いつしか人にもなして見むと思ふに、つくづくとして起きあがるよもなく、いと怪しくのみ物し給へば、遂に生くまじき人にやと思ひながら、打捨てむもいとほしくいみじ。夢語もし出でて、初より祈らせし阿闍梨にも、忍びやかに芥子燒くことせさせ給ふ。  
(四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一)

都の御許に、

妹尼猶おり給ひて、この人助け給へ。流石に今日までもあるは、死ぬまじかりける人を、憑きしみ領じたるもの、去らぬにこそあめれ。あが佛、京に出で給はばこそはあらめ、此處まではあへなむ。  
(七) (八) (九) (一〇) (一一)

などいみじき事を書き續けて、奉れ給へれば、僧罵いと怪しき事かな。斯くまでもありける人の命を、やがて打ち捨ててましかば。然るべき契ありてこそは、我

(一)母の尼

(二)浮舟

(三)大原の内也  
(四)母妹二人の尼は

(五)妹尼

(六)道路に疲勞を感じたる其の残りて暫時煩ひもしたれど

(七)横川の寺へ

(八)途中で斯様々々の女を連れて來たり杯といふ事は

(九)母尼等の心

(一〇)あの様な處へ捨て置かせたるにや

心苦しき事」と言ひあへり。車二つして、老人の乗り給へるには、仕うまつる尼二人、次にはこの人を臥せて、傍に今一人乗り添ひて、道すがら行きもやらず、車とどめて湯参りなどし給ふ。比叡坂本に、小野といふ所にぞ住み給ひける。其處におはし著く程いと遠し。人々「中宿をぞ設くべかりける」など言ひて、夜更けておはし著きぬ。僧都は親をあつかひ、女の尼君はこの知らぬ人をはぐくみて、皆抱きおろしつゝ休む。老の病の何時ともなきが、苦しと思ひ給へし遠道のなごりこそ、しばし煩ひ給ひけれ、やうくよろしくなり給ひにければ、僧都はのほり給ひぬ。

斯かる人なむ率て來たるなど、法師のあたりには善からぬ事なれば、見ざりし人にはまねばす。尼君も皆口がためさせつゝ、もし尋ね來る人もやあると思ふも、しづ心なし。いかで、さる田舎人の住むあたりに、斯かる人落ちあふれけむ、物詣などしたりける人の、心地など煩ひけむを、繼母など様の人のたばかりて、置か

(二〇)

(一)前に僧都に仕へしものが僧都が此處に逗留せる由を聞きて

(二)浮舟  
(三)薫が浮舟に  
(四)此性體しれぬ女は、僧都の心

(五)眼前に在るを見ながら眞にある者とも思はれず

(六)火葬の火は  
(七)人をやく様な氣色は見えざりしに、屍骸はなく衣類調度などはかり焼きたる事なれば然見えしなり

(八)此下衆は死の穢に觸れたる者なればとて内へは入れず返したり

(九)薫  
(一〇)大君

(一一)八宮の御領が亡くなられしとは  
(一二)今は女一宮以外に薫の大事がる女はある筈なし

(一三)母の尼  
(一四)ぶさがりなりし方角もよくなりたれば  
(一五)住所の小野へ  
(一六)浮舟は

手

そのわたりの下衆などの、僧都(二)に仕うまつりける、かくておはしますなりとて、

訪ひ出で来るも、物語などして言ふを聞けば、下衆(一)「故八宮の御女、右大將殿の通(三)ひ給ひしが、殊(四)に悩み給ふこともなくて、俄(五)に隠れ給へり」とて騒ぎ侍る。その御

送葬(六)の雑事ども仕う奉り侍るとて、昨日はえ參り侍らざりし」と言ふ。さやうの人

の魂(七)を、鬼(八)のとりもて來たるにや、と思ふにも、且見るくあるものとも覺え

ず、危(九)く恐しと思す。人々、「昨夜見やられし火は、しか事々しき氣色も見えざり

しを」と言ふ。下衆(一〇)「殊更(一)ことそぎて、嚴(二)しくも侍らざりし」と言ふ。穢(三)らひたる人と

て、立ちながら追(四)ひ返しつ。人々(五)「大將殿は、宮(六)の御女もち給へりしは亡(七)せ給ひ

て、年頃(八)になりぬるものを、誰(九)を言ふにかあらむ。姫宮(一〇)を置き奉り給ひて、世

に他心(一)おはせじ」など言ふ。(二)

尼君(三)よろしくなり給ひぬ。方(四)もあきぬれば、斯(五)くうたてある所に久(六)しうおはせむ

も便(七)なしとて歸(八)る。人々(九)「此人(一〇)は猶(一)いと弱(二)けなり。道の程(三)も如何(四)ものし給はむ。いと

(二五)  
(二六)

習



(一) 妹尼をはじめ人々が

(二) 此女が非常に美しき器量故死なせたくなしと思ひて

(三) 見るものは皆

(四) わがじき娘の代りとして佛が授けて下さつたものと思ふに  
(五) 却つて一層の悲を増すべし

(六) 我は無益の人なり

(七) ちの嫌な所にどうして居たぞ

(八) 化生のもの  
下人の噂、僧都の母妹等女を伴ひて小野の家に歸る

(九) 母の尼と浮舟と  
(一〇) 浮舟の素姓

給ふよりも、この人を生け果てて見まほしく惜みて、うちつけに添ひ居たり。知

らぬ人なれど、みめのこよなくをかしければ、徒になさじと、見る限扱ひ騒ぎ

けり。さすがに時々目見あけなどしつゝ、涙の盡せず流るよを、妹尼「あな心憂や。

いみじう悲しと思ふ人のかはりに、佛の導き給へると思ひ聞ゆるを、かひなくな

り給はば、なかくなる事をや思はむ。さるべき契にてこそ、かく見奉るらめ。

猶いさよか物宣へ」と言ひつゞくれど、辛うじて、浮舟「生き出でたりとも、怪しき

不用の人なり。人に見せで、夜この河に落し入れ給ひてよ」と、息の下にいふ。

妹尼「まれく物宣ふを嬉しと思ふに、あないみじや。如何なれば斯くは宣ふぞ。

如何にしてさる所にはおはしつるぞ」と問へども、物も言はずなりぬ。身にもし疵

などやあらむとて見れど、此處はと見ゆる所なく美しければ、あさましく悲しく、

誠に、人の心惑はさむとて出で來たる假のものにや、と疑ふ。

二日ばかり籠り居て、二人の人を祈り加持する聲絶えず、怪しきことを思ひ騒ぐ。

(一) 妹尼の頃は某中將の妻なりしが若死せし也、下に見えたり  
(二) どの様な様にして居たのか見出されし時の様子を知らぬ女等は  
(三) あやしき女が

(四) 妹尼が  
(五) 長谷へ同行せし僧都の弟子の阿闍梨

(六) 餘計な世話を焼きなさる

(七) 加持に取りかゝる前に神分といひて般若心經をよみて神に手向くるなりとぞ

(八) つきものを調伏して  
(九) 此女の爲につまらぬ穢に觸れ出る事も出来ぬ様になるべし

(一〇) 此女は  
(一一) むやみに捨てる譯にもゆかぬ  
(一二) 噂が高くなりては事が面倒になる  
(一三) 妹尼

手

習

て、あてなるけはひ限なし。妹尼「たゞ我が戀ひ悲む女の歸りおはしたるなめり」とて、泣くく御達を出して、抱き入れさす。如何なりつらむとも、有様見ぬ人は、恐ろしがらで抱き入れつ。生ける様にもあらで、流石に目をほのかに見あけたるに、妹尼「物宣へや。如何なる人か、斯くては物し給へる」と言へど、物覺えぬ様なり。湯とりて手づから掬ひ入れなどするに、たゞ弱りに絶え入る様なりければ、妹尼「なか〜いみじきわざかな」とて、妹尼「この人亡くなりぬべし。加持し給へ」と、驗者の阿闍梨にいふ。僧「さればこそ。怪しき御物扱ひなり」とは言へど、神などの御爲に經讀みつと祈る。僧都もさし覗きて、僧都「如何にぞ、何のしわざぞと、能く調じて問へ」と宣へど、いと弱けに消えもて行く様なれば、「え生き侍らじ。漫なる穢らひに籠りて煩ふべきこと。流石にいとやむごとなき人にこそ侍るめれ。死に果つとも、たゞにやは捨てさせ給はむ。見苦しきわざかな」と言ひあへり。僧都「あなかま。人に聞かすな。煩しき事もぞある」など口がためつよ、尼君は、親の煩ひ

(一)此怪しき者の死ぬべきをいふ

(二)批難する者もあり

(三)下人等に成るべく知らせぬ爲に

(四)母の尼が來れる也

(五)妖怪の爲に附纏はれたる

(六)長谷にて夢の告あり

入れて、穢(一)ひ必ず出で來なむとす」と、もどくもあり。又、「物の變化にもあれ、目に見すゝ、生ける人をかよる雨にうち失はせむは、いみじき事なれば」など、心に言ふ。下衆などは、いと騒がしく、物をうたて言ひなすものなれば、人騒(三)がしからぬ隠の方になむ臥せたりける。

御車寄せて下り給ふ程、いたう苦しがり給ふとて、のよしる。少し静まりて、僧(四)都、「ありつる人は、如何なりぬる」と問ひ給ふ。僧「なよく」として物も言はず、生きもし侍らず。何か物にけどられにける人にこそ」といふを、妹の尼君聞き給ひて、何事ぞと問ふ。僧都「云々の事をなむ、六十にあまる年、珍らかなるものを見給へつる」と宣ふ。打聞くまよに、妹尼「己が寺にて見し夢ありき。如何様なる人ぞ。先づその様見む」と泣きて宣ふ。僧都「唯この東の遣戸になむ侍る。はや御覽せよ」と言へば、急ぎ行きて見るに、人も寄り附かぞ捨て置きたりける。いと若く美しけなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ著たる。香はいみじく芳しく



(二)比叡山の文珠樓に目のなき鬼の住みし由朱の盤といふ物語にありしとちよ

(二)氣味悪けれど

(三)剛勇なる様子を

(四)息のあるものを見殺しにするは残酷也

(五)取られ

(六)誑かされたるにして

(七)とにかく此人は横死すべき人と見える

(八)範圍の人なり

(九)強がりたる僧なるべし

(二〇)母の尼

つ、顔を見むとするに、昔ありけむ目も鼻もなかりける女鬼にやあらむ、とむくつ  
 けきを、頼もしくいかき様を人に見せむと思ひて、衣をひき脱がせむとすれば、う  
 つぶして聲立つばかり泣く。魚何にまれ、かく怪しき事世にあらじ」とて、見果て  
 むと思ふに、雨いたく降りぬべし。魚かくて置いたらば、死に果て侍りぬべし。垣  
 の下にこそ出さめ」といふ。僧都、「眞の人のかたちなり。その命絶えぬを見るく  
 捨てむ事はいみじき事なり。池に遊ぶ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて死  
 なむとするを見つゝ助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるまじきも  
 のなれど、殘の命一二日をも惜まずばあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ、人  
 に逐はれ人にはかりごたれても、これ横様の死をすべき物にこそはあめれ。佛の  
 必ず救ひ給ふべき際なり。なほ試にしばし、湯を飲ませなどして、助け試みむ。  
 遂に死ぬべくば、いふ限にあらざ」と宣ひて、この大徳して抱き入れさせ給ふを、  
 弟子ども、「怠々しきわざかな。いたう煩ひ給ふ人の御あたりに、善からぬものを取

(一)折あしき事哉

(二)反響

(三)留守番の翁の様子

(四)手にて額を撫てあげながら、困りたる様也

(五)私が此處へ來ても狐が平氣で居たりき

(六)一向たはひもない奴

(七)夜深けて尼や僧都に差上ぐべき食物の用意の方のひ氣を取られて居ると見ゆ

(八)僧都をいふ

(九)性の悪い木精め

來たらむにこそ侍らめ。いと不便にも侍りけるかな。穢らひあるべき所にこそ侍

るめれ」と言ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるも、いと恐ろし。あや

しの様に、額おしあけて出來たり。僧「此處には、若き女などや住み給ふ。斯かる

事なむある」とて見すれば、宿守「狐のつかうまつるなり。この木のもとになむ、時

時あやしきわざし侍る。一昨年(五)の秋も、こよに侍る人の子の、二つばかりに侍り

しをとりて、まうで來たりしかども、見驚かず侍りき」僧「さてその兒は死にやし

にし」と言へば、宿守「生きて侍りき。狐は、さこそ人は脅やかせど、ことにもあ

らぬ奴」といふ様、いと馴れたり。かの夜深きまるりものの所に、心を寄せたるな

るべし。僧都「然らば、さやうの物のしたるわざか。猶能く見よ」とて、この物怖せ

ぬ法師を寄せたれば、僧「鬼か神か狐か木精か。かばかりの天の下の驗者のおはし

ますには、え隠れ奉らじ。名のり給へ」と衣をとりて引けば、顔をひき入れ

ていよく泣く。僧「いで、あなさがなの木精の鬼や。まさに隠れなむや」と言ひつ

(一)僧都の處へ来て

(二)怪物の居る處へ

(三)尼君の此處へ來らるるによりて

(四)此句「居しづまりなどしたるに」へかゝる、

役に立つ者どもは其々用事をして居る故

(五)勝手元などのせねばならぬ用事を

(六)僧都の心

(七)見極めがついたのであらう

長く艶々として、大なる木の根のいと荒々しきに寄り居て、いみじう泣く。僧珍らしき事にも侍るかな。僧都の御房に御覽せさせ奉らばや」と言へば、實に怪しき事なりとて、一人はまうでて、かゝる事なむと申す。僧都「狐の人に變化すると昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす。かの渡り給はむとする事によりて、下衆どもは、皆はかゝしきは、御厨子所など、あるべかしき事どもを、かゝるわたりには急ぐものなりければ、居しづまりなどしたるに、唯四五人して此處なる物を見るに、かはる事もなし。怪しうて、時のうつるまで見る。疾く夜も明けはてなむ、人か何ぞと見顯さむと、心にさるべき眞言を讀み、印をつくりて試るに、しるくや思ふらむ。僧都「これは人なり。更に非常の怪しからぬ物にあらず。寄りて問へ。亡くなりたる人にはあらぬにこそあめれ。もし死にたりける人を捨てたりけるが、蘇りたるか」と言ふ。僧「何の然る人をか、この院の内に捨て侍らむ。たとひ誠に人なりとも、狐木精やうの物の、欺きて取りもて

(一)一寸とした座敷の用意などして

(二)同行したりし

(三)他の一人の僧と二人

(四)寢殿の後の方に

(五)氣味の悪い所哉と思ひて

(六)何者か居る様なり、是浮舟也

(七)魔物ならん

(八)法を結びて、印は尋き意味ある手つき

(九)見つめて居る

(一〇)ぞつとする形容

(一一)つか〜と

にぞ宿り給ふ」と言へば、僧都「いとよかシなり。公所なれど、人もなく心安きを」

とて見せにやり給ふ。この翁例もかく宿る人を見ならひたりければ、疎なるし

つらひなどして來たり。

まづ僧都渡り給ふ。いといたく荒れて、恐ろしけなる所かな、と見給ひて、僧都「大

徳達經讀め」など宣ふ。この長谷に添ひたりし阿闍梨と、同じ様なる今一人、何

事のあるにか、つきくしき程の下藤法師に、火ともさせて、人も寄らぬ後の方

にいきたり。森かと思ゆる木の下を、疎ましけのわたりやと見入れたるに、白き

物の廣ごりたるぞ見ゆる。「彼は何ぞ」と、立ち留りて火を明くなして見れば、物の

居たる姿なり。僧「狐の變化したるか。憎し。見顯さむ」とて、一人は今少し歩みよ

る。今一人は、僧「あな用な。よからぬ物ならむ」と言ひて、さやうのもの退くべき

印をつくりつよ、流石になほまもる。頭の髪あらば太りぬべき心地するに、この

火燈したる大徳、憚もなく、奥なきさまにて、近く寄りてその様を見れば、髪は



(一)母を

(二)僧都に通知したり

(三)僧都が

(四)僧都が宇治へ

(五)八十の老婆故惜くもなき命なれど

(六)御嶽精進には穢を忌む故若尼の死する事もあらば死の穢にならん事を恐るゝ也、御嶽精進は夜深更に金峯山を遙拜する

動

(七)連れ歸るべきなれど

(八)生憎天一神の方に當りて

(九)いつも僧都のとまり

(一〇)院守の一家が

(一一)留守番の

(一二)も出なさるなら直に御出なされ、どうせあ

くてはいかでか。残の道をもおはし著かむと、持て騒ぎて、宇治のわたり知りたりける人の家ありけるに留めて、今日ばかりはやすめ奉るに、猶いたく煩らへば、横川に消息したり。山籠の本意ふかくて、今年は出でじと思ひけれど、限の様なる親の、道の空にて亡くやならむと驚きて、急ぎものし給へり。惜むべくもあらぬ人の様を、自らも弟子の中にも、驗あるして加持しさわぐを、家主聞きて、「御嶽精進し侍るを、いたく老い給へる人の重く悩み給ふは、如何」と後めたけに思ひて言ひければ、然も言ふべき事と、いとほしく思ひて、いと狭くむづかしくもあれば、やうく率て奉るべきに、中神ふたがりて、例すみ給ふ所は思むべかりければ、故朱雀院の御領にて、宇治の院と言ひし所このわたりならむと思ひ出でて、院守、僧都知り給へりければ、一二日宿らむと言ひにやり給へりければ、「長谷になむ昨日皆まうでにける」とて、いとあやしき宿守の翁を呼びて率て來たり。翁おはしまさばはや。徒なる院の寢殿にこそ侍るめれ。物詣の人は常

手て習ならひ

榎 横川の僧都の母妹、長谷詣の歸途宇治院に宿す。樹下に倒れたる浮舟を發見して介抱す。① 下人の噂。僧都母妹等、浮舟を伴ひて小野の家に歸る。② 僧都浮舟を加持す。浮舟の蘇生。素姓をつらみて語らず。③ 僧都の妹の娘の夫たりし中將、小野を訪ひて浮舟を見る。僧都に浮舟の身の上を聞く。浮舟を挑む。④ 中將再、小野を訪ふ。笛を吹く。老鸞せる母の得意の倭琴。⑤ 妹尼長谷詣。留守に中將來りて浮舟を挑む。浮舟老母の室に逃入る。⑥ 僧都上京の序、小野に來る。浮舟、僧都に乞ひて尼になる。⑦ 僧都、明石中宮に浮舟の事を語る。⑧ 中將又小野を訪ひて浮舟の出家を怒しむ。⑨ 母の孫紀伊守、小野に來りて鶯の噂をなす。浮舟の感傷。⑩ 小宰相、鶯に浮舟の事を語る。鶯、小野を訪はんとす。

① 横川の僧都の母長谷詣の歸途宇治院に宿す、樹下に倒れたる浮舟を發見して介抱す  
 ② 母子相伴ひて  
 ③ 不快なりし故  
 ④ 妹等が

其その頃横川ころよかはに、某僧都なにがしそうづとかいひていと尊たふごき人住ひせすみけり。八十やそぢあまりの母はは、五十いそぢばかりの妹いもうめありけり。ふるき願ぐわんありて、長谷はつせに詣まうでたりけり。睦むつまじくやむごとなく思おもふ弟子でしの阿闍梨あざりを添そへて、佛經供養ほとけきやうくやうすること行おこなひけり。事ことども多おほくして歸かへる道みちに、奈良坂ならざかといふ山越やまこえける程ほどより、この母ははの尼君あまぎみ心地こころち悪あしくしければ、斯か (三)



(一)世間の美人といふものも大抵此位のものなり

(二)八宮のそばで

(三)大君中君いづれも立派な女なるは奇妙也

(四)浮舟ですら

(五)同じ大君の姉妹たち

を

(六)大君や浮舟を蜻蛉に比したる也

(七)「世の中と思ひしものをかざるふのあるかなきかの程にぞありける」

たて給へる姫君、また斯ばかりぞ多くはあるべき、怪しかりける事は、(三)聖の

御あたりに、山の懐より出で來たる人々の、かたほなるはなかりけるこそ。こ

の、はかなしや軽々しやなど思ひなす人も、かやうの打見る氣色はいみじうこそ

をかしかりしかと、何事につけても、唯かのひとつゆかりをぞ思ひ出で給ひける。

怪しくつらかりける契どもを、つくぐと思ひ續けながめ給ふ夕暮、蜻蛉の物は

かなげに飛びちがふを、

薫ありと見て手にはとられず見れば又行方もしらす消えし蜻蛉

あるかなきかの」と、例の獨言ち給ふとかや。

- (一) 斯く取次で話をするは安く取扱はるる様で
- (二) 私と從兄妹といふ關係に於てよりも
- (三) 女一方に居らるる事
- (四) 私に親しまれるのが
- (五) 御訪問も申上げにくし
- (六) 宮の君に自身の返事をかす也
- (七) 動もすれば「難をかも知る人にせん高砂の松の華を思ひ出して塞ぎ勝なる今の私の境遇なるに從兄妹の筈あれは杯仰せらるるは眞に忝し
- (八) 是が一通りの奉公人であつたら、蕪の心
- (九) とにかく宮の姫君とある人が今ではどうして斯く輕々しく男に直接に物を言ふ様になつたのかしちと
- (一〇) 此宮の君こそ又必ず句の煩悶の種になるなちんと、蕪の心
- (一一) 缺點のなき女はありにくき世哉とも
- (一二) 宮の君こそは父宮が大事にしたる姫君なれ

けざりし御有様につけても、故宮の思ひ聞えさせ給へりし事など、思ひ給へ出で

られてなむ、斯くのみ折々聞えさせ給ふなる、御後言をも喜び聞え給ふめると

言ふ。竝々の人めきて心地なの様や、と物憂ければ、驚もとより思し捨つまじき

筋よりも、今はまして、然るべき事につけても、思ほし尋ねむなむ嬉しかるべき。

疎々しう、人傳などにてもてなさせ給はば、えこそ」と宣ふに、實にと思ひ騒ぎて、

君をひき動かすべかんめれば、宮君「松も昔のとのみ眺めらるるにも、もとよりなど

宣ふ筋は、まめやかに頼もしうこそは」と、人傳ともなく言ひなし給へる聲、いと

若やかに愛敬づき、やさしき所添ひたり。唯なべてのかよる住處の人と思はば、い

とをかしかるべきを、たゞ今はいかで斯ばかりも、人に聲聞かすべきものとなら

ひ給ひけむと、生うしろめたし。容貌もいとなまめかしからむかしと、見まほし

きはひのしたるを、この人ぞ、又例のかの御心亂るべきつまなめると、をかし

うも、有り難の世やとも、思ひ居給へり。これこそは、限なき人のかしづき生し

(一) あり難の世やとも、思ひ居給へり。  
(二) これこそは、限なき人のかしづき生し



(一)女三も女一も同様なりしに  
 (二)女一は  
 (三)斯かる姫宮を生きたる中宮を生じたる明石浦(四)明石腹の女二宮を妻に有てるわが運命は、薫の心  
 (五)女一と女二とを  
 (六)女一方の西の對を我が局にして居る  
 (七)薫の心  
 (八)宮の君も矢張皇統の姫君なる上と  
 (九)父の式部御宮が薫に與へんとせられし中なるにといふ門實て  
 (一〇)薫の來れるを見て逃入る様も恥かしげ也  
 (一一)此處等の様子が世間竝也と薫が思ふ  
 (一二)宮の君を人知れず大事に思ひ居る杯と申上げたらは改め言ふ一通りの口上を改めて眞似する様になる  
 (一三)思ふてふ事より外に又もがな君ばかりをばわきて忍ばん  
 (一四)宮の君に取次がず  
 (一五)宮の君が今思の外境遇に居るにつけて父宮の自分に對する扱方などを思ひ出して隨つて薫の斯く侍女に喜びて居をせられるをも喜びて居らるる

と聞ゆばかりの隔こそあれ、帝々の思しかしづきたる様、ことごとくならざりけるを、猶この御あたりは、いと異なりけるこそあやしけれ、  
 (一)明石の浦は心憎かりける所かな、など思ひ續くる事どもに、我が宿世はいとやむごとなしかし、まして  
 (二)竝べて持ち奉らば、と思ふぞいと難きや。  
 (三)宮の君は、この西の對にぞ御方したりける。若き人々のけはひ數多して、月めであへり。  
 (四)いであはれ、これも又同じ人ぞかすと、思ひ出で聞えて、親王の昔心よせ給ひしものと言ひなして、其方へおはしぬ。童のをかしき宿直姿にて、二人  
 (五)三人出でて歩きなどしけり。見つけて入る様どももかどやかし。これぞ世のつね  
 (六)と思ふ。南面の隅の間によりて、うち聲づくり給へば、少し大人びたる人出來たり。  
 (七)人知れぬ心よせなど聞えさせ侍れば、なかく、皆人聞えさせ古しつらむ事を、  
 (八)初々しき様にて、まねぶ様になり侍り。まめやかになむ、事より外を求められ侍る」と宣へば、  
 (九)君にも言ひ傳へず、さかしらだちて、侍女  
 (一〇)いと思ほしか

(一) 侍女等の氣のつかぬ處へ  
 (二) 簾を下すは隠れる爲也

(三) 此處の應答は遊仙窟の文句により、蕭の詞は遊仙窟の美人十娘が琴ひく處に「將<sub>レ</sub>纖手<sub>レ</sub>時々弄<sub>レ</sub>小箏<sub>レ</sub>、耳聞猶氣絕、眼見若爲憐<sub>レ</sub>」とあるに、此答は十娘の侍女が十娘を説明する文句に「容貌似<sub>レ</sub>眞、潘安仁外甥、氣調如<sub>レ</sub>兄、崔季珪之小妹<sub>レ</sub>」とあるを用ひたり、下の「まるこそ」も容貌似<sub>レ</sub>眞を用ふ、眞は伯父  
 (四) 女一は今夜も中官方へ御出の様なるが  
 (五) 思はぬため息の出たるも  
 (六) 取直しもせず  
 (七) 律は秋の調なれば也  
 (八) 音楽好きの女どもは  
 (九) 女三も女一に劣れる身分ならず、蕭の心  
 (一〇) 女一が中官腹といふ點だけが勝れるのみ

たに渡らせ給ひければ、人々月見るとて、この渡殿に打解けて物語する程なりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさぶ爪音、をかしう聞ゆ。思ひかけぬに寄りおはして、鶯など、かくねたまし顔にかき鳴らし給ふ」と宣ふに、(二) 皆驚かるべかんめれど、少しあげたる簾うち下しなどもせず、起きあがりて、侍女「似るべき兄や侍るべき」と答ふる聲、中將の御許とか言ひつるなりけり。鶯「まるこそは御母方の叔父なれ」と、はかなき事を宣ひて、(四) 例の彼方におはしますべかんめる。何わざをか、この御里住の程にせさせ給ふ」など、味氣なく問ひ給ふ。侍女「何處にても、何事をかは。唯かやうにこそは過させ給ふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどやと思ふに、漫なる歎の打忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそと紛らはしに、さし出でたる和琴を、たどさながら搔き鳴らし給ふ。(七) 律の調は、あやしく折にあふと聞ゆる聲なれば、聞きにくよもあらねど、弾きはて給はぬを、なかくなりと、心入れたる人は消えかへり思ふ。(九) 我が母宮も劣り給ふべき人かは、(一〇) 后腹



(一)句には此處の侍女等  
 (二)句がしつこく一生懸  
 命にかゝる故も靡く負けて  
 句にはは我は何時も女  
 (三)句にはは我は何時も女  
 を取られてはどの目に遇  
 つて居る  
 (四)此處に居る女の中で  
 句が珍重して居らるゝ女  
 を我が手に入れて  
 (五)自分が句の爲にさせ  
 られた心配を句にさせて  
 やりたし  
 (六)眞に譯の分る女は句  
 よりは我に靡く苦  
 (七)中君が句の妾たる今  
 の状態を  
 (八)中君自ら思ひて  
 (九)句との中が次第に面  
 白からずなりゆくにつか  
 けながら句との關係は  
 どうするとも出来ぬも  
 のと譯めて居る態度が立  
 派なものぢや  
 (一〇)深く關係せぬ故  
 (一一)我は徒然なれば  
 (一二)女一宮の方  
 (一三)此間の事が歸にな  
 りて  
 (一四)わがくへ出かけて來たるも  
 (一五)女一宮が中宮方へ

よ、といとほしく、この宮には、皆めなれてのみ覺え奉るべかンめるも口惜し。  
 おりたちて強なる御もてなしに、女はさもこそ負け奉らめ、我がさも口惜し  
 (二)く、この御ゆかりには、妬く心憂くのみあるわざかな、いかで、このわたりにも、  
 (三)珍らしからむ人の、例の心入れて、騒ぎ給はむを語り取りて、我が思ひし様に、  
 安からずとだにも思はせ奉らむ、誠に心ばせあらむ人は、我が方にぞ寄るべき  
 や、されど難いものかな、人の心は、と思ふにつけて、對の御方の、かの御有様  
 をば、ふさはしからぬものに思ひ聞えて、いと便なき睦になり行く、大方のおほ  
 えをば苦しと思ひながら、猶さし放ち難きものに思し知りたるぞ、有り難く哀な  
 りける、さやうなる心ばせある人、こよらの中にあらむや、入りたちて深く見ね  
 ば知らぬぞかし、寢覺がちにつれぐなるを、少しは好きも習はばや、など思ふ  
 に、今は猶つきなし。  
 (二二)

例の西の渡殿を、ありしならひに、わざとおはしたるもあやし。  
 (二一) 姫宮夜はあな  
 (二四) 例の西の渡殿を、ありしならひに、わざとおはしたるもあやし。  
 (二五) 姫宮夜はあな

(一)我々を  
 (二)私が試みよと申上り  
 しは一般的に言ひしのみ  
 取て此我々の中へ御泊り  
 なされと申せしには非ず  
 (三)中將の通り得ずして  
 立留るに對していふ  
 (四)侍女等の恥ぢて隠れ  
 たるは必ず恥づべき故あ  
 りての事なるべし  
 (五)此處の侍女等はどれ  
 もこれも辨のお許の様な  
 鐵面皮の奴ばかりならん  
 と驚に思はれるのはつら  
 いと  
 (六)驚が  
 (七)大底四時心總苦、就  
 中斷腸是秋天、白居易の  
 句  
 (八)中將の君の  
 (九)中將の君を誰ぞと尋  
 ぬる也  
 (一〇)女一宮の侍女なる  
 (一一)斯く直に名をあか  
 すとけしからん仕方  
 (一二)一寸にもせよ彼は  
 誰かと宋しく思ふ人に對  
 して奥底なく名を言つて  
 仕舞ふとは物の分らぬ仕

薫宿かさばひと夜はねなむおほかたのはなにうつらぬ心なりとも

とあれば、(一)辨(二)何か恥かしめさせ給ふ。大方の野邊のさかしら(三)をこそ聞えさせしれ」と

言ふ。はかなきことを唯少し宣ふも、人は殘聞かまほしくのみ思ひ聞えたり。薫心

なし。道あけ侍りなむよ。わきても、かの御物恥の故、必ずありぬべき折にぞあ

める」とて、立出で給へば、おしなべて斯く殘なからむと、思ひやり給ふこそ心憂

けれ、と思へる人もあり。

東(六)の勾欄(七)に押しかよりて、夕蔭(八)になるまよに、花のひもとく御前の叢(九)を見渡

し給ふも、物のみ哀なるに、雪中(七)について腸をたゆるは秋の天(八)といふことを、い

と忍びやかに誦じつゝ居給へり。ありつる衣の音(八)なひ、著(九)きはひして、母屋の

御障子(一〇)より通りて、彼方(一一)に入るなり。宮の歩みおはして、匂(一二)これより彼方に参り

くるは誰ぞ(一三)と問ひ給へば、侍女(一四)かの御方の中將の君(一五)と聞ゆなり。猶あやしのわ

ざや、誰(一六)にかとかりそめにも打思ふ人(一七)に、やがてかくゆかしけなく聞ゆる名さし

(一)何の花とは一寸分らぬ

(二)側を向き

(三)斯かる大勢の女の中に交りても私は眞面目男なれば浮名は立たじ

(四)藪に近き襖を後にして向う向きて居たる女に

(五)女郎花は仇なるものと誂はれては居れど、さう誰にても靡くものでは無い

(六)一寸走り書きしたる

(七)此中將は今此處へ来たのが路が塞がつて居たので立留り居しなるべしと思はる

(八)藪が浮名の立つ氣遣なしなどと餘りきつぱりした老人の様な口をおききなさるが憎らしい

(九)果して美人に御心が移るか移らぬか一つ御ためしなされ

(一〇)浮名の立つ心配の有無は其後に定むべし

るべし、硯の蓋にすゑて、心もとなき花の末々手折りて、遊びけりと見ゆ。かた

へは几帳のあるにすべり隠れ、あるは打背き、おし開けたる戸の方に紛らはしつ

つ居たる頭つきどもをかしと見渡し給ひて、硯ひき寄せて、

鶯をみなへし亂るゝ野邊にまじるとも露のあだ名を我にかけめや

心やすくは思さで」と、たゞこの障子に後したる人に見せ給へば、うちみじろきな

どもせず、のどやかにていと疾く、

中將花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露にみだれやはする

と書きたる手、唯片そばなれど、由づきて大方めやすければ、誰ならむと見給ふ。

今まう上りける道に塞けられて、滞り居たるなるべしと見ゆ。辨の御許は、鶯い

とげざやかなる翁言にくよ侍り」とて、

鶯旅寝してなほこよろみよ女郎花さかりのいろにうつりうつらず

さて後定め聞えさせむ」と言へば、



(一)字治の事は知らぬ顔して居る事故

(二)句

(三)薫は

(四)薫に見られたくな

(五)侍従の心

(六)私をこそ女中達は親しくせられて然るべきぢや

(七)薫のやうに

(八)女の知らず叶はぬ事を教へる事も出来る

(九)我が心を其方等が

(一〇)薫を親しむべき縁故もなき女が無遠慮な舉動をするのは怪しからん

が世間は其様なのが多い

(一一)薫の方で馴れ

しくするは必然すべき女だからといふ譯でもなけれ

ば、私如きが差出て御挨拶するも如何なものなれど

(一二)私は奉公人として

鐵面皮にしつけない身故

尻込して居るも不似合に

思はるゝ故御返事を申上

ぐる

そのわたりの事かけて知り顔にも言はぬ事なれば、心一つに飽かず胸いたく思ふ。

(一)宮は、字治の御物語など、細やかに聞えさせ給へば、今一所は立出で給ふ。見つ

(二)けられ奉らじ、しばし御果をも過さず心淺しと見え奉らじ、と思へば隠れぬ。

(三)東の渡殿に、あきあひたる戸口に人々あまた居て、物語など忍びやかにする所

におはして、薫某をぞ女房は睦まじく思すべきや。女だに斯う心安くはよもあら

じかし。流石に然るべからむ事、教へ聞えぬべくもあり。やうく見知り給ふべ

かんめれば、いとなむ嬉しき」と宣へば、いと答へにくよのみ思ふ中に、辨の御許

とて、馴れたる大人、辨「其も睦まじく思ひ聞ゆべき故なき人の、恥ぢ聞え侍らぬ

や。物は然こそはなかく侍るめ。必ずその故尋ねて打ち解け御覽せらるよにし

も侍らねど、斯ばかり面なくつくりそめてける身に負はさらむも、かたはらいた

くてなむ」と聞ゆれば、薫「恥づべき故あらじと、思ひ定め給ひてけるこそ口惜しけ

れ」など、宣ひつゝ見れば、唐衣は脱ぎすべし押し遣り、打解けて、手習しけるな

(一)源氏時代よりも

(二)匂宮

(三)年とりて浮氣が直りしかと

●薰、中宮に參りて侍女等に戯る、和琴を彈く、宮の君を訪ふ

(四)中宮  
(五)此六條院の

(六)匂

(七)匂に對する六條院の人々の感じ

(八)薰はさ程親しく立入りはせぬ間柄にて

(九)六條院の人々が

(一〇)匂と薰

(一一)中宮の

(一二)匂か薰かどちらへ願きてても、以下侍従の心

(一三)浮舟が生きて居られよかりしに

(一四)浮舟の

かめしうなりにたる御族なれば、なか／＼古よりも今めかしき事は勝りてさへ

なむありける。この宮、例の御心ならば、月頃の程に、如何なるすき事どもをし

出で給はまし、こよなく靜まり給ひて、人目には少し生ひ直りし給ふかなど見ゆ

るを、この頃ぞまた、宮の君に、本性あらはれて拘づらひありき給ひける。

涼しくなりぬとて、宮、内裏に參らせ給ひなむとすれば、「秋のさかり紅葉の頃

などを見さらむこそ」など、若き人々は口惜しがりて、皆參り集ひたる頃なり。水

に狎れ月をめでて、御あそび絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞ、かよ

る筋はいとこよなくもてはやし給ふ。朝夕に目なれても、猶今見む初花の様し給

へるに、大將の君は、いとさしも入立ちなどし給はぬ程にて、恥かしう心ゆるび

なきものに皆思ひたり。例の二所參り給ひて、御前におはする程に、かの侍従は

物より覗き奉るに、何方にもくよりて、めでたき御宿世見えたる様にて、世

にぞおはせましかし、あさましくはかなく、心憂かりける御心かななど、人には、

- (一)宮の君が
- (二)中宮が御氣にかけら
- (三)るのに
- (四)宮の君の兄、式部御
- (五)宮の子
- (六)中宮方へ宮の君を
- (七)宮の君は女一の御相
- (八)手として相當の人故
- (九)宮の君は身分ある人
- (一〇)故なれどとにかく宮仕の
- (一一)事故
- (一二)唐衣を略して裳だけ
- (一三)唐衣をも着用する譯なれ
- (一四)ど其丈の區別ある也
- (一五)(八)句
- (一六)句の心、宮の君丈は
- (一七)浮舟に似て居るかも知れ
- (一八)ぬ
- (一九)好色なる心は
- (二〇)宮の君に
- (二一)薫
- (二二)宮の君が斯く奉公
- (二三)に出るとしては居られ
- (二四)ぬ衰へ哉、以下薫の心
- (二五)四宮の君を春宮に奉
- (二六)らんかと父宮が思ひ
- (二七)五浮舟の様に
- (二八)六宮の君に
- (二九)七六條院
- (三〇)八詰めきりにして居
- (三一)ぬ人々も
- (三二)九夕霧
- (三三)源氏の
- (三四)繁昌なる夕霧一門
- (三五)の事故

み思ひ歎き給ふ有様にて、「懐しうかく尋ね宣はするを」など御兄の侍従も言ひて、

この頃迎へ取らせ給ひてけり。嬪宮の御具にていとこよなからぬ御程の人なれば、

やむごとなく心ことにて侍ひ給ふ。限あれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかり

ひきかけ給ふぞいと哀なりける。兵部卿の宮、この君ばかりや、戀しき人に思ひ

よそへつべき様したらむ、父親王は兄弟ぞかし、など、例の御心は、人を戀ひ給

ふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけ給ひてけり。大將も

どかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり、春宮にやなどおほし、我

にも氣色ばませ給ひきかし、斯くはかなき世の衰へを見るには、水の底に身を沈

めても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつと、人よりは心よせ聞え給へり。

この院におはしますをば、内裏よりもひろく面白く住みよきものにして、常にし

も侍はぬ人どもも、皆打解け住みつと、はるくと多かる對ども廊渡殿に満ちた

り。左大臣殿、昔の御けはひにも劣らず、すべて限もなく營み仕う奉り給ふ。

(二九) (三〇) (三一) (三二) (三三) (三四) (三五)

- (一) 句に仕へよと
- (二) 侍の御志は辱なけれ
- (三) 中君と浮舟とは姉妹なれど面倒なる關係ある中放
- (四) 明石中宮に御奉公申したき由を申出でたれば
- (五) 句が侍従を
- (六) 侍従が
- (七) 明石中宮へ
- (八) 侍従に對する中宮方の侍女等の評
- (九) 薫も中宮へ
- (一〇) 侍従が
- (一一) 中宮方は、侍従の心
- (一二) 多くの貴女たちの中にも浮舟位の女はなし
- (一三) 宮の君中宮に引取り
- (一四) 宮の懸想
- (一五) 繼母の兄で右馬頭をつとめ人品もよくなき男が宮の君に懸想したるを
- (一六) 右馬頭に嫁せしめんと約束したりと中宮が便りに聞きて
- (一七) 右馬頭などに遣つては棄てて仕舞ふ様な物

給ひて、句かくて侍へ」と宣へど、御心はさるものにて、人々の言はむ事も、さ  
(一三)  
 る筋の事交りぬるあたりは、聞きにくき事もあらむと思へば、うけひき聞えず。  
(一四)  
 の宮に參らむとなむ趣けたれば、句いとよかんなり。さて人知れず思し遣はむ」と  
(一五)  
 宣はせけり。心細くよるべなきも慰むやとて、知る便もとめて參りぬ。汚けなく  
(一六)  
 てよろしき下薦なりとゆるして、人も諤らず。大將殿も常に參り給ふを、見る度  
(一七)  
 ごとに物のみ哀なり。いとやむごとなきものの姫君のみ、多く參りつどひたる宮  
(一八)  
 と人も言ふを、やうく目留めて見れど、猶見奉りし人に似たるは無かりけり、  
(一九)  
 と思ひありく。  
(二〇)  
 この春亡せ給ひぬる式部卿の宮の御女を、繼母の北の方殊にあひ思はで、兄の右  
(二一)  
 馬頭にて人柄もことなる事なき、心かけたるを、いとほしうなども思ひたらで、然  
(二二)  
 るべき様になむ契ると、聞しめす便ありて、中宮「いとほしう、父宮のいみじうかし  
(二三)  
 づき給ひける女君を、徒なる様にもてなさむ事など宣はせければ、いと心細くの  
(二四)  
(二五)



(一)段々考へつめれば  
 (二)匂宮  
 (三)浮舟  
 (四)畢竟自分が色戀に不  
 慣れてあつた罪なりと

(五)匂宮、侍従を迎へ取  
 りて召使ふ  
 (六)鬨さへ戀改には苦勞  
 が多きに

(七)浮舟の形見として  
 (八)中君  
 (九)中君と浮舟とは  
 (一〇)中君の浮舟に對す  
 る情が濃き譯はなし

(一一)匂が思ふ通りに  
 (一二)宇治に  
 (一三)右近と侍従  
 (一四)浮舟が  
 (一五)元々浮舟の侍女で  
 はなれり

(一六)浮舟に仕へて辛抱  
 すれば又よい事もあるべ  
 きかと  
 (一七)浮舟なき今は  
 (一八)侍従が

やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を、思  
 ひもて行けば、宮をも思ひ聞えじ、女をも憂しと思はじ、唯我が有様の世づかぬ  
 怠りぞなど、ながめ入り給ふ時々多かり。

心のどかに様よくおはする人だに、かよる筋には身も苦しき事、自ら交るを、宮  
 はまして慰めかね給ひつよ、かの形見に、飽かぬ悲しさをも宣ひ出づべき人さへ  
 無きを、對の御方ばかりこそは哀など宣へど、深くも見馴れ給はざりけるうちつ  
 けの睦なれば、いと深くしもいかでかはあらむ。また、思すまゝに、戀しやいみ  
 じや」など宣はむには、かたはらいたければ、彼所にありし侍従をぞ、例の迎へ  
 させ給ひける。皆人どもは往き散りて、乳母とこの人二人なむ、とりわきて思し

たりしも忘れがたくて、侍従は餘所人なれど、猶語らひてあり經るに、世づかぬ  
 川の音も、嬉しき瀬もやあると、頼みし程こそなぐさみけれ、心憂くいみじく、物  
 恐ろしくのみおほえて、京になむ怪しき所に、この頃來て居たりける。尋ね出で

おそ  
 かは  
 おぞ  
 うれ  
 せ  
 たの  
 ほひ  
 こころ  
 おほ  
 たら  
 い

- (一) 女一を思へる也
- (二) 其蓋に
- (三) 女一を慕ふ様な様子が少しでも人に知れては、諷の心
- (四) 大君存生ならば
- (五) 大君以外の女を顧みるべきに非ず
- (六) 娶らざるべし
- (七) 外に愛する女ありと帝が聞きて居ながら御裳を押附ける事もなかるべきに
- (八) 大君をいふ
- (九) 中君に心が集注して
- (一〇) 中君の事に
- (一一) すぐ其次には
- (一二) 浮舟
- (一三) 思慮なく物をやつて仕舞ふ輕々しき
- (一四) 浮舟が
- (一五) 蕪の仕向けが仔細ありげなりとて
- (一六) かねて蕪が考へおきし浮舟に對する取扱方をいふ也

思し靡く人のあらましかばと、思ふ身ぞくち惜しき。

蕪の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける

と書きても添へまほしく思せど、さやうなる露ばかりの氣色にても漏りたらば、い

と煩はしけなる世なれば、はかなき事をも、え仄めかし出づまじく、かく萬に何

やかやと、物を思ひくゝての果は、昔の人ものし給はましかば、如何にもく

様に心を分けまじや、時の帝の御女を賜ふとも、得奉らざらまし、又然思ふ人

ありと聞召しながらは、かよる事もなからましを、猶心憂く我が心亂り給ひける

橋姫かな、と思ひ餘りては、また宮の上にとりかよりて、戀しくもつらくも、わ

りなき事ぞ、嗚呼がましきまで悔しき。これに思ひわびてのさし次には、あさま

しくて亡せにし人の、いと心をさなく滞る所なかりける輕々しさをば思ひながら、

流石にいみじと物を思ひ入りけむ程、我が氣色例ならずと、心の鬼に歎き沈みて

居たりけむ有様を聞き給ひしも、思ひ出でられつよ、重りかなる方ならで、唯心

(一)小宰相の質家へ奉公に來て

(二)浮舟の横死を

(三)氣味悪き

(四)其様な噂をするなど其童に言ひ附けさせよ

(五)匂が

(六)明石が

(七)女一より女二へ

(八)薰が

(九)疾うから此様に文通をさせて女一の文を見るべきであつた、薰の心

(一〇)女二へ

(一一)女一へ

(一二)芥川大將の物語といふ小説ありしなるべし

(一三)人名歟、或はたうぎん(當今即ち今上)のう

つし眼りなるべし

(一四)薰が我身の上にて

(一五)其物語の女の様に

ひしか」と宣ふ。大納言「いさや、下衆は、確ならぬ事をも言ひ侍るものを、と思ひ

侍れど、彼處に侍りける下童の、唯この頃宰相が里に出でまうできて、確なる様

にこそ言ひ侍りけれ。かく怪しくて亡せ給へる事、人に聞かせじ。おどろくし

く、おぞきやうなりとて、いみじく隠しける事どもとや。さて委しくは聞かせ奉

らぬにやありけむ」と聞ゆれば、中宮「更にかよる事又まねぶなど言はせよ。かよる

筋に御身をももて損ひ、人にも軽く心づきなきものに思はれ給ふべきなめり」と、

いみじく思ひたり。

その後姫宮の御方より、二の宮に御消息ありけり。御手などの、いみじく美しけ

なるを見るにも、いと嬉しく、斯くてこそ疾く見るべかりけれ、と思す。數多を

かしき繪ども多く、大宮も奉らせ給へり。大將殿打勝りてをかしきども集めて、

參らせ給ふ。芥川の大將のとほ君の、女一宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひ侘

びて出でて行きたる畫、をかしく畫きたるを、いとよく思ひ寄せらる。然ばかり

(一) 驚の失ひたる浮舟は

(二) 中君の

(三) 浮舟の

(四) 浮舟に匂が忍んで通ひなされるさうな

(五) 浮舟を引取らんとて

(六) 番人、守部

(七) 浮舟も匂を

(八) 噂に上る筈なるを

けれ。いかでかよる御癖止め奉らむ。恥かしや、この人々」と宣ふ。大納言いと怪しきことをこそ聞き侍りしか。この大將殿の亡くなし給ひてし人は、宮の御二條の北の方の御弟なりけり。異腹なるべし。常陸の前の守某が妻は、叔母と(二)も母とも言ひ侍るなるは、如何なるにか。その女君に、宮こそいと忍びておはしましけれ。大將殿や聞きつけ給ひたりけむ。俄に迎へ給はむとて、まもり添へな(四)ど、事々しくし給ひける程に、宮もいと忍びておはしましながら、え入らせ給はず、怪しき様に、御馬ながら立たせ給ひつよぞ、歸らせ給ひける。女も宮を思ひ聞えさせけるにや、俄に消え亡せにけるを、身投げたるなめりとてこそ、乳母などやうの人どもは、泣き惑ひ侍りけれ」と聞ゆ。宮もいとあさましと思して、申宮誰か然ることは言ふとよ。いといとほしく心憂き事かな。さばかり珍らかならむ事は、自ら聞えありぬべきを、大將もさやうには言はで、世の中のはかなくいみじ(八)き事、かく宇治の宮の族の、命の短かりける事をこそ、いみじく悲しと思ひて宣

(一)女二方の

(二)蕪が

(三)女一は中宮方へ

(四)眞面目男の蕪でも矢張女に懸想して居ると見える、あの様な男の相手には氣のきかぬ女ではないけぬ

(五)蕪をば

(六)誰でも、蕪には注意して應答して貰ひたく中宮は思へり

(七)蕪が小宰相に

(八)眞の色戀の沙汰では無いと見える

(九)匂を小宰相が

(一〇)匂の懸想に對して  
(一一)匂の見つともなきが浮氣を小宰相

見やり給ふ。侍女今より習はせ給ふこそ、實に若くならせ給ふならめなど、はかなき事を言ふ人々のけはひも、怪しうみやびかに、をかしき御方の有様にぞある。

その事となけれど、世の中の物語などしつよ、しめやかに例よりは居給へり。

姫宮は、彼方に渡らせ給ひにけり。大宮、中宮「大將の其方に参りつるは」と問ひ給ふ。

御供に参りたる大納言の君、「小宰相の君に、物宣はむとにこそは侍るめりつれ」と聞ゆれば、中宮「まめ人の流石に人に心留めて物語するこそ、心地後れたらむ

人は苦しけれ。心の程も見ゆらむかし。小宰相などはいと後やすし」と宣ひて、御兄弟なれど、この君をば猶はづかしく、人も用意なくて見えざらなむと思いたり。

大納言「人よりは心よせ給ひて、局などに立ち寄り給ふべし。物語細やかにし給ひて、夜更けて出でなどし給ふ折々も侍れど、例の目馴れたる筋には侍らぬにや。宮を

こそいと情なくおはしますと思ひて、御答をだに聞えず侍るめれ。辱き事」と言ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮「いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかし

(一) 文を上る様に女一に勤めん、女二よりもよこすがよし  
 (二) 女二より差上ぐるは勿論の事也  
 (三) 女二を  
 (四) 明石と薫と兄弟なる縁を以て女二をも睦まじくして下されてこそ感しかるべけれ  
 (五) 前に親しくなされしを  
 (六) 薫が女一に心ありていふとは明石は思ひも寄らず  
 (七) 薫が中宮の御前を辭して  
 (八) 以下薫の心、小宰相に逢はん  
 (九) 隙見せし渡殿  
 (一〇) 女一宮の方へ  
 (一一) 薫の様子をいふ  
 (一二) 夕霧  
 (一三) 女一方の侍女等の御目にはかくり難き故  
 (一四) 便なく知る人もなきをいふ  
 (一五) 是からは懸意にして頂きたしと思ひて参れり  
 (一六) 落着かぬと

蜻

めりしを、所々になり給ひし折に、とだえ初め給へるにこそあらめ。今そよのかし聞えむ。それよりもなどかは」と聞え給ふ。薫彼よりはいかでかは。もとより數まへさせ給はざらむをも、かく親しくて侍ふべきゆかりに寄せて、思召し數まへさせ給はむこそ、嬉しくは侍るべけれ。ましてさも聞え馴れ給ひにけむを、今捨てさせ給はむは、辛き事に侍り」と啓し給ふを、好きばみたる氣色あるかとは、思しかけざりけり。  
 立ちいでて、一夜の志の人にあはむ、ありし渡殿も慰めに見むかし、と思して、御前をあゆみ渡りて、西様におはするを、御簾の中の人々心ことに用意す。實にいと様よく限なきもてなしにて、渡殿の方は、左の大殿の君達など居て、物言ふけはひすれば、妻戸の前に居給ひて、薫大方には参りながち、この御方の見参に入ることの難く侍れば、いと覺なく翁び果てにたる心地し侍るを、今よりはと思ひおこし侍りてなむ。ありつかずと若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君達の方を

蛉

① 薫女一宮を慕ひて女二宮を以て女一宮に親しましめんとす、薫明石中宮に參る、浮舟の喧、女一宮と女二宮との交際

- (一) 薫が
- (二) 句宮
- (三) 句の服裝
- (四) 色濃き直衣の下に重ねて著たる様
- (五) 女一宮の
- (六) 句が女一に似て居ると思ふにつけても女一の戀しさが先に立つを、薫の心
- (七) 女一を見ざりし時より
- (八) 句が
- (九) 女一へ
- (一〇) 句も
- (一一) 薫
- (一二) 明石中宮に
- (一三) 源氏紫などの噂
- (一四) 女二宮をいふ
- (一五) 平人に在りてあまぎ込んで居るが氣の毒
- (一六) 女一より
- (一七) 女二が身分卑しくなりたる故見棄てられたる様に思ひて
- (一八) 繪杯を時々女二へ御贈り下され
- (一九) 私が頂戴して行つたのては
- (二〇) 原文の取遣もあり

その日は暮して、またの朝に大宮にまゐり給ふ。例の宮もおはしけり。丁子に深

く染めたる羅の單衣を、細やかなる直衣に著給へる。いと好ましけなり。女の御

身なりのめでたかりしにも劣らず、白く清らにて、猶ありしよりは面瘡せ給へる、

いと見るかひあり。覺え給へりと見るにもまづ戀しきを、いとあるまじき事と靜

むるぞ、たゞなりしよりは苦しき。繪をいと多く持たせて参り給へりける。女房

して彼方に參らせ給ひて、我も渡らせ給ひぬ。大將も近く参りより給ひて、御八

講の尊く侍りしこと、古の御事少し聞えつと、残りたる繪見給ふ序に、薫この里

にもものし給ふ御子の、雲の上はなれて、思ひ屈し給へるこそいとほしう見給ふれ。

姫宮の御方より、御消息も侍らぬを、かく品定まり給へるに思し捨てさせ給へる

様に思ひて、心ゆかぬ氣色のみ侍るを、かやうの物時々ものせさせ給はなむ。某

がおろして持てまからむ、はた見るかひも侍らじかし」と聞え給へば、中宮「怪しく、

などてか捨て聞え給はむ。内裏にては、近かりしにつけて、時々も聞え通ひ給ふ

(三〇)

(一)無作法に  
 (二)今は見る人もなき故  
 著てもよからん  
 (三)女一宮の穿き居られ  
 しと同様の品  
 (四)女二が女一に  
 (五)すべて昨日隙見せし  
 通りにして見るを自らを  
 かしく思ふ也  
 (六)竊の心  
 (七)姉の代りに妹を見る  
 事故  
 (八)女一を

(九)帝が  
 (一〇)今は久しく文も差  
 上げず  
 (一一)女二が平人なる薫  
 の妻になりたりとて  
 (一二)明石の  
 (一三)女二が女一の文を  
 上こさぬを恨み居らるゝ  
 と申上げん  
 (一四)女二が  
 (一五)わざと女二が女一  
 へ文を差上げぬと申上げ  
 ん

人おほく見る折なむ、透きたる物著たるは傍若に覺ゆる。たゞ今はあへなむ」と  
 て、手づから著せ奉り給ふ。御袴も昨日の同じ紅なり。御髪の多さ、すそな  
 どは劣り給はねど、猶様々なるにや、似るべくもあらず。氷召して、人々に割せ  
 給ふ。取りて一つ奉りなどし給ふ心のうちをかし。繪に畫きて、戀しき人見る  
 人は無くやはありける、ましてこれは、慰めむに似氣なからぬ御程ぞかし、と思  
 へど、昨日かやうにて我まじり居、心に任せて見奉らましかば、と覺ゆるに、心  
 にもあらず打歎かれぬ。薫一品宮に御文は奉り給ふや」と聞え給へば、女二内裏  
 にありし時、上のさ宣ひしかば、聞えしかど、欠しく然もあらず」と宣ふ。唯  
 人にならせ給ひにたりとて、彼よりも聞えさせ給はぬにこそは、心憂かなれ。今  
 おほみや大宮の御前にて、恨み聞えさせ給ふと啓せむ」と宣ふ。女二如何恨み聞えむ。う  
 たて」と宣へば、薫下衆になりたりとて、思し貶すなめりと見れば、驚かし聞  
 えぬとこそは聞えめ」と宣ふ。



- (一) 薰は
- (二) 以下薰の心
- (三) 大君の爲に出家の覺悟を踏みはげし初めて以來
- (四) 大君中君浮舟小宰相より今又女一宮を思ふをいふ
- (五) 薰の心
- (六) 女一宮を
- (七) なまじ見て徒に戀情を高むるのみにてつまらぬ
- (八) 翌朝薰が起きし也
- (九) 女二宮
- (一〇) 女一宮とても必ず女二に勝れりとも限らずとは思はるれども
- (一一) 女一は
- (一二) 女一が非常に美しく見えしは氣のせい又又は場合によるかと
- (一三) 著たまへ
- (一四) 珍らしき著物
- (一五) 女三方
- (一六) 女三の侍女
- (一七) 侍女等は
- (一八) 女二の
- (一九) 薰が寵愛して斯かる事も言ふならんと
- (二〇) 薰が
- (二一) 自分の居間に
- (二二) 女二の方へ
- (二三) なぞ著ぬのぢや

困じて居り。かの人(一)は、やうく(二)聖(三)になりし心(四)を、一節(五)したがへそめて、様々(六)なる物思ふ人ともなるかな、そのかみ世(七)を背(八)きなましかば、今は深(九)き山(一〇)に住み果(一一)て、かく心亂(一二)らましやは、など思(一三)し續(一四)くるも安(一五)からず。など(一六)て年頃見奉らばやと

思(一七)ひつらむ、なか(一八)く苦(一九)しうかひ無(二〇)かるべきわざ(二一)にこそ、と思(二二)ふ。

つとめて起(二三)き給へり。女宮(二四)の御容貌(二五)いとをかしけなめるは、これより必(二六)ず勝(二七)るべきこと(二八)かはと見えながら、更(二九)に似給(三〇)はずこそありけれ、あさましきまであてに薰

り、えも言(三一)はざりし御様(三二)かな、かたへは思(三三)ひなしか、折(三四)からか、と思(三五)して、薰(三六)いと暑(三七)しや。これより薄(三八)き御衣(三九)奉れ。女(四〇)は例(四一)ならぬ物著(四二)たるこそ、時々(四三)につけてを

かしけれ」とて、薰(四四)彼方(四五)に参りて、大貳(四六)に、羅(四七)の單衣(四八)の御衣(四九)、縫(五〇)ひて参れと言へ」と宣(五一)ふ。

御前(五二)なる人は、この御容貌(五三)のいみじき盛(五四)におはしますを、もてはやし聞(五五)え給ふと、をかし(五六)く思へり。例(五七)の念誦(五八)し給ふ。我(五九)が御方(六〇)におはしましたとして、晝(六一)

つ方渡り給へれば、宣(六二)ひつる御衣(六三)、御几帳(六四)にうち掛(六五)けたり。薰(六六)何(六七)ぞこは奉(六八)らぬ。

(一) 薰は

(二) 以下薰の心

(三) 大君の爲に出家の覺悟を踏みはげし初めて以來

(四) 大君中君浮舟小宰相より今又女一宮を思ふをいふ

(五) 薰の心

(六) 女一宮を

(七) なまじ見て徒に戀情を高むるのみにてつまらぬ

(一) 女一宮が、薫の心

(二) 女一宮を隙見させて又大君の時の如く物思ひをさせるのかしちと

(三) 女一宮を覗きつゝ立ち居るに

(四) 自分の部屋へ

(五) 明け放したるをやかましく言はれると

(六) 薫の

(七) 自分の姿を見らるゝも構はず

(八) 薫が

(九) 誰にも見知られたくなし、薫の心

(一〇) 此下藤女房は

(一一) 大變な事をした、以下女房の心

(一二) 此隙見し居しは夕霧の子息等なるべし

(一三) 隙見せし人ありと噂が立たば

(一四) 小言が出るならん

(一五) 隙見の男の

蜻蛉

宣ふ御聲、いとほのかに聞くも限なく嬉し。まだいと小さくおはしまし程に、我

も物の心も知らで見奉りし時、めでたの兒の御様やと見奉りし、その後絶えて、こ

の御けはひをだに聞かざりつるものを、如何なる神佛のかよる折見せ給へるなら

む、例の安からず、物思はせむとするにやあらむと、且はしづ心なく、まもり立

ちたる程に、此方の對の北面に涼みける下藤女房の、この障子は、頓の事にて、明

けながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれ、と思ひければ、惑

ひ入る。この直衣姿を見つくるに、誰ならむと心騒ぎて、己が様見えむことも知

らず、簀子よりたゞ來に來れば、ふと立去りて、誰とも見えじ、すきくしき様

なり、と思ひて隠れ給ひぬ。この御許は、いみじきわざかな、御几帳をさへ現に

引きなしてけるよ、左の大殿の君達ならむ、疎き人はた、此處まで來べきにも非

ず、物の聞あらば、誰か障子は開けたりしと、必ず出で來なむ、單衣も袴も、生

絹なめりと見をつる人の御姿なれば、人もえ聞きつけ給はぬならむかし、と思ひ

蜻蛉

三四一

(一)こゝに女一宮の居らるゝとは薫が思はぬに  
(二)女一宮也

(三)髪を

(四)薫の

(五)此人には  
(六)此人に比ぶれば

(七)紫の薄色なるべし  
(八)小宰相也

(九)涼を取らんとて氷を割りて却て骨が折れさう也

(一〇)薫が戀人の小宰相なるを知れり

(一一)小宰相に注意されても強情に割りて

(一二)小宰相は  
(二三)女一宮にも

(二四)紙包の氷にて

きて割るとて、もて騒ぐ人々、大人三人ばかり、童と居たり。唐衣も汗疹も著ず、皆打解けたれば、御前とは見給はぬに、白き羅の御衣著給へる人の、手に氷を持ちながら、かく争ふを少し笑み給へる御顔、いはむ方なく美しけなり。いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御髪の、苦しう思さるゝにやあらむ、少し此方に靡かして引かれたる程、譬へむ物なし。許多よき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりと覺ゆ、御前なる人は、誠に土などの心地ぞするを、思ひ鎮めて見れば、黄なる生絹の單衣、薄色なる裳著たる人の、扇うち遣ひたるなど、用意あらむはやと、ふと見えて、小宰相なかく物扱ひにいと苦しけなり。唯然ながら見給へかし」とて、笑ひたるまみ愛敬づきたり。聲聞くにぞ、この志の人とは知りぬる。心強く割りて、手毎に持たり。頭にうち置き胸にさし當てなど、様悪しくする人もあるべし。この人は、紙につよみて、御前にも斯くて參らせたれば、いと美しき御手をさしやり給ひて、拭はせ給ふ。女一宮「否持たらじ。栗むづかし」と

(一)こゝに女一宮の居らるゝとは薫が思はぬに  
(二)女一宮也  
(三)髪を  
(四)薫の  
(五)此人には  
(六)此人に比ぶれば  
(七)紫の薄色なるべし  
(八)小宰相也  
(九)涼を取らんとて氷を割りて却て骨が折れさう也  
(一〇)薫が戀人の小宰相なるを知れり  
(一一)小宰相に注意されても強情に割りて  
(一二)小宰相は  
(二三)女一宮にも  
(二四)紙包の氷にて



(九) 明石中宮の法事八講、薰女一宮を降見す

(一) 明石中宮が

(二) 紫上の御爲など

(三) 法華經の五卷目を講ずる日、即ち八講の眞中の日、此日新の行道といふ儀式ある也

(四) 朝座夕座とて毎日二度に講釋が行はるゝ也

(五) 多人歌入込みて室内を調ふる間

(六) 女一宮

(七) 女一宮の

(八) 薫

(九) 言ひ附くべき

(一〇) 僧等が

(一一) 小宰相也

(一二) 隣との隔にして

(一三) 小宰相は此處に居るのかしら、薰の心

(一四) 女一宮の假に居る故也

(一五) 此頃は水を食用にはせず、身に於てなどして涼を取るに用ひし也

蓮の花の盛に、御八講せらる。六條院の御爲、紫の上など、皆思し分けつよ、御

經佛など供養せさせ給ひて、嚴しく尊くなむありける。五卷の日などは、いみ

じき見物なりければ、此方かなた、女房につきて参りて、物見る人多かりけり。五

日といふ朝座に果てて、御堂の飾取除け、御しつらひ改むるに、北の廂も、障子

ども放ちたりしかば、皆入り立ちてつくろふ程、西の渡殿に姫宮おはしましけり。

物聞き困じて、女房も各局にありつよ、御前はいと人少なる夕暮に、大將殿直

衣著かへて、今日まかづる僧の中に、必ず宣ふべき事あるにより、釣殿の方にお

はしたるに、皆まかでぬれば、池の方にすどみ給ひて、人少なるに、かくいふ宰

相の君など、かりそめに几帳などばかり隔てて、打休む上局にしたり。此處にや

あらむ、人の衣の音す、と思して、馬道の方の障子の細く明きたるより、やをら

見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず、晴々しくしつらひたれば、な

かなか几帳どもの立て違へたる間より見通されて、あらはなり。氷を物の蓋に置

- (一) 數ならぬ私故今に御悔もさしひかへて居る
- (二) 私が浮舟に代りに死んだらばよかりしに
- (三) 世間の無常は知り盡せる我なれども人の知るべき程嘆きはせぬによく推測りて尋ねくれたるよ
- (四) 禮
- (五) いとと磨しかりし
- (六) 蕪が小宰相方へ
- (七) 蕪の様子
- (八) 蕪は斯くわざ／＼尋ね寄る事抔は容易にせぬ人にて
- (九) 其蕪に尋ねらるる住居としては小宰相の居處が一向つまらぬ處なり
- (一〇) 小宰相が
- (一一) 浮舟よりも、蕪の心
- (一二) なぜ此様を奉公に出でたるならん
- (一三) 妾にして置いてもよい女なるに
- (一四) 妾にしたく思ふ様を風は小宰相に見せず

小宰相あはれしるこよろは人におくれねど數ならぬ身にきえつよぞ經る(二)

替へたらば。

と故ある紙に書きたり。物哀なる夕暮、しめやかなる程を、いとよく推し量りて

言ひたるも憎からず。

蕪つねなしとこよら世を見る憂き身だに人の知るまで歎きやはする(三)

この喜び、「哀なりし折からも、いとどなむ」など言ひに立ち寄り給へり。いと恥かしけに物々しけにて、なべてかやうになどもならし給はぬ、人柄もやむごとなき(四)

に、いと物はかなき住居なりかし。局など言ひて、狭く程なき遣戸口により居給へり、かたはらいたく覺ゆれど、流石に餘り卑下してもあらで、いとよき程に物(五)

なども聞ゆ。見し人よりも、これは心憎き氣添ひてもあるかな、などてかく出で立ちけむ。さるものにて、我も置いたらましものを、と思す。人知れぬ筋はかけ(六)

ても見せ給はず。(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一)斯うしたら氣が紛れるかと他の女に關係する事も

(二)薰

(三)身に引受けて

(四)浮舟の遺族

(五)明石が伯父式部卿宮の喪に服し居らるゝ間は

(六)明石が六條院に

(七)匂の兄

(八)二宮が明石へ

(九)匂

(一〇)女一宮

(一一)女一宮

(一二)薰

(一三)一品宮の侍女

(一四)薰が

(一五)匂も年來小宰相をよい女と思ひて

(一六)薰の戀を妨げて自分のものにせんとするを

(一七)人と同様に匂に隣くてもあるまいと小宰相が氣強くはねつけて匂を

むらすと

(一八)薰は小宰相の人並ならぬを感心して居る

(一九)薰の

(二〇)小宰相が

いとみじけれど、あだなる御心は、慰むやなど試み給ふ事もやうくありけり。

かの殿は、斯くとりもちて、何やかやと思して、(二)残の人を育ませ給ひても、猶い

ふかひなき事を忘れ難く思す。(三)后の宮の御輕服の程は、猶かくておはしますに、二

の宮なむ式部卿になり給ひにける。(四)重々しうて、常にしも參り給はず。(五)この宮は、

さうくしく物哀なるまよに、(六)一品宮の御方を慰め所にし給ふ。(七)よき人の容貌

をも、得まほに見給はぬ、(八)残多かり。(九)大將殿の、からうじていと忍びて語らひ給

ふ、(一〇)小宰相の君といふ人、容貌なども清けなり。(一一)心ばせある方の人と思されたり。

同じ琴を掻きならすつま音も撥の音も、(一二)人にはまさり、(一三)文を書き物うち言ひたる

も、(一四)由ある節をなむ添へたりける。(一五)この宮も、年頃いといたきものにし給ひて、例

の言ひ破り給へど、(一六)なかさしも珍らしけなくはあらむと、(一七)心強くねたき様なる

を、(一八)まめ人は、(一九)少し人よりは異なりと思すになむありける。(二〇)かく物思したる様も

見知りければ、(二一)忍びあまりて聞えたり。

- (一)句が
- (二)右近のする様にして句の手向はしたれば
- (三)薫の家來
- (四)法會の場所へよこしたり
- (五)一向今まで知られざりし女の法事を
- (六)常陸守が娘の産祝に立派な事をせんと心配し
- (七)身分低き故する事はよくもなし
- (八)浮舟存生ならば、常陸守の心
- (九)浮舟の
- (一〇)中君も布施を寄進し
- (一一)法會の役々の僧への饗應
- (一二)薫に浮舟といふ隠し妻がありし由を
- (一三)薫が寵愛の女を
- (一四)女二宮に懼りて
- (一五)薫と句
- (一六)いつ迄も同様に浮舟の事が悲し
- (一七)愛情の最も盛なりし時分に浮舟がなくなつて仕舞ひしは非常に悲しけれど

右近うこんがもとに、白銀しろかねの壺つぼに黄金こがね入れて賜たまへり。人見咎ひとみとがむばかり大おほなるわざはえし給たまはず、右近うこんが志こころざしにてしたりければ、心知こころしらぬ人は、「いかで斯かく」など言いひける。殿どのの人ども、睦むつまじきかぎり數多あまたたまへり。「怪あやしく音おともせざりつる人のはてを、斯かくあつかはせ給たまふ。誰たれならむ」と、今いま驚おどろく人のみ多おほかるに、常陸守ひたちのかみ來きて、心こころもなく主人あるじがり居をるなむ、怪あやしと人々見みける。少將せうしやうの子産こませて、嚴いかにしき事ことせさせむと惑まどひ、家いへの内うちになき物ものは少すくなく、唐土たうど新羅しんらの限かぎをもしつべきに、限かぎあればいと怪あやしかりけり。この御法事おんほふじの、忍しのびたる様やうに思おぼしたれど、けはひこよなきを見るに、生いきたらましかば、我わが身みに並ならぶべくもあらぬ人ひとの、御宿世おんすくせなりけり、と思おもふ。宮みやの上うへも誦經ずきやうし給たまひ、七僧そちの前まへの事もせさせ給たまひけり。今いまなむ、斯かかる人持ひともち給たまへりけり、と帝みかどまで聞召きこしめして、疎おろかにもあらざりける人ひとを、宮みやに、畏かしこまり聞きえて、隠かくしおき給たまひけるを、いとほしと思おぼしける。

二人ふたりの人ひとの御心ごこころの中うち、古ふるりす悲かなし、宮みやは生憎あやにくなりし御思おんおもひのさかりにかき絶たえては



て居ると常陸守に知らせんと母が思ひ居る中に此様な事になりし故

- (一) 蕪の
- (二) 貴人を尊びて、常陸守の氣風をいふ
- (三) 蕪の文を繰返し見て
- (四) 蕪の家來にて
- (五) 蕪が我が子どもを世話せんと仰せられしは
- (六) 浮舟が存生なまらばと、母の心
- (七) 浮舟存生中は
- (八) 常陸守の子などを
- (九) 蕪の心
- (一〇) 浮舟を
- (一一) 常陸守の子どもを世話するを人に譲られても構はぬと
- (一二) 若し生きて居るかも知れぬと思へば
- (一三) 法事はよき事なれば
- (一四) 法會にあづかる僧の人數
- (一五) 匂宮

と思ひける程に、斯れば、今は隠さむもあいなくて、ありし様泣くく語る。大

將殿の御文どもとり出でて見すれば、よき人畏くして、鄙び物めでする人にて、驚

き臆して、打返し、守いとめでたき御幸を捨てて、亡せ給ひにける人かな。己

も殿人にて、参り仕う奉れども、近く召しつかひ給ふ事もなく、いと氣高くおは

する殿なり。若き者どものこと仰せられたるは、頼もしき事になむなど、喜ぶを

見るにも、ましておはせましかばと思ふに、伏し轉びて泣かる。守も今なむ打泣

きける。さるは、おはせし世には、なか／＼かゝる類の人しも、尋ね給ふべきに

しも非ずかし。我が過にて失ひつるもいとほし、慰めむ、と思すによりなむ、人

の譏懇に尋ねじと思しける。

四十九日のわざなどせさせ給ふにも、如何なりけむことにかと思せば、とてもか

くても罪得まじき事なれば、いと忍びて、かの律師の寺にてなむせさせ給ひける、

六十僧の布施など大に掟てられたり。母君も來居て、事ども添へたり。宮よりは、

(二四) (二五)

(一) 子どもの身分が  
 (二) 御世話になるのが  
 (三) どういふ關係で黨へ  
 奉公するかといふ事は人  
 に知らせずして  
 (四) 不肖な子どもを  
 (五) 以下蕪の心、成程母  
 の罰の如く常陸守の子ど  
 もも扇風するはつまらぬ  
 縁者と睦まじくする譯な  
 れど  
 (六) 常陸守位の身分の人  
 の娘を御妾に上げぬ事も  
 ない  
 (七) 其銀を  
 (八) 卑しき女  
 (九) 一旦人妻となりし女  
 (一〇) 浮舟は八宮の御娘  
 なるを常陸守の銀なりと  
 人が噂するに於ても、元  
 元本妻に關した譯でもなき  
 故浮舟に關係した事がわ  
 が殺にはならぬ  
 (一一) 浮舟をいふ  
 (一二) 母  
 (一三) 浮舟の縁で肩身が  
 廣いと  
 (一四) 母の三條の家  
 (一五) 一寸来て  
 (一六) 娘の産の時に此様  
 な處に引込んで居る  
 (一七) 浮舟が  
 (一八) 母が常陸守に  
 (一九) 浮舟が落魄して居  
 るならんと常陸守が言ひ  
 居たりし故  
 (二〇) 黨に引取られてか  
 ら折く、で立派に暮し

いとも畏きに、また數ならぬ程は、なか／＼いと恥かしうなむ。人に何故などは  
 知らせ侍らで、怪しき様どもを皆參らせ侍りて、侍はせむ、となむ物し侍りつる」  
 と聞ゆ。實に殊なる事なきゆかり睦にぞあるべけれど、帝にも、さばかりの人の  
 女奉らずやはある、それに、然るべきにて、時めかし思さむをば、人の謗るべ  
 き事かは、たゞ人はた、あやしき女、世に古りにたるなどを持ち居る類多かり、  
 かの守の女なりけりと、人の言ひなさむにも、我がもてなしの、それに汚るべく  
 ありそめたらばこそあらめ、一人の子を徒になして思ふらむ親の心に、猶この  
 ゆかりこそ面だたしかりけれど、思ひ知るばかりの用意は、必ず見すべき事、と  
 おぼ  
 思す。  
 かしこ  
 彼處には、常陸守立ちながら来て、守「折しもかくて居給へる事」など腹立つ。年  
 (二四) (二五)  
 頃何處になむおはするなど、有の儘にも知らせざりければ、はかなき様にておはし  
 (二七)  
 ますらむと思ひ言ひけるを、  
 京やう (二八) (二九)  
 京など迎へ給ひてむ後、面目ありてなど知らせむ  
 (三〇)

(一)非常なる悲にあひながら死ぬ事も出来ぬ命を  
 (二)斯く御親切なる仰を受くべきが爲に死なざりしにやと思ふ

(三)浮舟の  
 (四)母なる私が數ならぬ者故、其子の浮舟があつた處にも置かざらんと謝めて  
 (五)京へ引取らんとの願の御詞を

(六)浮舟を失ひたる今は  
 (七)宇治といふ名もつらく思はる

(八)母の心  
 (九)一通の贈物は  
 (一〇)自分も満足なるべければ

(一一)薫に  
 (一二)石の代りに斑紋ある犀角を用ひたる石帯  
 (一三)仲信が歸らんとする時

(一四)浮舟  
 (一五)仲信が贈物を薫に見せられたれば  
 (一六)母君が自身私に御逢ひなされ

(一七)母君の詞をまねていふ也

母いみじき事に死なれ侍らぬ命を、心憂く思う給へ歎き侍るに、かよる仰言見

給ふべかりけるにやとなむ。年頃は、心細き有様を見給へながら、それは數

ならぬ身のおこたりに思う給へなしつと、辱き御一言を、行末長く頼み聞

えさせ侍りしに、言ふかひなく見給へ果てては、里の契もいと心憂く悲しく

なむ。様々に嬉しき仰言に命延び侍りて、今暫しながら侍らば、猶頼み聞

えさせ侍るべきにこそと、思ひ給ふるにつけても、目の前の涙にくれ侍りて、

え聞えさせやらずなむ。

など書きたり。御使になべての祿などは、見苦しき程なり、飽かぬ心地もすべ

れば、かの君に奉らむと志してもたりける、よき斑犀の帯、太刀のをかしき

など袋に入れて、車に乗るほど、「これは昔の人の御志なり」とて、贈らせてけり。

殿に御覽ぜさすれば、驚いと漫なるわざかな」と宣ふ。言葉には、仲信「自ら逢ひ侍

り給びて、いみじく泣くく萬の事宜びて、幼き者との事もまで仰せられたるが、

(一) 黨

(二) 浮舟の事

(三) 其方に手紙をあげんと

(四) 其方は自分の娘の事故悲は如何ばかりならんと推察して

(五) なき浮舟の形見として然るべき折には我方に訪ね給へ

(六) 仲信

(七) 口上にて言はする也

(八) 其方に對して特に懸なる志ある様には見えざりしならんが

(九) 其方を  
(一〇) 其方でも内々其積りて居てくれ

(一一) 穢れに

(一二) 強ひて仲信を呼び入れたり

過すに、大將殿より御使忍びてあり。物覺えぬ心地にも、いと嬉しくあはれなり。

黨あさましき事は、まづ聞えむと思ふ給へしを、心ものどまらず、目もくらき

心地して、まいて如何なる闇にか惑はれ給ふらむと、その程を過しつるに、

はかなくて日頃も經にける事をなむ、世の常なさも、いとと思ひのどめむ方

なくのみ侍るを、思の外にもながらへば、過ぎにしなごりとは、必ず然るべ

き事にも尋ね給へ。

など、細に書き給ひて、御使には、かの大藏大輔をぞ賜へりける。黨心のどかに

萬を思ひつよ、年頃にさへなりにける程、必ずしも志ある様には見給はざりけ

む。されど今より後、何事につけても、必ず忘れ聞えじ。又さやうに人を知れず

思ひおき給へ。幼き人どももあるなるを、公に仕う奉らむにも、必ず後見思ふべ

くなむ」など、言葉にも宣へり。痛くしも忌むまじき穢らひなれば、「深うも觸れ侍

らず」など言ひなして、せめて呼びすゑたり。御返泣くく書く。

(一)自殺は  
(二)罪の軽くなるべき追善をすべしと

(三)浮舟存生ならば、薫の心

(四)浮舟を京へ

(五)薫の心

(六)うつせ貝、貝殻  
薫文を贈りて浮舟の母を慰む、法事

(七)常陸守の北方

(八)少將の妻

(九)穢を憤む也

(一〇)本宅にも入らず

(一一)少將の妻の産も如何ならんと

(一二)母北方が産所へ近  
よらず

(一三)他の子どもの身の上も考へられず

添へなどせさせ給ふ。罪いと深かなるわざと思せば、(二)軽むべき事をぞすべきと、(三)

七日々に經佛供養すべき由など、こまかに宣ひて、いと暗うなりぬるに歸り給

ふも、(三)在らましかば、今宵歸らましやは、とのみなむ。尼君に消息せさせ給へれ

ど、罵いともく忌々しき身をのみ思う給へ沈みて、いとど物もおほえ給へられ

ず、耄れ侍りてなむ、うつぶし臥して侍ると聞えて、出で來ねば、強ひても立ち

寄り給はず。道すがら、疾く迎へ取り給はずなりにける事悔しく、水の音の聞ゆ

る限は、心のみ騒ぎ給ひて、(四)骸をだに尋ねずなりにける事、あさましくても止み

ぬるかな、如何なる様にて、(五)いづれの底のうつせに交りけむなど、やる方なく思

す。(六)

かの母君は、京に子生むべき女の事により、つよしみ騒げば、例の家にもえ行か

ず、漫なる旅居のみして、思ひ慰む折もなきに、(七)又これも如何ならむと思へど、(八)

平かに産みてけり。忌々しければえ寄らず、(九)残の人々の上も覺えず、耄れ惑ひて(一〇)

(二二)

(二三)



(一)中君  
 (二)浮舟に名をつけしも縁起悪く思はれて、祓の人形は水に流すものなれば也

(三)薫自身が悪くて  
 (四)かねては母が卑しくて輕々しき故邪送も手輕にしたるならんと不満足なりしに

(五)母が如何に思ふならん、薫の心  
 (六)かの母の子としては立派なりし浮舟なるに

(七)匂との關係などは母は知らずして  
 (八)薫に對して不満足のことありて浮舟が自殺したりと思ふかも知れぬなど

(九)浮舟は此家にて死にたるに非ざれば也  
 (一〇)轆の臺

(一一)今は我も再び此處へ訪ひ來る事もあるまじければ、今後は誰か此宿に昔を偲ぶべき  
 (一二)かの山の阿闍梨也

里の名をだにも得聞かまじき心地し給ふ。宮の上の宣ひはじめし、人形とつけそめたりしさへゆゑしう、唯我が過に失ひつる人なりと、思ひもて行くには、母の猶輕びたる程にて、後の後見もいとあやしく、事そぎてしなしたるなめりと、心ゆかず思ひつるを、委しく聞き給ふになむ、如何に思ふらむ。さばかりの人の子にては、いとめでたかりし人を、忍びたることは必ずしもえ知らで、我がゆかりに如何なる事のありけるならむとぞ思ふらむかしなど、萬にいとほしく思す。穢らひといふ事はあるまじけれど、御供の人目もあれば、のほり給はで、御車の榻を召して、妻戸の前にぞ居給へりけるも見苦しければ、いと繁き木の下に、苦を御座にて、とばかり居給へり。今は此處を來て見むことも心憂かるべしとのみ、見廻らし給ひて、

薫 我もまた憂きふる里を荒れはてばたれやどり木のかげをしのばむ

阿闍梨今は律師なりけり。召して、この法事の事おきてさせ給ふ。念佛の僧の數

(一) 浮丹が  
(二) 三條の常陸守の持家  
へ浮丹が隠れし也  
(三) 匂に居處を知られし  
と  
(四) 匂が浮丹へ

(五) 御返事を上げぬは勿  
體なく却て悪からんと

(六) 浮丹が返事を匂へ

(七) 薫の心

(八) 匂を浮丹が、以下薫  
の心

(九) どうしてよいか分ら  
ず

(一〇) 身投を

(一一) 浮丹を置かざりし  
ならば

(一二) 浮丹がどの様な苦  
勞をしても身投を思ひ立  
つことはあらずと

(一三) 薫が年來ゆかしが  
りし人の爲に

みじき事を聞えさせ侍りて、出でさせ給ひにき。それに怖ぢ給ひて、かの怪しく  
侍りし所へは渡らせ給へりしなり。その後、音にも聞えじと思してやみにしを、い  
(二) (三)

かでか聞かせ給ひけむ、唯この二月ばかりより、音づれ聞えさせ給ひし。御文はい  
(四)

と度々侍るめりしかど、御覽じ入るゝ事も侍らざりき。いと辱く、なか／＼う  
(五) (六)

たてある様になむなどぞ、右近など聞えさせしかば、一度二度や聞えさせ給ひけ  
(七) (八)

む。それより外の事は見給へず」と聞えさす。斯うぞ言はむかし、強ひて問はむも  
(九)

いとほしくて、つく／＼と打眺めつゝ、宮を珍らしく哀と思ひ聞えても、我が方  
(一〇) (一一)

を流石に疎には思はざりける程に、いとあきらむる所なく、はかなげなりし心に  
(一二) (一三)

て、この水の近きを便にて、斯く思ひ寄るなりけむかし、我が此處にさし放ちす  
(一四) (一五)

ゑざらましかば、いみじく憂き世に經とも、いかでか必ず深き谷をももとめ出で  
(一六) (一七)

ましと、いみじく憂き水の契かなと、この川の疎ましく思さるゝ事いと深し。年  
(一八) (一九)

頃哀と思ひ初めたりし方にて、荒き山路を行き返りしも、今は又心憂くて、この  
(二〇) (二一) (二二) (二三)



(一)眞偽を疑ひし心もな  
くなりて

(二)何事も物を隠してす  
る事の出来ぬ様にもてな  
されて居る身故

(三)浮舟を

(四)やがて側へ引取りて

(五)氣安い様にして末長  
く契らんと

(六)我が仕向けを浮舟が

(七)浮舟が愛情を分くる  
男がありし様に思はる

句の事をほめかす也

(八)外に聞く人なき故話  
してもよからん

(九)句との關係

(一〇)其の關係でこそ、  
此句下の「常にあひ見」へ  
かゝる

(一一)女を迷はせる事の  
上手な句の事故

(一二)此口振では驚が句  
の事を突留めしならんと

(一三)考へ込みて

(一四)中君方に浮舟が

(一五)句が浮舟の處へ

(一六)右近乳母杯がひど  
い事を申上げたので句は  
其儘出てゆかれたり

に堪へ侍らずなむ。鬼などの隠し聞ゆとも、聊残る所も侍るなるものを」とて、

泣く様もいみじければ、如何なる事にかと紛れつる御心も失せて、せきあへ給は

ず。驚我は心に身をも任せず、顯證なる様にもてなされたる有様なれば、覺束な

しと思ふ折も、今近くて、人の心おくまじく、目安き様にもてなして行末長くを

と、思ひのどめつゝ過しつるを、疎に見なし給ひけむこそ、なかくわくる方あ

りけると覺ゆれ。今は斯くだに言はじと思へど、又人の聞かばこそあらめ。宮の

御事よ、何時よりあり初めけむ。さやうなるにつけてや、いとかたはに人の心を

惑はし給ふ宮なれば、常にあひ見奉らぬ歎に、身をも失ひ給へるとなむ思ふ。な

ほ言へ。我には更にな隠しそ」と宣へば、確にこそは聞き給ひてけれど、いといと

ほしくて、右近いと心憂き事聞召しけるにこそは侍るなれ。右近も侍はぬ折は侍

らぬものを」と、ながめやすらひて、右近自ら聞召しけむ。この宮の上の御方に、忍

びて渡らせ給へりしを、あさましく思ひかけぬ程に、入りおはしたりしかど、

(二五)

(二六)

- (一) 薫の
- (二) 従來の身の不幸をも
- (三) 薫の爲に忘れて
- (四) 薫にあらはれる様
- (五) 早くなりたし杯と
- (六) 薫の引取りの噂もあ
- (七) 浮舟が薫に引取らる
- (八) 合點のゆかぬ薫の御
- (九) 内舎人等
- (一〇) 侍女等に不取締の
- (一一) 變に事情を解釋し
- (一二) 薫の
- (一三) 浮舟が
- (一四) 浮舟をどうかして
- (一五) なまじ薫と關係が
- (一六) 悪い方へ考へて浮
- (一七) 此事情以外には何
- (一八) つきませぬ

る御住居おんすまひの後は、何時いつとなく物をのみ思おもすめりしかど、たまさかにも斯かくわたり  
 おはしますを待ち聞きえさせ給たまふに、もとよりの御身おんみの歎なげをさへ慰なぐさめ給たまひつよ、心  
 のどかなる様さまにて、時々ときどきも見奉みたまらせ給たまふべき様に何時いつしかとのみ、言ことに出いでては  
 宣たまはねど、思おもし渡わたるめりしを、その御本意おんほんい叶かなふべき様に承うけたまはる事ことどもも侍はべりしに、  
 斯かくて侍さむらひふ人ひとどもも、嬉うれしき事に思おもひ給たまへ急いそぎ、かの筑波山つくはも、辛からうじて心こころゆき  
 たる氣色けしきにて、渡わたらせ給たまはむ事を營いま思おもひ給たまへしに、心得こころえぬさまの御消息おんせうそ侍はべりけ  
 るに、この宿直さのゐなど仕つかう奉まつる者ものどもも、女房達にようはうたち亂ごうがはしかななりなど、戒いめ仰おほせら  
 る事ことなど申まうして、物ものの心得こころえず荒あららしき田舎人いなかびとどもの、怪あやしき様さまにとりなし聞きゆ  
 る事ことども侍はべりしを、その後久のちひさしう御消息おんせうそなども侍はべらざりしに、心憂こころうき身みなりとの  
 み、いはけなかりし程ほどより思おもひ知るを、人數ひびかずにいかで見みなさむとのみ、萬よろづに思おもひ  
 扱あつかひ給たまふ母君ははぎむすの、なかなくななる事ことの、人笑ひとわらはれになりはてば、如何いかに思おもひ歎なげかむ  
 など、趣おもひけてなむ常つねに歎なげき給たまひし。その筋すぢより外ほかに、何事なにごとをかはと思おもひ給たまへ寄よる

- (一)有體に身投の事を話す
- (二)薫が
- (三)有る可らざる事の様に思はれる、薫の心
- (四)浮舟は
- (五)どの位迄右近等が取締ひて話すならん
- (六)句も、薫の心
- (七)わざとつくりたる悲ならば自ら分る筈なるに
- (八)薫が
- (九)浮舟と共に居なくかつた人は無きか
- (一〇)薫の仕向けが悪しと思ひて浮舟の遁世する様な事は
- (一一)如何なるせん方なき事情が突然に起りて
- (一二)浮舟が身を投げたリとは
- (一三)右近の心
- (一四)思ひもよらぬ田舎にてそだちし浮舟が
- (一五)宇治に來て後は

ては、かねて、と言はむかく言はむと思ひ設けし言葉をも忘れつよ、煩はしう覺えければ、ありし様の事どもを聞えつ。あさましう思しかけぬ筋なるに、物もとばかり宣はず、更にあらじと覺ゆるかな、なべての人の思ひ言ふ事をも、こよなく言少なに、おほどかなりし人は、いかで然るおどろくしきことは思ひ立つべきぞ、如何なる様に、この人々もてなして言ふにかあらむ、と御心も亂れまさり給へど、<sup>(五)</sup>宮も思し歎きたる氣色いと著し、<sup>(六)</sup>此處の有様も、然つれなしづくりたらむけはひは、自ら見えぬべきを、<sup>(七)</sup>斯くおはしましたるにつけても、悲しくいみじき事を、<sup>(八)</sup>上下の人集ひて泣き騒ぐを、と聞き給へば、<sup>(九)</sup>萬御供に具して失せたる人やある。猶ありけむ様を確に言へ。我をおろかなりと思ひて、背き給ふことは、よもあらじとなむ思ふ。如何様なる、忽に言ひ知らぬ事ありてか、さるわざはし給はむ。我なむえ信すまじき」と宣へば、<sup>(一〇)</sup>いといとほしく、さればよと煩はしくて、<sup>(一一)</sup>右近自ら聞召しけむ。もとより思す様ならで生ひ出で給へりし人の、<sup>(一二)</sup>世ばなれた

(一) 喪中に  
● 黨宇治に行く、右近  
浮舟の投身の事情並に同  
宮との關係を語る

(二) 黨

(三) 宇治へ

(四) 以下黨の心

(五) 八宮關係の事につき

(六) 八宮をいふ

(七) 豫期に反して大君に  
懸想せし意地きたなさを  
戒めて

(八) 佛が我に

(九) 浮舟の

(一〇) 忌が明けてから行  
かんとは思ひしかど

(一一) 其迄落附いて居ら  
れずして来りし也

(一二) 右近の心

(一三) 事情は知り居る事  
故

(一四) 我が話さずともい  
つか黨に知れる譯なれば

(一五) 間違つて黨の耳へ  
入らば事の真相が却てわ  
かちなくなるべし

(一六) 句の一條の爲にこ  
そは

(一七) 黨の

じく泣く。装束もいとうるはしく、しあつめたる物どもなれば、「かよる御服に。こ  
れをいかでか隠さむ」など、もて煩ひける。

大將殿も、猶いと覺束なきに、思し餘りておはしたり。道の程より、昔の事ども  
(三) かしき集めつよ、如何なる契にて、この父親王の御許に來初めけむ、かく思ひがけ

ぬ果まで思ひ扱ひ、この縁につけては、物をのみ思ふよ、いと尊くおはせしあた  
りに、佛をしるるべにて、後の世をのみ契りしに、心ぎたなき末のたがひめに、思  
(七) ひ知らするなめり、とぞ覺ゆる。右近を召し出でて、黨ありけむ様もはかなくし  
(八) う聞かず。猶盡せずあさましう、はかなければ、忌の残も少くなりぬ、過してと  
(九) 思ひつれど、しづめあへず物しつるなり。如何なる心地にてかは、俄にはかなく  
(一〇) なり給ひにし」と、問ひ給ふに、尼君なども氣色見てければ、遂に聞き合せ給はむ  
(一一) を、なかく隠しても、事違ひて聞えむに、損はれぬべし、怪しきことの筋にこ  
(一二) そ、空言も思ひ廻らしつよならひしか、斯くまめやかなる御氣色にさし向ひ聞え  
(一三)

(一)其の入水せんとする處を見つけて留めればよかりしにと  
 (二)注意し

(三)浮舟が書きし母への返歌  
 (四)何とも思はざりし侍従迄がなつかしく思はれて

(五)中君も外ならぬ縁なれば  
 (六)仰に従ひて當方に御仕へ申すにしても

(七)思明  
 (八)浮舟の使料

(九)浮舟の爲に拵へたる品は多くあれども仰山らしき故皆取出さず、唯侍従に相當したる櫛の箱以下の物を與へたり

(一〇)かゝる頂戴物したるを、侍従の心  
 (一一)辭退する譯にはゆかぬ  
 (一二)櫛の箱の中なる様様の小道具など

れけむと思しやるに、これを見つけてせきとめたらましかばと、わきかへる心地し給へどかひなし。侍従「御文を焼き失ひ給ひしなどに、などて目をたて侍らざりけむ」など、夜一夜語らひ給ふに、聞えあかす。かの卷數に書きつけ給へりし、母君の返事などを聞ゆ。何ばかりのものとも御覽せざりし人も、睦まじく哀に思さるれば、(四)「我が許にあれかし。彼方ももて離るべくやは」と宣へば、侍従「さて侍はむにつけても、物のみ悲しからむを思う給へれば、今この御果など過して」と聞ゆ。(五)

又もまるれ」など、この人をさへ飽かず思す。曉にかへるに、かの御料にとてまうけさせ給ひける櫛の箱一具、衣箱一具、贈物にせさせ給ふ。様々にせさせ給へりけることは多かりけれど、おどろくしかりぬべければ、唯この人におほせたる程なりけり。何心もなく参りて、かゝる事どものあるを、人は如何見む、漫にむづかしきわざかな、と思ひわぶれど、如何は聞えかへさむ。右近と二人忍びて見つと、徒然なるまゝに、細に今めかしう、し集めたる事どもを見ても、いみ

はむにつけても、物のみ悲しからむを思う給へれば、今この御果など過して」と聞ゆ。又もまるれ」など、この人をさへ飽かず思す。曉にかへるに、かの御料にとてまうけさせ給ひける櫛の箱一具、衣箱一具、贈物にせさせ給ふ。様々にせさせ給へりけることは多かりけれど、おどろくしかりぬべければ、唯この人におほせたる程なりけり。何心もなく参りて、かゝる事どものあるを、人は如何見む、漫にむづかしきわざかな、と思ひわぶれど、如何は聞えかへさむ。右近と二人忍びて見つと、徒然なるまゝに、細に今めかしう、し集めたる事どもを見ても、いみ

(一)侍従の心

(二)句の

(三)裳は禮意を表する爲のもの也、今は仕ふべき主人もなき事故裳は入らず、隨つて黒の裳の用意なき故薄紫の常の裳を持ち行く也

(四)浮丹存生ならば、侍従の心

(五)浮丹が

(六)侍従が句に

(七)句宮

(八)中君

(九)侍従の來たる事を

(一〇)侍従を

(一一)浮丹がはきくせ

(一二)御遺言もなく

(一三)悲しき堪へ難く、句の心

(一四)然るべき病氣などにて死にたるよりも

ありし御様もいと戀しう思ひ聞ゆるし 如何ならむ世にかは見奉らむ、かよる折

に、と思ひなして参りける。黒き衣ども著て、引き繕ひたる形もいと清けなり。裳

は、たゞ今我より上なる人なきに打懈みて、色もかへざりければ、薄色なるを持

せて参る。おはせましかば、この道にぞ忍びて出で給はまし、人知れず心よせ聞

えしものを、など思ふにも哀なり。道すがら泣くくなむ來ける。

宮は、この人参れりと聞召すも哀なり。女君には、あまりうたてあれば聞え給は

ず。寢殿におはしまして、渡殿におろさせ給へり。ありけむ様など委しう問はせ

給ふに、日頃思し歎きし様、その夜泣き給ひし様、侍従「怪しきまで言少に、おほお

ほとのみ物し給ひて、いみじと思す事をも、人に打出で給ふことは難く、物づつみ

をのみし給ひしけにや、宣ひ置くことも侍らず。夢にも、かく心強き様に思しか

くらむとは、思ひ給へずなむ侍りし」など、委しう聞ゆれば、ましていといみじく、

然るべきにてともかくもあらましよりも、如何ばかり物を思ひ立ちてさる水に溺

(一四)

(一)句と浮舟との中

(二)句の

(三)右近侍等にも急ぎ

て懇親を求むるにも及ば

ず、どうせ始終御世話申

上げべきなればと油断せ

しに

(四)時方一箇人の右近等

に對する同情も

(五)右近を乗すべき車を

わざ／＼句が用意させて

よこしたのに

(六)せめて侍從でも

(七)私はまして

(八)死の穢を忌みて私共

をよせつけぬが當前なる

に

(九)句の御病氣の爲に

(一〇)浮舟に對する悲が

深き爲に宇治方の穢だけ

は忌む事も出来難げなる

御様子

(一一)浮舟の忌に籠りた

さうな御様子也

(一二)忌明までの日數

む折をりになむ、仰おほせ事なくとも參りて、實ひにいと夢ゆめの様なりし事どもも、語かたり聞きえ

させ侍はべらまほしき」と言いひて、今日けふは動うごくべくもあらず。大夫たいふも泣なきて、時方ときかた更さらに

この御中おんなかの事こと、こまかに知しり聞きえさせ侍はべらず。物ものの心こころも知しり侍はべらずながら、類たぐひな

き御志みこころざしを見奉みたてまつり侍はべりしかば、君達きんたちをも、何なにかは急いそぎてしも聞きえ承うけたまはらむ、遂つひ

には仕つかう奉まつるべきあたり(一)にこそと、思おもう給たまへしを、いふかひなく悲かなしき御事おんことの後のち

は、私わたくしの御志みこころざしも、なか／＼深ふかさ増まさりてなむ」と語かたらふ。時方ときかたわざと御車みくるまなど思おほ

廻めぐらして、奉たてまつれ給たまへるを、空じなしくては、いといとほしくなむ。今いま一所いほところにても參まゐり

給たまへ」と言いへば、侍從じじゆうの君呼きみやび出いでて、右近みぎきん「さば參り給へ」と言いへば、侍從じじゆう「まして

何事なにことをか聞きえさせむ。さてもなほ、この御忌おんいみの程ほどには、いかでか忌いませ給たまはぬ

か」と言いへば、時方ときかた惱なやませ給たまふ御おんひどきに、様々さまざまの御おんつよしみども侍はべるめれど、忌い

みあへさせ給たまふまじき御氣色みけしきになむ。又またかく深ふかき御契おんちぎりにては、籠こもらせ給たまひてもこ

そは、おはしまさめ。殘のこりの日幾許ひいくはくならず、猶なほ一所いほところ參り給へ」と責せむれば、侍從じじゆうぞ、

(二) 宇治に居ても心が安まりさうにもなき故  
(三) 残り居る宇治の人々等が

(四) 前に警固せし内倉人等も

(五) 一番終に句の來られし時此者共が邪魔して浮舟に逢はせざりしが残念と時方が思ひ出す也

(六) 句がつまらぬ歎をなざる事よと其時は思ひ居たれど、時方等の感じ

(七) 句の通ひ來し

(八) 句の斯くくの仰によりて

(九) 右近が句へ参りたら

(一〇) 事情が明白にも分りになる程に

(一一) 一寸他所へ行つたと呼をついても似合はしい時分になつたら

の人々召して、右近を迎につかはす。母君も、更にこの水の音けはひを聞くに、我

も轉び入りぬべく、悲しく心憂き事のどまるべくもあらねば、いと侘しうて歸り

給ひにけり。念佛の僧等を頼もしき者にていと幽なるに、入り來たれば、事々し

く、俄に立ちめぐりし宿直人等も見とがめず。生憎に限のたびしも、入れ奉ら

ずなりにしよと、思ひ出づるもいとほし。さるまじき事を思ほしこがるよ事と、見

苦しく見奉れど、此處に來ては、おはしましよ夜なくの有様、抱かれ奉り給

ひて、船に乗り給ひしけはひの、あてに美しかりし事などを思ひ出づるに、心強

き人なく哀なり。右近逢ひて、いみじう泣くも理なり。時方かく宣はせて、御

使になむ参り來つる」と言へば、右近今更に、人もあやしと言ひ思はむもつよまし

く、参りても、はかなくしく聞召しあきらむばかり、物聞えさすべき心地もし侍

らず。この御忌果てて、あからさまに物になむと、人に言ひなさむも、少し似つ

かはしかりぬべき程になしてこそ、心より外の命侍らば、いさよか思ひしづまら



(一)人をして悲を備せしむる故鳴く音を憤むべしと也

(二)中君は浮舟と匂との關係を知り居れり

(三)以下中君の心、大君浮舟などの身の上をいふ

(四)吞氣故

(五)分つて居るのに隠して居るも苦しき故

(六)取繕つて中君に話す

(七)中君が浮舟を預かり居りし時の事をいふ也

(八)中君は浮舟の姉妹故他の人より睦まじく匂が思ふ也

(九)萬事鄭重にて匂の病氣をも非常に大事がる六君の所では、匂の心

(一〇)夕霧

(一)匂宮浮舟の侍女右近を招く、侍從右近に代りて二條院を訪ふ

(二)匂が浮舟の事を妻の様にのみ思はれて

(三)匂が死んだのかしらの

(四)時方等

り。氣色ある文かなと見給ひて、

匂橘のかをるあたりはほとよぎすこよろしてこそなくべかりけれ

煩はし。

と書き給ふ。女君この事の氣色は、皆見知り給ひてけり。哀にあさましきはかな

さの、様々につけて心深き中に、我一人物思ひ知らねば、今までながらふるにや、

それも何時まで、と心細くおほす。宮も、隠なきものから隔て給ふもいと苦しければ、

ありし様など少しは取り直しつと語り聞え給ふ。匂隠し給ひしがつらかり

し」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにも、他人よりはむつまじく哀なり。事々しくう

るはしくて、例ならぬ御事のさまも、驚き惑ひ給ふ所にては、御訪らひの人しけ

く、父おとど兄の君だち隙なきも、いとうるさきに、此處はいと心安くて、なつ

かしくぞ思されける。

いと夢の様にのみ、猶いかで、いと俄なりける事にかはとのみ、いぶせければ、例



(一) 浮舟死後の世話なども、薫の心

(二) 中君も

(三) 浮舟の母が下聚々々しき人物で

(四) 死者の兄弟ある場合は其兄弟の爲に葬送を手輕にする物ぢや杯と下樓の人はいふものなればと母が思ひて

(五) 宇治の様子

(六) 浮舟逝去當時の事情

(七) 宇治に長逗留も出来ず急いで往つて直に歸るも氣の毒なりなどと

(八) 四月になりて

(九) 薫が宇治へ

(一〇) 「なき人の宿に通はば時鳥かけて音にのみ鳴くと告げなん」

(一一) 二條院

(一二) 句の居る日なれば

(一三) 冥途の鳥と言はるる時鳥の泣く音に哀を感じるならは君も定めしん音に泣き居らるゝならん

(一四) 句

(一五) 浮舟に

木石にあらざれば皆情あり」と、打誦じて臥し給へり。後のしたよめなども、い

とはかなくしてけるを、宮にも如何聞き給ふらむと、いとほしくあへなく、母の

直々しくて、兄弟あるはなど、さやうの人は言ふ事あなるを思ひて、事そぐなり

けむかし、など心づきなく思す。おほつかなさも限なきを、ありけむ様も自ら聞

かまほしと思せど、長籠し給はむも便なし、往きと往きて立ちかへらむも心苦し

など、思し煩ふ。

月たちて今日ぞ渡らましと、思し出で給ふ日の夕暮、いと物あはれなり。御前近

き橘の香のなつかしきに、杜鵑の二聲ばかり鳴きて渡る。薫宿に通はば」と獨

言ち給ふも飽かねば、北の宮に、こよに渡り給ふ日なりければ、橘を折らせて聞

え給ふ。

薫忍びねやきみもなくらむかひもなき死出のたをさに心かよはば

宮は、女君の御様のいとよく似たるを、哀におほして、二所ながめ給ふ折なりけ

二四

(一)自然御覽になつたかも知れぬ、句に對するあてこすり也  
(二)中君の姉妹なるをいふ

(三)句が浮舟を、以下驚の心  
(四)浮舟の生涯ははかなき一生なれども

(五)浮舟の  
(六)句をいふ

(七)句の妻妾  
(八)さしおきて

(九)句が浮舟の爲に  
(一〇)銘々の職とする道につけて

(一一)畢竟句が浮舟を思ひて病にかゝれる故なり

(一二)浮舟に對する情は句に劣れりとは思はれぬ

(一三)死んだ者と思へば

(一四)悲のしづめ様がなし

(一五)此様に悲むまじと

(一六)「人非木石皆有情、不知不逢傾城色」

白居易の句

にても御覽ごらんせさせばやと、思おもひ給たまへし人ひとになむ。自おのづから然しかもや侍はべりけむ、宮みやにも參まゐり通かよふべき故ゆゑ侍はべりしかば(一)など、少すこし氣色けしきばみて、驚おど御心ごしん地例ちれいならぬ程ほどは、漫すざろなる世よの事こと聞き召よめし入れ、御耳ごんみみ驚おどくもあいなきわざになむ。よく慎つとませ給たまふべく(二)など、聞きえおきて出いで給たまひぬ。

いみじくも思おもしたりつるかな、いと(三)はかなかりけれど、流石さすがに高たかき人ひとの宿世すくせなりけり、當時たうじの帝后みかひさきのさばかりかしづき奉たてまつり給たまふ御子みこ、顔容かほかたち貌なりよりはじめて、た

だ今いまの世よには類たぐひおはせざ(四)めり、見み給たまふ人ひととても、斜なならず、様々さまさまにつけて、限かぎり

なき人ひとをおきて、これに御心ごしんを盡つくし、世よの人ひと立ち騒さわぎて、修ず法ほう、讀よ經きやう、祭まつり、祓はらと、

道々みちみちに騒さわぐは、この人ひとを思おもすゆかりの、御心ごしん地ちのあやまりにこそ(五)はありけれ、我われ

も、かばかりの身みにて、時ときの帝みかの御女ごんむすめをもち奉たてまつりながら、この人ひとのらうたく覺おぼ

ゆる方かたは劣おとりやはしつる、まして今いまはと覺おぼゆるには、心こころをのどめむ方かたなくもある

かな、さるは、嗚呼をこなり、斯かからじ、と思おもひ忍しのぶれど、様々さまさまに思おもひ亂みだれて、驚おど人ひと

(一) 表立てては丁度女二を娶りし際故世難を受けさうなりしかば

(二) 宇治し

(三) 浮舟も

(四) 私一人を守つて居る了簡も別段な様にも思はれしかども、匂密通の事をはめかしたる也

(五) 本妻と思へば其不婦を咎める氣にもなれど始から其積てはなき故

(六) 御聞の次第もあるならん

(七) 驚の心、是程の泣願は見せたくなし

(八) 取亂したる様なるを

(九) 見舞も言ひやりたかりしかども隠し居らるゝ事と聞きて遠慮したり  
(一〇) 慰み物としては匂に差上げて然るべき人物と思ひし女なり

侍りにし人の、同じゆかりなる人覺えぬ所に侍りと聞きつけ侍りて、時々さて見

つべくやと思ふ給へしに、あいなく人の譏も侍りぬべかりし折なりしかば、この

怪しき所に置きて侍りしを、をさくまかりて見る事もなく、又彼も、某一人を

あひ頼む心もことに無くてやありけむとは見給へつれど、やむごとなく物々しき

筋に思ひ給へばこそはあらめ、見るにはた、殊なる咎も侍らずなどして、心やす

くらうたしと思ひ給へつる人の、いとほかなくて亡くなり侍りにける。なべて世

の有様を、おもう給へつどけ侍るにも悲しくなむ。聞召す様も侍るらむかし」と

て、今ぞ泣き給ふ。これも、いと斯うは見え奉らじ、嗚呼なり、と思ひつれど、

こほれ初めてはいと留めがたき氣色の、いさよかみだり顔なるを、怪しくいとほ

しと思せど、つれなくて、匂いと哀なる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。如

何にとも聞ゆべく思ふ給へながら、わざと人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかば

なむ」と、つれなく宣へど、いと堪へ難ければ、言少にておはします。驚さる方

(二〇) かな

(一) 浮舟の事をのみ句が  
思ひ居られると見える  
(二) 此兩へのよい中にな  
りしは

(三) 句の

(四) 句の  
(五) 藪は非常に浮舟に對  
して冷淡なる哉、句の心

(六) 死別といふ穢な非常  
な事がなくてさへ

(七) わが涙を浮舟故と藪  
が氣附きたらば

(八) それ程に

(九) 無常を深く思へる藪  
が却て平氣で居る事上と

(一〇) 藪を浮舟の形見と  
思へば哀なり、吾妹子が

來ては寄添ふ眞木柱をも  
睦じやゆかりと思へば

(一一) 浮舟の事をさのみ  
隠して居るてもあるまじ

と藪が思ひて

(一二) 句に言はずに居る  
事がある間は

(一三) 藪が

(一四) 用が

(一五) 用がなければ藪が  
句を訪問せず

(一六) 取紛れて昔の様に  
睦まじく語る折を得ず

(一七) 字治

(一八) 大君の妹の浮舟が  
意外の處に居ると聞きて

や、唯この事をのみ思すなりけり、  
何時よりなりけむ、我を如何にをかしと、  
物

や、唯この事をのみ思すなりけり、  
何時よりなりけむ、我を如何にをかしと、  
物  
笑し給ふ心地に、月頃思し渡りつらむ、と思ふに、この君は悲しさは忘れ給へる  
(一) 句の  
(二) 句の  
(三) 句の

を、こよなくも疎なるかな、物の切に覺ゆる時は、いと斯からぬ事につけてだに、  
(四) 句の  
(五) 句の  
(六) 句の

空飛ぶ鳥の鳴き渡るにも催されてこそ悲しけれ、わが斯く坐に心弱きにつけても、  
(七) 句の  
(八) 句の  
(九) 句の

若し心を得たらむに、さ言ふばかり、物の哀を知らぬ人にもあらず、世の中の常  
(一〇) 句の  
(一一) 句の  
(一二) 句の

なき事を、しみて思へる人しもつれなきと、羨ましくも心憎くも思さるよものか  
(一三) 句の  
(一四) 句の  
(一五) 句の

ら、眞木柱はあはれなり。これに向ひたらむ様も思しやるに、形見ぞかしとうち  
(一六) 句の  
(一七) 句の  
(一八) 句の

まもり給ふ。やうく世の物語聞え給ふに、いと籠めてしもはあらじと思して、  
(一九) 句の  
(二〇) 句の  
(二一) 句の

昔より心にしばしも籠めて、聞えさせぬ事残し侍る限は、いといぶせくのみ思  
(二二) 句の  
(二三) 句の  
(二四) 句の

う給へられしを、今はなかくの上臈になりにて侍り、まして御暇なき御有様に  
(二五) 句の  
(二六) 句の  
(二七) 句の

て、心のどこかにはおはします折も侍らねば、宿直などに、その事となくてはえさぶ  
(二八) 句の  
(二九) 句の  
(三〇) 句の

らはず、そこはかとなくて過し侍りてなむ。昔御覽せし山里に、はかなくて亡せ  
(三一) 句の  
(三二) 句の  
(三三) 句の

(四) 薫、匂宮を訪ひて浮舟の事を語る

(一) 匂の病氣見舞に

(二) 薫の心、浮舟位の女の死を歎くとて

(三) 匂へ見舞に

(四) 結鈴式部御宮、源の兄弟

(五) 薫が薄色の喪服を着たる也

(六) 内々浮舟の喪服の積で居るをいふ

(七) 薫の様

(八) 薫に逢ふも何となく氣がまかれて、匂の心

(九) 注意する故

(一〇) 明石

(一一) 匂の感じ

(一二) 必ずしも此我が様子を見て薫がわが胸の秘密を看破りもすまじ、匂の心

(一三) 薫の心

宮の御訪ひに、日々に参り給はぬ人なく、世の騷となれる頃、事々しき際ならぬ

思に籠りて、参らざらむもひがみたるべし、と思して参り給ふ。その頃、式部

御宮と聞ゆるも亡せ給ひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心の中に哀に

思ひよそへられて、つぎくしく見ゆ。少し面瘡せて、いとどなまめかしき事ま

さり給へり。人々まかして、しめやかなる夕暮なり。宮臥し沈みてのみはあらぬ

御心地なれば、疎き人にこそ逢ひ給はね、御簾の内にも例入り給ふ人には、對面

し給はずもあらず。見え給はむもあいなくつよましく、見給ふにつけても、いと

ど涙のまづ堰き難さを思せど、思ひしづめて、鳥おどろくしき心地にも侍ら

ぬを、皆人は、つよしむべき病の様なりとのみ物すれば、内裏にも宮にも思し騷

ぐがいと苦しく、けに世の中の常なさを、心細く思ひ給ふる」とて、押し拭ひ紛

らはし給ふと思す涙の、やがて滯らずふり落つれば、いとはしたなけれど、必

ずしもいかでか心得む、唯女々しく心弱きとや見ゆらむ、と思すも恥かし。

(一三) 薫の心

(一四) 薫の心

(一)出家志願なりし我身  
が  
(二)俗體にて  
(三)道心を起さしめんと  
て

(四)句旨

(五)そばの者どもが  
(六)浮舟の

(七)涙がちなる自分の様  
子を

(八)句が甘く人前をつ  
ちふ積なれど

(九)薫  
(一〇)薫の心

(一一)句と浮舟との中は  
逢ふ事はなくて手紙の遺  
取だけといふ様々中では  
無かりしなり、薫の心  
(一二)浮舟は句が見附け  
れば手を出さずには居ら  
れぬ人であつた  
(一三)浮舟が

りけり、さまざまに志したりし身の、思の外に、かく例の人にてながらふるを、佛  
などの憎しと見たまふにや、人の心を起させむとて、佛のし給ふ方便は、慈悲を  
も隠して、かやうにこそはあなれ、と思ひ續けつよ、行をのみし給ふ。

かの宮はた、まして二三日は物も覺え給はず、現心も無き様にて、如何なる御

物怪ならむなど騒ぐに、やうく涙盡し給ひて、思し鎮まるにしもぞ、ありし様

は戀しくいみじく思ひ出でられ給ひける。人には唯御病の重き様にのみ見せて、斯

く坐なるいやめの氣色知らせじと、かしこくもて隠すと思しけれど、自らいと著

かりければ、「如何なる事にかく思し惑ひ、御命も危きまで沈み給ふらむ」と、言ふ

人もありければ、かの殿にも、いとよくこの御氣色を聞き給ふに、さればよ、猶

餘所の文通はしのみにはあらぬなりけり。見給ひては必ずさ思しぬべかりし人ぞ

かし、ながらへましかば、たどなるよりは、我が爲にも嗚呼なる事も出で來なま

し、と思すになむ、焦るゝ胸も少し醒むる心地し給ひける。



(一)右近等が

(二)薫

(三)薫の心

(四)飛でもなき間違即ち

句がかくれて通ふ事などの

出来しも

(五)句も

(六)緩慢で戀なれぬ心が

悔しく

(七)女三の御病氣を心配

する處へ又浮舟の歎が重

なり悲みに堪へずして

(八)女二宮

(九)女二へ斷りの手紙、

格別の思でもなけれど浮

舟の死を聞きし故

(二〇)忌々しき故遠慮し

て其方へ參らず

(二一)浮舟の

(二二)浮舟存生中は、以

下薫の心

(二三)我が運命なりけり

も答へやらすなりぬ。殿は、猶いとあへなくいみじと聞き給ふにも、心憂かりけ

る所かな、鬼などや住むらむ、などて今までさる所にすゑたりつらむ、思はずな

る筋の紛ある様なりしも、かく放ち置きたるに心安くて、人も言ひ犯し給ふなり

けむかし、と思ふにも、我がたゆく世づかぬ心のみくやしく、御胸いたく覺え給

ふ。惱ませ給ふあたりに、かよる事おほし亂るよもうたてあれば、京におはしぬ。

宮の御方にも渡り給はず。

事々しき程にも侍らねど、忌々しき事を近う聞き侍れば、心の亂れ侍るほど

も忌々しくてなむ。

と聞え給ひて、盡せずはかなくいみじき世を歎き給ふ。ありし様容貌いと愛敬づ

き、をかしかりしけはひなどの、いみじく戀しく悲しければ、現の世には、など

斯くしも思ひ入れず、のどかにて過しけむ、たゞ今は、更に思ひしづめむ方なき

儘に、悔しき事の數知らず、かよる事の筋につけて、いみじう物思ふべき宿世な

(二三)

- (目) 蕪と匂宮各自の愁傷
- (一) 蕪
- (二) 女三
- (三) 浮舟方を
- (四) 斯様々々と今度の始末を傳ふる人もなかりしかば
- (五) 蕪の
- (六) 外聞廻しと宇治の人が思ふに
- (七) 蕪に
- (八) 投身の翌々日
- (九) 早速行くべきである
- が
- (一〇) 母女三の
- (一一) 籠り居る故直には行かれぬ
- (一二) 葬送はなせ昨夜やつて仕舞ひしぞ
- (一三) 我に通知して
- (一四) 人の一生の終りなる葬式を
- (一五) 蕪自身の爲にも
- (一六) 涙にくれて物も言はれぬといふのみを口實にして

て隠しける。

大將殿は、入道の宮の惱み給ひければ、石山に籠り給ひて、騒ぎ給ふ頃なりけり。

さていとど彼處をば覺束なく思しけれど、はかなくしく然なむといふ人は無かり

ければ、かゝるいみじき事にも、まづ御使の無きを、人目も心憂しと思ふに、御

庄の人なむ参りて、云々と申させければ、あさましき心地し給ひて、御使そのま

たの日、まだつとめて参りたり。使者「いみじき事は、聞くまよに自ら物すべきに、

かく惱み給ふ御事により、つよしみて、かゝる所に日を限りて籠りたればなむ。昨

夜の事は、などか、こゝに消息して、日を延べても然る事はするものを、いと輕

らかなる様にて、急ぎせられにける。とてもかくても、同じいふかひ無さなれど

とちめの事をしも、山賤の謗りをさへ負ふなむ、此處の爲も辛き」など、かの睦ま

じき大藏の大夫して宣へり。御使の來たるにつけても、いとどいみじきに、聞え

む方なき事どもなれば、唯涙におほほれたるばかりをかごとにて、はかなくしう



(一)母が

(二)浮舟の敷物

(三)車に

(四)浮舟の扨中籠り居るべき人々のみ速立ちて

(五)車を

(六)前にありし黨の家來筋の者など

(七)齋に  
(八)わざと

(九)様子知りたる

(一〇)當然すべき作法も行はず

きにくし」と聞ゆれば、とざまかうざまに思ふに、胸のせき上る心地して、如何にも如何にもすべき方も覺え給はぬを、この人々二人して、車寄せさせて、御座ども、氣近う使ひ給ひし御調度ども、皆ながら脱ぎおき給へる御衾など様の物を取り入れて、乳母子の大徳、それが叔父の阿闍梨、その弟子の陸まじきなど、元より知りたる老法師など、御忌に籠るべき限して、人の亡くなりたるけはひに眞似びて、出し立つるを、乳母、母君は、いといみじくゆよしと臥し轉ぶ。大夫内舍人など、

(五)おどし聞えし者どもも参りて、内舍人「御葬送のことは、殿に事の由申させ給ひて、日定められて、厳しうこそ仕う奉らめ」など言ひけれど、右近衛「殊更に、今宵過すま

じ、いと忍びて、と思ふ様あればなむ」とて、この車をむかひの山の前なる原にやりて、人も近くも寄せず、この案内知りたる法師の限して焼かす。いとほかなく

て、烟は果てぬ。田舎人どもは、なか／＼かゝる事を事々しくしなし、言忌など深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、ある事どももし給はず、下

(一)身投した人をさうで  
ない様に言ひ紛らして

(二)母方薫句なども浮丹  
は一體どうなり行きし事  
ぞと疑はんも

(三)句との一件も浮丹が  
進んでした事ならず、右

近と侍従と相談の詞

(四)母に死後に聞かれて  
も格別恥かしき事でもな  
ければ

(五)母に話して

(六)死の悲の上に死骸の  
なき事をさへ

(七)合點のゆく様にして  
上げん

(八)屍體のなき異様な様  
にて

(九)母に話して

(一〇)母に

(一一)母の心

(一二)屍體の行方を尋ね  
て

(一三)効力は無いながら  
世間の噂はすさまじくて

聞憎からん

にも、疎ましく悲しと思ひつよ、侍従「さて亡せ給ひけむ人を、とかく言ひ騒ぎて、何

處にも何處にも、如何なる方になり給ひにけむと、思し疑はむも、いといとほしき

事」と言ひ合せて、「忍びたる事とても、御心より起りてありし事ならず。親にて、

なき後に聞き給へりとも、いとやさしき程ならぬを、右の儘に聞えて、斯くいみ

じく覺束なき事どもをさへ、かたぐ思ひ惑ひ給ふ様は、少しあきらめさせ奉

らむ。亡くなり給へる人とても、骸を置きてもて扱ふこそ世の常なれ、世づかぬ

氣色にて日頃も経ば、更に隠れあらじ。猶聞えて、今は世の聞をだに繕はむ」と

語らひて、忍びてありし様を聞ゆるに、言ふ人も消え入り、え言ひやらず。聞く

心地も惑ひつよ、然ば、このいと荒ましと思ふ河に、流れ亡せ給ひにけり、と思

ふに、いとど我も落ち入りぬべき心地して、母「おはしましにけむ方を尋ねて、骸

をだにはかくしく收めむ」と宣へど、右近等「更に何のかひ侍らじ。行方も知らぬ

大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから、人の言ひ傳へむ事は、いと聞

(一)句の一件によりて浮舟の心配したる事は母は知らぬ故  
 (二)母の心

(三)かねて怖ろく女二宮から、以下母の心

(四)蘭が浮舟を引取るべしと聞きて

(五)新參で氣の知れぬ女杯はなきかと

(六)こゝは山の中ぢやとて

(七)新參者は

(八)早く京へ行きたしと

(九)一部分は居らず

(一〇)浮舟の  
 (一一)前に見えたる浮舟の歌

にしつる事ぞ」と感ふ。(二)かゝる事どもの紛ありて、いみじう物思ひ給ひつらむとも知らねば、身を投げ給へらむとも思ひも寄らず、鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもて去ぬらむ、昔物語のあやしき物の事の譬にか、さやうなる事も言ふなりし、と思ひ出づ。さてはかの怖ろしと思ひ聞ゆるあたりに、心など悪しき御乳母やうの者や、かう迎へ給ふべしと聞きて、めざましがりて、たばかりたる人もやあらむ、と下衆などを疑ひ、今參の心知らぬやあると問へど、侍女いと世離れたりとて、あり習はぬ人は、こよにてはかなき事もえ爲す、今疾く參らむと言ひつよなむ、皆その急ぐべき物どもなど取り具しつよ、かへり出で侍りにし」とて、もとよりある人だに、かたへは無くて、いと人少なる折になむありける。侍従などこそ、日頃の御氣色思ひ出で、「身を亡ひてばや」など泣き入り給ひし折々の有様、書きおき給へる文をも見るに、「なきかけに」と書きすさび給へるものの、硯の下にありけるを見つけて、河の方を見やりつよ、響きのよしる水の音を聞く

- (一) 句の事をば
- (二) 浮舟が内々で
- (三) 自殺せられたる様なれば
- (四) 有體には言はず
- (五) 又ゆつくり參上すべし
- (六) 斯く立話しするも略式すぎ
- (七) 句自身も御出あるべし
- (八) 以下侍従の心
- (九) 今になりて浮舟と句との關係が人に知れるもの
- (一〇) 浮舟の爲には
- (一一) 祕密を守り通されたるのが亡き人への御志なるべし
- (一二) 以下宇治の人々の心
- (一三) 横死の趣を人に聞かせたくなしと
- (一四) 時方に長居されては
- (一五) 色々と勸めて時方を歸したり
- (一六) 母の愁傷、屍骸なき葬送
- (一七) 目の前て死なせたならは

そめたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちて、この御事をば、人知れぬ様にのみ、  
かたじけな あはれ おも きこ た おんご ひ せ し さま  
 辱く哀と思ひ聞えさせ給へりしに、御心亂れけるなるべし。あさましうて、心  
こころ

と身を亡くなし給へる様なれば、かく心の惑に、ひがくしく言ひ續けらるよな  
み な やう こころ ま ご ひ い つ つ べ  
 めり」と、流石にまほならず仄めかす。心得がたく思ひて、時方さらば、のどかに  
さ が ま ほ な ら ず は つ め か す こ ろ え た く お も ひ て 時 方 さ ら ば の ど か に  
(四)

參らむ。立ちながら侍るも、いと事そぎたる様なり。今御自らもおはしましなむ  
ま ら む た ち な が ら 侍 る も い と 事 そ ぎ た る 様 な り 今 御 自 ら も お は し ま し な む  
(六) (七)

と言へば、あな辱。今さらに人の知り聞えさせむも、なき御爲は、なか  
い い ば あ な 辱 今 さ ら に 人 の 知 り 聞 え さ せ む も な き 御 爲 は な か く  
(八) (九) (一〇)

めでたき御宿世見ゆべき事なれど、忍び給ひし事なれば、また漏させ給はでやま  
め で た き 御 宿 世 見 ゆ べ き 事 な れ ど 忍 び 給 ひ し 事 な れ ば ま た 漏 さ せ 給 は で や ま  
(一一) (一二)

せ給はむなむ、御志に侍るべき、此處には、かく世づかず亡せ給へる由を人に  
せ 給 は む な む 御 志 に 侍 る べ き 此 處 に は か く 世 づ か ず 亡 せ 給 へ る 由 を 人 に  
(一三) (一四)

聞かせじ、と萬に紛らはすを、自然に事どもの氣色もこそ見ゆれ、と思へば、と  
き 聞 か せ じ と 萬 に 紛 ら は す を 自 然 に 事 ど も の 氣 色 も こ そ 見 ゆ れ と 思 へ ば と  
(一五) (一六)

かく唆し遣りつ。  
か く 唆 し 遣 り つ  
(一七)

雨のいみじかりつる紛に、母君も渡り給へり。更に言はむ方もなく、母目の前に亡  
あ め の い み じ か り つ る 紛 に 母 君 も 渡 り 給 へ り 更 に 言 は む 方 も な く 母 目 の 前 に 亡  
(一八) (一九)

くなしたらむ悲しさは、いみじくとも、世の常にて類あることあり。これは如何  
く な し た ら む 悲 し さ は い み じ く と も 世 の 常 に て 類 あ る こ と あ り こ れ は 如 何  
(二〇) (二一)





(一)合點のゆかぬ事、浮丹の死骸のなき様子をるをいふ

(二)浮丹を

(三)句が自分の名代に

(四)句が

(五)萬一にも傳聞の誤にて浮丹實は無事なるかも知れずと其を頼みにして其方達に逢ひて實情を聞き來れと私を遣はされし句の御心をも

(六)句の浮丹に對する程の心盡しは

(七)侍従の心

(八)浮丹が

(九)驚がうるさく引取りの事を言ひ來る事もあり

(一〇)最初から關係の續へ引取らせんと用意して

たらむ、人にまれ鬼にまれ、返し奉れ。なき御骸をも見奉らむ」と言ひつゞく

るが、心得ぬ事どもまじるを、怪しと思ひて、時方「猶宣へ。もし人の隠し聞え給

へるか。確に聞しめさむと、御身のかはりに出し立てさせ給へる御使なり。今は、

とてもかくてもかひなき事なれど、後にも聞召し合する事の侍らむに、違ふ事ま

じらば、参りたらむ御使の罪になるべし。又、さりとても頼ませ給ひて、君達に

對面せよと仰せられつる御心ばへも、辱しとは思されずや。女の道に惑ひ給ふ

ことは、人の帝にも、古き例どもありけれど、まだかよる事この世にはあらじと

なむ見奉る」といふに、實にいと哀なる御使にこそあれ、隠すとも、かくて例な

らぬ事の様自ら聞えなむ、と思ひて、侍従などか、聊にても、人や隠い奉り

給ふらむと、思ひ寄るべき事あらむには、斯くしも在るかぎり惑ひ侍らむ。日頃

いといみじく物を思し入るめりしかば、かの殿の煩はしけに、ほのめかし聞え給

ふ事などもありき、御母に物し給ふ人も、斯くのとしる乳母なども、初より知り

(二〇)

(一) 御面談の出来ぬは残念

(二) もう一人の方即ち侍従にでも逢ひたし

(三) 浮舟自身も思ひかけぬ様に

(四) 少し落着きてから今迄の浮舟の物案じの様句に對する苦心の様など御話し申すべし

(五) 死の穢

(六) 生甲斐ある御生活をなさるのを

(七) 取つて行く事はあるまじ

(八) 故事あるが不詳

も立ち寄り給はめ。え聞えぬ事」と言はせたり。時方さりとして、かく覺束なくて

は、いかど歸りまり侍らむ。今一所だに」と切に言ひたれば、侍従ぞ逢ひたり

ける。侍従「いとあさましく、思しもあへぬ様にて亡せ給ひにたれば、いみじと言

ふにも、あかず夢の様にて、誰もく惑ひ侍るよし申させ給へ。少し心地ものど

め侍りてなむ、口頃も物おほしたりつる様、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へ

りし有様なども、聞えさせ侍るべき。この穢らひなど、人の思み侍るほど過して、

今一度たち寄り給へ」と言ひて、泣くこといみじ。内にも泣く聲々のみして、乳母

なるべし、乳母「あが君や、何方にかおはしましぬる。歸り給へ。空しき骸をだに

見奉らぬが、かひなく悲しくもあるかな。旦暮見奉りても飽かず覺え給ひ、い

つしかかひある御有様を見奉らむと、朝夕に頼み聞えつるにこそ、命も延び侍

りつれ。打捨て給ひて、かく行方も知らせ給はぬ事。鬼神も、あが君をばえ領じ

奉らじ。人のいみじく惜む人をば、帝釋も返し給ふなり。我が君を取り奉り

(一) 薫

(二) 何か口實にする用事がなくて我が宇治へ参りて其事が薫へ知れたらば此方の秘密を薫に悟られるかも知れませぬ  
 (三) 譯の分らぬ儘では居られぬ

(四) 問合せよ

(五) 時方が宇治へ

(六) 時方の如き身輕き身分の人

(七) 埋葬する也

(八) 以後君が此處へ御出なさる事はあるまじ

る事問ひ聞け」と宣へば、時方「かの大將殿、如何なる事か聞き給ふこと侍りけむ、宿直するもの疎なりなど、いましめ仰せらるるとて、下人の罷り出づるをも、見とがめ問ひ侍るなれば、ことづくる事無くて時方まかりたらむを、物の聞え侍らば、思し合することなどや侍らむ。さて俄に人の亡せ給へらむ所は、論なう騒がしく、人しゆく侍らむを」と聞ゆ。匂さりとていと覺束なくてやあらむ。猶とかく然るべき様に構へて、例の心知れる侍従などに逢ひて、如何なる事を斯く言ふぞと案内せよ。下衆は僻事いふなり」と宣へば、いとほしき御氣色も辱くて、夕つ方行く。

(四)

かやすき人は疾く行き著きぬ。雨少し降りやみたれど、わりなき道にやつれて、下衆の様に來たれば、人多く立ち騒ぎて、人々「今宵やがてをさめ奉るなり」など言ふを聞く心地もあさましく覺ゆ。右近に消息したれども、え逢はず。右近「ただ今物おほえず、起きあからむ心地もせでなむ。ざるは今宵ばかりこそは、かく

(六)

(七)

(八)

(二)非常な事

(一)句宮  
(二)變な返事を浮舟がよ  
こしたのはどういふ積か  
しち、以下句の心  
(四)浮舟を思つては居る  
様なれど  
(五)浮舟が  
(六)何處へか隠れる積で  
あの様な返事をしたのか  
しちと

(七)浮舟  
(八)人々が  
(九)あわてゝ物などに突  
當る也  
(一〇)此使は事情をよく  
知り居らぬ男にて  
(一一)句に返事を  
(一二)句の心  
(一三)浮舟が重病なりし  
事も聞かず、句の心  
(一四)一向何のけぶりも  
なくて

かけても、斯くなべてならずおどろくしき事、思し寄らむものとは見えざりつ  
る人の御心さまを、猶如何にしつる事にかと、覺束なくいみじ。乳母は、なかな  
か物も覺えて、唯如何様にせむ、如何様にせむ」とぞ言はれける。  
宮にも、いと例ならぬ氣色ありし御返、如何に思ふならむ、我を、流石にあひ思  
ひたる様ながら、あだなる心なりとのみ、深く疑ひたれば、外へいき隠れなむと  
にやあらむと、思しさわぎて御使あり。ある限泣きまどふ程に來て、御文もえ奉  
らす。使者「如何なるぞ」と下衆女に問へば、下女上の、今宵俄に亡せ給ひにけれ  
ば、物もおほえ給はず。頼もしき人もおはしまさぬ折なれば、さぶらひ給ふ人々  
は、唯物にあたりてなむ惑ひ給ふ」と言ふ。心も深く知らぬ男にて、委しくも問  
はで参りぬ。斯くなむと申させたるに、夢と覺えていとあやし。いたく煩ふとも  
聞かず、日頃惱ましとのみありしかど、昨日の返事は然りけもなく、常よりも  
をかしけなりしものをと、思しやる方なければ、句時方行きて氣色見、たしかな

(一)様子を知り居る右近侍従

(二)浮舟の

(三)安々と夢に浮舟を見お事すらす叶はず

(四)煎に引取らるる事は(五)それ迄の間我が手許へ置くべし

(六)雨天らしき故見合せん

(七)浮舟の書きおきし返事

(八)右近の心、此御覺悟故心細い御話もなされたのぢや

(九)浮舟と我と

(一〇)右近の心  
(一一)浮舟の

思ひ得る方なくて、唯騒ぎあへるを、かの心知れるどちなむ、いみじく物を思ひ給へりし様を思ひ出づるに、身を投げ給へるかとは思ひ寄りける。泣くくこの文を開けたれば、

母いと覺束なさに、まどろまれ侍らぬけにや、今宵は夢にだに打解けても見えず、物におそはれつゝ、心地も例ならずうたて侍るを、猶いとおほつかなく、

物へわたらせ給はむ事は近かなれど、その程こよに迎へ奉りてむ。今日は雨降り侍りぬべければ。

などあり。昨夜の御返をもあけて見て、右近いみじく泣く。さればよ、心細き事は聞え給ひけり、我に、などか聊か宣ふ事の無かりけむ、幼かりし程より、つゆ

心おかれ奉る事なく、塵ばかり隔なくて習ひたるに、今は限の道にしも、我を後らかし、氣色をだに見せ給はざりけるがづらき事、と思ふに、足摺といふ事をして泣く様、若き子どもの様なり。

いみじく思したる御氣色は、見奉り渡れど、

蜻蛉

梗

① 浮舟身を投げし後の宇治郎の周章、匂宮時方を遣りて事情を探らしむ。② 母の愁傷、屍骸なき葬送。③ 薰、匂宮各自の愁傷。④ 薰、匂宮を訪ひて浮舟の事を語る。⑤ 匂宮、浮舟の侍女右近を招く。侍從右近に代りて二條院を訪ふ。⑥ 薰、宇治に行く。右近、浮舟の投身の事情及匂宮との關係を語る。⑦ 薰文を賜りて浮舟の母を慰む。法事。⑧ 薰、小宰相を訪ふ。⑨ 明石中宮の法華八講。薰、女一宮を隙見す。⑩ 薰、女一宮を慕ひて、女二宮をして一宮に親しましめんとす。薰、明石中宮に參る。浮舟の噂。女一宮と女二宮との交際。⑪ 匂宮侍從を迎取りて召使ふ。⑫ 宮の君、中宮に引取らる。匂宮の懸想。⑬ 薰、中宮に參りて侍女等に戯る。和琴をひく。宮の君を訪ふ。

① 浮舟身を投げし後の宇治郎の周章、匂宮時方を遣りて事情を探らしむ  
 (一) 浮舟の居ぬを知りて、浮舟既に宇治川に身を投げしあと也  
 (二) 作者の斷り也  
 (三) 母より  
 (四) 私を  
 (五) 何と御返事をしたものか

彼處には人々、

朝の様なれば、

覺束なしとて又人おこせたり。

と使の言ふに、

おはせぬを覓め騒げどかひなし。

委しくも言ひつゞけず。

使、まだ鳥の鳴くになむ、

如何に聞えむと、

物語の姫君の人に盗まれたらむ

京より、ありし使の歸らずなりにしかば、

出し立てさせ給ひつる」

あわて惑ふ事限なし。更に

- (一)私が泣く音を添へて
- (二)母に
- (三)祈禱を行ひたるしるしに寺よりよこす札
- (四)使が
- (五)巻敷を結びつけたる杖なるべし
- (六)胸さわぎ
- (七)母北方が
- (八)浮舟が
- (九)濁酒を差上げよ
- (一〇)あの様に今は何かと
- 世話をやけど、浮舟の心
- (一一)決死の覺悟を
- (一二)口へ出さぬ前に涙の方が先へ知りて
- (一三)ふらふらと體を離れて迷ひ出すものなれば
- (一四)匂かどちらかにきめて
- (一五)浮舟の様

浮舟かほの音おとの絶たゆるひときに音ねをそへてわが世よ盡つきぬと君きみに傳つたへよ  
(一)  
 卷くわんじゆも敷も持もて來きたるに書かき附つけて、「今宵こよひはえ歸かへるまじ」と言いへば、物ものの枝えだに結ゆひつけ  
(二)  
 て置おきつ。乳母めのと、「あやしこころく心こころばしりのするかな。夢ゆめも騷さわがし(四)と宣のたまはせたりつ。宿直さゆの  
(三)  
 人びとよく侍さむらへ」と言いはするを、苦くるしと聞きき臥ふし給たまへり。乳母めのと「物聞ものきこしめ食くらさぬいと怪あやし。御おん  
(六)  
 湯ゆづ漬づ」など萬よろに言いふを、さかさしがるめれど、いと醜みにくく老おいなりて、我われなくば何いづ  
(七)  
 處くにかあらむ、と思おもひやり給たまふも、いと哀あはれなり。世よの中なかに得えあり果はつまじき様さまを、  
(八)  
 ほのめかして言いはむなど思おもすには、まづ驚おどろかされて先さきだつ涙なみだを、つよみ給たまひて、  
(九)  
 物ものも言いはれず。右近うこん程ほど近ちかく臥ふすとて、右近うこんかくのみ物ものを思おもはせば、物思ものおもふ人ひとの魂たましひ  
(一〇)  
 は、ああくがるなる物ものなれば、夢ゆめも騷さわがし(四)きならむかし。何方いづかたと思おもひ定さだまりて、如何いか  
(一一)  
 にも如何いかにもおはしまさなむ」と打うち歎なげく。萎なえたる衣きぬを顔かほにおしあてて、臥ふし給たまへ  
(一二)  
 りとなむ。  
(一三)  
(一四)  
(一五)

(一)世間で凶兆とせる事が爰に見えし故

(二)此文を

(三)蘭方のゆかりの人即ち女二宮などの妬も恐ろしく

(四)浮舟の病氣勝なる折から

(五)色々と心配する

(六)其方へ行きたけれど

(七)産したる娘をいふ

(八)御を離れてはならぬとひどく夫に叱られる故行かれぬ

(九)布施にすべき物

(一〇)僧への頼み状

(一一)浮舟の心

(一二)母より贈り來れる布施や文をやる也

(一三)此世の煩惱はさちりと捨てて一筋に後世に再會せんことを樂しみにして戴きたし

侍るを、やがてその夢の後、寢られざりつるけにや、たゞ今晝寢して侍る夢

に、人の忌むといふことなむ見え給ひつれば、驚きながら奉る。能くつよ

しませ給へ。人離れたる御住居にて、時々立ち寄せ給ふ人の御ゆかりもい

と恐ろしく、惱ましげに物せさせ給ふ折しも、夢の斯かるを萬になむ思ひ給

ふる。參り來まほしきを、少將の方の、猶いと心もどなけに、物怪だちて惱

み侍れば、片時も立ち去る事と、いみじく言はれ侍りてなむ。その近き寺に

も御誦經せさせ給へ。

とて、その料の物、文など書き添へて持て來たり。限と思ふ命の程を知らで、斯

く言ひつどけ給へるも、いと悲しと思ふ。寺へ人やりたる程、返事かく。言はま

ほしき事多かれど、つよましくて唯、

浮舟のちにまたあひ見むことを思はなむこの世のゆめに心まどはで

誦經の鐘の風につきて聞え來るを、つくぐと聞き臥し給へり。



(二)侍女等が皆引移りの用意する也

(二)心持がいつもの様でなし

(三)歩々屠所に近づく羊の歩みよりも

(四)匂が歸りて後文をよこしたる也

(五)屍體を留めずに死んだならば匂も恨のもつて行き處がなかるべければ結局心安かるべし  
(六)蕪にも自殺を決心せる様子をほのめかしたけれど、浮舟の心  
(七)方々へ觸れ散らして  
(八)蕪と匂とは

(九)浮舟が蘊ならぬ様子で夢に見えたれば

ひ出で聞ゆるにも、すべて今一度ゆかしき人多かり。人は皆おのく物染め急ぎ、何やかやと言へど、耳にも入らず。夜となれば、人に見つけられず、出でて行くべき方を思ひ設けつと、寝られぬまよに、心地も悪しく皆違ひにたり。明けたてば、川の方を見やりつと、羊のあゆみよりも程なき心地す。  
宮はいみじき事どもを宣へり。今更に人や見むと思へば、この御返事をだに、思ふ儘にも書かず。

浮舟からをだにうき世の中にとどめずばいづこをはかと君もうらみむ

とのみ書きて出しつ。かの殿にも、今はの氣色見せ奉らまほしけれど、處々に書きおきて、離れぬ御中なれば、遂に聞き合せ給はむ事いと憂かるべし、すべて、如何になりにつむと、誰にも覺束なくて止みなむ、と思ひかへす。京より母の御文持て來たり。

母寝ぬる夜の夢に、いと騒がしくて見え給ひつれば、誦經所々にせさせなどし

- (一) 浮舟自叙の念愈切なり、句宮の文、舟の文
- (二) 侍従の出行きし跡にて浮舟に句に御断り申上げたる由を浮舟に語りたる故
- (三) 侍従が
- (四) 浮舟が
- (五) 侍従が見て何と思ふならんと、浮舟の心
- (六) 翌朝になりたれども終夜泣き明したる事故さぞ目つきが見苦しからんと思ふ故
- (七) 假初に腰に纏ふ也、起きたる也
- (八) 自殺の覺悟をしたる也
- (九) 句のかきし畫
- (一〇) 一層の悲しさを添へたり
- (一一) 引取つて靜に契らんと、以下浮舟の心
- (一二) 齋
- (一三) 死後色々いな許判をする人のあるべきが豫め考へても恥かしけれど
- (一四) 齋に聞かれるよりはまだ死んだがまし
- (一五) 死後に
- (一六) 中君

浮

舟

右近は言ひ切りつる由言ひ居たるに、君はいよく思ひ亂るよこと多くて臥し給へるに、(一) 入り來てありつる様語るに、(二) 答もせねど、枕のやうく浮きぬるを、(三) つは如何に見るらむとつとまし。つとめても、怪しからむまみを思へば、無期に(四) 臥したり。物はかなげに帶うち懸けなどして經讀む。親にさきだちなむ罪失ひ給へとのみ思ふ。ありし繪を取り出でて見て、書き給ひし手つき、顔のほひなどの、向ひ聞えたらむ様に覺ゆれば、昨夜一言をだに聞えずなりにしは、猶今ひと増りていみじと思ふ。(一) かの心のどかなる様にて見むと、行末遠かるべき事を宣ひわたる人も如何思さむ、といとはしう、(二) 憂き様に言ひなす人もあらむこそ、思ひやり恥かしけれど、心淺く、けしからず人笑へならむを聞かれ奉らむよりは、(三) など、思ひ續けて、(四)

浮舟歎きわび身をば捨つともなきかけにうき名流さむことをこそ思へ

親もいと戀しく、例はことに思ひ出でぬ兄弟の醜やかなるも戀しく、(一) 宮の上を思

(一)侍従

(二)匂の

(三)浮舟に話が出来ぬか

(四)今になりて斯く警戒を嚴重にするぞ

(五)誰か薫に告口したるものがあるならん

(六)浮舟を引取らんと思ふ日を前々から定めて御用意あれ

(七)匂自身も

(八)宇治邸の夜番の者どもの様也

(九)火の用心

(一〇)悲しさが

(一一)悲しさの餘り何處へ身を捨てたものかと思ひめぐらさぬ處もなく考へつく歸り行く

(一二)早く歸れ

(一三)侍従が

き給ふ事限なし。心弱き人は、ましていとみじく悲しと見奉る。いみじき仇を

鬼につくりたりとも、疎に見捨つまじき人の御有様なり。ためらひ給ひて、匂唯

一言も聞えさすまじきか。如何なれば、今更に斯かるぞ。猶人々の言ひなした

る様あるべし」と宣ふ。有様委しく聞えて、侍従やがてさ思し召さむ日を、かね

て然すべき様にたばかりせ給へ。斯く辱き事どもを見奉り侍れば、身を捨てて

も思ふ給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。我も人目をいみじく思せば、一方に怨み給

はむ様もなし。夜はいたく更け行くに、この物咎する犬の聲絶えず、人々追ひ

退けなどするに、弓ひき鳴らし、怪しき男どもの聲して、「火危し」など言ふも、い

と心あわたしければ、歸り給ふほど、言へば更なり。

匂いづくにか身をば捨てむと白雲のかよらぬ山もなくくぞ行く

さらば早」とて、この人を返し給ふ。御氣色なまめかしく哀に、夜深き露にしめ

りたる御香の芳しさなど、例へむ方なし。泣くくぞ歸り來たる。

浮  
舟





(一)句の御出の途中の難儀一通りならず  
(二)其甲斐なき事を申上げるのが不調法に思はれて困る

(三)滅多な奴が出て来たちどろしたものと

(四)侍従の襟、垂れたる髪を脇の下より前に出して手に持ちたる也

(五)時方が侍従を

(六)侍従の衣の裾を時方が

(七)侍従に

(八)時方

(九)句に

(一〇)立のまゝでは話も出来ねば

(一一)馬の側に垂れて泥を除くもの

(一二)句の心

(一三)女狂に身を持崩して

も語る、大夫、時方「おはします道のおほろけならず、強ちなる御氣色に、あへな

く聞えさせむ事なむたいくしき。さらばいざ給へ、共にくはしく聞えさせ給へ」

と誘ふ。侍従「いとわりなからむ」と言ひしろふ程に、夜もいたく更け行く。

宮は御馬にて少し遠く立ち給へるに、鄙びたる聲したる犬どもの出で來てのよし

るも、いと怖ろしく、人少にいと怪しき御ありきなれば、漫ならむもの走り出

で來たらむも、如何様にかと、侍ふかぎり心をぞ惑はしける。時方猶疾くく参り

なむ」と言ひ騒がして、この侍従を率て参る。髮脇より搔越して、様體いとをか

しき人なり。馬に乗せむとすれど、更にきかねば、衣の裾をとりて、立ち添ひて

行く。わが沓を穿かせて、自らは供なる人の怪しきものを穿きたり。参りて斯く

なむと聞ゆれば、語らひ給ふべき様だになければ、山賤の垣根のおどろ葎の陰に、

障泥といふ物を敷きておろし奉る。我が御心地にも、怪しきありさまかな、か

かる道に損はれて、はかなくしくは得あるまじき身なめり、と思し續くるに、泣

(一)いつもと違ひて警固  
嚴重なり

(二)油断なげなり

(三)桐案内の時方が

(四)浮舟の母より

(五)とてもだめ也

(六)桐氣の毒

(七)時方は氣の利きたる  
男て

(八)鬮の

(九)此頃は特に用心厳し  
くするのて

(一〇)浮舟も

(一一)斯様に匂に無駄足  
をさせる事の御氣の毒さ  
を御心配なさるゝならん  
と

(一二)匂の御出の様子を  
人が悟りたらば

(一三)匂が御出あらん御  
支度ある夜に

(一四)此方から申上げん

はしましぬ。蘆垣のかたを見るに、例ならず、番衆「あれは誰そ」といふ聲々、いざ

とけなり。立退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。前々のけはひ

にも似ず。煩はしくて、男「京より頼の御文あるなり」と言ふ。右近が従者の名を

呼びて逢ひたり。いと煩はしくいと覺ゆ。右近「更に今宵は不用なり。いみじく

辱き事」と言はせたり。宮、など斯くもて離るらむと思すに、わりなくて、匂「ま

づ時方入りて、侍従に逢ひて、さるべき様にたばかれ」とて遣す。かどくしき

人にて、とかく言ひ構へて、尋ねて逢ひたり。侍従「如何なるにかあらむ、かの殿

の宣はする事ありとて、宿直にある者どもの、さかしがりたちたる頃にて、いと

わりなきなり。御前にも、物をのみいみじく思したるめるは、かよる御事の辱き

を思し亂るゝにこそはと、心苦しくなむ見奉る。更に今宵は、人氣色見持りなば、

なかくにいと悪しかりなむ。やがて、さも御心づかひせさせ給ひつべからむ夜、

こよにも人知れず思ひ構へてなむ、聞えさすべかんめる」乳母のいざとき事など

(一) 風託せず、に發るべく御返事をなされ

(二) 空を飛んで、も句が浮舟を連れなざる事が出来ぬ、でもあるまい

(三) 汝等が我を句にのみ心惹かる、様に言ふのがつらい

(四) 句に願くは尤な事と自分が思つて居る、てはなし

(五) 句と約束でもしてある様に句が言はるゝ故

(六) 句宮

(七) 浮舟が

(八) 願が

(九) 身を任せて安心な驚の方に願く事と浮舟が決心したものらしい

(一〇) 「我戀は空しき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし」

(一一) 宇治へ

見奉りつべし。やうく怪しなど思ふ人も侍るべかんめり。かうかよづらひ思ほ

さで、さるべき様に聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなき事もたばかり出

し侍らば、かばかり小き御身ひとつは、空よりも奉らせ給ひなむ」と言ふ。

とばかりためらひて、浮舟斯くのみ言ふこそいと心憂けれ。然もありぬべき事と、

思ひかけばこそあらめ、もるまじき事と皆思ひとるに、わりなく、かくのみ頼み

たるやうに宣へば、如何なる事をし出で給はむとするにかと思ふにつけて、身の

いと心憂きなり」とて、返事も聞え給はずなりぬ。

宮、かくのみ猶うけひく氣色もなく、返事さへ絶えくくなるは、かの人の、

あるべき様に言ひ認めて、少し心安かるべき方に思ひ定りぬるなめり、理、と

思すものから、いと口惜しく妬く、さりととも我をば哀と思ひたりしものを、逢ひ

見ぬとだえに、人々の言ひ知らする方によるならむかし、など眺め給ふに、行く

かた知らず、「むなしき空にみちぬる」心地し給へば、例のいみじく思し立ちてお



- (一)命の
- (二)古手紙があとに残ち
- ば
- (三)句の寫にも
- (四)我が句の手紙を仕辨ひおいたのかしちと黨に思はれるのが恥かし
- (五)自殺を決行する氣にもなれぬ
- (六)浮舟の心
- 句宮又宇治に赴く、警固の嚴しきに妨げられて浮舟に逢はず
- (七)三月
- (八)句宮に家を貸さんと約せし受領
- (九)任國へ
- (一〇)浮舟方へ言ひ遣す也
- (一一)けぞられぬ様に
- (一二)我方より人に漏れる氣遣はなし
- (一三)以下浮舟の心
- (一四)警固嚴しければ也
- (一五)一寸の間でも句を此邸へ入れる事も出来ま
- む

浮舟「何か、むづかしく、長かるまじき身にこそあめれ。おち留まりて、人の御

爲もいとほしからむ。さかしらにこれを取り置きけむよなど、漏り聞き給はむこ

そ恥かしけれ」など宣ふ。心細き事を思ひもて行くには、またえ思ひ立つまじき

わざなりけり。親をおきて亡くなる人は、いと罪深かなるものをなど、流石に

ほの聞きたる事をも思ふ。

二十日餘にもなりぬ。かの家あるじ、二十八日に下るべし。宮は、句その夜必ず

迎へむ。下人などに、能く氣色見ゆまじき心づかひし給へ。此方様よりは、夢に

も聞えあるまじ。疑ひ給ふな」など宣ふ。さて、あるまじき様にて、おはしたら

むに、今一度物をもえ聞えず、おほつかなくて返し奉らむ事よ、又時の間にて

も、いかでか此處には寄せ奉らむとする、かひなく恨みて歸り給はむ様などを

思ひ遣るに、例のおもかけ離れず、堪へず悲しくて、この御文を顔に押當てて、

暫しはつとめども、いとみじく泣き給ふ。右近、「あが君、かよる御氣色遂に人

(一) 忘るべし

(二) なまじ生きて居て身を持ちそこなひ

(三) 死んで仕舞ひしよりも親の嘆はひとしほなるべし

(四) 浮舟の性質をいふ

(五) 親が早しき田舎者に居る點はなくて育てたる浮舟故

(六) 恐ろしき事を

(七) 跡にのこりて面倒な古手紙など

(八) 始末せず

(九) 遠からず船に引取らるゝ故

(一〇) 句との中

(一一) 句の手紙の用紙の美しきをいふ

へば必ず憂き事見えぬべき身の、亡くならむは、何か惜しかるべき、親も暫しこ

そ歎き惑ひ給はめ、數多の子ども扱ひに、自ら忘草摘みてむ、在りながら持て

損ひ、人笑へなる様にてさすらへむは、まさる物思なるべし、など思ひなる。(四) 兒

めきおほどかに、たをく見ゆれど、氣高う世の有様をも知る方少くて、おふ

し立てたる人にしあれば、少しおすかるべき事を、思ひ寄るなりけむかし。むづ

かしき反古など破りて、おどろくしく一度にも認めず、燈臺の火に焼き、水に

投げ入れさせなど、やうく失ふ。心知らぬ御達は、物へ渡り給ふべければ、徒

然なる月日を経て、はかなくし集め給へる手習などを、破り給ふなめり、と思

ふ。侍従などぞ、見つくる時は、侍従など斯くはせさせ給ふ。哀なる御中に、御

心留めて書きかはし給へる文は、人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底に置かせ給

ひて御覽するなむ、程々につけては、いと哀に侍る。さばかりめでたき御紙づか

ひ、辱き御言の葉を盡させ給へるを、斯くのみ破らせ給ふ、情なき事」と言ふ。

- (一) 其様な
- (二) 薫の命令の詞
- (三) 不都合あらば
- (四) 内舍人等を
- (五) 私の申上げし通りなるを御聞きなされ、浮舟にいふ詞
- (六) 薫が様子をけどられたと見え
- (七) 薫の御注意は有難し
- (八) 各代人といふ名目で
- (九) 夜まはり
- (一〇) 浮舟
- (一一) 今の間に事が破裂してひどい目に逢はねばならぬと
- (一二) 匂宮
- (一三) 「逢ふ事をいつか其日とまつ木の苔の亂れて戀ふるこの頃」
- (一四) 浮舟の心
- (一五) どちちかにつきて
- (一六) 生田川に身をなげし菟原乙女などの事をいふ、菟原乙女の事は萬葉九、大和物語などにあり
- (一七) どちちがどうともきめられぬに

を、さの如き非常の事の侍はむをば、いかでか承らぬやうは侍らむ、となむ申させ侍りつる。用意してさぶらへ、便なき事もあらば、重く勘當せしめ給ふべき由なむ、仰言侍りつれば、いかなる仰言にかと、恐れ申し侍る」といふを聞くに、  
 梟の鳴かむよりも、いと物怖ろし。答へもやらで、右近「さりや、聞えさせしに違はぬ事どもを聞召せ。物の氣色御覽じなるなめり。御消息も侍らぬよ」など歎く。  
 乳母はほの打聞きて、乳母「いと嬉しく仰せられたり。盗人多かシなるわたりに、宿直人も初の様にもあらず、皆身の代ぞと言ひつよ、あやしき下衆をのみ参らすれば、夜行をだにせぬに」と喜ぶ。君は、實にたゞ今いと悪しくなりぬべき身なめりと思すに、宮よりは、「如何にく」と、「昔の亂るよ」わりなさを宣ふ。いと煩はしくなむ。とてもかくても、一方々々につけて、いとうたてある事は出で來なむ、わが身ひとつの亡くなりなむのみこそ目安からめ、昔は、懸想する人の有様の、いづれとなきに思ひ煩ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ、ながら

(一)此御召使どもを御覽  
なされと浮舟にいふ也

(二)爾よりは

(三)侍従が囀をして浮舟  
をもどしたる

(四)黨

(五)黨が私に

(六)以下黨の詞をまねて  
いふ也、浮舟の宇治に居  
る間此御文の通りに句が  
非常に身をやつして宇治  
へ来たれるのに

(七)浮舟の侍女の處へ誰  
か通ひ來るとの噂あり、  
句の事をかく黨のいひな  
せる也

(八)事請をたゞしたる筈  
(九)私存せざる事故

乳母「かゝる人御覽せよ。怪しくてのみ臥させ給へるは、物怪などの、妨げ聞えさせむとするにこそ」と歎く。

殿よりは、かのありし返事をだに宣はで、日頃經ぬ。この威しと内舎人といふ者

ぞ來たる。實にいと荒々しく、ふつよかなる様したる翁の、聲枯れ、さすがに氣

色ある、「女房に物とり申さむ」と言はせられたれば、右近しも逢ひたり。内舎人殿に召

し侍りしかば、今朝參り侍りて、たゞ今なむ罷り歸り侍りつる。雑事ども仰せら

れつる序に、斯くておはします程に、夜中曉のことも、某等かくて侍ふと思して、

宿直人わざとさし奉らせ給ふ事もなきを、この頃聞召せば、女房の御許に、知

らぬ所の人々通ふやうになむ聞召すことある、たいくしき事なり、宿直の侍ふ

者どもは、その案内問ひ聞きたらむ、知らではいかゞ侍ふべき、と問はせ給ひつ

るに、承らぬ事なれば、某は身の病重く侍りて、宿直仕う奉ることは、月頃怠

りて侍れば、案内もえ知り侍らず、さるべき男どもは、懈怠なく催し侍はせ侍る

(一)かの武士等が

(二)浮舟の心

(三)句に

(四)自分の心ではどちらがよいとも思はず

(五)句が非常に熱心なるを見てはなぜあの様にするのかと思へど

(六)薫を

(七)衝突が起りたる時どろしたものかと

(八)此様な事も申上ぐるなれ

(九)心配なされてよい筈の事につきても今迄は心配なさらぬ御顔附で

(一〇)句との事ありし後非常に氣をもちまると故

(一一)薫へ引取らるる用意を

人も率ておはしまさず、やつれてのみおはしますを、然る者の見つけ奉りたら

むは、いとみじくなむ」と、言ひ續くるを、君、猶我を宮に心よせ奉りたると

思ひて、この人々の言ふ、いと恥かしく、心地にはいづれとも思はず、唯夢の様

にあきれて、いみじく入られ給ふをば、など斯くしもとばかり思へど、頼み聞え

て年頃になりぬる人を、今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじと物も

思ひ亂るれ、實によからぬ事も出で來たらむ時と、つくぐと思ひ居たり。浮舟「ま

ろは、いかで死なばや。世づかす心憂かりける身かな。かく憂き事ある例は、下

衆などの中にだにも多くやはある」とて、うつぶし臥し給へれば、右近「かくな思召

しそ。安らかに思しなせとてこそ聞えさせ侍れ。思しぬべき事をも、さらぬ顔に

のみ、長閑に見えさせ給へるを、この御事の後、いみじく心いられをせさせ給へば、

いと怪しくなむ見奉る」と、心知りたる限は、皆かく思ひ亂れ騒ぐに、乳母おの

が心をやりて、物染めいとなみ居たり。今まるり童などの目安きを呼び取りつと、

(一) 其方へ一筋に靡く事に定め給へ

(二) 句の

(三) 引取を急ぐ輩の方に心は傾かず

(四) 句と隠れて逢ひても

(五) 侍従は

(六) どうなるにしても

(七) 輩

(八) 一族

(九) 輩

(一〇) 禁中宿衛の武官

(一一) 一家親類になりて居る

(一二) 輩が

(一三) 輩と句との心には

(一四) 自分の當番の時に少しの過失も無き様にと

思ふ故に間違も起るべし

(一五) 句につれられて川を越したる事

(一六) 無氣味に

らめ。唯御心の中に、少し思し靡かむ方を、さるべきに思しならせ給へ。いでや、

いと辱く、いみじき御氣色なりしかば、人のかく思し急ぐめりし方に心もよらず。

暫時は隠るへても、御思のまさらせ給はむによらせ給ひね、とぞ思ひえ侍る」

と、宮をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちに言ふ。右近「いさや右近は、と

てもかくても、事なく過させ給へと、初瀬石山などに願をなむ立て侍る。この大

將殿の御庄の人々といふ者は、いみじき武道の者どもにて、一類この里に満ちて

侍るなり。大方この山城大和に、殿の領じ給ふ所々の人なむ、皆この内舍人とい

ふ者のゆかりかけつと侍るなる。それが婿の右近の大夫といふものを本として、萬

の事をおきて仰せられたるななり。善き人の御中どちは、情なき事し出でよと

思さずとも、物の心得ぬ田舎人どもの宿直人にて、代りくさぶらへば、おのが

番に當りて聊なる事もあらせじなど、過もし侍りなむ。ありし夜の御ありきは、

いとこそむくつけく思う給へられしか。宮はわりなくつよませ給ふとて、御供の

- (一) 浮舟の乳母  
 (二) 今斯かる事を話出すは機會が悪けれど  
 (三) 一命にかかはる程の事ではなけれども  
 (四) 身分高き人  
 (五) 驚か句かどちちか一人に  
 (六) 句の浮舟を思ふ情が増して、浮舟の心句の方に傾けりと思ひていふ也  
 (七) 句に  
 (八) 浮舟の母が浮舟を  
 (九) 乳母が蘆方へ浮舟の引移るべき用意にかまけて  
 (一〇) 其前に我方へ引取るべしと言ふ句の心が  
 (一一) 浮舟に

國にもいみじきあたらし兵士一人失ひつ。又この過失したるも、善き郎等なれど、かよる過失したるものを、いかでかは遣はむとて、國の内をも追ひ拂はれぬ。すべて女のたいぐしきぞとて、館の内にも置給へらざりしかば、東の人になりて、まよも今に戀ひ泣き侍るは、罪深くこそ見給ふれ。ゆよしき序のやうに侍れど、上も下も、かよる筋の事は、思し亂るよはいと悪しきわざなり。御命まではあらずとも、人の御程々につけて侍る事なり。死ぬるにまさる恥なることも、善き人の御身には、なかく侍るなり。ひとかたくに思し定めてよ。宮も御志増りて、まめやかにだに聞えさせ給はば、其方さまにも靡かせ給ひて、物ないたく歎かせ給ひそ。瘦せ衰へさせ給ふもいと益なし。さばかり上の思ひいたづき聞えさせ給ふものを、まよがこの御いそぎに心を入れて、惑ひ居て侍るにつけても、それより此方にと聞えさせ給ふ御事こそ、いとど苦しくいとほしけれ」と言ふに、  
 (一〇) いまひせり  
 今一人、侍従うたて、恐ろしきまでな聞えさせ給ひそ。何事も御宿世にてこそあ  
 (一一)

- (一) 文を返す事は
- (二) 文の中に間違つた事が書いてありし故
- (三) 此文を取次ぎし時に右近が此文をかへすは怪しと思ひし故
- (四) 句の一件を知られしならん
- (五) 浮舟が
- (六) 右近がかの文を見しならんとは氣がつかぬ故
- (七) 他の方面から
- (八) 齋の様子を知れる人が右近に語りしならん
- (九) 句との事は我から進んでした事ではなけれど、浮舟の心
- (一〇) 二人の男に關係せしに
- (一一) 此二句挿入文
- (一二) 此男も彼男も
- (一三) 女が
- (一四) 後の男の方に
- (一五) 前の男が
- (一六) 前の男も女と離別したり

しからず怪しくなりぬべきなめり、といとど思ふ所に、右近來て、右近「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆよく忌み侍るなるものを」と言へば、浮舟「僻事のあるやうに見えつれば、所違へか」と宣ふ、あやしと見ければ、道にてあけて見けるなりけり。よからずの右近が様やな。見つとは言はで、右近「あないとほし。苦しき御事どもにこそ侍れ。殿は物の氣色御覽じたるべし」と言ふに、面さとおかみて、物も宣はず。文見つらむとは思はねば、こと様に、かの御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、誰が然言ふぞ、などもえ問ひ給はず。この人々の見思ふらむ事も、いみじく恥かし。我が心もてありそめし事ならねども、心憂き宿世かな、と思ひ入りて寢たるに、侍従と二人して、右近「右近が姉の、常陸にて二人見侍りしを、程々につけては、たど斯くぞかし、此も彼も劣らぬ志にて、思ひ惑ひて侍りし程に、女は、今の方に今少し心よせ勝りてぞ侍りける。それに妬みて、遂に今のをば殺してしぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。



(一)人に知られては  
(二)道定が常に薫の動靜を此隨身に問ひ浮舟の事を問ひし事をも成程と合點したれど

(三)浮舟

(四)「君をおきてあだし心を我がもたば末の松山波も越えなん」の歌によれり

(五)我を

(六)浮舟が

(七)此歌の意味が分つて居る様な顔をして返事せんも憚あり、さりとしてつかぬ返事をするも變なれば

(八)他所への文が間違つてりたる様に思はれる故其儘に返上する

(九)甘くやつたわい、薫の心

(一〇)今までつひぞ見ざりし分別のかしこさよと

(一一)浮舟を

侍女等の心配、薫武士を遣はして宇治の山荘を野衝せしむ、浮舟自縊を期して秘密の文を焼く  
(一二)正面からは言はねど句の事をはめかしたる薫の文を見て  
(一三)浮舟の方  
(一四)浮舟の心

かれ。をこなり」と宣ふ。畏まりて、少輔が常にこの殿の御事案内し、彼處の事

問ひしも思ひ合すれど、物慣れてえ申し出でず。君も、下司に委しくは知らせじ

と思せば、問はせ給はず。彼處には、御使の例より繁きにつけても、物思ふこと

様々なり。たゞ斯くぞ宣へる。

薫波こゆるころともしらす末の松まつらむとのみ思ひけるかな

人に笑はせ給ふな。

とあるを、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ。御返事を心得顔に聞えむもいと

つよましく、僻事にてあらむも怪しければ、御文はもとの様にして、

浮舟所違の様に見え侍ればなむ。怪しくなやましくて何事も。

と、書き添へて奉れつ。見給ひて、流石にいたくもしたるかな、かけて見及ば

ぬ心ばへよと、ほよ笑まれ給ふも、憎しとはえ思し果てぬなめり。

まほならねどほのめかし給へる氣色を、彼處にはいとと思ひ添ふ。遂に我身は、け

- (一) 事情の一端が分つて見れば
- (二) 蕪蕪なもののが得がたきは、蕪の心
- (三) 浮舟の人物をいふ
- (四) 句の持物には丁度似合なり
- (五) 句は浮舟を譲りてもよく自分は手を引籠めたき心地もすれど
- (六) 浮舟が我が本妻にする積の女ならば句に通じたるも、元が慰みものゝ事故矢張今迄通りにして、もかん、蕪の心
- (七) もう是限と見限つて浮舟に逢はずに居たらば
- (八) 自分が浮舟に嫌氣がまして、蕪の心
- (九) 浮舟を
- (一〇) 句は考ふまじ
- (一一) 句が初熟して後にあきたる女を二三人も一品官方へ侍女に追ひやつてある
- (一二) 浮舟も其穢な目にあひて侍女になつて居るのを見聞したらば氣の毒な事ならん
- (一三) 浮舟記、仲信の婿
- (一四) 大内記、
- (一五) 蕪の家司
- (一六) 浮舟は
- (一七) 道定も浮舟を懸想するならん、わざと事情を知らぬ擬して云ふ也
- (一八) 宇治へ隠れて行け

浮

舟

思ひたる様なりしも、片端心えそめ給ひては、萬思し合するにいと憂し。有り難きものは、人の心にもあるかな、らうたけにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし。この宮の御具にては、いとよき間なりと、思ひも譲りつべく、退く心地し給へど、やむごとなく思ひ初めはじめし人ならばこそあらめ、猶さるものにて置きたらむ、今はとて見さらむはた、いと戀しかるべしと、人わろくいろく心に思す。我すさまじく思ひなりて捨置きたらば、必ずかの宮呼び取り給ひてむ、人の爲後のいとほしさを、殊にたどり給ふまじ。さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に二三人参らせ給ひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむいとほしく、など、猶捨てがたく、氣色見まほしくて、御文つかはす。例の隨身人間に召寄せたり。萬道定の朝臣は、猶仲信が家にや通ふ。隨身然なむ侍る」と申す。萬宇治へは、常にや此のありけむ男は遣るらむ。幽にて居たる人なれば、道定も思ひ懸くらむかし」と、うちうめき給ひて、萬人に見えでをま

(二七)

(二八)

(一) 浮舟の事を  
 (二) 字治は  
 (三) 外から男の来る様の事はあるまじと

(四) 句が  
 (五) 句を案内して字治へ連れ行きし我黨の女に手を出すとはひどいと

(六) 薫が中君に懸想しつづ、薫の心  
 (七) 我が中君に對する懸は昔からの事にて今はじまつた極りの悪い事でもなし

(八) 我心に快からざる事ありては中君の爲にも我爲にもよからずと思へばこそ  
 (九) 句が  
 (一〇) 浮舟へ文を  
 (一一) もろ浮舟へ通ひ初めたのかも知れぬ  
 (一二) 句の行先が不明で  
 (一三) 浮舟などの事に  
 (一四) 中君の處へ行けぬ時の句の嘆

(一五) 浮舟

る人ありと聞き給ひけむ、いかで言ひ寄り給ひけむ、田舎びたるあたりにて、  
 やうの筋の紛は、えしもあらじと思ひけるこそ幼けれ、さても、知らぬあたりに  
 こそ、然るすきごとをも宣はめ、昔より隔なくて、怪しきまでしるべし、率てあ  
 りき奉りし身にしも、後めたく思しよるべしや、と思ふに、いと心づきなし。  
 對の御方の御事を、いみじく思ひつゝ、年頃過すは、我が心の重さはこよなかり  
 けり、さるは、それは今始めて、様悪しかるべき程にもあらず、もとよりの便に  
 もよれるを、唯心のうちの隈あらむが、我が爲も苦しかるべきによりこそ、思ひ  
 憚るも嗚呼なるわざなりけれ、この頃かく惱ましくし給ひて、例よりも人繁きま  
 ぎれに、いかで遙々と書きやり給ふらむ、おはしや初めけむ、いと遙なる懸想の  
 道なりや、怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし、さやうの事  
 に思し亂れて、そこはかたなく悩み給ふなるべし、昔を思し出づるにも、えおは  
 せざりし程の歎いといとほしけなりきかすと、つくづくと思ふに、女のいたく物  
 (一三) (一四) (一五) (一六) (一七) (一八) (一九) (二〇) (二一) (二二) (二三) (二四) (二五)

(一)夕霧邸

(二)薫

(三)松明の火

(四)質状をいはず

(五)句旨

(六)自分の居たる所とは別なる所にて其使にわたしたり  
(七)先刻句の見居し文に  
(八)童をつけて見届けさせたる隨身の計らひを氣の利きたる仕方と思へば  
(九)薫の心  
(一〇)やらずのがさぬ

浮

舟

奉り給ひて、數多の御子どもの上達部君達ひき續けて、彼方に渡り給ひぬ。この殿

は後れて出で給ふ。隨身氣色ばみつる怪し、と思しければ、御前など下りて火と

もす程に、隨身召し寄す。薫申しつる事は何事ぞ」と問ひ給ふ。隨身「今朝、かの宇

治に、出雲の權守時方の朝臣のもとに侍る男の、紫の薄様にて、櫻につけたる文

を、西の妻戸によりて、女房にとらせ侍りつる、見給へつけて、云々問ひ侍りつ

れば、こと違へつと、空言の様に申し侍りつるを、如何に申すぞとて、童して見

せ侍りつれば、兵部卿の宮に參り侍りて、式部少輔道定の朝臣になむ、その返事

はとらせ侍りける」と申す。君怪しと思して、薫「その返事はいか様にししてか出し

つるぞ」隨身「それは見給へず。異方より出し侍りにける。下人の申し侍りつるは、

赤き色紙の、いと清らなるとなむ申し侍りつる」と聞ゆ。思し合するに、違ふこ

となし。然まで見せつらむを、かどくしと思せど、人近ければ、委しくも宣は

ず。道すがら、猶いと恐ろしく隈なくおはする宮なりや、如何なりけむ序に、然

(一) 明石中宮

(二) 中宮の御様子

(三) 政務に隙なき役、兼  
官の式部少輔の忙しき役  
なるをいふ

(四) 浮舟の返事

(五) 匂宮

(六) 薫

(七) 匂が

(八) 薫の推測する也

(九) 匂が

(一〇) 夕霧

(一一) 薫

(一二) 夕霧の來れる由を  
せきにて匂に知らする也

(一三) 匂が文を

(一四) 匂がはづし居たる  
胸の紐をかけたる也、直  
衣袴などの紐の胸をは  
づし居るはくつろぎ居る  
時の事也

(一五) 跪きて會釋する也

(一六) 明石の樣態を話す  
也

(一七) 夕霧

聞かむもつとましと思ひて、畏りて居り。殿も然見知り給ひて出で給ひぬ。

宮例ならず惱ましけにおはしますとて、宮達も皆參り給へり。上達部など多く參

り集ひて、騒がしけれど、異なる事もおはしませず。かの内記は政官なれば、後

れてぞ參れる。この御文も奉るを、宮、臺盤所におはしまして、戸口に召寄せ

て取り給ふを、大將、御前の方より立ち出で給ふ側目に見通し給ひて、切にも思

すべかちめる文の氣色かなと、をかしさに立ち留り給へり。引きあけて見給ふ。紅

の薄様に、細やかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れて、頓にも向き給はぬに、

大臣も立ちて外様におはすれば、この君は障子より出で給ふとて、大臣出で給ふ

と、打咳きて、驚かい奉り給ふ。引隠し給へるにぞ、大臣さしのぞき給へる。驚

きて御紐さし給ふ。殿もつゝいる給ひて、夕霧、まかして侍りぬべし。例の御邪氣の

久しく起らせ給はざりつるを、恐ろしきわざなりや。山の座主只今請じに遣さむ」

と、忙がしけにて立ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。大臣は、宮をさきに立て

- (一) 自分が内々
- (二) 私用で来た其相手の人に艶書を渡すといふ事があるか
- (三) 仔細ありげな奴
- (四) 出雲權守時方
- (五) 使者の言があと先揃はず
- (六) 藥の隨身は利發者にて
- (七) 時方は出雲權守にて左衛門大夫を兼ねたりと見ゆ
- (八) 匂宮
- (九) 是程に跡をつけられんとは
- (一〇) 隨身より劣れる句の使は考へずして
- (一一) 隨身が
- (一二) 齋が

に此處には度々參るぞ」と問ふ。使者「私に訪ふべき人の許にまうで来るなり」といふ。隨身「私の人にや、艶なる文はさし取らする。氣色ある真人かな。物隠しは何ぞ」と言ふ。使者「まことはこの守の君の御文、女房に奉り給ふ」と言へは、事違(五)ひつゝ怪しと思へど、此所にて定め言はむも異様なるべければ、各參りぬ。かどどしきものにて、供にある童を、隨身「この男に然りけなくて目附けよ。左衛門の大夫の家にや入る」と見せければ、童「宮に參りて、式部の少輔になむ、御文はとらせ侍りつる」と言ふ。さまで尋ねむものとも、劣の下司は思はず、事の心をも深く知らざりければ、舍人の人に見顯されにけむぞ口惜しきや。殿に參りて、今出で給はむとするほどに、御文奉らず。直衣にて、六條院に、后の宮の出でさせ給へる頃なれば、參り給ふなりけり。事々しく、御前など數多もなし。御文參らする人に、隨身あやしき事の侍りつる、見給へ定めむとて、今まで侍ひつる」と言ふを、ほの聞き給ひて歩み出で給ふまよに、「甚何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の

(二) 浮舟附の人々は彼處へ行きては引移の用意なども出来さうにもなき程狭き故見合せたがよからん

(三) 備馬樂「道の口武生の國府に我はありと親には申したべ心あひの風やさきんだちや」

(三) 卑しき

(四) 鶯浮舟と匂宮との關係を悟る、文を浮舟に贈りて祕密を知れる由をはのめかす

(四) 鶯の

(五) 自身見舞に行きたけれど

(六) 引取らぬ間の

(七) 匂

(八) 「須磨のよまの鬘やく烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」

(九) 大内記也、式部少輔を兼ねたる由前に見えた

(二〇) 汝は

と慕ふ。母然なむ思ひ侍れど、彼所もいと物騒がしく侍り。この人々も、はかな

き事などえしやるまじく、せばくなど侍ればなむ。武生の國府にうつろひ給ふと

も、忍びては参り來なむを、なほくしき身の程は、かゝる御爲こそいとほしく

侍れ」など、打泣きつゝ宣ふ。

殿の御文は今日もあり。鶯惱ましと聞えたりしを、如何」と訪ひ給へり。

鶯自らと思ひ侍るを、わりなき障り多くてなむ。この程のくらし難さこそ、な

かなか苦しく。

などあり。宮は、昨日の御返もなかりしを、

句如何に思したどよふぞ。風の靡かむ方も後めたくなむ。いとど老れ勝りてな

がめ侍る。

など、これは多く書き給へり。雨降りし日、來逢ひたりし御使どもぞ、今日も來

たりける。殿の御隨身、かの少輔が家にて時々見る男なれば、隨身眞人は、何し





(一)宇治川に身を投げん事を思ひ立ちて見れば其方がよきさうで萬事がさつぱりなる様に感ぜらるれど

(二)寢たふりしなから聞きつゝ

(三)母北方

(四)戀故なるを母は知らずして、戀せじと御手洗川にせし御禊神はうけずぞなりにけらしも

(五)然るべき所を捜して新参者を連れて来て置き給へ

(六)上つ方の中となれば御當人の女二宮は體やかに思ひ居らるゝにしても下々が面倒なものを故

(七)浮舟が女二と寵を争ふ形となれば面倒な事があるに相違なし

(八)事を秘密にして

(九)常陸守の次女

(一〇)浮舟の心

(一一)再び逢はずに死ぬかも知れぬと思へば

(一二)母の處へ行つて居

たり

なりなば、誰もく、あへなくいみじと、暫時こそ思ひ給はめ、ながらへて人笑

へに憂き事もあらむは、いつかその物思の絶えむとする、と思ひかくるにはさは

り所もあるまじう、爽やかによろづ思ひなされるれど、うち返しいと悲し。親の萬

に思ひ言ふ有様を、寢たる様にてつくぐと思ひ亂る。惱ましけにて瘖せ給へる

を、乳母にも言ひて、さるべき御祈などせさせ給へ、祭祓などもすべき様な

と言ふ。「御手洗川にみそぎ」せまほしけなるを、斯くも知らで萬に言ひ騒ぐ。母人

少なきめり。よく然るべからむあたりを尋ねて、今まるりは留め給へ。やむごと

なき御中らひは、正身こそ何事もおいらかに思さめ、善からぬ中となりぬるあた

りは、煩はしき事もありぬべし。かい祕めて、さる心し給へ」など、思ひ至らぬ

事なく言ひ置きて、母彼所にわづらひ侍る人も、おほつかなし」とて歸るを、いと

物思はしく、よろづ心細ければ、又逢ひ見でもこそと思へば、浮舟心地のあやし

う侍るにも、見奉らぬがいと覺束なく覺え侍るを、暫時も参り來まほしくこそ」



(一) 薰に引取らるべきなれば

(二) 是からはわざ／＼は來られぬ

(三) つく／＼浮舟に御目にかゝつて御話を申上ぐるも憚ありて

(四) 浮舟が行つて仕舞はれたらば

(五) 薫の

(六) 浮舟を特に引取らるるは一通りの思召ならずと前に私が申上げしが事實なりし事は今御分りになりしならん

(七) 薫が

(八) 御媒を有難く思ふ

(九) 中君

(一〇) 憚るべき事、匂の手箱一件をいふ

(一一) たより所なく

(一二) 匂宮

つけては、物をのみ思ひ亂れし氣色の、少しうちゆるびて、かく渡り給ひぬべか

めれば、此所に参り來る事、必ずしも殊更にはえ思ひ立ち侍らじ。かよる對面の

折々は、昔の事も心のどかに、聞え承らまほしけれ」など語らふ。尼ゆよしき

身とのみ思う給へしみにしかば、細やかに見え奉り聞えさせむも、何かはとつ

つましくて過し侍りつるを、打捨てて渡らせ給ひなば、いと心細くなむ侍るべけ

れど、かよる御住居は、心もとなくのみ見奉るを、嬉しくも侍かゝめるかな。世

に知らず重々しくおはしますべかゝめる殿の御有様にて、かく尋ね聞えさせ給ひし

も、おほろけならじと聞え置き侍りにし、浮きたる事にやは侍りける」などいふ。

母後は知らねど、唯今はかく思し離れぬ様に宣ふにつけても、唯御しるべをなむ

思ひ出で聞ゆる。宮の上の、かたじけなく哀に思したりしも、つよましき事など

の、自ら侍りしかば、中空に所狭き御身なりと、思ひ歎き侍りて」と言ふ。尼君

打笑ひて、尼「この宮の、いと騒がしきまで、色におはしますなれば、心ばせあら

(一) 其方も我も

(二) 若し御懐胎かと思へど、月の障の爲に石山詣もとまりたる位なれば其にもあるまじ

(三) 浮舟の様

(四) 匂と舟に乗りて川を渡りし時の事

(五) 浮舟が自ら評する也

(六) 辨の尼

(七) 大君

(八) 色々せねばならぬ心配をせし故に

(九) 大君御存生ならば

(一〇) 中君

(一一) 便なき浮舟の爲に仕合せなりしならん

(一二) 浮舟なりとて大君等と違ふ事はない、以下母北方の心

(一三) 運よく行けば中君にも劣るまじと

(一四) 浮舟故には

たつ山やまに籠こもるとも、必ず尋たづねて、我われも人ひとも徒いたづらになりぬべし、猶なほ心こころやすく隠かくれな

む事を思おもへ、と今日けふも宣のたまへるを、如何いかにせむ、と心地こころ悪あしく臥ふし給たまへり。母はは「など

かかく例れいならず、甚いたく青あをみ瘦やせ給たまへる」と驚おどろき給たまふ。乳母ちち「日頃ひごろ怪あやしくのみなむ。は

かなき物ものも聞食きこしめさず、惱なやましけにせさせ給たまふ」と言いへば、母はは「あやしき事ことかな。物もの

怪けなどにやあらむ」と、母はは「如何いかなる御心みこころ地ちぞと思おもへど、石山いしやまもとまり給たまひにきか

し」と言いふも、かたはらいたければ伏目ふしめなり。暮くれていと月つきいとあかし。有明ありあけの

空そらを思おもひ出いづる涙なみだのいとど留とどめがたきは、いとけしからぬ心こころかなと思おもふ。母君ははきみ昔むかし

物語ものがたりなどして、あなたあなさまの尼君あまきみ呼よび出いでて、故姫君こひめぎみの御有みあり様さま、心深こころがくおはして、さる

べき事ことも思おもし入いれたりし程ほどに、目めに見みすく消きえ入り給たまひにし事ことなど語かたる。尼あまお

はしまさましかば、宮みやの上うへなどの様やうに聞きえ通かよひ給たまひて、心細こころばかりし御有みあり様さまどもの、

いとこよなき御幸おんさいはひにぞ侍はべらましかし」と言いふにも、我女わがむすめはこと人ひとかは、思おもふ様やう

なる宿世すくせのおはしはてば、劣おとらじを、など思おもひつゞけて、母はは「世よと共に、この君きみに

- (一) 此引取場所が出来たので
- (二) 受領が任國へ
- (三) 浮舟を引取らんと
- (四) 浮舟方へ
- (五) 句が宇治へ行く事は
- (六) 浮舟方
- (七) 句に逢ふ事は
- (八) 薫は
- (九) 浮舟引取の日を
- (一〇) 浮舟は引取つてさへくれくば何方へでも行く氣にはなれず、能びぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ
- (一一) 分別をつける間暫時其處に居たしと
- (一二) 常陸守の娘第二女
- (一三) 常陸守の北方が浮舟方へ來たる也
- (一四) 薫より
- (一五) 侍女等の衣裳迄も
- (一六) 私一個の計らひでは
- (一七) 浮舟
- (一八) 以下浮舟の心
- (一九) 句宮
- (二〇) 「白雪の八重たつ山に籠るとも思ひ立ちなば尋ねざらめや」以下句の文の詞を浮舟の思ひ出せる也

これを設け給ひて、少し御心のどめ給ふ。この月の晦日(二)がたに下るべければ、やがてその日渡さむと思し構ふ。句斯くなむ思ふ。ゆめく」と言ひやり給ひつよ、おはしまさむ事はいとわりなくある中に、こよにも、乳母いとさかしければ難か(五)るべき由を聞ゆ。

大將殿は、卯月の十日となむ定め給へりける。「誘ふ水あらば」とは思はず、いと怪しく、如何にしなすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御許にしばし渡りて、思ひめぐらす程あらむ、と思せど、少將の妻子産むべき程近くなりぬとて、修法讀經など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじ。母ぞこち渡り給へる。乳母出で来て、乳母殿より、人々の装束なども細かに思しやりてなむ。い(二四)かで清けに何事もと思ひ給ふれど、まよが心ひとつには、怪しくのみぞし出で侍らむかし」など言ひ騒ぐが心地よけなるを見給ふにも、君は、けしからぬ事ども(二七)の出で来て人笑へならば、誰もく如何に思はむ、あやにくに宣ふ人はた、八重(二九)

(一) 嫉妬はどの様な時に  
するものか我は知らぬ  
(二) 浮舟を引取りたらば  
帝へ告口をする者がある  
かも知れぬ  
(三) 浮舟は彼是人に噫さ  
れる程の物々しき女でも  
なし

(四) かねて用意せし家也  
(五) 扱は浮舟を引取る積  
で此家は造りたるなり杯  
と仰山に噫されるがいや  
と  
(六) 句を案内せし大内記  
の妻の親

(七) 句方へ  
(八) 句に語る者の詞  
(九) 特別に調製せらるる

(一〇) 句が  
(一一) 下京  
(一二) 句が受領に  
(一三) 句の熱心に頼むを  
断るも恐れ多き故  
(一四) 然らば仰に従はん

ぬべき心地してなむ」と、聞え給へば、女三如何なる事に心置くものとも知らぬ  
を」と、いらへ給ふ。蜜(三)内裏になど、悪様に聞しめさする人や侍らむ。世の人の  
物言ひぞ、いと味氣なくけしからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに  
侍るまじ」など聞え給ふ。(三)

造りたる所に渡してむと思し立つに、「かゝる料なりけり」など、花やかに言ひな  
す人やあらむなど、苦しければ、いと忍びて障子張らすべき事など、人しもこそ  
あれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なるものに、睦まじく心安きまよに、  
宣ひつれたりければ、聞きつぎて、宮には隠なく聞えけり。「繪師どもなども、御  
隨身どもの中にある、むつまじき殿人などを選りて、流石にわざとなむせさせ給  
ふ」と申すに、いとど思しさわぎて、我が御乳母の遠き受領の妻にてくだる家、下  
つ方にあるを、匂いと忍びたる人しばし隠いたらむ」と、語らひ給ひければ、如  
何なる人にかはと思へど、大事と思したるに、辱ければ、匂「然らば」と聞えけり。

造りたる所に渡してむと思し立つに、「かゝる料なりけり」など、花やかに言ひな  
す人やあらむなど、苦しければ、いと忍びて障子張らすべき事など、人しもこそ  
あれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なるものに、睦まじく心安きまよに、  
宣ひつれたりければ、聞きつぎて、宮には隠なく聞えけり。「繪師どもなども、御  
隨身どもの中にある、むつまじき殿人などを選りて、流石にわざとなむせさせ給  
ふ」と申すに、いとど思しさわぎて、我が御乳母の遠き受領の妻にてくだる家、下  
つ方にあるを、匂いと忍びたる人しばし隠いたらむ」と、語らひ給ひければ、如  
何なる人にかはと思へど、大事と思したるに、辱ければ、匂「然らば」と聞えけり。

(一) どうしてよいか分らぬ我身はいつもあの雲にでもなつて飛んで行つて仕舞ひたし

(二) 「行く舟の跡なき波にまじりなば誰かは水の泡とだに見ん」

(三) 浮舟を

(四) 薫は浮舟の返事を

① 薫の浮舟を引取るべき準備、匂宮の薫を出し抜きて浮舟を引取るべき準備、浮舟自殺を企つ

(五) 女二宮

(六) 年來我が手をかけて居る女、浮舟を女二宮を娶る前より關係ありし女の様に詐る也

(七) 一生獨身で暮したしと思ひ居しに

(八) 女二宮を娶りたるにつけて

(九) 世の中を

(一〇) 隠し妻の事までも氣になりて棄て置くは罪な様に思はるゝ故引取らんと思ふ

浮舟かきくらしはれせぬ峰のあま雲にうきて世をふる身をもなさばや

まじりなば。

(二)

と聞えたるを、宮はよよと泣かれ給ふ。さりとも戀しと思ふらむかしと思しやる

にも、物思ひて居たらむ様のみ、面影に見え給ふ。まめ人はのどかに見給ひつよ、

(三)

哀如何にながむらむと思ひやりて、いと戀し。

浮舟つれぐと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて

とあるを、うちも置かず見給ふ。

女宮に物語など聞え給ひての序に、薫無禮しともや思さむと、つよましながら、

流石に年経ぬる人の侍るを、怪しき所に捨て置きて、いみじう物思ふなるが心苦

しさに、近う呼び寄せてと思ひ侍る。昔より異様なる心ばへ侍りし身にて、世の

中を、すべて例の人ならで、過してむと思ひ侍りしを、かく見奉るにつけて、ひ

たふるにも捨て難ければ、ありと人にも知らせざりし人の上さへ、心苦しう罪得

(九)

(一〇)

(一)右近が一人で氣を揉みし時よりは今は侍従といふ相談相手ある故事が計らひよし  
(二)浮舟の方から手紙をよこして貰ひたし  
(三)其方を疎に思ひて無沙汰するに非ず

(四)初句は長雨に宇治川の水のまさるをいふ、ながめ—長雨、眺め

(五)文句の長い文を  
(六)句への御返事を先にし給へ

(七)宇治のう(憂)といふ名を我身に思ひ知れば  
(八)句の中は到底永く續ける譯にはゆかぬと  
(九)韻に引取られてふつつり句に逢はずに仕舞ふは

語らふ。心ひとつに思ひしよりは、空言もたより出で來にけり。後の御文には、

黨思ひながら日頃になること。時々は、それよりも驚かい給はむこそ、思ふ様

ならめ。疎なるにやは。

など。はし書に、

黨水まさるをちの里人いかならむ晴れぬながめにかきくらす頃

常よりも、思ひやり聞ゆること勝りてなむ。

と、白き色紙にて立文なり。御手も細かにをかしけならねど、書きざま故々しう

見ゆ。宮はいと多かるを、小さく結びなし給へる、様々をかし。侍女「まづ彼を、

人見ぬ程に」と聞ゆ。浮舟「今日はえ聞ゆまじ」と、恥らひて、手習に、

浮舟里の名を我身に知ればやましろの宇治のわたりぞいとど住み憂き

宮のかき給へりし繪を、時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじき事ぞと、と

ざまかうざまに思ひなせど、外に絶え籠りてやみなむは、いと哀に覺ゆべし。



- (一) 永く續くにした處が
- (二) 我を引取りて
- (三) 我を寵愛あらば
- (四) 中君の手前も如何也
- (五) 況や物は隠されぬ世の中故、此句「まして我有様の」へ續く
- (六) 句に手箱にされかけし口一度の手がかりでさへ遂に斯く尋ね出されし事なれば
- (七) 薫の
- (八) 浮舟自身にも悪い處があるのが分つて
- (九) 薫に
- (一〇) 薫
- (一一) 同時に二つの文をあれ是と見るも異なる物故
- (一二) まだ長くある句の文を見つゝ
- (一三) 矢張浮舟の心は句の方へ移つたのぞやわいと
- (一四) 薫の
- (一五) 句の
- (一六) 是程句に慕はれるのを知りつゝ此儘宇治に居る事は出来ぬ
- (一七) 句を
- (一八) 浮舟の
- (一九) 句との關係は

そあらめ、また斯うながらも、京に隠しする給ひ、ながらへても思し數まへむにつけては、かの上の思さむこと、よろづ隠なき世なりければ、怪しかりし夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出で給ふめり、まして我有様のともかくもあらむを、聞き給はぬ様はありなむや、と思ひたどるに、我が心にも疵ありて、かの人(七)に疎まれ奉らむは、猶いみじかるべし、と思ひ亂るゝ折しも、かの殿より御使(八)あり。これかれと見るもいとうたてあれば、尙事多かりつるを見つゝ臥し給へれ(九)ば、侍従右近見合せて、猶うつりにけりと、言はぬ様にていふ。侍従「理ぞかし。殿の御容貌を類おはしまさじと見しかど、この御有様はいみじかりけり。打亂れ給へる愛敬よ。まろならば、斯ばかりの御思を見るく、え斯くてあらじ。后の宮にも参りて、常に見奉りてむ」と言ふ。右近「うしろめたの御心の程や。殿の御有様に勝り給ふ人は誰かはあらむ。容貌などは知らず、御心ばへけはひなどよ。猶この御事は、いと見苦しきわざかな。如何ならせ給はむとすらむ」と、二人して

(一)句

(二)句が

① 句宮黨各浮舟に文を贈る、浮舟の煩悶

(三)句が宇治へ行く事は出来ぬとあきらめて

(四)「たちちねの親のかぶ霊の繭籠りいぶせくもあるか妹に逢はずして」

(五)浮舟への文に

(六)重々しかちぬ氣風の浮舟故、此様な手紙を見てはひとしは戀がまさる様なれど

(七)黨は

(八)はじめて男を知りし相手なればにや

(九)以下浮舟の心

(一〇)黨が

(一一)早く黨に引取つて貰ひたしと待居る母にも句との關係が知れたらば不埒な事をすると折檻せらるべし

(一二)句は浮氣者の由なれば其愛情も永く續きはすまじ

思ひながら、強ちなる人の御事を思ひ出づるに、恨み給ひし様、宣ひし事ども、

面影につと添ひて、いさよかまどろめば夢に見え給ひつよ、いとうたてあるまで

覺ゆ。

雨降り歇まで、日頃多くなる頃、いとど山路思し絶えて、わりなく思されければ、

「親のかふこ」は所狭きものにこそと、思すも辱し。盡せぬ事ども書き給ひて、

句ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくると頃のわびしさ

筆にまかせて書き亂り給へるしも、見所あり、をかしけなり。殊にいと重くなど

はあらぬ若き心地に、いとかよる心を思ひも勝りぬべけれど、初より契り給ひし

様も、流石に彼は猶いと物深う、人柄のめでたきなども、世の中を知りにしはじ

めなればにや、かよる憂き事聞きつけて、思ひ疎み給ひなむ世には、いかでか

らむ、いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしとこそは、もて煩はれめ、

かく心いられし給ふ人はた、いとあだなる御本性とのみ聞きしかば、かよる程こ

(一)字治の山莊へ  
(二)其方の思ひ込んで居る藪は我が如く親切にはよもやあるまじ

(三)句が

(四)浮舟への文を句が

(五)浮舟方

(六)暇を貰ひて行つて居たりしが

(七)浮舟が句の文を

(八)浮舟の今の生活は如河にも落着かぬ住居なれど

(九)藪のよく取扱ひてくれるを樂しみにして

(一〇)内々ではあれど近近藪が引取る積になりたれば

(一一)母北方が

(一二)浮舟方へ

(一三)浮舟の

て、夜深く率て歸り給ふ。例の抱き給ふ。匂いみじく思すめる人は、斯うはよも  
あらじよ。見知り給ひたりや」と宣へば、實にと思ひて、うなづきて居たる、い  
とらうたけなり。右近、妻戸放ちて入れ奉る。やがてこれより別れて出で給ふ  
も、飽かずいみじと思さる。

かやうの歸さは、猶二條院にぞおはします。いと惱ましうし給ひて、物なども絶

えて聞食さず、日を経て青み瘡せ給ひ、御氣色も變るを、内裏にも何處にも思ほし

歎くに、いとど物騒がしくて、御文だに細にはえ書き給はず。彼所にも、かのさ

かしき乳母、女の子産む所に出でたりける、歸り來にければ、心やすくもえ見ず。

かくあやしき住居を、唯かの殿のもてなし給はむ様をゆかしく待つ事にて、母君

も思ひ慰めたるに、忍びたる様ながらも、近く渡してむ事を思しなりにたれば、

いとめやすく嬉しかるべき事に思ひて、やうく人もとめ、童のめやすきなど迎

へておこせ給ふ。我が心にも、それこそはあるべき事に、初より待ち渡れ、とは

(一)句の態度は地體美し  
きが上に

(二)浮舟に思ひ附かれん  
と

(三)二日間逗留すべき由  
に於て京の方を取繕ひ  
ある故

(四)句と浮舟と

(五)浮舟が

(六)濃紫の衣に

(七)取合せ越ありて

(八)上の袴、裳

(九)よき衣に著かへたれ  
ば

(一〇)浮舟に

(一一)女一宮の官女に此  
浮舟をしたらば御寵愛が  
あるに違ひなし、句の心

(一二)女一の侍女の中に  
は

(一三)浮舟を盗み出さん  
事を

(一四)其迄の間に薫に逢  
ひてはならぬと

て引き破りつ。さらでだに見るかひある御有様を、いよくあはれにいみじと、人  
(二)の心にしめられむと、盡し給ふ言の葉氣色、いはむ方なし。  
(三)御物忌二日とたばかり給へれば、少し心のどかなる儘に、互に哀とのみ深く思し  
(四)まさる。右近は、萬に例の言ひ紛らはして、御衣など奉りたり。今日は亂れた  
(五)る髪少しけづらせて、濃き衣に紅梅の織物など、間をかしよう著かへて居給へり。  
(六)侍従も、あやしき褶著たりしを、あざやぎたれば、その裳をとり給ひて、君に著  
(七)せ給ひて、御手水まゐらせ給ふ。姫宮にこれを奉りたらばいみじきものにし給  
(八)ひてむかし、いとやむごとなき際の人多かれど、斯ばかりの様したるは難くや、と  
(九)見給ふ。かたはなるまで遊び戯れつと暮し給ふ。忍びて牽て隠してむ事を、かへ  
(一〇)すがへす宣ふ。その程、かの人に見えたらばと、いみじき事どもを誓はせ給へば、  
(一一)いとわりなき事と思ひて、答へもやらず、涙さへおつる氣色、更に目の前にだに  
(一二)思ひうつらぬなめりと、胸痛うおほさる。恨みても泣きても、萬に宣ひあかし  
(一三)

(一)句が

(二)薫が

(三)妻に持ち

(四)薫が浮舟を思ひ出して「衣かたしき」と歌ひし

事

(五)大事にされる御容様は其様を事はせぬものぢや、時方を戯れていふ也

(六)時方と

(七)浮舟が

(八)句が

(九)「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ行く君を思ひかねて」

(一〇)二人の男の中に立ちて身を持扱ひたる心をはのめかせる也

(一一)「中空けてぞ」とあるを句が氣にしたる也

(一二)浮舟の感じ

えけむかしと思し遣りて、いみじく怨み給ふ。二の宮をいとやむごとなくともち

奉り給へる有様なども語り給ふ。かの耳留め給ひし一言は、宣ひ出でぬぞ憎き

や。時方、御手水御菓子など、取次ぎて参るを御覽じて、匂いみじくかしづかる

める客人のぬし、さてな見えそや」といましめ給ふ。侍従、色めかしき若人の心地

に、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮しける。雪の降り積れるに、

我が住む方を見やり給へば、霞のたえぐに梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるや

うに、さらくと夕日に輝きたるに、昨夜わけ來し道のわりなさなど、哀おほく

添へて語り給ふ。

句峰の雪みぎはのこほりふみわけて君にぞまどふ道はまどはず

「木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯めし出でて手習し給ふ。

浮舟ふりみだれ汀にこほる雪よりもなかぞらにてぞ我は消ぬべき

と書き消ちたり。この中空を咎め給ふ。實に憎くも書きてけるかなと、恥かしく

(一) 浮舟が

(二) 浮舟の服装

(三) 句の感じ、常に見給ふ人は六君中君など

(四) 浮舟の人柄のみならず其打解け姿までが

(五) 右近にのみならず侍従に迄句との關係を知らるゝ事よと

(六) 侍従に向ひて汝は誰ぞと尋ぬる也

(七) 「犬上」とこの山なるいさや川いさと答へて我名もらすな」

(八) 侍従が

(九) 時方が

(一〇) 聲低くも言ふ也、時方をあがめたる形也

(一一) 時方が、句の在るを知らずして自分如き卑しき者を敬ふををかしがる也

(一二) 宿守に

(一三) 薰の來りし時浮舟が矢張此様にして逢ひしならんと

ば、細やかなる姿つきいとをかしけなり。ひき繕ふ事もなく打解けたる様を、いと恥かしく、まばゆきまで清らなる人にさし向ひたるよと思へど、紛れむ方もなし。なつかしき程なる白き隈を五つばかり、袖口裾の程までなまめかしく、色々に數多襲ねたらむよりも、をかしう著なしたり。常に見給ふ人とて、斯くまで打解けたる姿などは、見習ひ給はぬを、斯かるさへぞ猶珍らかにをかしう思はれる。侍従も、いと目安き若人なりけり。これさへ斯かるを殘なう見るよと、女君はいみじと思ふ。宮も、句「これは又誰ぞ。我が名洩すなよ」と口がため給ふを、いとめでたしと思ひ聞えたり。此所の宿守にて住みけるもの、時方を主と思ひてかしづきありければ、このおはします遣戸を隔てて、所得顔に居たり。聲ひきしどめ、畏まりて物語しをるを、答もえせずをかしと思ひけり。時方いと怖ろしう占ひたる物忌により、京の内をさへ去りて慎むなり。外の人寄すな」と言ひたり。人目も絶えて心やすく語らひくらし給ふ。かの人のものし給へりけむに、斯くて見

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

いとほかなけれど、千年も経べき緑の深さを」と宣ひて、

句年(一)経ともかはらむものかたちばなの小島のさきに契(二)るこころは

女も、珍(三)らしからむ道のやうに覺えて、

浮舟たちばなの小島の色はかはらじをこのうき船ぞゆくへ知られぬ(三)

をりから人の様に、をかしくのみ何事も思しなす。かの岸にさし著きて下り給ふ

に、人に抱かせ給はむは、いと心苦しければ、抱き給ひて、助けられつゝ入り給

ふを、いと見苦しく、何人を斯くもて騒ぎ給ふらむと見奉る。時方が叔父の因幡(四)

の守なるが領する庄に、はかなう造りたる家なりけり。まだいと荒々しきに、網(七)

代屏風など、御覽じも知らぬしつらひにて、風も殊にさはらず、垣のもとに雪む(八)

ら消えつゝ、今もかき曇りて降る。(九)

日さし出でて軒の垂氷の光りあひたるに、人の御容貌もまさる心地す。宮も、所(二〇)

狭き道の程に、軽らかなるべき程の御衣どもなり。女も脱ぎすべさせ給ひてしか(二一)

- (一) 橋は常磐なるものなれば其にあやかりて我と君との中も永く變らじ
- (二) 朝夕見慣れたる處なれども珍らしき旅にても出たる様に思はれて
- (三) 橋の小島はかはる事もあるまじけれど我身は行末覺束なし、薰と匂と兩方へ心のわけらるゝつらさを含みていへる也
- (四) 匂が
- (五) 浮舟を
- (六) 匂自ら
- (七) 供人の感じ
- (八) 此借りたる家は
- (九) 十分に造り終らぬ様也
- (一〇) 防ぎきれず

- (一一) 浮舟の
- (一二) 後行の服疑、狩衣なるべし
- (一三) 上衣を脱がせられた

浮舟





(一) 齋の

(二) 其では來ぬがましな位故

(三) 邸内の人々の

(四) 浮舟を連れて行かん

(五) かねて其準備をさせ

(六) 右近が

(七) 浮舟に一言も言はせ

(八) あとの番に残りて

(九) 浮舟の供に

(一〇) 浮舟が

(一一) 匂にひつたり寄り添ひて

(一二) 匂が

(一三) 物古りたる

れど、かの人の御けはひに似せてなむ、もて紛らはしける。夜の程に、立ち歸り

給はむも中々なるべければ、此處の人目もいとつよましさに、時方にたばからせ

給ひて、河より彼方なる人の家に率ておはせむと構へたりければ、前だてて遣し

たりける、夜更くる程に參れり。時互いと能く用意して侍ふと申さす。こは如

何にし給ふ事にかと、右近もいと心あわたゞしければ、寢おびれて起きたる心地

も戦かれて、あやしき童への雪遊したるけはひの様にぞ、震ひあがりける。「いか

でか」なども言ひあへさせ給はず、かき抱きて出で給ひぬ。右近はこよの後見に

留まりて、侍従をぞ奉る。いとほかなげなるものと旦暮見いだす、小き船に乗

り給ひて、さし渡り給ふほど、遙ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむ様に、心細く覺

えて、つと著きて抱かれたるも、いとらうたしと思す。有明の月すみ昇りて、水

の面も曇なきに、船人「これなむ橘の小島」と申して、御船しばし留めたるを

見給へば、大きやかなる岩の様して、されたる常盤木の影繁れり。匂かれ見給へ。

(九) 句宮雪中 宇治に行  
く、夜浮舟と共に宇治川  
を渡りて大内記の所縁の  
家に宿す  
(一〇) 驚の様子をみていよ  
い上油断がなちぬと句が  
思ひて  
(一一) 句が宇治へ  
(一二) 追ひ續きて降る雪を  
待つ内に僅に残れる雪を  
(一三) 宇治通ひの御供の煩  
はしきを厭ふ  
(一四) 本官も兼官も  
(一五) 御供として似合はし  
き様に指貫の裾をかくげ  
たる姿も  
(一六) 宇治方では  
(一七) 句宮が行くべき由通  
知はありたれども  
(一八) 句宮御出の通知  
(一九) 句宮御出の通知  
(二〇) 浮舟  
(二一) 句と浮舟との中の  
未始終を案じる也  
(二二) 句の志の深さに免  
じて他人への憚も忘れて  
接待もする氣になる  
(二三) 斷つて返す譯にも  
ゆかぬ故  
(二四) 右近同様に浮舟が  
親しくする若き侍女で思  
慮ある女に事情を打明け  
て、此女名は侍従  
(二五) 句を内へ

かの人の御氣色にも、いとど驚かれ給ひければ、あさまじうたばかりて、おはし  
 (二) ましたり。京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るまよに、やよ降り  
 (三) 積みたり。常よりもわりなき稀の細道をわけ給ふ程、御供の人も、泣きぬばかり  
 恐ろしう、煩はしきことをさへ思ふ。案内の内記は、式部の少輔をなむ乗けたり  
 ける。いづ方もく、然るべき職ながら、いとつきくしく、引きあけなどした  
 (四) (五) る姿も、をかしかりけり。  
 (六)

彼處には、おはせむとありつれど、かよる雪には、と打解けたるに、夜更けて右  
 (七) 近に消息したり。あさまじう哀と、君も思へり。右近は如何になりはて給ふべき  
 (八) (九) 御有様にかと、かつは苦しけれど、今宵はつよまじさも忘れぬべし。言ひ歸さむ  
 (一〇) (一一) 方もなければ、同じやうに睦まじく思いたる若き人の、心ざまも奥なからぬを語  
 (一二) らひて、右近いみじくわりなき事。同じ心にもて隠し給へ」と言ひてけり。諸共  
 (一三) (一四) に入れ奉る。道の程に濡れ給へる御衣の香の、所狭う匂ふも、もて煩ひぬべけ  
 (一五)



(一)今てさへ動もすれば打絶えて来て下さらぬものを、永久に契の續く杯とはとてもあてにならぬ  
 (二)薫の心  
 (三)今迄さへ慄へて居しにこそ泊るでもない、やがて氣遣なしに泊られる様に泊るべし  
 (四)浮舟の態度を薫が思ふ也  
 (五)浮舟を

④ 宮中の詩會  
 (六)詩會の催ありて  
 (七)句も薫も  
 (八)句を作者の誦する也  
 (九)つまらぬ女の事に熱中するの疵ぢや  
 (一〇)句の禁中にての宿直所に  
 (一一)薫が人に面會する爲に  
 (一二)おぼつかなきに  
 (一三)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」  
 (一四)「狹席に衣かたしき今宵もや我を待つらん宇治のはし姫」

浮舟絶間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものと猶たのめとや  
 (一)

前々よりもいと見捨て難く、しばしも立ち留らまほしく思さるれど、人の物言ひの安からぬに、今更なり、心安き様にこそ、など思しなして、曉にかへり給ひぬ。  
 (二)

いとようも大人びたりつるかなと、心苦しう思し出づる事、ありしに勝りけり  
 (三)  
 (四)  
 (五)

二月の十日のほどに、内裏に文作らせ給ふとて、この宮も大將も参りあひ給へり。折にあひたる物の調どもに、宮の御聲はいとめでたくて、「梅が枝」など諺ひ給ふ。  
 (六)  
 (七)

何事も人よりはこよなう勝り給へる御様に、すどろなる事思し入らるよのみなむ、罪深かりける。雪俄に降り亂れ、風など烈しければ、御あそび疾く歎みぬ。  
 (八)  
 (九)

この宮の御宿直所に、人々参り給ふ。物まわりなどして、打休み給へり。大將、人に物宣はむとて、すこし端近く出で給へるに、雪やうく積り、星の光にお  
 (一〇)  
 (一一)  
 (一二)

ほおほしきを、「闇はあやなし」と覺ゆるにほひ有様にて、「衣かたしき今宵もや」  
 (一三)  
 (一四)

(一) 驚が

(二) 大君在世の時の事

(三) 相手が大君に似たる  
浮舟でなくとも(四) 浮舟は大君の代りと  
見ても餘り不相應でなく(五) 近づきて却て此上なく  
器量を見あげたる心地(六) 驚と匂に對する様々の  
情緒を(七) 其方との中は永久に  
續くべければ心配して心  
を痛むるな

(八) やがて分る事ぢや

道の有様にもあらぬを」など、朔日頃の夕月夜に、少し端近く臥して眺め出し給

へり。男は過ぎにし方の哀をも思し出で、女は今より添ひたる身の憂さを歎き加

へて、互に物思はし。山の方は霞隔てて、寒き洲崎に立てる鷺の姿も、處がら

はいとをかしう見ゆるに、宇治橋の遙々と見渡さるゝに、柴積み船の所々に行き

違ひたるなど、外にては目馴れぬ事どものみ取り集めたる所なれば、見給ふ度ご

とに、猶そのかみの事の唯今の心地して、いと斯からぬ人を見かはしたらむにて

だに、珍らしき中の哀多く添ひぬべき程なり。まいて戀しき人によそへられたる

もこよなからず、やうく物の心知り、都馴れ行く有様のをかしきも、こよなく

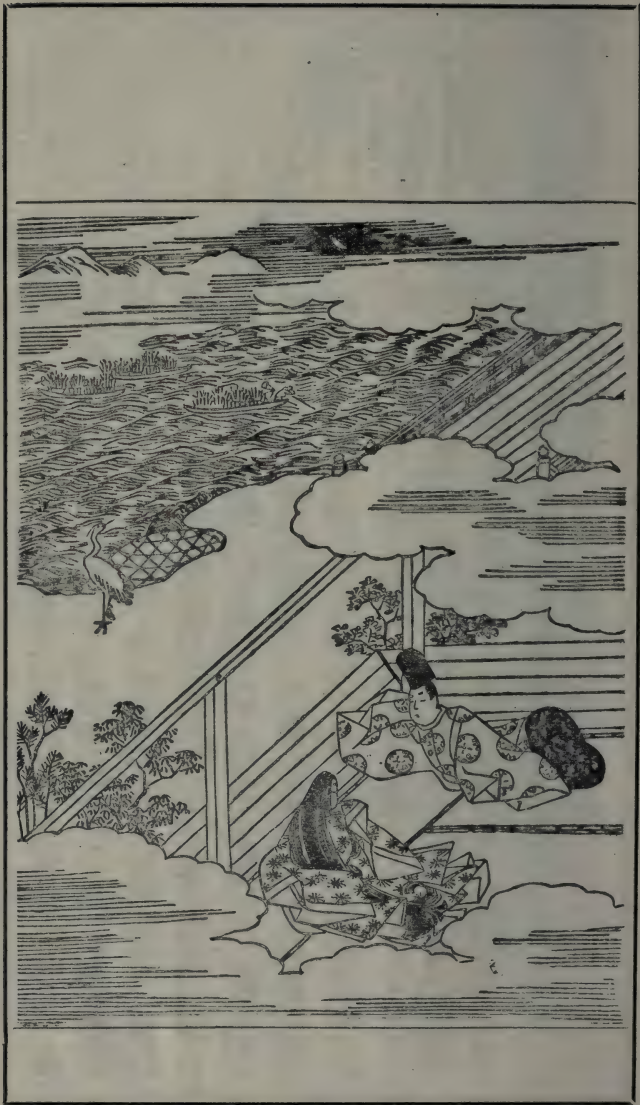
見勝りしたる心地し給ふに、女はかき集めたる心の中に、催さるゝ涙、ともすれ

ば出でたつを、慰めかね給ひつよ、

驚宇治橋のながきちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわくな

今見給ひてむ」と宣ふ。

浮  
舟



(一) 薫に

(二) 薫が我を

(三) 此幾月の間に浮舟は非常に物が分つて来て、以下薫の心

(四) 浮舟を置くべき篇に

(五) 宇治川よりはなつかしき様なる川の邊にて、賀茂川なるべし

(六) 都合よくば引取らん

(七) 句が浮舟を置くべき靜な處を用意せりと、以下浮舟の心

(八) 薫は

(九) 句に

(一〇) 句の様子が目先に

ちらつければ

(一一) 従來は浮舟の氣風が其様に神經質ならで大様なるを嬉しく思ひ居し

(一二) 路の遠さといひ身分の重々しさといひ深き情がなくて來られる譯ではないに

らるよ人を哀と思ふも、それはいとあるまじく輕き事ぞかし、この人に憂しと思

はれて、<sup>(三)</sup>忘れ給ひなむ心細さは、いと深うしみぬべければ、<sup>(二)</sup>思ひ亂れたる氣色を、

月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり、徒然なる住處のほどに、<sup>(一)</sup>思ひ殘

す事はあらかじかし、と見給ふも、心苦しければ、常よりも心留めて語らひ給ふ。

薫造らする所、やうく宜しうしなしてけり。一日なむ見しかば、<sup>(五)</sup>此所よりは氣

近き水に、<sup>(四)</sup>花も見給ひつべし。三條宮も近き程なり。旦暮覺束なき隔も、<sup>(六)</sup>自らあ

るまじきを、この春の程に、<sup>(七)</sup>然りぬべくば渡してむ」と思ひ宣ふも、<sup>(八)</sup>かの人の、

長閑なるべき所思ひ設けたりと、<sup>(九)</sup>昨日も宣へりしを、<sup>(一〇)</sup>かゝる事も知らで、然思す

らむよ、と哀ながらも、<sup>(一一)</sup>其方に靡くべきにはあらずかしと思ふからに、<sup>(一二)</sup>ありし御

様の面影に覺ゆれば、<sup>(一三)</sup>我ながらも、うたて心憂の身やと、<sup>(一四)</sup>思ひつゞけて泣きぬ。

薫御心ばへの斯からでおいらかなりしこそ、<sup>(一五)</sup>長閑に嬉しかりしか。人の如何に聞

え知らせたる事がある。<sup>(一六)</sup>少しも疎ならむ志にては、<sup>(一七)</sup>斯うまで參り來べき身の程、

<sup>(一八)</sup>

<sup>(一九)</sup>

- (一) 浮舟
- (二) 薫にどういふ風に
- (三) 薫に
- (四) 薫に
- (五) 句が浮舟に對して其方に逢ひてからは今迄の女を皆捨てたくなつたと仰せられしが、以下浮舟の心
- (六) 句の病氣なりとて
- (七) どの女の處へも何時もこの様に通はず
- (八) 今薫に逢ひたらば其を句が聞きて何と思ふならんと
- (九) 薫もまた、以下浮舟の心
- (一〇) 無沙汰のわび杯
- (一一) 露骨には言はねど
- (一二) 言多くいふには勝りて
- (一三) 持つて居る人柄
- (一四) 人に頼もしがらるる氣風など非常に句より勝れり
- (一五) 浮舟が飛んでもなき不埒な了簡を持つて居る事即ち句を戀する事が薫に知れたらば、以下浮舟の心
- (一六) 盲目的に我を愛する句をいとしく感ずれども

なくもやつし給はず、烏帽子直衣の姿、いとあらまほしく清けにて、歩み入り給ふより、恥かしげに用意ことなり。女、いかで見え奉らむとすらむと、空さへ恥かしく恐ろしきに、強ちなりし人の御有様、打思ひ出でらるゝに、又この人に見え奉らむを思ひ遣るなむ、いみじう心憂き。我は年頃見る人をも、皆思ひ變りぬべき心地なむすると宣ひしを、實にその後御心地苦しとて、何處にもく、例の御有様ならで、御修法など騒ぐなるを聞くに、又いかに聞きて思さむ、と思ふもいと苦し。この人はた、いとけはひ異に心深く、なまめかしき様して、久しかりつる程の怠など宣ふも言多からず、戀し悲しとおりにたよねど、常にあひ見ぬ戀の苦しさを、様よき程にうち宣へる、いみじく言ふには勝りて、いと哀と人の思ひぬべき様をしめ給へる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行末長く人の頼みぬべき心ばへなど、こよなく勝り給へり。思はずなる様の心ばへなど、漏り聞かせたらむ時、斜ならずいみじくこそあべけれ、怪しう、現心もなく思し入



(一) 蕪の有様をいふ、以下句の心

(二) 我を蕪に比較して浮舟が何と思ひしならん

(三) 浮舟

(四) 浮舟方

(五) 石山詣もやめになり

(六) 句が

(七) 其でも文だけでは安心が出来ず

(八) わざと事柄を知らぬ男を擧げて使にやれり

(九) 蕪の供に來て右近が宇治に居るを見出して前

とは打て變つて親切振を見せて使をよこすなりと

右近が人前をごまかす

(一〇) 浮舟と句との中に

つきて萬事を言ひくさる

(一一) 句が

(一二) 宇治へは行かれぬ

(一三) 句の心

(一四) 蕪宇治に行く、浮舟の羞恥、蕪の愛憎

(一五) 宇治へ

(一六) 浮舟方へ忍び來た

れど

の、流石に日數ふるは、いと悪しきわざに侍る。御風よくつくろはせ給へ」など、

まめやかに聞え置きて出で給ひぬ。恥かしけなる人なりかし、我が有様を如何に

思ひくらべけむ、など様々なる事につけつとも、たゞ此人を時の間忘れず思し出

づ。

彼所には石山もとまりて、いと徒然なり。御文には、いといみじき事を書き集め

給ひてつかはす。それだに心安からず、時方と召しよ大夫の從者の、心も知らぬ

してなむ遣りける。右近が古く知れりける人の、殿の御供にて尋ね出でたる、さ

らがへりて懇がると、友だちには言ひ聞かせたり。萬右近ぞ空言しならひける。

月もたちぬ。斯う思し入らるれど、おはします事はいと理なし。斯うのみ物を思

はば、更に得ながらふまじき身なめりと、心細さを添へて歎き給ふ。

大將殿、少しのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。寺に佛など拜み給ふ。

御誦經せさせ給ふ僧に、物賜ひなどして、夕つ方此處には忍びたれど、これは理

(一)句が自分の御殿へ  
 (二)句が昨日見えざりし  
 を今上が氣にかけて居ら  
 る、文の詞なり  
 (三)自分が句に逢はずし  
 て

● 薰匂宮を見舞ふ、句  
 宮の煩悶  
 (四)薰が匂方へ  
 (五)明石

(六)薰を  
 (七)句が  
 (八)薰がいくら坊主くま  
 くてもまりとは餘り浦僧  
 じみて居る  
 (九)浮舟を捨て置きて

(一〇)薰が自分の老實を  
 標榜し  
 (一一)句が  
 (一二)浮舟の一件を見顯  
 はしたるなればどの様に  
 も薰を攻撃してよい筈

き給ひて、猶心解けぬ御氣色にて、彼方に渡り給ひぬ。「昨日のおほつかなさな

惱ましく思されたなる。よろしくは参り給へ。久しうもなりにけるを」など様に

聞え給へれば、騒がれ奉らむも苦しけれど、誠に御心地も違ひたる様にて、そ

の日は参り給はず。上達部など數多参り給へれど、御簾の内にて暮し給ふ。

夕つ方右大將参り給へり。句此方にを」とて、打解けながら對面し給へり。薰惱

ましけにおはしますと侍りつれば、宮にもいと覺束なく思召してなむ。如何やう

なる御惱にか」と聞え給ふ。見るからに、御心騒のいと勝れば、言少にて、聖

だつと言ひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかり哀なる人をさて置きて、

心のどかに、月日を待ち侘びさすらむよ、と思す。例は、さしもあらぬ事の序に

だに、我はまめ人ともてなし名のり給ふを妬がり給ひて、萬に宣ひ破るを、かよ

る事見顯はいたるを、如何に宣はまし。されど、さやうの戯れ言もかけ給はず、

いと苦しけに見え給へば、驚いと不便なるわざかな。おどろくしからぬ御心地

(一) 其方を大津にし遊ぎ  
 (二) 恐る言ふ位なり  
 (三) 我を船よりは  
 (四) 其方も因縁と思へば詔  
 (五) 其方も因縁と思へば詔  
 (六) 其方も因縁と思へば詔  
 (七) 其方も因縁と思へば詔  
 (八) 其方も因縁と思へば詔  
 (九) 其方も因縁と思へば詔  
 (一〇) 其方も因縁と思へば詔  
 (一一) 其方も因縁と思へば詔  
 (一二) 其方も因縁と思へば詔  
 (一三) 其方も因縁と思へば詔  
 (一四) 其方も因縁と思へば詔  
 (一五) 其方も因縁と思へば詔  
 (一六) 其方も因縁と思へば詔  
 (一七) 其方も因縁と思へば詔  
 (一八) 其方も因縁と思へば詔  
 (一九) 其方も因縁と思へば詔  
 (二〇) 其方も因縁と思へば詔  
 (二一) 其方も因縁と思へば詔  
 (二二) 其方も因縁と思へば詔  
 (二三) 其方も因縁と思へば詔  
 (二四) 其方も因縁と思へば詔  
 (二五) 其方も因縁と思へば詔

につらしと思ひ聞ゆる事もあらむは、如何思さるべき。まろは御爲には疎なる人  
 かは。人もあり難しなど咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひ貶し給ふべか  
 めり。それも然るべきにこそはとことわらるよを、隔て給ふ御心の深きなむ、い  
 と心憂き」と宣ふにも、宿世の疎ならで、尋ね寄りたるぞかしと思し出づるに、涙  
 ぐまれぬ。まめやかなるをいとほしう、如何やうなる事を聞き給へるならむと驚  
 かるよに、答へ聞え給はむ事もなし。物はかなき様にて見そめ給ひしに、何事を  
 も軽らかに推し量り給ふにこそはあらめ、漫なる人をしるべにて、その心よせを  
 思ひ知りはじめなどしたる過ばかりに、覺え劣る身にこそ、と思しつどくるも  
 萬悲しくて、いとどらうたけなる御けはひなり。かの人見つけたる事は、しばし  
 知らせ奉らじと思せば、こと様に思はせて怨み給ふを、たゞこの大將の御事を  
 まめしくしく宣ふと思すに、人や空言を確なるやうに聞えたらむ、など思す。あ  
 りやなしやを聞かぬ間は、見え奉らむも恥かし。内裏より大宮の御文あるに、驚



(一) 匂が

(二) 中君が浮舟の事を隠し居たるも憎らしき故

(三) 遠慮のいぢぬ自分の室に

(四) 浮舟の戀しさが

(五) 中君方

(六) 中君の様

(七) 浮舟

(八) 我がいくら其方を愛して居ても我が死後には其方の心は直に變つて薫に靡くならん

(九) 人の一念といふものは必ずとはる物なれば、我が終に浮舟に遇ひしことを思ひていふ也

(一〇) 中君の心

(一一) 其様なげしからぬ御詞が薫の方へ聞えたらば中君が何を匂に言つたのかと竝に思はれるのが心外なり

(一二) つまらぬ冗談も

(一三) 自分が冗談でなく實際に其方をつらく思はば其方は何と思ふ

は、かゝる山踏はし給ひしかば、怪しかりける里の契かなとおほす。

二條院におはしまし著きて、女君のいと心憂かりし御物隠しもつらければ、心安

き方に大殿籠りぬるに、寝られ給はず、いと寂しきに、物思ひまされば、心弱く

對に渡り給ひぬ。回心もなく、いと清けにておはす。珍らしくをかしと見給ひし

人よりも、又これは猶あり難き様はし給へりかすと、見給ふものから、いとよく

似たるを思ひ出で給ふも、胸ふたがれば、痛く物思したる様にて、御帳に入りて

大殿籠る。女君も率て入り聞え給ひて、匂心地こそいと悪しけれ。如何ならむと

するにかと、心細くなむある。まろは、いみじく哀と見置い奉るとも、御有様

はいととく變りなむかし、人の本意は必ず叶ふなれば」と宣ふ。けしからぬ事を

も、まめやかにさへ宣ふかな、と思ひて、中君かう聞きにくき事の漏り聞えたら

ば、如何様に聞えなしたるにかと、人も思ひ寄り給はむこそあさましかれ。心憂

き身には、漫なる事も、いと苦しく」とて背き給へり。宮もまめだち給ひて、匂誠

(一一)

(一二)

(一) 浮舟を餘所へ連れ行くよし

(二) 「飽かざりし袖の中にや入りにけん我魂のなき心地する」

(三) 夜明けきらぬ中に歸ちんとて

(四) 浮舟を

(五) 涙さへ留めがたき我なればまして君を留むる事は叶はぬ

(六) 「しのゝめのほがらはがらと明けゆけば己がきぬくゝなるぞ悲しき」

(七) 取つて返しもすべき程

(八) 本氣になりて連れ歸らねばならぬと思ひて

(九) 大内記と時方

(一〇) 二人

(一一) 句が宇治通ひにのみ

にも人に知られ給ふまじき様にて、此處ならぬ所に率て離れ奉らむ」とぞ宣ふ。

今日さへかくて籠り居給ふべきならねば、出で給ひなむとするにも、「袖の中に」

ぞ留め給へらむかし。明け果てぬ前にと、人々しはぶき驚かし聞ゆ。妻戸に諸共

に率ておはして、え出でやり給はず。

句世に知らず惑ふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつよ

女も限なく哀と思ひけり。

浮舟涙をもほどなきそでにせきかねていかに別をとどむべき身ぞ

風の音もいと荒ましう、霜ふかき曉に、「己がきぬくゝ」も冷になりたる心地し

て、御馬に乗り給ふ程、引き返す様にあさましけれど、御供の人々、いと戯れに

くしと思ひて、たゞ急がしに急がし出づれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五

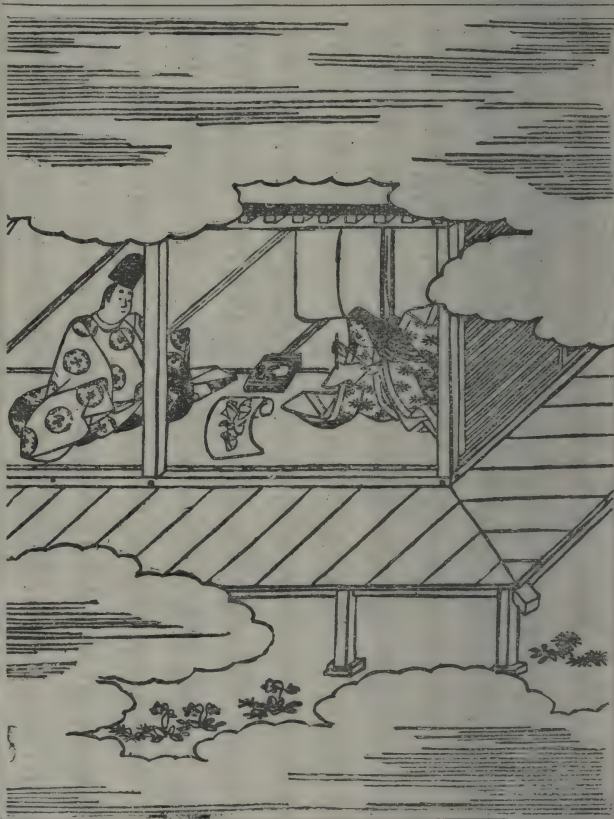
位二人なむ、御馬の口には侍ひける。さかしき山越え果ててぞ、おのく馬には

乗る。汀の氷を踏みならず馬の足音さへ、心細く物悲し。昔もこの道にのみこそ

(一) 僧に逢ひに行かれたり  
 (二) 何てもなきお伴の我  
 (三) 僧に逢ひに行つたといふ事に相手の名迄きめ  
 (四) 僧に逢はば罪滅しに  
 (五) どういふ御心持で此  
 (六) 前々から仰があつた  
 (七) 右近が句の處へ行き  
 (八) 憚るべき人目も憚る  
 (九) 我と菊とは親しかる  
 (一〇) 菊の女を盗む様な  
 (一一) 世間の譬にもいふ  
 (一二) 今度の浮舟を尋ね  
 (一三) 氣長すきて浮舟を待  
 (一四) 氣が其の分の缺  
 (一五) 氣がつかず浮舟を  
 (一六) 心配なり

と辛きと、いみじく申させ給ひけり。東山に聖御覽じにとなむ、人には物し侍り  
 つる」など語りて、時方「女こそ罪深うおはするものにはあれ。漫なる眷屬の人を  
 さへ惑はし給ひて、空言をさへせさせ給ふよ」と言へば、右近「聖の名をさへつけ  
 聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにて滅ほし給ふらむ。誠にいと  
 あやしき御心の、實にいかで習はせ給ひけむ。かねて斯うおはしますべしと承  
 らましにも、いと辱ければ、たばかり聞えさせてましものを、奥なき御ありき  
 にこそは」と、あつかひ聞ゆ。参りて然なむとまねび聞ゆれば、實に如何ならむと  
 思し遣るに、身所狭き身こそわびしけれ。輕らかなる程の殿上人などにて、しば  
 しあらばや。如何すべき、斯うつよむべき人目もえ憚りあふまじくなむ。大將も  
 如何に思はむとすらむ。然るべき程とは言ひながら、怪しきまで、昔より睦まじ  
 き中に、かよる心の隔の知られたらむ時、恥かしく、又如何にぞや、世の譬にい  
 ふ事もあれば、待遠なる我が怠をも知らず、怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢

浮舟





(一)色々と逢ふべき工夫をめぐらす間に

(二)いつそ此様に再び逢はねばよかつた

(三)定めなきが命だけであるならば男心の定めなきをかこつ事もなくてよかるべきに

(四)誰の心替りに懲りて其様な事を言ふぞと

(五)薰

(六)匂の心

(七)時方

(八)明石

(九)夕霧

(一〇)匂の出ありきを立腹して

(一一)夕霧の詞をまねていふ也

(一二)帝に聞かれても夕霧の越度になりて困る

いと斯う思ふこそ忌々しけれ。心に身をも更さらにえ任せず、萬よろづにたばかりむ程、誠まことに死ぬべくしなむ覺ゆる。つらかりし御有様を、なかく(二)何なにに尋ね出でけむ(三)など宣ふ。女、濡らし給へる筆を取りて、

浮舟心をばなげかざらまし命のみさだめなき世とおもはましかば(三)

とあるを、變らむをば怨めしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。匂(四)如何なる人の心こころがはりを見習ひて(五)など、ほよ笑みて、大將のこゝに渡しそめ給ひ

けむ程を、返すくゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりて、浮舟を言はぬ事を斯う宣ふ(六)こそと、打怨じたる様も若びたり。自らそれは聞き出でむと思すも(六)

のから、言はせまほしきぞ理なきや。

夜さり、京へ遣しつる大夫参りて、右近に逢ひたり。時方(七)后の宮よりも御使参り

て、左の大おと臣もむづかり聞えさせ給ひて、人に知れさせ給はぬ御ありきは、いと

軽々しも無禮けなる事もあるを、すべて内裏などに聞召さむ事も、身の爲なむい(九)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一) 浮舟が  
(二) 日の暮るゝを嫌がる  
句にひかれて

(三) 句が  
(四) 此處が不足と思はる  
る缺點なく

(五) 中君

(六) 六君に比べれば非常  
に劣るべき浮舟を

(七) 夢中になつて居る際  
故

(八) 句が遙に勝れて居る  
と思ふ

(九) 句が

(一〇) 浮舟の

(一一) 句に心が移るかも  
知れぬ

(一二) 逢ひたくても逢は  
れぬ時は

(一三) 行末かけて替らぬ  
約束はしても

例はくらし難くのみ、霞める山際を眺め侘び給ふに、暮れ行くは侘しくのみ思し

入らるゝ人にひかれ奉りて、いとはかなう暮れぬ。まぎるゝ事なくのどけき春

の日に、見れどもくあかず、その事ぞと覺ゆる限なく、愛敬つきなつかしけな

り。さるはかの對の御方には劣りたり。大殿の君の盛に匂ひ給へるあたりにては

こよなかるべき程の人を、類なく思さるゝ程なれば、また知らずをかしとのみ見

給ふ。女はまた、大將殿を、いと清けに、又かゝる人あらむやと見しかど、こま

やかに匂ひ、清らなる事は、こよなくおはしけりと見る。硯ひきよせて、手習な

どし給ふ。いとをかしけに書きすさび、繪などを見所多く畫き給へれば、若き心地

には、思ひも移りぬべし。匂心より外にえ見ざらむ程は、これを見給へよ」とて、

いとをかしけなる男女、諸共に添ひ臥したるかたを畫き給ひて、匂常に斯くて

あらばや」など宣ふも、涙おちぬ。

句「長き世をたのめてもなほ悲しきはたゞ明日知らぬ命なりけり

(一)句が

(二)下品な物腰

(三)石山詣は薫にかくし  
てせんとせし事なれば迎  
の來たるを薫に知らるゝ  
が恐しき也

(四)以下右近の心

(五)薫が此處に來て居ら  
るゝ由をいひて斷りたら  
ば、薫程の人の居るか居  
ぬかは京では何處でも分  
つて居るかも知れぬと思  
ひて

(六)侍女等にも相談せず

(七)浮舟が月の障になり  
て

(八)石山へ行かれぬが殘  
念なりと

(九)迎の人々に  
(一〇)何處にも出ぬ

す。他事は、いとをかしう氣近き様に答へ聞えなどして、靡きたるを、いと限な

うらうたしとのみ見給ふ。日高くなる程に、迎の人來たり。車一、馬なる人々の、

例の荒らかなる七八人、男ども多く、しなぐしからぬけはひ、囀りつゝ入り來

たれば、人々かたはらいたがりつゝ、「彼方に隠れよ」と言はせなです。右近、如

何にせむ、殿なむおはすると言ひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、

自ら聞き通ひて、かくれなき事もこそあれ、と思ひて、この人々にも殊に言ひ

あはせず、返事かく。

右近昨夜より穢れさせ給ひて、いと口惜しき事を思し歎くめりしに、今宵夢見さ

わがしく見えさせ給へれば、今日ばかり愼ませ給へとてなむ、物忌にて侍る。

返すくゝ口惜しく、物の妨のやうに見奉り侍る。

と書きて、人々に物など食はせて遣りつ。尼君にも、「今日は物忌にて、渡り給は

ぬ」と言はせたり。

(二〇)

- (一) 浮舟を
- (二) 侍女等も
- (三) 黨の居らるゝ上は浮舟は出かけられぬならん
- (四) 物忌と札に書きて懸につけておく也、人に知らせん爲也
- (五) 母北方の來らんことを恐れて妻見の思かりしを口實に母北方が來ても逢はせぬ用意をする也
- (六) 浮舟に
- (七) 器具などの調はぬを目ざましく匂が思ひて
- (八) 浮舟が洗はゞ我も洗はん
- (九) 浮舟は今迄黨を見なれて居たるに
- (一〇) 匂を見て
- (一一) 匂の如きを
- (一二) 浮舟の心
- (一三) 頼中君母北方など
- (一四) 此匂の一件が知れたらば
- (一五) 中君
- (一六) 匂が浮舟の素姓を知らぬを氣にかけて
- (一七) 浮舟がたとへ如何なる下賤の身なりとも

事なくて暮し給へ」と、大願をぞ立てける。

石山に今日詣でさせむとて、母君の迎ふるなりけり。この人々も皆精進し、清ま

はりてあるに、侍女さらば、今日はえ渡らせ給ふまじきなめりな。いと口惜しき

事」と言ふ。日高くなれば、格子などあけて、右近ぞ近く仕うまつりける。母屋の

簾は皆おろし渡して、物忌など書かせて附けたり。母君もや自らおはするとて、

夢見騒がしかりつと言ひなすなりけり。御手水など参りたる様は、例のやうなれ

ど、まかなひ目ざましう思されて、匂其所に洗はせ給はば」と宣ふ。女いと様よ

う心にくき人を見習ひたるに、時の間も見さらむは、死ぬべしと思し焦るゝ人を、

志深しとは、斯かるを言ふにやあらむと思ひ知らるゝにも、怪しかりける身か

な、誰も、物の聞えあらば、如何に思さむと、まづかの上の御心を思ひ出で聞ゆ

れど、知らぬを、匂返すくいと心憂し。猶あらむ儘に宣へ。いみじき下衆とい

ふとも、いよくなむ哀なるべき」と、理なう問ひ給へど、その御答は絶えて爲

(一)斯くく〜と句の仰も  
つたり

(二)色々右近に攻撃され  
るのが恐ろしき故句の仰  
なくとも歸るべし

(三)句の浮舟に對する御  
執心の深きを早居る故一  
生懸命で此處迄御供申し  
たりと也

(四)之を人に知らせぬ様  
に取計らふ譯にはゆかぬ

(五)驚

(六)昨夜御出の途中にて

(七)いつもの通り前拂も  
させず

(八)少しでも此様子を悟  
られたらば大變なるべし

(九)右近の心

(一〇)朝から使が來た

る事を聞えさする、山賤なども侍らましかば、如何ならまし」と言ふ。内記は實

にいと煩はしくもあるかなと思ひ立てり。右近「時方と仰せらるよは誰にか然なむ」

と傳ふ。笑ひて、時方「勸へ給ふ事どもの恐ろしければ、然らずとも逃けてまか

ぬべし。まめやかにはおろかならぬ御氣色を見奉れば、誰もく身を捨ててなむ。

よし〜宿直人も皆起きぬなり」とて、急ぎ出でぬ。右近「人に知らすまじうは

如何はたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、右近「殿はさる様ありて、

いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば、道にていみじき事のありけるなめり。

御衣どもなど、夜さり忍びて持て參るべくなむ、仰せられつる」など言ふ。御達

侍女「あなむくつけや。木幡山はいと恐ろしかなる山ぞかし。例の御前もおはせ

給はず、やつれておはしましけむよ。あないみじや」と言へば、右近「あなかまあな

かま。下衆などの塵ばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」と言ひ居たる、心

地おそろし。あやにくに殿の御使のあらむ時如何にいはむと、「初瀬の觀音、今日

(九) (一〇)

(一) 今日母北方より石山へ同行の爲迎の車の來べき筈なるが  
 (二) 句が一旦御歸りなされ  
 (三) 又ゆつくり御出ありてもよろしかるべし  
 (四) 老巧な言ひ方をする取と  
 (五) 人に誘られるのも構ふ氣にならぬ  
 (六) 迎が來たらば其返事に  
 (七) 我が此處へ來たる事を人に知られぬ様にせよ  
 (八) 浮舟の  
 (九) 大内記に  
 (一〇) 其では餘り見苦しかるべしと其方より句に申上げて下され  
 (一一) 句のあつかましく動かぬをいふ  
 (一二) 句が其様に思はれても御供の人の心得で取扱ふべきであらう  
 (一三) 句を案内せしぞ  
 (一四) 下々の者が何の思慮もなく句の昨夜の始末を言ひふらす事もあらば

れたりしも、かう遁れざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかは、と思ひ慰めて、右近今日御迎にと侍りしを、如何にせさせ給はむとする御事にか。斯う遁れ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍らむ方なし。折こそいとわりなく侍れ。なほ今日は出でおはしまして、御志侍らば、長閑にも」と聞ゆ。およずけても言ふかなと思して、尙我は月頃物思ひつるに、暮れ果てにければ、人のもどかむも言はむも知られず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身の事を思ひ憚らむ人の、斯かるありきは思ひ立ちなむや。御返には、今日は物忌など言へかし。人に知らるまじき事をば、誰が爲にも思へかし。他事はかひなし」と宣ひて、この人の、世に知らず哀に思さるよまよに、萬の譏も忘れ給ひぬべし。右近出でて、この音なふ人に、右近斯くなむ宣はするを、猶いとかたはならむとを申させ給へ。あさましう珍らかなる御有様は、さ思し召すとも、かよる御供の人どもの御心にこそあらめ。いかで斯う、心幼うは率て奉り給ひしぞ。無禮けな

(一)句が

(二)中君

(三)今更仕方もなければ

(四)なまじ逢ひて却て

(五)句が

(六)句の心

(七)何事も生きて居る間の事、戀ひ死なん後は何せん生ける身の爲こそ君を見まくほりすれ」の意

(八)句の家司出雲權守

(九)句は山寺に忍びて踊り居ると甘く調子を合せて置く

(一〇)右近が

(一一)自分の不注意より起りし昨夜の失錯を思ふに

(一二)以下右近の心

(一三)句に對して失禮也

頃思ひわたる様宣ふに、この宮と知りぬ。いよく恥かしく、かの上の思さむ事  
 など思ふに、又たけき事なければ、限なう泣く。宮もなかくにて、容易く逢ひ  
 見ざらむ事を思すに、泣き給ふ。  
 夜はたど明けに明く。御供の人來て聲づくる。右近聞きて參れり。出で給はむ心  
 地もなく、飽かずあはれなるに、又おはしまさむ事も難ければ、京には求め騒が  
 るとも、今日ばかりは斯くてあらむ。何事も生ける限の爲こそあれ、たど今出で  
 おはしまさむは、誠に死ぬべく思さるれば、この右近を召寄せて、匂いと心地な  
 しと思はれぬべけれど、今日はえ出づまじうなむある。男どもは、このわたり近  
 からむ所に、よく隠るへて侍へ、時方は京へものして、山寺に忍びてなむと、つ  
 きづきしからむ様に、答などせよ」と宣ふに、いとあさましくあきれて、心も無  
 かりける夜の過失を思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひ鎮めて、今は萬におほほれ  
 騒ぐとも、かひあらしものから、なめけなり、怪しかりし折に、いと深う思し入

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

(一四)

(一五)

(一) 我が來たりとて人を  
 おこすな  
 (二) 薫に  
 (三) 薫の  
 (四) 恐ろしき事に逢ひた  
 りと薫(實は匂)がいひた  
 るほどの實な事ぞと  
 (五) 右近も  
 (六) 薫に  
 (七) 匂が浮舟の寢所に  
 (八) いつもの所へ行つて  
 御やすみあれ  
 (九) 浮舟の近くに寢て居  
 し侍女等を起して  
 (一〇) 薫の來る時いつも  
 供人は尼の方には構はぬ事  
 になり居る故いよ人  
 違なるを惜らざる也  
 (一一) 今夜の薫の御出は  
 有難き御志かな  
 (一二) 浮舟が御分りにな  
 らぬのか  
 (一三) 浮舟  
 (一四) 人違ひ  
 (一五) 懼るべき二條院に  
 てさへ無理に手籠にせん  
 とせし程の匂の心なれば  
 (一六) 浮舟が初より人違  
 なることを知り居たらば  
 少しは拒む事も出来しな  
 らん  
 (一七) 二條院にて手籠に  
 せんとせし時の事

浮

舟

「我人に見すなよ。來たりとて、人驚かすな」と、いとらうくじき御心にて、も  
 とよりほのかに似たる御聲を、唯かの御けはひにまねびて入り給ふ。(四)ゆよしき事  
 の様と宣へる、如何なる御姿ならむといとほしくて、我も隠るへて見奉る。いと  
 細やかになよくと装束きて、香の芳しき事も劣らず。(六)近う寄りて、御衣ども脱  
 ぎ、馴れ顔に打臥し給へれば、右近例の御座にこそ「など言へど、物も宣はず。御  
 衾まるりて、寢つる人々起して、少し退きて皆寢ぬ。御供の人など、例の此處に  
 は知らぬならひにて、「哀なる夜のおはしましざまかな。かよる御有様を御覽じ知  
 らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、右近「あななま給へ。夜聲は、さよめくし  
 もぞ喧しき」など言ひつゝ寢ぬ。(二)女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、あさまし  
 ういみじけれど、聲をだにせさせ給はず、いとつゝましかりし所にてだに、わり  
 なかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。(二)初よりあらぬ人と知りたらば、聊い  
 ふかひもあるべきを、夢の心地するに、やうく、その折のつらかりしこと、年



(一)朝の内にてても  
 (二)母の處からの御迎の車は  
 (三)まとめて

(四)浮舟の後

(五)鶯の來れるかと

(六)思も寄らぬ時分に御出なされし事哉

(七)浮舟が物詣に出らるる由を立聞きせるを幸に鶯のまねをして間に合せをいふ也

(八)大藏太輔仲信、鶯の家司、大内記の舅  
 (九)鶯に

(一〇)右近が句とは思ひもよらず戸を開く  
 (一一)飛んでもない此姿のよく見えぬ様に

つとめての程にも、これは縫ひてむ。急がせ給ふとも、御車は日たけてぞあらむ」

と言ひて、しきしたる物どもとり具して、几帳に打ち懸けなどして、轉寢の様に

寄り臥しぬ。君も少し奥に入りて臥す。右近は北面に行きて、暫しありてぞ來た

る。君の跡近く臥しぬ。眠たしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を見給ひ

て、又せむ様もなければ、忍びやかにこの格子を叩き給ふ。右近聞きつけて、「誰

ぞ」と問ふ。聲づくり給へば、あてなる咳嗽と聞き知りて、殿のおはしたるにや

と思ひて、起きて出でたり。匂先これ開けよ」と宣へば、右近怪しう覺えなき程

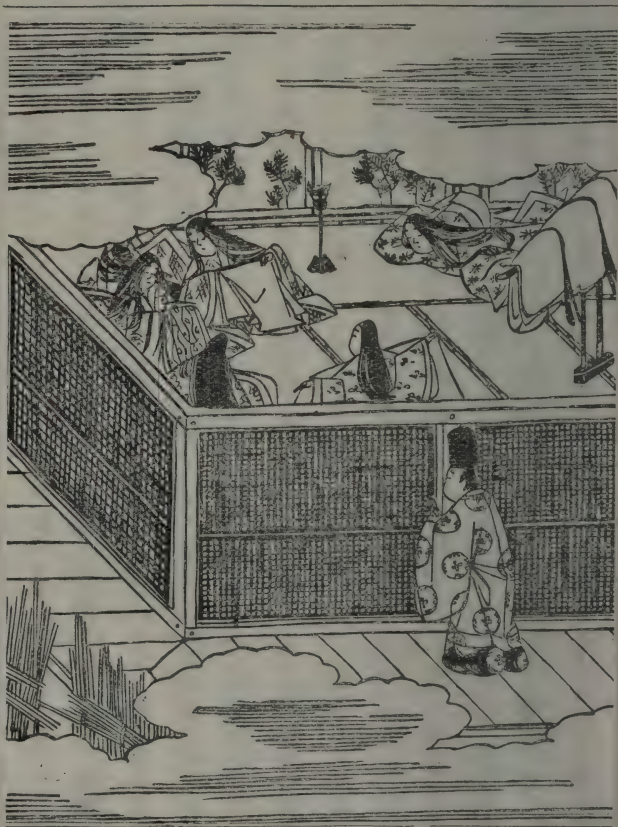
にも侍るかな。夜はいたう更けて侍らむものを」といふ。匂物へ渡り給ふべかな

りと、仲信が言ひつれば、驚かれつるまよに出で立ちて、いとこそ理なかりつれ。

まづ開けよ」と宣ふ聲、いとよまねび似せ給ひて、忍びたれば、思ひも寄らず

かい放つ。匂道にて、いとわりなく恐ろしき事のありつれば、怪しき姿になりて

なむ。火暗うなせ」と宣へば、右近「あないみじ」とあわて惑ひて、火は取りやりつ。



(一) 薫の眞實さへかはらずば浮舟の幸福も中君に劣るべからず  
 (二) 他人とならば比較してもよけれど中君の事は決して口に出さな

(三) 浮舟と中君とはどの位な親族關係の中ならん、匂の心

(四) 中君は

(五) 平凡で調はぬ處ある女であつても、あれ程熱心であつた女を見つけた際の今では其儘引込んで仕舞ふ事の出来ぬ匂の性質なるに

(六) 浮舟は物語に行くのぢやと見える、匂の心  
 (七) と言うて今夜の中にはどう仕様もなしと

(八) 匂が見つめ居るに

かしら人どものおはせで、御心のどかに、かしこうもてなして、おはしますにこそはあめれ」と言ふ。侍女「殿下にまめやかに思ひ聞え給ふ事變らずば、劣り聞え給ふべき事かは」と言ふを、君少し起きあがりて、浮舟「いと聞きにくき事。餘所の人にこそ、劣らじとも如何にも思はめ、かの御事なかけても言ひそ。漏り聞ゆる様もあらばかたはらいたからむ」など言ふ。何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかな、と、思ひ比ふるに、心恥かしけにあてなる所は、彼はいとこよなし。此はたどらうたけに細なる所ぞいとをかしき。よろしうなりあはぬ所を見つけたらむにてだに、さばかりゆかしと思ししめたる人をそれと見て、さて止み給ふべき御心ならねば、まして隈もなく見給ふに、いかでかこれを我が物にはなすべきと、わりなく思し惑ひぬ。物へ行くべきなめり、親はあるべし、いかで此處ならで又は尋ね逢ふべき、今宵の程にはまた如何すべき、と心も空になり給ひて、猶まもり給へば、右近、「いと眠し。昨夜も漫に起き明してき。

(一)京の母の家に泊らずに此處へ御歸りなされ

(二)京の住居は

(三)此儘何處へも行かず

(四)氣安く

(五)一體乳母が性急なる故俄に石山詣などの事を勤めたるならん

(六)物に辛抱して

(七)乳母を京へやらすに留めておくのであつた

(八)かの浮舟を手籠にせんとせし時付き居たりし乳母のありしを匂が思ひ出したる也

(九)中君

(一〇)夕霧

(一一)六君よりは中君の方がずつと匂に重んぜられて居る

(一二)浮舟の乳母の如きやかましき附人が無くて

へらむこそよからめ。輕々しう、いかでかは、音なくては這ひ隠れさせ給はむ。御

物詣の後は、やがて渡りおはしましたしねかし。かくて心細き様なれど、心に任せて、

安らかなる御住居にならひて、なかく旅心地すべしや」など言ふ。又あるは、

侍女「猶暫し斯くて待ち聞えさせ給はむぞ、のどやかに様よかるべきや。京へなど

迎へ奉らせ給へらむ後、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。このおとど

のいと急にもものし給ひて、俄に斯う聞えなし給ふなめりかし。昔も今も物念じ

して長閑なる人こそ、幸は見果て給ふなれ」など言ふなり。右近などで、このま

まを留め奉らずなりにけむ。老いぬる人は、むづかしき心のあるにこそ」と悪

むは、乳母やうの人を譏るなめり。實に憎き者ありかしと思し出づるも、夢の

心地ぞする。かたはらいたきまで、打解けたる事どもを言ひて、右近宮の上こそ

いとめでたき御幸なれ。左の大臣の、さばかりめでたき御勢にて、嚴しうの

のしり給ふなれど、若君生れ給ひて後は、こよなくぞおはしますなる。斯かるさ

(一) 匂が寢殿へ  
 (二) 細き竹にて編める簾  
 (三) こんな處へ誰も来て  
 覗く者もあるまじと油斷  
 して  
 (四) 上へ折返したる也、  
 是より匂が覗き居る中の  
 様子  
 (五) 二條院にて見し童な  
 り  
 (六) 一寸見たせいでさう  
 見えるのかと  
 (七) 浮舟は  
 (八) 中宮によく似て居る  
 (九) 縫物に折目をつける  
 とて  
 (一〇) 浮舟が御出かけな  
 されたらば、母に伴はれ  
 て明日石山へ詣づべき約  
 束也、此事下に見ゆ  
 (一一) 薫は  
 (一二) 宇治へ  
 (一三) 薫の御手紙には何  
 とありましたか  
 (一四) 丁度薫の來る時分  
 に留守にしては隠れた様  
 に見えて不都合也  
 (一五) 薫の來る前は、  
 石山詣に出られたりと薫  
 へ申上げて置くが宜しか  
 らん

れ奉る。やをら上りて、格子の隙あるを見つけて寄り給ふに、伊豫簾はさらさ  
 らと鳴るもつよまし。新しう清けに造りたれど、流石に荒々しくして隙ありけるを、  
 誰かは来て見むと打解けて、穴も塞がぬなるべし。几帳の帷子打ち懸けておし遣  
 りたり。火あかう燈して、物縫ふ人三人居たり。童のをかしけなる、糸をぞよ  
 る。これが顔、まづかの火影に見給ひしそれなり。うちつけ目かと、猶疑はしき  
 に、右近と名のりし若き人もあり。君は肘を枕にて、火をながめたるまみ、髮の  
 こほれかよりたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいとよう覺え  
 たり。この右近、物折るとて、右近かくて渡らせ給ひなば、とみにしもえ歸り渡  
 らせ給はじを、殿は、この司召のほど過して、朔日頃には必ずおはしましなむと、  
 昨日の御使も申しけり。御文にはいかど聞えさせ給へりけむ」と言へど、答もせず、  
 いと物思ひたる氣色なり。右近折しも這ひ隠れさせ給へる様ならむが、見苦しき  
 と言へば、向ひたる人、侍女それは、斯くなむ渡り給ひぬると、御消息聞えさせ給

(二五)

(一) 昔字治へ行きし時分の事を

(二) 以下句の心、我と一つ心になりて我を中君に手引してくれた薫に對して

(三) 九て人に知られずには歩くことは出来ぬ御身分なるに

(四) 以下句の心

(五) 折角其女を見て其が彼の女でなくてすごく歸つたらは

(六) 薫の家來

(七) 大内記が一人入りたる也

(八) 大内記も

(九) 句の待ち居る處へ

(一〇) 寢殿から

出で立ち給ふにつけても、古を思し出づ。あやしきまで心を合せつゝ率てありき

し人のために、後めたきわざにもあるかなと、思し出づる事も様々なるに、京の内だに、むげに人知らぬ御ありきは、然いへどもえし給はぬ御身にしも、怪しき

様のやつれ姿して、御馬にておはする心地も物恐ろしく、やゝましけれど、物の

ゆかしき方は、進みたる御心なれば、山深うなるまよに、いつしか、如何ならむ、

見合する事もなくて歸らむこそ、さうくしく怪しかるべけれ、と思すに、心も

さわぎ給ふ。法性寺の程までは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。

急ぎて、宵過ぐる程におはしましぬ。内記、案内よく知れるかの殿の人に、問ひ

聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣し籠めたる西面を、やをら少し

毀ちて入りぬ。我も流石に、まだ見ぬ御住居なれば、たどくしけれど、人繁う

などしあらねば、寢殿の南面にぞ、火ほの暗う見えて、そよくと音する。参

りて、内記まだ人は起きて侍るべし。たゞ是よりおはしまさむ」と案内して、入

(二)我が曾て一寸逢ひし  
事ある女が

(二)用心は

(三)御供の人だけには知  
ちるべき譯なり  
(四)むやみに出あるきて  
輕率なりといふ批難を蒙  
るのが

(五)言ひ出したれば

(六)五位の位を賜はりし

(七)今明日の間は菊が行  
く筈はなしと

らむ人は、早うほのかに見し人の、行方も知らずなりにしが、大將に尋ね取られ  
にけりと、聞き合する事こそあれ。確には知るべき様も無きを、唯物より覗きな  
どして、それかあらぬかと見定めむ、となむ思ふ。聊人に知らるまじき構は、如  
何すべき」と宣へば、あな煩はしと思へど、内駈おはしまさむ事は、いと荒き山  
越になむ侍れど、殊に程遠くは侍はずなむ。夕つ方出でさせおはしまして、亥子  
の時にはおはしまし著きなむ。さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむ事  
は、唯御供にさぶらひ侍らむこそは。それも、深き心はいかでか知り侍らむ」と  
申す。自然かし。昔も一度二度通ひし路なり。輕々しきもどきおひぬべきが、物  
の聞のつよましきなり」とて、返すぐあるまじき事に、我が御心にも思せど、斯  
うまで打出で給へつれば、え思ひ留め給はず。御供に、昔も彼所の案内知れりし  
者二三三人、この内記、さては御乳母子の藏人よりかうぶり得たる若き人、睦まじ  
き限を擇り給ひて、大將今日明日よもおはせじなど、内記に能く案内聞き給ひて、

(一)人よりは眞面目なりとて利口ぶる黨が却て人の思ひもつかぬ巧者な人に知れぬやり方をして居る

(二)大内記  
(三)黨方

(四)黨の  
(五)句の

(六)此黨の隠し女の果して浮舟なる事はどうして突留めやうぞ

(七)黨の

(八)中君とはどうして懸意を中ならん

(九)中君がぐるになりて

(十)大内記句官を宇治に導く、隙見、句官黨に假裝して浮舟に逢ふ  
(一〇)句が  
(一一)任官式  
(一二)句は  
(一三)句の胸氣に入らんと

心を留めたるとなむ聞きしは、斯かる事こそはありけれ。いづら、人よりはまめ

なりとさかしがかる人しも、ことに人の思ひ到るまじき隈ある構よ」と宣ひて、い

とをかしと思したり。この人は、かの殿にいと睦まじく仕う奉る家司の聲になむ

ありければ、隠し給ふ事も聞くなるべし。御心のうちには、如何にして、この人

を、見し人かとも見定めむ。かの君のさばかりにて居ゑたるは、なべてのよろし

き人にはあらじ。この邊には、いかで疎からぬにかあらむ。心をかはして隠し給

へりけるも、いと妬うおほゆ。

唯その事を、この頃は思ししみたり。賭弓、内宴など過して心のどかなるに、司

召など言ひて人の心盡すめる方は何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさむ事

をのみ思しめぐらす。この内記は、望む事ありて、晝夜いかで御心に入らむと思

ふ頃、例よりは懐しう召しつかひて、いと難き事なりとも、我が言はむ事はたば

かりてむや」など宣ふ。畏まりて侍ふ。いと便なき事なれど、かの宇治に住む



(一) 前々よりも

(二) 薫の憎からぬ人なるべし

(三) 薫の領地の者ども

(四) 薫の命によりて宇治の山莊へ奉公する

(五) 用事は辨じてやる

(六) 誰それとは

(七) 薫が  
(八) 浮舟は

(九) 薫がどういふ積て

(一〇) 薫の

(一一) 夕霧  
(一二) 薫の、以下夕霧の詞をまねていふ也

(一三) 我も夕霧の言を聞きて、成程なげあの様に

佛いじりにかゝつて居るのか、矢張戀人の故郷が戀しいのであらうと思ひ居しが

頃ころよりは、ありしよりも屢しばしば物し給ふなり。下しもの人々の忍しのびて申まうしよは、女をんなをな

む隠かくし居すゑさせ給へる、けしうはあらず思おもす人なるべし、あのわたりらうに領らうじ給ふ

所ところ々の人、皆みな仰おほにて参まゐり仕つかう奉まつる、宿直さどちにさしあてなどしつと、京きやうよりもいと忍しの

びて、さるべき事ことなどはせさせ給ふ、如何いかなる幸さい人の、流石まさに心細こころほそくて居ゐ給へ

るならむ、となむ、唯ただこの十二月しはすの頃ころほひ申まうすと聞き給へし」と聞きゆ。いと嬉うれしく

も聞ききつるかなと思おもほして、匂たしかにその人ひととは言いはずや。彼所かしこにもとよりある尼あま

をぞ訪せまひ給ふと聞きし」内記あまに廊らうになむ住すみ侍はべるなる。この人ひとは今建いまたてられ

たるになむ、きたなけなき女房にようぼうなども數多あまたして、口惜くちをしからぬけはひにて居ゐて侍はべ

る」と聞きゆ。匂たしかをかき事ことかな。何心なにこころありて、如何いかなる人ひとをかは、さて居すゑ給ひつ

らむ。猶なほいと氣色けしきありて、なべての人ひとに似にぬ御心みこころなりや。左ひだりの大臣おとぎなど、この人ひと

のあまり道心だうしんに進すすみて、山寺やまでらに夜よるさへともすれば泊よまり給ふなる輕々かろくしさ、ともど

き給ふと聞きしを、實じつに、などかさしも佛ほつの道みちには忍しのび歩ありくらむ、猶なほかの故郷ふるさとに

- (一) 出過ぎ者なり
- (二) 人は生長の後が思はるゝ様に小きうちは大様なのがよい
- (三) 叱るな
- (四) 此童の素姓を説明する也
- (五) 句宮大内記に浮舟の隠れ家を書く
- (六) 句が
- (七) 句の心
- (八) いくら戀人の形見てもあの様な處に泊るとは餘りなる事と思ひしに扱はあの女を隠し置けるなちんと
- (九) 蕪方に

(一〇) 詩集

- (一一) 行つて見たいものぢや
- (一二) 念佛堂
- (一三) 作り方を指圖せられたりと

し過して侍り。おひさき見えて、人はおほどかなるこそをかしけれ」など憎めば、  
 (二) 中君「あなかま。幼き人な腹だてそ」と宣ふ。去年の冬人の參らせたる童の、顔はい  
 (三) と美しかりければ、宮もいとらうたくせさせ給ふなりけり。

わ 我が御方におはしまして、怪しうもあるかな、宇治に大將の通ひ給ふことは、年  
 (五) 頃絶えずと聞く中にも、忍びて夜泊り給ふ時もありと人の言ひしを、いと餘りな  
 (六) る人の形見とて、さるまじき所に、旅寢し給ふらむ事と思ひつるは、かやうの人  
 (七) 隠し置き給へるなるべしと、思し得る事もありて、御文のことにつけて遣ひ給ふ  
 (八)

大内記なる人の、かの殿に親しき便あるを思し出でて、御前に召す。參れり。韻  
 (九) 塞すべきに、集ども選り出でて、此方なる厨子に積むべき事など宣はせて、句右  
 (一〇) 大將の宇治へいますること、猶絶え果てずや。寺をこそ、いとかしこく造りた

なれ。いかでか見るべき」と宣へば、内記「いと畏く嚴しく造られて、不斷の三昧  
 (二) 堂など、いと尊くおきてられたりとなむ聞き給ふる。通ひ給ふことは、去年の秋  
 (三)

なシと、細々と、言忌もえしあへず、物歎かしけなる様の、頑しけなるも、打返

し打返し、あやしと御覽じて、匂今は宣へかし。誰がぞと宣へば、中君昔かの

山里にありける人の女の、さる様ありて、この頃彼所にあるとなむ聞き侍りし

と聞え給へば、おしなべて仕う奉るとは見えぬ文がきをと、心得給ふに、かの煩

はしき事とあるに思しあはせつ。卵槌をかしう、徒然なりける人のしわざと見え

たり。またぶりに、山橘つくりてつらぬき添へたる枝に、

浮舟まだ古りぬものにはあれど君がため深きころにまつと知らなむ

と、殊なる事なきを、かの思ひわたる人のにやと思し寄りぬるに、御目とまりて、

匂返事し給へ。情なし。隠い給ふべき文にもあらざしめるを、など御氣色のあし

き。まかりなむよ」とて立ち給ひぬ。女君、少將などして、中君いとほしくもあ

りつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかでか見ざりつるぞ」など、忍びて宣

ふ。少將見給へましかば、いかでかは參らせまし。すべてこの子は、心地なうさ

(一) 宇治に  
(二) 一通りの奉公人の文とは見えぬ文體なるにと思ひて  
(三) 右近の文の中にいやな事がある故中君方へ行くことを浮舟が厭ふとあるに照し合せて浮舟なる事を悟れり  
(四) 二股にかりたる枝  
(五) 此木はまだ古くならぬ若木なれど若君の爲に千年を待つ木なりと知り給へ、まだふりぬ未古りぬ、またぶりに  
(六) 我が日頃慕ひ居る浮舟の歌かと  
(七) 自分は引下るべし  
(八) 私が見附けたら御前へ出す筈はなし  
(九) 文を取次ぎたる童

(八) 私が見附けたら御前へ出す筈はなし  
(九) 文を取次ぎたる童



(一)御疎遠にて

(二)如何はしき品なれど  
進上する

(三)目をつけて

(四)中君御一身にとりて  
も

(五)浮舟の宇治に居らる  
るは結構なれど猶不相應  
に思はる

(六)中君方へ浮舟が

(七)浮舟は

(八)中君方へ行く事を

(九)正月初卯の日の祝  
物、木にて造りたる小き  
槌、邪氣を避くる效あり  
といふ

(一〇)匂宮の御覽なされ  
ぬ時に

給はむとする」と宣へば、中君見苦しう、何かは、その女どちの中に書き通はし  
たらむ打解け文をば、御覽せむ」と宣ふが、さわがぬ氣色なれば、匂さば見むよ。  
女の文がきは、如何ある」とて開け給へれば、いと若やかなる手にて、

浮舟覺束なくて年も暮れ侍りにける。山里のいふせさこそ、峰の霞も絶間なくて。  
とて、端に、「これ若君の御前に、あやしう侍るめれど」と書きたり。殊にらうぐ

じき節も見えねど覺なきを御目たてて、この立文を見給へば、實に女の手にて、

右近年改りて何事かさふらふ。御私にも、いかに頼もしき御悦多く侍らむ。

こゝには、いとめでたき御住居の心深きを、猶ふさはしからず見奉る。斯く

てのみつくくくと眺めさせ給ふよりは、時々は渡り参らせ給ひて、御心も慰

めさせ給へと思ひ侍るに、つよましく恐ろしきものに思し懲りてなむ、物憂

き事に歎かせ給ふめる。若君の御前にとて、卯槌参らせ給ふ。おほきおまへ

の御覽せざらむ程に、御覽せさせ給へとて、

(九) (一〇)

(八)

(一) 中君が

(二) 匂宮中君の處にて浮舟の文を見る

(三) 匂が中君方へ

(四) 中君

(五) 使が

(六) 宇治からの文なれば

例の如く中君に御目にかけるが宜しからんとて

(七) 銅線にて造りて

(八) 齋が何くはぬ顔てよこしたのかも知れぬ、宇治からといふもそれらしく思はれる  
(九) 齋のであつたら始末がわるいと  
(一〇) 極り悪ければ

人に勝りてもてなし給へば、ありしよりは少し物思ひ静まりて過し給ふ。

正月の一日過ぎたる頃渡り給ひて、若君の御年まさり給へるを、弄びうつくしみ

給ふ晝つ方、ちひさき童、緑の薄様なるつよみ文の大きやかなるに、小き鬚籠を

小松につけたる、又すぐくしき立文とり添へて、奥なく走り參る。女君に奉

れば、宮、匂それは何處よりぞ」と宣へば、齋「宇治より大輔のおとどにとて、も

てわづらひ侍りつるを、例の御前にてぞ御覽せむとて、取り侍りぬる」と言ふも、

いとあわたどしき氣色にて、齋「この籠は、金を造りて、色どりたる籠なりけり。

松もいとよう似て造りたる枝ぞよ」とて、笑みて言ひつゞくれば、宮も笑ひ給ひ

て、匂いで我ももてはやしてむ」と召すを、女君、いとかたはらいたく思ひして、

中君「文は大輔がり遣れ」と宣ふ御顔の赤みたれば、宮、大將のさりけなくしなし

たる文にや、宇治の名のりもつきぐし、と思し寄りて、この文を取り給ひつ。

流石にそれならむ時と思すに、いとまばゆければ、匂開けて見むよ。怨じやし

(一) 薫の仕方こそは、以下中君の心

(二) 薫が

(三) 匂

(四) 薫に背きて匂に縁をしを悔む也

(五) 大君

(六) なぞ斯く自分に心配をかける匂に靡きしならんと

(七) 薫に中君が

(八) 以下中君の心

(九) 身分卑しき者こそ此位な昔の縁を忘れず睦まじくもすれど、立派な方がどうしてあの様な並はづれたる附合をするならんかと

(一〇) 中君と薫との中を  
(一一) 中君が  
(一二) 薫は

(一三) 中君にとりて  
(一四) 中君以外の女には

(一五) 中君を

やう思し知り、人の有様を見聞き給ふまよに、これこそは誠に、昔を忘れぬ心な

がさの名残さへ、淺からぬ例なめれと、哀も少からず。ねびまさり給ふまよに、

人柄も世の覺も、様ことにもおし給へば、宮の御心のあまり頼もしけなき時々は、

思はずなりける宿世かな、故姫君の思しおきてし儘にもあらで、かく物思ひ憚るべ

き方にしもかより初めけむよと、思す折々多くなむ。されど對面し給ふ事は難し。

年月もあまり昔を隔て行き、内々の御心を深う知らぬ人は、なほくしきたど人

こそ、さばかりのゆかり尋ねたる睦をも忘れぬに、つきぐしけれ、なぞ斯う限

ある程に、例に違ひたる有様ぞ、など言ひ思はむもつよましなければ、宮の絶えず

おほし疑ひたるも、いよく苦しう思し憚り給ひつよ、自ら疎き様になり行く

を、さりとて絶えず、なほ同じ心の變り給はぬなりけり。宮もあだなる御本性

こそ、見ま憂き節も雜れ、若君のいと美しくおよすけ給ふまよに、外にはかよる

人も出で來まじきにやと、やむことなきものに思して、打解けなつかしき方には、

① 氣長なる黨、猶中君に對する情を忘れず

(一) 黨

(二) 宇治に居る浮舟が

(三) 「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」

(四) やがて甘くやる積、以下黨の心

(五) 浮舟を彼處に置くは元々宇治へ行きし時の慰めにと思ひてせし事故

(六) 宇治にて暇取るべき用事を拵へて

(七) 宇治に浮舟をおきて

(八) 浮舟の心を和らげ

(九) よい加減に目立たぬ様にするが一番

(一〇) 何時から浮舟に關係しはじめたるぞ杯と

(一一) 中君

(一二) 際立ちて宇治から京へ引取り

(一三) 氣長過ぎたる

(一四) 浮舟を引取るべき

(一五) 黨大納言になりたれば也

(一六) 中君

(一七) 中君が

かの人ひとは、たとしへなくのどかに思おもし掟おきてよ、待遠まちほなりと思おもふらむと、心苦こころぐるしう

のみ思おもひやり給たまひながら、所狭せうせまき身の程ほどを、さるべき序ついでなくて、かやすく通かよひ給

ふべき道みちならねば、神かみの諫いさむるよりも理わりなし。されど、今いまいとよくもてなさむと

す、山里やまざとの慰なぐさめと、思おもひおきてし心こころあるを、少すこし日數ひかずも經へぬべき事ことども作り出いで

て、のどやかに行ゆきても見みむ、さて、しばしは人ひとの知しるまじき住所すまじころして、やうや

うさる方かたに、かこころの心こころをものどめ置おき、我わが爲ためにも人ひとのもどきあるまじく、斜なめにて

こそよからめ、俄にはかに、何人なにびとぞ、何時いつよりなど、聞きき咎とがめられむも物騒ものさわがしく、初はじめ

の心こころに違たがふべし、又また宮みやの御方おんかたの聞きき思おもさむ事ことも、もとの所ところをきはくしう牽ひて離はな

れ、昔むかしをわすれ顔がほならむも、いと本意ほんいなし、など思おもししづむるも、例れいのいとことのど

けさ過すぎたる御心みこころがらなるべし。わたすべき所思せきおもし設まうけて、忍しのびてぞ造つくらせ給たまひ

ける。少すこし暇いさまなきやうにもなり給たまひにたれど、宮みやの御方おんかたには、猶なほたゆみなく心寄こころよ

せ仕つかう奉まつり給たまふこと同おなじ様やうなり。見奉みたまつる人も怪あやしきまで思おもへれど、世よの中なかをやう



(一)句が中君を  
 (二)舟浮の身分を句に明  
 さんかと中君が思へど  
 (三)薫が浮舟を重々しく  
 取扱ひもせねど、以下中  
 君の心

(四)薫の  
 (五)句に語るも  
 (六)聞きばなしにして手  
 を出さずに居る句の性質  
 ならず

(七)句方の侍女に對して  
 (八)どこ迄も附り廻して  
 本望を遂げる

(九)浮舟をいふ  
 (一〇)薫の爲にも浮舟の  
 爲にも

(一一)其が爲に思ひ止ま  
 る句の性質ならねば  
 (一二)浮舟が句の手に入  
 る様にならば我は姉妹だ  
 けに一層見つともなき感  
 がするなるべし

(一三)自分の過から事を  
 惹起す様の事はせじ  
 (一四)浮舟の事を明さず  
 (一五)甘くつくり事をし  
 てごまかす事は出来ぬ故  
 (一六)何も言はずに嫉妬  
 する

憎し給ひけり。句思はずに心憂し」と。はづかしめ怨み聞え給ふ折々は、いと苦  
 しくて、ありの儘にや聞えてまじと思せど、やむごとなき様にはもてなし給はざん  
 なれど、淺はかならぬ方に、心留めて人の隠し置き給へる人を、物言ひさがなく  
 聞え出でたらむにも、さて聞き過し給ふべき御心様にもあらざんめり、侍ふ人の  
 中にも、ほかなう物をも宣ひ觸れむと思し立ちぬる限は、さるまじき里までも尋  
 ねさせ給ふ、御様よからぬ御本性なるに、さばかり月日を経て、思し染むめるあ  
 たりは、まして必ず見苦しき事取り出で給ひてむ、外より傳へ聞き給はむは如何  
 はせむ、何方ざまにもいとほしくこそはありとも、防ぐべき人の御心様ならねば、  
 餘所の人よりは聞きにくよなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても、我がおこた  
 りにてはもて損はじ、と思ひかへし給ひつゝ、いとほしながらもえ聞え出で給  
 はず、こと様につきくしくはを言ひなし給はねば、おしこめて物怨じしたる、  
 世の常の人になりてぞおはしける。

憎し給ひけり。句思はずに心憂し」と。はづかしめ怨み聞え給ふ折々は、いと苦  
 しくて、ありの儘にや聞えてまじと思せど、やむごとなき様にはもてなし給はざん  
 なれど、淺はかならぬ方に、心留めて人の隠し置き給へる人を、物言ひさがなく  
 聞え出でたらむにも、さて聞き過し給ふべき御心様にもあらざんめり、侍ふ人の  
 中にも、ほかなう物をも宣ひ觸れむと思し立ちぬる限は、さるまじき里までも尋  
 ねさせ給ふ、御様よからぬ御本性なるに、さばかり月日を経て、思し染むめるあ  
 たりは、まして必ず見苦しき事取り出で給ひてむ、外より傳へ聞き給はむは如何  
 はせむ、何方ざまにもいとほしくこそはありとも、防ぐべき人の御心様ならねば、  
 餘所の人よりは聞きにくよなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても、我がおこた  
 りにてはもて損はじ、と思ひかへし給ひつゝ、いとほしながらもえ聞え出で給  
 はず、こと様につきくしくはを言ひなし給はねば、おしこめて物怨じしたる、  
 世の常の人になりてぞおはしける。

浮舟

梗 榩

① 句宮切に浮舟を思ふ。中君、浮舟の素姓を句宮に隠す。② 氣長なる黨、猶中君に對する情を忘れず。③ 句宮、中君の處にて浮舟の文を見る。④ 句宮、大内記に浮舟の隠れ家を聞く。⑤ 大内記、句宮を宇治に導く。⑥ 隙見、句宮、黨に假裝して浮舟に逢ふ。⑦ 黨、句宮を見舞ふ。⑧ 句宮の煩悶。⑨ 黨、宇治に行く。⑩ 浮舟の羞恥。⑪ 黨の愛情。⑫ 宮中の詩會。⑬ 句宮、雪中宇治に行く。夜、浮舟と共に宇治川を渡りて、大内記の所縁の家に宿す。⑭ 句宮、黨、各浮舟に文を贈る。浮舟の煩悶。⑮ 黨の浮舟を引取るべき準備。⑯ 句宮、黨の黨を出し抜きて浮舟を引取るべき準備。浮舟自殺を企つ。⑰ 黨、浮舟と句宮との關係を悟る。文を浮舟に贈りて秘密を知れる由をほのめかす。⑱ 秘密を知れる浮舟の侍女等の心配。黨、武士を遣して宇治の山莊を警衛せしむ。浮舟自殺を期して秘密の文を燒く。⑲ 句宮、又忍びて宇治に赴く。警固の嚴しきに妨げられず。⑳ 浮舟に逢はず。㉑ 浮舟自殺の念愈々切なり。句宮の文。母の文。

① 句宮切に浮舟を思ふ。中君、浮舟の素姓を句宮に隠す。  
 (一) 句が浮舟に逢ひし事を忘れず。  
 (二) 手重き身分の人ではなき様子なりしが、以下句の心。  
 (三) 中君。  
 (四) つまらぬ事の爲に。  
 (五) 女に關係した事にて中君を句が憎らしがる。

宮猶かの灰なりし夕を思し忘るゝ世なし。事々しき程にはあるまじけなりしを、  
 人柄のまめやかにをかしようもありしかなく、あだなる御心には、口惜しうて止み  
 にし事と、妬う思さるゝ儘に、女君をも斯うはかなき事ゆる、強にかよる筋の物

(一)班女が眞の成帝に寵を失ひて我身を秋の扇に比し詩を作りて愁みを述べたる故事を侍従は知らぬ故

(二)心の足らぬといふは此事なるべし

(三)謠ふべき事もあるべきに變な事を謠つたものかなと薫が思ふ

(四)薫が

(五)書きたるものをよく見んとすれば自ら餘所目には藥物に氣を取られて居る様に見ゆると也

(六)大君と浮舟と人はかはれども相手は同じ薫故昔が思はると也、前の薫の「宿り木と思ひ出でずば」の歌をうけてよめり

(七)宇治といふ里の名も月も昔にかはらねど、人のみは昔の大君は今の浮舟と替りたるよ

ひくあたりならに習ならひて、いとめでたく、思おもふやうなりと、侍従じじうも聞きき居ゐたりけり。さ  
るは扇あふぎいろの色も心こころおきつべき閨はやの古いにしへをば知しらねば、ひとへにめで聞きこゆるぞ、後おごれ  
たるな(二)めりかし。事ことこそあれ、怪あやしくも言いひつるかな、と思おぼす。尼君あまぎみの方かたより  
藥物くだものまるれり。箱はこの蓋ふたに、紅葉もみぢ蔦つたなど折をり敷しきて、故ゆゑなからず取とりませで、敷しき  
たる紙かみに、ふつよかに書かきたる物もの、隈くまなき月つきにふと見みゆれば、目めとどめ給たまふほど  
に、藥物くだものいそぎにぞ見みえける。  
(四)(五)

辨わやどり木きは色いろかはりぬる秋あきなれどむかしおほえて澄すめる月つきかな  
と古ふるめかしく書かきたるは、恥はづかしくも哀あはれにも思おもされて、  
(六)

裏きさきの名なもむかしながらに見みし人ひとのおもがはりせるねやの月つきかけ  
わざと返かへり事こととはなくて宣のたまふを、侍従じじうなむ傳つたへけるとぞ。  
(七)

- (一) 蕨が
- (二) 八宮も大君も在世の侍分
- (三) 浮舟が
- (四) 我が其方に對する愛情が濃かなるべし
- (五) 八宮
- (六) 蕨の如き他人でさへ
- (七) 其方はなせ其様な田舎にのみ居た事ぞ
- (八) 浮舟が
- (九) 大君が
- (一〇) 琴などは不調法なちぬ様に浮舟を仕込まんと蕨が思ひて
- (一一) 琴は少しは習ひし事ありや
- (一二) 吾妻琴也、東國育ち故東琴は習ひしならんと也
- (一三) 和歌さへよみつね私故況や東琴などは出来ぬ、東琴を大和琴ともいふ故大和歌さへ出来ぬといふ也
- (一四) 浮舟をむきても、蕨の心
- (一五) 蕨の愛が浅からぬなるべし
- (一六) 朗詠「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」
- (一七) 武事をのみ事とせる東國にそだちたる身に

て、いとなつかしくまさぐりつと眺め給ふに、月さし出でぬ。宮の御琴の音のお

どろおどろしくはあらで、いとをかしく哀に弾き給ひしはやと思し出でて、驚昔誰

も誰もおはせし世に、こよに生ひ出で給へらましかば、今少し哀は勝りなまし。

親王の御有様は、餘所の人だに哀に戀しくこそ思ひ出でられ給へ。などで、さる

所には年頃經給ひしぞ」と宣へば、いと恥かしくて、白き扇をまさぐりつと、そ

ひふしたるかたははらめ、いとくまなう白うて、なまめいたる額髪の隙など、いと

よく思ひ出でられて哀なり。まいてかやうの事もつきなからず教へなさばや、と

思して、驚これは少しほのめい給ひたりや。あはれ我がつまといふ琴は、さりと

も手ならし給ひけむ」など問ひ給ふ。浮舟「その大和詞だに、つきなく習ひにたれ

ば、ましてこれは」といふ。いとかたはに心後れたりとは見えす。こよに置きて

もえ思ふまよにも來さらむ事を思すが、今より苦しきは、斜には思さぬなるべし。

琴は押しやりて、驚楚王の臺の上の夜の琴の聲」と、誦じ給へるも、かの弓をのみ

(一) 薫が  
(二) 浮舟の

(三) 女二宮の

(四) 薫が

(五) さし當り浮舟をどう  
所置したものであらう、

以下薫の心

(六) 一廉の妻の資格で三  
條の邸に呼び取るも外聞  
如何なり

(七) 幾人も居る侍女のな  
みにして

(八) 八宮

(九) 浮舟の様

(一〇) むやみに

(一一) 薫が

(一二) 悪いにしても此の  
如き種類の不足は仔細な  
し、仕込みさへすればよ  
う譯也、以下薫の心

(一三) も轉嫁て

(一四) 品置く輕率では折  
角の身代も役に立たぬと  
(一五) 浮舟は音楽などは  
勿論不得手なちんと

(一六) 薫が

(一七) 薫の心

かしかりしのみ思ひ出でられて、髪かみのすそのをかしけさなどは、細々こまごまとあてなり。

宮みやの御髪みげしのいみじくめでたきにも劣おとるまじかりけりと見給みたまふ。かつはこの人ひとを如ごとく

何なににもてなして有あらせむとすらむ、只今ただいま、物々ものものしけにてかの宮みやに迎むかへするむも、音おと

聞便ききびんなかるべし、さりとは是これ彼かれある列つらにて、おほぞうに交まじらはせむは本意ほんいなから

む、しばし此處こゝに隠かくしてあらむと思おもふも、見みずばさうぐしかるべく、哀あはれにおほ

え給たまへば、疎おろかならず語かたらひ暮くらし給たまふ。故宮こみやの御事おんごも宣のたまひ出いでて、昔物ひかしもの語がたりをか

う細こまやかに言いひ戯たはぶれ給たまへど、唯ただいとつとましけにて、ひたみちに恥はぢたるを、さ

うさうしうおほす。あやまりても、斯かうも心こころもとなきはいとよし、教おしへつよも見み

てむ、田舎ゐなかびたるざれ心こころもてつけて、しなぐしからず、はやりかならましかば

しも、形代かたしろふ不用ようならましと思おもひ直なほし給たまふ。此處こゝにありける琴きん、箏きうの琴こころめ召いし出いでて、

かよる事はたましてえ爲せじかすと、口惜くちをしければ、ひとり調しらべて、宮亡みやうせ給たまひて

後のち、此處こゝにて斯かかる物ものにいと久ひさしう手觸てふれざりつかし、と珍めづらしく我われながら覺おぼえ

後のち、此處こゝにて斯かかる物ものにいと久ひさしう手觸てふれざりつかし、と珍めづらしく我われながら覺おぼえ



(一) 此處は假住居故特に  
 遠慮する必要もなしの  
 に、薰の心  
 (二) 食事

(三) 新築の寢殿の様子  
 (四) 山川の景色見衆ある  
 様に造りたるを

(五) 浮舟が  
 (六) 薰が我をどうするの  
 かと

(七) 調はぬ、浮舟の事を  
 かくして寺の見分に託し  
 たる也

(八) 宇治へ来て

(九) 女二宮

(一〇) 薰が

(一一) 浮舟の方へ

(一二) 浮舟が隠れる譯に  
 も行かざして

(一三) 浮舟の

(一四) 乳母杯が精々注意  
 して着襲ねさせたれど

(一五) 大君の

するを、わざと思ふべき住居にもあらぬを、用意こそ餘なれ、と見給ふ。御庄よ  
 り例の人々、騒がしきまで参り集る。女の御臺は、尼君の方より参る。道は繁か  
 りつれど、この有様はいと晴々し。河の氣色も山の色も、もてはやしたる造り様  
 を見出して、日頃のいぶせさ慰みぬる心地すれど、如何にもてない給はむとする  
 にかと、浮きて怪しう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。

薰まだなりあはぬ佛の御飾など見給へおきて、今日よろしき日なりければ、急  
 ぎ物し侍りて、みだり心地の惱ましきに、物忌なりけるを思う給へ出でてな  
 む、今日明日こよにて慎み侍るべき。

など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。

打解けたる御有様今少しをかしくて、入りおはしたるも恥かしけれど、もて隠す  
 べくもあらで居給へり。女の御装束など、色々によくと思ひてし襲ねたれど、少  
 し田舎びたる事もうち雜りてぞ、昔のいとなえばみたりし御姿の、あてになまめ

など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。

(一) 尼の  
(二) 薫も

(三) 浮舟が

(四) 浮舟を

(五) 浮舟が弱に顔を

(六) 大君の佛が

(七) 大君の代りとしては

どうかと案じられる

(八) 薫が大君を思ひ出し

たる也

(九) 「我戀は空しき空に

満ちぬらし思ひやれども

行く方もなし」

④ 薫浮舟を宇治に伴ふ

(一〇) 宇治に

(一一) 薫の心

(一二) 大君の

(一三) 薫が

(一四) 心遣ひして浮舟より

離れて居たり、浮舟に

對して遠慮せる也

(一五) 浮舟

(一六) 薫の

(一七) 遠慮して別の處にて

地す。忍びがたけなる鼻すよりを聞き給ひて、我も忍びやかに打ちかみ給ひて、

流石に如何思ふらむといとほしければ、驚あまたの年頃、この道を行きかふ度重

なるを思ふに、そこはかとなく物哀なるかな。少し起き上りて、この山の色も見

給へ。いと埋れたりや」と、強ひてかき起し給へば、をかしき程にさし隠して、つ

つましけに見出したるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあま

りおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。いといたう兒めいたるものから、用

意の浅からず物し給ひしはや、と猶行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬ

べかめり。

おはし著きて、あはれ亡き魂ややどりて見給ふらむ、誰によりて、かく漫に惑ひ

ありくものにもあらなくに、と思ひ續け給ひて、下りては少し心しらひて立ち去

り給へり。女は、母君の思ひ給はむ事など、いと歎かしけれど、艶なる様に心深

く哀に語らひ給ふに、思ひ慰めて下りぬ。尼君は此方に殊更におりて、廊にぞ寄



(一)一體なら大君の御供をしてこそ此様な場合に逢ふべき筈なりしに

(二)浮舟の輿入に

(三)尼が僧形にて同乗したるさへ快からぬに

(四)涙がちなる

(五)侍従の心を作者の註釋していふ也

(六)目前の浮舟を愛せぬ譯では無けれど

(七)大君の

(八)蕪の

(九)直衣の袖と下著の袖と

(一〇)車の外に

(一一)花色、蕪の直衣也

(一二)勾配の急なる所にて見つけて、かゝる處にて居直る故袖の濡れたるに氣のつきし也

(一三)浮舟を大君の形見

ぞと見るにつけても

(一四)侍従の心

(一五)今は得意の旅なるに

さし出でたる朝日影に、尼君はいとはしたなく覺ゆるにつけて、故姫君の御供に

こそ、かやうにても見奉りつべかりしか、在り經れば思ひかけぬ事をも見るかな、

と悲しう覺えて、つよむとすれど打擧みつよ泣くを、侍従はいと憎く、物のはじめ

に、かたち異にて乗り添ひたるをだに思ふに、何ぞ斯くいやめなると、憎く嗚呼

に思ふ。老いたる者は、漫に涙もろにあるものぞと、疎に打ち思ふなりけり。君

も、見る人は憎からねど、空の氣色につけても、來し方の戀しさ勝りて、山深く

入るまよに、霧立ちわたる心地し給ふ。打ち眺めて倚り居給へる、袖の重なりな

がら、長やかに出でたりけるが、川霧に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の花

の、おどろくしう移りたるを、おとしがけの高き所に見つけて、引き入れ給ふ。

蕪かたみぞと見るにつけてもあさぎりの所せきまでぬるよ袖かな

と心にもあらず獨言ち給ふを聞きて、いとど絞るばかり、尼君の袖も泣き濡らす

を、若き人、怪しう見苦しき世かな、心ゆく道に、いとむづかしき事添ひたる心

(一) 藪の  
 (二) 明日よりいよいよ九月の節に入らにて今日はまだ九月には非ずと辯解する也  
 (三) 今度は藪の浮舟をつれ行く御伴をして宇治へ行く事は御免蒙るべし  
 (四) 中君の手前もあれば  
 (五) 宇治へ  
 (六) 中君に浮舟の事を  
 (七) 藪が  
 (八) 中君へは跡で傍びてもすむ事ぞや  
 (九) 宇治へ浮舟をつれて行きても案内者がなくては取附處がない  
 (一〇) 浮舟の供に一人は行かでは叶はず  
 (一一) 浮舟  
 (一二) 侍従と尼と  
 (一三) 浮舟の供に立たず  
 (一四) 遠路故牛をかけ替ふる也  
 (一五) 侍従  
 (一六) 藪を  
 (一七) 浮舟  
 (一八) 車の屋根裏にある釣にかけて隔にしたる也

のづから思す様あらむ。後めたうな思ひ給ひそ。九月は明日こそ節分と聞きしか」  
 (二二) と言ひ慰む。今日は十三日なりけり。尼君、善此度はえ参らじ。宮の上聞し召さむ事もあるに、忍びて行きかへり侍らむも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、まだ  
 (二五) きにこの事を聞かせ奉らむも、心恥かしく覺え給ひて、藪それは後にも罪さり  
 (二六) 申し給ひてむ。彼處もしるべなくては、たづきなき所を」とせめて宣ふ。藪一人  
 (二九) 人や侍るべき」と宣へば、この君に添ひたる侍従と乗りぬ。乳母尼君のともなり  
 (二二) し童なども後れて、いと怪しき心地して居たり。  
 (二四) 近き程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。牛などひき替ふべき心設し給  
 (二四) へり。河原過ぎ法性寺のわたりおはしますに、夜は明けはてぬ。若き人はいとほ  
 (二六) のかに見奉りて、めで聞えて、漫に戀ひ奉るに、世の中のつよましさも覺えず。  
 (二七) 君ぞ、いとあさましきにも物も覺えて、うつぶし臥したるを、藪石高きわたりは苦  
 (二七) しきものを」とて、抱き給へり。羅の細長を、車の中に引き隔てたれば、花やかに

(一)此隔の遣戸をつくりたる大工が恨めしと也

(二)遣戸の中へ

(三)大君の身代りに浮舟をしたき趣などは語らず

(四)瀬が浮舟に

(五)浮舟の様子

(六)近づきて見ても別に見劣りもせず

(七)しまりのなき聲

(八)物質の呼び聲をいふ

(九)物質の様子をいふ、かねて見し彼の鬼の如き者どもが行くのおやわいと

(一〇)夜番せし人が

(一一)浮舟を車に

(一二)浮舟方の附人

(一三)九月は嫁娶を忌む月なれば也

(一四)瀬が今浮舟を連れ行くは案外の事なれど

いさよか開けたれば、(一)飛弾の工匠も怨めしき隔かな。かよる物の外には、まだ居習はず」と憂へ給ひて、如何し給ひけむ、入り給ひぬ。(二)かの人形の願も宣はで、唯、「覺なきものの間より見しより、漫に戀しきこと、然るべきにやあらむ、怪し

きまでぞ思ひ聞ゆる」とぞ語らひ給ふべき。(四)人の様いとらうたけにおほどきたれば、見劣もせず、いと哀とおほしけり。程もなう明けぬる心地するに、鳥などは

鳴かで、(六)大路近き所に、おほどれたる聲して、如何にとか聞きも知らぬ名のりを

して、打群れて行くなどぞ聞ゆる。かやうの朝ほらけに見れば、物戴きたる者の、

鬼のやうなるぞかしと聞き給ふも、かよる蓬のまる寢にならひ給はぬ心地にをか

しうもありけり。宿直人も門あけて出づる音す。各入りて臥しなどするを聞き

給ひて、人召して、車妻戸に寄せさせ給ふ。(一〇)かき抱きて乗せ給ひつ。誰もく、

あやしう、あへなき事を思ひ騒ぎて、「九月にもありけるを、心愛のわざや。如何

にしつる事ぞ」と歎けば、尼君もいとほしく、思の外なる事どもなれど、盤お

(一三)  
(一四)

東  
屋



(一) 初心らしく其様な事を  
するに及ばぬ

(二) 若い者同士で  
(三) さう直に上にてな  
るものではない上に

(四) 驚は

(五) 夜廻りをして

(六) 家の

(七) 崩れたる箇處

(八) 厭はしく

(九) 「苦しくも降り来る  
雨か三種が崎佐野の渡に  
家もあらなくに」

(一〇) 久しく待たせたる  
は妨ぐる人などありての  
事かと也、催馬樂東屋、東  
屋のまやのあまりの雨を  
そぎ我立ち濡れぬ此の戸  
開かせ」

(一一) 雨を

(一二) 此處に出入るは關  
東の田舎者ばかりなる由  
前に見えたり

(一三) 香に

(一四) 何と言ひぬけて驚  
を追ひかへす譯にもゆか  
ぬ故

(一五) 浮舟が驚に

(一六) 浮舟を

忍びて聞えめ、近き程なれば」といふ。驚初々しく、などでか然はあらむ。若き

御どち物聞え給はむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを、怪しきまで、心のど

かに物深うおはする君なれば、よも人の許なくて、打解け給はじ」などいふ程、雨

や降り來れば、空はいと暗し。宿直人の怪しき聲したる、夜行うちして、宿直人「家

の辰巳の隅の崩いと危し。この人の御車入るべくば、引き入れて御門さしてよ。

かよる人の供人こそ、心はうたてあれ」など言ひあへるも、むくくしく聞き習

はぬ心地し給ふ。驚佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、鄙びたる

簀子の端つ方に居給へり。

驚さしとむるむぐらやしけき東屋のあまりほどふる雨そよぎかな

と打拂ひ給へる追風、いとかたはなるまで、東の里人も驚きぬべし。

とざまかうざまに聞え免れむ方なければ、南の廂に御座引きつくろひて、入れ奉

る。心やすくも對面し給はぬを、これかれ押し出でたり。遺戸といふもの鎖して、

(一) 思ひ立ちて参りたり

(二) 黨

(三) 浮舟を忘れぬ様な口を窺がきかろくも

(四) 黨が

(五) 尼が黨の使なると思ひて

(六) 宇治の山莊の近處の黨の領地の支配人の名を言はせられたれば

(七) 尼が

(八) 黨が來たのぢやわいと

(九) 合點のゆかぬ

(一〇) 浮舟に申上げんとて來れる也

(一一) 尼をして浮舟に取次がしめたり

(一二) 浮舟の心

(一三) 母の方へ

の、怪しきまで宣はせしかば、思ひ給へおこしてなむ」と聞ゆ。君も乳母も、めでたしと見置き聞えてし人の御様なれば、忘れぬさまに宣ふらむも哀なれど、俄

にかく思したばかりらむとは思ひも寄らず。宵うち過ぐるほどに、宇治より人參

れりとて、門忍びやかに打叩く。然にやあらむと思へば、辨開けさせられたれば、車

をぞ引き入るなる。怪しと思ふに、鞆尼君に對面賜はらむ」とて、この近き御庄の

預りの、名のりをせさせ給へれば、戸口にるざり出でたり。雨少しうち濺ぐに、

風はいと冷に吹き入りて、言ひ知らず薰り來れば、斯うなりけりと、誰もく、

心ときめきしつべき御けはひをかしければ、用意も無くあやしきに、まだ思ひあ

へぬ程なれば、心さわぎて、「如何なる事にかあらむ」と言ひあへり。鞆心やすき

所にて、月頃思ひあまる事も聞えさせむとてなむ」と言はせ給へり。如何に聞ゆ

べき事にかと、君は苦しげに思ひて居給へれば、乳母見苦しがりて、乳母「然おは

しましたらむを、立ちながらやは返し奉り給はむ。かの殿にこそ、斯くなむと

(一)方々の氣をかねて女  
二を大事がらねばならぬ  
上に浮舟を懸するも

辨の尼浮舟を訪ふ、  
蕪浮舟を訪ふ

(二)尼に約束せし日の

(三)宇治へ

(四)尼の車に附添はせよ

(五)尼が迎の車に

(六)浮舟の家に  
(七)浮舟の家は

(八)浮舟が

(九)八宮

(一〇)浮舟に逢ひし後は

(一一)匂方

(一二)紫

へり。此方彼方とかしづき聞え給ふ宮仕に添へて、むづかしき私の心の添ひた  
るも、苦しかりけり。

宣のたまひしまだつとめて、むつまじく思おぼす下けらふ藤さぶらひひじりの侍一人、顔かほし知らぬ牛飼うしかひつくり出で

てつかはす。蕪御庄みさきうの者ものどもの、田舎ゐなかびたる召めし出でて、つけよ(四)と宣のたまふ。必ず

出いづべく宣のたまへりければ、いとつよましく苦くるしけれど、打ちうちけさうじつくるひて乗の

りぬ。野山のやまの氣色けしきを見るにつけても、古いにしへよりの故事ふるごとども思おもひ出でられて、眺ながめ暮くら

してなむ來き著つきける。いと徒然つれづれに人ひとめも見みえぬ所ところなれば、心こころやすく引ひき入れて、

かくなむ参まゐり來きつると、しるべの男をとこして言いはせられたれば、初瀬はつせの供ともにありし若人わかうぢ、

出いで來ておろす。怪あやしき所ところにながめ暮くらし明あかすに、昔むかし語かたまりもしつべき人ひとの來きたれば、

嬉うれしく呼よび入れ給たまひて、親おやと聞きえける人ひとの御おんあたりの人ひとと思おもふに、睦むつまじきなる

べし。尼あはれ君みこ哀あはれに人ひと知しれず見み奉たまりし後のちよりは、思おもひ出で聞きえさせぬ折をりなけれど、世よ

の中なかかばかり思おもう給たまへ捨すてたる身みにて、か(二二)の宮みやにだに参まゐり侍はべらぬを、この大將たいしやうぢ殿どの

- (一) 浮舟の今の居處を突留めておき給へ
- (二) 我を浮舟に逢はせても我は決して無暗な事はせぬと審明し置いてくれ
- (三) 尼の心
- (四) 薫の
- (五) 薫自身の爲にも外聞惡き舉動などは慎むならん
- (六) 浮舟の居處は薫の三條邸から近き處なり、豫め薫から文でもやつてもいて下され
- (七) さうでなければ私がわざと出かけて薫を私の了簡で浮舟に取持つ様で極が悪い、伊賀姥といふ女人の媒して誘られたらんといふ
- (八) 人が噂して
- (九) 常陸守
- (一〇) 女二宮に土産にしたらる也
- (一一) 薫の女二に對する態度、女二が妻になりたる甲斐がないといふ程ではなけれど
- (一二) 平人の娘を嫁らす様な態度で女三に女二の事を頼みある故
- (一三) 薫が女二を

と、例ならず強ひて、薫明後日ばかり車奉らむ。その旅の所尋ねおき給へ。(一)

め嗚呼がましく僻わざすまじうを」と、ほよ笑みて宣へば、煩はしく、いかに思す事ならむと思へど、奥なくあはくしからぬ御心ざまなれば、おのづから我が御爲にも、人聞などはつよみ給ふらむと思ひて、辨さらば承りぬ。近き程にこそ。御文などを見せさせ給へかし。ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれ侍らむも、今更に伊賀姥にやと、つよましくてなむ」と聞ゆ。薫文はやすかるべきを、人の物言ひうたてあるものなれば、右大將は、常陸守の女をなむよばふなるなども、とりなしてむをや。その守のぬし、いと荒々しけなめり」と宣へば、うち笑ひて、いとほしと思ふ。暗うなれば出で給ふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせ給ひて、宮に御覽せさせ給ふ。かひなからずおはしぬべけれど、畏り置きたる様にて、いたくも馴れ聞え給はずおんめる。内裏より、たゞの親めきて、入道の宮にも聞え給へば、いとやむごとなき方は、限なく思ひ聞え給



(一) 尼がよく話をままとめてくれ

(二) 以下母の文を詞とまねていふ也

(三) 浮舟が

(四) 宇治が近い處であつたら宇治へ浮舟をやりて置けば安心なれど

(五) 「荒ましき山道」といへるを受けていふ

(六) 今浮舟の居る隠れ家へ手紙をやつてくれ

(七) いつそ尼自身出かけて行かぬか

(八) 中君方

(九) 其様な事はない筈

(一〇) 人に評判されたら悪かるべけれど、知れさへせねば心配はいらぬ

(一一) 愛宕山の奥に籠りて世を捨て果てたる僧ても  
(一二) 京へは出でしと定めし決心を願へして  
(一三) 衆生済度の爲ならざして京に出でなごせば謗を受くる事もあらんと也

流石に初々しく覺えてこそ、音づれ寄らね。猶これより傳へ果て給へ」と宣へば、

辨「一日、かの母君の文侍りき。忌違ふとて、此處彼處になむあくがれ給ふめる、

この頃も、あやしき小家に隠るへものし給ふめるも、いと心苦しく、少し近き程

ならましかば、其處にもわたして心安かるべきを、荒ましき山道に、たはやすく

もえ思ひ立たでなむ、と侍りし」と聞ゆ。眞人々の斯く恐ろしくすめる道に、ま

ろこそ古りがたく分け來れ。何ばかりの契にかと思ふは哀になむ」とて、例の涙

ぐみ給へり。眞さらば、その心安からむ所に、消息し給へ。自らやは彼處に出で

給はぬ」と宣へば、辨「仰言を傳へ侍らむことは易し。今更に京を見侍らむ事は物

憂くて、宮にだにえ參らぬを」と聞ゆ。眞などてか。ともかくも人の聞き傳へば

こそあらめ。愛宕の聖だに、時に従ひては出でずやはありける。深き誓を破りて、

人の願を満て給はむこそ尊からめ」と宣へば、辨「人わたす事も侍らぬに、聞きに

くき事もこそ出でまうで來れ」と、苦しげに思ひたれど、眞猶よき折ななるを」

(一)取毀したるあとへ新に寢殿をつくりし也

(二)萬事簡單にして

(三)八宮をも

(四)舊の模様を改めたるをも

(五)佛を主にしたる飾附にて

(六)此處彼處趣一樣ならざりしを

(七)寢殿を作り改めたる堂の

(八)今度新に造りて

(九)尼が悲に堪へぬ様也

(一〇)尼が

(一一)浮舟は中君方に居る様に聞きたれども

はしましたり。久しう見給はざりつるに、山の紅葉も珍らしう覺ゆ。毀ちし寢殿(一一)

此度はいと晴々しう造りなしたり。昔いとこそぎて聖だち給へりし住居を思ひ(一二)

出づるに、故宮も戀しう覺え給ひて、様替へてけるも、口惜しきまで思さるれば、(一三)

常よりも眺め給ふ。もとありし御しつらひは、いと尊けにて、今片つかたを、女(一四)

しく細やかになど、一方ならざりしを、網代屏風、何かの荒々しきなどは、かの(一五)

御堂の僧坊の具に、殊更になさせ給へり。山里めきたる具どもを、殊更にせさせ(一六)

給ひて、いたうも事そがず、いと清けに故々しくしつらはれたり。遣水の邊なる(一七)

岩に居給ひて、頓にも立たれず。

黨 絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかけをだにとどめざりけむ

涙を拭ひつよ、辨の尼君の方に立ち寄り給へれば、いとかなしと見奉るに、唯ひ(一八)

そみにひそむ。長押にかりそめに居給ひて、簾のつまを引き上げて、物語し給ふ。(一九)

几帳に隠るへて居たり。事のついでに、鶯かの人形は、さいつ頃宮にと聞きしを、(二〇)

(二一)

(一) 此句誤脱あるべし、宣長翁は「母君いかにや」との誤なるべしといへり  
 (二) 母が心にかけて色々心配して下さるのに、浮舟の心  
 (三) 母の手紙の文句

(四) 此處がいつを世間を全く離れたる處ならば尚住み易くて嬉しかるべし  
 (五) 母が  
 (六) 浮舟を方向に迷ふ様な目にあはせる事よと  
 (七) 假令どんな處に置いてもよいから兎に角其方を出世させて見たし  
 (八) 平凡な歌を

○ 兼字治に行く、辨の尼に浮舟を媒せん事を頼む  
 (九) 竊  
 (一〇) 大君の事のみ思ひ出さるゝ故  
 (一一) 宇治へ

かりしも思ひ出でらる。  
 母君だつやと、いと哀けなる文をかきておこせ給ふ。  
 ならず心苦しう思ひあつかひ給ふめるに、かひなうもて扱はれ奉る事と、打泣かれて、「いかに徒然に、見習はぬ心地し給ふらむ。しばし忍び過し給へ」とある返事に、  
 (一) 母君だつやと、いと哀けなる文をかきておこせ給ふ。  
 (二) 扱はれ奉る事と、打泣

浮舟つれづれは何か。一心やすくてなむ。

ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所と思はましかば  
 (四)

幼げに言ひたるを見る儘に、ほろくと打泣きて、斯う惑はしはふるよ様にもて  
 (五) (六)

なす事と、いみじければ、

母うき世にはあらぬ所をもとめても君がさかりを見るよしもがな  
 (七)

となほくしき事どもを言ひかはしてなむ心をのべける。  
 (八)

かの大將殿は、例の秋深くなりゆく頃、慣ひにし事なれば、ねざめくに物忘れ  
 (九)

ず、哀れのみ覺えたまひければ、宇治の御堂つくり果てつと聞き給ふに、自らお  
 (一〇)

(一) 浮舟よりどの位勝りたる女ならば心を惹かされる事であらうか  
(二) 身分の高下に伴ひて容貌も心も高下のあるものと見える  
(三) 浮舟に

(四) 女二宮を妻にして居る黨に女二を見たりて浮舟を見られては

母北方かくれ家に文を贈りて浮舟を慰む  
(五) 浮舟の居る三條の家  
(六) 常陸守の所縁のものなれば也  
(七) 中君の  
(八) 無理な仕方せし匂宮の御様子も  
(九) 浮舟の心

なし見奉り給へらむ人は、今少し斜ならず、如何ばかりにてかは心を留め給はむ、世の人の有様を見聞くに、劣り勝り賤しう貴なる品に従ひて、容貌も心もあるべきものなりけり、我が子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少將を、この家の内に又なき者に思へども、宮に見比べ奉りしかば、いとも口惜しかりしに、推し量らる。當帝の御かしづき女を得奉り給へらむ人の御目移しには、いとも恥かしく、つよましがるべきものかな、と思ふに、漫に心地もあくがれにけり。

旅の宿は徒然にて、庭の草もいぶせき心地するに、あやしき東聲したる者どもばかりのみ出で入り、慰に見るべき前栽の花もなし。打ちあばれて、晴々しからで明し暮すに、宮の上の御有様思ひ出づるに、若い心地に戀しかりけり。生憎だち給へりし人の御けはひも、流石に思ひ出でられて、何事にかありけむ、いと多く哀けに宣ひしかな、名残をかしかりし御移香も、まだ残りたる心地して、恐ろし

(一)約束せし浮舟はあと  
 なしく待ち居たるに、君  
 はどうして妹の方に乗り  
 替へ給ひしぞ  
 (二)浮舟が八宮の御子な  
 ることを知りたらば妹に  
 心を移すではなかりしも  
 のを  
 (三)御目にかくりて申譯  
 がしたし  
 (四)八宮との關係を  
 (五)どうか浮舟を人並に  
 出世させたとしと、母の心  
 (六)薫  
 (七)北方の  
 (八)句も薫も、以下母の  
 心  
 (九)句の方は頭から断念  
 して居る故

(一〇)薫  
 (一一)浮舟を  
 (一二)知らぬ顔をして居  
 る所がすばらしい  
 (一三)薫の事が自分さへ  
 思ひ出されるから  
 (一四)浮舟は  
 (一五)少將を  
 (一六)よささうな計置は  
 かりを  
 (一七)立派な女を見馴れ  
 て居る薫は、以下母の心

北方しめゆひし小萩がうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ  
 (二)  
 とあるに、いとほしく覺えて、

少將みやぎ宮城野こはぎの小萩がもとと知らませばつゆも心をわかずぞあらまし

いかで自ら聞えさせあきらめむ」と言ひたり。故宮こみやの御事おんごじ聞きたるな、めりと思ふ  
 (三)

に、いとど、いかで人とひとしくとのみ、思ひ扱はる。あいなう大將殿たいしやうどのの御様容  
 (四)

貌ちぞ、戀こひしう面影おもかげに見ゆる。同じうめでたしと見奉りしかど、宮みやは思ひ離れて、  
 (七)

心こころもとまらず、悔りて押し入り給へりけるを思ふもねたし。この君は、流石きまがに尋  
 (八)

ねおほす心こころばへのありながら、うちつけにも言ひかけ給はず、つれなし顔がほなるし  
 (九)

もこそいたけれ、萬よろづにつけて思ひ出でらるれば、若き人わかひはまして、かくや思ひ出  
 (一〇)

で聞え給ふらむ、我がものにせむと、かく憎にくき人を思ひけむこそ、見苦みぐるしき事ことな  
 (一一)

るべかりけれ、など、唯心ただこころにかよりて、眺ながめのみせられて、とてやかかくてやと萬よろづに、  
 (一二)

善よからむあらまじごとを思ひ續つづくるに、いと難かたし。やむごとなき御身おんみの程御ほどおんもて  
 (一三)

(二六)

(二七)

東  
屋



なりたり  
 (一七)少將の様が  
 (一八)打解けた少將の様  
 は見た事がないから見て  
 やちんと北方が思ひて

(一)少將が  
 (二)少將の居る方へ北方  
 が行きて

(三)少將の體

(四)薄紅梅色

(五)何處に悪い處がある  
 と

(六)大人づくちらず

(七)中君が匂と並びて

(八)少將が  
 (九)匂の御前に居るを見  
 た時の様に

(一〇)匂の御前に居たり  
 しは此人では無かりしと  
 遠思はるる時、丁度下の  
 様な事を言つてぶちこは  
 したり

(一一)匂宮

(一二)自分が參つた時は  
 丁度匂宮御他出の際なり  
 しかば

(一三)「移るはん事だに  
 惜しき秋萩にみれるばか  
 りも置ける露哉」

(一四)浮舟の約束を變改  
 せし心の卑しさを思へば

(一五)匂の御前に出ての  
 見すほらしさは

にと思ひて、長閑に居給へる晝つ方、此方に渡りて物より覗く。白き綾のなつか

しけなるに、今様色の擣目なども清らなるを著て、端の方に前栽見るとて居たる

は、何處かは劣ると、いと清けなめるはと見ゆ。女まぐたいとかたなりに、何心

もなき様にて添ひ臥したり。宮の上の並びておはせし御様どもの思ひ出づれば、口

惜しの様どもやと見ゆ。前なる御達に物など言ひ戯れて、打解けたるは、いと見

しやうに、匂なく人わろけにも見えぬを、かの宮なりしは、こと少將なりけりと

思ふ折しも言ふ事よ。少將兵部卿の宮の萩の、猶殊に面白くもあるかな。いかで

さる種ありけむ。同じ枝ざしなどのいと艶なるこそ。一日參りて、出で給ふ程な

りしかば、え折らずなりにき。事だに惜しきと、宮のうち誦じ給へりしを、若き

人たちに見せたらましかば」とて、我も歌よみ居たり。北方いでや心ばせの程を思

へば、人とも覺えず、出消えはいとこよなかりけるに、何事言ひ居たるぞ」と啞

がるれど、いと心地なけなる様は流石にしたらねば、如何言ふと試に、

(一) 無分別ては無い女  
 (二) 北方の性質をいふ  
 (三) 常陸守の家にも浮舟を隠し置いて置けぬ事はなけれど  
 (四) 隠し置くを可愛想なるが故此様にしする事なるが  
 (五) 調はず  
 (六) 言ひ附けては置きたれども  
 (七) 常陸守に母北方少將を隠見す、歌を少將に贈る、浮舟をもてあます  
 (八) 聖の世話を  
 (九) 常陸守  
 (一〇) 北方が見つともなく夫と一緒に聖の世話をせぬと  
 (一一) 北方の心  
 (一二) 此聖故に句宮に浮舟が附廻はさるゝ機な事も出来たのぢやと  
 (一三) 大事に思ふ浮舟の身の上が此機を不都合な事になりし故  
 (一四) 一向少將の世話をせず  
 (一五) 句の御前で少將が一向つまらぬ者に見えしに居る故  
 (一六) 浮舟の聖にして自分一人のものにして少將を大事にするのであつたと残念がりし心はなく

東

屋

しく思はれ言はれむが、安からぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひの儘にぞ少しありける。かの家にも隠ろへてはするたりぬべけれど、しか隠ろへたらむをいとほしと思ひて斯く扱ふに、年頃傍去らず、旦暮見ならひて、互に心細くわりなしと思へり。北方此處は、まだ斯くあばれて、危けなる所なめり。さる心し給へ。曹司々々にある者どもも、召し出でて使ひ給へ。宿直人の事など言ひ置きて侍るも、いと後めたけれど、彼處に腹立ち怒みらるゝが、いと苦しければ」と、打泣きて歸る。

少將のあつかひを、守は又なきものに思ひ急ぎて、諸心に、様悪しく、營ますと怨ずるなりけり。いと心憂くこの人により斯かる紛どももあるぞかしと、またなく思ふ方の事のかよれば、つらく心憂くて、をさく見入れず。かの宮の御前にていと人けなく見えしに、多く思ひおとしてければ、私物に思ひかしづかましをなど、思ひし事は止みにたり。こよにては如何見ゆると、まだ打解けたる様見ぬ



(一)中君が  
(二)北方が

(三)浮舟一人を

(四)北方自身丈ならば  
(五)身分立派ならず

(六)卑しき身として引籠りてさへ居れば其てよし  
(七)中君方は浮舟が兄弟と認められざりし關係から一體は快からず思ひ居るにも拘はらず浮舟の爲と思ひて近づき寄れるに  
(八)此の今の住居を  
(九)浮舟

(一〇)浮舟の身を埋もれさずが惜しき故、どうかして無事に出世させて見たしと思ひ

意なきわざかなと思せど、え留め給はず。あさましようかたはなる事に、驚き騒ぎたれば、をさく物も聞えで出でぬ。  
(二)

かやうの方違所と思ひて、小き家設けたりけり。三條邊に、ざればみたるがま

だ作りさしたる所なれば、はかなくしきしつらひもせでなむありける。北方あは

れこの御身ひとつを、萬に持て惱みきこゆるかな。心に叶はぬ世には、有り經ま  
(三)

じきものにこそありけれ。自らばかりは、唯一向に、しなくしからず、人けな  
(四)

う、さる方に這ひ籠りて過しつべし。この御ゆかりは、心愛しと思ひ聞えしあた  
(五)

りを、睦び聞ゆるに、便なき事も出で來なば、いと人笑へなるべし。あぢきなしや。  
(六)

異様なりととも、こよを人にも知らせず忍びておはせよ。自らともかくも仕う奉り  
(七)

てむ」と言ひ置きて、自らは歸りなむとす。君は打泣きて、世にあらむ事所狭け  
(八)

なる身と、思ひ屈し給へる様、いと哀なり。親はた況て、あたらしく惜しければ、  
(九)

恙なくて思ふごと見なさむと思ひ、さるかたはらいたき事につけて、人にも淡々  
(一〇)

(一) 中君の  
 (二) 北方が中君は必ず怒り居るべしと期せし故恥かしくなりたる也  
 (三) 中君の心を計り兼ねたる故句の一件は北方が言ひ出さず  
 (四) 浮舟が  
 (五) 句の事をほのめかす也  
 (六) 本意の如く尼になして深き山に住ませたらば何時も不相變にて心配もなかるべきに  
 (七) 私が浮舟を構はずに置いたらば後めたくもあらべけれど  
 (八) 動もすればけしからん事をするよくない人が時々此處には來らるれども、句をいふ  
 (九) 浮舟の爲悪い様にはせじと  
 (一〇) 八宮に浮舟が子として説められざりし事は今更言はぬ  
 (一一) 自分と中君との親類關係をいふなるべし  
 (一二) 物忌の間をごたごたせぬ處で過させて

心恥かしけなる御まみを見るも、心の鬼に恥かしくぞ覺ゆる。如何に思すらむと思へば、えも打出で聞えず。北方、斯くて侍ひ給ふは、年頃の願の満つ心地して、人の漏り聞き侍らむも目安く、おもだたしき事になむ思ひ給ふるを、流石につまましき事になむ侍りける。深き山の本意は、みさをになむ侍るべきを」とて、打泣くもいといとほしくて、中君「こよには、何事が後めたく覺え給ふべき。とてもかくても、疎々しく思ひ放ち聞えばこそあらめ、怪しからずだちてよからぬ人の、時々ものし給ふめれど、その心を皆人見知りたしめれば、心づかひして、便なうはもてなし聞えじと思ふを、如何に推し量り給ふにか」と宣ふ。北方「更に御心をば隔ありても思ひ聞えさせ侍らず。かたはらいたう許なかりし筋は、何にかかけても聞えさせ侍らむ。その方ならでも、思し放つまじき綱も侍るをなむ、とらへ所に頼み聞えさする」など、疎ならず聞えて、北方「明日明後日かたき物忌に侍るを、おほぞうならぬ所にて過して、又も參らせ侍らむ」と聞えて誘ふ。いとほしく本

(一)まだ句とよい中になつた譯ではあるまじ  
 (二)右近を  
 (三)句とは關係のない様に言ひたり  
 (四)句  
 (五)或はわざとそんな事を言うたのかも知れぬ  
 (六)浮舟の様子の大様なりしを見て昨夜は無事に免れしものと思はる  
 (七)浮舟の乳母母北方に三條の別宅に隠さる  
 (八)句の事を話したる也  
 (九)北方の心  
 (一〇)中君も  
 (一一)嫉妬につきては貴人も卑しき者とかはらぬものなりと  
 (一二)二條院へ北方が  
 (一三)句宮  
 (一四)融の行きながら殿後を顧る如くとかる浮舟の事が気がかりなる故其方をのみ心配して外の子どもに不足を言はるゝと也  
 (一五)様子ありげな仰しやり様こそ  
 (一六)手をかざして日光を遮ることを、融が振りかへる時に然する故前の融の聲によりていふ也

かは。いとほし」と言へば、右近ぞ、「然もあらじ。かの御乳母の、引きすゑて、す  
 ずろに語りうれへし氣色、もて離れてぞ言ひし。宮も、逢ひても逢はぬやうなる  
 心ばへにこそ、打ちうそぶき口すさび給ひしか。いさや、殊更にもやあらむ。其  
 は知らずかし。昨夜の火影のいとおほどかなりしも、事あり顔には見え給はざり  
 しを」など、うちさよめきて、いとほしがる。  
 乳母車乞ひて、常陸殿へ往ぬ。北の方に斯うくといへば、胸つぶれ騒ぎて、人  
 もけしからぬ様に言ひ思ふらむ、正身もいかど思すべき、かゝる筋の物にくみは  
 貴人もなきものなりと、己が心ならひに、あわたどしく思ひなりて、夕つ方参り  
 ぬ。宮おはしまさねば心安くて、北方怪しく心幼けなる人を参らせ置きて、後  
 やすくは頼み聞えさせながら、融の侍らむやうなる心地のし侍れば、よからぬも  
 のどもに、憎み怨みられ侍る」と聞ゆ。中君いと然言ふばかりの幼けさにはあら  
 ざんめるを、後めたけに氣色ばみたる御まかけこそ、煩はしけれ」とて笑ひ給へる、

(二五)

(二六)

(二七)

(二八)

(二九)

(一)中君が  
(二)以下中君の心  
(三)浮舟の

(四)大方父に似たるならん  
(五)大君は父に似

(六)大君は、以下中君の心

(七)浮舟は  
(八)蕭の相手に不足はあ

るまじ  
(九)姉様形氣で

(一〇)浮舟を  
(一一)八宮の

様子  
(一二)八宮の心

(一三)昨夜の句の始末を  
知つて居る侍女等は

(一四)句と浮舟との中は  
どうなつたのであらう

(一五)浮舟の  
(一六)中君がどの様に浮

舟を世話やきても、既に  
句とあの様な事になつて

居てはやきがひもあらじ

繪はことに目も留め給はで、いと哀なる人の容貌かな、いかで斯うしも有りける  
(一)

にかあらむ、故宮にいとよく似奉りたるなめりかし、故姫君は宮の御方さまに、  
(二)

我は母上に似奉りたりとこそは、古人ども言ふなりしか、實に似たる人はいみじ  
(三)

きものなりけり、と思し比ぶるに、涙ぐみて見給ふ。彼は、限なくあてに氣高き  
(四)

ものから、なつかしうなよやかに、かたはなるまで、なよくと撓みたる様し給  
(五)

へりしにこそ、これは、まだもてなしの初々しげに、萬の事をつましようのみ思  
(六)

ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる、故々しきけはひだにもて附  
(七)

けたらば、大將の見給はむにも、更にかたはなるまじ、などこのかみ心に思ひ扱  
(八)

はれ給ふ。物語などし給ひて、曉方になりてぞ寢給ふ。傍に臥せ給ひて、故宮の  
(九)

御事ども、年頃おはせし御有様など、まほならねど語り給ふ。いとゆかしう見奉  
(一〇)

らずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。昨夜の心知りの人々は、侍女如  
(一一)

何なりつらむな。いとらうたけなる御様を、いみじう思すとも、かひあるべき事  
(一二)

(一)是程でもなき女をさへ珍らしきを好む句の御氣風なればと

(二)中君の前故浮舟が右近と少將とに恥ぢ隠れる事もせぬ故

(三)此邸を窮窟に思ひ給ふな

(四)大君

(五)大君に似たる浮舟の様子を見れば

(六)親身の人なき我を大君が我を思ひし様に浮舟が思ひくれたらば

(七)中君を我とは九でかけ離れたものゝ様に思ひ居しに

(八)中君が

(九)浮舟が中君にさし向ひて

(一〇)是所ぞといふ廻き所なく

(一一)大君が出て来た様に思はるゝ故

に思しつきなば、めざましけなる事はありなむかし、いと斯からぬをだに、珍らしき人、をかしうし給ふ御心を、と二人ばかりぞ、御前にてえ恥ぢあへ給はねば、見居たりける。物語いとなつかしくし給ひて、中君例ならずつよましき所など、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせすなり給ひし後、忘らるゝ世なくいみじく、身も怨めしく、類なき心地して過すに、いとよく思ひよそへられ給ふ御様を見れば、慰む心地して哀になむ。思ふ人もなき身に、昔の御志の様に思さば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つよましくて、また鄙びたる心に、答へ聞えむ事もなくて、浮舟「年頃いと遙にのみ思ひ聞えさせしに、かう見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にて言ふ。繪など取出でさせて、右近に詞讀ませて見給ふに、向ひて物恥もえしあへ給はず、心に入れ

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

(一) 思しつきなば、めざましけなる事はありなむかし、いと斯からぬをだに、珍らしき人、をかしうし給ふ御心を、と二人ばかりぞ、御前にてえ恥ぢあへ給はねば、見居たりける。物語いとなつかしくし給ひて、中君例ならずつよましき所など、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせすなり給ひし後、忘らるゝ世なくいみじく、身も怨めしく、類なき心地して過すに、いとよく思ひよそへられ給ふ御様を見れば、慰む心地して哀になむ。思ふ人もなき身に、昔の御志の様に思さば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つよましくて、また鄙びたる心に、答へ聞えむ事もなくて、浮舟「年頃いと遙にのみ思ひ聞えさせしに、かう見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にて言ふ。繪など取出でさせて、右近に詞讀ませて見給ふに、向ひて物恥もえしあへ給はず、心に入れ

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

て見給へる火影、更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしけなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかななるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、

(一) 浮舟  
(二) 行かずに居ては却て實際密通して仕舞つた様に思はるべければ

(三) 私か  
(四) 中君方

(五) 多少なりとも男を知り居る女ならば格別、おぼこ娘の浮舟なれば斯うなくてはならぬ譯と氣の毒

(六) 浮舟の様  
(七) 中君を無類の美人と思ひ居しに浮舟が之に比べて劣れりとは見えず、侍女等の心

(八) 浮舟に句が思ひ附きたらばとんでもない事が起るならん、侍女等の心

ておはする、細やかにをかしけなり。

この君は誠に心地も悪しくなりにたれど、乳母、「いとかたばらいたし、事しもあり顔に思すらむを、唯おほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有り様初より語り侍らむ」と、せめて唆し立てて、此方の障子のもとにて、乳母「右近の君に物聞えさせむ」と言へば、立ちて出でたれば、乳母「いと怪しく侍りつる事のなごりに、身もあつうなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふをいとほしく見侍る。御前にて慰め聞えさせ給へとてなむ。過もおはせぬ御身を、いとつつましげに思ほし侘びにたしめるも、いさよかにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかはと理にいとほしく見奉る」とて、引き起して参らせ奉る。我にもあらず、人の思ふらむ事も恥かしけれど、いと柔らかにおほどき過ぎ給へる君にて、押し出でられて居給へり。額髪などの、いたう濡れたるをもて隠して、燈の方に背き給へるさま、上を類なく見奉るに、氣劣るとも見えす、あてにをかし。

(一) 浮舟  
(二) 行かずに居ては却て實際密通して仕舞つた様に思はるべければ  
(三) 私か  
(四) 中君方  
(五) 多少なりとも男を知り居る女ならば格別、おぼこ娘の浮舟なれば斯うなくてはならぬ譯と氣の毒  
(六) 浮舟の様  
(七) 中君を無類の美人と思ひ居しに浮舟が之に比べて劣れりとは見えず、侍女等の心  
(八) 浮舟に句が思ひ附きたらばとんでもない事が起るならん、侍女等の心

- (一) 目くばせして
- (二) 中君が眞に密通した  
りと思はるゝならん
- (三) 以下中君の心
- (四) 薫が浮舟に執心の様  
に言はれしに、今夜の始  
末を薫に聞かせたらば如  
何に無分別な事と輕蔑す  
るならん
- (五) 匂をいふ
- (六) 實際なき事をも咎め  
立てし又實際不都合な事  
をも咎めぬ事もある
- (七) 驚は
- (八) 口には出さずに腹で  
けしからぬと思つて居る  
のが
- (九) つまらなく苦勞の多  
い浮舟の身の上
- (一〇) 今迄は見ず知らざ  
りし浮舟なれど
- (一一) 打棄て置き離く
- (一二) 渡りにくく
- (一三) 中君自身
- (一四) 浮舟の様につまら  
ぬ目にも逢ふべかりし身  
が、甘くさうならずに仕  
舞ひたればこそ見憎から  
ず世を送り居る譯なり
- (一五) 薫が自分への戀を  
諦めてくれたらば何も心  
配せず暮すべし

と聞え給へば、少將右近、目まじろきをして、かたはらいたくぞ思すらむ」と言ふも、唯なるよりはいとほし。いと口惜しく心苦しきわざかな、大將の心留めたる様に宣ふめりしを、如何に淡々しく思ひおとさむ、かくのみ亂りがはしくおはする人は、聞きにくく實ならぬ事をもくねり言ひ、又誠に少し思はずならむ事を、流石に見許しつべうこそおはすめれ、この君は、言はで憂しと思はむ事ぞ、いと恥かしけに心深きを、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり、年頃見ず知らざりつる人の上なれど、心ばへ容貌を見れば、え思ひ放つまじう、らうたく心苦しきに、世の中はあり難くむづかしけなるものかな、我が身の有様は、飽かぬ事多かる心地すれど、かく物はかなき目も見つべかりける身の、然ははふれずなりにけるにこそ、實に目安きなりけれ。今は唯この憎き心添ひ給へる人の、なだらかにて思ひ離れなば、更に何事も思ひ入れずなりなむ、と思ほす。いと多かる御髪なれば、頼にもえ乾しやらず、起き居給へるも苦し。白き御衣一襲ばかりに

- (一) 行きつけぬ身て
- (二) 長谷へ
- (三) 今迄は浮舟を毎りてのみありしに、此様に打て變つた身にもなるものかと人が思ふ程の
- (四) 氣樂らしく
- (五) 句
- (六) 此方の門が内裏への近道と見えて
- (七) 意味ふかき古歌
- (八) 浮舟の心に
- (九) 乗替の馬

- (一〇) 中君
- (一一) 中君
- (一二) 浮舟が
- (一三) 今夜の一條を知らぬ風にて
- (一四) 句が御歸りなさるまじ
- (一五) 髪を洗ひし故か
- (一六) 此方へ來給へ
- (一七) 暫らくして參上すべし

ならばぬ御身に、度々頻りて詣で給ふことは、人のかく侮り様にのみ思ひきこえ  
 (二) たるを、斯くもありけりと思ふばかりの、御幸おはしませとこそ念じ侍れば、我  
 (三) が君は人笑はれにては止み給ひなむや」と、世を安けに言ひ居たり。  
 (四) 宮は急ぎて出で給ふなり。内裏近き方にやあらむ、此方の御門より出で給へば、  
 (五) 物宣ふ御聲もきこゆ。いとあてに限もなく聞えて、心ばへある故事など打誦じ  
 (六) 給ひて過ぎ給ふほど、漫に煩はしく覺ゆ。うつし馬ども引き出して、宿直に侍ふ  
 (七) 人、十餘人ばかりして參り給ふ。  
 (八) 上、いとほしくうたて思ふらむとて、知らず顔にて、中宮、大宮惱み給ふとて參り  
 (九) (二〇) (二二) 給ひぬれば、今宵は出で給はじ。ゆするのなごりにや、心地も惱ましくて、起き  
 (一〇) 居侍るを、わたり給へ。徒然にも思さるらむ」と聞え給へり。浮舟「みだり心地の  
 (一一) (一五) いと苦しう侍るを、ためらひて」と、乳母して聞え給ふ。中宮「いかなる御心地ぞ」  
 (一二) (一六) と、立ち返り訪ひ聞え給へば、浮舟「何心地ともおほえ侍らず、唯いと苦しく侍り」



(一)下櫓の戀の様て  
(二)常陸守邸

(三)夫婦て

(四)常陸守の詞をまねて  
いふ也、浮舟にはかりか  
かつて居て

(五)内に花笠の居るに餘  
處へ泊りに行つて居る杯  
とは以ての外

(六)常陸守が言はれた  
(七)一體右近少將の仕方  
が不都合に思はれる

(八)内輪のもめは折々あ  
るにして

(九)浮舟

(一〇)中君が

(一一)浮舟は同じ孤兒て  
も母がある故よしと也

(一二)他人の氣受は

(一三)母君がどうにかな  
さるならん

(一四)浮舟は度々長谷に  
も詣でし也

たくつませ給へるこそ、直人の懸想だちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの  
(一)

殿には、今日もいみじくいさかひ給ひてけり。唯一所の御上を見あつかひ給ふと  
(二)

て、我が子どもをば思し捨てたり、客人のおはする程の御旅居見苦しと、荒々し  
(三)

きまでぞ聞え給ひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。すべてこの少將の君ぞ、  
(四)

いと愛敬なくおほえ給ふ。この御事侍らざらましかば、内々やすからずむづかし  
(五)

き事は折々侍りとも、なだらかに、年頃の儘にておはしますべきものを「など、打  
(六)

歎きつと言ふ。君は、たゞ今はともかくも思ひ廻らされず、唯いみじくはしたな  
(七)

く、見知らぬ目を見つるに添へても、如何に思すらむと思ふに、侘しければ、う  
(八)

つぶし伏して泣き給ふ。いと苦しと見あつかひて、乳母何かかく思す。母おはせ  
(九)

ぬ人こそ、たづきなう悲しかるべけれ。餘所の覺は、父なき人はいと口惜しけれ  
(一〇)

ど、さがなき繼母に憎まれむよりは、これはいと安し。ともかくもし、奉り給ひ  
(一一)

なむ。な思し屈せそ。さりととも長谷の觀音おはしませば、哀と思ひ聞え給はむ。  
(一二)

- (一) 使には
- (二) 中宮の
- (三) 句の心
- (四) 前に奥へ取次ぎたる
- 句方の侍も来て
- (五) 句の兄弟
- (六) 中宮大夫
- (七) 句が
- (八) 他人の手前も行かざ
- には居られなくなりて
- 浮舟の乳母浮舟を慰
- (九) 浮舟の心
- (一〇) 人の家に居るは
- (一一) 句が一度浮舟の處
- へ來だしては
- (一二) 相手がいくら貴人
- でも中君と姉妹であつて
- 見れば到底丸く納まる筈
- なればつまらぬ事なる
- べし
- (一三) 中君と無關係なる
- 男にこそ免に角嫁すべき
- である
- (一四) 魔を降す不動様の
- 様を恐ろしい顔をして句
- を睨みつけたれば
- (一五) 句が私の手をひど
- くつめりなされしこそ

句たれ誰か参りたる。例のおどろくしく脅すおびやかと宣のたまはすれば、有あや宮の侍きまらひに平たひらの  
 重しひつね經(二)となむ名なのり侍りつるはべと聞きゆ。出いで給たまはむ事ことのいとわりなく口惜くちをしきに、人ひと  
 目めも思おぼされぬに、右近うこんた立ち出いでて、この御使みつかひを西面にしおもてにて問まへば、申まうし次つぎつる人ひと  
 も寄より來きて、侍なかつかさ中務なむの宮まるも参まゐらせ給たまひぬ。大夫だいぶはたど今いまなむ、参まゐりつる道みちに、御み  
 車くるま引き出いづる見侍みはべりつ(五)と申まうせば、實ひに俄にやかに時々ときとく惱なやみ給たまふ折々せりくもあるをと思おぼすに、  
 人ひとの思おぼすらむ事こともはしたなくなりて、いみじう恨うらみ契ちぎり置おきて出いで給たまひぬ。  
 恐おそろしき夢ゆめの覺きめたる心地こちして、汗あせに押し浸ひたして臥ふし給たまへり。乳母めのごうちあふぎな  
(九)どして、乳母めのごかよる御住居おんすまひは、萬よろづにつけて、つよましよう便びんなかりけり。斯かくおは  
(二〇)しましそめて、更さらによき事侍はべらじ。あな恐おそろしや。限かぎりなき人と聞きゆとも、安やすから  
(二二)ぬ御有みあり様さまは、いと味氣あじきなかるべし。餘所よそのさし離はなれたらむ人ひとにこそ、善よしとも惡あ  
(二三)しとも覺おぼえられ給たまはめ。人聞ひときもかたはらいたき事ことと思おもう給たまへて、降魔がまの相さうを出いだ  
(二四)て、つと見奉みたまりつれば、いとむくつけく、下衆ひすく々々くしき女をんなと思おぼして、手てをいとい  
(二五)

(一) どうして浮舟の居るのをかぎ附けたるならんと  
 (二) 句のいつもの習慣をいふ也、上達部が多く来て遊び戯るゝ場合には  
 (三) 句が遅く中君の方へ行かると事もあはる故皆油断して居る

(四) 浮舟の側に

(五) 句を

(六) 明石

(七) 句に申上げん

(八) 申上げたりとも句が動くべくもなき事なれば  
 (九) 未だ眞實に打解けはせぬならんと

(一〇) 中君

(一一) 見つともなき句の性質

(一二) 中君をまでも嫌ふならんと

(一三) 右近が句の側へ行きて

人々も少し若やかによろしきは、見捨て給ふなく、怪しき人の御癖なれば、いか  
 でかは思ひ寄り給ひけむと、あさましきに、物も言はれ給はず。右近(二)上達部數多  
 参り給へる日にて、遊び戯れ給ひては、例もかよる時は遅くも渡り給へば、皆打  
 ち解けて休み給ふぞかし。さても如何にすべき事ぞ。かの乳母こそおすましかり  
 けれ。つと添ひ居てまもり奉り、引きもかなぐり奉りつべくこそ思ひたりつ  
 れ(四)と、少將と二人していとほしがる程に、内裏より人参りて、大宮この夕暮より  
 御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませおはします由申さす。右近(六)「心なき  
 折の御惱かな。聞えさせむ」とて立つ。少將「いでや、今はかひなくもあしべい事  
 を、をこがましく、あまりな脅し聞え給ひそ」と言へば、右近(七)「否まだしかるべし」  
 と、忍びてさよめき交すを、上は(八)いと聞きにくき人の御本性にこそあしめれ、少  
 し心あらむ人は、我があたりをさへ疎みぬべかめりと思す。参りて、御使の申す  
 よりも、今少しあわたどしけに申しなせば、動き給ふべき様にもあらぬ御氣色に、  
(九)  
(一〇)  
(一一)  
(一二)  
(一三)

(一)仕末に困つて

(二)又しても句の稠いた  
づらなるべしと

(三)右近が

(四)浮舟が承知でした事  
ではなささうなれば

(五)私には何とも申上げ  
かねる

(六)中君に密告すべし

(七)句の心

(八)浮舟が厭はしげに腹  
立ちたる風もせねど

(九)死ぬ程に恥かしく

(一〇)句が無理な事もせ  
ず柔らかにだます

(一一)中君に

(一二)浮舟が

(一三)浮舟の母も今夜の  
始末を聞かば

(一四)安心の出来る様に  
預りてくれよと

(一五)何と言ひ様もなし

(一六)侍女をも少し若く  
て濼皮のむけたるは遣ら  
ず逃さぬ句の癖故

ここにいと怪しき事の侍るに、見給へ困じてなむ、え動き侍らでなむ」右近「何事ぞ」

とて探り寄るに、袿姿なる男の、いと芳しくて添ひ臥し給へるを、例のけしか

らぬ御様と思ひ寄りにけり。女の心合せ給ふまじき事と推し量らるれば、右近「實

にいと見苦しき事にも侍るかな。右近は如何にか聞えさせむ。今参りて、御前に

こそは忍びて聞えさせめ」とて立つを、あさましくかたはに誰もく思へど、宮

は怖ぢ給はず。あさましきまで、あてにをかしき人かな、猶何人ならむ、右近が

言ひつる氣色も、いとおしなべての今参にはあらざしめり、と心得難く思されて、

と言ひかく言ひ怨み給ふ。心づきなけに氣色ばみてももてなさねど、唯いみじう

死ぬばかり思へるが、いとほしければ、情ありてこしらへ給ふ。右近、上に、右近云

云こそおはしませ。いとほしく如何に思ほすらむ」と聞ゆれば、中君例の心憂き

御様かな。かの母も、如何に淡々しく、けしからぬ様に思ひ給はむとすらむ。後

安くと返すく言ひ置きつるものを」と、いとほしく思せど、いかゞ聞えむ。侍ふ

(二二) (二三) (二四) (二五) (二六)

(一)句は平氣なり

(二)句の

(三)名を聞かぬ内は

(四)乳母が

(五)中君が髪を洗ひ仕舞ひてやがて居間へ歸らるべしと也

(六)中君の居間の前だけ格子をあけて置く也

(七)浮舟の方

(八)何もかも置き放しにしてある

(九)其を浮舟が居るからとて

(一〇)浮舟の方へ

(一一)苦しがつて早くあらしめて

(一二)格子を

(一三)句

(一四)此乳母は無遠慮にして輕率なる氣の強い女にて

開けて來たり。乳母「これは如何なる事にか侍らむ。怪しきわざにも侍るかな」と

聞ゆれど、憚り給ふべき事にもあらず。かくうちつけなる御しわざなれど、言の

葉多かる御本性なれば、何やかやと宣ふに、暮れはてぬれど、(三)誰とか聞かざらむ

ほどは許さじ」ととて、馴れくしく臥し給ふに、宮なりけりと思ひはつるに、乳母

いはむ方なくあきれて居たり。大殿油は燈籠にて、侍女(五)今わたらせ給ひなむ」と

人々言ふなり。御前ならぬ方の御格子どもそおろすなる。此方は離れたる方にし

なして、高き棚厨子一具ばかり立て、屏風の袋に入れ込めたる、所々に寄せかけ、

何か荒らかなる様にし放ちたり。かく人の物し給へばとて、通ふ道の障子一間ば

かりぞ開けたるを、右近とて、大輔が女の侍ふ來て、格子おろして此處に寄り來

なり。右近あな暗や。まだ大殿油も參らざりけり。御格子を、(二〇)苦しきに急ぎまる

りて、闇に惑ふよ」ととて引き上ぐるに、宮もなま苦しと聞き給ふ。乳母はたいと

苦しと思ひて、物づつみせず、はやりかにおぞき人にて、乳母「物聞え侍らむ。こ



(一) 浮舟の居る方の  
(二) 小庭の植込の

(三) 浮舟が

(四) 浮舟が句の來たると  
は思ひもよらず

(五) 浮舟な句が只は置か  
れず

(六) 浮舟が

(七) 扇で顔を隠して

(八) 浮舟の手を

(九) 句が屏風などの蔭に  
顔を背けて

(一〇) 彼の我に懸想する  
といふ噂の藪ならんか  
と、浮舟の心「にや」の下  
に「とあるべし」

(一一) 藪らしく思はるる  
に

(一二) 浮舟の

參の口惜しからぬな、めりと思ひして、この廂に通ふ障子を、いと密におし開け給  
 ひて、やをら歩み寄り給ふも人知らず。こなたの廊の中の坪前栽の、いとをかし  
 う色々に咲き亂れたるに、遣水のわたりの石高きほど、いとをかしければ、端近  
 く添ひ臥して眺むるなりけり。開きたる障子を、今少し押し開けて、屏風つま  
 より覗き給ふに、宮とは思ひもかけず、例此方に來馴れたる人にやあらむと思ひ  
 て、起きあがりたる様體、いとをかしう見ゆるに、例の御心は過し給はで、衣の  
 裾をとらへ給ひて、此方の障子引きたて給ひて、屏風の間に居給ひぬ。あやしと  
 思ひて、扇をさし隠して、見返りたる様いとをかし。扇を持たせながら、とらへ  
 給ひて、<sup>(七)</sup>「誰ぞ、名のりこそゆかしけれ」と宣ふに、むくつけくなりぬ。さる物の  
 つらに、顔を外様にもてかくして、いといたう忍び給へれば、このたどならずほ  
 のめかし給ふらむ大將にや、芳しきけはひなども思ひわたさるゝに、いと恥かし  
 くせむ方なし。<sup>(二二)</sup>乳母、人けの例ならぬを、怪しと思ひて、あなたなる屏風を押し

(二二)

(一)夕霧

① 匂宮思はず浮舟を見附けて手籠にせんとす

(二)中君方へ

(三)髪を洗ふ事

(四)中君が居ぬ故寂しといふ也

(五)匂の留守中に何時も中君の髪を洗ふ様にするに

(六)髪洗ふ事を

(七)洗ふべき日なし、日の吉凶を探めげ也

(八)九月は正五九月の中、十月は神無月なれば思ひなりといふ

(九)若君の方に侍女等が行きてある間に

(一〇)浮舟の隠れ居る方

(一一)織出模様

(一二)見るともなしに上の袖口や何やが見ゆる也

(一三)新参の侍女の氣の利いたのが居るならんと匂が思ひて

心地よけにて、左の大殿の君達なぞ、碁うち韻ふたぎなどしつゝ遊び給ふ。

夕つ方宮此方に渡らせ給へれば、女君は御ゆるの程なりけり。人々もおのく

打ち休みなどして、御前には人もなし。小き童のあるして、身折悪しき御ゆる

の程こそ、見苦しかんめれ。さうぐしくてや眺めむ」と聞え給へば、大輔實にお

はしまさぬ隙々にこそ例はすませ。怪しう日頃も物憂がらせ給ひて、今日過ぎば

この月は日もなし。九十月はいかでかはとて、仕う奉らせつるを」と、大輔いと

ほしがる。若君も寝給へりければ、其方にこれかれある程に、宮はたよすみあり

き給ひて、西の方に例ならぬ童の見えけるを、今参のあるかなと思して、さし覗

き給ふ。中の程なる障子の、細目に開きたるより見給へば、障子のあなたに、一

尺ばかり引きさけて、屏風立てたり。そのつまに、几帳簾に添へて立てたり。帷

子一重を打ちかけて、紫苑色の花やかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、

袖口さし出でたり。屏風一枚疊まれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今



(一)隠れて通ふ女の所からは此様にして紛れ歸るのぢやと、匂の心

(二)若し蕭などが中君の處へ來しにはあらずやと疑ふ也

(三)常陸守の女房位に殿附は耳障り

(四)北方が

(五)浮舟の身の上を思ふにつけて

(六)浮舟を賤しき身分にして仕舞ふ事は

(七)此處へ出入りさせるのか

(八)浮舟の母を侍女の大輔の友達なりと中君が言ひなす也

(九)人聞の悪い様な事はかりわざと仰しやゝるのがつちい

(一〇)引歌未詳

(一一)句が

(一二)直り

ふ。かやうにてぞ、<sup>(一)</sup> 忍びたる所には紛れ出づるかしと、御心ならひに思し寄るも

むくつけし。供人常陸殿のまか<sup>(二)</sup>でさせ給ふ」と申す。若やかなる御前ども、供人殿

こそあざやかなれ」と、笑ひあへるを聞くも、實にこよなの身の程やと悲しく思

ふ。唯この御方の事を思ふ故にぞ、己も人々しくならまほしく覺えける。まして

正身を、なほくしくやつして見む事は、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入

り給ひて、<sup>(三)</sup> 常陸殿といふ人やこゝに通はし給ふ。心ある朝ほらけに、急ぎ出で

つる車添などこそ、ことさらめきて見えつれ」など、猶思し疑ひて宣ふ。聞きにく

くかたはらいたしと思して、中君大輔などが若くての頃、友達にてありける人は、

殊に今めかしうも見えざ<sup>(四)</sup>めるを、故々しけにも宣ひなすかな。人の聞き咎めつ

べき事をのみ、常にとりない給ふこそ、無き名はたてて」と打背き給ふも、らう

たけにをかし。明くるも知らず大殿籠りたるに、人々あまた参り給へば、寢殿に

わたり給ひぬ。<sup>(五)</sup> 後の宮は、ことごとくしき御惱にもあらで、おこたり給ひにければ、

(一一)

(一二)

(一) 浮舟を可愛想に  
 (二) 中君の御意見に任すべし  
 (三) 今迄の齟の心深かりしを頼みにしてうつかり肌を許したら將來は又どうなるか分らぬ  
 (四) 句官母北方の車を見て怪しむ  
 (五) 娘の婚禮を北方が構はずに出あるき居ると怒りたる也  
 (六) 浮舟を  
 (七) 尼にせんか如何と思案をきめる間、「如何ならん説の中に住まばかは世の憂き事の聞えこざらん」  
 (八) 浮舟  
 (九) 母に別れん事を心細く思へど  
 (一〇) 浮舟が  
 (一一) 句  
 (一二) 句が若君を  
 (一三) 北方の車を

いとほしく思ひ給へ侍る。それも唯御心になむ。ともかくも、思し捨てず物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくなりて、中君「いさや、來し方の心深さに打解けて、行くさきの有様は知り難きを」と、打歎きて、殊に物も宣はずなりぬ。  
 明けぬれば、車など率て來て、守の消息など、いと腹立たしげに、劫したれば、北方「辱く萬に頼み聞えさせてなむ。猶しばし隠させ給ひて、巖の中にも如何にとも、思ひ給へめぐらし侍る程、數に侍らずとも、思ほし放たず、何事をも教へさせ給へ」など、打泣きつゝ聞え置きて、この御方も、いと心細く、ならはぬ心地に、立ち離れむ事を思へど、今めかしくをかく見ゆるあたりに、暫しも見馴れ奉らむと思へば、流石に嬉しくも思ほえけり。車引き出づるほどの少し明うなりぬるに、宮内裏よりまかで給ふ。若君覺束なく思ひ給ひければ、忍びたる様にて、御車なども例ならでおはしますにさしあひて、推し留めて立てたれば、廊に御車寄せており給ふ。句何の車ぞ。暗き程に急ぎ出づるは」と、目留めさせ給

(一) 薫が

(二) 浮舟の母が

(三) 中君

(四) 浮舟につきて薫の言ひし趣を母君に語る

(五) 容易に變改せぬ薫の性質なるが

(六) 現在の薫の有様を思へば浮舟を薫に許すは面倒を求むる様を物なれど、女二宮あるをいふ

(七) 尼にする積で薫に任せて見ては如何

(八) 薫の

(九) 下女の身分であつても

(一〇) 浮舟を薫に差上げたらば心配の種を求めさせる様なものなるべし

し給ひけりとこそ覺ゆれ。幼くおはしけるより、行もいみじくし給ひければよ」

など言ふもあり。また、侍女「前の世こそゆかしき御有様なれ」など、口々めづる事

どもを、座に笑みて聞き居たり。

君は忍びて宣ひつる事を、ほのめかし宣ふ。中君思ひそめつる事、執念きまで輕

輕しからず物し給ふめるを、實にたゞ今の有様などを思へば、煩はしき心地すべ

けれど、かの世を背きてもなど思ひ寄り給ふらむも、同じことに思ひなして、試

み給へかし」と宣へば、北互つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の

音聞えざらむ住居まで、思ひ給へおきつれ。實に人の御有様けはひを、見奉り思

う給ふるに、下仕の程などにてても、かゝる人の御あたりに、馴れ聞えむはかひあ

りぬべし。まいて若き人は、心つけ奉りぬべく侍るめれど、數ならぬ身に、物

思の種をやいとど蒔かせて見侍らむ。貴きも卑きも、女といふ者はかゝる筋にて

こそ、この世、後の世まで、苦しき身になり侍るなれと、思ひ給へ侍ればなむ、

(一)突然に浮舟を蕪が望むと思つて母が蕪の心を淺く解釋する事なき様に  
(二)附種のない様な患がなければ浮舟を我物にもすべし  
(三)繭路には

(四)蕪を  
(五)附種もなくに蕪を望にせんことを言ひ出して  
(六)假令年に一度の逢瀬でも此様な夫をこそ持たせし

(七)浮舟は大抵の男にやるのは惜しい物なるに  
(八)蕪の  
(九)蕪を  
(一〇)法華經の中

(一一)「若有人、開是藥王菩薩本事品、能隨喜讚善者、是人現世、口中常出青蓮華香、身毛孔中常出牛頭栴檀之香、牛頭栴檀は牛頭山の栴檀  
(一二)蕪が眼前に其例を見せる故  
(一三)うそはつかぬと

ぬるを、うちつけになど、淺う思ひなすまじう、宣はせ知らひ給ひて、はしたな(二)

けなるまじうはこそ。いとうひくしう習ひにて侍る身は、何事も嗚呼がましき(三)

までなむ」と、語らひ聞えおきて出で給ひぬるに、この母君、「いとめでたく思ふやうなる御様な」とめでて、乳母のゆくりかに思ひよりて、度々言ひし事を、あ

るまじき事に言ひしかど、この御有様を見るには、天の川を渡りても、かよる彦(四)  
(五)

星の光をこそは待ちつけさせめ、我が女は、斜ならむ人に見せむは惜しけなる様(六)

を、夷めきたる人をのみ見習ひて、少將をかしこきものに思ひけるを、悔しきま(七)

で思ひなりにけり。寄り居給へりつる眞木柱も茵も、名残匂へるうつり香、いへば(八)

いと殊更めきたるまで有り難し。時々見奉る人だに、度毎にめで聞ゆ。侍女經な(九)

どを讀みて、功德の勝れたる事あしめるにも、香の芳しきをやむごとなき事に、佛(一〇)

の宣ひ置けるも理なりや。薬王品などにも、取りわきて宣へる、牛頭栴檀とか(一一)

や、おどろくしき物の名なれど、先づかの殿の近く振舞ひ給へば、佛はまこと(一二)

(一三)

矢張中君に對して心を憐  
ます譯ならば宇治に浮舟  
を本尊にするて置いても  
満足は出来まじ

(一) 浮舟の母に我が浮舟  
をほしが由を

(二) 浮舟に譲る通口上が  
大君の中君に譲りたるに  
似て縁起が悪い

(三) 浮舟をなでものにし  
て大君の戀しさを除かん  
と也、「なでもの」は襖の  
時に用ふる人形

(四) なで物は棄てて仕舞  
ふもの故、なで物にする  
といふ様な御心では退み  
にならぬ

(五) 「大ぬさの引く手數  
多になりぬれば思へど得  
こそ退まざりけれ」

(六) 浮舟が氣の毒

(七) 「大ぬさと名にこそ  
立てれ流れても遂に寄る  
瀬はありてふものを」

(八) つまらぬ争を此無常  
な世の中でする事故

(九) 藥が中君に捨てらる  
るをいふ  
(一〇) 浮舟の母も藥が長  
居しては怪しむべければ  
(一一) 浮舟の母

め。時々心やましくば、なか／＼山水も濁りぬべく」と宣へば、はて／＼は、

中君「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひ給ふも、をかしく聞ゆ。驚いでさらば

傳へはてさせ給へかし。この御遁言葉こそ、思ひ出づればゆ／＼しく」と宣ひて、ま

た涙くみぬ。

驚見し人のかたしろならば身にそへて戀しきせどのなでもものにせむ

と例の戯に言ひなして、紛らはし給ふ。

中君「みそぎ河せどに出さむなでものを身に添ふかけと誰かたのまむ

引手數多にとかや。さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや」と宣へば、驚つひに寄

る瀬は更なりや。いとうれたき様なる水の泡にも争ひ侍るかな。搔き流さるゝ撫

物、いで誠ぞかし。いかで慰むべき事ぞ」など言ひつゝ、暗うなるもうるさけれ

ば、中君「かりそめに物したる人も、怪しと思ふらむとつゝまじきを、今宵は猶疾

くかへり給ひね」と、こしらへやり給ふ。驚さらばその客人に、かよる心の願年經

(一)句が遅遅したるが、思は中君の所爲ならんと  
 思ふ  
 (二)句の代りを務めてく  
 れたる摺換也  
 (三)句が今夜宿直なるを  
 つきとめて薫が下心あり  
 て来れるなるべし  
 (四)大君が忘れられず  
 (五)薫が  
 (六)さう何時迄も大君を  
 忘れずに居られる露はな  
 し以下中君の心  
 (七)薫が忘れぬ様に言ふ  
 は一旦深く思ひ込みし工  
 故今更九て忘れるのもし事  
 合理しと思ひての事かと  
 も思へど  
 (八)矢張心底から大君を  
 思ひ居る薫の心根を  
 (九)中君が  
 (一〇)薫が中君に  
 (一一)中君が中君に  
 (一二)中君に懸想する薫  
 の心をやめさせる材料を  
 與へる積りぞか浮舟の事  
 を中君が話し出して「懸  
 せじとみたらし川にせし  
 御禊神はうけずぞなりに  
 けらしも」  
 (一三)浮舟は二條院に隠  
 れて居ると  
 (一四)浮舟も見たくはあ  
 れど突然中君を浮舟に乗  
 換へる氣にもなれず  
 (一五)浮舟が我が中君に  
 對する戀を叶へてくれる  
 ならしければ其が叶はず

東

屋

もいと懈怠して參らせ給へるを、あいなう御あやまちに、推し量り聞えさせてな  
 (二)と聞え給へば、中君「實に疎ならず、思ひやりふかき御用意になむ」とばかり答  
 へ聞え給ふ。宮は内裏にとまり給ひぬるを見おきて、たどならずおはしたるな、め  
 り。例の物語、いと懐しげに聞え給ふ。事に觸れて、唯古の忘れがたく、世の  
 中の物憂くなり勝るよしを、現には言ひなさで、かすめ憂へ給ふ。さしもいかで  
 か、世を経て心に離れずのみはあらむ、猶淺からず言ひそめてし事のすぢなれば、  
 名残なからじとにや、など見なし給へど、人の御氣色は著きものなれば、見もて  
 行くまゝに、哀なる御心さまを、岩木ならねば思ほし知る。恨み聞え給ふ事も多  
 ければ、いとわりなく打歎きて、かゝる御心をやむる御禊をせさせ奉らまほし  
 く思すにやあらむ、かの人形宣ひ出でて、「いと忍びてこのわたりになむ」と、ほ  
 のめかし聞え給ふを、彼もなべての心地はせず、ゆかしくなりにたれど、打ちつ  
 けにふと移らむ心地はたせず。薫いでや、その本尊願満て給ふべくはこそ尊から  
 (一五)

(一)句と點と

(二)別々に見ればどちらがどちらとも言はれず

(三)黨をいふ

(四)句は黨に壓倒さるゝ事はなし

(五)人拂ひし

(六)黨の

(七)北方が

(八)黨に逢ふが氣恥かし

(九)際限なく心深き様

(一〇)明石の子ども

(一一)句の

みじきものに聞ゆめれど、宮の御有様には、え並び給はじ」と言へば、御前に侍  
 人々、侍女いさや、えこそ聞え定めね」と聞えあへり。中君むかひておはせし  
 様、宮はいと情なげに、見にくよこそ見え給ひしか。とり放ちては、いづれもと  
 もかくも分れず。容貌よき人は、人を消つこそ憎けれ」と宣へば、人々わらひて、  
 侍女「されど御前には、壓され奉り給はざりめり。如何ばかりならむ人が、宮をば  
 消ち奉らむ」などいふ程に、今ぞ車より下り給ふなると聞く程、かしかましきま  
 で追ひのよしりて、頓にも見え給はず。待たれたる程に、歩み入り給ふ様を見れ  
 ば、實にあなめでた、をかしけとも見えながらぞ、なまめかしうあてに清けな  
 るや。漫に見え苦しう恥かしくて、額髪なども引きつくるはれて、心はづかしけ  
 に用意多く、際もなき様ぞし給へる。内裏より参り給へるなるべし、御前どもの  
 けはひ數多して、驚昨夜後の宮の悩み給ふよし承りて参りたりしを、宮達の侍  
 ひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御代に今まで侍ひ侍りつる。今朝

(二二)

(二〇)宮達の侍

(二一)今朝

(一)陸奥の名所に浮島あり、されば陸奥に在りし頃の事を語る意味なるべし  
 (二)「世の中は昔よりやは憂かりけん我身一つの爲になれるか」  
 (三)常陸にありし頃の物語  
 (四)我が郎  
 (五)子ども  
 (六)自分をさがし居るならん  
 (七)國守の妻杯になり下るのはつちきものと  
 (八)浮舟は中君に任せて自分は構ふまじ  
 (九)どうか見苦しく落ぶれる様の事なくてあらせたとし中君が思ふ  
 (一〇)以下浮舟を批評する中君の心  
 (一一)氣ばたらきもあり  
 (一二)大君の様子によく似て居る  
 (一三)大君の身代りをさがして居る黨に  
 (一四)黨  
 (一五)浮舟  
 (一六)一寸見た人々がひどく黨を譽めるけれども

など、年頃の物語、浮島の哀なりし事も聞え出づ。北方、我身ひとつののみ、言ひ合する人も無き、筑波山の有様も、斯くあきらめ聞えさせて、何時もく、いと斯くて侍はまほしく、思ひ給へなり侍りぬれど、彼處には善からぬ怪しものども、いかに立ち騒ぎもとめ侍らむ。流石に心あわたどしく思ひ給へらるよ。かかる程の有様に身をやつすは、口惜しきものになむ侍りけると、身にも思ひ知らるよを、この君は唯任せ聞えさせて、知り侍らじ」など、かこち聞えかくれば、實に見苦しからでもあらなむと見給ふ。容貌も心ざまも、え憎むまじうらうたけなり、物恥もおどろ／＼しからず、様よう兒めいたるものから、かどなからず、近く侍ふ人々にも、いとよく隠れて居給へり、物など言ひたるも、昔の人の御様に、怪しきまで覺え奉りてぞあるや、かの人形もとめ給ふ人に見せ奉らばや、と打思ひ出で給ふ折しも、大將殿参り給ふと人聞ゆれば、例の御几帳引きつくるひて、心づかひす。この客人の母君、北方いで見奉らむ。ほのかに見奉りける人の、い



- (一)少將との縁談は人の噂にも上れりと思ふ故
- (二)私の存命中は手許に置きても濟むべし
- (三)私の死後は
- (四)落魄するものが
- (五)置きて

- (六)浮舟や我が如く便なくなりたる身の常也
- (七)其でも九で世の中を捨てる譯にもゆかぬ物故
- (八)世捨人にならんと決心せし我さへ
- (九)浮舟を尼にする事は
- (一〇)身をやつして尼になるも

- (一一)北方の様子
- (一二)下品なるをいふ
- (一三)八宮が情なく浮舟を子ともせざりし故何人にも侮られる譯なりとは思へど
- (一四)中君が親切に言うて下さるので

ど、人も聞きけりと思ふに、少將の思ひ侮りける様などほのめかして、北方<sup>(一)</sup>命侍

らむかぎりは、何か、朝夕の慰めぐさにて見過しつべし。打捨て侍りなむ後は、

思はずなる様に、散りほひ侍らむが悲しさに、尼になして、深き山にやしするて、

さる方に世の中を思ひ絶えて侍らましなどなむ、思う給へわびては、思ひ寄り侍

る」など言ふ。中君「實に心苦しき御有様にこそはあなれど、何か人に侮らるゝ御

有様は、かやうになりぬる人のさがにこそ。さりとてもえ堪へこもらぬわざなり

ければ、むけにその方に思ひおきて給へりし身だに、かく心より外にながらふれ

ば、まいていとあるまじき御事なり。やつい給はむも、いとほしけなる御様にこ

そ」など、いと大人びて宣へば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたる様なれど、

由なからぬさまして清けなり。いたく肥え過ぎにたるなむ、常陸殿とは見えける。

北方「故宮のつらく情なく思し放ちたりしに、いとど人けなく、人にも侮られ給ふ

と見給ふれど、かう聞えさせ御覽せらるゝにつけてなむ、古の憂さも慰み侍る」

(一) 命侍

- (一)大君の事は悲しき盡くる時なし
- (二)蕪
- (三)大君の事のみ思はれ何事にも氣が乗らぬと歎きて
- (四)蕪を大事にせらるる
- (五)大君存生ならば矢張蕪と女二宮との縁を妨ぐる譯にはゆかず、つらき思をしたであらう
- (六)姉妹揃ひて同様の運命に逢ひて
- (七)却つて悪いかも知れぬ
- (八)大君も半途で亡くなりたればこそ床しくも思はるゝならんとは思へども
- (九)蕪は
- (一〇)八宮の後世の事迄心配して
- (一一)死せし大君の代に
- (一二)浮舟
- (一三)船に差上ぐる杯とは中々思ひも寄らぬ事なれど
- (一四)是も大君の妹なればこそ其迄に言うても下さる事と、紫の一本故に武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る
- (一五)浮舟の所置に困り居る事
- (一六)委しくは語らねど

常に思ひなされて、見奉り知らずなりにければ、あるを、猶この御事は、盡きせずいみじくこそ。大將殿の、萬の事に心の移らぬ由をうれへつよ、淺からぬ御心の様を見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」と宣へば、北方大將殿は、さばかり世に例なきまで、帝のかしづき思したなるに、心驕し給ふらむかし。おはしまさましかば、猶この事せかれしも、し給はざらましや」など聞ゆ。中君「いさや、様のものと、人笑はれなる心地せましも、なか／＼にやあらし、見果てぬにつけて心にくよもある世にこそはと思へど、かの君は、如何なるにかあらむ、怪しきまで物忘せず、故宮の御後の世をさへ思ひやり深く、後見ありき給ふめる」など、心美しう語り給ふ。北方かの過ぎにし御かはりに尋ねて見むと、この數ならぬ人をさへなむ、かの辨の尼君には宣ひける。さもやと思ひ給へ寄るべき事には侍らねど、一本ゆゑにこそはと、辱けれど、哀になむ思ひ給へらるゝ御心深さなる」など言ふ序に、この君をもて煩ふこと、泣く／＼語る。細かにはあらね

(一) 匂が  
 (二) 明石の御病氣がよま  
 さうならば直に歸つて來  
 べし  
 (三) 明石が

(四) 中君の前に行きて北  
 方が匂を譽め立つれば

(五) 中君の母  
 (六) 中君が  
 (七) 八宮

(八) 大君

(九) 幼時父母に死なれし  
 事は丸で覺えのなき事故  
 却て尋常の事と思はれて  
 深く恐しくもなきが

のつまより覗き給へるを、打見給ひて、立ち返り寄りおはしたり。匂御心よろし  
 く見え給はば、やがてまか<sup>(二)</sup>でなむ。猶苦しくし給はば、今宵は宿直にぞ。今は一  
 夜を隔つるも覺束なきこそ、苦しけれ」とて、暫し慰め遊ばして、出で給ひぬる様  
 の、返すく見るとも見るとも飽くまじく、匂ひやかにをかしければ、出で給ひ  
 ぬる名残さうぐしくぞ眺めらるよ。

女君の御前に出で來て、いみじくめで奉れば、田舎びたると思ひて笑ひ給ふ。

(四) 北方「故上の亡せ給ひしほどは、いふかひなく幼き御程にて、如何にならせ給はむ

と、見奉る人も故宮も思し歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山

懐の中にも、生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく、故姫君のおはし

まさずなりにたるこそ、飽かぬ事なれ」など、打泣きつゝ聞ゆ。君も打泣き給ひて、

中君「世の中の怨めしく心細き折々も、又斯くながらふれば、少しも思ひ慰めつべ

き折もあるを、いにしへ頼み聞えける影どもに後れ奉りけるは、なかくに尋

東  
屋



(八) 母北方中君に浮舟の所置を諫る、中君薫に浮舟の事を語る、母北方薫を隙見す、中君浮舟を竊に許さんことを勤む  
 (一)句  
 (二)明石姫君  
 (三)北方が  
 (四)中君の方より  
 (五)句に  
 (六)別に難ずべき點なき、是常陸守の翌の左近少將也  
 (七)目にもつかぬを  
 (八)浮舟の翌にと  
 (九)常陸守に大事にせらるべし杯  
 (一〇)常陸守の次女を誘りていふ也  
 (一一)二條院では頓と其様な噂もせず  
 (一二)常陸守  
 (一三)北方が聞いて居るとも氣が附かず  
 (一四)北方が  
 (一五)少將は格別の人でもなささうなりと

宮、日たけて起き給ひて、(一) 後の宮例の惱ましくし給へば、参るべし」とて、御装束などし給ひておはす。(二) ゆかしう覺えてのぞけば、うるはしく引きつくるひ給へるはた、似るものなく、氣高く愛敬づき清らにて、若君をえ見捨て給はで、もてあそびおはす。御粥強飯など参りてぞ、こなたより出で給ふ。(三) 今朝よりまるりて、侍の方にやすらひける人々、今ぞ参りて物など聞ゆる中に、清けだちて、何でふ事なき人のすさまじき顔したる、直衣著て太刀佩きたるあり。御前にて何とも見えぬを、侍女「彼ぞこの常陸守の婿の少將な。初はこの御方にと定めけるを、守の女を得てこそ勞はられめなど言ひて、かじけたる女の童をえたるななり」侍女「いさ、この御あたりの人はかけてもいはず。かんの君の方より、よく聞く便のあるぞ」など、己がどち言ふ。聞くらむとも知らで、人のかく言ふにつけても、胸つぶれて、少將をめやすき程と思ひける心も口惜しく、實に異なる事なかるべかりけりと思ひて、いとどしく侮らはしく思ひなりぬ。若君の這ひ出でて、御簾

(一)假令一年に一度の逢瀬でも

(二)句が抱きて

(三)中君

(四)句が几帳をどけて

(五)八宮

(六)非常に違つたものぢやと

(七)句が

(八)句が

(九)句の様子

(一〇)母北方の心

(一一)卑しき我々づれば

(一二)浮舟も此様に宮様に連添はしても

(一三)富の力を頼みて

(一四)常陸守

(一五)奴ども

(一六)様子が非常に劣つて居るを

様容貌を見れば、織女ばかりにても、かやうに見奉り通はむは、いといみじかる

べきわざかな、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君短き几帳を隔て

ておはするを、推しやりて、物など聞え給ふ。御容貌どもいと清らに似合ひたり。

故宮の淋しくおはせし御有様を、思ひくらぶるに、宮達と聞ゆれど、いとこよな

きわざにこそありけれと覺ゆ。几帳の内に入り給ひぬれば、若君はわかき人乳母

などもあそび聞ゆ。人々参り集れど、惱ましとて大殿籠り暮しつ。御臺こな

たにまるる。萬の事けだかく、心ごとに見ゆれば、我がいみじき事を盡すと思へ

ど、なほくしき人のあたりは口惜しかりけり、と思ひなりぬれば、我が女もか

やうにてさし竝べたらむに、かたはならじかし、ゆたけき勢を頼みて、父ぬし

の、后にもなしてむと思ひたる人々は、おなじ我が子ながら、けはひこよなきを

思ふも、猶今より後も心は高く遣ふべかりけりと、夜一夜あらましがことに思ひつ

づけけり。

(一) 奉公人といふ名目なりし爲に  
 (二) 八宮に  
 (三) 中君を

(四) 二條院の人々には方角よりといふ振れ込て浮舟が來し事故  
 (五) 前にも北方は二條院に來し事ある也

(六) 句が二條院へ來し也  
 (七) 北方が  
 (八) 力にして

(九) 句の前に

(一〇) 各自の職掌の事  
 (一一) 句の  
 (一二) 句の  
 (一三) 何といふ立派な御身分ぞ、以下北方の心  
 (一四) 中君の運のよきよ  
 (一五) 餘所に居て思へば  
 (一六) いくち立派な夫でもつらき思をさせられてはつまらぬと  
 (一七) 句の

は離れ奉るべき人かは。仕う奉ると言ひしばかりに、數まへられ奉らず口惜

しくて、かく人には侮らるよ、と思ふには、かく強ひて睦び聞ゆるもあぢきなし。

こよには御物忌と言ひてければ、人も通はず、二三日ばかり母君も居たり。此度

は心のどかに、この御有様を見る。

宮わたり給ふ。ゆかしくて物の間より見れば、いと清らに、櫻を折りたる様し給

ひて、我が頼もし人に思ひて、つらう怨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守よ

り、様容貌も人のほども、こよなく見ゆる五位四位ども、相跪き侍ひて、この事

かの事と、あたりくの事ども、家司どもなど申す。又若やかなる五位ども、顔

も知らぬどもも多かり。我が繼子の式部の丞にて藏人なる、内裏の御使にて參れ

り。御あたりにもえ近く參らず、こよなき人の御けはひを、あはれこは何人ぞ、か

かる御あたりにおはするめでたさよ、餘所に思ふ時は、めでたき人々と聞ゆとも、

つらき目見せ給はばと、物憂く推し量り聞えさせつらむあさましさよ、この御有

- (一) 少將も満足して常陸守に縁を求めたは賢き遣方なりしと思ひ居れり
- (二) 守が親しき笠をもてなす騒の中を逃出して行くも意地悪き事なるべしと侮へて
- (三) こゝは少將の御座敷とくは御供部屋と
- (四) 先妻の娘の篋
- (五) 浮舟の方に少將が居る故
- (六) 端近なる處に浮舟を置くのも可愛想で
- (七) 中君へ預けんと北方が思へる也
- (八) 常陸守の勝手を振舞も浮舟に身寄のなきを侮りての事と北方が思ふ故
- (九) むくく承知もせぬ中君の處へ
- (一〇) 浮舟に付添ひて二條院へ移りて
- (一一) 無沙汰なりしかど
- (一二) 中君が北方を疎くは思はぬ筈なれば北方も別段二條院へ行くことを窮屈に思はず
- (一三) 中君が
- (一四) 母北方の心
- (一五) 北方は八宮の北方の姪也

て、のよしりけるを、下種などは、それをいとかしこき情に思ひければ、君も、いとあらまほしく、心かしく取り寄りにけりと思ひけり。北の方、この程を見捨てて知らざらむも僻みたらむと思ひ念じて、唯するまよに任せて見居たり。客人の御出居、侍としつらひさわけば、家は廣けれど、源少納言東の對には住む、男子などの多かるに、所もなし。この御方に客人住みつきぬれば、廊などほとりばみたらむに、住ませ奉らむも飽かずいとほしく覺えて、とかく思ひめぐらす程宮にとは思ふなりけり。

(七) 宮にとは思ふなりけり。  
 (八) この御方さまに數まへ給ふ人のなきを、悔るなめりと思へば、ことに許し給はざりしあたりを、あながちに參らす。乳母若き人々、二三人ばかりして、西の廂の、北に寄りて人氣遠き方に局したり。年頃かく遙なりつれど、疎く思すまじき人なれば、參るときは恥ぢ給はず、いとあらまほしく、けはひ殊にて、若君の御あつかひをしておはする御有様、羨ましく覺ゆるもあはれなり。我も故北の方に



(一) 浮舟が落ぶれるのを構はぬも

(二) 中君も浮舟も世に落ぶれ漂泊せんも

(三) 中君方の侍女

(四) 常陸守の北方が

(五) 中君にいふ詞

(六) 人を當惑させる様な返事をなさるな

(七) 浮舟をいふ

(八) 二條院の西の對に隠れ間を拵へて

(九) 甚だ面倒を譯ではあれど

(一〇) 暫時浮舟を預るべし

(一一) 北方が

(一二) 浮舟も中君には親しみ寄りたく思ふ事故

(一三) 少將をどの様に丁寧に扱はんかと

(一四) 關東で出来たる粗製の絹

(一四) 關東で出来たる粗製の絹

で止みにし人を、我ひとり残りて、知り語らはむもいとつよましく、又見苦しき

様に世にあぶれむも、知らず顔にて聞かむこそ、心苦しかるべけれ、異なる事

なくて、互に散りほはむも、無き人の御爲に見苦しかるべきわざを、思し煩ふ。

大輔が許にも、いと心苦しげに言ひやりたりければ、大輔「さる様こそは侍らめ。

人にくよはしたなくもな宣はせそ。かよる劣の者の、人の御中にまじり給ふも、

世の常のことなり。あまりいと情なく宣ふまじき事なり」など聞えて、大輔「さら

ば、かの西の方に、かくろへたる所し出でて、いとむづかしげなめれど、さても

過ぐい給ひつべくば、しばしの程」と言ひ遣しつ。いと嬉しと思ほして、人知れ

ず出でたつ。御方もかの御あたりをば、睦び聞えまほしと思ふ心なれば、なかなか

か、かよる事どもの出来たるを嬉しと思ふ。守、少將のあつかひを、如何ばかり

めでたき事をせむと思ふに、そのきらしくしかるべき事も知らぬ心には、唯荒ら

かなる束絹どもを、押しまろがして投げ出でつ。食物も所狭きまでなむ運び出で



(一)少將も媒の詞によりて常陸守方の立派なるを信じ缺點もなき様に思ひて、浮舟に約束したる日より此儀に通ひ初めたり  
 (二)浮舟二條院に預けらる、母北方宮を隙見す  
 (三)浮舟を今迄通り側に置くのもいやなれば  
 (四)中君  
 (五)用事がなくて手紙を上げるも失禮と常は御遠慮申して思ふ様に御音信も申上げねど  
 (六)浮舟を他所に置きたく思ふ故  
 (七)其御殿の内に隠して置いて下さらば  
 (八)私如きつまらぬ者の手一つでは保護しきれず  
 (九)御手助けを乞ふ處としては、第一に中君を數へる  
 (一〇)中君が  
 (一一)父八宮が、以下中君の心

柄のあたらしく、警策にもものし給ふ君なれば、我もくと、婚に取らまほしくす

人の多かんなるに、取られなむも口惜しくてなむ」と、かの媒に謀られ言ふも

いと嗚呼なり。男君も、この程の厳しく思ふやうなる事と、萬の罪あるまじう思

ひて、その夜もかへず來そめぬ

母君、かの御方の乳母、いとあさましく思ふ。ひがくしき様なれば、とかく見

あつかふも心づきなければ、宮の北の方の御もとに御文奉る。

北方その事と侍らでは、狎々しくやと畏りて、え思ひ給ふるまよにも聞えさせ

ぬを、慎むべきこと侍りて、暫時所かへさせむと思ひ給ふるに、いと忍びて

侍ひ給ひぬべき、かくれの方候はば、いともく嬉しくなむ。數ならぬ身ひ

とつの影に隠れもあへず、哀なることのみ多く侍る世なれば、頼もしき方に

は先づなむ。

と、打泣きつと書きたる文を、哀とは見給ひけれど、故宮の、さばかり許し給は

(一) 少將常陸守の掣にな  
 (二) 娘の婚禮の支度を  
 (三) 浮舟の方によいのが  
 (四) 浮舟の方の借してくれ  
 (五) 浮舟の方は帳なども  
 (六) 新調したる事故此方を婚  
 (七) 禮の時其儘用ひる事にし  
 (八) 爲に用意する事はすまじ  
 (九) 浮舟の方に守が来て  
 (一〇) 北方が今まで見よく  
 (一一) さつぱりと調へて置きし  
 (一二) 室内を  
 (一三) 厨子は棚の戸あるも  
 (一四) の、二階は戸無きもの  
 (一五) (七) 黙つて傍觀す  
 (一六) (八) 浮舟  
 (一七) (九) 北方の腹は分つた  
 (一八) (一〇) 浮舟も他の娘も  
 (一九) (一一) 我女を北方が  
 (二〇) (一二) 北方が構はぬなら  
 (二一) 構はぬでよろしと也  
 (二二) (一三) 娘の様子  
 (二三) (一四) 九々した子  
 (二四) (一五) 小桂の丈位の長さ  
 (二五) (一六) 髪末が細くない  
 (二六) (一七) 守が  
 (二七) (一八) 北方が浮舟の掣に  
 (二八) (一九) しかくりたる人を横取す  
 (二九) (二〇) るでもなしと思へど  
 (三〇) (二一) 少將の人物が惜し  
 (三一) いもので

守はいそぎ立ちて、守「女房など、こなたにめやすき數多あしなるを、この程はあ  
 (二) らせ給へ。やがて帳なども新しく仕立てられたしめる方を、事俄になりにたしめれ  
 (三) ば、取りわたし、とかく改むまじ」とて、この西の方に來て、立ち居とかくしつ  
 (四) らひ騒ぐ。目安き様にさばらかに、あたりくあるべき限りしたる所を、さかし  
 (五) らに屏風ども持て來て、いふせきまで立て集めて、厨子二階など、怪しきまでし  
 (六) 加へて、心をやりて急げば、北の方見苦しく見れど、口入れじと言ひてしかば、  
 (七) たどに見聞く。御方は、北面に居給へり。守「人の御心は見知りはてぬ。唯、同  
 (八) じ子なれば、さりともしと斯くは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。さばれ世に母  
 (九) なき子は無くやはある」とて、女を、晝より乳母と二人、撫でつくるひ立てたれ  
 (一〇) ば、憎けにもあらず。年十五六の程にて、いと小やかにふくらかなる人の、髪美  
 (一一) しけにて小桂のほどなる、裾いとふさやかなり。これをいとめでたしと思ひて、撫  
 (一二) でつくるふ。守「何か、人のことさまに思ひかまへられける人をしもと思へど、  
 (一三) (二八) 人

(一)女三宮の御殿も結構なれども其處に浮舟を置くも心配なものの也  
(二)中君

(三)身分はともあれ一人を守つてくれる男が夫としては頼もしい  
(四)八宮

(五)我を女の數とも思召さざりしかば

(六)常陸守は  
(七)一本槍て

(八)何か事ある時の常陸守の心構が

(九)心にあはぬ事あれば  
瞋嘩をしても黒白をわけ

(一〇)自分がつまらぬ身分では其中に交りてもつまらぬ

(一一)浮舟を  
(一二)浮舟を

の御方おんかたにあらせて、時々ときときも見むとは思おもしもしなむ。それはた實けにめでたき御おんあたりなれども、いと胸痛むいたかるべきことなり。宮みやの上うへの、かく幸人さいひびとと世よに申まうすなれど、物思ものおもはしけに思おもしたるを見れば、如何いかにもく二心ふたこころながらむ人のみこそ、めやすく頼たのもしきことにはあらめ。我が身みにても知りしにき。故宮こみやの御有みあり様は、いと情々なさけしく、めでたくをかしくおはせしかど、人數ひびかずにも思おもさざりしかば、如何いかばかりかは心憂こころうくつらかりし。このいとふかひなく、情なさけなく様さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心ふたこころなきを見れば、心こころやすくて年頃としころをも過すしつるなり。折節せりふしの心こころばへ(六)の、かやうに愛敬あいぎやうなく用意よういなきことこそ憎にくけれ、歎なげかしく怨うらめしき事もなく、かたみに打ち諍いさかひても、心こころに合あはぬ事をばあきらめつ。上達部親王達かんだちのみことたちにて、みやびかに心恥こころはづかしき人の御おんあたりといふとも、我が數かずならではかひあらじ。萬よろづの事こと我が身みからなりけりと思おもへば、萬よろづに悲かなしくこそ見奉みたまつれ。いかにして、人笑ひびわらへならすしたて奉たまつらむと語かたらふ。(一〇)  
(一一)  
(一二)

(一)かゝる嫌な奴の傍には寄りつくまじと思へど  
 (二)申込を承諾して大騒ぎする故  
 (三)申込む少將も承諾する守も丁度よき相手同士分らずやの密合なれば  
 (四)自分は  
 (五)何處へか暫時行つて居たい  
 (六)浮舟  
 (七)少將の變改は却て浮舟の幸であるのかも知れぬ  
 (八)少將をいふ  
 (九)浮舟の美點もわかるまじ  
 (一〇)蕪  
 (一一)浮舟を思ひて仰せられた事もある  
 (一二)蕪へ差上ぐる御思案をなされ  
 (一三)蕪は大抵の女はいやと仰せられて  
 (一四)夕霧、紅梅  
 (一五)娘の嫁にしたき趣を  
 (一六)女二宮  
 (一七)浮舟を女三方の侍女にして置きて

て、かくは言ひなるべしや。かく心憂く近きあたりを見じ聞かじと思ひぬれど、  
 守の斯くおもだたしき事に思ひて、受取り騒ぐめれば、あさましくあひく、  
 世の人の有様を、すべて斯かる事に口入れじと思ふに、いかで此處ならぬ所に、  
 しばしありにしがな」と打歎きつよ言ふ。乳母もいと腹だたしう、わが君をかく  
 貶しむる事と思ふに、乳母「何か、これも御幸にて違ふ事とも知らず。かく心口  
 惜しく御座しける君なれば、あたら御様をも見知らざらまし。わが君をば、心ば  
 せあり、物思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らまほしけれ。大將殿の御様容貌の、  
 ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地のし侍りしかな。哀にはた聞え給ふなり。  
 御宿世に任せて、さも思し寄りねかし」と言へば、北方「あな恐しや。人の言ふを聞  
 けば、年頃、おほろけならむ人をば見じと宣ひて、左の大殿、按察大納言、式部  
 卿宮などの、いと懇にほのめかし給ひけれど、聞き過ぐして、帝の御かしづ  
 き女を得給へる君は、如何ばかりの人をか、まめやかには思さむ。かの母宮など  
 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四) (一五) (一六) (一七) (一八) (一九) (二〇) (二一) (二二) (二三) (二四) (二五) (二六) (二七)

(一)我が次女を望みて來し少將を奪つて浮舟に宛がはんとしたるは不都合なり

(二)結構な親王の御娘をほしいといふ人は誰もなく、賤しい我が娘を少將は望まれる

(三)北方が

(四)少將は浮舟は望ましからずとて我が娘に乗り更へたれば

(五)御意の通りと

(六)思慮なく

(七)しばらく考へるに

(八)浮舟方に北方が

(九)浮舟が

(一〇)浮舟の器量は

(一一)娘どもの聲はどれも同じく大事には思へども

(一二)特に浮舟の聲の爲には

(一三)一人前にもならぬ次女を

(一四)浮舟をさしあいて斯く申込むとは何事

長々と、滯る所もなく言ひ續けて、守「我を思ひ隔てて、あこの御懸想人を奪はむ

とし給ひけるが、おほけなく心幼きこと。めでたからむ親王の御女をば、よう

ぜさせ給ふ君達あらじ。賤しく異様ならむ某等が女子をこそ、賤しうも尋ね宣

ふめれ。かしこく思ひ企てられたれど、もはら本意なしとて、外様へ思ひなり給

ひぬべかなれば、同じくばと思ひてなむ、さらば御心と許し申しつる」など、怪

しく奥無く、人の思はむ所も知らぬ人にて、言ひ散らし居たり。北の方あきれて

物も言はれで、とばかり思ふに、世の中の心憂さをかきつらね、涙も落ちぬばか

り思ひ續けられて、やをら立ちぬ。

此方に渡りて見るに、いとらうたけにをかしけにて居給へるに、さりとも人には

劣り給はじとは思ひ慰む。乳母と二人、北方「心憂きものは人の心なりけり。おの

れは、同じ如思ひあつかふとも、この君のゆかりと思はむ人のためには、命をも

譲りつべくこそ思へ。親なしと聞き悔りて、まだ幼くなりあはぬ人を、さし越え

- (一) 少將は抜目なき男にて
- (二) 浮舟に約したる日より質銀の方へ通ひ始めた
- (三) 少將の心變りを知れる北方の憂悶
- (四) 室内の飾附
- (五) 浮舟
- (六) 母北方の心
- (七) 八宮が死なれても
- (八) 蘭の申込に對しても身分不相應ではあるが隠せぬ譯もない
- (九) 世間では常陸守の子であるやう無いやら分らず
- (一〇) 質子で無いとて却て輕蔑するらしいのが残念
- (一一) 母北方の心
- (一二) 少將をいふ
- (一三) かく懇に申込まれたる上は其に随ふがよるしかるべし
- (一四) 口前の上きに
- (一五) 簞取の當日が
- (一六) 浮舟方に北方が

もしき事をこそと、いと全くかしこき君にて、思ひ取りてければ、日をだに取り替へで、契りし暮にぞおはしはじめける。

北の方は人知れずいそぎ立ちて、人々の装束せさせ、しつらひなど由々しうし給ふ。

御方をも頭洗はせ、取りつくるひて見るに、少將などいふ程の人に見せむも、惜しくあたらしき様を、哀や親に知られ奉りて生ひ立ち給はましかば、おはせ

すなりにたりとも、大將殿の宣ふらむ様にも、おほけなくとも、なかかは思ひ立たざらまし、されど、内々にこそ斯く思へ、外の音聞は守の子とも思ひわかず、

また實を尋ね知らむ人も、なか／＼貶しめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひつづく。

如何はせむ、盛過ぎ給はむもあいなし、賤しからず目安き程の人の、かく懇に宣ふめるを、など心ひとつに思ひ定むるも、媒のかく言善くいみじきに、

女はまして賺されたるにやあらむ。明日明後日と思へば、心あわたゞしく忙がし

きに、此方にも心のどかに居られたらず、そよめきありくに、守外より入り來て、



(一) 幸なるべき事と思へどよくは分らずと卑下していふ也

(二) 媒人が

(三) 北方の方へも

(四) 少將方へ

(五) 少將常陸守の女に婚を定む

(六) 媒人が少將に

(七) 常陸守の様子を

(八) 舊註驥勞の字をあてたり、今の所謂運動費の類

(九) 變改の趣を断りしか

(一〇) 北方が非常に力を入れて居るのに其をばづして實娘に乘替へたらば不都合な様に批難する人もあるべし

(一一) 常陸守の質の二女

(一二) 浮舟は中での年長者故

(一三) 少將の申込を浮舟に振向けて返事をされし迄なり

(一四) 母が非常に浮舟を大事にする時、少將の心

(一五) 突然今の様に言ふ

(一六) 一旦は北方に恨まれ

(一七) 行末力になる方を取るがましなりと

の童の爲にも、幸とあるべき事にやとも知らず」と、よろしけにいふ時に、いと嬉

しくなりて、妹にも斯る事ありとも語らず、彼方にも寄りつかで参りぬ。

守の言ひつる事を、いとよくよけにめでたしと思ひて、聞ゆれば、君少し鄙び

てぞあるとは聞き給へど、憎からず、打ち笑みて聞き居給へり。大臣にならむそ

くらうを取らむなどぞ、あまりおどろくしき事と、耳留りける。少將「さて、か

の北の方には斯くともものしつや。かの志ことに思ひ始め給ふらむに、引き違へ

たらむ、僻々しくねぢけたる様にとりなす人もあらむ。いざや」と思したゆたひ

たるを、媒何か北の方も、かの姫君をば、いとやむごとなきものに思ひかしづき

奉り給ふなりけり。唯中のこのかみにて、年もおとなび給ふを、心苦しき事に

思ひて、其方にとおもむけて、申されけるなり」と聞ゆ。月頃は、又なく、世の

常ならずかしづくと言ひつるものの、うちつけに斯く言ふも如何ならむ、と思へ

ども、猶ひとわたりは、つらしと思はれ、人には少し譏らるとも、ながらへて頼

(二五)

(二六)

(一)少將

(二)少將は實に得難き聖君なれば

(三)少將から言込のあるを幸に極めて仕舞ふがよかるべし

(四)常陸守が

(五)少將が外へ氣がむいて仕舞ふべし

(六)唯々はげる心配のない實際を申上げるのぢや

(七)少將の現在の俸祿などの不足の點は

(八)下にも置かず大事にすべし

(九)中途で我が死にたりとも

(一〇)此裏の外に所有權を争ふ人はなし

(一一)此少將に奉らんとする娘は別段の愛子也

(一二)少將が大事にしてくれるなら  
(一三)少將を  
(一四)後桶の處は私が確に引受くべし  
(一五)少將の爲にも

この君ぞ、帝にも親しく仕う奉り給ふなる。御心はた、いみじう警策に、重々し

くなむおはしますめる。あたら人の御婚を、かう聞え給ふ程に思ほし立ちなむこ

そよからめ。かの殿には、我もく婿とり奉らむと申す所々侍るなれば、こよ

に澁々なる御けはひあらば、外さまにも思しなりなむ。これ唯後安きことをとり

申すなり」と、いと多く、よけに言ひつゞくるに、いとあさましく鄙びたる守に

て、打笑みつと聞き居たり。守「この頃の御徳などの、心もとなからむ事はな宣ひ

そ。某命侍らむほどは、頂にも捧げ奉りてむ。心もとなし、何を飽かぬとか

思すべき。たとひあへずして、仕う奉りさしつとも、のこりの寶物、領じ侍る所

所、ひとつにても又とり争ふべき人なし。子ども多く侍れど、これは様異に思ひ

そめたる者に侍り。唯真心に思しかへりみさせ給はば、大臣の位をもとめむと思

し願ひて、世になき寶物をも盡さむとし給はむに、無き物侍るまじ。當時の帝し

か恵み申し給ふなれば、御後見は心もとなかるまじ。これ彼の御爲にも、某が女

- (一) 媒が
- (二) 少將の志は
- (三) 常陸守の承諾してくるの望
- (四) 官人は子供でも
- (五) 奥床しからぬ振舞、繼子の望になるをいふ
- (六) 少將をいふ、以下媒が所謂媒人口をさきく也
- (七) 浮氣に派手をなさく
- (八) 一本に「この頃」とある由なれば、其に隨ひて現在はまだ官卑くて祿も薄き様なれどの意とすべきか
- (九) 少將の
- (一〇) 賤しき人の富めるには勝れり
- (一一) 今度の藏人頭に此少將がなるべき由は帝の仰ありし也
- (一二) 以下所謂帝の仰の趣
- (一三) 少將が
- (一四) 妻を娶りて其實親を後楯にせよ
- (一五) 直に出世させてや

の思ひ給へむ事をなむ、思ひ給へ憚り侍る」と、いと細やかに言ふ。よろしげな  
 めりと嬉しく思ふ。媒、何かと思し憚るべきにも侍らす。かの御志は、唯一所の  
 御許侍らむを願ひ思して、いはけなく年足らぬ程におはすとも、眞實の親の、や  
 むごとなく思ひおきて給へらむをこそ、本意叶ふにはせめ、専らさやうの、ほと  
 りばみたらむ振舞すべきにもあらず、となむ宣ひつる。人柄はいとやむごとなく、  
 おほえ心にくとおはする君なりけり。若き君達とて、好々しくあてびてもおはし  
 まさず、世の有様もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。またこ  
 ろの御徳なき様なれど、自ら人の御けはひのありける様、直人のかぎりなき富と  
 いふめる。勢には、勝り給へり。來年四位になり給ひなむとす。こたびの頭は疑  
 ひなく、帝の御口づからごて給へるなり。萬の事足らひてめやすき朝臣の、妻を  
 なむ定めざなるはや、然るべき人擇りて後見を設けよ、上達部には、我しあれ  
 ば、今日明日といふばかりに、なし上げてむ、とこそ仰せらるなれ。何事もたゞ  
 (二五)

(一) 浮舟を他人がましう  
隔てる

(二) 私には浮舟の事を口  
出しさせぬ事故

(三) 少將から  
(四) 親の私を見込みて御  
申込の事とは

(五) 次女

(六) 聲にならんと

(七) 滅多な人を聲にする  
は心配の種と思ふ故

(八) 少將の親なるべし  
(九) 常陸守が

(一〇) 少將を  
(一一) 少將の人物勝れて  
居る故此人に御奉公申し  
たしと思ひしかど

(一二) 親しみなく  
(一三) 娘を

(一四) 今迄の御趣意を無  
にしたる様に妻が思ふな  
らんと其を案じる

らぬ身に、様々思ひ給へあつかふ程に、母なるものも、これを他人と思ひ分けた  
る事と、くねり言ふこと侍りて、ともかくも口入れさせぬ人のことに侍れば、ほ  
のかに然なむ仰せらるゝ事侍りとは、聞き侍りしかど、某を取所に思しける御心  
は、知り侍らざりけり。さるはいと嬉しく思ひ給へらるゝ御事にこそ侍るなれ。い  
とらうたしと思ふ女の童侍り。數多の中に、これをなむ命にもかへむと思ひ侍る。  
宣ふ人々あれど、今の世の人の御心、定なく聞え侍るに、なか／＼胸痛き目をや  
見むの憚に、思ひ定むる事もなくてなむ、いかで後安くも見給へ置かむと、且  
暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも、若くより參  
り仕う奉りき。家の子にて見奉りしに、いと警策に、仕う奉らまほしと、心づき  
て思ひ聞えしかど、遙なる所に、打續きて過し侍る年頃のほどに、うひくしく  
覺え侍りてなむ、參りも仕う奉らぬを、かゝる御志の侍りけるを、返すぐ畏  
りながら、仰のごと奉らむは易き事なれど、月頃の御心違へたる様に、この人

(三)

(二)

(四)

(五)

(七)

(六)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

(一四)

(一五)

(一六)

(一七)

(一八)

(一九)

(二〇)

(二一)

(二二)

(二三)

(二四)

(二五)

(二六)

(二七)

(二八)

(二九)

(三〇)

- (一)少將に
- (二)浮舟は
- (三)常陸守の娘に非ず
- (四)娘の親が聖を主人の様に尊びて
- (五)地方官の聖になる公達もあるに
- (六)繼娘の聖になつて其様に主人扱にせよとは言ひ憎い事で
- (七)常陸守に珍重されず他の聖より安く思はれて居るはつまらぬと
- (八)少將が
- (九)元々親の常陸守が立派で後楯になる人物なるを見込みて申込みたる也
- (一〇)娘の中に他人が交つて居様とは思はずに浮舟にかゝり合ひし事故
- (一一)少將の本意の通り
- (一二)實娘の聖になる事を
- (一三)自分は知らぬ
- (一四)浮舟は實子同様に思ふべき筈の人なれど
- (一五)自分に實子が多く行届かぬ私が其方を心配して居るを見て

つしかと思ほすほどに、ある人の申しける様、誠に北の方の御腹にもおし給へど、  
 かの殿の御女にはおはせず、君達のおはし通はむに、世の聞えなむ詔ひたる様  
 (三)ならむ、受領の御婿になりたまふかやうの君達は、唯私の君の如く思ひかしづ  
 き奉りて、手に捧けたるごと、思ひあつかひ後見奉るにかよりてなむ、さる  
 (四)振舞し給ふ人々ものし給ふめるを、流石にその御願は強ちなる様にて、をさく  
 (五)受けられ給はで、氣劣りておはし通はむこと、便なかりぬべき由をなむ、切に譏  
 (七)り申す人々あまた侍るなれば、たゞ今思し煩ひてなむ。初より唯、きらくしう、  
 (八)人の後見と頼み聞えむに、堪へ給ふべき御覺をえらび申して、聞えはじめ申しよ  
 なり、更にこと人物し給はむといふ事知らざりければ、本の御志の儘に、まだ  
 (二〇)幼きも數多おはすなるを、許い給はどいと嬉しくなむ、御氣色見てまうで來、と  
 (二一)仰せられつれば」と言ふに、守、更に、かよる御消息侍るよし、委しく承らず。  
 (二二)誠におなじ事に思ふべき人なれど、善からぬ童べあまた侍りて、はかなくしか  
 (二四) (二五)

- (一) 素性貴く
- (二) 貧乏で不足勝て居ながら派手好きなる人の身の終はよい暮しも出来ず人にも輕蔑されるを見れば
- (三) 實娘をやりてもよしと承知する様ならば
- (四) さうしても差支なし
- (五) 少將の媒人常陸守に説きて寵愛の次女を少將に嫁せしめんとなす
- (六) 媒人
- (七) 浮舟に仕へて居る
- (八) 取次に
- (九) 其男は
- (一〇) 逢ひたる事はなき男が來たるは
- (一一) 媒人が言ひ出しにくさうにして
- (一二) 此方に少將が文をよこして浮舟を所望したるに
- (一三) 今月中に婚姻と約束したりしに
- (一四) 吉日を選びて居る中に

せまほしう、見る所ありて思ひ始めし事なり。もはら顔容貌の勝れたらむ女の願もなし。しな貴に艶ならむ女を願はば、やすく得つべし。されど、淋しう事打合はぬ、みやび好める人ののはてくは、物清くもなく、人にも人とも覺えたらぬを見れば、少し人に譏らるとも、なだらかにて世の中を過さむ事を願ふなり。守に斯くなむと語らひて、さもと許す氣色あらば、何かはさも」と宣ふ。

(五) この人は、妹のこの西の御方にある便に、かゝる御文なども取り傳へ始めけれど、守には委しくも見え知られぬ者なりけり。たゞ行きて守の居たりける前に行きて、

媒とり申すべき事ありてなむ」と言はず。守、「このわたりに時々出入はすと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何事言ひにかはあらむ」と、なま荒々しき氣色なれど、媒左近少將殿の御消息にてなむ侍ふ」と言はせられたれば逢ひたり。語らひ難け

なる顔して、近う居寄りて言ふやう、媒此頃内の御方にて、消息聞えさせ給ふを、御許ありて、この月の程にと契り聞えさせ給ふこと侍るを、日をはからひて、い

(二二) (二四)

- (一) 其媒の男は
- (二) 品悪き様子をして
- (三) 地方官杯の筈になる事は人がよくも言はぬ事なれど
- (四) 當世の風で娘の親が非常に大事にして世話してくれるのを取得にして筈になつて居るのである
- (五) 浮舟も内々では實子同様かも知れぬが他人は我が常陸守に詔らひて筈になりたる様に評判すべし
- (六) 先妻腹の娘の筈達
- (七) 我は繼娘の筈を男にて
- (八) 此媒人は追従する嫌
- (九) 此縁談の破るゝを兩方へ氣の毒に思ひて
- (一〇) 實の娘の筈になる御望ならば
- (一一) 實の娘はまだ年弱であつても構はぬ、其娘の方へ御取持すべし
- (一二) 今の北方の腹に三人ある娘の中の望二女を(一三)初浮舟を望二女を(一四)かけて置きながら其をやめて他の娘を望む

つべからむ人もがなと、宣はせしかば、さる便知り給へりと、取り申ししなり。  
 更に浮びたる罪侍るまじき事なり」と、腹悪しく詞多かるものにて申すに、君いと  
 あてやかならぬ様に、少將「さやうのあたりに行き通はむ、人のをさく許さぬ  
 (一) 事なれど、今様の事にて、咎あるまじう、もてあがめて後見だつに、罪隠してな  
 (二) むあるを、同じごと内々に思ふとも、餘所の覺えなむ、へつらひて人の言ひなす  
 (三) べき。源少納言讚岐の守などの、うけぱりたる氣色にて出で入らむに、守にもを  
 (四) さをさ受けられぬ様にて、交はむなむ、いと人けなかるべき」と宣ふ。この人追  
 (五) 従あり、うたてある人の心にて、これをいと口惜しう、此方彼方にいとほしう思  
 (六) ひければ、誠(一〇)に守の女とおほさば、まだ若うなどおはすとも、しか傳へ侍らむ  
 (七) かし。中(一一)にあたるをなむ、姫君とて、守はいとかなしうし給ふなる」ときこゆ。  
 (八) 少將「いさや、初(一二)より然言ひよれる事をおきて、又言はむこそうたてあれ。されど  
 (九) 我が本意は、かの守の主の人からもものくしく、大人しき人なれば、後見にも

- (一) 鏡ども
- (二) 夫のあるのは
- (三) 浮舟
- (四) 少將は
- (五) 萬の憚を忘れて縁組する積になりたる譯なるが
- (六) 婚姻後に少將の仕向が案内な事でもありては
- (七) 仲立の者が
- (八) 少將の様子
- (九) 實娘でなくては一段卑く他人にも思はれて
- (一〇) よく穿鑿もせずしてよい加減な話をするとは不都合なり
- (一一) わが妹が常陸守方に知るべあるによりて
- (一二) 浮舟は鏡どもの中に於て一番大事がらるる由なれば實子ならんと思ひし也
- (一三) 浮舟の
- (一四) 浮舟を寵愛して
- (一五) 名譽にもなる様なきき聲を取らんと
- (一六) 少將がどうかして常陸守方へ取次ぎ呉れる人がはしいと仰せられし故私方に便宜がある由申上げしなり

若き人々あまた侍れど、思ふ人具したるは、自らと思ひ譲られて、この君の御事をのみなむ。はかなき世の中を見るにも、後めたういみじきを、物思し知りぬべき御心さまと聞きて、斯う萬のつよましさを忘れぬべかンめるに、若し思はずなる御心ばへも見え、人笑へに悲しうなむあるべき」と言ひけるを、少將の君にまうでて、「云々なむ」と申しけるに、氣色あしくなりぬ。少將「初より更に、守の御女にあらざといふ事をなむ聞かざりつる。同じことなれど、人聞きも氣劣りたる心地して、出入せむにもよからずなむあるべき。ようも案内せで、浮びたる事を傳へける」と宣ふに、いとほしくなりて、媒、委しくも知り給へず。女どもの知りたる便にて、仰言を傳へはじめ侍りしに、中にかしづく女とのみ聞き侍れば、守のにこそはとこそ思ひ給へつれ。他人の子持給へらむとも、問ひ聞き侍らざりつるなり。容貌心も勝れてものし給ふこと、母上のかなしうし給ひて、おもだたしう氣高き事をせむと、崇めかしづかると聞き侍りしかば、いかで彼邊の事傳へ



- (一) 宮中の音籠掛
- (二) 眞どもに
- (三) 娘が一曲習ひ終れば
- (四) 常陸守が
- (五) 輕薄なる
- (六) 唄が
- (七) 實子の假を母君が浮舟よりは可愛がらぬと
- (八) 北方浮舟を左近少將に嫁せしめんとす、少將浮舟を嫌ふ
- (九) 待ち遠にして
- (一〇) 少將の心底
- (一一) 少將の文を取次ぎたる人の
- (一二) 浮舟につきては常陸守に氣兼する點のある上
- (一三) 少將が
- (一四) 少將が
- (一五) 婚姻は八月と定めたるが
- (一六) 浮舟は父親のなき子故
- (一七) 自分の手一つでする様なもの故
- (一八) 萬事不行届に少將に思はれはせぬかと

りにて、琴、琵琶の師とて内教坊のわたりより、迎へ取りつゝ習はず。手ひとつ弾き取れば、師を立ち居をがみて喜び、祿を取らすること埋むばかりにて、もて騒ぐ。はやりかなる曲のものなど教へて、師と、をかしき夕暮などに、弾き合せて遊ぶ時は、涙をつよまず、をこがましきまで、流石に物めでしたり。かゝる事どもを、母君は少し物の故知りて、いと見苦しと思へば、ことにあへしらはぬを、常「あこをば思ひ貶し給へり」と、常に怨みけり。

(七)

かくてかの少將、契りし程を待ちつけて、「同じくば疾く」と責めければ、我が心ひとつに斯う思ひ急ぐも、いとつよましよう、人の心の知り難きを思ひて、初より傳へ初めける人の來たるを、近う呼び寄せて語らふ。北方「萬多く思ひ憚る事のあるを、月頃かう宣ひて程經ぬるを、なみく／＼の人にも物し給はねば、辱う心苦しうて、斯う思ひ立ちにたるを、親などものし給はぬ人なれば、心ひとつなるやうにて、かたはらいたく、打ちあはぬ様に見え奉る事もやと、かねてなむ思ふ。

(二五)

(二六)

(二七)

(二八)



- (一) 學才は人にも認められ居れども
- (二) 今迄の女と縁を切りて
- (三) 浮舟に懸想しつゝあり
- (四) 以下母の心
- (五) 了簡もすわりて
- (六) 人柄も上品なり
- (七) 身分よき人は何といひても我々の處へは寄りつかぬ
- (八) 浮舟に少將の文を取次ぎて
- (九) 母が
- (一〇) 浮舟を
- (一一) 浮舟の器量よきを認めたらば
- (一二) 婚姻の期を
- (一三) 母が少將に約束して
- (一四) 遊びの道具を拵へても
- (一五) 浮舟に與へんとて
- (一六) 下等品を
- (一七) 常陸守に
- (一八) 常陸守は何といふ事なしに道具といふ道具は皆集めあきて
- (一九) 澤山置き重ねたる形容

かに、才ざいありといふ方は人に許ゆるされたれど、きらくしう今いまめいてなどは、えあらぬにや、通かよひし所ところなども絶たえて、いと懇ねんころに言いひわたりけり。この母君、數多あまたかよる事こといふ人々の中に、この君は人柄ひとがらも目安めやすかななり、心定こころさたまりて物思ものおもひ知りぬべかかめるを、人もあてなりや、これより勝まさりて、ことごとしき際きはの人ひとはた、かよるあたりを、さはいへど尋たづね寄よらじ、と思おもひて、この御方おんかたに取りつぎて、さるべき折々せりは、をかしき様に返かへり事ことなどせさせ奉たてまつる。心こころひとつに思おもひまうけて、守かみこそ疎おろかに思おもひなすとも、我われは命いのちをも譲ゆづりてかしづきてむ、様容さまかたち貌かたちのめでたきを見つみきなば、さりとも、疎おろかになどは、よも思おもふ人ひとあらじ、と思おもひ立ちて、八月はつきばかりと契ちぎりて、調度てうどをまうけ、はかなき遊物あそびものをせさせても、様殊さまことに様やうをかしう、蒔繪まきゑ螺鈿らでんのこまやかなる心こころばへ勝まさりて見みゆる物ものをば、この御方おんかたにと取りかくして、劣おとのを、「これなむ良よき」とて見みすれば、守かみはよくしも見み知らず、そこはかとなき物ものども、人の調度てうどといふ限かぎりは、唯取ただとり集あつめて並ならべするつよ、目めを僅わずかにさし出いづばか

(一)母が  
 (二)常陸守  
 (三)親戚も卑しからず  
 (四)富有なれば  
 (五)身分相應に高く構へ  
 (六)大層に構へたるに合  
 せては、常陸守の性質  
 (七)常陸守が  
 (八)物言ひが詭りたる様  
 にて  
 (九)権門勢家を恐しがり  
 (一〇)ぬけ目なく用心深  
 き風あり  
 (一一)花やかなる道即ち  
 音楽などの方には心得な  
 く  
 (一二)斯かる下品なる家  
 なるにも拘らず  
 (一三)若き宮仕女ども此  
 家に々集り  
 (一四)庚申の夜眠れば三  
 日晷といふ晷天に上りて  
 人の悪を天帝に告ぐると  
 いふ佛説に上りてこの夜  
 は起きて居るを庚申待又  
 は庚申ともいふ此時退  
 屈なる故歌合音楽其他様  
 様の遊をするや  
 (一五)きらびやかにて他  
 人からは見苦しく思はる  
 る程  
 (一六)鏡に懸想せる人々  
 (一七)浮舟が  
 (一八)浮舟をよい様に評  
 判して

東

屋

て見奉らばやと、且暮まもりて、撫でかしづく事限なし。守も賤しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、中らひも物きたなき人ならず、徳いかめしうなどあれば、程々につけては思ひあがりて、家の内もきら／＼しく、物清けに住みなし、事好したる程よりは、怪しう荒らかに田舎びたる心ぞつきたりける。若うより、さる東の方の、遙なる世界に埋もれて、年経ればにや、聲などほと／＼うち歪みぬべく、物うち言ふ、少しだみたる様にて、豪家のあたり恐ろしく、煩はしきものに憚りおち、すべていと全く隙間なき心もあり、をかしき様に、琴笛の道は遠う、弓をなむいとよく引きける。直々しきあたりとも言はず、勢にひかされ、よき若人どもつどひ、装束有様はえならず整へつよ、腰折れたる歌合物語、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、この懸想の君達、「らう／＼」じくこそあるべけれ、容貌なむいみじかなる」など、をかしき方に言ひなして、心を盡しあへる中に、左近少將とて、年二十二ばかりの程にて、心ばせしめや

(一) 蕪の本氣で懸想して居るとは思はれぬ事故

(二) 蕪の身分の

(三) 此方の身分がよくば蕪を聲に取りたいものなれど杯と北方が思へり

(四) 常陸守の息子等

(五) 先妻の子

(六) 今の妻即中將の君腹

(七) 常陸守が實子の世話

をのみ焼きて

(八) 浮舟を他人と思ひて

(九) 北方中將の君が

(一〇) 浮舟を

(一一) 浮舟の器量が一通りて常陸守の實子共と一つにして置いても似合はしき位ならば、母も左程苦勞もせず實子共と同様に人にも思はせて通りもするのであるが

(一二) 浮舟は水際だちて上品に育ちし故

(一三) 母が

(一四) 常陸守の娘の許へ手紙などをよこす者

(一五) 先妻腹の娘

(一六) 片附けて

(一七) 浮舟を

おこせけれど、(一)まめやかに御心留るべき事とも思はねば、(二)唯然までも尋ね知り給

ふらむ事とばかり、(三)をかしう思ひて、(四)人の御程の、(五)たゞ今の世に有り難けなるを

も、(六)數ならましかばなどぞ、(七)萬に思ひける。

守の子どもは、(八)母なくなりけるなど數多、(九)この腹にも、(一〇)姫君とつけてかしづく

あり。(一一)まだ幼きなど、(一二)次々に五六人ありければ、(一三)様々にこの扱をしつと、(一四)他人

と思ひて隔てたる心のありければ、(一五)常にいとつらきものに守をも怨みつと、(一六)いか

で引きすぐれて、(一七)おもだたしき程にしなしても見えにしがなと、(一八)旦暮この母君は

思ひ扱ひける。(一九)様容貌の、(二〇)斜にとり交せてもありぬべくは、(二一)いと斯うしも何かは

苦しきまでも、(二二)もて惱ままし、(二三)同じこと思はせてもありぬべき世を、(二四)物にもまじ

らず、(二五)哀にかたじけなく生ひ出で給へば、(二六)あたらしく心苦しきものに思へり。(二七)女

多かりと聞きて、(二八)なま君達めく人々も、(二九)音なひ言ふ、(三〇)いと數多ありけり。(三一)初の腹

の二三人は、(三二)皆様々にくばりて、(三三)大人びさせたり。(三四)今は我が姫君を、(三五)思ふやうに

東屋

梗

榮

●常陸守娘どもをかしづく。北方浮舟をかしづく。  
 ① 常陸守娘どもをかしづく。北方浮舟をかしづく。  
 ② 北方浮舟をかしづく。  
 ③ 少將の媒人、常陸守左近少將に嫁せしめんとす。少將浮舟を嫁ふ。  
 ④ 少將、常陸守の次女に説きて寵愛の次女を少將に嫁せしめんとす。  
 ⑤ 少將の心變りを知れる北方の憂悶。  
 ⑥ 少將、常陸守の望になる。  
 ⑦ 浮舟二條院に預けらる。母北方を隙見す。  
 ⑧ 母北方、中君に浮舟の處置を謀る。中君、黨に浮舟の事を語る。母北方、黨を隙見す。中君、浮舟を黨に許さん事を勸む。  
 ⑨ 匂宮、母北方の車を見て怪しむ。  
 ⑩ 匂宮思はず浮舟を見つけて手籠にせんとす。  
 ⑪ 中君、浮舟を慰む。  
 ⑫ 浮舟の乳母、母北方に浮舟の近狀を語る。浮舟三條の別宅に隠さる。  
 ⑬ 母北方、少將を隙見す。歌を少將に贈る。浮舟をもてあます。  
 ⑭ 母北方、かくれ家に文を贈りて浮舟を慰む。  
 ⑮ 薰、宇治に行く。辨の尼に浮舟を媒せん事を頼む。  
 ⑯ 辨の尼、浮舟を訪ふ。  
 ⑰ 薰、浮舟を訪ふ。

●常陸守娘どもをかしづく、北方浮舟をかしづく  
 (一) 黨が浮舟に心を懸けては居るものゝ自分から挑みかけるのも見つともなき程の身分輕き相手なれば、筑波山は山繁山繁けれど思ひ入るには障らざりけり。浮舟は常陸守の娘分故此歌によりて書けり  
 (二) 浮舟へ  
 (三) 辨の尼  
 (四) 薰の

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、は山の茂りまで強ちに思ひ入らむも、いと人間輕々しう、  
 傍痛かるべき程なれば、思し憚りて、御消息をだにえ傳へさせ給はず。かの尼君の許よりぞ、母北の方に、  
 宣ひし様など、度々ほのめかし



に、何時いつのほどなる御契おんちぎりにかは」と、打笑うちわらひて、辨わからば然傳しかつたへ侍らむ」とて入るに、

鶯うぐいすかほ鳥とりの聲こゑもきよしにかよふやとしけ木きをわけて今日けふぞ尋ぬる  
唯口ただぐちずさみの様やうに宣のたまふを、入いりて語かたり聞きえけり。

(一)大君に似たる人もあ  
るかと草木を分けて今日  
も此處まで來たり、かは  
鳥はうつくしき鳥  
(二)尼が淨舟に



(一) 頼みおきたる浮舟方  
への傳言はどろしたぞ

(二) 浮舟に

(三) 薫の思召の趣は

(四) 浮舟を大君の代とは  
恐入りたる身代りなりと  
申されしが

(五) 薫が御忙しき様に聞  
きたり、恰も薫が女二宮  
を娶る頃なり

(六) 斯様々々と申上げも  
せざりしに

(七) 浮舟が初瀬へ

(八) 浮舟が尼方に親しみ  
寄るも故八宮の由縁を思  
へばなり

(九) 中將の君

(一〇) 浮舟が

(一一) 薫の居らるゝ事を  
告げるにも及ばぬと思ひ  
て浮舟には黙つて居る

(一二) わが微行の様子を  
知らせたくなしとて

(一三) 浮舟の一人て來た  
のが却て氣易し

(一四) 子が偶然來合せた  
るも深き縁なりと浮舟に  
傳へよ

(一五) あまり突然で深き  
縁などとはまだ言はれぬ

るを、如何にぞかの聞えし事は」と宣へば、辨しか仰言侍りし後は、さるべき序

侍らばと待ち侍りしに、去年は過ぎて、この二月になむ、初瀬詣のたよりにはじ

めて對面して侍りし。かの母君に、思召したる様はほのめかし侍りしかば、いと

かたはらいたく辱き御よそへにこそは、侍るなれ、などなむ侍りしかど、その

頃ほひは、のどやかにもおはしませずと承りし、折便なく思ひ給へつよみて、

斯くなむとも聞えさせ侍らざりしを、又この月にもまうでて、今日歸り給ふな

めり。行き歸りの中宿には、かう睦びらるよも、唯過ぎにし御けはひを尋ね聞ゆ

る故になむ侍るめる。かの母君は、障る事ありて、此の度はひとり物し給ふめれ

ば、斯くおはしますとも、何かは物し侍らむとて」と聞ゆ。薫田舎びたる人ども

に、恐びやつれたるありきも見えじとて、口かためつれど、如何あらむ。下衆ど

もは隠あらじかし。さて如何すべき。一人物し給ふらむこそなかく、心やすか

なれ。かく契深くてなむ参り來あひたると傳へ給へかし」と宣へば、辨「うちつけ

(二四)

(二五)

(二六)

(一) 浮舟の  
(二) 中君にも  
(三) 鶯の心  
(四) 身分も頼き柄も是より以下なる女でも是程似て居る女を見ては

(五) 八宮には

(六) 八宮の

(七) まだ此世に生きて居られしに我は君を死せしと思ひしよと、浮舟を何處迄も大君にして言ふ詞  
(八) 方士をして楊貴妃の在處を蓬萊山まで尋ねさせて鉄だけを持來らせて見し玄宗は、以下鶯の心  
(九) 浮舟は大君とは別人なれど

(一〇) 畢竟浮舟に宿縁のあるのであらう

(一一) 鶯が近處に居て覗くならんと尼は合點したれば

(一二) 鶯  
(一三) 浮舟の

する聲けはひの、ほのかなれど、宮の御方にもいとよく似たりと聞ゆ。哀なりけ  
(二) (三) (四)

る人かな、斯かりけるものを、今まで尋ねも知らで過しける事よ、これより口惜  
(四)

しからむ際のしなならむゆかりなどにてだに、かばかり通ひ聞えたらむ人を見て  
(四)

は、疎かには思ふまじき心地するに、ましてこれは、知られ奉らざりけれど、誠  
(五)

に故宮の御子にこそはありけれ、と見なし給ひては、限なく哀に嬉しく覺え給ふ。  
(六)

たど今も這ひ寄りて、世の中におはしけるものをと言ひ慰めまほし、蓬萊まで尋  
(七)

ねて、かんざしの限を傳へて見給ひけむ帝は、猶いといふせかりけむ、これはこ  
(七)

と人なれど、慰所ありぬべき様なり、と覺ゆるは、この人に契のおはしけるに  
(八)

やあらむ。尼君は物語少しして疾く入りぬ。人の咎めつるかをりを、近くて覗き  
(九)

給ふなめりと心得てければ、打解けごととも語らはずなりぬるなるべし。  
(一〇)

日暮れもて行けば、君もやをら出でて、御衣など著給ひてぞ、例召し出づる障子  
(一一)

口に、尼君召し出で給ひて、有様など問ひ給ふ。鶯折しも嬉しくまうで來合ひた  
(一二)

宿

木

(一) 薫の  
 (二) 氣をきかせて  
 (三) 薫は兼て浮舟を見た  
 しと仰せられし事故、以  
 下辨の尼の心  
 (四) 薫の領地の役人等が  
 辨當などを持参したるを  
 尼の方にもくれたるを

(五) 浮舟方  
 (六) 浮舟の侍女の譽めた  
 る

(七) 今日然も遅くはどろ  
 して來られしぞ

(八) 長い間ぐづぐづして  
 出立したり

(九) 浮舟を

(一〇) 側を向きて居たる

(一一) 薫の方からは

(一二) 大君をも

(一三) 九で大君もつくり

今の程うち休ませ給へるなり」と、御供の人々心しらひて言ひたりければ、この君

を尋ねまほしけに思し宣ひしかば、かゝる序に物言ひ觸れむと思ほすによりて、

日を暮し給ふにや、と思ひて、かく覗き給ふらむとは知らず、例の御庄の預ど

もの參れる、破籠や何やと、此方にも入れたるを、東人どもにも食はせなど、事

ども行ひおきて、うち假粧じて、客人の方に来たり。譽めつる裝束、けにいと

はらかにて、みめもなほ由々しく清けにぞある。辨、昨日おはし著きなむと待ち聞

えさせしを、などか今日も日闌けては」と言ふめれば、この老人、乳母いと怪し

う苦しげにのみせさせ給へれば、昨日はこの泉河のわたりに留りて、今朝も無

期に御心地ためらひてなむ」と答へて、起こせば今ぞ起き居たる。尼君を恥らひ

て、そばみ居たるかたはらめ、これよりはいとよく見ゆ。誠にいと由あるまみの

程、かんざしのわたり、彼をも、委しくつくぐとしも見給はざりし御顔なれど、

これを見るにつけて、唯それと思ひ出でらるよに、例の涙おちぬ。尼君の答うち

(一) 浮舟の處へ  
(二) 飲料の湯也  
(三) もし之を召上れ  
などと云ひて浮舟をもこ  
せど

(四) 斯かる様子を見なれ  
ぬ薫の目には

(五) 浮舟以上の美人を、  
以下作者の薫に對する評

(六) 薫が  
(七) よくの事でないけ  
れば目につかず

(八) 堅すぎるとて人に批  
難される位なるに

(九) 浮舟はどれ程の美人  
でもなきに

(一〇) 薫の方へも案内を  
言越したれども

(一一) 薫は御不快で

宿

木

しかど、東にてかよる薰物の香は、え合せ出で給はざりきかし。この尼君の住居は、かくいと幽におはすれど、装束のあらまほしく、鈍色青鈍といへど、いと清らにぞあるや」など譽め居たり。彼方の簀子より童來て、童「御湯など參らせ給へ」とて、折敷どもも取り續きてさし入る。菓子取り寄せなどして、侍女「ものけ給はる。これ」などおこせど、驚かねば、二人して、栗などやうの物にや、ほろくくと食ふも、聞き知らぬ心地には、かたはらいたうて退き給へど、又ゆかしくなりつゝ、猶立寄りく見給ふ。これより勝るきはの人々を、後の宮をはじめて、此處彼處にて、容貌よきもあてなるも、こよら飽くまで見あつめ給へれど、おほろけならでは、目も心もとどまらず、あまり人にもどかるよまで、ものし給ふ御心地に、たゞ今は、回ばかり勝れて見ゆる事もなき人なれど、かく立去り難く、強ちにゆかしきも、いと怪しき心なり。

尼君は、この殿の御方にも、御消息聞え出したりけれど、「御心地なやましとて、

(一〇)

(一一)

一三二

(一)侍女等は  
(二)浮舟は難儀さうに躊躇して  
(三)長くかくりて下りての意なるべし

(四)濃紅色の  
(五)黨の覗き居る所の障子

(六)浮舟が  
(七)二月にも初瀬に詣てしなるべし

(八)旅行は  
(九)何處も氣安い事ぢや

(一〇)前に見えたる二人の侍女也

(一一)浮舟  
(一二)浮舟の様子

(一三)常陸前司の娘など言ふべき身分早しき女とは見えず

(一四)黨が久しく立ち居

(一五)尼をいふ

(一六)常陸介の北方が非常な御自慢なりしかど

この人々は安らかに下りなしつれど、いと苦しげにやよみて、久しく下りてゐざり入る。濃き桂に、撫子とおほしき細長、若苗色の小桂著たり。四尺の屏風を、

この障子に添へて建てたるが、上より見ゆる穴なれば、残る處なし。此方をば後

めたけに思ひて、彼方さまに向きてぞ、添ひ臥しぬる。侍女さも苦しげにおはし

ましつるかな。泉河の船渡も、誠に今日はいと恐しうこそありつれ。この二月

には、水の少かりしかば善かりしなりけり。いでや、ありきは、東路を思へば、何處

か恐ろしからむ」など、二人して苦しとも思ひたらず言ひ居たるに、主は音もせて

ひれ臥したり。腕をさし出でたるが、圓らかにをかしけなる程も、常陸殿など言

ふべくも見えず、誠にあてなり。やうく腰痛きまで立ちすくみ給へど、人のけ

はひせじとて、猶動かで見給ふに、若き人、侍女あな芳しや。いみじき香の香こ

そすれ。尼君の焚き給ふにやあらむ」と驚く。老人、侍女誠にあなめでたの物の香や。京人は猶いとこそみやびかに今めかしけれ。天下にいみじき事と思したり

(二五)

(二六)

- (一) 藁が浮舟の様子を
- (二) 藁の衣の音がする故
- (三) ばかりを
- (四) 浮舟が車より
- (五) 藁はかの車が浮舟なりと聞くと早速
- (六) 邸内の人々に口止をしたる故
- (七) 他の所に居られる
- (八) 同乗したる若き侍女
- (九) 今下りたる女は
- (一〇) 侍女、乳母なるべし
- (一一) 又も極りを仰しやる
- (一二) 得意になりて
- (一三) 浮舟が
- (一四) 大君を思ひ出させ
- (一五) 藁が
- (一六) 低くなりて居るを

宿 木

穴あなより覗のぞき給たまふ。御衣おんぎの鳴なれば、脱ぬぎおきて、直衣指貫なほしさしぬきの限かぎりを著きてぞおはする。  
 (一) とみにも下おりて、尼君あまぎみに消息せうそくして、斯かくやむごとくなけなる人のおはするを、誰たれぞ  
 (四) など案内あないするなるべし。君きみは、車くるまをそれと聞き給たまへるより、藁わらゆめ、その人ひとに  
 (五) まろありと宣のたまふな」と、まづ口くちがためさせ給たまひてければ、皆然みなきこころ心得こころて、人々ひとはや  
 (六) く下おりさせ給たまへ。客人きやくじんはものし給たまへど、他方こころになむ」と言いひ出いしたり。若わかき人ひとの  
 (七) ある、まづ下おりて、簾すだれうち揚あぐめり。御前ごぜんどもの様さまよりは、このおもと馴なれてめ  
 (八) やすし。又大人またおとなびたる人今一人下おりて、「早はやう」といふに、浮舟うきふね「怪あやしくあらはなる  
 (九) 心地こころこそすれ」と言いふ聲こゑ、仄ほのかなれどいとあてやかに聞きゆ。侍女しよじよ「例れいの御おんこと。此方こなたは  
 (一〇) 前々まぎぎもおろし籠こごめてのみこそは侍はべるめれ。さては又何處またいづこのあらはなるべきぞ」と、  
 (一一) 心こころをやりて言いふ。つよましけに下おるよを見みれば、まづ頭かしらつき様體細やうたいほそやかにあてな  
 (一二) る程ほどは、いとよう物思ものおもひ出いでられぬべし。扇あふぎをつとさし隠かくしたれば、顔かほは見みえぬ  
 (一三) 程心ほどこころもとなくて、胸打むねうちち潰つぶれつと見みたまふ。車くるまは高く、下おるよ所ところは下くだりたるを、  
 (一四) (一五) (一六)

(一) 薫が宇治の舊邸に入りて

(二) 薫が

(三) 訛りたる

(四) 浮舟

(五) 行きにも

(六) おもく其こそ辨に聞きし浮舟ならんと

(七) 薫の供人をば

(八) 浮舟の車を引入れよ

(九) 他に御客があれど其は奥の座敷に居る故表の方は差支なし

(一〇) 宇治邸の人をして

(一一) 薫の

(一二) 薫の並々ならぬ人たるべき様子が知れるものと見えて

(一三) 浮舟方の人々が懼りて

(一四) 邪魔にならぬ様にのけて置きて

(一五) 浮舟の

(一六) 格子を下して戸締りしてある

を見給ひ過ぎむが猶哀なれば、其方さまにおはするに、女車の事々しき様には

あらぬ一つ、荒ましき東男の、腰に物負へる數多具して、下人も數多く頼もし

けなる氣色にて、橋より今渡り來る見ゆ。田舎びたるものかなと見給ひつよ、殿

はまづ入り給ひて、御前どもなどはまだ立騒ぎたる程に、この車もこの宮をさし

て來るなりけりと見ゆ。御隨身どもかやくと言ふを制し給ひて、「何人ぞ」と問

はせ給へば、聲うち歪みたる者、「常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺にまうでて

歸り給へるなり。初もこよになむ宿り給へりし」と申すに、おいや聞きし人なッな

りと思し出でて、人々をば他方にかくし給ひて、「はや御車入れよ。此處に又人や

どり給へど、北面になむ」と言はせ給ふ。御供の人も皆狩衣姿にて、事々しから

ぬ姿どもなれど、猶けはひや著からむ、煩はしけに思ひて、皆馬ども引きさけな

どしつよ、畏りつよぞ居る。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。この寢殿は

まだあらはにて、簾もかけず。おろし籠めたる中の二間に立て隔てたる、障子の

(二六)





(一) 四方に庇ある絲毛の車、高貴の人なちては用ひざるもの  
 (二) 金張の金具を用ひたる車  
 (三) 網代車  
 (四) 御供の車  
 (五) 蕪方の人々

(六) 女二の容貌  
 (七) 此處が缺點と見ゆる所  
 (八) 斯かる佳人を妻にしたる我が運、蕪の心  
 (九) 其が爲に大君の事が忘れられよいが  
 (一〇) 蕪の心  
 (一一) かゝるつらき目にあひたるは斯くくの報なりしと悟りて  
 (一二) 宇治の寺

● 蕪宇治に行く、浮舟の初瀬詣の歸途宇治の山莊に宿するに逢ふ  
 (一三) 四月の  
 (一四) 蕪が  
 (一五) 辨の尼を尋ねずして歸るのが、前の尼の歌により朽木といへる也

さながら御送仕う奉らせ給ひけり。廂の御車にて、廂なき絲毛三つ、檳榔毛の黄金づくり六つ、たゞの檳榔毛二十、網代二つ、女房三十人、童下仕八人つつ侍ふに、又御迎のいだし車ども十二、本所の人々乗せてなむありける。御送の上達部殿上人の祿など、いふ限なき清らを盡させ給へり。

斯くて心安く打解けて見奉り給ふに、いとをかしけにおはす。小やかにあてにし

めやかにて、こよはと見ゆる所なくおはすれば、宿世の程口惜しからざりけりと、

心傲せらるよものから、過ぎにし方の忘らればこそはあらめ、猶紛るよ折なく、

物のみ戀しく覺ゆれば、この世にては慰めかねつべきわざなめり、佛になりて

こそは、怪しくつらかりける契のほどを、何の報とあきらめて思ひ離れめ、と思

ひつと、寺のいそぎにのみ心をば入れ給へり。

賀茂の祭など、さわがしきほど過して、二十餘日の程に、例の宇治へおはしたり。

造らせ給ふ御堂見給ひて、すべき事ども掟て宣ひなどして、さて例の朽木のもと

(二) 藤の花の美しきを嘯美したる也

(一) 帝の御寮になりたる藟の仕合よきを嘯へて言へるなり

(三) 紅梅

(四) 少しは間違ひもあるかも知れぬ

(五) 別に面白い歌もなかりし様なり

(六) 蕙

(七) 備馬樂の曲名

(八) 合唱

(九) 夕霧

(一〇) 今上より

(一一) 女二を輩が三條邸へ引取れり

(一二) 藤宴に列したる女官等全部

また誰とか、

君がため折れるかざしはむらさきの雲におとらぬはなのけしきか

紅梅世のつねのいろとも見えす雲居までたちのほりけるふちなみの花

これや此の腹だつ大納言のなりけむとこそ見ゆれ。かたへは僻事にもやありけむ。

かやうに、殊なるをかしき節も無くのみぞあなりし。夜更くるまよに、御遊い

と面白し。大將の君の、「あなたふと」謠ひ給へる聲ぞ、限なくめでたかりける。

按察も、昔勝れ給へりし御聲のなごりなれば、今もいと物々しくて、うち合せ給

へり。左の大殿の御七郎、童にて笙の笛ふく。いとうつくしかりければ、御衣賜

はす。大臣下りて舞踏し給ふ。曉近くなりてなむ歸らせ給ひける。祿ども、上

達部、親王達には、上より賜はす。殿上人樂所の人々には、宮の御方より品々賜

ひけり。

その夜さりなむ、宮まかでさせ奉り給ひける。儀式いと心ことなり。上の女房

(一)斯かる事は又とあるまじ、下の事をいふ  
 (二)女二を禁中に置きながら平人なる薫が通ひ行きて

(三)藤の宴には出席して

(四)其作歌は

(五)上流の人々とても歌は別段よくもなけれど

(六)次の歌は

(七)帝の冠に挿すべき藤花を折りて差上げたる時の歌なりとか  
 (八)折るとて

(九)得意らしきが憎らし

がらは實に契ちぎりことなめれど、何ぞ、時の帝ときのみかひの斯くおどろくしきまで婿むこかしづ

きし給ふべき。またあらじかし、九重ここのへの内うちにおはします殿とのちか近ちかきほどにて、唯人たれひとの

打解うちごけ侍きみちひて、果(一)は宴えんや何なにやと、もて驩きわがるゝ事(三)は「など、いみじく謗そしりつふやき

申し給ひけれど、さすがゆかしかりければ、参まゐりて、心こころの中にぞ腹はら立ちる給ひけ

る。紙燭しそくさして歌うたども奉たてまつる。文臺ぶんたいのもとに寄りつゝ置おくほどの氣色けしきは、各おのした

り顔かほなりけれど、例(四)の如何いかに怪あやしけに古ふるめいたりけむと思おもひやれば、あながちに

皆みなも尋たづね書かかず。かみの町まちの上じやうらふ藤ふとて、御口おんくちつきどもは、特ことなること見みえざしめ

れど、しるしばかりとて、一つ二つぞ問とひ聞ききたりし。これ(六)は、大將たいしやうの君きみの、下お

りて御おんかざし折をりて参まゐり給たまへりけるとか。

點(七)すべらぎのかざしに折をるとふぢの花はなおよばぬえだに袖そでかけてけり

うけぱりたるぞ憎にくきや。

今上(九)よろづ世よをかけてにははむ花はななれば今日けふをもあかぬ色いろとこそみれ





(一)夕霧が重ねて自分の  
み天盃を頂戴するも面白  
からず、さりとして之を宮  
達に譲らんとすれば又生  
憎相當の人居合せぬ故其  
孟を驚に譲りたるを  
(二)驚が辭したるを  
の御意が謀にと譲りしも  
のと見えて

(三)禮が

(四)物音を靜むる詞、天  
孟頂戴の時に敬意を表し  
て言ふなるべし

(五)帝の御聲也大將也と  
思つて見る故立派に見え  
るのかも知れぬ

(六)別の酒を飲むをいふ  
天盃の酒を飲むをいふ

(七)庭上に降りて御禮を  
申上ぐる也

(八)天盃を

(九)身分に限れば蘭が  
元の下座に着席する也

(一〇)蘭の如き面目を施  
すべしと

(一一)按察が其藤壺女御  
に懸想したりしに

(一二)藤壺が入内の後も  
授けたり

(一三)按察が文などを贈  
りて

(一四)女二を

(一五)聲になりたき望を  
藤壺に言ひ出したれど藤  
壺取次もせざりし故

(一六)蘭は成程高運の人  
らしくは見ゆれど

督御まかなひ仕う奉り給ふ。御盃まゐり給ふに、大臣、しきりては便なかるべ

し、宮達の御中に、はた然るべきもおはせねば、大將にゆづり聞え給ふを、憚り

申し給へど、御氣色も如何ありけむ、御盃捧けて、「をし」と宣へる聲遣ひもて

なしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとど見なしさへ添ふ

にやあらむ。さし返し賜はりて、下りて舞踏し給へるほど、いと類なし。上臈の

親王達大臣などの賜はり給ふだにめでたき事なるを、これはまして御婚にて、も

てはやされ奉り給へる御おほえ、疎ならず珍らしきに、限あれば、下りたる座

に歸りつき給へる程、心苦しきまでぞ見えける、按察の大納言は、我こそかよる

目も見むと思ひしか、ねたのわざや、と思ひ居給へり。この宮の御母女御をぞ、

昔心がけ聞え給へりけるを、參り給ひて後も、猶思ひ離れぬ様に、聞えかよは

しなどし給ひて、果は宮を得奉らむの心つきたりければ、御後見望む氣色ももら

し申しけれど、聞召しだに傳へずなりにければ、いと心やましと思ひて、按察人

(一)女二

(二)女三

(三)柏木の鬘が夕霧の妻に現はれて色々祕藏の笛につきて頼みし事横笛の巻にあり

(四)今上かたて稱美ありたる故

(五)此度を除きては

(六)薫が

(七)薫

(八)柏木の鬘が此笛は自分も中々十分には吹き難しといひし詞を受けて今日ぞといへり

(九)餅の類

(一〇)藤色のぼかし染の地に藤枝を縦模様にしたる切を敷布に用ひたり

(一一)盤

ぶらひ給ふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、樂

所の人々召して、暮れ行くほどに、雙調吹きて、上の御あそびに、宮の御方より、

御琴ども笛など出させ給へば、大臣をはじめ奉りて、御前にとりつゝ参り給ふ。

故六條院の御手づから書き給ひて、入道宮に奉らせ給ひし琴の譜二卷、五葉の

枝につけたるを、大臣取り給ひて奏し給ふ。つぎくに、琴、箏の御琴、琵琶、和

琴など、朱雀院の御物どもなりけり。笛は、かの夢に傳へし、古のかたみのを、

また無きものの音なりと、めでさせ給ひければ、この折の清らより又は、何時か

ははえくしき序のあらむと思して、取う出給へるなめり。大臣和琴、三宮琵琶

など、とりくに賜ふ。大將の御笛は、今日ぞ世になき音のかぎりは吹き立て

給ひける。殿上人の中にも、唱歌につきなからぬどもは召し出でつゝ、いと面白く

遊ぶ。宮の御方より、粉熟まるらせ給へり。沈の折敷四つ、紫檀の高杯、藤の村

濃の打敷に、折枝縫ひたり。銀の様器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛

(一) 蕪がこゝに誇りたる程の悪き人物ならば帝が聖にして親み給ふ筈もなき事故

(二) 蕪の政務に當りての器量は立派なものならんと思はれる

(三) 中君が赤兒を見せたるも

(四) 蕪が

(五) 女二宮へ行かねばならぬ故

(六) 蕪が

(七) 蕪の

(八) 折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯の鳴く

藤花の御宴、蘭天盃に賜はる、女二宮三條邸を移る

(九) 藤壺からは三條宮は方角が悪くなるべしと

(一〇) 夏の節に入らぬ前に女二を蕪が三條宮へ引取る事に極めたるが其前日に藤見の宴ある也

(一一) 女二宮が主人役になる譯にはあらず

(一二) 夕霧

(一三) 紅梅なるべし

(一四) 此二人鬚黒の子

(一五) 匂

宿

木

いとほしけれ。然わろびかたほならむ人を、帝のとりわき切に近づけて、むつび

給ふべきにもあらじものを、誠しき方様の御心おきてなどこそは、めやすくもの

し給ひけめ、とぞ推し量らるべき。實にいとかく幼きほどを見せ給へるも哀なれ

ば、例よりは物語など細やかに聞え給ふほどに、暮れぬれば、心やすく夜をだに

更すまじきを、苦しう覺ゆれば、歎くく出で給ひぬ。「をかしの人の御匂や。折

りつればとかやいふ様に、鶯も尋ね來ぬべか「めり」など、煩はしがる若き人も

あり。

夏にならば、三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、四月朔日頃節分とかい

ふ事まだしき前に渡し奉り給ふ明日とての日、藤壺に上わたらせ給ひて、藤の

花の宴せさせ給ふ。南の廂の御簾あけて、御椅子たてたり。おほやけわざにて、ある

じの宮の仕う奉り給ふにはあらず、上達部殿上人の變など、内藏司より仕う奉れり

ひたり

左の大、按察の大納言、藤中納言、左兵衛督、親王達は、三宮、常陸宮などさ

(二二)

(二三)

(二四)

(二五)



(一)大君が存生ならば又大君も我と同様に女二宮の事につきて我身の數ならぬを苦しむるなるべし、中君の心

(二)中君に何時迄も肌を許さじと決心して居し大君の分別の重々しかりしを思ひ出す

(三)中君の子を薫が見たがる故

(四)中君の心

(五)薫の戀を受附けぬ事につけて

(六)赤兒を

(七)兒柄の惡かるべき言はなければ

(八)薫の心

(九)通世の宿志が鈍りたるならんか、以下薫の心

(一〇)大君が當前に我が妻であつて斯かる子を殘して死にたらば

(一一)女二の腹に早く生れよばよいは思も寄らぬとは餘り無理な薫の注文

それも我が有様のやうにぞ、うらやみなく身を怨むべかりけるかし、何事も、數ならでは、世の人めかしき事もあるまじかりけり、と覺ゆるにぞ、いとどかの打解けはてでやみなむと、思ひ給へりし御心おきては、猶いと重々しう思ひ出でられ給ふ。若君を切にゆかしがり聞え給へば、恥かしけれど、何かはへだて顔にはあらむ、わりなき事ひとつにつけて、怨みらるゝより外には、いかでこの人の御心に違はじ、と思へば、自らはともかくもいらへ聞え給はで、乳母してさし出でさせ給へり。更なる事なれば、憎けならむやは。ゆよしきまで白く美しくて、たかやかに物語し、打笑ひなどし給ふ顔を見るに、我がものにて見まほしく羨ましきも、世の思ひ離れ難くなりぬるにやあらむ。されど、いふかひなくなり給ひにし人の、世の常の有様にて、かやうならむ人をも、留めおき給へらましかば、とのみ覺えて、この頃おもだたしけなる御あたりに、いつしかなどは思ひよられぬこそ、餘りすべなき君の御心なめれ。かく女々しくねぢけて、まねびなすこそ

⑩ 黨中君を訪ひて赤兒を見る

(一) 中君腹

(二) 黨が

(三) 五十日の祝の餅の用意

(四) 世話やきつゝ

(五) 世間並にすぐれてと

(六) 細工人等が

(七) 黨が匂の留守に中君を訪へり

(八) 氣のせいかして大納言になりて一層重みが附いたる様に見ゆ

(九) 女二宮の望にもなりたる事故我に懸想じみたる事などは言はぬならんと、中君の心

(一〇) 黨の態度は依然たるもので

(一一) 女二宮の望になりたる事をいふ

(一二) むやみに中君に訴へる

(一三) 女二の望になり昇進もしたるに其にも満足せず矢張我を忘れぬ情の深さよと、中君の心

(一四) 大君が

(一五) 中君が

宮の若君の五十日になり給ふ日數へ取り給ひて、その餅のいそぎを心に入れて、

籠物檜破籠などまで見入れつゝ、尋常のなべてにはあらずと、思し志して、沈

紫檀、白銀、黄金など、道々の細工どもいと多く召し侍はせ給へば、我劣らじと、

様々の事どもをし出づめり。自らも、例の宮のおはしまさぬ隙におはしたり。心

のなしにやあらむ、今少し重々しくやむごとなけなる氣色さへ添ひにけりと思ゆ。

今はさりとも、むづかしかりし漫ごとなどは、思ひ紛れ給ひにたらむ、と思ふに

心安くて、對面し給へり。されど、ありしながらの氣色に、まづ涙ぐみて、黨心

にもあらぬ交らひ、いとど思の外なるものにこそと、世を思ひ給へ亂るよことな

む勝りにたる」と、あいだちなくぞ憂へ給ふ。中君いとあるまじき御事かな。人

もこそ、自らほのかにも漏り聞き侍れ」などは宣へど、かばかりめでたけなる事

どもにも慰まず、忘れがたう覺え給ふらむ心深さよと、哀に思ひ聞え給ふに、疎

にもあらず思ひ知られ給ふ。おはせましかばと、口惜しう思ひ出で聞え給へど、

(一四) (一五)

(一) 女二に自分の御殿を  
 (二) 其では勿體なしとて  
 (三) 女二が

(四) 薫の  
 (五) まだ婚姻後間もなき  
 に打解けて薫の方へ引取  
 らるゝを然るべからぬ様  
 に思召したり

(六) 子故の煩惱は  
 (七) 女三  
 (八) 朱雀の  
 (九) 薫の妻を娶る事につ  
 きてのみ

(一〇) 女三の身の上をば  
 今上に頼み置かれ  
 (一一) 女三が  
 (一二) 今上が元の儘に扱  
 ひ

(一三) 女三が  
 (一四) 今上や女三に大事  
 がらるゝ薫は面目ありと  
 して満足すべき筈なのに

て、おはします寢殿を譲り聞え給ふべく宣へど、罵いと辱からむ」とて、御念誦  
 (一) 堂のあはひに、廊をつどけて造らせ給ふ。西面に移ろひ給ふべきなれめり。東の對  
 (二) どもなども焼けて後、麗しく新しくあらまほしきを、いよく磨き添へつよ、細  
 (三) かにしつらはせ給ふ。かよる御心づかひを、内裏にも聞し召して、程なく打解け  
 (四) うつろひ給はむを、如何と思したり。帝と聞ゆれど、心の闇は同じ事になむおは  
 (五) しましける。母宮の御許に、御使ありける御文にも、唯この御事をのみなむ聞え  
 (六) させ給ひける。故朱雀院の、とりわきて、この尼宮の御事をば、聞え置かせ給ひ  
 (七) しかば、かく世を背き給へれど、おとろへず、何事もとのまよに、奏せさせ給  
 (八) ふ事などは、必ず聞召し入れ給ふ、御用意深かりけり。斯くやむごとなき御心ど  
 (九) もに、互に限もなくもてかしづき騒がれ給ふおもだたしさも、如何なるにかあら  
 (一〇) む、心の中にはことに嬉しくも覺えず、猶ともすれば、うち眺めつよ、宇治の寺  
 (一一) 造ることをぞ急がせ給ふ。

(一) 齋を大事にして遣ふんと

(二) 夕寢

(三) 齋の時めき方運の上さはえらいものぢや

(四) 源氏

(五) 出家せられし際

(六) 源が女三を娶りたり

(七) 落葉をいふ

(八) 落葉

(九) 女二宮の母方の伯父

(一〇) 中君に志ある人々が齋の家司に相談して

(一一) 齋の

(一二) 齋が女二へ

(一三) 大君の事のみ暮はしくも

(一四) 嫌々ながら女二へ行くも

(一五) 女二を私邸に引取らんと決心せり

(一六) 女三

御心にて、來し方の例なきまで、同じくばもてなさむと、思し掟つるなめり。帝

の御婚になる人は、昔も今も多かれど、かく盛の御世に、たゞ人のやうに、婿と

り急がせ給へる類は、少くやありけむ。左の大臣も、夕鬘珍らしかりける人の御

おほえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて、今はとやつし給ひし

際にこそ、かの母宮を得奉り給ひしか。我はまいて、人も許されぬものを、拾ひ

たりしや」と宣ひ出づれば、宮はけにと思すに、恥しうて御答もえし給はず。

三日の夜は大藏卿よりはじめて、かの御方の心寄せになさせ給へる人々、家司に

仰言賜ひて、忍びやかなれど、かの御前、隨身、車ぞひ、舍人などまで祿たまは

す。その程の事どもは、私事の様にぞありける。かくてのちは、忍びくくに参り

給ふ。心のうちには、猶忘れ難き古さまのみ覺えて、晝は里に起き臥し眺めく

らして、暮るれば心より外に急ぎ参り給ふをも、ならはぬ心地に、いと物憂く苦

しうて、まかんでさせ奉らむとぞ思しおきてける。母宮はいと嬉しき事に思し

(一)中君を夕霧は快からず思へども  
(二)中君自身

(三)夕霧  
(四)中君が子持になりて仕舞ひたれば、薫の心  
(五)薫には疎くなるべし  
(六)匂の愛情  
(七)中君の爲よかれと祈り來りし事を思へば

●女二宮愛著、薫と婚す  
(八)藤壺即ち明石姫君腹の女二宮  
(九)薫が女二宮へ通ひ始めた  
(一〇)あれ程立派にかしづかれたる女二宮に平人の薫が配するの  
(一一)此縁組は帝の御意に出でたるにもせよ  
(一二)すつぱりと遣つて仕舞ふ今上の氣風で

り。よろしからず思すあたりなれど、宮の思さむ所あれば、御子の君達など参

り給ひて、すべていと思ふ事無けにめでたければ、御自らも、月頃物思はしく心

地の惱ましきにつけても、心細う思しわたりつるに、斯くおもだたく今めかし

き事どもの多かれば、少しは慰みもやし給ふらむ。大將殿は、かくのみ大人び果

て給ふめれば、いとど我が方さまは氣遠くやならむ、又宮の御志もいと疎なら

じ、と思ふ心は口惜しけれど、又初よりの心おきてを思ふには、いと嬉しくもあ

り。

かくてその月の二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御裳著のことありて、またの

日なむ大將参り給ひける。その夜の事は忍びたる様なり。「天の下ひどきていつく

しう見えつる御かしづきに、たど人の具し奉り給ふぞ、猶飽かず心苦しく見ゆ

る。さる御許はありながらも、たど今斯くしも急がせ給ふまじき事ぞかし」と、謗

らはしけに思ひ宣ふ人もありけれど、思し立ちぬる事、すがくしうおはします



(一) 驚も自己の昇進の喜びにかさねて

(二) 匂が大饗に出席しきれし答禮に

(三) 出産の祝

(四) 玄關まで杯の意

(五) 匂が

(六) 見舞に

(七) 薫

(八) 團碁の賭物にする錢

(九) 椀に飯を堆く盛りて客にすくむる也

(一〇) 中君

(一一) 心を盡して調へたる也

(一二) 匂宮

(一三) 餅の類、米の粉と麵粉とにて作る、點心に用ふる物

(一四) 手を盡したる料理あり

(一五) 中宮大夫

(一六) はじめて父となれるをいふ  
(一七) 祝をせすには置かれぬ  
(一八) 夕霧

り。大將殿も、よろこびに添へて、嬉しくおほす。昨夜おはしましたりしかしこ

まりに、やがてこの御よろこびも打ち添へて、立ちながら参り給へり。かく籠り

おはしませば、参り給はぬ人なし。御産養、三日は例の唯宮の御私事にて、五

日の夜は、大將殿より屯食五十具、碁手の錢、椀飯などは、世の常のやうにて、

子持の御前の衝重三十、兒の御衣五重襲にて、御襦袢などぞ、事々しからず、忍

びやかにしなし給へれど、こまかに見れば、いとわざと目馴れぬ心ばへなど見え

ける。宮の御前にも淺香の折敷十二して、高杯どもにて、粉熟参らせ給へり。女

房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破籠三十、様々しつくしたる事どもあ

り。人目に事々しくは、ことさらにしなし給はず、七日の夜は、後の宮よりの御

産養なれば、参り給ふ人々いと多かり。宮の大夫をはじめて、殿上人上達部、

數知らず参り給へり。内裏にも聞し召して、今上宮の始めて大人び給ふなるには、

いかでか」と宣はせて、御佩刀奉らせ給へり。九日も、大殿より仕う奉らせ給へ

(二七) (二八)

(一)紅梅が從來左大將なりしを辭したる故關員を生じたる也  
(二)薰が方々へ御禮に歩きて匂方へも來たり

(三)中君が  
(四)匂宮が中君方に

(五)中君方へ薰が  
(六)答禮

(七)右近衛寮の人々を變應する席へ御出あれと

(八)中君

(九)饗應は夕霧の大饗の時例によるべしとて

(一〇)相伴役

(一一)匂も出席したれども中君の事が氣がかり故

(一二)六君方では

(二三)素性をいへば中君とて六君に劣りたる譯なられど

(二四)六君方は萬事高くとまつて居るなるべし

(二五)中君男子を生む、方よりの産養

(二五)中君の子

右のおほい殿左にておはしけるが、辭し給へる所なりけり。よろこびに所々あり  
き給うて、この宮にも参り給へり。いと苦しくし給へば、此方におはします程な  
りければ、やがて参り給へり。匂僧など侍ひて、いと便なき方に」と驚き給ひて、  
あざやかなる御直衣、御下襲など奉り、ひき繕ひ給ひて、下りて答の拜し給ふ  
御有様ども、とりぐくにいとめでたし。薰やがて今宵つかさの人に祿賜ふあるじ  
の所に」と、請じ奉り給ふを、惱み給ふ人によりてぞ、思したゆたひ給ふめる。

左のおほい殿のし給ひける儘にとて、六條院にてなむありける。垣下の親王達上  
達部、大饗に劣らず、あまり騒がしきまでなむ集ひ給ひける。この宮もわたり給  
ひて靜心なければ、まだ事も果てぬに急ぎ歸り給ひぬるを、大殿の御方には、「い  
と飽かずめざましう」と宣ふ。劣るべうもあらぬ御程なるを、たゞ今のおほえの  
花やかさに思し傲りて、おしたちてもてなし給へるなめりかし。

辛うじてその曉に、男にて生まれ給へるを、宮もいとかひありて嬉しく思した



(一)句こそは中君を大事がりにすれど

(二)中君を重んじもせざりにしに

(三)蕪は

(四)一通りの見舞だけはすれど

(五)蕪に降嫁すべき答の八、婚禮前に装束の式をせねばならぬ故用意ある也

(六)帝が萬事自身でする様に

(七)朝廷にて何か事あれは國々の守が之を承りて事を辨じ其に上りて己の地位を保ち又は更に上き地位を求めなどするは此頃の風俗也

(八)装束の頃より蕪が女二へ通ふ様にとの仰ある故

(九)蕪の例の癖なれば女二の方の事は氣が進まざ中君の事ばかり心配して居る

大饗 蕪権大納言に進む、

(一〇)除目の濟みて後追加して行はるゝ任官式  
(一一)蕪が

なりぬれど、一所の御志こそおろかならね、大方の世には、物々しうもてな

し聞え給はざりつるを、この折ぞ、何處にもく聞召し驚きて、御とぶらひども

聞え給ひける。中納言の君は、宮の思し騒ぐらむにも劣らず、如何におはせむと

歎きて、心苦しく後めたく思さるれど、限ある御訪らひばかりこそあれ、餘りも

得まうで給はで、忍びてぞ御禱などもせさせ給ひける。さるは、女二の宮の御裳

著、たどこの頃になりて、世の中ひどき營みのよしる。萬の事、帝の御心一つな

る様に思し急げば、御後見無きしもぞ、なか／＼めでたけに見えける。女御のし

置き給へる事をばさる物にて、作物所、さるべき受領どもなど、とり／＼に仕う

奉る事ども、いと限なし。やがてその程に、参りそめ給ふべき様にありければ、

男方も心づかひし給ふ頃なれど、例の事なれば、其方さまには心も入らで、この

御事のみにとほしう思し歎かる。

二月の朔日頃に、直物とかいふことに、權大納言になりて、右大將かけ給ひつ。

(一)侍女等の心、中君と  
大君とは比べ物にならぬ  
と思へばうんざりする

(二)夕霧

(三)夕霧に

(四)氣のもめる世の中

(五)中君

(六)夕霧方の

(七)字治へ退きて

● 中君不快、匂宮黨等  
の心配

(八)中君が産の近づきし  
也

(九)明石中宮

(一〇)中君が匂に嫁して  
より

ども、いと多くひき續き給へる御勢、こちたきを見るに、並ぶべくもあらぬぞ屈  
しいたかりける。人々のぞきて見奉りて、侍女「さも清らにおはしける大臣かな、  
然ばかり、いづれともなく若う盛にて清けにおはさうする御子どもの、似給ふべ  
きもなかりけり。あなめでたや」と言ふもあり。又、侍女「さばかりやむごとなけ  
なる御様にて、わざと御迎に参り給へるこそ憎けれ。やすけなの世の中や」など  
打歎くもあるべし。御自らも、來し方を思ひ出づるよりはじめ、かの花やかなる  
御中らひに、立ちまじるべくもあらず、幽なる身の覺をと、いよくこよろほそ  
ければ、なほ心安く籠り居なむのみこそ、目安からめ、などいとど覺え給ふ。は  
かなくて年も暮れぬ。

正月の晦日(つごもり)がたより、例ならぬ様に惱み給ふを、宮まだ御覽じ知らぬことにて、如  
何ならむと思し歎きて、御修法など、所々にて數多させ給ふに、又々始め添へ  
させ給ふ。いといたう煩ひ給へば、  
后(きさき)の宮(みや)よりも御とぶらひあり。  
かくて三年に

宿 木  
一〇九

(一)盤渉は呂の調、前の黄鐘は律の調也

(二)催馬樂の曲名、句が謠ふ也

(三)面白さに開懐れ居る様

(四)句が

(五)句の様な結構な方に附合ふ處てはなかりし

(六)宇治へ歸りたく中君が思ひて

(七)句が中君に

(八)六君方

(九)夕霧

(一〇)我が居間の方に句が行きて

(一一)別に用事がなき時は

てぞ、うち歎きて少ししらべ給ふ。ゆるびたりければ、盤渉調にあはせ給ふ。か

きあはせなど、爪音をかしげに聞ゆ。「伊勢の海」謠ひ給ふ御聲のあてにをかしき

を、女ばら物の後に近づき参りて、笑みひろごり居たり。侍女「二心おはしますは

つられれど、それも理なれば、猶我が御前をば、幸人とこそ申さめ。かよる

御有様にまじらひ給ふべくもあらざりし年頃の御住居を、又歸りなまほしけに思

して、宣はするこそいと心憂けれ」など、たゞ言ひに言へば、若き人々は、「あな

かまや」など制す。御琴ども教へ奉りなどしつよ、三四日籠りおはして、御物

忌などことつけ給ふを、かの殿には怨めしく思して、大臣内裏より出で給ひける

まよに、此處に参り給へれば、宮、句事々しけなる様して、何しにいましつるぞと

よ」とむづかり給へど、あなたに渡り給ひて對面し給ふ。夕曇異なる事なき程は、

この院を見で久しうなり侍るも哀にこそ」など、昔の御物語ども少し聞え給ひて、

やがて引連れ聞え給ひて出で給ひぬ。御子ども殿ばら、さらぬ上達部殿上人な

(一)朗詠「不是花中偏愛菊、此花開後更無花」

(二)西宮左大臣高明菊を賞して此句を誦しけるに唐土の廉承武といふ琵琶の名手の靈來りて開後は開蕪の誤傳なる由を告げ

石上流泉の琵琶の秘曲を高明に授けて去りし故事

(三)昔の傳によりて習ひたる手迄が左迄昔に劣る筈はなし

(四)自分の習ひ得て居らぬ處をさくらたがれば

(五)合奏してくれ

(六)父に習へば習ふべかりしをよくも習はずに仕舞ひたれば

(七)斯かる些事につけても

(八)六君はまだ昨今にて馴染も薄けれど、よくも出来ぬ事迄隠さずにして見せる

(九)蕪

いと見所ありてうつろひたるを、とりわきて折らせ給ひて、(二)花の中に偏に」と誦じ給ひて、(三)匂なにかしの御子の、この花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。何事も淺くなりたる世は物憂しや」とて、御琴さしおき給ふを、口惜しと思して、中君「心こそ淺くもあらめ、昔を傳へたらむ事さへは、などてかは然しも」とて、覺束なき手などをゆかしけにおほしたれば、匂さらば獨言はさうぐしきに、さしいらへし給へかし」とて、人召して箏の御琴とり寄せさせて、弾かせ奉り給へど、中君「昔こそまねぶ人もものし給ひしかど、はかばかしく弾きも留めずなりにしものを」とて、つよましけにて手も觸れ給はねば、(七)匂かばかりの事も、隔て給へるこそ心憂けれ。この頃見るあたりは、まだいと心解くべき程にもあらねど、かたなりなる初事をも隠さずこそあれ。すべて女は、やはらかに心美しきなむよき事とこそ、その中納言も定むめりしか。かの君にはた、斯くもつよみ給はじ、こよなき御中なめれば」など、まめやかに怨みられ

(二) 蕭から斯く文が度々  
來れば中君が内々は其に  
心を惹かされ居るならん  
(二) 句の服裝

(三) 琵琶は嗜める道故  
(四) 懐胎にて大儀なる様  
也

(五) 句の我に飽きて大君  
に移る心も薄と共に穗に  
あらはれたり

(六) 「月見れば千々に物  
こそ悲しけれ我身一つの  
秋にはあらねど」

(七) 中君が

(八) 句が  
(九) 斯る女には蕭も必ず  
懸想するならんと

(一〇) 霜に色がかはりき  
ちぢ

(一一) 手入してあるは却  
て色のかはる事遅き也、  
此頃は菊の霜にあひて色  
の變れるを賞美したる也

見ゆるに、まだ穗に出でさしたるも、露を貫きとむる玉の緒、はかなけにうち靡きたるなど、例の事なれど、夕風なほあはれなる頃なりかし。

句穗にいでぬもの思ふらししのすよき招くたもとの露しゆくして

なつかしきほどの御衣どもに、直衣ばかり著たまひて、琵琶を弾きる給へり。黄鐘調のかきあはせを、いと哀にひきなし給へば、女君も心に入り給へる事にて、

物怨じもえし果て給はず、ちひさき御几帳のつまより、脇息に寄りかよりて、ほ

のかにさし出で給へる、いと見まほしくらうたけなり。

中君秋はつる野べの氣色もしのすよきはのめく風につけてこそ知れ

我が身ひとつの」とて涙ぐまるよが、流石に恥かしければ、扇を紛らはしておは

する心の中も、らうたく推しはからるれど、かゝるにこそ人もえ思ひ放たざるら

めと、疑はしき方たどならで、怨めしきなめり。菊の、まだよくもうつろひは

てで、わざと繕ひたてさせ給へるは、なか／＼遅きに、如何なる一本にかあらむ、

(一) 辨の尼の方へ、言ひ遣し下され

(二) 何げなく

(三) 我が居るのを聞いて用心して此様に書きたるならん

(四) 實際多少其手加減もありしならん

(五) 匂が

(六) 己は見ないからとて匂が外を向いて居る

(七) 寺にしてこそ至當と存じ居りしに

(八) 自分が遁世したき時わざ／＼別に寺をさがすよりも宇治の寢殿を寺にして置いて其へ行けば舊宅を保存する譯にもなりて好都合なれば、如何ならん巖の中に住まばかは世の憂き事の聞え來ざらん

(九) 有難く思ふべし

(一〇) 黨と中君との中は斯く仔細なき交際なるべしとは思へど

(一一) 匂が自分の浮氣から推測して

(一二) 匂宮中官方に宿る、夕霧匂宮を伴ひて自邸に歸る、中君の感傷

(一三) きはだちて

尼君に、さるべき仰言はつかはせ。

などぞある。匂よくもつれなく書き給へる文かな。まるありとぞ聞きつらむ」と

宣ふも、少しは實に然やありつらむ。女君は事なきを嬉しと思ひ給ふに、あなが

ちにかく宣ふをわりなしと思して、打怨じて居給へる御様、萬の罪も許しつべく

をかし。匂返事書い給へ。見じや」とて外様に背き給へり。あまえて書かざらむ

も怪しければ、

中君山里の御ありきの羨ましくも侍るかな。彼處は實に、さやうにてこそよくと

思ひ給へしを、殊更に又巖の中もとめむよりは、荒らし果つまじく思ひ侍る

を、如何にもさるべき様になさせ給はば、疎ならずなむ。

と聞え給ふ。かう憎き氣色もなき御睦なめりと見給ひながら、我が御心ならひに

たどならじと思すが、安からぬなるべし。

かれ／＼なる前栽の中に、尾花の、物より殊に手をさし出でて招くが、をかしく

と思しくてもたせ給ふ。

(一) 昔此處に宿りし事を思ひ出さずば如何に寂しき宇治の旅寢ならん、やどりき寄生木、宿りき

と獨言ち給ふを聞きて、尼君、

辨荒れはつるくち木のもとをやどりきと思ひおきけるほどの悲しさ

(二) 此老尼の宿を昔の名残と思ひて宿り給へる御いたはしき

飽くまで古めきたれど、故なくはあらぬをぞ、聊の慰には思されける。

(三) 尼の歌を誦していふ

宮に紅葉奉れ給へれば、男宮おはしましける程なりけり。「南の宮より」とて、何

(四) 鶯が鶯携へ歸りたる鶯を中君に贈る

心もなく持て参りたるを、女君例のむづかしき事もこそと、苦しく思せど、取隠

(五) 鶯が中君へ(六) 恰も匂が居合せたり(七) 鶯の居る三條宮は二條院の南にあり

さむやは。宮、鳥をかしき鶯かな」と、たゞならず宣ひて、召し寄せて見給ふ。御

(八) 取次が(九) 何か譯ありさうに言ひて

文には、

(一〇) 宇治へ行きて

日頃何事かおはしますらむ。山里にもものし侍りて、いとど峰の朝霧に惑ひ侍

(一一) 御目にかかりて申上ぐべし

りつる、御物語もみづからなむ。かしこの寢殿、堂になすべき事、阿闍梨に

(一二) 中君の承諾を得て建物を移轉さすべし

言ひつけ侍りにき。御許し侍りてこそは、外に移すことも物し侍らめ。辨の

宿  
木





(一) 中將の君は八宮の北方の姪なり

(二) 從姊妹也

(三) 中將の君が八宮に居りし時分辨は他所に在りて

(四) 浮舟の侍女

(五) 浮舟が八宮の慕戀だけなりともしたしと

(六) 態・尋ねては來ぬ

(七) 蕪が

(八) 尼の今の生活は

(九) 身分に合せては

(一〇) 蕪が

(一一) 寄生したる

(一二) 是てもせめて歸の土産にせんとて「こたに」

は眞の類なりとも又はくちなし也ともいふ説あれども今新釋の一説に従ふ

(一三) 中君へ贈らんとて

ふ折をりあらむ序ついでに、斯かくなむ言いひしと傳つたへ給たまへ」などばかり宣のたまひ置く。辨はとぎ母君はとぎは、故こ北きたの方かたの御姪おんめひなり。辨べんも離はなれぬ中なからひに侍はべるべきを、そのかみは外ほか々に侍はべりて、委くはしうも見み給たまへ馴なれざりき。先さいつ頃京ころさやうより、大輔たいふがもとより申まうしたりしは、かの君きみなむ、いかでかの御墓みはかにだに參まゐらむと宣のたまふなる、さる心こころせよ、など侍はべりしかど、まだ此處こゝに、さしはへては音ねなはず侍はべるめり。今いま、然さらばさやうの序ついでに、かよる仰おほせ言ごなど傳つたへ侍はべらむ」と聞きゆ。明あけぬれば歸かへり給たまはむとて、昨夜よべ後おくれてもて參まゐれる絹きぬ綿わたなどやうのもの、阿闍梨あざりにおくらせ給たまふ。尼君あまぎみにも賜たまひ、法師ほうしばら尼君あまぎみの下衆ひすどもの料れうにとて、布ぬのなどいふ物をさへ召めして賜たまふ。心こころほそき住居すまひなれど、かよる御訪おんまがらひ撓たぬまざりければ、身みの程ほどにはいと目安めやすく、しめやかにてなむ行おこなひける。  
(九) 木枯こがらしの堪たへ難がたきまで吹ふきとほしたるに、殘のこる梢こすぶもなく散ちり敷しきたる紅葉もみぢを、踏ふみ分わけたる跡あとも見みえぬを、見みわたして、頼たのみにもえ出いでで給たまはず。いと氣色けしきある深山木みやまぎにやどりたる鶯うらの色いろぞまだ殘のこりたる。  
(一〇) 蕪う「こたに」など少すこし引取ひきとらせ給たまひて、  
(一一) 宮みやへ

(一) 中將の君を

(二) 八宮が僧同様の生活をすする事になりしを中將が極り悪がりて眼を取りたるが

(三) 浮舟の無事なる由を八宮方へ其となく知らせたるを八宮が聞きて

(四) 中將の君が

(五) 中將の夫が常陸守になりて赴任したるが

(六) 中君方

(七) 一頃は

(八) 中將の君が手紙にまで書いてよこしたり

(九) 薫の心

(一〇) 大君の様子に少しでも似て居る女があらば  
(一一) 八宮は子とも思はれざりしかど骨肉には相違なし

(一二) わざぐでなくとも彼から此處へ音信して來る事もあらば我が斯様  
斯様と言ひたりと傳言せ

に思しなりて、(一)またとも御覽じ入るゝ事も侍らざりけり。あいなくその事に思し

懲りて、やがて(二)大方聖にならせ給ひにけるを、はしたなく思ひて、え侍はずなり

にけるが、陸奥守の妻になりて下りけるを、(三)一年上りて、その君平かに物し給ふ

よし、このわたりにもほのめかし申したりけるを、聞召しつけて、更にかゝる消

息あるべき事にもあらず、と宣はせ放ちたりければ、かひなくてなむ歎き侍りけ

る。さて又常陸になりて下り侍りにけるが、この年頃音にも聞え給はざりつるが、

この春上りて、(四)かの宮には尋ね参りたりけるとなむほの聞き侍りし。かの君の年

は、二十許になり給ひぬらむかし。いと美しく生ひ出で給ふがかなしき、などこ

そ、(五)中頃は、文にさへ書きつどけて侍るめりしか」と聞ゆ。委しく聞き明らかめ給

ひて、(六)さらば誠にてもあらむかし、見ばや、と思ふ心出で來ぬ。薫昔の御けはひ

に、かけても觸れたらむ人は、知らぬ國までも尋ね知らまほしき心あるを、(七)數ま

へ給はざりけれど、(八)近き人にこそあなれ。わざとはなくとも、このわたりに音な

(一)大君

(二)尼が語るにつけて薫が聞きつゝ大君の性質を思ふ也つゝめかしく以下

(三)中君は、以下薫の心

(四)疎き人に對しては恥をかかず様を應對もし兼

ねまじき人柄なれど

(五)我に對しては情の深い所を見せ通さうと思ひ

居る様なり

(六)浮舟の事を薫が

(七)此頃浮舟が在京する

といふ事は存じませぬ

(八)浮舟の身の上は

(九)八宮

(一〇)八宮が窃に手をつけしを

(一一)是浮舟也

(一二)我子なるべしと八

宮が思召したる故其以來

中將の君を厭ひて

など聞ゆ。故姫君の御事どもはた、盡きもせず、年頃の御有様など語りて、何の

折何と宣ひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠み給ひける歌語などを、つきな

からず、打戦きたれど語るもこめかしく、言少なるものから、をかしかりける

人の御心ばへかなとのみ、いとど聞き添へ給ふ。宮の御方は今少し今めかしきも

のから、心許さざらむ人の爲には、はしたなくもてなし給ひつべくこそものし給

ふめるを、我にはいと心深く情々しとは見えて、いかで過してむとこそ思ひ給ひ

つれ、など心の中に思ひくらべ給ふ。さて物の序に、かの形代の事を言ひ出で給

へり。兼「京にこの頃侍らむとはえ知り侍らず。人傳に承りし事の筋なり。故

宮の、まだかゝる山住もし給はず、故北の方亡せ給へりけるほど近かりける頃、中

將の君とて侍ひける上藤の、心ばせなどもけしうは侍らざりけるを、いと忍びて、

はかなきほどに物宣はせけるを、知る人も侍らざりけるに、女子をなむ産みて侍

りけるを、然もやあらむと思す事のありけるからに、あいなく煩はしう物しき様

(一)中君方へ送るべき品  
あらば

(二)此様な老人を何やか  
や世話やく筈もなけれど

(三)辨の尼を

(四)柏木

(五)尼が話す

(六)柏木が臨終に黨を見  
たく思ひ居られし様子な  
どが思ひ出さるゝにつけ  
て

(七)私の晩年に黨に逢ふ  
につけても柏木存生中に  
親しく御宮仕申上げし驗  
がある様に思はれて

(八)大君の卒去や中君の  
不仕合やち

(九)中君よりも

(一〇)中君を

(一一)中君に隔心のある  
故ならん杯と

(一二)出家したる私なれ  
ば

は、かの廊ろうに物ものし給へ。京みやうの宮みやにとり渡わたさるべき物ものなどあらば、御庄みさうの人ひと召よめして、あるべからむ様やうに物ものし給へ」など、まめやかなる事ことどもを語かたらひ給ふ。外ほかにては、

かばかりにさだ過ぎたらむ人を、何かと見入みいれ給ふべきにもあらねど、夜よるも近ちかく

臥ふせて、昔むかし物もの語がたりなどせさせ給ふ。故權こごん大納言だいなごんの君きみの御有みあり様さまも、聞きく人ひとなきに心こころ

安やすくて、いと細こまやかに聞きゆ、辨へん今いまはとなり給ひし程ほどに、珍めづらしくおはしますらむ

御有みあり様さまを、いぶかしきものに思ひ聞きえさせ給ふめりし御氣色みけしきなどの、思おもひ給へ出い

でらるゝに、かく思おもひかけ侍はべらぬ世よの末すえに、かくて見奉みたまり侍はべるなむ、かの御世みよに

睦むつまじう仕つかう奉まつり置おきし驗しるしの、自おのづから侍はべりけると、嬉うれしくも悲かなしくも思おもひ給へ知しら

れ侍はべる。心憂こころうき命いのちのほどにて、斯かくさまぐの事ことを見給へ過すし、思おもひ給へ知しり侍はべ

るなむ、いと恥はづかしく心憂こころうく侍はべる。宮みやよりも、時々ときときは参まゐりて見奉みたまれ、覺束おぼつかなく絶た

え籠こもり果はてぬるは、こよなく思おもひ隔へだてけるなめりなど、宣のたまはする折々をりく侍はべれど、ゆ

ゆしき身みにてなむ、阿彌陀佛あみだぼつより外ほかには、見奉みたまらまほしき人ひとも無なくなりて侍はべる」

(二) 觀音勢至の二菩薩前  
生に繼母に殺されしかば  
其親屍を頸にかけて歎き  
居しが遂に佛道に入りた  
る故事なりといふ  
(三) 窮が煩惱を起すのは  
(四) 寺にすはるは後世の爲  
にもなる事也

(五) 宗規の通りに  
(六) 寺普請につきての用  
事萬端

(七) 此寢殿を見るも今度  
限りと薫が思ひて  
(八) 建て直すべき仔細あ  
り、普請中は廊に住み給  
へ、尼にいふ詞

異様にも造りかへむの心にてなむ」と宣へば、阿闍梨とさまざまに、いともか  
しこく尊き御心なり。むかし、別を悲みて、屍をつよみて數多の年頸にかけて侍  
りける人も、佛の御方便にてなむ、かの屍の囊を捨てて、遂に聖の道にも入り侍  
りにける。この寢殿を御覽するにつけて、御心動きおはしますらむ、ひとへに怠  
怠しき御事なり。又後の世の御勸ともなるべき事に侍りけり。急ぎ仕う奉らすべ  
し。曆の博士のはからひ申して侍らむ日を承りて、物の故知りたらむ工匠二三  
たりも賜はりて、細かなる事どもは、佛の御教のまゝに仕う奉らせ侍らむ」と申す。  
とかく宣ひ定めて、御庄の人ども召して、この程の事ども、阿闍梨の言はむ儘に  
すべき由など仰せ給ふにはかなく暮れぬれば、その夜はとまり給ひぬ。  
この度ばかりこそは見めと思して、立ちめぐりつゝ見給へば、佛も皆かの寺に移  
してければ、尼君の行の具のみあり。いとはかなげに住ひたるを、哀に如何に  
して過すらむと見給ふ。薫「この寢殿はかへてつくるべき様あり。造り出でむほど  
(七)  
(八)

(一)大君の死こそ

(二)生き残りて居る間は  
歎の種也

(三)大君の一週忌

(四)我が来るに附けても  
(五)今の様では來甲斐の  
なきが不満足故

(六)八宮が折角面白き住  
居として場所を取りて造  
りたる家を

(七)八宮の御心も佛の方  
には篤かりし様なりしに  
(八)子どもを思ひて  
寢殿を寺にする事は見合  
せたりと思はる

(九)此山莊は中君の支配  
なれば何の所有ともいふ  
べし

(一〇)寢殿を有形の儘寺  
にするは不都合なり  
(一一)我が一了簡ても出  
來ぬ

(一二)あらはに他所から  
見え過ぎる故  
(一三)取りのけて

り。言ひても言ひても、むなしき空にのほりぬる煙のみこそ、誰も遁れぬ事なが

ら、(一)後れ先だつ程は、(二)猶いといふかひなかりけり」とて、また泣き給ひぬ。

阿闍梨召して、例のかの御忌日の經佛のことなど宣ふ。(三)冀さて此處にかく時々

ものするにつけても、かひなきことの安からず覺ゆるがいと益なきを、この寢殿

毀ちて、かの山寺の傍に、堂建てむとなむ思ふを、同じくば疾く始めてむ」と宣

ひて、堂いくつ、廊ども、僧房など、あるべき事ども書き出で宣ひなどさせ給ふ

を、阿闍梨「いと尊き事」と聞え知らす。冀昔の人のゆるある御住居にしめ造り給ひ

けむ所をひき毀たむも、情なき様なれど、その御志も、功德の方にはすよみぬ

べく思しけむを、とまり給はむ人々を思しやりて、え然はおきて給はざりけるに

や、今は兵部卿宮の北の方こそは知り給ふべければ、かの宮の御料とも言ひつ

べくなりにたり。されば、ことながら寺になさむ事は便なかるべし。心に任せて

然もえ爲じ。所の様もあまり川面近く、顯證にもあれば、猶寢殿をうしなひて、

(一) 業が宇治へ

(二) 年老いたるをいふ

(三) 憚りて御前へ出ませぬ

(四) 辨が

(五) 外に同情して聞いてくれる人もなき大臣の昔話を其方とせんとして來たり

(六) 大臣が中君の爲に句の來ぬを心配せしは丁度

此頃の事と思へば

(七) 大臣の御心配なされし通り句と中君との中が美しからぬ此頃の御様子

を聞くに附けても色々

ばかりもめる

(八) 大臣が深く歎き入りて遂に死なれたる其元は我が句を取持ちたる故ぞと思へば一層悲し

(九) 句の六君を堅りたるは當然の事

(一〇) 中君の爲氣遣な事は無き様也

ば、九月二十日餘の程におはしたり。いとどしく風のみ吹き拂ひて、心すごう荒

ましけなる水の音のみ宿守にて、人影もことに見えず。見るにまづかきくらし、

悲しきことぞ限なき。辨の尼召し出でたれば、障子口に、青鈍の几帳さし出でて

參れり。辨いと畏けれど、ましていと恐ろしけに侍れば、つとましくてなむ」と、

まほには出で來ず。驚いかに眺め給ふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物

語も聞えむとてなむ。はかなくも積る年月かな」とて、涙をひと目浮けておはする

に、老人はいとど更にせきあへず。辨人の上にて、あいなく物を思ほすめりし頃

の空ぞかすと、思ひ給へ出づるに、何時と侍らぬ中にも、秋の風は身にしみてつ

らく覺え侍りて、實にかの歎かせ給ふめりしもしるき世の中の御有様をほのかに

承るも、様々になむ」と聞ゆれば、驚とある事もかよる事も、ながらふれば直る

様もあるを、味氣なく思ししみけむこそ、我が過の様に猶悲しけれ。この頃の御

有様は、何か、それこそ世の常なれ。されどうしろめたけには見え聞え給はざしめ

- (一) 油断させて逃込みたれば
- (二) 此場合無暗に無分別な眞似をするのも中君の爲は勿論自分の爲にもつまらぬ譯故
- (三) 蕪の心
- (四) 人からは批難されず自分の満足する仕方がありさうなものぢやと
- (五) 色懸にかけては蕪は踏込んで修行した黒人てなき故か
- (六) 自他の身のをさまりばかり案じて居る
- (七) 浮舟をも、以下蕪の心
- (八) 逢つて似て居るか居ぬかを見極めたし
- (九) 重き身柄はななき故手に入れる事はむつかしくもなかるべけれど
- (一〇) 若し其女が氣に入らなかつたらば却て煩を求めるやうなもの
- (一一) 浮舟の方には氣がすくまざ

蕪宇治の山莊に行く、寢殿を寺に造り改めんとす、辨の尼に浮舟の事を聞く

たはらいたく覺おぼを給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば、男君をとこぎみ、理ことわりとは返かへすく思へど、猶なほいと怨うらめしう口惜くちみしきに、思おもひしづめむ方かたもなき心地こころちして、涙なみだのこほるよも人ひと悪わるければ、萬よろづに思おもひ亂みだるれど、ひたぶるに淺あさはかならむもてなしはた、猶なほいとうたて我が爲ためもあいなかるべければ、念ねんじかへして、常つねよりも歎なげきがちに(二)て出いで給ひぬ。

斯かくのみ思おもひては如何いかすべからむ、苦くるしうもあべいかな、如何いかにしてかは、大方おほかた(四)

の世よのもどきあるまじき様さまにて、流石さすがに思おもふ心こころの叶かなふわざをすべからむ、など、

おりたちて練れんじたる心こころならねばにや、我が爲ため人の爲ためも心安こころやすかるまじき事を、わり(五)

なく思おもひあがす。似にたりと宣のたまひつる人ひとをも、いかでかは誠まことかとは見みるべき、さば(六)

かりの際きはななれば、思おもひよらむに難かたうはあらずとも、人ひとの本意ほんいにもあらずば、う(七)

るさくこそあるべけれ、など、猶なほそなた様さまには心こころもたよす。(八)

宇治うぢの宮みやを久ひさしく見み給たまはぬ時は、いと昔むかし遠とほくなる心地こころちして、すゞろに心細こころほそけれ(九)



(一) 人形の代り位にはな  
るべしと思ふ  
(二) 八宮は其女を我子と  
も思ひ居らざりしに  
(三) 花降らす工がほしと  
前に薫がいひし事  
(四) 浮舟が  
(五) 中君に便り來りしを  
(六) とうとう上京し來り  
し也  
(七) 浮舟の容貌をいふ、  
一す見たせいでもちあう  
が  
(八) 其母親が  
(九) 宇治に置かれて大君  
の身代りにされたらば此  
上もなき仕合なるべし、  
其程にするにも及ばぬ  
(一〇) 薫の心、中君が薫  
にいつく過さるるを體よく  
逃れんとして居るのぢや  
と思へばつちけれど浮舟  
も見たくもある  
(一一) 薫の懸想を以ての  
外の事と中君が思ひなが  
らも人目に分る様に薫に  
恥をかき目もせぬは我が  
切なる情を酌知りて居る  
故なるべしと思へば胸が  
踊りて  
(一二) 中君は

とかく慰めむ方なきよりはと思ひ寄り侍る。人形の願ばかりには、などかは山里  
の本尊にも思ひ侍らざらむ。猶たしかに宣はせよ」と、うちつけにせめ聞え給ふ。  
中君「いさや、いにしへの御許もなかりし事を、斯くまでも漏し聞ゆるも、かつは  
いと口輕けれど、變化のたくみ覓め給ふいとほしさにこそ、斯くも」とて、中君「い  
と遠き所に年頃經にけるを、母なる人のいとうれはしき事に思ひて、あながちに  
尋ねよりしを、はしたなくもえ答へで侍りしに、ものしたりしなり。灰なりしか  
ばにや、何事も思ひし程よりは、見苦しからずなむ見えし。これを如何様にもて  
なさむと歎くめりしに、佛にならむはいとこよなき事にこそはあらめ。然までは  
いかでかは」など聞え給ふ。然りけなくて、斯ううるさき心をいかではなつわざ  
もがなと、思ひ給へると見るはつらけれど、さすがに哀なり。あるまじき事とは  
深く思ひ給へるものから、顯證にはしたなき様にはえもてなし給はぬも、見知り  
給へるにこそはと思ふ心ときめきに、夜もいたく更け行くを、内には人目いとか  
(一)  
(二)  
(三)  
(四)  
(五)  
(六)  
(七)  
(八)  
(九)  
(一〇)  
(一一)  
(一二)

(一) 親しみ寄るべき露があればこそ  
 (二) なぞ今迄私に其語をして下されざりしぞ  
 (三) 其浮舟との關係もよく分らず  
 (四) 八宮は我々姉妹が落魄せん事を非常に氣遣ひたりしに今は大君もなくなり我身一つにつくく父の遺言が味はるゝ處へ又つまらぬ異母妹迄が出て来て噂の種になるのがつらし  
 (五) 其女は八宮の忍び女が出来た子を育てたものらしと鑑定したり  
 (六) 其丈では分らぬ、話すならはつきり言うて貰ひたし  
 (七) 中君が話さず  
 (八) どこそこ居る人と位は言つてもよけれど  
 (九) 委しく話し過ぎては  
 (一〇) 楊貴妃の死後其魂の在處を知らんとして方士が東海の中なる三神山を尋ね蓬萊宮にて尋ねあひし長恨歌の故事、海と憂とかけのいへり  
 (一一) 其女の事をも其程深くは思はねども

宿 木

宣のたまふを、夢ゆめ語がたりかとまで聞きく。驚おどさるべき故ゆゑあればこそは、さやうにも睦むつび聞きえらるらめ。などか今いままで斯かくもかすめさせ給たまはざらむ」と宣のたまへば、中君「いさや、その故ゆゑも、如何いかなりけむ事こととも思おもひわかれ侍はべらず、物ものはかなき有あり様さまどもにて、世よに落おち留とまりさすらへむとすらむ事こととのみ、後うしろめたけに思おもはしたりし事ことどもを、唯ただ一人かきあつめて思おもひ知しられ侍はべるに、又またあいなき事ことをさへ打うち添そへて、人ひとも聞きき傳つたへむこそ、いといとほしかるべけれ」と宣のたまふ氣色けしき見るに、宮みやの忍しのびてものなど宣のたまひけむ人の、しのぶ草せきつ摘とみ置おきたりけるなるべしと見み知りぬ。似にたりと宣のたまふゆかりに耳みみとまりて、驚おど斯かばかりにては。同おなじうば言いひ果はてさせ給たまひてよ」と、いぶかしがり給たまへど、流石きすかにかたはらいたくて、えこまかにも聞きえ給たまはず。中君「尋たづねむと思おもす心こころあらば、そのわたりとは聞きえつべけれど、委くはしくはしも得え知らずや。又またあまり言いはば、御心みこころ劣おとろもしぬべき事ことになむ」と宣のたまへば、驚おど世よを海うみ中なかにも、魂たまのありか尋たづねには、心こころのかぎり進すすみぬべきを、いとさまで思おもふべきにはあらざなれど、い

(一)大君を

(二)中君が

(三)中君の心、どうかして薫の此様な心をやめさせて

(四)少將の思はくがいやで中君が何氣なく駭うて居る

(五)生きて居るとも思はざりし人が、中君の異母妹浮舟をいふ

(六)京へ來りて私を尋ね來りしを

(七)突然親しくすべきてもなしと

(八)浮舟が  
(九)大君の襟子に  
(一〇)私を大君の形見と薫は仰せらるれど、私は九で大君とは違つて居ると言がいふ

(一一)似て居ぬ筈の浮舟がどうしてあの様に似るものか

も侍りけるを、さやうならむ變化の人もがな」など、とさまかうざまに忘れむ方なき由を、歎き給ふ氣色のいと心深けなるも、いとほしうて、今少し近くすべり寄りて、中君人形のついでに、いと怪しく思ひ寄るまじき事をこそ思ひ出で侍れ

と宣ふけはひの少しなつかしきも、いと嬉しく哀にて、驚何事にか」と言ふまよ

に、几帳の下より手を捉ふれば、いとうるさく思ひならるれど、如何様にしてか

かる心をやめて、なだらかにあらむと思へば、この近き人の思はむ事のあいなく

て、さりけなくもてなし給へり。中君年頃は世にやあらむとも知らざりし人の、この夏頃遠き處よりものして、尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど、またう

ちつけに、さしも何かは睦み思はむと思ひ侍りしを、さいつ頃來たりしこそ、怪

しきまで、昔の人の御けはひに通ひたりしかば、哀に覺えなり侍りにしか。かた

みなど、かう思ほし宣ふめるは、なかく何事もあさましくもて離れたりとなむ、

皆人々も言ひ侍りしを、いとさしもあるまじき人の、いかでかは然はありけむ」と

(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一)

(一) 私の親むを御言めに  
なりたればこそと嬉しく  
思はぬではなし  
(二) 言ひつゞけ  
(三) 蠶が物に倚りかゝり  
居る

(四) 中君は  
(五) 「戀しさの限だにあ  
る世なりせばつらきを強  
ひて歎かざらまし」  
(六) せめて心ゆく泣泣き  
たいが、戀むわびぬ音を  
だになんか壁立てゝいづ  
くなるらん音無し「の里」

(七) 宇治  
(八) 大君の肖像を人形に  
つくり

(九) 中君に戀して居る今  
の蠶の様子は其人形も  
破の時にみたらし川に流  
さるゝ人形の様にやがて  
捨てられるのかと危ぶま  
れて氣の毒なり

(一〇) 肖像を蠶にかくせ  
れば又窓張の畫師が醜く  
畫いて蠶に愛相をつかさ  
せる懼あり漢の毛延壽  
が漢武帝の妾達を畫きし  
時金を贈りし女をば美し  
くかき贈らざりし王昭君  
を醜くかきし故事  
(一一) 氣に入りたる様に  
作らせるはむつかし

(一二) 末考

宿

木

とかしこき事に思しおきて宣はするや、この御山里いでたち急ぎに、辛うじて召  
しつかはせ給ふべき。それも實に御覽じ知る方ありてこそはと、疎にやは思ひ侍  
る」など宣ひて、猶いと物怨めしけなれど、聞く人あれば、思ふまよにもいかで  
かはつゞけ給はむ。外の方を眺めいだしたれば、やうく暗うなりにたるに、蟲の  
聲ばかり紛なくて、山の方小暗くて、何のあやめも見えぬに、いとしめやかなる  
様して寄る給へるも、煩はしとのみ内にはおほさる。蠶限だにある」など、いと  
忍びやかに打誦じて、蠶思ふ給へわびにて侍り。音なしの里もとめまほしき  
を、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔覺ゆる人形をもつくり、繪  
にも畫きとめて、行ひ侍らむとなむ、思ふ給へなりにたる」と宣へば、中君哀なる  
御願に、又うたてみたらし川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしう侍れ。  
黄金もとむる繪師もこそなど、うしろめたくぞ侍るや」と宣へば、蠶そよ。その  
工匠も繪師も、いかでか心には叶ふべきわざならむ。近き世に花降らせたる工匠

(一)是が縁といふものか  
 (二)大君を  
 (三)出家の望は  
 (四)大君に對する戀の成  
 立たぬ悲を慰むる爲に色  
 色の女に關係して  
 (五)外の女に逢ひたらば  
 大君を忘れる事が出来る  
 かと  
 (六)中君以外の女に惚れ  
 る事は出来ぬ  
 (七)せん方なぞに中君に  
 心を打明くるごと也  
 (八)大君存生中は勤めら  
 れても中君には關係せざ  
 りし位なれば、今更斯う  
 いふはちと浮氣らしく思  
 はるゝかも知らねど  
 (九)實際の戀中になりて  
 貰ひたき心があらばこそ  
 けしからん奴とも思はる  
 べけれど  
 (一〇)斯く親しく面會し  
 私の堅い事は  
 (一一)うしろめたく思ふ  
 程ならば  
 (一二)御目にかゝる筈は  
 ない、べくは「べし」の誤  
 歟  
 (一三)紫の竝々ならぬ眞  
 實を認めたればこそ  
 (一四)此方から進んで手  
 紙を上る事さへある  
 (一五)此方から文をやり  
 たり杯大層な事の様に仰  
 せられるは宇治行の事に  
 一さきての御手紙か

かひをのみならひ侍りしを、然るべきにや侍りけむ、憂きものから疎ならず思ひ  
 そめきこえ侍りし一節に、かの本意の聖心は、さすがに違ひやしにけむ。慰ば  
 かりに、此處にも此處にも行きかよづらひて、人の有様を見むにつけて紛るゝ事  
 もやあらむなど、思ひ寄る折々侍れど、更に外ざまに靡くべうも侍らざりけり。  
 萬に思ひ給へわびては、心のひく方の強からぬわざなりければ、すぎがましき様  
 (七)に思さるらむと恥かしけれど、あるまじき心のかけても侍らばこそめざましから  
 め、唯斯ばかりの程にて、時々思ふ事をも聞えさせ承りなどして、隔なく宣ひ  
 通はむを、誰かは咎め出づべき。世の人に似ぬ心の程は、皆人にもどかるまじく  
 侍るを、猶後やすく思しなれなど、怨みよ泣きみ聞え給ふ。中君うしろめたく思  
 ひ聞えば、かく怪しと人も見思ひぬべきまでは、聞え侍るべくや。今頃此方彼方  
 につけつと、見知る事どもの侍りしかばこそ、様異なる頼もし人にて、今はこれ  
 よりなどさへ、驚かし聞ゆれ」と宣へば、薫さやうなる折も覺え侍らぬものを、  
 (一六)

(二) 薫の心、中君の側へなるたり人を寄せじと思ふ故に、少將の来るを見て表面は何氣なく装へども内々は心安からぬ也

なむ痛いたき。しばし押おさへて」と宣のたまふを聞き給ひて、薫胸むねは押おさへたるは苦くるしう侍はべるものをと、打うち歎なげきて居ゐ直なほり給ふほど、實ひにぞ下した安やすからぬ。薫如何いかなれば、斯かくはしも常つねに惱なやましうは思おぼさるらむ。人ひとに問とひ侍はべりしかば、しばしこそ心地こころちはあしか。なれ、さて又またよろしき折せりあり、などこそ教をしへ侍はべりしか。あまり若わかくもてなさせ給ふなしめりかし」と宣のたまふに、いと恥はづかしうて、中君胸むねは何時いつともなく斯かくこそは侍はべれ。昔むかしの人ひともさこそはものし給ひしか。長ながかるまじき人ひとのするわざとか、人ひとも言いひ侍はべるめる」とぞ宣のたまふ。實ひに誰たれも千ち年ねんの松まつならぬ世よを、と思おもふには、いと心こころ苦くるしう哀あはなれば、この召めし寄せたる人ひとの聞きかむもつよまれず、かたはらいたき筋すぢの事ことをこそ擇えり止とむれ、昔むかしより思おもひ聞きえし様さまなどを、かの御おん耳みみひとつには心得こころえさせながら、人ひとは又またかたはにも聞きくまじき様さまに、様さまよく目め安やすくぞ言いひなし給ふを、實ひにありがたき御おん心こころばへにもと聞きき居ゐたり。何なに事ことにつけても、故こ君きみの御おん事ことをぞ盡つぎせず思おもひ給へる。薫いはけなかりし程ほどより、世よの中なかを思おもひ離はなれて止とみぬべき心こころつ

(三) 大君も

(四) 胸痛は早死する人の病む病なりとか

(五) 薫の心、憂くも世の思ふ心に叶はぬか誰も千歳の松ならぬに

(六) 少將の聞き居る手前も憚られず

(七) 人前では言はれぬ様な事丈は言はずに置けども

(八) 中君に丈は分つて他人に聞かれては餘り見つともなくない様を風に體裁よく話すを

(九) 少將が

(二〇) 大君の事を薫が

(一) 薫が  
(二) 人目を憚る故

(三) 醫師のつもりで簾内へ入れてくれぬか

(四) 薫が中君に近づきしを見し女等

(五) 薫を簾外に置くは

(六) 人が左様いふ物を反對するも角立つて却て翻ならぬと思ひて

(七) 中君の

(八) 大君の病み初めの様子に似て居る様に思はれども思々しく

(九) 薫が

(一〇) 中君が用心して非常に引込んで離れて居るを薫がつちく思ひて

(一一) 中君が  
(一二) 中君が

て聞え出し給へるを聞くに、いみじうつらくて、涙のおちぬべきを、人目につよ

めば、強ひて紛はして、<sup>(二)</sup> 惱ませ給ふをりは、知らぬ僧なども近く参り寄るを、

醫師などの列にても、御簾の内には侍ふまじくやは。かく人傳なる御消息なむ、か

ひなき心地する」と聞え給ひて、いとものしけなる御氣色なるを、一夜物のけし

き見し人々、「實にいと見苦しく侍るめり」とて、母屋の御簾うちおろして、夜居

の僧の座に入れ奉るを、女君誠に心地もいと苦しけれど、人の斯う言ふに、う

たて掲焉ならむも、又いかごとつよましければ、物憂ながら少しるざり出でて、

対面し給へり。いとほのかに、時々物宣ふ御けはひの、昔の人の惱みそめ給へり

し頃、まづ思ひ出でらるよも、ゆよしう悲しくて、かきくらす心地し給へば、と

みに物も言はれず、ためらひつよぞ聞え給ふ。こよなく奥まり給へるもいとつら

くて、簾の下より几帳を少しおし入れて、例の馴れくしけに近づき寄り給ふが、

いと苦しければ、わりなしと思して、少將の君といふ人を近く召し寄せて、中君胸

(一)中君  
(二)以下中君の心

(三)恥をかきつけて突放すはざうさもなき事なれど

(四)蕪は従来一種特別な後見人として力にし來りし人故

(五)蕪の切なる情を酌知らぬ譯では無けれど、さりとして相思の中の様に受容するも憚あり

(六)侍女等を見廻はしても少し相談相手になりさうなるは皆漸發て

(七)大君さへ存生ならば蕪が我に懸想する事もあるまい

(八)蕪の始末を中君が苦にやみたり

(九)蕪も我慢しきれず

(一〇)中君方へ

(一一)御目にかくれぬ

る氣色見せつゝ聞え給ふを、女君いとわびしき事添ひにたる身と思し歎かる。(三)

とへに知らぬ人ならば、あな物狂しと、はしたなめさし放たむにも安かるべきを、

昔より様異なる頼もし人にならひ來て、今更に中あしくならむも、なか／＼人目

あやしかるべし、流石に淺はかにもあらぬ御心ばへ有様の、哀を知らぬにはあら

ず、さりとして、心かはし顔にあへしらはむも、いとつよましく、如何はすべから

む、と萬に思ひ亂れ給ふに、侍ふ人々も、少しもの言ふかひありぬべく若やか

なるは、皆あたらしき心地して、見給ひ馴れたる人としては、かの山里の古女ばら

なり、思ふ事をも同じ心になつかしう、言ひあはずべき人の無き儘には、故姫君

を思ひ出で聞え給はぬ折なし。おはせましかばこの人もかよる心も添へ給はまし

やと、いと悲しく、宮のつらくなり給はむ歎よりも、この事いと苦しく覺ゆ。

男君も強ひて思ひわびて、例のしめやかなる夕つ方おはしたり。やがて端に御裾

さし出でさせ給ひて、中君「いと惱ましき程にてなむ、え聞えさせぬ」とぞ、人し



(一)六君方の花やかなる生活に比較されては句の從者等の手前も恥かしと  
 (二)薫は中君の心をよく推量して

(三)親しからぬ處へやるとしてはごた／＼して見苦しき贈物も

(四)中君を侮るではなけれど仰山に特別仕立などにしては却つて意外に思つて不審を立てる人もあるべしと分別してあの如き有合物を贈りたる也

(五)又あらためて薫が衣類を中君へ贈る也

(六)見憎からぬ衣裳

(七)綾を織るべき材料

(八)薫も匂に劣らざ大事にされて育ちたる貴公子故

(九)餘りなる迄

(一〇)八宮

(一一)廣く世情を顧み

(一二)八宮がよくも薫を感化したる事哉  
 (一三)薫、中君を訪ひて情を訴ふ、中君浮舟の事を薫に語る  
 (一四)是非中君への戀を思ひ切りて素質を男になつて仕舞ひたいと思へど其が出来ず、薫の心(一四)前々よりは委しく書きて

に響きたる御有様の花やかさに、かつは宮の内の人の見思ふらむ事も、人けなき事と、思し亂るよことも添ひて歎かしきを、中納言の君はいとよく押し量り聞え給へば、疎からむあたりには見苦しうくたくしかりぬべき心しらの様も、侮

るとはなけれど、何かは事々しくしたて顔ならむも、なか／＼覺えなく見咎むる

人やらむと、思すなりけり。今ぞ又例のめやすき様のものどもなどせさせ給ひ

て、御小袷織らせ、綾の料賜はせなどし給ひける。この君しもぞ、宮にも劣り聞

え給はず、様殊にかしづきたてられて、かたはなるまで心傲もし、世を思ひす

まして、あてなる心様はこよなけれど、故親王の御山住を見そめ給ひしよりぞ、

淋しき所の哀さは様ことなりけりと、心苦しう思されて、なべての世をも思ひめ

ぐらし、深き情をもならひ給ひにける。いとほしの人ならはしやとぞ。

かくて、猶いかで後安く大人しき人にてやみなむと思ふにも隨はず、心にかより

て苦しければ、御文などを、ありしよりは細やかにて、ともすれば忍びあまりた

(一三) 是非中君への戀を思ひ切りて素質を男になつて仕舞ひたいと思へど其が出来ず、薫の心(一四)前々よりは委しく書きて

- (一) 大輔が
- (二) 分け與へなど
- (三) 作者の語、も御附の若い侍女などを殊に身綺麗にさせておくがよし
- (四) 其等の女の分にとて黨から賜りたるは白き袴などにて
- (五) 黨の外には中君を世話する人なし
- (六) 匂宮
- (七) 是非世話を焼く積りなれど
- (八) 匂は無暗に人に大事にされてのみ居る人故
- (九) 世間の不足といふ事を御存知なきも道理
- (一〇) 只世の中は花やかに送るべき物と思ひ居る割合には
- (一一) 思ふ女の事とて折は經濟向の世話をやく事もあるのは甚だ珍しいの事故
- (一二) 匂を悪くいふ
- (一三) 身綺麗ならぬのが
- (一四) 二條院の住居は暗がまし過ぎて迷惑

宿

木

も思ひ煩はで、人々に取散らしなどしたれば、各さし縫ひなどす。若き人々の御  
(一) 前近く仕う奉るなどをぞ、とりわきてはつくるひ立つべき。下仕どもの、いたく  
 萎えばみたりつる姿どもなどに、白き袴などにて、掲焉ならぬぞなか／＼目安か  
(四) りける。誰かは、何事をも後見聞ゆる人のあらむ。宮は、疎ならぬ御志の程に  
(五) て、萬をいかでと思しおきてたれど、細なる内々の事までは、如何は思し寄らむ。  
(七) 限もなく人にのみかしづかれて、ならばせ給へれば、世の中のうちあはず寂しき  
(八) こと、如何なるものとも知り給はぬ、理なり。艶にそどろ寒く、花の露をもてあ  
(九) そびて、世は過すべきものと思したる程よりは、思ほす人の爲なれば、自ら折節  
(一〇) につけつゝ、まめやかなる事までも扱ひ知らせ給ふこそ、有難く珍かなる事なめ  
(一一) れば、「いでや」など謗らはしけに聞ゆる、御乳母などもありけり。童へなどのなり  
(一二) 鮮かならぬ、折々打交りなどしたるをも、女君はいと恥かしく、なか／＼なる住  
(一三) 居にもあるかななど、人知れず思す事無きにしもあらぬに、ましてこの頃は、世

(一)特に用意はして無いが

(二)衣服を司る女官

(三)染めぬ

(四)中君の著料

(五)薫の著料なる

(六)男の物なれば女の袴の一式は無かりしに

(七)引腰、女の袴をはきたる時かざりに引く紐

(八)我物と思ひ居し中君が人の物になつて仕舞ひしも縁なれば一向に恨みても仕方がなかるべし

(九)中君の侍女

(一〇)薫より大輔へ注意してやる詞、取敢へず有るに儘せて贈る品故甘く見苦しからぬ様に取計らひてくれ

(一一)中君の分

(一二)箱に入れて

(一三)中君に別段見せもせねど

(一四)薫の心入は

(一五)改まつて返しなどぐづぐづすべき譯もなき故

もなどやあらむ。染めたるなどは今はわざともし置かぬを、急ぎてこそせさせめ」

と宣へば、薫なにか、事々しき用にも侍らず。侍はむにしたがひて」とて、御匣殿

などに問はせ給ひて、女の装束ども數多くだりに、清けなる細長どもも、たどあ

るに隨ひて、たどなる絹綾などとり具し給ふ。自らの御料と思しきには、我が御

料にありける、紅の擣目なべてならぬに、白き綾どもなど、數多かさね給へるに、

袴の具は無かりけるに、如何にしたりけるにか、腰のひとつありけるを、引き結

び加へて、

薫むすびける契ことなる下紐をたどひとすぢにうらみやはする

大輔の君とて、大人々々しき人の、睦まじけなるにつかはす。「とりあへぬ様の見

苦しきを、つきぐしうもて隠して」など宣ひて、御料のは、忍びやかなれど、箱

にて包も異なり。御覽せさせねど、前々も、かやうなる御心しらは常の事にて、

目馴れにたれば、氣色はみ返しなど、ひこじろふべきにもあらねば、いかどなど

- (一) 移香一件のありたる今日は
- (二) 薫の風采も、以下句の心
- (三) 薫に眺まれては女も無下にはね附ける譯には行くまい
- (四) 薫と中君は丁度よき似合の中なれば
- (五) 句が中君方に滯留する也
- (六) 六君方へは
- (七) 薫 薫衣類を中君に贈る
- (八) 中君方に
- (九) 薫の心
- (一〇) 中君方の爲上かれと思ひ來りし自分が此様な情を起すとはけしからぬ
- (一一) 此様子では句が中君を捨てたる隙はないらし
- (一二) 侍女等
- (一三) 衣裳が
- (一四) 女三
- (一五) 用意の衣類
- (一六) 必要が生じたり
- (一七) 來月は九月、正五
- (一八) 白衣

宿

木

かし、と疑はるゝには、いとど今日は安からず思さるゝ、理なりかし。かの人の氣色も、心あらむ女の、哀と思ひぬべきを、などてかは、ことの外にはさし放たむ、いとよき間なれば、互にぞ思ひかはすらむかし、と思ひやるぞ、わびしく腹立たしく妬かりける。猶いと安からざりければ、その日もえ出で給はず。六條院には、御文をぞ二度三度奉れ給ふを、「いつの程につもる御言の葉ならむ」と呟く老人どももあり。

中納言の君は、宮のかく籠りおはするを聞くにも、心やましく覺ゆれど、わりなしや、我心のをこがましう悪しきぞかし、後やすくと思ひそめてしあたりの事を、かくは思ふべしや、と強ひてぞ思ひ返して、さは言へどえ思し捨てざりめりかしと、嬉しくもあり。人々のけはひなどの、なつかしき程に、萎えばみたしめりしを、と思ひやり給ひて、母宮の御方に参り給ひて、眞よろしきまうけの物どもや侍ふ。つかふべき事なむ」と申し給へば、母宮例のたよむ月の法事の料に、白きものど

(二六)

(二七)

(二八)

(一)中君  
(二)薄紫

(三)萬事立派づくめの六君の風采に比較しても

(四)句の愛が深き故六君に比して恥しからずと思はるゝなるべし

(五)九々と、以下中君の容貌

(六)懐胎して瘦せたる也

(七)薫の移香をかぎつねぬ内から句は中君の器量の上きを見ては次の如くに思へりと也

(八)句の心、兄弟でもない男が此女に親しまば必ず戀情の起る害と浮氣な自分の心から推測し居る事故

(九)戀中になつて居る趣がわかる様な薫の文がありはせぬかと

(一〇)眞面目に

(一一)平凡な文など

(一二)特に仕舞ひ置いた様でもなく

(一三)句の心

と靜かに見廻さる。君はなよよかなる薄色どもに、瞿麥の細長襲ねて、うち亂れ

給へる御様の、何事もいとうるはしく、事々しきまで盛なる人の御装何くれに

思ひくらふれど、氣劣りても覺えず、なつかしうをかしきは、志の疎ならぬに、

恥なきなめりかし。まろに美しく肥え給へりし人の、少し細やぎたるに、色はい

よいよ白うなりて、あてにをかしけなり。かよる御移香などの、著からぬ折だに、

愛敬つきらうたき所などの、猶人には多くまさりて思さるゝ儘には、これを、兄

弟などにはあらぬ人の、氣近く言ひ通ひて、事に觸れつゝ、おのづから聲けはひ

をも聞き見馴れむは、いかでかたどには思はむ、必ずしか思ひよりぬべき事なる

をと、我がいと隈なき御心ならひに、思し知らるれば、常に心をかけて、しるき

様なる文などやあると、近き御厨子小唐櫃などやうの物をも、然りけなくて見給

へど、さる物もなし。唯いとすくよかに言少にて、なほくしきなどぞ、わざと

もなければ、物にとり交ぜなどしてもあるを、あやし、猶いと斯うのみはあらじ

(一)句が

(二)年來連添ひし中を此位の事にて別れるはつちし、みなれ一身馴れ、見馴れ、かゝ斯、香  
(三)是だから薫も此女に打込むのぢやと、句の心  
(四)句も涙をこぼし  
(五)中君の様子  
(六)一向に憎む譯にはゆかず

(七)句が  
(八)中君方にて食す  
(九)大君方の結構づくめなるを見て来た目には  
(一〇)侍女の姿も者古した衣を着た者などもありて

かりの程やは経ぬる。思の外に憂かりける御心かな」と、すべて、まねぶべくもあらず、いといとほしけに聞え給へど、ともかくも答へ給はぬさへ、いとねたくて、

句 また人に馴れける袖のうつりがを我身にしめてうらみつるかな

女は、あさましう宣ひつどくるに、言ふべき方も無きを、「いかどは」とて、

中君みなれぬる中の衣とたのみしをかばかりにてやかけはなれなむ

とて打泣き給へる氣色の、限なう哀なるを見るにも、斯かればぞかしと、いとど

心やましくて、我もほろくとこほし給ふぞ、色めかしき御心なるや。誠に、いみ

じき過ありとも、ひたふるにはえぞ疎みはつまじく、らうたけに心苦しき様のし

給へれば、えも怨みはて給はず、宣ひさしつと、かつはこしらへ聞え給ふ、

又の日も、心のどかに大殿籠り起きて、御手水御粥なども此方にまゐらす。御し

つらひなども、さばかり輝くばかり、高麗唐土の錦綾をたち重ねたる目うつしに

は、尋常に打馴れたる心地して、人々の姿も、なえばみたる打交りなどして、い

(一)薰と雖も打解けて附合ふ譯にはゆかぬと

(二)句の久しく來ぬのは

(三)少し離れがたき風を

見するを

(四)薰の移香が中君に染みたるが

(五)入れは衍文歟

(六)句は香道の黒人をれ

は

(七)聞き糺すに

(八)薰に近づきしは萬更無い事でもなき故

(九)中君が

(一〇)句の心

(一一)薰が中君に近づく事はあるべし

(一二)中君が

(一三)案外に

(一四)斯く移香が染み居る位ではつきり薰と添寝したに極つて居る

(一五)中君が

(一六)我は其方を深く思ふのに

(一七)一人よりは我こそ先に忘れなめつれなきをしも何か頼まん棄てらるる位なら此方から棄ててやるといふ機を舉動を

するは賤しき者の事

(一八)其方が段に隔心を生ずる程の無沙汰もせざりしに

りがたかりけれど、猶打解くべくはたあらざりけりかし、などいよく心遣せら

るよにも、久しくとだえ給はむ事は、いと物恐ろしかるべく覺え給へば、言に出

てでは言はねど、過ぎぬる方よりは、少し纏はし様にもてなし給へるを、宮はい

とど限なう哀と思したるに、かの人の御移香の、いと深うしみ給へるが、世の常

の香の香に入れ、薰きしめたるにも似ず、著き匂なるを、その道の人にしおはず

れば、怪しと咎め出で給ひて、如何なりし事ぞと氣色とり給ふに、殊の外にもて

はなれぬ事にしあれば、言はむ方無くわりなくて、いと苦しと思したるを、され

ばよ、必ず然る事はありなむ、よもたどには思はじと思ひ渡る事ぞかし、と御心

騒ぎけり。さるは、單衣の御衣なども、脱ぎかへ給ひてけれど、怪しう心より外

にぞ、身にしみにける。匂かばかりにては、残ありてしもあらじ」と、萬に聞きに

くと宜ひつどくるに、心憂くて、身ぞ置きどころなき。匂思ひ聞ゆる様異なるも

のを、我こそさきになど、かやうに打背く際は異にこそあれ。又御心おき給ふば

(二七)

(二五)

(二四)

(二二)

(二〇)

(一九)

(一七)

(一六)

(一四)

(一三)

(一一)

(一〇)

(一) 蕨  
(二) 中君が

(三) 存命中は場合に応じて穩かにしてゆかんと

(四) 句が

(五) 丁寧に説言をいふ

(六) 中君の

(七) 句は身持女に近づきし事なき故

(八) 六君方

(九) 句が

(一〇) 男は皆かく口先の甘いものかしらと、中君の心

(一一) 蕨の

(一二) 年來蕨の親切は有難く思ひ居たれど、戀の方にては蕨の情もけしからぬと思へば

(一三) 句の將來の約束も當にならぬと思へど

(一四) 以下中君が蕨の事を心中に評する詞

(一五) 油断させて

(一六) 大君には遂に遂はざりし事など

し人に思ふ人も、疎ましき心添ひ給へりけり、と見給ふに、世の中いと所狭う思ひなられて、猶いと憂き身なりけりと、唯消えせぬ程は、あるに任せて、おいら

かならむ、と思ひ果てて、いとらうたけに、心美しき様にもてなして居給へれば、いとど哀に嬉しく思されて、日頃の怠など、限なく宣ふ。御腹も少し脹らかに

なりにたるに、かの恥ぢ給ふしるしの帶の引き結はれたる程など、いとあはれに、まだかゝる人を氣近くても見給はざりければ、珍らしくさへ思したり。打解けぬ

所にならひ給ひて、萬のこと心やすく、なつかしく思さるゝ儘に、疎ならぬ事どもを盡せず契り宣ふを聞くにつけても、斯くのみ言よきわざにやあらむと、強ち

なりつる人の御氣色も思ひ出でられて、年頃哀なる御心ばへとは思ひ渡りつれど、かゝる方様にては、あはれをもあるまじき事と思ふにぞ、この御行く先の頼めは、

いでやと思ひながらも、少し耳とまりける。さても、あさまじうたゆめたゆめて、入り來たりし程よ。昔の人に疎くて過ぎにし事など語り給ひし心ばへは、實に有

宿

木

七九



(一) 甘く言ひぬげなどして  
薫を返した處など

(二) 字治の添臥の時には  
勝りて

(三) 薫の心

(四) 匂が捨てたらば中君  
は我を力にするに違なし

(五) 其儀に通つた曉にも  
人目晴れて通ふ露にはゆ  
くまじければ

(六) 忍びたる中ながら他  
に見かへる女のないとい  
ふ深い中で過すべきてあ  
らうなどと

(七) 薫の性質を作者の評  
する詞

(八) 男といふ者はいやな  
もので

(九) 大君に對しては其死  
を恐むのも斯迄切ては無  
かりしに、今の悲は其以  
上で思ひ至らぬ限なし

(一〇) 匂が中君方へ行か  
れた

(一一) 中君の世話親たる  
了簡はなく

(一二) 匂宮中君方に宿して  
薫の移香を怪しむ

(一三) 匂宮  
中君に無沙  
汰したるは

(一四) 中君の心

(一五) 字治行を企てても

あらで、いとらうくじく恥かしけなる氣色も添ひて、流石になつがしう言ひこ

しらへなどして出だし給へる程の御心ばへなどを思ひ出づるも、妬うも悲しうも、

様々に心にかよりて、わびしく覺ゆ。何事も、いにしへにはいと多く勝りて思ひ

出でらる。何かは、この宮かれはて給ひなば、我を頼もし人にし給ふべきにこそ

はあめめれ、さても、顯れて心安きさまにはえあらじを、忍びつゝ又思ひます人な

き、心のとまりにてこそはあらめなど、唯この事のみ、つと覺ゆるぞ、けしから

ぬ心なるや。さばかり心深げにさかしがり給へど、男といふものの心憂かりける

事よ、なき人の御悲しさは、言ふかひなきかたにても、いと斯う苦しきままではな

かりけり。これは、萬にぞ思ひめぐらされ給ひける。「今日は宮渡らせ給ひぬ」な

ど人の言ふを聞くにも、後見の心はうせて、胸うちつぶれて、いと羨しう覺ゆ。

宮は、日頃になりにけるは、我が御心さへ恨めしう思されて、俄に渡り給へるな

りけり。何かは、心隔てたる様にも見え奉らじ、山里にと思ひ立つにも、頼も

(一)外の事は考へられぬ  
(二)蕪の心

(三)蕪が

(四)蕪より中君へ  
(五)さつぱりしたる

(六)本意を透げざる梅し  
さは昔の宇治の添臥の時  
にかはらぬ  
(七)つちく思ふ道理はな  
いのにつちくのみ思はれ  
て何とも申上げ様なし

(八)蕪の感

(九)中君が  
(一〇)蕪の所爲を  
(一一)無暗に迷惑がる一  
方ではなく

添そひたる心地して、更さらに他事ことごとも覺おぼえずなりにたり。宇治うぢにいと渡わたらまほしけに思おも

い給たまふめるを、さもや渡わたし聞きこえてまし、など思おもへど、まさに宮みやは許ゆるし給たまひてむや、

さりとして、忍しのびてはたいと便びんなからむ、如何いか様さまにしてかは、人目ひとめ見み苦しからで、思おも

ふ心こころの行くべき、と心こころもあくがれて眺ながめ臥ふし給たまへり。

まだいと深ふかき旦あしたに御文おんぶんあり。例れいの、うはべは、いとけざやかなる立文たてぶみにて、

蕪(六)いたづらにわけつるみちの露つゆしけみむかしおほゆる秋あきの空そらかな

御氣色みけしきの心憂こころうさは、理知ことわりしらぬつらさのみなむ、聞きこえさせむかたなく。

とあり。御返おんかへしなからむも、人ひとの例れいならず見咎みとがむべきを、いと苦しければ、

中君ちゆうきん承うけたまはりぬ。いと惱なやましうて、え聞きこえさせず。

とばかり書き給たまへるを、あまり言こと少すくなるかなと、さうぐしくて、をかしかりつ

る御おんけはひのみ戀こひしう思おもひ出いでらる。少すこし世よの中なかをも知しり給たまへるけにや、さばか

りあさましうわりなしとは思おもひ給たまへりつるものから、ひたぶるにいぶせくなどは

- (一)委しく書く譯にもゆかぬ
- (二)本望を遂げず斯く迄に攻め寄せた效もない譯なれど
- (三)中君の爲に心配する譯なり
- (四)中君は懐胎なれば不快なるも道理也、以下薫の心
- (五)腹帯がありし故それが氣の毒で手を出すのをやめたのであつた
- (六)無理な事をするのは面白くなし、以下薫の心
- (七)一時の情の發作にまかせて無理な事をしたあとで
- (八)無理に我慢して暮すも氣の盡きる譯で
- (九)分別らしくは考へるもの共では防ぎ切れず
- (一〇)中君に逢はずには居られぬ儘な心持がするも
- (一一)中君の様子
- (一二)離れて居る様には思はれず

りし御心の用意なれば、猶いと思ひの儘にももてなし聞え給はざりけり。かやうの筋は、  
 (一) 細にもえなむまねびつどげざりける。かひなきものから、人目のあいなきを思へば、萬に思ひ返して出で給ひぬ。  
 (二) (三)

まだ宵と思ひつれど、曉近うなりにけるを、見咎むる人もやあらむと煩はしきも、女の御爲のいとほしきぞかし。  
 (四) 悩ましげに聞き渡る御心地は理なりけり、いと恥かしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しう覺えてもやみぬるかな、  
 (五) 例のをこがましの心や、と思へど、情なからむことは、猶いと本意なかるべし、  
 (六) 又たちまちの我心の亂に任せて、あながちなる心をつかひて後、心安くしもえあらざらむものから、わりなく忍びありかむ程も心づくしに、女のかたく、思し亂れむ事よ、  
 (七) 今どさかしく思ふにせかれず、今の間も戀しきぞわりなかりける。更に見ではえあるまじく覺え給ふも、かへすく生憎なる心なりや。昔よりは少し  
 (八) 細やぎて、あてにらうたけなりつるけはひなどは、立離れたりとも覺えず、身に  
 (九) (一〇)

にえあるまじく覺え給ふも、かへすく生憎なる心なりや。昔よりは少し  
 (一〇) 細やぎて、あてにらうたけなりつるけはひなどは、立離れたりとも覺えず、身に

立離れたりとも覺えず、身に  
 (一一) (一二)

(一二) 立離れたりとも覺えず、身に

身に

(一)中君を人の物にしたるを後悔する心の中の  
(二)中君の心

(三)丸で氣心を知ちぬ人に斯様な目にあはされるよりも恥かしく

(四)昔添臥せし時よりは

(五)我が心がちて中君を他人にして仕舞つて

(六)どうした事ぞといひて近づきて中君を譲りもすべけれど

(七)宇治にて添臥せし時さへ手は出さざりし程の憤深さなれば、今夜も手は出さずに仕舞ひたり

き好きしくめざましき心はあらじと、心安く思せ」とて、いとどのどやかにもてなし給へれど、月頃の悔しと思ひ渡る心のうちの、苦しきまでなり行く様を、つぶつぶと言ひつゞけ給ひて、許すべき氣色にもあらぬに、せむ方なくいみじとも世の常なり。なか／＼むけに心知らざらむ人よりも、恥かしう心づきなくて、泣き給ひぬるを、驚こは何ぞ。あな若々し」とは言ひながら、言ひ知らずらうたけに、心苦しきものから、用意深く恥かしけなるけはひなどの、見し程よりも、こよなくねびまさり給ひにけるなどを見るに、心から餘所人にしなして、かく安からずもの思ふ事、と悔しきにも、又實に音は泣かれけり。近く侍ふ女房二人ばかりあれど、すどろなる男の入り來たるならばこそは、こは如何なる事ぞとも參り寄らめ、かく疎からず聞えかはし給ふ御中らひなめれば、さる様こそはあらめと思ふに、傍痛ければ、知らず顔にてやをら退きぬるぞ、いとほしきや。男君は、古を悔ゆる心の忍びがたきなども、いとしづめ難かりぬべかめれど、昔だに有りがたか

- (一) 九月朔日  
 (二) 句の許を乞ふ事なるべし  
 (三) 薫がこちへかねて  
 (四) 薫の  
 (五) 手をのばして  
 (六) 薫が  
 (七) 忍びてならば君に添ひ臥してもよいと思召さるゝ様なるを甚だ辱く我は思へど、其は私の開損ひか然らざるか明かに承りたくて斯く入り來れる也、時に取てのごまかし文句を薫がいふ也  
 (八) 中君が  
 (九) 薫を  
 (一〇) 恥しめて  
 (一一) 薫の心  
 (一二) 人に咎めらるべき程の事ではなし  
 (一三) 昔もあつたてはなつか  
 (一四) 大君も君を我に許したりしに、私が君に近づくと飛んでもなき事の様と思はるゝは然るべからぬ事

の月は過ぎぬめれば、朔日の程にもそこそは思ひ侍れ。唯いと忍びてこそよからめ。何か世の許など事々しうは」と宣ふ聲の、いみじうらうたけなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるゝに、えつよみあへで、寄る給へる柱のもとの、簾の下より、やをらおよびて、御袖をひかへつ。女、然りやあな心憂と思ふに、何事かは言はれむ、物も言はで、いとど引き入り給へば、それに附きていと馴れ顔に、半は内に入りて添ひ臥し給へり。薫「あらずや、忍びてはよかるべう思すこともありけるが嬉しきは、ひがみよかと聞えさせむとぞ。疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂の御氣色や」と怨み給へば、答すべき心地もせず、思はずに憎く思ひなりぬるを、せめて思ひ鎮めて、中君「思の外なりける御心の程かな。人の思ふらむ事よ。あさまし」とあばめて、泣きぬべき氣色なる、少しは理なれば、いとほしけれど、薫「これは咎あるばかりの事かは。かばかりの對面は、古をも思し出でよかし。過ぎにし人の御許もありし物を、いとこよなう思しけるこそ、なか／＼うたてあれ。好

(一)中君を宇治へやる事は私一了簡ては出来ませぬ

(二)匂に機嫌を損ねぬ様に頼みて

(三)少しの物の行違の爲に中君が輕率な舉動をした様に匂に思はれてはならぬ

(四)私が引受けて

(五)人と違つて私の間違なき事は匂も御存知

(六)中君を匂に遣つて仕舞つた事を始終後悔し居て

(七)「取返すものにもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」

(八)病氣の快き時分に萬事御話致すべし

(九)宇治行を

(一〇)宇治の

(一一)御機嫌取りに

などやうに思はせて、言少に紛らはしつよ、山里にあからさまに渡し給へと思し

く、いと懇に思ひて宣ふ。驚それはしも、心一つにまかせては、え仕う奉るまじ

き事に侍るなり。猶宮に唯心うつくしう聞えさせ給ひて、かの御氣色に随ひてな

むよく侍るべき。然らずば、少しも違ひめありて、心輕くもなど思しものせむに、

いとあしく侍りなむ。然だにあるまじくば、道のほどの御送迎も、おりたちて

仕う奉らむに、何の憚かは侍らむ。うしろやすく人に似ぬ心の程は、宮も皆知ら

せ給へり」など言ひながら、折々は、過ぎにし方の悔しきを忘るゝをりなく、「も

のにもがなや」と、取返さまほしき様などほのめかしたつよ、やうく暗くなり行く

までおはするに、いとうるさく覺えて、中君さらば、心地も惱ましくのみ侍るを、

又よろしく思ひ給へられむ程に、何事も」とて、入り給ひぬる氣色ならが、いと口惜

しければ、驚さても、何時ばかりに思し立つべきにか。いと繁う侍りし道の草も、

少しうち拂はせ侍らむかし」と、心とりに聞え給へば、しばし入りさして、中君「こ

(一)昨日は匂が居られると承りし故  
(二)年來の私の戀なる志がやうく其驗が見えて来たのか

(三)中君が  
(四)法事をなし下されしを感謝し居る私の心中を只黙つて居たらば、其感謝の念の一端を現はす事も出来ぬと思ひて御招き申したる也

(五)中君が奥深く居て  
(六)中君の居場所が

(七)戀想心ある故胸がどきどきする也

(八)匂が案外薄情であつたと思はせる様に

(九)批難もし  
(一〇)匂の怨めしき杯は口に出す譯にもゆかぬ

(一一)引歌未詳

させ給へりし喜びに、すなはちも參らまほしく侍りしを、宮渡らせ給ふと承りしかば、折悪しくやはとて、今日になし侍りにける。さるは、年頃のしるしもやうやうあらはれ侍るにや、隔少し薄らぎ侍りにける御簾の内よ、珍らしく侍るわざかな」と宣ふに、猶いと恥かしく、言ひ出でむ言の葉もなき心地すれど、中君一日嬉しく聞き侍りし心の中を、例の唯結ほほれながら過し侍りなば、思ひ知る片端をだにいかでかはと口惜しさに」と、いとつとましげに宣ふが、いたく退きて、たえぐ、仄に聞ゆれば、心もとなくて、驚いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ承らまほしき、世の御物語も侍るものを」と宣へば、實にと思して、少しみじろき寄り給ふけはひを聞き給ふにも、ふと胸うちつぶるれど、さりけなくいとど鎮めたる様して、宮の御心ばへ、思はずに淺うおはしけりとおほしく、かつは言ひも疎め、又慰めも、かたぐくに靜々と聞え給ひつよおはす。女君は、人の御怨めしさなどは、打出で語らひ聞え給ふべき事にもあらねば、唯「世やは憂き」

(一八) (一九) (二〇) (二一)

(一) 黨が中君方へ  
(二) 中君への懇情

(三) 丁子の汁にて黄に染めたる也

(四) 一夜宇治にて黨が己の傍に臥したりし事

(五) 黨の

(六) 黨を夫にして、もよかりしにと位は

(七) 匂の

(八) 非常に黨の方が勝れて居るのが分るにや

(九) 中君が黨に氣の毒で

(一〇) 譯の分らぬ奴と黨が自分を思ふなちんと思ひて

(一一) 私を態、御呼立になりし譯では無けれど  
(一二) 私の参る事を

と、怨めしう思ひ給へらるれ。よろづは今侍ひてなむ。あなかしこ。

と、すくよかに、白き色紙のこはくしきにてあり。

さて又の日の夕つ方ぞ渡り給へる。人知れず思ふ心し添ひたれば、あいなく心づ

かひ痛くせられて、なよよかなる御衣どもを、いと匂はし添へ給へるは、餘り

おどろくしきまであるに、丁子染の扇の、もてならし給へる移香などさへ、た

とへむ方なくめでたし。女君も怪しかりし夜の事など、思ひ出で給ふ折々無きに

しもあらねば、まめやかに哀なる御心ばへの、人に似ず物し給ふを見るにつけて

も、然てもあらましをとばかりは、思ひもやし給ふらむ、いはけなき程にしおは

せねば、怨めしき人の御有様を、思ひ比ぶるには、何事もいとごよなく思ひ知

られ給ふにや、常には隔多かるもいとほしく、物思知らぬさまに思ひ給ふらむ、

など思ひ給ひて、今日は御簾の内に入れ奉り給ひて、母家の簾に几帳添へて、我

は少しひき入りて對面し給へり。驚わざと召しとは侍らざりしかど、例ならず許



(一) 御親切を深く感謝する

(二) 御目にかゝりて御禮申上げたし

(三) 八宮

(四) 薫が法會を取行ひしを

(五) 中君が心から有難く思ひしを

(六) 薫の文の返事さへ

(七) 多くに文も書いてよこさぬに

(八) 「さりぬべくは自らも」と文に書けるをいふ

(九) 薫が

(一〇) 此頃は匂が珍らしい六君に心をひかれて中君の方を疎にして居る際なれば

(一一) 僧の様な所行をして、八宮の法事を行ひしをいふ

(一二) わざと其を中君に隠したるは了簡がありて也、知らせたらば中君が一緒に行ききたしと言出すべしと遠慮したるをいふ

(一三) 我が志が浅くなりたる様に聞えて

名残なからましかば、いかにいとほしくと思ひ給へらるゝにも、  
疎ならず

のみなむ。然りぬべくは自らも。  
(二)

と聞え給へり。陸奥紙に、ひきも繕はずまめだち書き給へるしも、いとをかしけなり。  
故宮の御忌日に、例の事どもいと尊くせさせ給へりけるを、喜び聞え給へる

様の、おどろくしくはあらねど、實に思ひ知り給へるなめりかし。例は、  
れより奉る御返をだに、打解けずつよましけに思ほして、はかしくも續け

給はぬを、「自ら」とさへ宣へるが、珍らしく嬉しきに、心ときめきもしぬべし。  
宮の今めかしく好みたち給へる程にて、思し怠りけるを、實に心苦しう推し量ら

るれば、いと哀にて、をかしやかなる事もなき御文を、うちも置かずひき返しひ

き返し見る給へり。御返は、

薫承りぬ。一日は、聖だちたる様にて、殊更に忍び侍りしも、さ思ひ給ふる

やう侍る頃ほひにてなむ。名残と宣はせたるこそ、少し浅くなりたる様に

(一) 廿月脛の夕露の第

(二) 六君 中君の憂悶、紫を招

きて、字治に赴かん事を謀

る、蕪切なる情を中君に

訴ふ

(三) 句が中君方へは容易

に行かれず

(四) 夕露の邸内に

(五) 昔句が此處に住みし

時の様に

(六) 六君を打捨置きて中

君方へ行く譯にもゆかず

(七) 中君が

(八) 中君の心

(九) 斯う現金に打てかは

らずともよささうな物

(一〇) 身分も考へずによ

い人の中に交るべきては

無かつたと

(一一) 字治を出たのが悔

しく

(一二) 字治へ行きたし

(一三) 句を振捨つるとい

ふ譯ではなけれど

給へる。三條殿腹のおほい君を、東宮に參らせ給へるよりも、この御事をば、い

とことに思ひおきて聞え給へるも、宮の御覺有様がらなめり。

かくて後二條院に、え心安く渡り給はず。輕らかなる御身ならねば、思すまよに、

晝の程などもえ出で給はねば、やがて同じ南の町に、年頃ありし様におはしまし

て、暮るれば又え引きよぎても渡り給はずなどして、待遠なるをりくあるを、

斯からむずる事とは思ひしかど、さしあたりては、いと斯うしもやは名残なか

るべき、けに心あらむ人は、數ならぬ身を知らで、交らふべき世にもあらざりけ

り、と返すくも、山路わけ出でけむ程、うつよとも覺えず悔しく悲しければ、猶

いかで忍びて渡りなむ、むけに背く様にはあらずとも、しばし心をも慰めばや、

憎けにもてなしなどもせばこそ、うたてもあらめ、など心ひとつに思ひあまりて、

恥かしけれど、中納言殿に御文奉れたまふ。

中君 一日の御事は、阿闍梨の傳へたりしに、委しう聞き侍りにき。

かよる御心の

宿

木

六九

六九

六九

六九

六九

六九

六九

六九

六九

⑤ 美しき六君、匂君の愛情

(一) 匂

(二) 六君

(三) 六君の容貌

(四) 未熟なる點なく

(五) かたはは整はぬ也

(六) 夕霧が目の無い迄に祕藏にして居るも尤

(七) 中君が此點に於ては勝れりと思はる

(八) 六君の様子

(九) 滑柄らしい

(一〇) 侍女

(一一) きまり切つたる折目正しき衣裳附は匂が鼻

(一二) 合點のゆかぬと思はるゝ位に氣取り過ぎて居る

につけつゝ多かるべし。

宮は女君の御有様、晝見聞え給ふに、いとど御志まさりにけり。大さよき程な

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

る人の様體いと清けにて、髪のがりば頭つきなどぞ、ものより殊に、あなめでたと見え給ひける。色あひ餘りなるまで匂ひて、ものくしく氣高き顔の、まみ

いと恥かしけにらうくじう、すべて何事も足らひて、容貌よき人と言はむに飽

かぬ所なし。二十に一二ぞ餘り給へりける。いはけなき程ならねば、かたなり

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

に飽かぬ所なくあざやかに、盛の花と見え給へり。限なくもてかしづき給へるに、

かたほならず。實に親にては、心も惑はし給ひつべかりけり。唯やはらかに愛敬

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

づきらうたき事ぞ、かの對の御方はまづ思し出でられける。物宣ふ答なども、恥

らひ給へれど、又あまり覺束なくはあらず、すべていと見所おほく、かどくしけ

なり。よき若人ども三十人ばかり、童六人、かたほなるなく、裝束なども、例のう

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)



(一)君の情人として人に許され難き身分で君に逢ひそめたるが残念なりといふ意なるべし

(二)我が君に對する情は淺くは見ゆべけれど下心はいつも變らざ

(四)物思に夜をあかすなどいふ意氣筋の人眞似てはなく

(五)薫は別に情々しき風を見せるでもなければ様子の上いので情らしく見えるのかして

(六)薫が冗談にも手をかけた女はどうかして薫の近くに暮したしと思ひて強ひて女三方に宮仕へに來るも

べかめり。

按察うちわたし世にゆるしなき關川をみなれそめけむ名こそをしけれ

いとほしければ、

深(三)からずうへは見ゆれどせき川(四)のしたのかよひはたゆるものかは

深(三)と宣(五)はむにてだに頼(六)もしけなきを、この上(七)の淺さは、いとど心(八)やましく覺(九)ゆ

らむかし。妻戸(一〇)を押しあけて、薫(一一)まことは、この空(一二)を見給へ。いかでかこれを知

らず顔(一三)にては明(一四)さむとよ。艶(一五)なる人まねにはあらで、いとど明(一六)しがたくなり行く

夜(一七)なくの寢覺(一八)には、この世後(一九)の世(二〇)までなむ思(二一)ひやられて哀(二二)なるなど、言(二三)ひ紛

らはしてぞ出(二四)で給ふ。殊(二五)にをかしきことの數(二六)を盡(二七)さねど、様(二八)のなまめかしき見(二九)な

しにやあらむ、情(三〇)なくなど、はた人(三一)に思(三二)はれ給はず、かりそめの戲言(三三)をも言(三四)ひ

そめ給へる人の、氣(三五)近くてだに見奉(三六)らばやとのみ思(三七)ひ聞(三八)ゆるにや、あながちに、

世(三九)を背(四〇)き給へる宮(四一)の御方(四二)に、縁(四三)を尋(四四)ねつゝ參(四五)り集(四六)りて侍(四七)ふも、哀(四八)なること、程(四九)々

- (一) 親類の中ではあれど
- (二) 句がうまく受け答へして居た事かな
- (三) 蕪の心
- (四) 句を除きては
- (五) 句にめあはせんと思ふ頃は蕪にやつた方がよいと
- (六) 口くせにいふ
- (七) 我は餘り色氣がなく
- (八) 女二宮を賜はるべき思召が事竈ちば
- (九) 女二の翌になるは面目ある事なれども
- (一〇) 女二の容貌が大君に似て居たらば
- (一一) 女二の翌になるのが強いやでも無いと見える
- (一二) 女三宮の侍女
- (一三) 蕪が他の女よりもやく愛憎のあつき女の
- (一四) 按察が氣にする

であるて、(二) 離れぬ中らひなれど、これかれ火明う挑けて、すよめ聞ゆる盃などを、  
(三) いとめやすくもてなし給ふめりつるかな、と宮の御有様をめやすく思ひ出で奉  
 り給ふ。實に我にても、よしと思ふ女子持たりましたかば、この宮をおき奉りて、  
(四) 内裏にだにえ参らせざらまし、と思ふに、誰もく、宮に奉らむと志し給へ  
 る女は、なほ源中納言にこそと、とりぐに言ひならふなるこそ、我がおほえの  
(五) 口惜しくはあらぬなめれ、さるはいとあまり世づかず、古めいたるものを、など  
(六) 心驕もせらる。内裏の御氣色あること、誠に思したらむに、斯くのみものうく  
(七) 覺えば、如何すべからむ、おもだたしき事にはありとも、如何はあらむ、如何に  
(八) ぞ、故君にいとよく似給へらむ時に、嬉しからむかし、と思ひ寄らるよは、流石  
(九) にもと離るまじき心なめりかし。例の寢覺がちなる徒然なれば、按察の君とて、  
(一〇) 人よりは少し思ひ勝し給へるが局におはして、その夜は明し給ひつ。明け過ぎた  
(一一) らむを、人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎ起き給ふを、たゞならず思ふ  
(一二)

(二)小腰引腰とて裳のかざり紐なり、縮出横襟塗模様など種々高下ある也  
 (二)人々に賜はる數は定まり居りて多く與へる事も出来ぬと  
 (三)取次役  
 (四)例を亂す程多く賜はりたり

④ 薫の感情、按察の君の局に泊る  
 (五)餘りよき待遇を受けざりし男が交つて  
 (六)薫がなぜ大人しく夕霧の聲にならぬのであらう  
 (七)ちやはやもてなきれたる匂の御供の人々は

(八)薫が自邸に歸りて  
 (九)極り悪さうな事説、今夜の宴會の事を薫が思ふ也

重襲へがきはの唐衣からぎぬ、裳もの腰こしも皆みなけぢめあるべし。六位四人は、綾あやの細長ほそなが、袴はかまなど、數かずは

限かぎりある事を飽あかずおほしければ、物の色いろしざまなどをぞ、清きよらをつくし給へりけ

る。召次めしつぎ、舍人さねりなどの中には、みだりがはしきまで、いかめしうなむありける。實ひ

にかく賑にぎははしう花はなやかなる事は、見みるかひあれば、物語ものがたりなどにも、まづ言いひたて

たるにやあらむ。されど、委くはしうはえぞ數かずへ立たてざりけるとや。

中納言殿ちゅうなごんごのの御前ごぜんの中に、なま覺おぼえあざやかならぬや、暗くらきまぎれに立たち交まじりたりけ

む、歸かへりてうち歎なげきて、供人いんじん我が殿どのの、などかおいらかに、この殿どのの御婚おんむこにうち

ならせ給たまふまじき。味氣あじきなき御獨住おんひとりずみなりや」と、中門ちゅうもんのもとにて吐つきけるを、聞き

きつけ給たまひて、をかしとなむ思おもしける。夜よの更ふけて睡ねたきに、かのもてかしづか

れつる人々ひとびとは、心地こころちよけに醉よめひみだれて、より臥ふしぬらむかし、と羨うらやましきな

めりかし。

君きみは入りて臥ふし給たまひて、はしたなけなるわざかな、事々ことごとしけなる様さましたる親おやの出い





(一)夕霧と一緒になりて

(二)匂が夕霧邸へ

(三)末群

(四)三ツ目の餅

(五)夕霧

(六)酒宴の席に著かん事を

(七)匂が大君方に居る也

(八)雲井廬

(九)夕霧の子

(一〇)盃を匂に

(一一)夕霧方は面倒な家故聲になるは嫌なり杯匂が替て聲に對していひし事を今思ひ出したる也

(一二)薫の様子

(一三)薫が

(一四)重き身柄の殿上人

もろ心にあつかひ給へるを、大臣は人知れずなまねたしと思しけり。

宵少し過ぐる程におはしましたり。寢殿の南の廂、東に倚りて御座参れり。

御臺八つ、例の御皿など、麗しげに清らにて、又小き臺二つに、花足の皿ども、

いまめかしうせさせ給ひて、餅参らせ給へり。珍らしからぬ事書きおくこそ憎

けれ。大臣渡り給ひて、「夜いたう更けぬるを」と、女房してそよのかし申し給へ

ど、いとあざれて、頓にも出で給はず。北の方の御兄弟の、左衛門督、藤宰相な

どばかり物し給ふ。辛うじて出で給へる御様、いと見るかひある心地す。あるじ

の頭中將、御盃さよけて御臺まゐる。つぎくの御土器、二度三度まゐり給

ふ。源中納言のいたくすよめ給へるに、宮少しほよ笑み給へり。「煩はしきわたり

を」と、ふさはしからず思ひて言ひしを、思し出づるなめり。されど見知らぬ様

にていとまめなり。東の對に出で給ひて、御供の人々もてはやし給ふ。おほえあ

る殿上人どもいと多かり。四位六人は、女の装束に細長添へて、五位十人は、三

(一) 中君が  
 (二) 匂が自分に  
 (三) 懐胎の事、中君の心

① 盛なる六君の三ツ目の祝  
 (四) 匂の新婚より三日目  
 (五) 明石姫中宮  
 (六) 夕霧  
 (七) 薫を夕霧が  
 (八) 六君の三ツ目の祝儀  
 (九) 夕霧が  
 (一〇) 以下夕霧の心持を

いふ、薫は前に六君を嫌ひたる關係あれば此祝に薫を上ぶは氣恥しけれど  
 (一一) 薫の外に然るべき身寄もなく  
 (一二) 薫は又招待して席上の光を増すに足るべき人柄なれば旁夕霧が薫を誘ひしなるべし  
 (一三) 薫が  
 (一四) 六君を匂に取られたるを

宿

ばかりになるも、我ながら憎き心かなと、思ふく聞き臥し給へり。初より物を思はせ給ひし有様などを思ひ出づるも、疎ましきまでおほゆ。この惱ましき事も如何ならむとすらむ、いみじう命短き族なれば、かやうならむ序にもや、はかなくなりなむとすらむ、思ふには、惜しからねど、悲しくもあり、又いと罪深うもあなるものをなど、まどろまれ給はぬまよに思ひ明し給ふ。

その日は、後の宮惱ましけにおはしますとて、誰もく参りつどひ給へれど、いさよかなる御風におはしましたければ、異なる事もおはしませずとて、大臣は晝ま

かんで給ひにけり。中納言の君さそひ聞え給ひて、ひとつ御車にてぞまかで給ひにける。今宵の儀式いかならむ清らを盡さむと思すべかめれど、限あらむかし。

この君も心恥かしけれど、親しき方の覺は、我方様に又さるべき人もおはせず、物の榮にせむに、心ことに、はたおはする人なればなめりかし。例ならずいそ

がしうまかで給ひて、人の御上に見なしたるを口惜しとも思へらず、何やかやと

木

六一

(二)中君の心、男女の關係を

(二)中君が

(三)中君のへ  
(四)食事を  
(五)中君が食はんとせざれば

(六)句の

(七)中君  
(八)宇治の山莊  
(九)宇治にあの饑居たらば此蛸の聲も只一通りの寂しさ位で聞き過したるならんに  
(二〇)句が六君方へ  
(二一)涙の多く落つるを形容していふ

はしたなかるべきが、歎かしきなめり。かゝる道を、いかなれば浅からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも、人の上などにてても怪しう聞き思ひしは、實に疎なるまじきわざなりけり、と我が身になりてぞ、何事も思ひ知られ給ひける。

宮は、常よりも哀に打解けたる様にもてなし給ひて、匂むけに物參らざなるこそいと悪しけれ」など宣ひて、よしある御菓子召しよせ、又さるべき人召して、殊

更に調ぜさせ給ひなどしつよ、そよのかし聞え給へど、いと遙にのみ思したれば、

匂見苦しきわざかな」と歎き聞え給ふに、暮れぬれば、夕つ方寢殿へ渡り給ひぬ。

風涼しく大方の空をかしき頃なるに、今めかしきにすよみ給へる御心なれば、いとどしく艶なるに、物おもはしき人の御心の中は、萬に忍び難き事のみぞ多かりける。

蛸の鳴く聲にも、山の蔭のみ戀しくて、

中君おほかたに聞かましもをひぐらしの聲うらめしき秋の暮かな

今宵はまだ更けぬに出で給ふなり。御さきの聲の遠くなるまよに、海人も釣する

- (一) 落葉
- (二) 代筆にもせよ中君の前で見られては六君が迷惑なるべし
- (三) 代筆でさし出すは嫌な事故自分で書く様に六君にすくめられた
- (四) 六君が彌々打委れ居るは昨夜の首尾のどんなでありし故や
- (五) 不足がましい口上は見ると面倒
- (六) 中君以外に女を持たずに氣樂に暮したいと思ふに
- (七) 以下作者の評、他に女を持たずに經來れる平人の夫婦の中こそ外に女が出来ては他人も妻を氣の毒にも思ふべけれど宮様となれば其様はゆかぬ
- (八) かくあるのが當然
- (九) 句をば
- (一〇) 妻妾を
- (一一) 中君を
- (一二) 中君と句が
- (一三) 中君自身
- (一四) 句が餘り大事にし過ぎし故

むと思して、ひきあげ給へるに、(二)繼母の宮の御手なめりと見ゆれば、今少し心(一)安くてうち置き給へり。宣旨書にてもうしろめたのわざや。

落葉さかしらはかたはら痛さに、そよのかし侍れど、いと惱ましけにてなむ。(三)

女郎花しをれぞまさるあさ露のいかにおきけるなごりなるらむ(四)

あてやかにをかしう書き給へり。句かごとがましけなるも煩はしや。誠は、心安(六)

くてしばしはあらむと思ふ世を、思の外にもあるかな」などは宣へど、又二つな(七)

くて然るべきものに思ひならひたるたど人の中こそ、かやうなる事のうらめしさ

なども、見る人苦しくはあれ、思へばこれはいと難し。つひにかよるべき御事な(八)

り。宮達と聞ゆる中にも、筋異に世の人と思ひ聞えたれば、幾人もくえ給はむ(九)

こと、もどきあるまじければ、人もこの御方をいとほしなども思ひたらぬなるべ(一〇)

し。かばかり物々しくかしづきする給ひて、心苦しき方疎ならず思したるをぞ、(一一)

幸におはしけるとはきこゆる。自らの心にも、あまりにならはし給ひて、俄に(一二)

(一)我は心にやましき點がない故  
 (二)何程甘い言をいうても情の有無は詞の端でわかるものぢや  
 (三)我が身になつて考へてくれ給へ  
 (四)自分の身が自分で自由にならぬのぢや  
 (五)中君を他の婦人よりも大事にする我志を知らすべき機会がある  
 (六)六君方  
 (七)中君方の表へ來たり  
 (八)使が頂戴の衣裳を肩にかけて來たる也  
 (九)六君への御使なるべしと  
 (一〇)今朝は早く中君方へ來て居たのに匂がいつの間にか六君へ文をやりしなると  
 (一一)目前に六君の文を見せびらかすのは氣の毒なるに  
 (一二)使者が  
 (一三)出來るな中君に何もかも打明けて居る様に見せんと匂が思ひて中君の前で文をあけたるに

宣のたまふにつけて推し量はかられ侍りぬれ」とて、少すこしほよ笑みぬ。匂におけに我が君きみや、をさなの御物言おんものいひや。されど誠まことには心に隈こころの無なければ、いと心こころやすし。いみじう言選ことばえりして聞きゆとも、いと二しるかるべきわざぞ。むけに世よの理ことわりを知り給はぬこそ、らうたきものからわりなけれ。よし我が御身おんみになしても思おもひめぐらし給へ。身みを心こころともせぬ有様ありさまなりかし。若もし思おもふ様やうなる世よもあらば、人ひとに勝まさりける志こころざしの程ほども、知しらせ奉たてまつるべき一節ひとふしなむある。容易たやすく言出ことばいづべき事ことにもあらねば、命いのちのみこそ一な二ど宣のたまふ程ほどに、彼處かしこに奉たてまつり給へる御使みつかり、いといたう醉ゑひ過すぎにければ、少すこし憚はげるべき事も忘わすれて、けざやかにこの南面みなみおもてに參まゐり。海人あまの刈かる珍めづらしき玉藻たまもにかづき埋うづもれたるを、然さな三めりと人々ひとびと見る。いつの程ほどに急いそぎ書かき給たまひつらむと見みるに、安やすからずはありけむかし。宮みやも、強あながちに隠かくすべきにはあらねど、さしぐみは猶なほいとほしきを、少すこしの用意よういはあれかしと、なまかたはら痛いたけれど、今いまはかひなければ、女房にようぼうして御文おんふみとり入れさせ給ふ。同おなじくば隔へだてなき様さまにもてなしはてて二

- (一) 句の心
- (二) 中君に
- (三) 一方に早く六君に逢ひたき心持もするは六君に對する情が濃かなのであらう
- (四) 中君に逢つて居る間は又中君に對する情が前に異なる事もないと見えて
- (五) 現世では此短き命の間でさへ君の薄情な所が現はれさう故
- (六) 句をあてにする氣になる
- (七) 中君が
- (八) 中君が煩悶の様子を句に見られまいと
- (九) 涙が
- (一〇) 中君が顔をそむける故
- (一一) 句が自分の方へむかせて
- (一二) 其方は何でも我が背ふ通りになる可愛き女と思ひ居たるに
- (一三) 中君の涙
- (一四) 句の御心が一夜に變りたる事が其言葉で分りませ

て、なつかしう愛敬づきたる方は、これに並ぶ人はあらじかし、と思ひながら、  
 猶又とくゆかしき方の心いられも立ちそひ給へるは、御志の疎にもあらぬな  
 めりかし。されど見給ふ程はかはるけぢめも無きにや、後の世までと誓ひ頼め給  
 ふ事どもの盡きせぬを、聞くにつけても、中君實にこの世は、いと短かかめる  
 命待つ間も、つらき御心は見えぬべければ、後の契や違はぬ事もあらむと思ふに  
 こそ猶こりすまに又も頼まれぬべけれ」とて、いみじう念ずべかめれど、え忍び  
 あへぬにや、今日は泣き給ひぬ。日頃も、いかでかく思ひけりと見え奉らじと、  
 萬に思ひ紛らはしつるを、様々に思ひ集むる事し多かれば、さのみも得もて隠さ  
 れぬにや、こほれそめては頓にもえためらひ給はぬを、いと恥かしくわびしと思  
 ひて、いたく背き給へば、強ひてひき向け給ひつゝ、句聞ゆるまよに、哀なる御  
 有様と見つるを、猶隔てたる御心こそ物し給ひけれな。さらずば夜のほどに思し  
 變りにたるか」とて、我が御袖して涙を拭ひ給へば、中君夜の間の心がはりこそ、

(一)句が  
(二)中君を見つめ

(三)てれかくし

(四)身體の工合の悪きも  
聲の中だけの事の様に

(五)祈禱

(六)句が眞面目な話につけても口前のよきを中君が嫌には思へど  
(七)よくさう綺麗な口をきいたものぢや、六君に對する嫉妬の様子をあらはさぬをいふ

るもうたてあれば、少し起きあがりておはするに、打ち赤み給へる顔の句など、今朝しもことをかしけさ勝りて見え給へば、あいなく涙ぐまれて、しばしうちまもり聞え給ふを、恥かしく思して打ちうつぶし給へる、髪のかよりかんざしなど、猶いと有りがたけなり。宮も、なまはしたなきに、細やかなる事などは、ふともえ言ひ出で給はぬ、おもがくしにや、耳など斯くのみ惱ましけなる御氣色ならむ。暑き程の事とか宣ひしかば、いつしかと涼しきほど待ち出でても、なほはればれしからぬは見苦しきわざかな。様々にせさする事も、怪しう驗なき心地のみこそすれ。然はありとも、修法はまた延べてこそはよからめ。驗あらむ僧もがな。なにかし僧都をぞ夜居には侍はすべかりける」など様なる、まめごとを宣へば、かゝる方にも言よきは、心づきなく覺え給へど、むげに答へ聞えざらむもうたてあれば、中君昔も、怪しう人に似ぬ有様にて、かやうなる折は侍りしかど、自らいとよくおこたるものを」と宣へば、句いとよくこそ爽かなれ」と打ち笑ひ

(七)

- (一)發育したる
- (二)句が六君の人品を想像する也
- (三)きつぱりして

(四)疎末にする氣にもなれぬ

(五)中君の感懐、匂宮つとめて中君を慰む

(六)句が六君方より

(七)中君の方

(八)六君への文

(九)斯うなると中君が御氣の毒

- (一〇)句がいくら六君と中君とに厚薄の差をたてぬ積でも中君が壓倒される事になるであらう
- (一一)我が居間て六君の返事を見たしと
- (一二)中君と只一夜の隔なれど
- (一三)中君方へ
- (一四)句の
- (一五)寢て居るも異なるもの故、中君の心

になどはあらで、よき程になりあひたる心地し給へるを、如何ならむ、物々しく

あざやぎて、心ばへも、たをやかなる方はなく、物誇りかになどやあらむ、然あ

らむこそ、うたてあるべけれ、など思せど、さやうなる御けはひにはあらぬにや、

御志疎なるべうも思されざりけり。秋の夜なれど、更けにしかばにや、程もな

く明けぬ。

歸り給ひても、對へはふともえ渡り給はず、しばし大殿籠りて起きてぞ、御文書

き給ふ。「御氣色けしうはあらぬなめり」と、御前なる人々つきじろふ、侍女等「對の

御方こそ心苦しけれ。天の下にあまねき御心なりとも、自ら氣壓さるゝ事もあり

なむかし」など、たどにしもあらず、皆馴れ仕う奉りたる人々なれば、安からずう

ち言ふ事どもありて、すべて猶妬けなるわざにぞありける。御返も此方にてこそ

は、と思せど、夜の程の覺束なさも、常の隔よりは如何と心苦しければ、急ぎわ

たり給ふ。寢くたれの御容貌、いとめでたく見所ありて、入り給へるに、臥した



- (一) 召上らねば
- (二) 縁喜悪く思ひ出さるる事、大君の逝去前物を食はざりしをいふ
- (三) 匂宮の事
- (四) 六君が出来てもよもや中君を棄てる事はあらずまじ
- (五) 元來の深い中は全くされては仕舞はぬ者ぢや
- (六) 中君の心
- (七) よかれ悪かれ噂をして貰ひたくなし
- (八) 匂のするが儘にさせて見て居たし
- (九) 中君は人に噂されるは嫌にて自分一人匂を恨んで居たいのであらう
- (一〇) 氣があれ程熱心で居るのに中君が靡けよいの
- (一一) 大君が中君を蕭に與へんとせし事を知り居る老人共は
- (一二) 中君の御運
- (一三) 匂は中君を氣の毒とは思ひながら
- (一四) 六君に
- (一五) 夕霧方
- (一六) 六君の容貌

は思み侍るものを、あさましうはかなき御くだものをだに御覽じ入れねば、如何にならせ給はむ。あな見苦しや。ゆゑしう思ひ出でらるゝことも侍るを、いとこそわりなけれ」などいふ。若き人々は、「心憂の世や」と打歎きて、若人「いでやこの御事よ。さりとも、かくて疎にはよもなりはてさせ給はじ。さ言へど、もとの志深う思ひそめつる中は、名残なからぬものぞ」など言ひあへるも、様々に聞きにくく、今は如何にもくかけて言はざらなむ。たどにこそ見め、と思さるゝは、人には言はせじ、我一人恨み聞えむとにやあらむ。「いでや、中納言殿の、さばかり哀なる御心深さを」など、そのかみの人々は言ひあはせて、「人の御宿世の怪しかりける事よ」と言ひあへり。

宮は、いと心苦しう思しながら、色めかしき御心は、いかでめでたき様に待ち思はれむと心假粧して、えならず薫きしめ給へる御けはひ、いはむ方なし。待ちつけきこえ給へる所の有様も、いとをかしかりけり。人の御程、さよやかにあえか

(二五)

(二六)

(二七)

(二八)

(二九)

(一) 逢つて居る間はいやな處もなき句の氣立仕向けに段々苦勞も薄らぎ來りしに  
 (二) 六君一件につきては言ひ様もなき迄つらく我身の運も是迄といふ様な氣がする  
 (三) 死せし父や姉と違つて句はいくら情が薄くなつても時々位は訪ひ來ぬ筈はなしとも  
 (四) 命さへあらば又句との中も元の様になる事もあるべしなど自ら慰める積でも  
 (五) 「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」  
 (六) 宇治の  
 (七) 宇治にて聞きし椎の葉の音には  
 (八) 既往の事は忘れて中君が斯く思ふならんか、歌を釋したる也  
 (九) 月をつくらんと眺むるを思ひし事平安朝頃の風俗也

宿

木

し程よりは、人數にもなる様なる有様を、長かるべき事とは思はねど、見る限は憎けなき御心ばへもてなしなるに、やうく思ふ事薄らぎてあり經つるを、このをりふしの身の憂さはたとへむ方なく、限と覺ゆるわざなりけり、ひたすら世になくなり給ひにし人々よりは、さりととも、これは時々もなかばはとも思ふべきを、今宵かく見捨てて出で給ふつらさに、來し方行く先皆かき亂り、心細くいみじきが、我心ながら思ひやる方なく、心憂くもあるかな、自らながらへば、など、慰めむことを思ふに、更に姨捨山の月のみ澄みのほりて、夜更くるまよによろづ思ひ亂れたまふ。松風の吹き來る音も、荒ましかりし山おろしに思ひ比ぶれば、いとどかに懐しう目やすき御住居なれど、今宵はさもおほえず、椎の葉の音には劣りて覺ゆ。

中君 山里のまつのかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

來し方は忘れにけるにやあらむ。老人どもなど、老人、今は入らせ給ひね。

月見る

五三

(一)中君

(二)夕霧よりの案内を知らぬ顔して

(三)匂の心、待ち居る六君も氣の毒故

(四)直に行つて来る

(五)中君が(六)別に何といふはつきりした感じもなけれど

(七)涙がこぼれて(八)自分で自分の心が儘にならぬをかくつ也

(九)以下「ながらへば」迄中君の心

(一〇)姉妹にて

(一一)世捨人なる父一人を力にして

(一二)つくろひ世の憂きを感じせざりしに

(一三)引續き父や姉に別れし時は

(一四)匂宮に引取られて他人の思ひしよりは立派な人並の生活をする様になりたるが

女君は日頃も萬に思ふ事多かれど、いかで氣色に出さじと、萬に念じ返しつよ、

つれなき様し給ふことなれば、殊に聞きも咎めぬさまに、おほどかにもてなして

おはする様、いと哀なり。中將の参り給へるを聞き給ひて、流石にかれもいと

ほしければ、出で給はむとて、匂今いと疾く参りこむ。一人月な見給ひそよ。心

空なればいと苦し」と聞えおき給ひて、なまかたはら痛ければ、かくれの方より

寢殿へ渡り給ふ御うしろでを見送るに、ともかくもおもはねど、唯枕の浮きぬべ

き心地のすれば、心憂きものは人の心なりけりと、我ながら思ひ知らる。幼きほ

どより心細く哀なる身どもにて、世の中を思ひとどめたる様にもおはせざりし一

所を、頼み聞えさせて、さる山里に年經しかど、唯いつとなく徒然に凄うはあり

ながら、いとかく心に染みて世を憂きものとも思ひ知らざりしに、打ち續きあさ

ましき御事どもを思ひし程は、世に又とまりて片時經べくもおほえず、戀しう悲

しきことの類あらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたり



⑧ 匂宮大君と婚す

(一) 夕霧方

(二) 匂の聲入を

(三) 匂がまだ來らず氣がかりなれば

(四) 此縁組は元來餘り匂が好まぬ事故、夕霧の心

(五) 夕霧の方より催促したるに

(六) 匂が

(七) 二條院に中君といふ女を置いてある故の事と思へば氣がもめる譯なれど

(八) 折角聖取の用意したる今夜を徒に過すも

(九) 匂は是から六君方へ行く所を中君に見せたくなしと思ひて内裏から直に夕霧邸へ行く積りて内裏に居たりしに、中君がやりたる文の返事が來て其返事が何とあつたのか匂が感動して中君方へ行き居る所なりし也

(一〇) 中君の

消ちつよ、御前にては物思なき様をつくり給ふ。

左の大殿には、六條院の東の大殿を磨きしつらひて、限なくよろづを調へて待

ち聞え給ふに、十六日の月やうくさしあがるまで心もとなければ、いとしも御

心にいらぬ事にて、如何ならむと安からず思して、案内し給へば、「この夕つかた

内裏より出で給ひて、二條院になむおはしますなる」と人申す。思す人持給へれ

ばと、心やましけれど、今宵過ぎむも人笑へなるべければ、御子の頭中將して

聞え給へり。

夕霧大ぞらの月だにやどるわが宿に待つよひすぎて見えぬ君かな

宮は、なか／＼今なむとも見えじ、心苦し、と思して、内裏におはしけるを、御

文聞え給へりける、御返やいかどありけむ、猶いと哀に思されければ、忍びて渡

り給へりけるなり。らうたけなる有様を見捨てて、出づべき心地もせず、いとほ

しければ、萬に契りつよ、慰めかねて、諸共に月を眺めておはする程なりけり。

(一)二條院の取締、匂宮の家來なるべし  
(二)匂が昨夜退出せられし趣を聞きて

(三)夕方でも又参るべし

(四)薫が中君に接する毎に

(五)なぜ大君の勸に背きて了隔もなく中君を匂に取持ちしならんと

(六)前に中君を取らざりしも今其を後悔するも皆段心柄なるにと

(七)大君の逝去後引續きて薫は精進にて

(八)女三宮

(九)薫の様子を

(一〇)我一生も残少き故我存命中は見る甲斐ある生活をしてくれ

(一一)自分が尼の身故

(一二)薫が世を厭ふ様では生甲斐なき心持がすべき故輩の罪を造る事にならるべし

(一三)薫が萬事をこらへ

べき御心なるも、煩はしくて、侍の別當なる、右京大夫召して、薫昨夜まかでさせ給ひぬと承りて参りつるを、おはしまさぬ程なりければ口惜しさを、内裏にや参るべき」と宣へば、右京今日まかでさせ給ひなむ」と申せば、薫さらば夕つ方も」とて出で給ひぬ。

猶この御けはひありさまを聞き給ふ度ごとくに、などて昔の人の御心掟をもてたがへて、思ひ隈なかりけむと、悔ゆる心のみ勝りて心にかよりむづかしく、なぞや人やりならぬ心ならむと、思ひかへし給ふ。そのまよにいまだ精進にて、いとど

行をのみし給ひつよ、明し暮したまふ。母宮は猶いと若くおほどきて、物しどけなき御心にも、かよる御氣色を、いと危くゆよしと思して、女三幾世しもあら

じを、見奉らむほどは、かひある様にて見え給へ。世の中を思ひ捨て給はむをも、かよる身にては妨げ聞ゆべきにもあらぬを、この世にては、いふかひなき心地す

べき心惑に、いとど罪や得らむ」と宣ふが、辱くいとはしくて、よろづを思ひ

(一)八宮

(二)いつそ山莊を寺にしてお仕舞ひなされ

(三)舊邸の其儘なるを見るにつけては

(四)寺にして罪にほしをはししと思ひますが御意は如何

(五)どうにでも御差圖次第

(六)竊のする上になほ中君もする筈

(七)法事に托して宇治へ引込んで仕舞はんかとの中君の計畫らしき故

(八)中君との中を疑はるる種故

(九)中君に對面するには籬外におかれて他人行儀にされる事は今迄なかりし故

(一〇)御籬の外なりとも又參るべし

(一一)句の氣質として今朝の訪問の事を聞かば必ず何故我が留守に來しなさんと疑ふべきがうるさく

ましき山道やまみちに侍はべれば、思おもひつゝなむ月日隔へだたり侍はべる。故宮こみやの御忌日おんきじちは、かの阿闍あび

梨りに、さるべき事ことども皆言みなひおき侍はべりにき。彼處かしこは猶尊なほたふさき方かたに思おもしゆづりてよ。

時々見給ときどきみたまふるにつけては、心惑こころまどひの絶たえせぬもあいなきに、罪失つみうしなふ様さまになし侍はべり

なばやとなむ思おもひ侍はべるを、またいかど思おもしおきつらむ。ともかくも定めさせ給たまは

むに隨したがひてこそはとてなむ。有あるべからむやうに宣のたまはせよかし。何事なにことも疎うそからず

承うけたまはらむのみこそ、本意ほんいかなふにては侍はべらめなど、まめだちたる事ことどもを聞きこえ給たま

ふ。經佛きやうほごなど、この上うへも供養くやうじ給たまふべきなめり。かやうなる序ついでにことつけて、

やをら籠こもり居ゐるなばやと、おもむけ給たまへる氣色けしきなれば、驚おどいとあるまじき事ことなり。

猶何事なほなにことも心こころのどかに思おもしなせなど、教をしへ聞きこえ給たまふ。日ひさしあがりて、人々參ひとびとり集あつ

まりなどすれば、あまり長居ながゐも事こと有り顔がほならむにより、出いで給たまひなむとて、驚おど何いづ

處こゝにては御籬みすの外そとにはならひ侍はべらねば、はしたなき心地こゝちし侍はべりてなむ。今又いままたかや

うにも侍さむらはむ」とて立たち給たまひぬ。宮みやの、などかなき折せりには來きつらむと、思おもひ給たまひぬ

(一) 後世の障りにけ此新しき恋の方が餘計になる  
 (二) 大君を左程思はぬ人でも、蕪の歎く様を見ては  
 (三) 中君自身も  
 (四) 大君を  
 (五) 一層蕪の言葉に悲を催されて  
 (六) 涙をこらへかね  
 (七) 「山里は物の寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」  
 (八) 山里の寂しさと世の憂きとを  
 (九) 山里に  
 (一〇) 八宮の三週忌に相當すれば宇治へ行きて法事も誓みたしと也  
 (一一) 阿闍梨の寺  
 (一二) 宇治へ連れて行き下されと蕪へ願はるかと思ひ居たり  
 (一三) 宇治へ屢往復して舊邸を保存したく思召すとも其は出来る話でなし  
 (一四) 手軽に行ける男の身でさへ

き夢こそ、覺ますべき方なく思ひ給へらるよは、同じごと、世の常なき悲びなれど、罪深き方は勝りて侍るにやと、それさへなむ心憂く侍る」とて、泣い給へるさま、いと心深けなり。昔の人をいとしも思ひ聞えざらむ人だに、この人の思ひ給へる御氣色を見むには、座にたゞにもあるまじきを、まいて我も物を心細く思ひ亂れ給ふにつけては、いとど常よりも、面影に戀しく悲しく思ひ聞え給ふ心なれば、今少し催されて、物もえ聞え給はず、ためらひかね給へるけはひを、互にいと哀と思ひかはし給ふ。中君「世の憂きよりはなど、人は言ひしをも、さやうに思ひ比ぶる心もことに無くて、年頃は過し侍りしを、今なむ猶いかで靜なる様にても過さまほしく思ひ給ふるを、さすがに心にも叶はざんめれば、辨の尼こそ羨ましく侍れ。この二十日あまりの程は、かの近き寺の鐘の聲も聞き渡さまほしく覺え侍るを、忍びて渡させ給ひてむやと、聞えさせばやとなむ思ひ侍りつる」と宣へば、蕪荒らさじと思ほすとも、いかでかは。心やすき男だに、いと往來のほど荒



(一) 悲に堪へざりき

(二) 源に仕へし人々は

(三) 婦人達

(四) 世を背きたる

(五) なまじ六條院が元の儘にては懐舊の情に堪へざる故、源を慕ふ事の深き丈に却て荒らして昔の俤を殘さず昔を忘るゝ様にして後

(六) 夕霧

(七) 差當りては此上なく悲しく思はるゝ事も

(八) 悲方も限のあるものと

(九) 源氏逝去の際の悲み

(一〇) 鶯が幼少の時分故其程に感ぜざりしかも知れぬ

(一一) 大君を失ひし悲

ひて後、二三年ばかりの末に、世をそむき給ひし嵯峨院にも、六條院にも、さ

しのぞく人の、心をさめむ方なくなむ侍りける。水草の色につけても、水の流に

添へても、涙にくれてのみなむ歸り侍りける。かの御あたちの人は、上下心淺き

人なくこそ侍りけれ。方々集ひものせられける人々も、皆所々に別れ散りつよ、

おのゝ思ひ離るゝ住居をし給ふめりしに、はかなき程の女房などはた、まして

心をさめむ方なく覺え侍りける儘に、物覚えぬ心に任せつよ、山林に行きまじり、

すどろなる田舎人になりなど、哀に惑ひ散るこそ多く侍りけれ。さてなかく、皆

荒らし果て、忘草生ふして後なむ、この左の大臣も渡り住み、宮達などもかたが

たものし給へば、昔に返りたるやうに侍るめる。さる世に類なき悲しさと見給へ

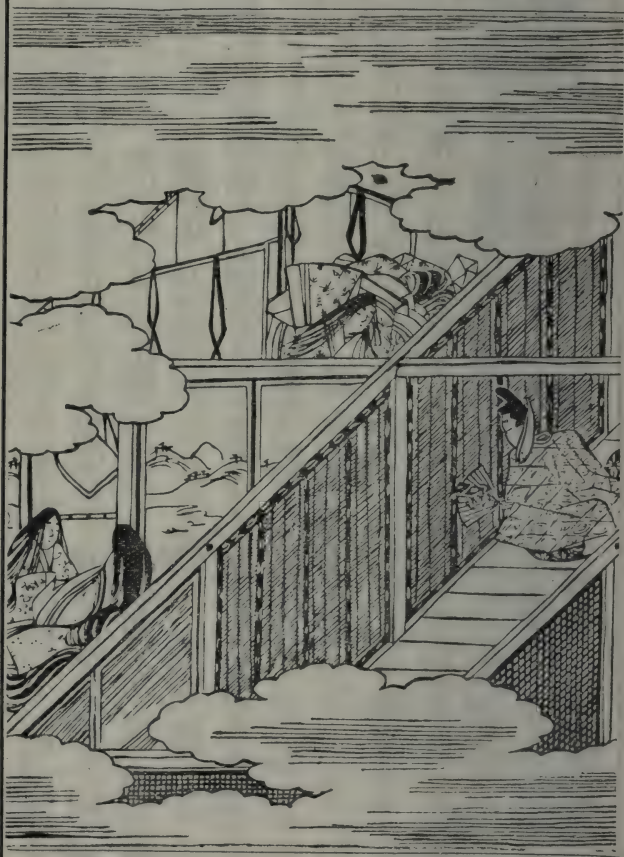
し程の事も、年月経れば、思ひさます折の出で來るにこそはと見侍るに、實に限

あるわざなりけりとなむ見え侍りし。斯くは聞えさせながらも、かの古の悲しさ

は、まだいはけなく侍りける程にて、いと然しもしまぬにや侍りけむ。猶この近

(二〇)

(二〇)



(一) 理の當然なる事につきて心配するよりも私の心配は罪深かるべし

(二) 萎れゆく也

(三) 花を簾内へ

(四) 大君が我が托し置きたる中君なれば、其言葉通り中君を大君と思ひて我物にすべきであつた

(五) わざとする氣でもなかりしに

(六) 露のかかり居る儘

(七) 露のきえぬ間に枯れたる此花の如くはかなくなりし大君よりも、生き殘れる我は一層のはかなきを感じず也

(八) 何を頼りの我が命ぞの意

(九) 大君に

(一〇) 常より一層

(一一) 「里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も靡も秋の野なる」

(一二) 源氏の逝去後は源氏の晩年二三年の間遁世し居られし嵯峨院にも

どいひて、大事にすめる理のうれへにつけて、歎き思ふ人よりも、これや今少し罪の深さは勝るらむなど言ひつよ、折り給へる花を、扇にうち置きて見居給へるが、やうく赤みもて行くも、なかく色のあはひをかしう見ゆれば、やをらさし入れて、

(三) 兼よそへてぞ見るべかりけるしら露のちぎりかおきしあさがほの花

(四) 殊更びてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよと、をかしう見ゆるに、

(五) 置きながら枯るよ氣色なれば、

(六) 中君消えぬまにかねぬる花のはかなさにおくるよ露はなほぞまされる

(七) 何にかよれる」と、いと忍びて言もつどけず、つよましけに言ひ消ち給へるほど、

(八) 猶いとよく似給へるかなと思ふにも、まづぞ悲しき。萬秋の空は今少しながめの

(九) み勝り侍る、徒然の紛らはしにもと思ひて、先つころ宇治に物し侍りしに、庭も

(一〇) 籬も誠にいとど荒れはてて侍りしに、堪へ難きこと多くなむ。故院の亡せさせ給

(一一)

(一二)

(一)中君が自身挨拶する  
事の恥かしさも少しづつ  
薄くなりて

(二)黨に

(三)中君の病状を黨が

(四)中君の

(五)黨の心に

(六)兄弟などのすべき様  
に

(七)中君の聲もそれ程似  
て居る様にも思はれざり  
しに、以下黨の心  
(八)丸て大君の様に思は  
るゝ故

(九)私は榮華を暮しは出  
來ずとも心配なく世を送  
る事は出来る身と信じ居  
たるに

(一〇)我が心柄で悲しき  
目にあひ残念な思をもす  
るはつまちぬ事

(一一)他人が

ぬ人がらなるを、いよくしめやかにもてなしをさめ給へれば、今は自ら聞え給

(一)

ふ事も、やうくうたてつよましかりし方少しづつ薄らぎて、面馴れ給ひにたり。

(二)

悩ましう思さるらむ様も、「如何なれば」など問ひ聞え給へど、はかしくも御い

(三)

らへ聞え給はず、常よりもしめり給へる氣色の心苦しきも、哀におしはかられ給

(四)

(五)

ひて、細やかに世の中の有るべき様などを、兄弟やうの者のあらし様に、教へ

(六)

慰め聞え給ふ。聲などもわざと似給へりとも覺えざりしかど、怪しきまで唯それ

(七)

(八)

とのみ覺ゆるに、人目見苦しかるまじうは、靡もひきあけて、さしむかひ聞えま

ほしく、うち悩み給へらむ容貌ゆかしう覺え給ふも、猶世の中に物思はぬ人は、

えあるまじきわざにやあらむ、とぞ思ひ知られ給ふ。黨人々しくきらくしき方

(九)

には侍らすとも、心に思ふことあり、歎かしく身をもて悩む様になどは無く過

(一〇)

しつべきこの世と、みづから思ひ給へしを、心から、悲しきことも、をこがまし

(一一)

く悔しき物思をも、かたぐに安からず思ひ侍るこそいとあいなけれ。官位な

(一二)

(一)既に上げたる様也

(二)薫が車より

(三)匂方の女等が

(四)他人に異なりたる香

がする故

(五)薫は何といつてもす

ばらしいものぢや、只餘

り眞面目にして居らるゝ

が憎らしい

(六)薫に不意を襲はれた

譯なれど女中等が周章て

た様を見せず

(七)此處に居れと許さる

る處は面目ある心持もす

れども、此様な處にもか

かる他人行儀が氣にくは

ぬので動もすれば御無沙

汰になる

(八)私如き老人の居るに

は風向の隠れたる所が適

當なり

(九)其方の御計にある事

故差圖は出来ぬ

(一〇)彼處まで出て御換

授あれ

(一一)中君を

(一二)薫の様子

だきまだき來にけり、と思ひながら、人召して、中門の開きたるより見せ給へば、

「御格子ども皆まるりて侍るべし。女房のけはひなどし侍りつ」と申せば、降りて、

霧の紛に様よく歩み入り給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見る

に、露にうちしめり給へる薫、例のいと様異に匂ひ來れば、「猶いとめざましうは

おはすかし、心をあまりをさめ給へるこそ憎けれ」など、あいなく若き人々などは

聞えあへり。驚き顔にもあらず、よき程に打ちそよめきて、御禰さし出でなごす

る様も、いと目やすし。薫「これに侍へと許させ給ふほどは、人々しき心地すれど、

猶かよる御簾の前に、さし放たせ給へるうればしさになむ、屢もえ侍はぬ」と宣

へば、侍女さらば如何は侍るべからむ」と聞ゆ、薫「北面などやうの隠ぞかし、か

かる古人などの侍はむに、理なるやすみ所は、それもまた唯御心なれば、憂へ

聞ゆべきにも侍らず」とて、長押におし懸りておはすれば、例の人々、「猶あしこ

許に」などそよのかし聞ゆ。もとよりけはひはやりかに雄々しくなどは物し給は

(一一) (一二)

(二)二條院、三條宮より  
は北に當ればいふ

(二)句を載せ行きし車を  
供人が持ち歸りたりと也

(三)中君

(四)朝の内に中君を訪ふ  
べし

(五)氣取つて居る淨氣男  
どもとは比べ物にならず

(六)露の消えぬ間といふ  
べき極めてあだなる人生  
と知りつゝも、猶其一時  
の色に迷はんとするか、  
我心よ

(七)なまめき立てるを憎  
むなるべし

(八)句の留守にて女ばかり  
故、以下黨の心

人召して、<sup>(一)</sup>北の院に參らむに、事々しからぬ車さし出ださせよ」と宣へば、侍宮

は昨日より内裏になむおはしますなる。昨夜御車率てかへり侍りにき」と申す。

驚さばれ、かの對の御方の惱み給ふなる、訪ひ聞えむ。今日は内裏に參るべき日な

れば、日たけぬ前に」と宣ひて、御装束し給ふ。出で給ふまよに、下りて花の中

に交り給へる御様も、殊更に艶だち色めきてもてなし給はねど、怪しう、たど

打見るになまめかしう恥かしけにて、いみじう氣色だつ色好みどもに準ふべくも

あらず。おのづからをかしうぞ見え給ひける。朝顔をひき寄せ給ふに、露いたう

溢る。

「けさの間の色にやめでむおく露の消えぬにかよる花と見るく」

はかななど獨言ちて、折りて持給へり。女郎花をば、見過ぎてぞ出で給ひぬる。

明け離るよまよに、霧の立ちみちたる空をかしきに、女どちはしどけなく朝寢し

給へらむかし、格子妻戸などうち叩き聲づくらむこそ、初々しかるべけれ、朝ま

(二) 薫が假初の慰に情をか

(二) 女中達  
(三) 氣に入りたる女もあるべけれど  
(四) さつぱりしたものと

(五) 大君中君に劣らぬ身分の女も  
(六) 薫方に召使ひなどして多く女多けれど  
(七) 以下薫の心  
(八) 特別に心残りのする女はなくて暮さんと  
(九) 大君故には自分の了簡ながら不埒にも初の趣意を破りてしまひし事故と

(二〇) 「朝顔は常なき花の色なれやあくる間咲きてうつろひにけり」

しかた行くさききの人の上さへ、味氣なき世を思ひめぐらし給ふ。なげのすさびに物をも言ひ觸れ、氣近くつかひならし給ふ人々の中には、自ら憎からず思さるよも有りぬべけれど、誠には心留るも無きこそさわやかなれ。さるは、かの君達の程に劣るまじき際の人々も、時世に随ひつゝ衰へて、心細けなる住居するなどを、尋ね取りつゝあらせなど、いと多かれど、今はと世を背き離れむ時、この人こそととりたてて、心とまる絆になるばかりの事は無くて過してむ、と思ふ心づかひ深かりしを、いでさも悪く、我が心ながらねぢけてもあるかな、など、常よりもやがてまどろます明し給へる晨に、霧の籬より、花のいろく面白く見え渡る中に、朝顔のはかなげにて交りたるを、猶殊に目とまる心地し給ふ。「明くる間咲きて」とか、常なき世にも準ふるが、心苦しきなめりかし。格子もあけながら、いと假初に打臥しつゝ明し給へば、この花の開くる程をも、唯一人のみぞ見給ひける。

(一) 蕪の心  
(二) 句がわくびにも出さぬ様ぢや  
(三) 句の如き

(四) 一人の女に凝り固まる性癖から見る故  
(五) 大君を失ひて後の我心では、以下蕪の心  
(六) 中君を得たく思ふ心  
(七) 大君の妹と思ふ故に戀しいのぢや  
(八) 大君と中君とは殊に中がよかりしに  
(九) 跡に残る中君を我と思へと  
(一〇) 蕪の仕向が萬事氣に入らぬ事はなし、只中君を蕪にと思ひしをはづして句に媒したるのみが恨めしくて此世に念が残るべし、大君の詞  
(一一) 大君在天の靈も此度の六君の一件の出来しにつけては

しは憚り給はじや、と思ふに、いでや今は、その折の事など、かけても宣ひ出でざしめるかし、猶あだなる方に進み、移りやすなる人は、女の爲のみにもあらず、頼もしげなく、軽々しき事もありぬべきなめりかし、など憎く思ひ聞え給ふ。我が誠にあまり一方にしみたる心ならひに、人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし。かの人を空しう見奉りなしてし後思ふには、帝の御女を賜はむと思しおきつるも、嬉しくもあらず、この君を得ましかばと覺ゆる心の、月日に添へて勝るも、唯かの御ゆかりと思ふに、思ひ離れ難きぞかし、兄弟といふ中にも、限なく思ひかはし給へりしものを、今はとなり給ひにし果にも、「とまらむ人を同じ事と思へ」とて、「萬は思はずなる事もなし、唯かの思ひおきてし様を、違へ給へるのみなむ、口惜しう怨めしき節にて、この世には残りぬべき」と宣ひしものを、天翔りても、かやうなるにつけては、いとどつらしとや見給ふらむ、などつくづく、と人やりならぬ獨寢し給ふ夜なくは、はかなき風の音にも目のみ覺めつよ、來



(一)斟酌なく句を我方にのみ引附くる様にせば  
 (二)中君は馴れもせぬ寂しき夜を送る事多かるべしなど

(三)薫の心

(四)中君を匂に

(五)大君に惚れてからは世間を捨てた積の心も濁りし故

(六)大君の事

(七)大君が承知もせぬに無理な事をしては

(八)大君の

(九)竊に従ふことを否む

(一〇)嫌ふ一方でもない様子でせめての心ゆかしに我も妹も同じ事ぞといふ口實で望みもせぬ中君を押附けられしが  
 (一一)大君の趣意を通させりとて句を取持ちし譯であつた  
 (一二)句を案内し

かに物し給ふわたりにて、ゆるびなく聞えまつはし給はば、月頃も然もならひ給はで、待つ夜多く過し給はむこそ、哀なるべけれ、など思ひ寄るにつけても、あいなしや我が心よ、何しにゆづり聞えけむ、昔の人に心をしめてし後、大方の世をも思ひ離れて澄み果てたりし方の心も濁りそめしかば、唯かの御事をのみ、とざまかうざまには思ひながら、流石に人の心許されであらむ事は、初より思ひし本意なかるべしと憚りつよ、唯如何にして少しも哀と思はれて、打解け給へらむ氣色をも見むと、行く先のあらましごとのみ思ひ續けしに、人は心にもあらずもてなして、流石に一方にしも得さし放つまじう思ひ給へる慰に、同じ身ぞと言ひなして、本意ならぬ方におもむけ給ひしが、妬く怨めしかりしかば、まづその心掟を違へむとて、急ぎせしわざぞかし、などあながちに女々しう物狂しく率てありきたばかり聞えしほど思ひ出づるも、いとけしからざりける心かな、と返す返すぞ悔しき。宮も、さりとともその程の有様思ひ出で給はば、我が聞かむ所をも少

(一) 中君が御腹胎なり  
 (二) 中君が御腹胎なり  
 (三) 何日に句と六君との  
 婚禮あるべしとの趣を句  
 からは聞かず他より傳聞  
 して中君が知れり  
 (四) 中君に陣をあく積て  
 はなけれど  
 (五) 中君  
 (六) 中君の心  
 (七) 婚禮の日取さへ聞か  
 せぬかと  
 (八) 中君が引取られてか  
 ちは  
 (九) 方々へ泊りて夜内を  
 あける事もなかりしを  
 (一〇) 六君が出来てから  
 俄に外何ばかりしたらば  
 中君が可といふならんと  
 (一一) 豫め外泊しつけて  
 中君に「れさせんとすぞ、  
 其をも悪くばかり解釋す  
 る様なり  
 (一二) 薫の煩悶、朝顔の花  
 を携へて中君を訪ふ  
 (一三) 薫  
 (一四) 六君の一件を  
 (一五) 句は浮氣者故、以  
 下薫の心  
 (一六) 中君を愛せぬては  
 なくとも  
 (一七) 手強き夕霧の家風  
 故

など宣ふ折もあれど、いと恥かしようし給ひて、さりけなくのみもてなし給ふを、さ  
 (二)

し過ぎ聞え出づる人もなければ、確にもえ知り給はず。

八月になりぬれば、その日など外よりぞ傳へ聞き給ふ。宮は、隔てむとはあら  
 (三)

ねど、言ひ出でむ程心苦しういとほしく思されて、然も宣はぬを、女君はそれさ  
 (四)

へぞ心憂く覺え給ふ。忍びたる事にもあらず、世の中なべて知りたる事を、その  
 (五)

程などだに宣はぬ事と、いかど怨めしからざらむ。かく渡り給ひにし後は、こと  
 (六)

なる事なければ、内裏に参り給ひても、夜とまる事は殊にし給はず、此處彼處の  
 (七)

御夜がれなどもなかりつるを、俄に如何に思ひ給はむと、心苦しき紛らはしに、  
 (八)

この頃は、時々御宿直とて参りなどし給ひつよ、かねてより慣はし聞え給ふをも、  
 (九)

唯つらき方にのみぞ思ひおかれ給ふべき。

中納言殿も、いといとほしきわざかなと聞き給ふに、花心におはする宮なれば、  
 (一〇)

哀とは思すとも、今めかしき方に必ず御心移ろひなむかし、女方も、いとしたよ  
 (一一)

(一)大君が  
 (二)句の様に外に女を拵へる事があつたかも知れぬ

(三)大君が深く考へて其様を目には遇ひたくなしと思ひて色々逃れる工夫をして

(四)若し今存命ならば必ず尼になりて居らるべし

(五)父や姉の盟も  
 (六)大斯く思へる事を句に知られてもつまらぬ事故知らずまじと思ひて

(七)六君の事は知らぬ振して  
 (八)句宮  
 (九)中君に  
 (一〇)後の世までかけて契る

(一一)中君懐胎せし也  
 (一二)句は女の懐胎の様子などまだよく知らぬ事故

(一三)懐胎せる女が其方の様に苦しがるものぢや

し世におはせましかば、又かやうに思す事はありもやせまし、それをいと深う、い  
 (二)か  
 (三)か  
 (四)か  
 (五)か  
 (六)か  
 (七)か  
 (八)か  
 (九)か  
 (一〇)か  
 (一一)か  
 (一二)か  
 (一三)か

か  
 (一)か  
 (二)か  
 (三)か  
 (四)か  
 (五)か  
 (六)か  
 (七)か  
 (八)か  
 (九)か  
 (一〇)か  
 (一一)か  
 (一二)か  
 (一三)か

か  
 (一)か  
 (二)か  
 (三)か  
 (四)か  
 (五)か  
 (六)か  
 (七)か  
 (八)か  
 (九)か  
 (一〇)か  
 (一一)か  
 (一二)か  
 (一三)か

か  
 (一)か  
 (二)か  
 (三)か  
 (四)か  
 (五)か  
 (六)か  
 (七)か  
 (八)か  
 (九)か  
 (一〇)か  
 (一一)か  
 (一二)か  
 (一三)か

か  
 (一)か  
 (二)か  
 (三)か  
 (四)か  
 (五)か  
 (六)か  
 (七)か  
 (八)か  
 (九)か  
 (一〇)か  
 (一一)か  
 (一二)か  
 (一三)か

か  
 (一)か  
 (二)か  
 (三)か  
 (四)か  
 (五)か  
 (六)か  
 (七)か  
 (八)か  
 (九)か  
 (一〇)か  
 (一一)か  
 (一二)か  
 (一三)か

● 匂宮と六君との婚禮  
八月と定まる、中君の煩

聞

(一)夕響

(二)六君と匂との婚姻を

(三)中君

(四)中君の心

(五)我は人数ならぬ身故

(六)匂は移り氣な人と

(七)今迄と打て變つてつ

ちくされる其當座は

(八)九で縁が切れて仕舞

ふ様な事はなくとも

(九)都へ引取られずあの

儘宇治に引込切りにする

上りは、一旦出て又歸る

は宇治の人々の手前も恥

かし

(一〇)八宮の遺言を背き

て山莊を離れし輕率さを

(一一)大君、以下中君の

心

(一二)しつかりした處

(一三)驚

ひだり 左の大殿には急ぎ立ちて、八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方に

(一)

は、聞き給ふに、さればよ、いかでかは、數ならぬ有様なしめれば、必ず人笑へ

(二)

に憂き事出で來むものぞとは、思ふく過しつる世ぞかし、あだなる御心と聞き

(三)

渡りしを頼もしけなく思ひながら、目に近くては、殊につらけなる事も見えす、

(四)

哀に深き契をのみし給へるを、俄にかはり給はむほど、如何は安き心地はすべか

(五)

らむ、たゞ人の中らひなどの様に、いとしも名残なくなどはあらずとも、如何に

(六)

安けなき事多からむ、猶いと憂き身なめれば、遂には山住に歸るべきなめり、な

(七)

ど思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山賤の待ち思はむも人笑へなりかし、と

(八)

かへすぐも、故宮の宣ひ置きしことに違ひて、草のもとを離れにける心輕さを、

(九)

恥かしうもつらくも思ひ知られ給ふ。故姫君の、いとしどけなく、ものはかなき

(一〇)

様にのみ、何事をも思し宣ひしかど、心の底のづしやかなる所は、こよなくもお

(一一)

はしけるかな、中納言の君の、今に忘らるべき世なく、歎き渡り給ふめれど、若

(一二)

(一三)

(一)眞木柱腹

(五)女二宮薫に定ちんとす

(二)婚姻差支へなき也

(三)薫から言ひ出したら直に女二を許さんと

(四)薫に

(五)薫の心

(六)聖取の時日を今上が

(七)薫自ら今上の思召をも承れども

(八)大君

(九)薫の心

(一〇)大君

(一一)卑しき身分の女でも、以下薫の心

(一二)大君に少しても似て居る女ならば氣にも入るべし

(一三)漢武帝が李夫人の姿を烟の中に見たりといふ反魂香

(一四)女二宮の方を急ぐ氣にはなり得ず

の大納言の、紅梅の御方をも猶思し絶えず、花紅葉につけても宣ひ渡りつよ、い

づれをもゆかしうは思されけり。されどその年は變りぬ、

女二宮も御服はてぬれば、いとど何事にかは憚り給はむ。「さも聞え出でばと思召

したる御氣色になむ」と、告げ聞ゆる人々もあるを、あまり知らず顔ならむも、ひ

がひがしうなめけなりなど思しおこして、さるべき便して、氣色ばみ聞え給ふ折

折もあるに、はしたなき様はなどてかはあらむ。その程に思し定めたなりと傳

にも聞き、自ら御氣色をも見れど、心の中には、猶飽かで過ぎ給ひにし人の悲し

さのみ、忘らるべき世なく覺ゆれば、うたてかく契深く物し給ひける人の、などて

かは流石に疎くては過ぎにけむ、と心得難く思ひ出でらる。口惜しき品なりとも、

かの御有様に少しも覺えたらむ人は、心もとまりなむかし、昔ありけむ香の烟に

つけてだに、今一度見奉るものにもがな、とのみ覺えて、やむごとなき方さまに、

いつしかなどは急ぐ心もなし。

(一)六君を句に取持つ様  
 (二)句を論す也  
 (三)夕霧が六君を句にと  
 思ひて眞剣に年來希望し  
 て居るものを  
 (四)外戚次第でよくもな  
 りあしくもなる  
 (五)今上が段々老年に近  
 づく故讓位せんとして居  
 らる事故其方が近々東  
 宮になるかも知れぬ  
 (六)平人は本妻を持つば  
 他に愛を分けるのがむつ  
 かしくもあれど  
 (七)夕霧が眞面目くさり  
 て居ながら  
 (八)雲井雁を落葉宮と竝  
 べ置きて二人の間互に恨  
 みのなき様に甘くやりて  
 居るではないか  
 (九)句は  
 (一〇)希望通りにゆけば  
 即ち東宮にもならは幾人  
 女を持つても仔細はなし  
 (一一)尤らしく  
 (一二)句も元より恨がい  
 やでもなき事故強ひて斷  
 りもせず  
 (一三)夕霧の聲になれば  
 萬事折目正しく鄭重にさ  
 れて今迄氣樂に來りた  
 る身が窮屈なるべく思ひ  
 ていやにもなる譯なれど  
 (一四)夕霧に憎まれても  
 つまらぬと  
 (一五)紅梅右大臣

宿

中宮にもまめやかに恨み申し給ふこと、度重りければ、聞召し煩ひて、中宮「いと  
 ほしく、斯くおふなく、思ひ心ざして年經給ひぬるを、生憎に遁れ聞え給はむ  
 も、情なき様ならむ。親王達は、御後見からこそ、ともかくもあんなれ。上の御  
 世も末になり行くとのみ思し宣ふめるを、たゞ人こそ、一方に定りぬれば、又心  
 をわけむ事も難けなめれ、それだに、かの大臣のいとまめだちながら、此方彼方  
 羨なくもてなして、ものし給はずやはある。ましてこれは、思ひおきて聞ゆる  
 事もかなはば、數多も侍はむになどかあらむ」など、例ならず言つどけて、ある  
 べかしう聞えさせ給ふに、我が御心にも、もとよりもて離れて、はた思さぬこと  
 なれば、強ちには、などてかはあるまじき様にも聞えさせ給はむ。唯いとこと麗  
 しけなるあたりに取籠められて、心安くならひ給へる有様の所狭からむ事を、な  
 ま苦しく思すに、物憂きなれど、實にこの大臣に、餘り怨ぜられ果てむもあいな  
 からむ、などやうく思し弱りにたるなるべし。あだなる御心なれば、あの按察  
 (二四) (二五)

木

(一)今更人の罪にならば九て山籠りせる僧が淨世に逆戻せる様なものならんと思ふも氣紛れの沙汰なり  
 (二)女二が明石中宮腹ならば嘸よからんにと  
 (三)夕霧六君を匂宮に配せんとなす  
 (四)夕霧  
 (五)何ても薫にやらねばならぬ  
 (六)此方で本氣で持懸けたり  
 (七)女二宮の罪になつて仕舞ふかも知れぬと  
 (八)匂に六君に執心といふ程にはあらねど  
 (九)六君を挑む事  
 (一〇)匂の懸想は常座の慰にもせよ縁があれば其とは眞に惚込む事も無いとは言はれぬ、以下夕霧の心  
 (一一)何程六君一人を守つてくれる男でも身分卑しき聖では外聞悪く  
 (一二)今は末世で娘を持つてば誰も氣が氣でなく  
 (一三)平人の女の  
 (一四)今上を

ほしき人々の御事どもをも、よく聞き過しつゝ年經ぬるを、今さらに聖やうのもの、世にかへり出でむ心地すべき事と思ふも、かつは怪しや、殊更に心を盡す人だにこそあなれ、とは思ひながら、  
 (一) 后腹におはせばしもと覺ゆる心の中で、  
 餘りおほけなかりける。

かよる事を左大臣殿ほの聞き給ひて、六の君はさりともこの君にこそは、  
 (二) 澁々なりとも、  
 (三) まめやかに恨み寄らば、  
 (四) 遂にはえ否び果てじと思しつるを、  
 (五) 思の外なる事出で來ぬべかめりと、  
 (六) 妬く思されければ、  
 (七) 兵部卿宮はた、  
 (八) わざとにはあらねど、  
 (九) 折々につけつゝ、  
 (一〇) をかしきさまに聞え給ふ事絶えざりければ、  
 (一一) さばれ、  
 (一二) 等閑の御すきにはありとも、  
 (一三) さるべきにて、  
 (一四) 御心とまるやうもなごかなからむ、  
 (一五) 水漏るまじく思ひ定むとても、  
 (一六) なほくしき際に下らむはた、  
 (一七) いと人わろく、  
 (一八) 飽かぬ心地すべし、  
 (一九) など思しなりにたり。  
 (二〇) 夕女子後めたけなる世の末にて、  
 (二一) 帝だに聲もとめ給ふめる世に、  
 (二二) ましてたゞ人の盛過ぎむもあいなし、  
 (二三) など誘らはしげに宣ひて、  
 (二四)

め給ふめる世に、  
 (二四) ましてたゞ人の盛過ぎむもあいなし、  
 (二五) など誘らはしげに宣ひて、  
 (二六)





(一) 薫を

(二) 薫は何時もの通りに心得居たるに

(三) 暗に女二宮をいふ

(四) 其他には何を贈物にすべき

(五) 薫は何と見て取りたるか

(六) 今上が一番の負け越しになりたる也

(七) 此菊一枝折る事を許す、朗詠に開得園中花養艶、請君許折一枝香此詩の花は娘を嫁へたるなれば女二宮の事を合みて斯くは言へる也

(八) 御前の花故心のまゝに折らずと也、女二宮の事を心得てよめると見ゆ

(九) 枯れにし菊は藤壺女御、残の色は女二宮

(一〇) 女二宮を下されんとする思召を

(一一) 急ぎて帝の聖にならんとも思はず

(一二) 女二の聖になるは我本意にあらず、以下薫の心

(一三) 大君が中君を娶らせんといふをも夕霧が六君を與へんといふをも聞流しにし來りたるに

る戲たはぶれにてもこれなむ善よかるべき」とて、碁盤ごばんの召し出でて、御碁おんごの敵かたきめに召し寄す。(一一)

何時いつもかやうに、氣近けぢかくならし纏まつはし給ふにならひにたれば、然さにこそはと思ふおもに、今上(三)よき賭物のりものはありぬべけれど、輕々かるくしくはえ渡わたすまじきを、何をかなには「な

ど宣のたまはする御氣色みけしきいかど見ゆらむ。いとど心づかひして侍さむらひ給ふ。さて打たせ給ふに、三番さんに數かずひとつ負けさせ給ひぬ。今上(六)ねたきわざかな」とて、今上(七)まづ今

日はこの花(五)一枝はなひとえだゆるす」と宣のたまはすれば、御答おんこたへ聞えさせで、降りて面白おもしろき枝えだを折り

て参り給へり。(七)

世よのつねの垣根かきねににほふ花はなならばこころのまよに折りて見みましを(八)

と奏そうし給へる用意よういあさからず見ゆ。

今上(九)霜しもにあへず枯かれにし園そのの菊きくなれどのこりの色いろはあせずもあるかな

と宣のたまはす。かやうに、折々せりくほのめかさせ給ふ御氣色みけしきを、人傳ひとづてならず承うけたまりながら、

例れいの心こころの癖くせなれば、いそがしくしも覺おぼえず。いでや本意ほんいにもあらず、様々さまざまにいと

(一一)

(一二)

(一三)

(一)我が存命中に女二の所置を定めんと

(二)女三の時の通り願おしに薫を笠にする外には

(三)薫は皇女の笠にしては

も不釣合な事はあるまいが、以下今上の心

(四)宇治の大君をいふ、此頃はまだ大君存生也、

外に戀人があればとて本妻を疎略にする様な事は

せぬ性質らしいが

(五)薫もいつか本妻を持たぬ事はない筈

(六)本妻のきまらぬ前に女二宮の事を持懸けて見

やうかしらと

(七)今上が女二と

(八)今上の御子

(九)薫

(一〇)女二宮は腹中なれば也

つどけて、ともかくも御覽する世にや思ひ定めましと、思し寄るには、やがてそ

の序のまよに、この中納言より外に、よろしかるべき人また無かりけり。宮達の

御傍にさし並べたらむに、何事もめざましくはあらじを、もとより思ふ人持た

りとして、聞きにくき事などうち混すまじう、はたあしめるを、遂にはさやうの事

なくてしも得あらじ、さらぬ前に、さもやほのめかしてまし、など折々思召しけ

り。

御暮など打たせ給ひ、暮れ行くまよに、時雨をかしき程に、花の色も夕ばえした

るを御覽じて、人召して、今上たど今、殿上に誰々か」と問はせ給ふに、侍臣中

務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣侍ふ」と奏す。今上中納言の朝臣こな

たに」と仰言ありて、参り給へり。實にかく取りわきて召出づるもかひありて、

遠く薫れる匂よりはじめ、人に異なるさまし給へり。今上今日のしぐれ、常より

殊に長閑なるを、遊などすさまじき方にて、いと徒然なるを、いたづらに日を送

(一)大藏卿修理大夫位な  
輕き身分の人々を

(二)今上が自分一人の外  
には心配する人もなき様  
に

(三)今上黨を女二宮の御  
みて其意をほのめかす  
氣乗のせぬ黨

(四)菊は霜の爲に色のか  
はりたるを賞したる也

(五)今上が女二方へ

(六)故女御の處  
(七)女二の人柄に思ひ附  
きて大事にして呉れる覺  
も無い事はない筈、以下  
今上の心

(八)女三宮  
(九)初の内は此縁組思は  
しからず、もつと良い縁  
もありさうな物と思はそ  
る事もありしかど

(一〇)今では女三の腹に  
生れたる蕪が

(一一)人に生れ優りて

(一二)女三の身の上を

(一三)女三が當時の威勢  
衰へず  
(一四)女三の身の上上不  
慮の失態など生じて

にも異腹なりけり、殊に世のおほえ重りかにもあらず、やむごとなからぬ人々を、

頼もし人にてものし給はむも、女は心苦しき事多かりぬべきこそいとほしけれな

ど、御心ひとつなる様に思しあつかふも、安からざりけり。

御前の菊うつろひ果てで盛なる頃、空の氣色の哀にうちしぐるよにも、まづこの

御方に渡らせ給ひて、昔のことなど聞えさせ給ふに、御答なども、おほどかなる

ものからいはけなからず打聞えさせ給ふを、うつくしく思ひ聞えさせ給ふ。

うなる御様を見知りぬべからむ人の、もてはやし聞えむも、なかはあらざらむ、

朱雀院の姫宮を、六條院にゆづり聞え給ひし折の定どもなど、おほし出づるに、

しばしは、いでや飽かずもあるかな、然らでもおはしなまし、と聞ゆる事どもあり

しかど、源中納言の、人より殊なる有様にて、かく萬を後見奉るにこそ、その

かみの御おほえ衰へず、やむごとなき様にてはながらへ給ふめれ、然らずば、御

心より外なる事ども出で来て、自ら人に輕められ給ふ事もやあらまし、など思し

(一)藤壺は  
(二)藤壺なくては  
(三)卑しき身分の

(四)女二宮

(五)今上が  
(六)内裡へ女二宮を引取りたり、表面には忌中に内裡へ引取る事はならぬ故忍びてする也  
(七)今上が女二宮方へ  
(八)喪服に  
(九)女二の

(一〇)今上が  
(一一)以下今上の心  
(一二)藤壺異腹の兄弟

し急ぎて、何事もなべてならぬ様にと申しまうく。古より傳りたりける寶物ども、この折にこそはと搜し出でつよ、いみじく營み給ふに、女御夏頃物怪に煩ひ

給ひて、いとはかなく亡せ給ひぬ。いふかひなく口惜しきことを、内裏にもおほ

し歎く。心ばへ情々しく、懐しき所おはしつる御方なれば、殿上人どもも、「こよ

なくさうぐしかるべきわざかな」と、惜み聞ゆ。大方さるまじき際の女官など

まで、偲び聞えぬはなし。宮はまして、若き御心地に、心細う悲しく思し入りた

るを聞召して、心苦しく哀に思召さるれば、御四十九日過ぐるまよに、忍びて参

らせ奉らせ給へり。日々に渡らせ給ひつよ見奉らせ給ふ。黒き御衣にやつれて

おはする様、いとどらうたけにあてなる氣色まさり給へり。御心様もいとよく大

人び給ひて、母女御よりも、今少ししづやかに、重りかなるけしきの勝り給へる

を、後安くは見奉らせ給へど、誠には、御母方とても、後見と頼ませ給ふべき、

御伯父など様のはかぐしき人もなし、僅に大藏卿、修理大夫などいふは、女御

(一)今上の御寵愛は

(二)時めきもせぬ也

(三)明石姫君

(四)女二宮

(五)藤壺の心

(六)思出のある様によき生活をさせたまきものと

(七)藤壺が

(八)今上

(九)明石姫君腹

(一〇)今上が

(一一)世間に重んぜられる點は、及ばねども  
(一二)宮中の交際日常の生活など何事につけても不足なくて

●女二宮の裳著藤壺女御の逝去によりて延引  
(二三)女二宮

せし時、人より前に參り給ひにしかば、むつまじう哀なる方の御思は、殊に物し

給ふめれど、そのしるしと見ゆる節もなく、年經給ふに、中宮には、宮達さへ數

多、こよら大人び給ふめるに、さやうのことも少くて、唯女宮一所をぞ持ち奉

り給へりける。我がいと口惜しう、人に壓され奉りぬる宿世、歎かしく覺ゆるか

はりに、この宮をだに、いかで行末の心も慰むばかりにて見奉らむと、かしづき

聞え給ふこと疎ならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに

思ひ聞えさせ給へり。女一宮を、世に類なきさまにもてかしづき聞えさせ給ふ

に、大方の世のおほえこそ及ぶべうもあらね、内々の御有様はをさく劣らず。父

大臣の御勢、嚴しかりし名残、いたく衰へねば、殊に心もとなき事などなくて、

侍ふ人々のなり姿よりはじめ、たゆみなく時々につけつゝ、調へ好みて、今めか

しくゆるくしき様にもてなし給へり。

十四になり給ふ年、御裳著せ奉り給はむとて、春よりうちはじめて、他事なく思

宿木

藤壺女御に大事がらるる女二宮。女二宮の裝者藤壺女御の逝去によりて延引。今上薰を女二宮の翠にせんとす。薰と基を圍みて其意をはのめかす。氣乗のせぬ薰。夕霧六君を匂宮に配せんとす。女二宮、薰に定まらんとす。匂宮と六君との婚禮八月と定まる。中君の煩悶。薰の煩悶。朝顔の花を携へて中君を訪ふ。匂宮六君と婚す。中君の感懐。匂宮つとめて中君を慰む。盛なる中君の三ツ目の祝。薰の感情。按察の君の届にとまる。美しき六君。匂宮の愛情。中君の憂悶。薰を招きて宇治に赴かん事を謀る。薰切なる情を中君に訴ふ。匂宮、中君方に宿して薰の移香を怪しむ。薰衣類を中君に贈る。薰、中君を訪ひて情を訴ふ。中君、浮舟の事を薰に語る。薰、宇治の山莊に行く。寢殿を寺に造り改めんとす。辨の尼に浮舟の事を聞く。薰携へ歸りたる蔦を中君に贈る。匂宮、中君方に宿る。夕霧、匂宮を伴ひて自邸に歸る。中君の感傷。中君不快。匂宮、薰等の心配。薰權大納言に進む。大響。中君男子を生む。方々よりの産養。女二宮、裝者、薰と婚す。薰、中君を訪ひて赤兒を見る。藤花の御宴。薰天盃を賜はる。女二宮三條邸に移る。薰、宇治に行く。浮舟の初瀬詣の歸途、宇治の山莊に宿するに逢ふ。

榿

この頃藤壺と聞ゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ東宮と聞えさ

●藤壺女御に大事がらるる女二宮  
 (一) 榿本の巻の初頃  
 (二) 今上の女御なり、源氏の取持にて今上東宮たりし時に参りし事梅枝の巻に見えたり

(一) 直接に應對する事が恥かしいのでぐづぐづして居る中に  
 (二) 暇乞に中君方へ

(三) 匂が  
 (四) なぜ非常に他人行儀に氣を遠くに置くのぢや  
 (五) 中君に對しては  
 (六) 氣が引受けて世話して居たりしに  
 (七) 或は我が馬鹿を見る事になりはせぬかとは思へど、猶氣と中君との中を疑へる也  
 (八) 餘り油斷も出来ぬ  
 (九) 中君の心  
 (一〇) 氣の親切はかねて身にしみて感じて居る事故  
 (一一) 氣のいふ通りに  
 (一二) 氣を大君の代りと思ひて其意味を氣に知らせたしとは思へど  
 (一三) 匂が色々と氣との中を懸念する故

らせ給ふ様をも、見え奉らせ給ふべけれ」など聞ゆれど、人傳ならず、ふとさし出で聞えむ事の、猶つよましきを、やすらひ給ふ程に、宮出で給はむとて、御まかり申に渡り給へり。いと清らにひき繕ひ假粧じ給ひて、見るかひある御様なり。中納言は此方になりけりと見給ひて、匂などが、むげにさし放ちては出し居る給へる。御あたりには、あまり怪しと思ふまで、後やすかりし心寄を、我が爲はをこがましき事もやと覺ゆれど、流石にむげに隔多からむは、罪もこそ得れ。近やかにて、昔物語もうち語らひ給へかし」など、聞え給ふものから、匂然はありとも、あまり心ゆるびせむも、又如何にぞや。疑はしき下の心にもぞあるや」と、うち返し宣へば、一方ならず煩はしけれど、我が御心にも、哀深く思ひ知られにし人の御心を、今しも疎なるべきならねば、かの人も思ひ宣ふめる様に、古の御かはりと準へ聞えて、斯う思ひ知りけりと、見え奉る節もあらばや、とは思せど、流石に、とやかくやと、方々にやすからず聞えなし給へば、苦しう思されけり。

(一三)

(三)

(四)

(七)

(二〇)

(一一)

(一)句の前を黨が

(二)中君方

(三)黨が來れる由申入れ  
たれば

(四)宇治の頃黨に馴染あ  
りし人と見えて

(五)近所なれど

(六)格別用もなきに御機  
嫌を向ふも狎れし過  
ぎて句に疑はれるかも知  
れぬと

(七)御邸の木が我の宿か  
ら見えるにつけても

(八)成程大君存生なら  
ば、以下中君の心

(九)黨方の人々と繁々往  
復して

(一〇)榮華の暮しをす  
らにつけて却て

(一一)一通りの御客の様  
に黨を疎末にし給ふな

(一二)黨の御親切を感謝  
して居る事を今こそ示し  
なさるがよし

宮は内裏へ参り給はむとて、御車の装束して、人々多く参り集りなとすれば、立

ち出で給ひて、對の御方へ参り給へり。山里のけはひひきかへて、御簾の内心に

くと住みなして、をかしけなる童の透影ほの見ゆるして、御消息聞え給へれば、

御褥さし出でて、昔の心知れる人なるべし、出で来て御返さこゆ。黨朝夕の隔も

あるまじう思う給へらるゝ程ながら、その事となくて聞えさせむも、なか／＼狎

れ狎れしき咎もやとつよみ侍る程に、世の中變りにたる心地のみぞし侍るや。御

前の梢も霞へだてて見え侍るに、哀なる事多くも侍るかな」と聞えて、うち眺め

て物し給ふけしき、心苦しげなるを、實におはせましかば、覺束なからず行きか

へり、かたみに花の色、鳥の聲をも折につけつよ、少し心ゆきて過しつべかりけ

る世を、など思し出づるにつけては、ひたぶるに堪へ籠り給へりし住居の心細さ

よりも、飽かず悲しう口惜しきことぞ、いとど勝りける。人々も、女身「世の常に

疎々しくなもてなし聞え給ひそ。限なき御心のほどをば、今しもこそ、見奉り知



(一) 薫は大君を失ひて心細き折なれば  
 (二) 薫に交渉せしめられたる

(三) 相手の如何に拘はらず女沙汰は無用  
 (四) 句のみか薫まで

(五) 我が本氣になりて言ひ出した事を  
 (六) 薫の

(七) 薫が  
 (八) 宇治の山莊

(九) 浅茅原主なき宿の櫻花心やすくや風に散るらん  
 (一〇) 句

(一一) 句は近來多くは二條院にのみ居つきて  
 (一二) 中君と中の睦まじきをさふ  
 (一三) 何となく氣にかかりて思はるる氣のするは  
 (一四) 中君の句に愛せらるるを安心に思へり

(一五) 句は近來多くは二條院にのみ居つきて  
 (一六) 中君と中の睦まじきをさふ  
 (一七) 何となく氣にかかりて思はるる氣のするは  
 (一八) 中君の句に愛せらるるを安心に思へり

所人に譲らむが口惜しきに、さもやなしてまし、年頃人知れぬものに思ひけむ人

をもなくなして、物心細く眺め居給ふなるを、など思し寄りて、さるべき人して氣

色とらせ給ひけれど、薫世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く身もゆよし

く覺ゆれば、如何にもくさやうの有様は物憂くなむ」と、すさまじけなる由聞き

給ひて、夕いかでか、この君さへ、おほなく言出づることを、物憂くはもてな

すべきぞ」と恨み給ひけれど、親しき御中らひながら、人様のいと心恥かしけ

に物し給へば、え強ひても聞え動かし給はざりけり。

花盛のほど、二條院の櫻を見やり給ふに、主なき宿のまづ思ひやられ給へば、

薫心安くや」など獨語ちあまりて、宮の御許に参り給へり。此處がちにおはしまし

著きて、いとよう住み馴れ給ひにたれば、めやすのわざやと見奉るものから、例

のいかにぞや覺ゆる心の添ひたるぞ、あやしきや。されど實の御心ばへは、いと

哀に後やすくぞ思ひ聞え給ひける。何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つかた、

(二四)

(一) 蕭  
 (二) 三條宮へ工事を見に行く也  
 (三) 二條院  
 (四) 引移の様子を聞かんとして其當日は夜更まで三條宮に居りに  
 (五) 句が中君を  
 (六) 「取返すものにもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」  
 (七) 眞の珍重する中君は實は眞の契こそなけれ我が一夜は共寝せし女なりしなてるや」にはの湖の枕詞なるべし  
 (八) 妬ましさにつちが附けたくなる  
 (九) 夕霧の六の君裳者、句宮を聲にする事中止  
 (一〇) 夕霧  
 (一一) 句に  
 (一二) 思もよらぬ中君を何ても六君の來ぬ前にと思へる如く急に呼取りて六君へは寄りつかぬ故  
 (一三) 句が氣の毒に思ひ  
 (一四) 六君へ  
 (一五) 句宮を聲に取る前にする必要あれば急ぎし

中納言は、三條の宮に、この廿日餘のほどに渡り給はむとて、この頃は日々にお  
 (二) はしつと見給ふに、この院近き程なれば、けはひも聞かむとて、夜更くるまでお  
 (三) はしけるに、奉り給へる御前の人々歸り参りて、有様など語り聞ゆ。いみじう御  
 (四) 心に入れて、もてなし給ふなるを聞き給ふにも、かつは嬉しきものから、流石に  
 (五) わが心ながら、をこがましく胸打潰れて、物にもがなや」と返すぐ獨言たれて、  
 (六) 蕭  
 (七) 蕭しなてるやにほの湖に漕ぐ船のまほならねどもあひ見しものを  
 (八) とぞ言ひくたさまほしき。  
 (九) 左の大殿は、六の君を宮に奉り給はむこと、この月にと申し定めたりけるに、か  
 (一〇) く思の外の人を、この程より前にと、おほし顔にかしづきする給ひて、離れおは  
 (一一) すれば、いと物しけに思したりと聞き給ふも、いとほしければ、御文は時々奉  
 (一二) り給ふ。御裳著のこと、世に響きて急ぎ給へるを、延べ給はむも人笑へなるべけ  
 (一三) れば、廿餘日に著せ奉り給ふ。同じゆかりに珍らしけなくとも、この中納言を餘

(二)遠方には出つけぬ中君故

(二)山を出づる月もまた山に歸るを見れば我も亦遂には宇治に歸るべきかと也

(三)山に歸る月と替りて山を出行く我が終りは如何ならんと

(四)今思へば宇治に居し時の物思は歎ならずと其當時に立戻りたき心持す

(五)中君二條院に入る、匂宮の寵愛、薰の失意

(六)車を

(七)匂宮

(八)どの位に取扱はれる事かと危ふく思はれし中君が俄に本妻として引取られし事故

(九)匂宮の寵愛は一通ならぬ事なるべしと

御中おんなかのかよひを、理ことわりの絶間たえまなりけりと、少すこし思おぼし知しられける。七日なぬかの月つきのさやか  
にさし出いでたる影かげ、をかしく霞かすみたるを見給みひつよ、いと遠とほきにならはず苦くるしけ  
れば、うち眺ながめられて、

中君なかつきみながむれば山やまよりいでて行く月つきも世よにすみわびて山やまにこそ入れ

様さまかはりて、遂つひに如何いかならむ、とのみ危あやふく、行末ゆくすゑうしろめたきに、年頃としごろ何事なにごとをか

思おもひけむとぞ、取返とりかへさまほしきや。

宵よひうち過すぎてぞおはし著つきたる。見みも知しらぬ様さまに、目めも輝かがやくこちする殿とのづくり

の、三みつば四よつばなる中なかにひき入れて、宮みやいつしかと待まちおはしましければ、御み

車くるまのもとに、自みづから寄よらせ給たまひて、おろし奉たてまつり給たまふ。御おんしつらひなど、あるべき限かぎり

して、女房にようぼうの局つばね々まで、御心みこころ留とどめさせ給たまひける程ほど著しるく見みえて、いとあらまほしけ

なり。如何いかばかりの事ことにかと見みえ給たまへる御有みあり様の、俄にはかにかく定さだり給たまへば、おほろ

けならず思おぼさるゝ事ことなめりと、世よの人ひとも心こころにくよ思おもひ驚おぞきけり。





(一) 薫がよく氣がつきて

(二) 何處へ行くのかしらと、中君の心

(三) 中君に陪乗する

(四) 辛抱すれば此の如き嬉しき目にもあふものを身の憂き時に身でも投げ仕舞ひたらば悔しかりしならん

(五) 辨の尼の了簡とは雲泥の差かなと、中君の心

(六) 大君の悲しさも忘れねど、今日の御引移の嬉しさはたまらぬ

(七) 古く仕へ居る女にて

(八) 大君を大事がりしに、中君の心

(九) 句の來ぬを薄情なりとのみ思ひしかど是ては無沙汰も道理と

よりも、御前の人々數多く奉れ給へり。大方の事をこそ、宮よりは思し掟つめれ、

細やかなる内々の御あつかひは、唯この殿より、思ひ寄りぬ事なく訪ひ聞え給

ふ。日暮れぬべしと、内にも外にも催し聞ゆるに、心あわたごしう、何方ならむ

と思ふにも、いとほかなく悲しとのみ覺え給ふに、御車に乗る大輔の君といふ人

のきこゆ。

大輔ありふれば嬉しきせにも逢ひけるを身をうぢ河になけてましかば

うち笑みたるを、辨の尼君の心ばへにこよなうもあるかなと、心づきなう見給ふ。

今一人、

女房過ぎにしが戀しきことも忘れねど今日はたまづもゆくこころかな

いづれも年経たる人々にて、皆かの御方をば、心よせ聞えたれめりしを、今はかく

思ひ改めて言思するも、心憂の世や、と覺え給へば、物も言はれ給はず。

道の程遙けくけはしき山路の有様を見給ふにぞ、つらきにのみ思ひなされし人の

(一)京に移りて長持ちがするかどうか甚だ覺束なき事故、次第によりては又此處へ歸るべしと思へば、「あれはてじ」は「かれはてじ」の誤歟

(二)尼なりとて必ず常に引籠り居るものとも限らぬ故、何も浮世の常と思ひて時々我許に尋ねて來よ

(三)大君の

(四)辨の尼が特別に大君の死を悲むを見れば

(五)尼と大君と

(六)辨の尼の様  
(七)涙にくれ

(八)座敷を  
(九)迎の人々也

(一〇)匂宮も非常に來たかりしなれど自身來ては仰山にて

(一一)匂が

世に住みつかむ事も、いと有り難がるべきわざと覺ゆれば、様に隨ひて、ことを

ばあれはてじとなむ思ふを、さらば對面もありぬべけれど、暫しのほど、心細くて立ちとまり給ふを見おくに、いとど心もゆかずなむ。かゝる容貌なる人も、

必ずひたぶるにしも堪へ籠らぬわざなめるを、猶世のつねに思ひなして、時々も見え給へ」など、いと懐しう語らひ給ふ。昔の人の持てつかひ給ひし、さるべき御

調度どもなどは、皆この人に留め置き給ひて、中君かく人より深く思ひ沈み給へるを見れば、前の世もとりわきたる契もやものし給ひけむと思ふさへ、睦まじく

哀になむ」と宣ふに、いよく童への戀ひて泣く様に、心をさめむ方なくおほほれ居たり。

皆かき掃ひ、萬とりしたよめて、御車ども寄せて、御前の人々、四位五位いと多

かり。御みづからも、いみじうおはしまさまほしけれど、事々しくなりて、なか

なか悪かるべければ、唯忍びたる様にもてなして、心もとなく思さる。中納言殿

(一)一切を望しきものと  
観ずべき

(二)我も大君の戀しきは  
忘れがたしと也

(三)戀しさの

(四)句などに疑はれはせ  
ぬかと

(四)中君宇治を出でて京  
に移る

(五)薫の

(六)中君の侍女等は引越  
を廻しがりて

(七)辨の尼は

(八)袖の浦は出羽の名  
所、藻鹽を垂るゝはしほ  
たるゝ意、あまー海士尼

(九)句に引取られても行  
末覺束なき我には其方の  
昔を戀ふる涙とは又特別  
なる悲あり

れど、さしもあるまじうて、深き底に沈み過さむもあいなし。すべてなべて空し  
く思ひ取るべき世になむ」など宣ふ。

翼身を投げむ涙の川にしづみてもこひしきせどにわすれしもせじ

如何ならむ世に、少しも思ひ慰むることありなむ」と、果もなき心地し給ふ。歸ら

む方もなく眺められて、日も暮れにけれど、すどろに旅寢せむも人の咎むる事や

と、あいなければ、かへり給ひぬ。

思ほし宜ひつる様をかたりて、辨はいとど慰め難く昏れ惑ひたり。皆人は心ゆき

たる氣色にて、物縫ひ營みつゝ、老いゆがめる容貌も知らず、繕ひさまよふに、

いよくやつして、

辨人はみな急ぎたつめる袖のうらにひとり藻鹽を垂るゝあまかな

とうれへ聞ゆれば、

中君しほたるゝあまのころもに異なれや浮きたる浪にぬるゝわが袖



- (一) 辨が留守して居るの
- (二) 命の長きを厭へば厭ふほど其にはりあひて益命がのびる也
- (三) 大君が私を棄てて死なれし事が怨めしく
- (四) 薫に訴へるも
- (五) 薫が
- (六) 辨がひどく年はよりたれど
- (七) 髪を剪りたれば
- (八) 薫が大君の事を嘆く餘りには
- (九) 大君を厄にすればよかつた、以下薫の心
- (一〇) 命の
- (一一) 大君が厄になつて生きて居たらば嗚心深き話が出来たてでちらうなどと
- (一二) 辨の尼までが
- (一三) 辨の尼の様子
- (一四) 老いては何事にも涙が先に立つ、其涙の川に身を投げたらば大君より先に死ぬ事が出来てよかりし身ならん
- (一五) 身を投ぐるも
- (一六) 早く佛になる望はあれども又さうゆかずに身を殺したる罪によりて地獄の底に陥りてはつまつ

物し給はむは、いと哀に嬉しかるべき事になむ」など、えも言ひやらず泣き給ふ。  
 辨(一)厭ふに榮えて延び侍る命のつらく、又如何にせよとて、うち捨てさせ給ひけむ  
(二)と怨めしく、なべての世を思う給へ沈むに、罪もいかに深く侍らむ」と、思ひける  
 事どもを愁へかけ聞ゆるも、頑しけれど、いとよく言ひ慰め給ふ。いたくねびに  
 たれど、昔清けなりける名残をそぎ捨てたれば、額のほど様變れるに、少し若く  
 なりて、さる方にみやびかなり。思ひわびては、などかよる様にもなし奉らざり  
(八)けむ、それに延ぶる様もやあられまし、(九)さても如何に心深く語らひ聞えてあらまし、  
(一〇)など一方ならず覺え給ふに、この人さへ羨ましければ、隠ろへたる几帳を少し引  
(一一)きやりて、こまやかにぞ語らひ給ふ。けに、むけに思ひほけたる様ながら、物打言  
 ひたる氣色、用意、口惜しからず、故ありける人の名残と見えたり。  
 辨(二)さきに立つ涙のかはに身をなけば人におくれぬいのちならまし  
 とうちひそみ聞ゆ。薫(三)それもいと罪深かななる事にこそ。かの岸に到ることはあ

(二五)

(二六)

早  
蕨



(一)あらし一嵐、有らじ

(二)薫が中君の歌を誦したる也

(三)大君の愛せし梅は昔の如くなれども中君が京へ移る事になりては此舊宅も昔の家とは思はれず

(四)此様にして又も目にかゝりて萬事御世話申上ぐべし

(五)引越につきての指圖を薫が人々にしあく

(六)此舊邸の留守居としては

(七)薫の領地の支配者に此宇治邸の監督の事など言ひ附け

(八)今東京への御供をするにつけても

(九)尼になりたるを

(一〇)薫が  
(一一)此宇治へは  
(一二)誰も居なくては便なく心細かるべければ

中君見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆるはなの香ぞする

言ふともなく灰(一)にて、絶えく聞えたるを、懐しけに打誦(二)じなして、

薫袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる

堪へぬ涙を様よく拭ひかくして、言多くもあらず。薫又も猶(三)、かやうにてなむ何

事も聞えさせ寄るべきなど、聞え置きて立ち給ひぬ。御わたりにあるべき事(四)ど

も、人々に宣ひおく。この宿守(五)に、かの髭がちの宿直人などは侍ふべければ、こ

のわたりの近き御庄(六)どもなどに、その事ども宣ひあづけなど、まめやかなる事ど

もをさへ定め置き給ふ。

辨(七)ぞ、辨かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらく覺え侍るを、人もゆ

しく見思ふべければ、今は世に在るものとも人に知られ侍らじ」とて、容貌も替(八)へ

てけるを、強ひて召出でて、いとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひ

て、薫(九)こよには、猶時々参り來べきを、いとたづきなく心細かるべきに、かくて

(一)斯様な事をむざと強ふるもどんなものかと思つて必ず其様にするとともに極められぬ

(二)此舊宅を棄てたくはなしと切に思ひ居る處へ是からは互の住居が近くなるべしなど仰せらるるにつけても

(三)大君に似たるを

(四)蕪の心、我心がらて此人を他人のものにして仕舞ひし事よと

(五)以前の關係

(六)きつぱりと色氣はなれて

(七)「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」

(八)大君を思ひて

(九)「さ月まつ花橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする」

(一〇)中君の心

(一一)此梅に大君が

む限は、聞えさせ承りて、過さまほしうなむ侍るを、如何は思召すらむ。人の

心さまぐくに侍る世なれば、あいなくやなど、一方にもえこそ思ひ侍らね」と聞

え給へば、中君宿をばかれじと思ふ心深く侍るを、近くなど宣はするにつけて

も、萬に亂れ侍りて、聞えさせやるべき方もなくなむ」と、所々言ひ消ちて、いみ

じく物哀と思ひ給へるけはひなど、いとよう覺え給へるを、心から餘所のものに

見なしつると思ふにいと悔しく思ひ給へれど、かひなければ、その世の事かけて

も言はず、忘れにけるやと見ゆるまで、けざやかにもてなし給へり。御前近き紅

梅の、色も香もなつかしきに、鶯だに見過しがたけに打鳴きて渡るめれば、まし

て「春や昔の」と、心を惑はし給ふどちの御物語に、折哀なりかし。風のさと吹き

入るよに、花の香も客人の御匂も、橘ならねど昔思ひ出でらるよつまなり。徒然

の紛らはしにも、世の憂き慰にも、心留めてあそび給ひしものをなど、心にあま

り給へば、

(一)胸の思を打明けて  
 (二)他人あしちひをせらるゝを  
 (三)さうされては彌も知らぬ世界にても行つた心持になる  
 (四)つまらぬ受對へてもするかと思つて遠慮勝になる  
 (五)御會ひなされねば薫へ御氣の毒  
 (六)薫の様子  
 (七)中君が薫を見るにつけて大君の事を思ひ出でたる也  
 (八)引移りの吉日の前日なれば遠慮すべしと也  
 (九)君の御引越先の御近處へ此頃に私も引越す筈故、中君は二條院、薫は三條院へ引移る也  
 (一〇)親しき同士は夜中曉といはず往来するといふ俗諺の通り  
 (一一)私の一生涯は御懸意に願ひたく思ふが

も覺え給はず、ほれぐしけにて眺め臥し給へるに、鶯月頃のつもりも、そこはかとなければど、いぶせく思ひ給へらるゝを、片端もあきらめ聞えさせて、慰め侍らばや。例のはしたなくなさし放たせ給ひそ。いとどあらぬ世の心地し侍り」と聞え給へれば、中君はしたなしと思はれ奉らむとしも思はねど、いさや、心地も例の様に覺えず、かき亂りつゝ、いとどはかぐしからぬ僻事もやと、つゝましうてなむ」と、苦しげに思いたれど、「いとほし」など此彼聞えて、中の障子の口に對面し給へり。いと心恥かしけになまめきて、又この度はねびまさり給ひにけりと、目も驚くまでにほひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見え給へるを、姫君は、面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出で聞え給ふに、いと哀と見奉り給ふ。薫「盡きせぬ御物語なども、今日は言忌すべくや」など言ひさしつづ。鶯渡らせ給ふべき所近く、この頃過してうつろひ侍るべければ、夜中曉とつきづきしき人の言ひ侍るめる、何事の折にも疎からずおほし宣はせば、世に侍ら

(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二)

(一) 蕪が昔を忘れず世話し下さるは有難き事にて  
 (二) 中君に  
 (三) はてやかならぬ  
 (四) 生活上の蕪の世話有難く思ひて中君に言ひ聞かず  
 (五) 中君が蕪を  
 (六) 蕪を離れて匂の世話になるを  
 (七) 中君が  
 (八) 蕪  
 (九) 中君が京へ引移るべき前日の朝  
 (一〇) 大君が存生ならば今頃は段々馴染めて、蕪の心  
 (一一) 斯く大君を引取らんと思ひ附きし事なるに  
 (一二) 大君の養子  
 (一三) 大君が靡かぬもの流石厭ひもせず、蕪の心  
 (一四) 我が遠慮勝なる心から遂に終まで本意を遂げざりし悔しさよと  
 (一五) 蕪を  
 (一六) 大君を  
 (一七) 泣顔つくりあへり  
 (一八) 明日の引越の事も考へられず

事しからぬものから、品々こまやかに思しやりつよ、いと多かり。侍女「折につけては、忘れぬ様なる御心よせの有りがたく、兄弟なども、得いと斯うまではおはせぬわざぞ」など、人々は聞え知らず。あざやかならぬ古人どもの心には、かよる方を心にしめて聞ゆ。若き人々は、侍女「時々も見奉りならひて、今はと異様になり給はむを、さうぐしくいかに戀しう覺えさせ給はむ」と聞えあへり。  
 (一) 自らは、渡り給はむこと明日とてのまだつとめて、おはしたり。例の客亭の方に  
 (二) おはするにつけても、今はやうく物馴れて、我こそ人より先にかうやうにも思ひそめしかなど、ありし様宣ひし心ばへを思ひ出でつよ、流石にかけ離れ、殊の外になどは、はしたなめ給はざりしを、我が心もて怪しうも隔たりにしかかと、胸いたく思ひつゞけられ給ふ。垣間見せし障子の穴も思ひ出でらるれば、寄りて見給へど、この中をばおろし籠めたれば、いとかひなし。内にも人々思ひ出で聞えつよ、うちひそみあへり。中の君は、まして催さるゝ御涙の川に、明日のわたり

(一)其かひもあるまじく  
(二)匂との中も  
(三)どうなさる御積りぢやと匂かち言はれるも

(四)朔日頃取れるべしと匂より通知し來れる故

(五)「春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里にすみやならへる」

(六)雁は常世の國のものと言ひならへり

(七)中君の母は早く死したる也

(八)姉の爲に重き褌に服せん  
(九)陰陽博士、被の爲に用あれば也

(一〇)褌に服し給ひしは昨日今日の様に思ひしに早除服の時になりけり  
上、霞の衣は褌服をいひ花の紐とくとは中君の除服の爲に花やかなる衣裳を調へたるをいふ

(一一)中君より目下の人人に賜はるべき品

とても又せめて心ごはく、堪へ籠りてもたけかるまじく、「淺からぬ中の契も、絶えはてぬべき御住居を、いかに思し得給ふぞ」とのみ、恨み聞え給ふも、少しは理

なれば、如何すべからむと思ひ亂れ給へり。二月の朔日頃とあれば、程近くなるまよに、花の木どもの氣色ばむも、残ゆかしく、峰の霞のたつを見棄てむことも、

おのが常世にてだにあらぬ旅寢にて、如何にはしたなく人笑はれる事もこそな

ど、萬につよましく、心ひとつに思ひ明し暮し給ふ。御服も限ある事なれば、脱

ぎ棄て給ふに、御褌も淺き心地ぞする。親一所は、見奉らざりしかば、戀しきこ

ともおほえず。その御代にも、この度の衣を深く染めむと、心にはおほし宣へど、

流石に然るべき故も無きわざなれば、飽かず悲しき事限なし。中納言殿より、御

車、御前の人々、博士など奉れ給へり。

黨はかなしやかすみゆみの衣たちしまに花のひもとくをりも來にけり

實にいろくいと清らにて奉れ給へり。御わたりの程のかづけものどもなど、事

(一)中君を句に取持ちたるが、過の様に思はる  
(二)大君の形見とては中君を指して外になき故  
(三)他人ととしての關係

(四)中君を  
(五)何か不都合な關係があつてする事と思召すか  
(六)大君が中君を自分と思つて駈つてくれよと頼まれし事を  
(七)中君の聞に入りて一語をあかせし事は句にも語らざりし也

森の呼子鳥は引歌あるべけれど未詳  
(八)藪の如く自分が中君を引取るべきであつたと  
(九)斯く中君に未練を残して居て遂には不都合な了簡も出て来るべし其では皆の爲に宜しかるまじと思ひ切る

(一)藪の心  
(二)中君が句に引取られるに於ても  
(三)中君の力になる者は我が外には無しと  
(四)中君の引移る用意

中君引移の用意、藪字治を訪ふ辨の尼との對話  
(五)字治  
(六)字治を見棄つるも、中君の心いざこざに我世は經なん菅原や伏見の里の荒れまくも惜し

と嬉しき事にも侍るかな。あいなく自らの過となむ思ひ給へらるよ、飽かぬ昔の名残を、また尋ぬべき方も侍らねば、大方には、何事につけても、心寄せ聞ゆべき人となむ思ひ給ふるを、もし便なくや思し召さるべき」とて、かのこと人とな思ひわきそと譲り給ひし心掟をも、少しは語り聞え給へど、いはせの森の呼子鳥めいたりし夜の事は、残したりけり。心の中には、かく慰め難き形見にも、實にさてこそ、かやうにも扱ひ聞ゆべかりけれど、悔しき事やうく勝り行けど、今はかひなきものゆゑ、常に斯うのみ思はば、あるまじき心もこそ出で來れ、誰が爲にも味氣なくをこがましからむ、と思ひ離る。さて、おはしまさむにつけても、誠に思ひ後見聞えむかたは、又誰かはと思せば、御わたりの事ども心まうけさせ給ふ。

彼處にも、よき若人童などもとめて、人々は心のき顔に急ぎ思ひたれど、今はとてこの伏見を荒しはてむも、いみじう心細ければ、歎かれ給ふ事盡せぬを、さり

早

歳

七



(一)句の人とまりをいふ  
(二)他人の身の上話を聞  
いてさへ

(三)話しがひある様に

(四)「春の夜の闇はあや  
なし梅の花色こそ見えね  
香やはかくるく」

(五)語り盡し得ずして

(六)珍しき齋と大君との  
戀中の話を句が聞きて、

「あり難かりける」とは、あ  
れ程親しくしながら終に  
大君が肌を許さざりしを  
いふ

(七)さうばかりでもなか  
りしならん

(八)齋がなほ隠し立てし  
て居るらしく

(九)句は察しのよい人で

(一〇)齋の胸の晴れる位  
に

(一一)齋が胸のすく心地  
がする

(一二)中君を引取るべき  
用意につきて

哀あはれにもをかしうも、泣なきみ笑わらひみとが言いふらむ様に聞きこえて出いで給たまふに、まして、さ

ばかり色いろめかしう、涙なみだもろなる御癖おんくせは、人ひとの御上おんうへにてさへ、袖そでもしほるばかりに

なりて、かひなくしくぞあひしらひ聞きこえ給たまふめる。空そらの氣色けしきもはた、實ひにぞ哀知あはれし

顔がほに霞かすみわたれる。夜よるになりて烈はげしう吹ふき出いづる風かぜの氣色けしき、まだ冬ふゆめきていと寒さむ

けに、大殿油おほごなごらも消きえつよ、闇やみはあやなきたどくしかなれど、互かたみに聞ききさし給たまふ

べくもあらず、盡つきせぬ御物語おんものがたりをえはるけやり給たまはで、夜よもいたう更ふけぬ。世よに例たと

あり難がたかりける中なかの睦むつを、匂においで、然さりとも、いと然さのみはあらざりけむ」と、残のこり

ありけに問とひなし給たまふぞ、わりなき御心おんこころならひなめるかし。さりながらも、物ものに

心こころえ給たまひて、歎なげかしき心こころのうちもあきらむばかり、かつは慰なぐさめ、又また哀あはれをもさま

し、さまざまに語かたらひ給たまふ御様おんさまのをかしきにすかされ奉たてまつりて、實ひに心こころに餘あまるまで

思おもひ結むすほほると事ことども、少すこしづつ語かたり聞きこえ給たまふにぞ、こよなく胸むねの隙ひまあく心地こころちし

給たまふ。宮みやも、かの人ひと近く渡わたし聞きこえてむとする程ほどの事ことども、語かたらひ聞きこえ給たまふを、齋い

(一三)かの人近く渡し聞えてむとする程の事ども、語らひ聞え給ふを、齋

(一) 中君を京へ引取らんとする事を詔る

(二) 正二月中に宮中にて催さるる宴會、親王以下参りて詩をつくりなどする例なり、此年は早くありし也

(三) 薫

(四) 大君を失へる愁

(五) 句の好きなる

(六) 薫が

(七) 薫の

(八) 此花がまだ開かずして句を内に藏せるは恰も薫が何くはぬ顔して中君を手に入れ居るに似たり、句は此二人の中を疑ひ居る也

(九) どうせ其様に疑はれるなら此方も其積りて疾うに手を出すのであつた

(一〇) うるさい言ひがかかりをする

(一一) 宇治

がたければ、京にわたし聞えむと思し立ちにたり。

内宴など物騒しき頃過して、中納言の君、心に餘ることをも、又誰にかは語らは

むと思し侘びて、兵部卿の宮の御方に参り給へり。しめやかなる夕暮なれば、宮

うち眺め給ひて、端近くぞおはしましける。箏の御琴掻きならしつと、例の御心

よせなる梅の香をめでおはする。下枝を押し折りて参り給へるにほひの、いと艶

にめでたきを、折をかしう思して、

句折る人のこよろにかよふ花なれや色には出でずしたににほへる

と宣へば、

薫見る人にかごとよせける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

煩はしく」と、戯れかはし給へる、いとよき御あはひなり。細やかなる御物語ども

になりては、かの山里の御事をぞ、まづは如何にと宮は聞え給ふ。中納言も、過

ぎにし方の飽かず悲しきこと、當時より今日まで思の絶えぬ由、折々につけて、

書かせ給ふ。

(一)かたし一形見、箱  
中君この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび

使に祿取らせさせ給ふ。

(二)中君  
(三)大君に似て居る  
(四)別々の美しさにて  
(五)中君一人になりし今はつい忘れて大君かと思はれる程大君に似て居るを見て

いと盛に匂ひ多くおはする人の、様々の御物思に、少しうち面瘦せ給へるしも、いとあてになまめかしき氣色まさりて、昔人にも覺え給へり。並び給へりし折は、

とりぐにて、更に似給へりとも見えざりしを、打忘れては、ふとそれかと覺ゆるまで通ひ給へるを、人々中納言殿の、骸をだに留めて見奉るものならましかば

と、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、同じくば見え奉り給ふ御宿世ならざりけむよ」

と、見奉る人々は口惜しがる。かの御あたりの人の通ひ來る便に、御有様は絶えず聞きかはし給ひけり。盡きせず思ひほれ給ひて、新しき年とも言はず、いやめ

になむなり給へる、と聞き給ひても、實にうちつけの心淺さには物し給はざりけり

りと、いとど今ぞ哀も深く思ひ知らるよ。宮はおはします事の、いと所狭く有り

事(一)中君に似て居る (二)別々の美しさにて (三)中君一人になりし今はつい忘れて大君かと思はれる程大君に似て居るを見て (四)中君が薫の妻に在る運がなせ無かつたのであろう (五)薫に仕ふる人 (六)薫と中君と (七)薫がちに (八)中君の心、薫の大君に對する思は一時の淺き戀ではなかつたわいと (九)匂宮は宇治へ行く事がむつかしき故

(一)かたし一形見、箱  
(二)中君  
(三)大君に似て居る  
(四)別々の美しさにて  
(五)中君一人になりし今はつい忘れて大君かと思はれる程大君に似て居るを見て



(一)中君が  
(二)壽命はきまつて居るもの故

(三)中君の事ばかりを心にかけて佛に祈り居る  
(四)我にくれたるもの初穂  
(五)一字々々ぼつ、と書きたり、假名を書きなれぬ様也  
(六)八宮在世の頃より必獻上し來りし故今年も差上ぐるぞと也、つみー積み、摘み  
(七)中君の御前へ取次いで下されと侍女等に宛てて言へる也  
(八)此歌は阿闍梨が一生懸命によみしなちんと  
(九)中君が  
(一〇)さう粗末にも思つて居ぬらしき文句を  
(一一)匂宮の文

しまさずなりにし悲しさよりも、やゝ打勝りて戀しく侘しきに、如何にせむと、明け暮るよも知らず惑はれ給へど、世に留るべき程は限あるわざなりければ、死なれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、

阿闍梨年あらたまりては、何事かおはしますらむ。御祈は、たゆみなく仕うまつり侍り。今は一所の御事をなむ、やすからず念じ聞えさする。

など聞えて、藪土筆、をかしき籠に入れて、「これは童への供養じて侍る初穂なり」とて奉れり。手はいと悪しうて、歌は、わざとがましく引放ちてぞ書きたる。

阿闍梨君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬはつわらびなり

御前によみ申さしめ給へ。

とあり。大事と思ひまはして詠み出しつらむ、と思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりにさしも思されぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましけ

に書き盡し給へる、人の御文よりは、こよなく目留りて、涙もこほるれば、返事

# 源氏物語

早蕨

●寂しき中君の生活、阿闍梨藏土筆を中君に贈る

(一)日光は照さぬ限もなれば、「日の光やぶしわかねばいそのかみ古りにし里も花は咲きけり」

(二)中君が

(三)姉大君と

(四)つまらぬ歌をよみても姉が上の句をよめば妹が下の句をつくるといふ様にし

(五)今は誰に語りて聞いて買ふ事も出来ねば

(六)父を失ひし時の悲しさよりも

早

蕨

一

## 梗 葉

●寂しき中君の生活。阿闍梨藏土筆を中君に贈る。① 匂宮、薫に中君を引取らんとする事を語る。② 中君引移の用意。薫宇治を訪ふ。③ 辨の尼との對話。④ 中君宇治を出でて京に移る。⑤ 中君二條院に入る。匂宮の寵愛。薫の失意。⑥ 夕霧の六の君蒙者。匂宮を駕にする事中止。薫を駕にせんとす。⑦ 薫二條院に中君を訪ふ。

やぶしわかねば、春の光を見給ふにつけても、いかで斯くながらへにける月日な  
(二)らむと、夢の様にのみ覺え給ふ。行きかふ時々(三)に隨ひ、花鳥の色をも音をも同じ  
心に起き臥し見つよ、はかなき事をも、本末をとりて言ひかはし、心細き世の憂  
さもつらさも、打語らひ合せ聞えしにこそ、慰む方もありしか、をかしき事哀な  
る節をも、聞き知る人もなき儘に、萬かきくらし、心ひとつを碎きて、宮のおは  
(五)

(六)

源氏物語總索引……………四七一—五二六

源氏物語 四目錄

早藏	一
宿木	二五
東屋	一三七
浮舟	二二三
蜻蛉	二九七
手習	三六五
夢浮橋	四四三
略系圖	四六五



PL  
788  
.4  
G4  
1928  
v.4

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジ  
ヨ  
ン  
ソ  
ン



源氏物語

無

尺

考

部



PL  
788

Murasaki Shikibu  
Genji monogatari

.4  
G4  
1928  
v.4

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

